
生徒会長補佐日誌

新木吾妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長補佐日誌

【Nコード】

N0367D

【作者名】

新木吾妻

【あらすじ】

《第一章『刹那』 完結。第二章『曜子』 スタートしました》幼馴染みだった超絶美少女な生徒会長。その双子の弟で親友は副会長。本の虫で不思議っ娘の書記に後輩でお嬢様な会計と二人の侍従兼会計監査。更には嫌味だけど綺麗な先輩は元風紀委員長。果ては天然美人顧問という我が校の生徒会執行部。人生放棄組で何の取り柄も無い俺は何故だか会長補佐に任命されてしまった。高校二年、楽しんで、苦しくて、優しい生活が始まる……無くしたものを取り戻す為に……。基本的にはラブコメですが感動ありライトありとドタバ

々な超長編です。

001 プロローグ01 遠景

気だるい……。

また朝がやって来たらしい……。

枕元で鳴るアラームが朝の到来を知らせてくれている。

目覚まし代わりに使っている携帯電話は設定通りに毎朝決まった時間に俺を起こしてくれる。

ふと俺も似たようなものだと思った。

決まった時間に鳴ってくれる携帯、その携帯の恩恵に与かってだ
が決まった時間に動き出す俺。

大して変わらない……。そう思いながらも、さして気に留めず、
手探りでアラームを止め、閉じている目を開ける。

「……………」

覚醒したばかりの頭が一瞬ではつきりする。

サラサラと流れる亜麻色の髪の毛、長い睫毛、整った鼻筋、軽く
開いた唇は艶っぽくてやはり整っている。顔の輪郭は細い、首筋も
細い……。聞こえてくる寝息も細い……。目の前、同じ布団で眠るこ
いつと俺との距離は僅か15センチ……。

「はああああ……」

朝一からどつと疲れた気分になり、深いため息を吐く。同時に同禽していた『こいつ』を起こさないように布団から這い出る。

時刻は3時、まだ夜明け前。まだ11月になったばかりとはいえ日が昇る前の空気は冷たい。布団に戻りたくなる衝動に駆られるが無視しておく。

「十八……バイト？」

声が掛かる。先ほどまで寝具を共にしていた『こいつ』である。

「ああ、おはよう。寝てていいよ？ 時間になったら起こすから」

「……わかった」

そう言いながら目を閉じる『こいつ』。夢の中に戻ったみたいだ。

それを確認した俺は、いそいそと着替え始める。

俺は塩田十八^{しほだたかおちや}、この間17才になったばかりの高校二年生だ。

目の前で眠る『こいつ』は佐山瞬^{さやましゆん}。男だ、だ、野郎だ、俺と同じもんが付いてるあんちきしょうだ……。

「はあ……」

再びため息。

瞬は俺が一番多くの時間を共有する唯一の人物。付き合いも長く、俗にいう幼馴染みというやつである。俗にいう親友というやつである。お互いに気兼ねしない関係で言いたい事はズバズバ言い合える仲である。

昨日も夜遅くに突然現れた瞬に『泊めてくれ』とゴリ押しされ、仕方なく泊めてやった。確か俺とは別に布団を敷いてやった筈だが、いつの間に同衾していたのだろう。

……ため息の理由はそれに尽きる。

朝靄の中を走る。

俺はアルバイトをしている。この時間に出勤。想像に容易いかもしれないが新聞配達だ。

起床からしばらく、新聞の束を担いだ俺は走っている。

毎朝日の出よりも早く出勤し、自分の担当である近所に新聞を配って回っている。本来なら自転車での配達なのだが、とある理由から自分の足で走っての配達をしている。

アルバイトを始めて一年半、いい加減慣れてしまった。

見慣れた町を抜け、走る。

まだまだ辺りは暗い。田舎町の為、街灯が極端に少ない。でもすっかり慣れた配達コースは目隠し……では無理だが、暗い位ではどつて事ない。

俺の住む町、久住市は人口約35000人。海と山に隔てられた小さな町の割に人口は多い。主な産業は港と工業団地。山あい広がる昔ながらのいびつな住宅街。首都圏に繋がる唯一の交通手段の鉄道を挟んだ反対側には何故だか大きな家が並ぶ高級住宅街。

しかしながら町にはあまり活気が無い。これといった特産も無ければ目立った施設も無い。住宅地ばかりのいわゆる『ベッドタウン』というヤツだ。

空が僅かに白みだした頃、いつも通りに配達を終える。

「お疲れ様でしたー」

時刻はまだ6時。普通の生活をしている人ならまだまだ寝ている時間だろう。

俺は自宅に帰る道をのんびり歩く。

右手に見えるのは海、左手に見下ろすように町が見える。その海の遙か向こうから眩しい光が輝き出す、みるみる空が青を彩って行く。

……どうやら日の出みたいだ。この様子なら今日は気持ちいい位に晴れてくれるだろう。11月の日の出は一年を通して一番綺麗と聞く。確かに水平線に輝く朝日は見とれてしまう位に綺麗だ。

振り向いて町を見下ろしてみる。港、工場、いびつな住宅街、場違いな高級住宅街、寂れた駅、学校。

俺の町、俺達の町。

俺が生まれた町、俺達が生まれた町。

俺が育った町、俺達が育った町。

俺が……。

」………」

思考を中断する。

胸が締め付けられる。

下らない感情が溢れて来るのが分かる。

俺には必要の無い感情が溢れて来る。

そうじゃない……違うだろ？

「みんなが生きていく町……」

誰かに言った訳ではない。ただの確認だ。

俺は自嘲気味に苦笑すると視線を水平線に戻す。……朝日は完全に水平線から離れてしまった。いいところを見逃してしまったのかもしれない。

輝く太陽の光を受けてキラキラと輝きながら波打つ水面……。

普段なら気にも留めない筈なのに見惚れてしまう……敬いながら……。

決して届かない、そう思いながら……。

俺を取り巻く世界。

こんなにもちっぽけなのに……。

ちっぽけな町なのに……。

遠いよ……。

遥……。

002 プロローグ02 平衡

「ただいまあ」

俺は古い木造平屋建ての玄関を開け、朝には似つかわしくない挨拶をする。返事は無い。

敷地面積二百八十坪の日本家屋。築百年以上経っている木と畳の匂いに包まれた昔ながらの日本家屋、というよりただのお化け屋敷だ。

俺はここに一人で住んでいる。……両親は居ない。今年の春までは祖父であるじいちゃんと二人で暮らしていたが、その春に亡くなってしまった……。それ以来、俺はこの広大な屋敷で一人で暮らしている。一応、保護者というか俺を養っているという設定の人はいる。しかし、俺がその人と会うのは稀である。もう一月以上会っていない気がする。

俺の体重に軋む板貼りの廊下を歩く。瞬はまだ寝ているのだろう、起きている気配は無い。

軋む廊下を抜けた俺は最奥にある道場に辿り着く。バイトと同じく日課となった朝の鍛練をする為だ。じいちゃんの職業……職業？職業であった柔術道場の影響からか、俺も多少なり嗜んでいる。じいちゃんが生きていた頃からの日課の為、今更やめる事が出来ない。

着替えを済ませた俺は冷えきった道場の畳を踏みしめる。着替えと言っても防寒着を脱いで靴下を脱いだけ、元々動きやすいようにジャージを着て出掛けた為である。別に道着や袴などに着替えたりはしない。

軽い柔軟の後、日課通りに鍛練に入る。三十畳はある道場に俺が踏み鳴らす畳の音だけが響く。ある程度のレベルまで行き着いた者が稽古相手の居ない鍛練をしても大きな意味は持たない。

……別にいい。俺は高める為の鍛練をするつもりは無い。俺はただ傾き続ける器の向きを正しているだけ。溢れないように……。

日課の鍛練を終え、軽くシャワーを浴びた俺は自分の部屋に向かう。

時刻は7時過ぎ、そろそろ瞬を起こしてやらねばならない。しかし、居間の前を通り過ぎようとした時にその必要が無い事に気付く。嬉しくなった俺は口元を緩めながら居間の襖を開ける。

居間に入ると廊下で感じたそれよりも大きな香りが鼻孔を擽る。

「おはよう、瞬」

純和風の居間の奥の台所に向かって声を掛ける。

「ああ、おかえり十八」

姿は見せず声だけが返って来る。たぶん手が離せないのだろう。俺は瞬の気遣いに感謝しながらお膳に腰を下ろす。

瞬は泊まりに来ると高い確率で朝食や夕食を手掛けてくれる。先ほど感じた香りの正体はもちろん瞬の作ってくれているであろう朝食だろう。自分でも自炊はするし、わざわざ瞬にやらせるのは気が引けるのだが嬉しいのは確かである。

「お待たせ。勝手に有る物使わせてもらったぞ？」

そう言いながら台所の『湯』と書いたダサイ暖簾をくぐって顔を出す瞬。両手には瞬が作ってくれた朝食を持っている。

野郎の待つ食卓に笑顔で朝食を運ぶ野郎……なんだからシニールだ。

「……………」

佐山瞬、俺と同じ高校二年生。

身長180センチ、ちなみに俺は175センチ。

成績優秀、ちなみに俺は並。

運動神経抜群、ちなみに俺は十段階評価で2。

容姿端麗、それはもう半端じゃない位のモテ野郎。ちなみに俺は

……………。

「けっ！」

思わず眉をたわめてぼやいてしまう。

「……………? どうした？」

意味不明な俺に首を傾げながら朝食を並べる瞬。

「なんでもない」

口をとんがらせて言う俺を見た瞬は更に首を傾げながら反対側に腰を下ろす。

「まあいいか、さっさと食っちまおう」

二人で瞬謹製の朝食を食べ始める。ご飯に大根の味噌汁、卵焼きに納豆。日本人万歳って感じの朝食だ。

定番というか基本というかなんとか、美味かった。

「「行つてきまゝ」」

朝食を済ませた俺達は玄関を出る。当然送り出す挨拶は返って来ない。何故出掛けるかといえば当然、学校に行く為である。今日は平日、サボる理由など一個も無い俺達は二人並んで徒歩による登校をする。

学校までは歩いて15分。時間はまだまだ余裕なので瞬と二人ゆつくり歩く。

「悪いな、付き合わせちゃって」

家を出て間も無く、瞬が言う。言った言葉とは裏腹にあまり悪そうではない。

「いいよ別に」

俺がこう言うのを分かっていたからだろう。瞬はにーっと顔を緩ませる。

現在7時半。本来ならこんなに早く出なくても学校には十分に間に合う。しかし瞬の用事に付き合う為に一緒に早く登校する事になったのだ。

「でも、大変だな？ 結局は雑務ばかりなんだろう？」

その用事に関する素直な感想を訊いてみる。

「うーん……一概にそうとは言いきれないんだけど、まあそんな感じだな」

少し考えるように中空を眺めた後、肯定する瞬。

瞬の用事とは『生徒会』。瞬は俺達の通う学校の生徒会執行部に籍を置いているのだ。しかも瞬はその生徒会の副会長を勤めていたりする。

「ふーん、大変でもないわけ？」

すんなり肯定された為、更に訊いてみる。

「ふつ。それが中々どうして、大変ではある」

かっこよく笑った後、含むような笑いと共にまた肯定。

「はあ？」

意味が分からん。

「ははっ、悪い悪い。大変だけど、そうでなくなる理由は簡単。生徒会執行部は俺以外全員女なんだよ」

疑問符を浮かべる俺に直ぐ様回答を述べる瞬。なんだかすごい楽しそうだ。しかし、瞬の回答に成程と納得する。……つまりはハレム状態な訳だ。

「……………」

隣でニコニコと笑うモテ男を見るとイライラしてきた。さっきまでは『瞬も生徒会大変だな』と思い、付き合っただけの気満々だったが途端に馬鹿らしくなった。

「なんだ？ ヤキモチか？」

にーっとニコニコを強調しながら言う瞬。

むかつく！

「アホか！」

二重の意味で掃き捨てておいた。

003 プロローグ03 観望

私立久住ヶ丘高等学校。くずみがおか、と読む。

普通科のみのくせに全生徒数は1506人。

所在地は久住市久住ヶ丘。名前の通りに高台に位置する高校である。久住市に高校はこの『クズ校』しか無い。隣町や電車に乗れば沿線にも高校はあるが、久住市の高校生のほとんどはクズ校に通う。そのクズ校、私立だけあって校内の施設は充実している。学食だけでなく五つあり、購買は12ヶ所ある。各教室にはエアコン完備、特別講師も含めて教師も100人以上。駅と学校を往復する専用送迎バス、敷地と校舎も無駄にデカくて生徒が1500人以上いてもスラスカだ。学校内に広大な緑地公園があったり、何故か教会まである。

何でも町に住む大金持ちが全面的にバックアップしているらしく、授業料は公立並。それでこの充実した施設なら、みんな通うのは当然だろう。いや、このクズ校には施設以外にも特徴がある。それは『生徒主義』という制度だ。これだけ聞いても訳がわからないが意味はそのまんま、『生徒の生徒による生徒の為の学校』とかいうやつぱり訳のわからない制度である。しかし、その制度のお陰でクズ校は自由極まりない校風を持っている。それが一番の人気の秘訣らしい。

「何を一人でぶつぶつ言っているんだ？」

校門へと続く緩やかな坂道の途中、瞬の声にはっとする。

「い、いや。気にしないでくれ」

その生徒主義を取り仕切るのが今の瞬も所属する『生徒会執行部』。生徒会長ともなると教師よりも発言権があるらしい。

生徒会長。生徒主義と銘打つだけあってももちろん全校生徒による投票で選抜される。現在の生徒会長は開校から十五代目。二期連続当確している為、十六期目の生徒会長。最早カリスマと化していて二期とも圧倒的多数で当確した。

佐山刹那さやませつな。

瞬の双子の姉だ。

朝から仰仰しいくらい警備員の立つ校門をくぐる。時間は早いが多数の生徒達で溢れ返っている。クス校のシンボルの一つでもある前庭の噴水、生徒達はその噴水を迂回しながら校舎に続く石畳に吸い込まれて行く。

部活に精を出す奴。友達と談笑を交す奴。無言で通り過ぎる奴。誰もが皆、青と黒を主体にしたブレザーを着た同世代の高校生達。

俺も同じ筈。でも、俺は無意識に羨望の眼差しを送ってしまう。

「……瞬」

締め付けられるような心を隠しながら瞬に呼び掛ける。

……居ない？

「瞬？」

おかしいなど、もう一度呼び掛けた時に少し後方に瞬を発見する。困った顔の瞬の周りには数人の一年女子。実は毎朝のように見掛ける光景である。

「先に教室行ってるからな……」

ぼやくようにそう言つと校舎に向け歩き出す。悪い！って感じの視線を送って来た瞬は放置しておく。

瞬と別れた俺は一年二年校舎の中を歩いていた。

クズ校の校舎は全部で7棟ある。一二年校舎。三年校舎。文化部の部室などがある部活棟。音楽室などの教室がある別棟。専門講師の専用教室のある特別棟。蔵書数200万冊を誇る図書館棟。そして無意味な時計塔が突き出た生徒会専用の時計棟。校舎の他にも体育館が四つ、武道場が三つ。その他にも訳のわからない建物がいくつかある。俺なんか未だに迷ってしまう事もある。

と、いろいろ考えながら歩いていたら自分の教室に着いてしまった。

2年F組、俺のクラス。ちなみに瞬も同じクラス。この学校、どう調べるのかはわからないが、仲のいい友達とは必ず同じクラスになる。各学年12クラスずつあるのに瞬と同じクラスになれたのは

そのお陰だと思う。

俺は瞬以外友達がいらないのだ……。

「…………おはよう」

控え目に挨拶しながら教室に入る。返事は無い。教室には誰もいなかった。HR開始まではまだまだ早い、当然のようにF組は無人だった。

「……………」

挨拶した事をちよっぴり後悔しながら窓際最後尾の自分の席に座る。

いつもの事だった。瞬に付き合うとだいたい一番乗りだった。誰もいない教室。部活に励む生徒達の声だろうか、遠くからは喧騒が聞こえてくる。対してこの教室から発する音は無い。表現するなら『寂しい』だろう。

でも、俺はこの無人の教室が好きだった。一人でいるのが好きな訳ではない。俺はただ学校が好きなだけ、教室が好きなだけ、俺がいてもいい場所が好きなだけ。このクラスのみんなはいいヤツばかり。そのみんなの場所に俺が入れるんだ……最高だ。

今なら誰にも迷惑は掛からない。俺がその場所においても、大丈夫。

視線を外に向ける。

今朝予想した通りに綺麗な青空だった。

多目的ホール。

HRを終えた俺はそこに来ていた。俺だけではない。クラスメイト達も一緒だ。今日の一限目は授業ではなく、月に一度開催される生徒会執行部による定例説明会がある為だ。瞬が朝早くに登校した理由もこの説明会の準備があるからである。

1500人を易々と納める多目的ホール。端っこの人なんて豆粒に見える。俺達二年生は丁度ホールの中心くらいの場所に整列している。正面中央に位置する壇上、そこで執行部による説明が始まる訳だが、それもやっぱり豆粒くらいにしか見えない。まあ問題ない、壇上の上には巨大な電光スクリーン、でっかいスピーカー。既に慣れてしまったが、有り得ない施設充実振りに最初はかなり驚いた。

『 静粛に 』

ホールにそのスピーカーからの声が響く。瞬の声だ。

『ただ今より11月の説明会を開始します。全校生徒の皆様、壇上、もしくはスクリーンをご覧ください』

堂々と響く親友の声。ついさっきまで肩を並べていた奴の声。思わず苦笑してしまう。瞬に対してではない。……これは自嘲に他ならない。

『皆様。おはようございます』

声が変わった。

『本日は貴重な授業時間を我が生徒会執行部説明会にお割き頂き、まことにありがとうございます。進行、説明共に生徒会長である私、佐山刹那が勤めさせて頂きます』

瞬のそれよりも凜とした声を響かせる。

スクリーンに映し出される堂々とした姿、遠くから聞こえる声を聞いて……映像越しに遠くに見える姿を見て……。

再び苦笑してしまう。

続く声を聴くが頭には入って来ない。

壇上に立つ生徒会長。

壇上に立つ同級生の女の子。

彼女は俺が小学校を卒業するまで一番仲の良かった友達だった。

別人のようだった。

小さい時に一緒に泥だらけになって遊んだ記憶が嘘のようだ。

毎日のように一緒に遊んだ幼馴染み。

せつちゃん……。

男も、女も、誰もが羨望の眼差しをスクリーンに送っている。誰も
もが透き通るような声に耳を傾けている。

無理もない。

細く流れるサラサラのセミロングの黒髪。長い睫毛に特徴的な大
きなつり目。整った鼻筋。厚くもなく薄くもない綺麗に整った唇。
細い輪郭、細い首、身長は普通だが細すぎない体のライン。

欠点が見当たらない。

瞬と二卵性の双子であっても似ているようで似ていない。全てが
飛び抜けて女性的である。

それだけではない。成績は常に学年トップ。部活は生徒会のみらしいが運動神経も超優秀。生徒会長という肩書きが示す通り人望も厚い。今も長い口上を完璧な滑舌で、しかも空で読み上げている。

……なんだこの完璧超人は？

『 以上が11月の要項、及び先月からの変更点です。質問、要望などございましたら各クラス委員、もしくは生徒会執行部まで提示して下さい』

どうやら終わってしまったらしい。全然聞いてなかった。

『では、閉会します。三年生最前列、一年生最後列からの退場を…』

瞬の声が変わり、役目を終えたせつちゃんもは舞台袖に引っ込もうとする。俺はどうしても目で追ってしまう。ずっと遠く、よくは見えない。でも、歩き方だけでも常人を逸脱している気がする。きつと俺がここにいる事なんて気にも留めないだろう……。

目に写る全てが現実を失っていく。

映像でも見ているかのように俺という存在が取り残されてしまった気分になる。

疎遠になって五年。

根の深い隔たりは俺自身の思考を何処かに引き剥がしてしまいうだった。

「十八！」

ホールから続く渡り廊下。教室に戻る途中に呼び止められる、瞬である。クラスの列に合流するように俺の隣に並ぶ。

「もう終わったの？」

歩いている足は止めずに、もう生徒会の仕事はいいのか訊いてみる。

「ああ。片付ける物は少ないからな」

「ふうん……」

上の空の返事をした俺を見て瞬の表情が訝しげに変わる。眉をたわませ、細くした目で俺を窺うように見てくる。

「十八……どうした？」

しまった、と思ったがもう遅い。瞬は少し考えるような素振りの後、訊いてくる。

「刹那、だな？」

当然のように核心を付く瞬。一瞬後悔するがすぐに諦める。瞬に隠しても仕方ないし嘘は嫌だったので正直に答える事にする。

「ああ、凄いな、せつちゃん」

嘘ではない。しかし、未だ胸の奥にくすぶる感情を口にはしない。寂しさ、孤独感。言う訳にはいかない、きつと瞬は気を遣う。

「まだ仲直りしないのかよ？」

眉を伏せて少し呆れたような表情で訊いてくる。

「別に喧嘩してる訳じゃないよ」

そう、別に俺とせつちゃんは仲違いをしている訳ではない。

住む世界が変わってしまっただけ。

どんな時でも一緒にいたせつちゃん。小学校の時は瞬よりもずつと仲良しだった。元気いっぱい俺や瞬を引っ張り回して近所を駆けずり回っていた。

でも小学校まで。

一般人の俺。きつと彼女は俺に愛想をつかしてしまったんだろう……。

「ちえい！ はっ！ とう！」

感慨しく頭を垂れようとした俺に耳障りな異音が割り込んでくる。

「はっ！ ふっ！ 瞬っ！ シオっ！」

脇から聞こえてくる異音に視線を寄越す前に瞬を見てみる。……
なんとも迷惑そうな表情の瞬と目が合う。

「にゃっ！ どうっ！ ……聞いている？」

素に戻ったのを確認したので瞬と共に異音の発生源に視線を移す。

「 ……ひゃっ！」

素に戻っていたヤツは目が合った瞬間、『えっ？』って感じにな
ったが、すぐにウザい異音を復活させる。同時にウザい笑顔とジヨ
○ヨっばいポーズ付き。

ぶっちやめんどくせえ。

異音を発生させていた男子生徒。コイツは山崎やまざき涉。一応、クラス
メイトだ。ここでもう一度確認しておく。俺に友達は瞬しかいない。
コイツはクラスメイト。

「涉、今日は遅刻？」

HR、説明会、共にいなかった涉にあくまで真面目に訊く。そう
真面目に！

「ひゅっ……？ あっ、うん。寝坊しちゃったんだ」

一瞬、ポルナ○フになりかけたが俺と瞬のド真面目な視線を受け
て素で反応する。涉は大のジャ○プっ子で、とにかく影響されやす
い。そして、めんどくさい。黙っていれば悪くない容姿をしている
筈なのに、すぐ調子に乗ってやらかす。まあ悪いヤツではない。ち

なみに容姿の解説は面倒だからパスしておく。

少しして教室に到着する。このまま休み時間なのだが、特にする事の無い俺は自分の席に座る。瞬と渉も同じように席に着く。といつても窓際最後尾の俺、隣の隣に瞬、そしてめんどくさいヤツの後頭部は目の前にある。

「ふおっ！ ……二時間目、なんだっけ？」

ヒュッっ 勢いよく振り向いた後、普通に訊いてくる渉。 疲れないのかな。

「……数学だよ」

面倒だが答えてやる。

「 ……！！ オツケー！！ し・の・ちゃ〜ん！！」

俺の回答を聞いた途端に顔を緩ませた渉はウザさ全開で奇声を上げる。

コイツはアホだ。

アホに違いない。

でもそのアホのお陰で苦しかった心は緩んでくれていた。

005 プロローグ05 逢着

「おはようございます」

挨拶と共に教室に入って来たのは数学教師。

徳川志乃先生。
とくがわしの

腰まで届く長い髪が特徴的な美人数学教師。確か今年で28才で学校内の教師の中でも比較的若い方の先生だ。とにかく綺麗な容姿と丁寧な言葉遣い、加えてほわほわした和らかない物腰。授業も解りやすく、とくっても優しいのでみんなに人気の先生である。

「今日は前回の多項式の積分の続きですね。教科書の64ページを開いて下さい」

「……はあ……」

にこやかな今日の授業の説明に主に男共の野太い歓声上がる。このように徳川先生は主に野郎どもの憧れの的である。優しい先生なので女子達にも人気はあるが、男達の熱気は凄まじい。

「はいはいはいはいはいはい！！ 志乃ちゃん志乃ちゃん志乃ちゃん！！」

目の前のアホが手を挙げながら乗り出し気味に連呼する。

「山崎君、質問ですか？ あと、一応立場上『ちゃん』付けではち

よつと困ります」

装備している出席簿で口元を隠しながら言う先生。はにかんでいるような表情がかわいい。

「じゃあ、志乃先生？」

怯まないアホに先生を敬う気は0%である。

「はい、何でしょうか？ 山崎君」

どうやら名前で呼ぶ事自体はオツケらしい。

「こないだははぐらかされたけど3サイズ教えてよお！」

アホ 変態に変更。周りの女子達の非難の声が上がる。ちなみに変態はものもしない。確かに渉の言う通り、この前の数学の授業の時、『今はわかりません……ちゃんと測って見ないと……』と、変態の質問に真面目に答えていた、という事があった。

アホ、じゃなかった、変態め。今回も先生ははぐらかすに決まってるだろうが。

「あ、あ、はい。えーと、上から87、59、83」

「だあああああああ！ ストップストップ！！」

思わず慌てて大声を上げる俺。

「?? 塩……田君？」

俺の声に軽く驚いてきよんとする先生。似たような様子の教室のみんなも俺に注目した。

「あ、いや、なんでも、ないです………すみません」

ツッコむに決まってるじゃないか！って言いたかったが、あまりにみんなの視線が冷たいので小さくなってしまふ。どうして目の前の変態ではなく俺をそんな目で見る？

「………では、雑談はこの位にして授業を始めましょう。まずはおさらいがてら例題を解いていきましょね」

俺の行動に釈然としない様子の先生は俺を心配そうに見た後、授業を再開する。俺、けっこういい事したっばいのに………間に合わなかったけどさ。

目の前の変態を恨めしげに見ると先生を見てよだれを垂らしていた。隣の隣の瞬は笑いを堪えてるし。

昼休み。

俺は瞬と渉と三人で学食に来ていた。第一学食、一二年校舎にある学食だ。もちろん目的は昼食を摂る為である。弁当を持って来る事もあるが、大抵はこのように学食で食べる事になっているからだっ

いつもの事だが学食は大混雑だった。如何に学食が五つあるのが
広かるうがなんだろうが席は満席。1500人も生徒が居れば当然
かもしれない。長い行列に並んで定食を買ったはいいが、三人でそ
のB定食を持って突っ立ったまま満席の学食を眺めてしまっていた。

「これはバラけるしかないな」

瞬が呟く。確かに満席のように見えたが、ちらほらと空いている
席はある。四人席に三人グループで座っている人達に相席させても
らう、などすれば座れそうだ。

「じゃあバラけて、さっさと食べちゃおう」

三人別れてさっさと食べてしまう事になった。

B定食を持って少しうろろすると、すぐに四人掛けに三人で食
べているテーブルを発見する。早速混ぜてもらおう事にした。

「すみません。相席してもいいですか？」

一年生女子の三人組だった。俺の声に三人の談笑が止まる。女の
子だけ？ ちゃんと見ないでテーブルを選んできました……ちよっ
と気まずい。

「はい。どうぞです」

三人の中の一番小さな子がそう言いながら椅子を引いて促してく
れた。

「ありがとう」

お礼を言いながらその子の引いてくれた椅子に座る。その子は『とんでもありません』って感じのかわいい笑顔で応えてくれた。

三人に気を遣いつつ昼食を開始する。

……と、開始したのはいいが落ち着かない。どうしても三人が気になってしまう。

B定食のメインのオカズであるコロツケをかじりながら見てみる。

まずは正面の子。Cランチを食べている。活発そうな雰囲気である。何にもよく喋りそうだ。現に今も隣の子に早口で捲くし立てている。黒髪のポニーテールも彼女の活発さを演出している要因のひとつだろう。コロコロと変わる表情を見ているとこっちまで元気になってしまいそうだ。

次は斜め前の子。サンドイッチと牛乳だけ、少食なのかもしれない。さっきの子とは対照的でおとなしそう。隣の子に相槌は打っているが黙々とサンドイッチを食べている。毛先だけくるくるした栗色のセミロング。フレームレスの眼鏡がよく似合っている。偏見かもしれないが勉強がよく出来そうだ。

そして俺の隣。さっき俺に椅子を引いてくれた子。きつねうどんを食べている。第一印象は『ちっこい』。いや、決して馬鹿にしている訳ではない、身長が小さいのだ。座っているのでもちゃんとした身長は分らないが、まず150センチ無いだろう。何というか、かわいい。熱いのだろうか？ ふーふーしながら必死に食べている。もきゅっもきゅって効果音が聞こえてきそう。幼い印象だが、大き

な目にしっかりと整った輪郭。自毛なのだろうか、つやつやした自然な金色のロングツインテールに今時珍しい青いリボン。……何かに目覚めてしまいそうだ……。

結論。三人ともめっちゃかわいいので緊張してる。

「ちょっとあんた」

「えっ?」

正面の子に呼ばれた?

「何をさっきからジロジロ見てんだい? おかしな目的があるんじゃないだろうね?」

えっ? えっ?

「えっ?」

「言いたい事があるんだっいたらはっきり言いな!!」

俺を睨み付けながら口撃してくる。とつても大きな声で。ヤバイ。調子に乗って見過ぎた!

「い、いや……」

「怪しいね。ルナが目的かい?」

そつ言いながらずいど距離を詰めて来る。

るな？ 知らないよ。どうしよう、ヤバイよ。周りを見れば活発娘の大声で学食中の生徒に注目されてしまっていた。当然、俺は活発娘の威圧感と周りの視線が相まってテンパってしまう。

「トモちゃん。この人は違うと思うよ？ 大丈夫だから抑えて？
ね？」

俺と活発娘の間に隣のちっこかわいい子が割って来る。

「でも、ルナ」

「どうやら、このちっこかわいい子が『るな』で、活発娘の方が『ともちゃん』らしい。」

「巴、抑えなさい」

終始傍観していたおとなし眼鏡さんが言う。

「円。ちっ、ついてたね……あんだ」

俺に吐き捨てるともちゃん改め『巴』さん。おとなし眼鏡の子は『円』さんらしい。しかし何か酷い。見てただけなのに……。

「ごめんなさいです。トモちゃんはルナのボディガードも兼ねているから過剰になっていたと思うのです」

るなさんが言う。ボディガード？

「ふう……」

昼食を終え、学食の入り口で瞬と渉を待つ。

「はっ！ シュオちゃん。なんか通勤電車で注目を浴びる痴漢みたいになってたなっ！」

渉だ。見てたのか……助けてくれてもよかつたろうに……。

「でも、ついてたじゃん。ルナちゃんと話せたんだろ？」

「知ってるの？」

どうやら知ってるらしい渉。

「はあ？ シオ、知らないの？」

???

「彼女は……いや、彼女達は生徒会執行部の一年生達じゃないか！
しかもルナちゃんを知らないのかよ？」

「そうなの？ いや、全然知らない」

そんなに有名人だったのか？ 確かに三人ともすごい可愛かったけど。

「お前を口撃してた子は橋巴ちゃん。眼鏡の子は進藤円ちゃん。そ

んでツインテールの萌えっ子は毬谷^{まじや}るなちゃん。ルナちゃんはあの毬谷財閥のご息女だぞ？」

「あ、あの毬谷家の人だったのか……」

毬谷家は御三家と呼ばれるこの町にある場違いな高級住宅街でも更に場違いなお屋敷に住む三つの大金持ちの一つである。

「しかし、やるな。相席を口実に接近するとは」

「はあ？」

「シオが年下好みだとは思わなかったぞっ！ このっロリ〜めっ
！」

へらへらといやらしく笑いながら、このこのって肘でつついてくる。うぜえ……。

「だから知らなかったって言うてるだろ？ それにロリーとか言う
な」

「またまた〜 んがお！？」

しつこく肘でぐいぐいしてきていた渉が変な奇声を上げながら変な顔で脇腹を押さえる。何か痛そう。隣を見ればいつの間にか瞬が地獄突きの体制で立っている。助かった、正直ウザかった。

「俺の十八はロリコンじゃない！」

あわわ、そんなに大きな声で……というか『俺の十八』ってなん

すか？

なんか周りにいる人達がジロジロ白い目で見てくるよ……数学の
時もそうだったけどやたらと注目されるな今日は。

六限目を終え、放課後開始のチャイムを聞きながら一息吐く。

今日の学校はおしまい。俺は荷物をまとめて帰る準備を済ませると席を立つ。

「シ〜オっ。ちょっと駅前に付き合ってくださいっ!」

立とうとした時、前の席の涉がくるっと振り返って言った。

「……いいけど、部活は?」

俺に断る理由はない。けど、いつもなら涉は部活がある筈。

「その部活が無いから行くこっつて事っ! 第二の連中の練習日なんだってさっ!」

「ふうん、珍しいね」

涉は第一剣道部。第一と付く位だから第二はあるのかつて、もちろん第二剣道部もある。つまり剣道部は二つある。そして、剣道場は一つしか無い。いつもは第一剣道部が剣道場を占拠していたが今日は違うらしい。

「たまには骨休めってねっ! 部長の配慮って感じっ!?」

「ふうん」

どうも怪しいが、こんな事は初めてなので多分本当なんだろう。
ちなみに渉は副部長らしい。

「瞬も行くかなっ?」

あまりに薄すぎる鞆を担ぎながら渉が言う。

「瞬は生徒会だと思うよ。だろ? 瞬」

そう言いながら瞬の席を見ると、六限目中ずっと突っ伏していた
瞬はまだ同じ体制だった。

「行ってらっしゃい……俺は生徒会始まるまで寝るから」

突っ伏したまま片手をひらひらさせて言う。

ちよつとすねてる?

まあ、だいたいいつもの事だ。瞬は授業中はいつも寝てたりする。
でも、成績は常にトップクラス。コイツを見ていると天才っている
んだよなあって常々思ってしまう。

「ところで駅前は何しに行くの?」

校門をくぐりながら渉に尋ねる。

「うーん……買い物？」

何故に疑問形？

「まあいいけどさ」

特に予定は無いので追求はしない。時間が掛らなければ別にいくらでも付き合うつもりだ。

「一回家に寄っていいかな？ お金取って来たいなっ！」

渉の家、学生寮だ。

「通り道だし、いいんじゃない？」

もうすっかりお任せモードな俺。

「乗り気じゃないなあ……久々に一緒に出掛けるんだから、楽しく〜」

年中そうだが、渉は楽しそうである。マイペースというか常に高いテンションを保ち続けている。

渉と知り合ったのは高校に入ってから。一年の時から同じクラスで、やはり一緒のクラスだった瞬と俺にやたらと絡んで来た。俺にはともかく瞬に馴れ馴れしく出来る男子は全校でも渉だけだろう。

校門からしばらく緩やかな坂を下ると学生寮に到着する。校門から歩いて一分、これだけ近くても渉は遅刻の常習犯である。

坂下寮。学校に続く坂の下にあるから坂下寮。そのまんまである。全部屋個室で収容生徒数は150名、女子50名に男子100名。部屋にはエアコン完備、ユニットバス付き。全部で三つある学生寮の内の一つだ。

「俺はここで待ってるよ」

寮の共同玄関のホールのような所で待つ事にした。

「そっかつ！ ダッシュで行ってくつから！ ひゅっ！」

スタタツと走って行く渉を疲れた目で見送るとホールに置かれたソファアに腰を下ろす。

「……………」

一人になるとどうしても考え事をしてしまう。俺の悪い癖だった。

瞬。

渉。

渉はクラスメイトとか言っておきながら渉と一緒にいるだけで嬉しくなれる。本当なら瞬も一緒に行ければ良かったと思っている。

俺なんかと一緒にいてくれる二人……………。

「ちよつと」

「えっ？」

突然掛けられた声に思考が中断される。声の方を向くと制服を着た女生徒が立っていた。

「は、はい？」

「あなた寮生じゃないわよね？」

女生徒は少し苛立った様子で訊いてくる。制服のリボンを見ると緑、三年生だ。

「はい。えーと……友達を待ってて、すぐに来ると思っんですけど」

基本的に寮生以外は寮には立ち入り禁止。恐らくその事を指摘されているのだと思う。

「そう、まあいいわ。一応わかっているみたいだから不問にしてあげる。その友達が来たらすぐに立ち去って下さい。いいわね？」

凄く高圧的な言い方だ。

「はい、すみませんでした。先輩」

女生徒はそう言った俺をつまらなそうに一瞥した後、女子寮の方に行ってしまった。

彼女の事は知っていた。

あおばかすみ
青葉華朱美。

三年生、長い黒髪、切り揃えられた前髪が特徴的。白い肌に整った綺麗な顔、髪型と相まって日本人形を思わせるような美人だ。元風紀委員長、更にその前、せつちゃんの前の生徒会長を勤めていた人。今の生徒会長のせつちゃんの前、つまり二年前、青葉先輩が一年生の時に当確したという偉業がある。それまで一年で生徒会長になった生徒が皆無だった為、青葉先輩はカリスマとして称賛された。成績優秀、運動神経抜群、容姿も申し分無いと三拍子揃った先輩は全校生徒に多大な称賛を受けていた。

しかしせつちゃんの登場で青葉先輩のカリスマは脆くも霞んでしまふ事になる。

二期連続当確確実とされていた青葉先輩は当時一年生であったせつちゃんに圧倒的大差で敗れてしまった。それ以来、風紀委員に鞍替えして全校生徒を厳しく取り締まる有名人になったらしい。

話すのは初めてだったけど、噂通りの人だったみたいだ。

その後、戻って来た渉と共に駅前にやってきた。

「何を買うの？」

いい加減、渉の目的が分からない俺は再度訊いてみる。

「本だよ、本っ！」

「……………？ 涉が……………本？」

聞き間違えだろうか？ 涉が……………本？ ……エロ本か？

「エロ本か？」

「なっ！ シオっ！ なんて失礼なっ！ 読んでいるみんなに変な
先入観を擦り込まないでくれっ！」

なんだよ、読んでいるみんなって。

「じゃあ、もう一度訊くけど、何を買うの？」

「いや、普通に漫画買おうかなって」

……………。

「……………ふうん……………」

「な、何？」

「別に……………」

二人で駅前の大型書店に入る。

「じゃあ、俺は漫画のコーナーに行ってくるねっ？」

すったかた〜と行ってしまふ涉と一緒に来た意味があるのか激し

く疑問に思いながら見送る。立ち読みでもする事に……。。

ここは久住ヶ丘に唯一ある大型書店でレンタルDVDや何故か駄菓子まである学生や近所の人達の憩いの場だ。俺もよく利用するので見慣れた店内をウロウロしてみる。放課後という事もあってか、俺と同じようなクス校の制服を着た学生達もちらほら見掛ける。

あれっ？

文庫コーナーを流し見していると奇妙な違和感を覚えた。文庫コーナーの最奥、同じクス校の制服を着た女子生徒が立ち読みしているいや、別に立ち読みしてるのは普通である。

しかし。

文庫コーナーの最奥は確か官能小説の棚だった筈だ。

さりげなく覗いてみる。

「！？」

『昼下がりの団地妻〜逆襲編〜』

おもいつきり官能小説だった。しかも表紙にはやたらと劇画な奥さんが縛られてる絵が書いてある。かなり濃い内容とみた。

如何にも普通の女の子に見えるその女子生徒は平然と『それ』を読んでいる。ショートカットの黒髪、やたらと前髪が長くて目が全部隠れている。……何か不思議な娘だ……。

「……………」

くるつとこつちを見る女子生徒。

一瞬、ヤバイ！と思ったが女子生徒は焦りもしないし何も言わない。思わず俺も彼女に視線を固定したまま固まってしまった。

じい〜

じい〜

そんな擬音が聞こえて来そうな位にお互いを凝視する俺達。

……

一分くらい経った頃、彼女は口を開いた。

「……これ……面白い……おすすめ……」

すつと手渡される。俺は固まったまま受け取ってしまった。

女子生徒はそのまま行ってしまった。

……

……

……

「お〜い。シ〜オちゃん？ しっかりしろ〜」

「えっ？」

声にはっとする。

「渉？ ……あの子は？」

「あの子？ っていうかシオ……そんなの読むの？」

俺の前を指差しながら言う。見てみると俺はひわいな表紙の文庫本を両手で大事そうに持っていた。

「えっ？ あっ！ いや、違うんだ！ 不思議な子がこれを読んでお見合いしておすすめてくれたんだ！」

「はあ？」

大丈夫かお前的な視線を寄越す渉。自分でも訳が分からないと思う。

「その娘は海老原曜子ちゃんだねっ！」

さっきの状況と彼女の特徴を言うと渉は当然のように知っていた。

「海老原ちゃんも生徒会執行部だよっ！ おんなじ二年生っ！」

また生徒会執行部か……なんだか今日は縁があるなあ。

「ところで渉はどうしてそんなに詳しいの？」

ぼんぼん出てくる渉の回答にいい加減疑問を感じたので訊いてみる。

「そりゃあ、あの生徒会執行部の事だしっ！ それに校内のかわいい娘はチェックしとかないと仲良くなつた時困るよっ！」

「……ふうん」

困るのか？

どこか虚ろで焦点の定まらない瞳。か細い間接照明に照らされ、少し潤んでいるようにも見える。視線で捉えている物が映っているいや、映っているだけで捉えているわけではないのかもしれない。瞳は開かれているが何も『見て』いない。

彼女は儂くも見えるが綺麗だった。完成された美しい絵画のように、いつまでも眺めていたい。そう、思ってしまった。

カラン、と透き通る音を立ててグラスの中の氷が傾く。彼女の瞳に捉えられていたグラスの氷が傾く。虚ろだった瞳が妖しげに揺らめく。

「シオ君……」

彼女が俺を呼ぶ。

「……はい」

応えると彼女の視線が俺を捉える。妖しげな瞳が俺を捉える。妖しげな瞳に俺が映る。彼女の口元が僅かに吊り上がる。どこか楽しそうに、どこか嬉しそうに。

「お代わりい。ダブルでえ」

そう言いながら二ヘツと顔を綻ばせる彼女。先ほどまでの儂さは一瞬で吹き飛んだ。

「伊集院さん。飲みすぎです。それに俺ってもう上がりなんですけど……」

ここは『Leaf』というお店の店内。俺はカウンターの中に立っ
つていて彼女はカウンターに並ぶ椅子の一つに座っている。ここ『
レストラン&ダイニングバーLeaf』は俺のもう一つのアルバイト
先である。

「ええ〜。もうちょっと付き合いなさいよお〜。シオくうん」

彼女はここの常連の一人で名前は伊集院さん。恐らく二十代だが
年齢は不明。職業も不明だがいつもスーツ姿。酔わなければ知的で
いい人なのだが、酔うとこのように絡んでくる厄介さん。

「いや、明日も朝早いから、もう帰らないと」

「……うう、わかったわよお……お疲れ様」

少し迷うような素振りの後、結局は不満気な表情で口を尖らせな
がらも解放してくれる。如何に酔っ払っていようが流石は大人の女
性。流石は社会人である。……そっいう事にしておこう。

「はい。失礼します」

時計を見ると10時過ぎ。夕方に本屋で涉と別れた俺はそのまま
駅の南口にあるLeafに出勤し、今現在まで働いていた。

「店長。俺、上がりなんでカウンターお願いします」

「ん、ああ、了解です。お疲れ様、十八君」

「はい、お先に失礼します」

店長。ここ『Leaf』の経営者でダンディズム全開な三十代後半の素敵なナイスミドルさん。本来ならこのアルバイトは高校生では駄目なのだが、店長は俺の事情を察して雇ってくれた。俺の数少ない理解者の一人だ。

「塩田あ、上がりかあ？」

更衣室に入るとアルバイト仲間で先輩の永島さんが一服していた。

「はい。お先っす」

「おお。オメエまあた伊集院さんに絡まれてたろお？」

「いや、絡まれてたっていうか普通に話し相手していただけっすよ」

「ばあか、オメエだけなんだぞお？俺とか店長にはそんなことねえんだぞお？仲良くなつて優しくしてもらえよお。ひゃっはっはっ！」

いやらしい高笑いを更衣室中に響かせる。永島さんは少しお下品な喋り方と全身に無数の傷痕が特徴の『普通』の大学生だ。

Leafを出た俺は帰り道をゆっくり歩く。

家まではゆっくり歩いても15分足らず、だから俺は出来る限りゆっくり歩く。

星が綺麗だから。

月が綺麗だから。

僅かに輝く町のネオンが綺麗だから。

見るもの全てが眩しいから。

だからゆっくり歩く。家に帰っても一人。もうじいちゃんはいない。疲れて帰っても迎えてくれる人はいない。

本当は伊集院さんの言葉が嬉しかった。俺と一緒にいてくれる人の言葉が嬉しかった。優しかった。一緒にいたかった。

違う。

そうじゃない。俺はそうじゃない筈だ。

俺は誰かの足枷になってはいけない。縋ってはいけない。甘えてはいけない。巻き込めない。俺は何年も前に『そこ』に行き着いていた筈だ。

自重しろ。もう一度考えろ。夢を見るな。幻想を振り払え。……

思い出せ。

ピピッピピッ

ポケットの中の携帯が鳴る。メールみたいだ。

from 佐山瞬

sub お疲れさん！

バイト終わったか？ 今日も厄介になりたいんだがいいよな？
駄目とか言ったら一緒に寝てやらないゾ！ 家の前で待ってるゾ！

「ははは……」

……涙が出そうだった。親友の日常に俺がいる。なんて嬉しい事
なんだろう。足枷になっちゃいけないのに、縋ってはいけないのに、
甘えてはいけないのに、巻き込んではいけないのに……。

了解の返信をしても俺の足は逸らない。今の俺を瞬に見せてはい
けない。こんな弱いままでは瞬にはすぐにはなれてしまう。きっと瞬
は気を遣ってしまう。

ゆっくり帰らないと……。

ピピッピピッ

再びメールの着信を告げる電子音。

from山崎涉

subぶおっ！

シオ！ 俺ってばこれから夜更かしするんだっ！ 深夜バラエテ
イにうずまれる訳さっ！ 明日の朝、寮に寄ってくれよお。起こし
てくれよお。一緒に学校行こうよお。よろしくっ！

「……………！」

唇を噛む。視界がぼやける。ぼやけた目で何度もメールを読み返
してしまう。込み上げる嬉しさに体が震える。

どうして俺なんだろうか？ 俺でいいのだろうか？ 彼等の日常
に俺は必要なのだろうか？

震える手で返信をする、早く応えたいから……。自分の思考とは
裏腹に彼等に縋ろうとする自分。迷惑を掛けるに決まっている。苦
しみを強要しているようなものだというのはわかっている。

でも、俺の震える右手は必死に文章を作っている。力無く支える
左手も震えている。液晶を捉える目も霞んでいる。

滑稽だ。

なんなんだ『これ』は？

夜遅くの道路のと真ん中で馬鹿みたいに携帯を睨み付ける男。満
天の星々が嘲笑うようにその男を照らしている。妄想の堂々巡りを
繰り返す馬鹿な男が這いつくばっている。

滑稽だ。

俺の日常。

駆け足で進む時間。

今日も一日が終わる

。

昼休み。俺は瞬に連れられて昼食場所に向かっていた。

「瞬。ゆっくり食べれるいい所ってどこなの？」

向かっているのだが俺はそれがどこかわからない。瞬曰く穴場らしいのだがさっぱりわからない。歩いている場所も普段なら俺が寄り付かない場所なのでどこに向かっているのか見当もつかない。

「ついて来ればわかるって」

当の瞬は俺の困惑をわかっているみたいだが教えてくれない。悪戯っぽい訳ではない、表情は真剣そのもの。今日の瞬はちょっと変だ。

今朝、急に『今日は弁当を作ってくれ』って言い出した辺りから少し様子がおかしかった。ついさっきも『いい所があるんだ』とか言うし……いつもは普通に教室なのに。

なんなんだろう？

「着いたぞ」

「えっ？」

上の空で歩いていたら、いつの間にか着いたらしい。

前を見る。そして、驚愕した。

校舎を二つ程通過し、渡り廊下を歩き、辿り着いた先。無意味に突き出た時計塔、七つある校舎の中では一番小さいながらも時計塔のお陰で一番存在感がある校舎、一番異質な校舎。

生徒会専用校舎、通称『時計棟』。

瞬の示した先は正にそれだった。

「……瞬？」

生徒会関係者以外の時計棟への立ち入りは厳禁。教師ですら生徒会役員の許可が必要である。俺はもちろん無関係。生徒会副会長佐山瞬という友人がいるだけの一生徒、正に無関係だ。俺が立ち入る事は許されない筈。

「いいから、な？」

「しゅ……瞬」

瞬の意図が全く読めず困惑する俺は瞬に手を引かれて時計棟の中へ連れて行かれてしまう。

瞬は無意味に俺を困らせるような事をする奴じゃない。こんな強引な瞬は初めてだ。だからわからない、瞬は俺に何をやらせようとしてるのか？

時計棟の中は意外にも普通だった。リノリウムの床と壁、アルミ

のサツシ。他の校舎と何ら変わらない。規模は小さいが作りは至って普通だった。

瞬に手を引かれ、その廊下を引きずられるように進む。階段を上り、一番奥の部屋の前で停止する。

「……」

瞬が言う。どうやらこの部屋が瞬の言う『穴場』らしい。見上げてプレートを見てみる。

生徒会長室。

「……………」

愕然とした。

この校舎に入った時から薄々だが予想はしていた。未だ瞬の意図は読めないが、瞬の目的はこの校舎でもなければ生徒会執行部でもない。

佐山刹那。

彼女と俺の接触が目的である。それは間違いないだろう。

「瞬………どういう事？」

この部屋に入る前に訊かなければいけない。彼女に会う前に訊かなければいけない。

「別に。普通の事だろ？ 俺と十八、それに刹那は昔からセットだった筈だ。違うか？」

俺の目を見てはつきりと言う瞬。表情はやはり真剣そのものだ。

「……………」

普通の事。

そう、俺と瞬、せつちゃん……は物心がつく前からずっと一緒だった。一緒にいるのが当たり前だった。

元気にみんなを、いや、主に俺を引っ張り回していたせつちゃん。

みんなより少し考え方が大人だけど、どんな事にでも付き合ってくれた瞬ちゃん。

せつちゃんに引っ張り回されながらも笑顔が絶えなかった俺。

俺の後を必死について来ていた……。

ついて来ていた……。

遥……。

そう……せつちゃんと瞬ちゃん、俺と遥……いつでも一緒だった。

でも、それも小学校まで。隔たりは五年。短いのか？ 長いのか？ 俺に言わせればとんでもなく長い。はいそうですか、と易々と聞き要れる訳にはいかない。

「瞬……」

はつきりと言ってほしかった。瞬が俺に何を求めているのか。

「十八。言つたる？ 普通だつて……。大きな意味は無い。俺達は仲のいい連中で昼飯を食う。ただそれだけ、そうだろ？」

眉をたわませ、困つたように肩をすくめながら言う。

「……………」

何も言えない。言いたい事はたくさんある。それは違う。今のままでいい。止めてほしい。これ以上重荷を増やさないでほしい。…言える筈がない。

瞬の心がわかるから。痛い程わかるから。俺の心をわかってきているから。自己満足でいい。……そう思いたい。

「……………わかつたよ、瞬」

諦めではない。理解だ。

「オツケーだ、十八」

そう言いながら瞬は嬉しそうに生徒会長室の扉をノックする。

「はい、どつぞ」

中からの声。せつちゃんの声。

瞬が扉を開く。中に入ろうとする瞬に隠れるように俺も続く。

「失礼、します」

瞬の背中越しに恐る恐る顔を出してみる。

目が合う。大きなつり目が俺を射抜いている。深い漆黒の瞳が俺を射抜いている。

動けない。蛇に睨まれた蛙というか、神話に出てくる魔性の瞳に捕われたというか……動けない。

何も考えられない。綺麗だと思いが彼女を見てるとそう思う事が馬鹿らしくなる。彼女は綺麗とかそういうもので一括りにするのは間違っていると思える。完成されているからだ。だから考えるだけ馬鹿らしくなる。

思考が霧散していく、駆け巡る懐かしい思い出達が霧散していく、何も考えられない。

綺麗な瞳が俺を射抜いている。吸い込まれそうだ……。

「塩田、十八」

彼女が俺の名前を言う。俺を呼んだわけではない。確認するように声を発しただけ。無表情で声を発しただけ。

教室の半分程の室内。窓寄りの中央に両袖の大きな机、手前入り口側に皮のソファァーにテーブルの応接セット。床には赤い絨毯が敷かれている、教室とは違ってベージュの壁紙が貼られている。しかし派手ではない、通常の教室を綺麗に無駄なく等級を上げたような感じだろうか。シンプルな部屋だった。

厚手の遮光カーテンは開け放たれている。今日は快晴、眩しい光が室内を照らしている。

正面の窓を背後に机に座っている彼女。眩しい光が後光のように彼女を包んでいた。

「ゲストだ」

瞬が言う。俺の事？

「おかしいと思った……急に一緒に昼食を摂ろうだなんて……」

視線は俺に固定したまま、無表情のままと言うせつちゃん。急展開すぎる状況と彼女の雰囲気吞まれてしまった俺は何も喋れない。

「ここでいいか？」

「構わないわ。時間も少ないからそこで食べましょう」

二人が何か話しているが俺は固まったままだった。せつちゃんの視線もいつの間にか俺から外れていた。

五年。

俺とせつちゃんは五年もの間、ともに言葉を交していない。目が合ったのも何年振りだろうか……。小学校はもちろん、中学校も一緒だった、同じクラスだった事もあった。変わらず友達でいてくれた瞬と姉弟であった事で俺との接点はたくさんあった。しかし小学校卒業以来、彼女は俺を避けるようになった。いや、俺が避けていたのかもしれない。

五年。

小学校の時は毎日のように一緒にいた幼馴染み。俺にはこの再会が衝撃的な事実には他ならない。目の前で自然な会話をする二人の幼馴染み。どうしても思ってしまう。

瞬、やっぱり戻れないよ……。

「十八？」

俺に気付いた瞬が少し心配そうな声色で呼ぶ。

「うん？　ここで食べれるんでしょ？　食べよっか？」

わざとらしく応える。

「あ、ああ。早く食っちゃおう。刹那もいいな？」

「……………」

瞬には答えず俺を見るせっちゃん。……少し、冷たい視線だった。

そして。ようやく三人での昼食となった。

刹那が一人対面に座り、俺と瞬が並んで座る事になった。見慣れない部屋。座り慣れないソファ。せっちゃん。

落ち着かない。昼食を始めてから誰も口を開かない。三人が三人互いの様子を窺うように沈黙が続く。自分で美味しく作った筈の弁

当も何だか味がしない。

「十八！ 美味しいなこれ」

瞬が言う。明らかにわざとらしい。瞬は瞬でこの雰囲気には堪えきれなくなったのかもしれない。

「うん。ありがとう」

瞬には悪いが上の空で返事をしてしまう。

「……………」

俺の気のない返事に瞬は黙ってしまう。再び静寂を取り戻す生徒会長室。瞬も話題を探しているのか落ち着かないが静かに食べている。この雰囲気には合う話題が見付からないのだろう。

結局まとまな会話も無いまま昼食は終わってしまった。

せつちゃんは一言も喋らなかった。

「じゃあ、俺らは教室に戻るわ……………」

「……………」

「お邪魔しました……………」

「……………」

昼食中、終始無言だったせつちゃんは俺達を送り出す時も無言だった。相変わらずの無表情。俺達を、いや、俺を不思議そうに観察しているようにも見える。

元気いっぱいだったせつちゃんの面影は無い。

「じゃあ……」

生徒会長室を出る。

そういえばせつちゃんは午後の授業、どうするんだろっ？

そう思った時、

「塩田十八」

「えっ？」

せつちゃんに呼ばれて閉める寸前の扉を止める。

「……………」

ドアの隙間越しにせつちゃんを見ると、再び無言で俺を見つめていた。

「……………な、何？」

何も喋らない彼女に問掛ける。

「……………」

俺の問掛けには答えず、無言で扉を閉められてしまった。

「……………」

せつちゃん？

「十八？ 急ぐぞ？」

「えっ？ あっ、うん」

瞬の声に考えようとした思考を中断するが、頭の中はせつちゃん
の事で埋め尽されていた。

元気だったせつちゃん。

いつでも笑顔だったせつちゃん。

ドアの隙間越しに見た彼女は泣きそうだった。

楽しかった思い出しか無かった。

彼女と俺はいつも一緒だった。彼女はいつも笑顔だった。怒った顔や困った顔もよく覚えていて、でも彼女はすぐに笑った顔を見せしてくれたんだ。

すぐに怒るけど笑ってくれた。すぐにすねるけど笑ってくれた。いつも楽しそうに俺が笑うと彼女も笑っていた。俺が困っていても彼女は笑っていた。俺が怒っていても彼女は笑っていた。俺が彼女でまず思い浮かべるのは無邪気な笑顔だったんだ。

悲しい顔なんて思い浮かばない。

彼女の悲しい顔は印象的だった。笑顔が霞んでしまう程印象的だった。彼女は何故あんな悲しい顔をしたのだろうか？ よく笑ってよく怒って、たまに困って、それでも笑っていたのに。彼女は何故悲しいのだろうか？

いつでも一緒だった。楽しかった学校で一緒だった。みんなで遊んでる時も一緒だった。家に帰ってからだって一緒、どちらかの家に一緒にいるのが当たり前だった。一緒に寝た事だってしょっちゅうだった。今からじゃ考えられない位に一緒だった。どんな時でも笑っていたんだ。

俺も笑っていたんだ。彼女が悲しいのは、彼女が悲しいのは……。

俺が悲しいからだろうか……。

「行つたぞおおっ!!」

「えっ?」

声に反応して思考の海から顔を出すと……出すとっ! 一瞬で状況を思い出して狼狽える! ヤバイ! とにかくヤバイ! 何がヤバイって説明する暇も無いくらいにヤバイ!

「十八あっ!!!!」

突然の俺を呼ぶ声。声とほぼ同時にバシッと気持ちのいい音が俺の耳に飛び込んでくる。そしてゴロゴロと転がって行く声の主。周りからはおおくと野郎どもの感心したような歓声、少し遠くからきやーきやーと黄色い声援も聞こえる。

「あっ? えっ?」

急展開した状況について行けず、先ほどとは違う狼狽をする俺。

「十八! 大丈夫か?」

ゴロゴロしてた奴がひどく慌てた様子で俺に詰め寄って来る。瞬だった。

「あつ、ああ。大丈夫、大丈夫、ありがとう」

その瞬の顔を見て俺はようやく安堵する。

今はE組との合同体育の授業中。昼休みを終えたばかりの五限目である。授業内容はグラウンドでの試合形式の野球。今は守備で俺の守備位置はライト、比較的ひまな守備位置という事もあるが、ピッチャーの好投のお陰で本当にひまだった。さっきまでの生徒会長室での余韻を引きずりまくったというのもあるが、ぼく……って立って考え事をしていた俺はライト強襲の痛烈ライナーに……ってあれっ？

「ピッチャーってお前じゃなかったっけ？」

瞬に訊く。俺の記憶が確かなら好投を見せていたピッチャーは瞬だった筈だ。その瞬が投げたボールを打たれたのに、どうして外野にいる俺が直撃しそうになったライナーをダイビングキャッチ出来るんだ？

「ああ、すまん。ライトには絶対に打たせない筈だったんだが、ちよつとSFFスプリットフィンガーファストボールの練習をしていたらすっぽ抜けて打たれちゃった……間に合って良かったよ」

おいおい。そんなメジャーリーグで主流になってる変化球の練習を授業中にやるなよ。だいたい野球部でもないのに今まで野球部も混ざっているE組打線にかすらせもしなかったじゃないか。俺のツッコミ普通に返してるし。本当に瞬の運動神経は常軌を逸脱している。この規格外完璧超人めっ。

「まあ、もう打たせないから安心しろ」

そう言つと、ふわっさあっと長めの茶髪を翻しながらマウンドに戻る瞬。周りからは尚も続く歓声。いや、みんな？ 瞬の異常な運

動神経に少しは疑問を持つうね？

……と、それはともかく……その歓声に混ざって聞こえてくる内容が嫌でも頭に入ってくる。

「佐山もすごいけど塩田も本当にしようがない奴だよな」

「まあ塩田だからな。しゃあないって」

後方の球拾い兼ギャラリーの会話。別に俺をはつきりと馬鹿にしている訳ではない。それは俺を知る人にとって常識だった。

俺は運動が出来ない。それはもう酷いもので体育の成績はクラスでも下から数えた方が早い。情けないが俺は運動音痴なのだ。だから体育教師が決めたF組ナインのみんなもあぶれて球拾い兼ギャラリーをしているみんなも不満はあるらしい。瞬だけは別だし、情けない自分は理解しているけど……いたたまれないよ……。

そして放課後。昨日に引き続き今日も一人ではなかった。昨日は違ったけど渉は普段なら部活。瞬もだいたい用事があるか生徒会執行部。実に珍しい事だ。

「今日は生徒会ないんだ？」

昨日の渉に代わり今日は瞬が一緒だった。当然のように隣に並んで歩く瞬に普段との相違を尋ねてみる。

「いや、今日もあるけどバツクれてきた」

いつも通りというか、少し上の空の様子でしれっと答える瞬。

「つて、えっ?」

「お前に話があったからな」

やはりごく自然に普通くにしれっと改まる瞬。瞬がこうして改まって話をしようとするのはちょっと珍しい。いつもの瞬なら大事な話だろうが、引つ張らないと面白くない話だろうがあっさりと言ってしまう奴だ。

「なんの話だよ?」

「うーん……実はな十八。はっきり言うと、俺は怒っているわけよ」

あくまでいつも通りに普通な口調と態度で言う瞬。怒っている?瞬が俺に対してはつきりとマイナス感情を示すのはやはり珍しい……いや、たぶん初めてだ。

「怒っているって、俺に?」

全くもって身に覚えがないが訊いてみる。

「いや、お前もそうだけど、お前だけじゃないよ」

????

「……なんだよ、はっきり言えよ」

意味が分からない。瞬らしくない引つ張った言い方も含めて少し苛ついてしまう。

「昼休みの件だよ。俺は十八と刹那に怒っているんだ」

「えっ？」

瞬の言葉をすぐ理解できない俺は足を止めてしまう。並んで歩いていた瞬も足を止める。そして俺に向き直り、少し真剣な表情で俺を見据えた瞬は口を開く。

「お前らなんなんだよ……十八の『あれ』が原因なのはわかる。……でもおかしいだろ？ あれだけ仲のよかった二人だったのに、昼休みなんて知らねえ奴同士みたいだったじゃねえか」

「……………」

せつちゃんとの事を言われたのもあるが、瞬の口から出た『あれ』という言葉に嫌でも意識が持つて行かれる。

頭の中に煉獄と化した忌まわしい記憶の連鎖が始まる。

目眩がする。

吐気がする。

血の気が失せる。

体が震える。

……瞬の言った『あれ』。その内容は俺を知る人全てにとって禁句だった。

俺と瞬なら『あれ』だけで通じてしまう事。

俺の過去。大切だったもの。俺の全てだったもの。俺が好きだったもの。取り返せないもの。

『あれ』だけで伝わってしまう事も……俺には重すぎる事だとい
うのも……瞬は知っている筈だ。

「すまん……簡単に引き合いに出すような事じゃないのはわかって
る。でも、事実だ。その事をわかった上での話なんだよ」

途端に気分の沈んだ俺を氣遣うように言う瞬。その瞬の表情を見
て少しだけ俺の心が浮き上がる。俺を氣遣ってくれる人の事を思う
事で記憶の連鎖が緩む。

「……ああ」

わかってる、と言わんばかりに気のないような相槌を返す。正直、
沈みきった心のサルベージが済んでいないが続くであろう瞬の話を
聞こうと聴覚に意識を集中させる。

きつと瞬は大切な話をしてくれる筈だから。

「十八、お前……刹那と付き合っちまえ」

.....。

「.....」

考える。

.....。

???

「えっ？ 何？」

意味がわからん。

「だからっ！ お前とっ！ 刹那がっ！ 付き合っちまえて言っ
てんのっ！」

俺と.....？ せつちゃんが.....？ 突き合っ？ いや違っか、付
き合っ？ 付き合っって付き合っって事だよな？ あれっ？ どう
いう意味だっけ？ 確か.....。

「.....って、はあっ！！??？」

「面白い反応するなあ十八。分かったか？ お前と刹那でいい関係
になっちまえての」

さっきまでの真剣な態度を一変させ、にやははと笑いながら言う
瞬。

「なっちまえじゃねえってば！ どうしてだよ？」

ちゃらけたような瞬の態度に少し苛立ちながらもツッコむ。同時に沈んでいた気持ちが一気に浮上してくれた気がする。

「はっはっは。双子の弟である俺が全面的にバックアップしてやるぞっ！ 大船に乗った気持ちでいろ」

もう完全にいつも通りの雰囲気に戻った風な瞬。

「だからどうしてだっけって言うてるだろう？ 俺とせつちゃんが付き合っつて有り得ないだろうが！」

やたらとテンションの高くなってしまった瞬にちよっと必死に反論する。

「十八……」

俺の反論を聞いた瞬間、瞬の表情が真顔に戻る。俺の目をはつきりと見て口を開く。

「十八……お前、無理しすぎなんだよ。昔からそうだったけど、最近は何日に日に酷くなってるぞ？ 思い詰めるような表情が増えてきているぞ？ 気付いてないか？」

瞬は真摯にゆっくりと言う。それを見た俺は何も言えなくなってしまう。

「刹那もそうだ。無理をしている。刹那らしさがどんどん減ってきている。同じ日に生まれて、同じ家に住んでいる姉弟だけ……分かんなくなってきたんだよ、最近さ……どうしてだかわかるか？」

「……………」

瞬の質問には返答できなかった。頭の中に浮かんだ返答はある。

『俺がないから』

瞬が俺に求めた返答は多分これだろう。でも、違う。瞬には悪いがそんなのはただの妄想だ。仮に本当にせつちゃんがある俺という存在を求めていたとしても、それはやはり妄想に過ぎない。

だってそうだろう……遙、もうお前はいないんだから。

瞬が求めるものが昔の俺達なら、俺があがいたところで無駄なんだよ。決定的に足りないものがあるから。

「有り得ない事じゃないんだよ。昼休みにも言ったろ？ 普通の事だって」

返答をしないで沈黙を続ける俺に諭すように言う瞬。

「それともお前は刹那が嫌いなのか？」

「嫌いじゃないよ」

当然、即答する。この質問に対しての沈黙は絶対に嫌だった。

「じゃあ、いいじゃねえか！ 俺に任せろってんだよ！」

そう言いながらガシッと俺の肩に腕を回してくる、表情はもう笑顔だった。瞬は俺を気遣っておどけているのだろう。

隣でおどける瞬に苦笑しながら思う。

瞬、俺だって戻りたいよ……。

また、悪夢を見た。

上体を跳ね起こしてアラームを止める。途端に俺を激しい動悸が襲う。呼吸を繰り返して息を整えようとするが、まだ現実に戻った事に頭がついて来ない。起き掛けの頭でもはつきりと悪夢の内容が浮かび上がる。頭の中に鮮明に残るその内容がフラッシュバックする。うなされたせいだろう、全身汗だくだった。部屋の冷気を受けて体の体温が奪われていくのがわかる。その冷たい空気のお陰で少しずつ落ち着きを取り戻し、安堵のため息を吐く。

いつも見る夢だった……この時ばかりは煩わしい携帯のアラームに感謝したくなる。

もう一度ため息を吐くと立ち上がる、同時に自嘲気味に笑ってしまふ。起きる度のため息を吐いている事に気が付いたからだ。しかし、その自嘲自体も俺が繰り返している習慣だと自覚してしまふ。馬鹿げた常習であると自覚してしまふ。……でも、それでいいとも思ってしまう。

着替えを済ますと足早に玄関に向かう、今日も新聞配達のバイトに出掛ける為だ。寒い、もう秋も終わりに近いのだろう。刺すような冷たい空気に嫌でも体が震えてしまふ。

玄関の引き戸を開け、振り返る。暗くて冷たい廊下の向こうには何も見えない。ただの『黒』があるだけだった。

「……行ってきます……」

黒に吸い込まれた俺の声は独り言に過ぎない。これも馬鹿げた習慣の一つなのだろうか？

定められた作業のように始まる日常。

苦痛ではない。

怠惰なだけだった……。

「おーすっ！ シオっ！」

バイトを終え、いつも通りに登校すると校門をくぐったところで涉に出会す。

「おはよう……」

朝という事もあり、どうしても疲れた挨拶を返してしまう。涉のテンションが高すぎるというのもある。

「あり？ どうしたの？ 元気ないねっ！」

いや、けっこう普通だと思う。涉が元気過ぎるだけ。

「珍しいね、部活？」

遅刻常習犯の渉。朝としては希少な袴にスニーカー姿の渉を見て尋ねてみる。

「まーねっ！ 一年生達を連れて青春のジョギング中だよっ！」

よく見ると渉の後ろには袴スニーカーの大群がスタンバイしていた。みんなぶっちゃんけ勘弁してくれ的な顔をしている。

「ふうん、頑張ってたね」

邪魔しちゃう悪いし、ちょっとめんどくさいので退散する事にする。

「あ、ちよつとっ！ シオっ！ ねえねえねえねえっ！ 一緒に青春しないっ？ 今日だけでもさあっ！」

ウザさMAXでウザイ事を言ってくる渉。一緒に走ろうと言う事なのだろうか？ 誘ってくれるのは嬉しいが、正直、勘弁してほしい。

「いいよ。俺、制服だし、鞆も持ってるし、迷惑掛けるだろうし、剣道部じゃないし、っていうか帰宅部だし」

あくまで淡白に言ってやる。俺には向いてない事をわかってほしい。

「ううむ。ま、いつか。わかったよっ！ 後でねっ！」

一年生達を引き連れ、ぶんぶん両手を振りながら行ってしまっ渉。

「はあ……」

それを見送ると、再びため息を吐いてしまう。元気な涉に疲れるため息ではない。しつこいようだが自嘲のため息である。

「部活、か……」

無意識に呟いてしまった戯事。バイトがあるし、俺には向いていない事は分かっている。運動音痴な俺が運動部なんておこがましいし、文化部だって誰かに迷惑を掛けるに決まってる。俺には過ぎた事だ。

……と、その時目の前が真っ暗になった。両目に暖かな感触。

「だあ〜れだ？」

「……………」

古典的すぎるとか、こんな往来だとか、そんなのはどうでもいい。もう分かっている人もいると思うが、問題は一つ。

「何をやってやがる。キモいわ！ たわけが！」

とりあえずブチキレておく。

「うわぁ！ ひ、酷いわ！」

驚いたような声と共に視界が回復する。振り向くと悲しそうな瞬がきい〜って感じでハンカチを噛んでいた。

「おはよ」

「うん。おはよ」

挨拶を交すと、何事も無かったように校舎に向かう。こんなやりとりはけっこう日常茶飯事だったりする。

「十八。今日からやるぞ」

歩きながら瞬が言う。

「何が？」

「決まってるんだろ？ 刹那だよ刹那！」

少し呆れたように言う瞬、わかってんだろ？とでも言いたそうだが、俺もわかっていて訊いたんだが。

「……ああ、その事、ね」

気のない返事を返しておく。というより俺は本当に気乗りしない。

「なんだよ。やっぱり有り得ない、とか思ってるのか？」

片眉をつり上げて困ったように言う。

「そりゃあ、ね。釣り合わないと思うし、彼女とか付き合つとか、俺にはなんだかよく分かんないよ」

思つ事を素直に言う。俺の知る限り完璧、非の打ち所のないせつちゃん。何の取り柄も無い、むしろ誰よりも劣る俺がせつちゃん、いや、誰かと付き合うなんて馬鹿馬鹿しい。

「お前……やっぱり俺と？」

一瞬だけ悲しそうに表情を歪めたようにも見えだが、驚いたように、いや、嬉しそうに言う瞬（）。背中の辺りがぞくりとした。

「……はあ、お前もそれさえなければ完璧なんだけどなあ……」

もはや慣れっこな俺だった。

昼休み。

昼休み開始からしばらく経ってしまった頃、俺と瞬は二人で時計棟に来ていた。教室を出る時に涉を撒くのに時間が掛かり、少し時間を無駄にしまったからだだった。なんでも瞬の権限でも時計棟に招待出来る生徒は一人だけなのだそうだ。

「刹那、入るぞ？」

ノックの後、そう言いながら生徒会長室の扉を開ける瞬。俺は借りてきた猫みたいにおとなしくしておく。

「はあ……遅かったのね」

俺達、いや、俺を見たせつちゃんはずごとらしくため息を吐くと、
そう言う。せつちゃんも瞬に何か言われて仕方なく俺と会っている
のだと思う。

「今日は天気いいし、屋上行くか？」

瞬がせつちゃんに言う。屋上？

「そうね」

気のないような返事を返すせつちゃん。明らかに面倒くさそうな
様子だ。

「瞬、屋上って？」

せつちゃんに気を遣いながら瞬に尋ねる。

「ああ、ここの屋上の事だよ。二階建ての校舎の屋上だから低いし
狭いけど、俺達の専用なんだよ。まあ、とりあえず行ってみような」

にやははと笑いながら能天気と言う瞬。三人の中で唯一楽しそう
である。

「時間、無くなるわよ」

既に会長室を出ようとしているせつちゃん。煩わしそうに俺達を
促していた。

せつちゃんの先導で屋上に向かう。

無感情というか、厄介事に巻き込まれたように煩わしそうなせつちゃん。せつちゃんは噛み合ってくれないみたいだが、一人で場を和ませようと明るく振る舞う瞬。場違いな俺……。

昔とは違う。

でも、懐かしい気持ちになってしまふ。五年前には当たり前前の構図だった。

待ってっ！

振り返る。

誰もいなかった。いる筈がない……。

「十八？」

瞬が訝しげな表情で俺を待ってくれていた。

「ああ、悪い」

せつちゃんは俺を振り返る事なく屋上への階段に消えてしまった。胸の奥がチクリとした。

何やら気まずそうな瞬と共に後に続く。瞬は本当にいい奴だと思

った。せつちゃんは……いや、やめよう。俺がどう思つとか馬鹿げている。

屋上は意外にも広かった。二階建てという事もあってか、一二年校舎の屋上と比べてフェンスが低いからだろう。面積自体は狭く教室二つ分程度だが、見渡す空の面積が広いせいか広々している。中央にそびえるくそ高い時計塔も何だかいい雰囲気だ。

「十八。こつちこつち」

屋上の片隅で瞬が呼ぶ。瞬のいる所には何故かパラソル付きのテーブルセットが常設されていた。せつちゃんは既にそのテーブルに着いている。どうやら今日はあそこで昼食と洒落こむらしい。

三人、席に着いて弁当を広げる。

「い、いただきます……」

俺。

「いただきます！」

瞬。

「ふ……いただきます」

せつちゃん。

っていつか今、鼻で笑わなかったか？

一人黙々と食べ始めるせつちゃん……流石の瞬も顔を引きつらせている。雰囲気は……なんとも重苦しい。快晴の青空の下で食べる昼食はちつとも爽やかじゃなかった。

「えー、コホン。刹那、何か喋れ」

わざとらしく咳払いをするとせつちゃんにももの申す瞬。

「……………」

ぴたりと箸を止めるせつちゃん。何故か瞬ではなく俺を一瞥してから口を開く。

「いつまでこんな茶番を続ければ気が済むのかしら？」

発した言葉は冷たかった。綺麗な声だから余計に冷たく感じてしまった。瞬に向けられた言葉だが、俺は居た堪れなくて俯いてしまっ。

「茶番って……おい、刹那」

意外だったのか、困惑したように言う瞬。

「何をやらせたいのかわからないけど、あまり下らない事に私を付き合わせないでほしいわ」

淡々とした口調ではつきりと言っせつちゃん。

そりゃそうだ。俺でさえこの状況に疑問を感じているのに、せつちゃんにしたら迷惑極まりない厄介事に過ぎないだろう。

「おい！ 刹」

「瞬！！」

声を荒げようとした瞬を制止する。

「……十、八？」

「いいんだ、瞬。えっと……佐山、さん……ごめんね。俺、もう来ないからさ……」

せつちゃん、とは言えなかった。俺が知ってるのはせつちゃん。

今、目の前にいるのは佐山刹那さん。

それでいい。

「おい！ 十八っ！」

瞬の怒声。表情は悲しそうだ。

「はは、いいじゃん。元々俺は執行部じゃないし、佐山さんも、迷惑、みたいだし……。明日も弁当作って来るからさ、渉と三人で教室で食べよう？ なっ？ それでいいじゃん」

御免だった。目の前でせつちゃんと瞬が喧嘩してるのなんか見たくなかった。俺の中の思い出が壊れるのが嫌だった。

「十八……」

悲しそうに唇を噛む瞬。きつと俺の心の内を察してくれているの
だろう。

「さっ。とりあえず食べよう？ 昼休み終わっちゃっよ」

なるべく明るい声で言う。

「……ごめんな、十八……」

そう言うのと瞬は黙って食べ始める。俺が口を挟んだ時から終始無
言だったせつちゃんも食べるのを再開してみたみたいだ。

そっだ、これでいいんだ……。

三人で座っているテーブル。四人掛けだった。

空いている席を見て思う。

これで……よかったんだよな……？

かちやかちやと食器同士が重なる音とざぶざぶと水の流れる音。

leafでバイト中の俺は永島さんと食器を洗っていた。leafはカクテルバーも兼ねているレストランの為、食器の量が物凄い。しかし悲しいかな完全アナログ制のleaf、食器乾燥機すら無い。永島さんと二人で雑談しながらもこなしているわけだが、けっこう大変である。

「塩田あ、聞いてつかあ？」

「えっ？ あっ、はい。えっと、そのテロリストに占拠された豪華客船からどうやって脱出したんですか？」

いろいろツツコミ所満載な永島さんの話だが続きを求めてみる。

「おお、いやよお。そのテロリストの連中の一人によお。なんか10才くらいの外国人のガキの女がいてよお。そのガキのが何故か協力してくれてよお。ソイツのお陰でどうにか脱出したってわけよお」

「へ、へえー」

すごい設定だ。

「いやあ、流石に死ぬかと思っただぜえ。ようは裏切り者のそのガキを守りながらテロリストの連中と戦ってよお。丸腰の俺に対して向こうは軍隊以上のフル装備だったんだぜえ？ 20人くらいいたん

だぜえ？」

「は、はあ……」

「最後なんか燃え盛る船の甲板からガキ抱えて飛び降りてよお。絶体絶命の状況でよお。クソでつけえ船だから20メートルくれえあんだよ。下が海だつて分かっててもおっかなかつたぜえ……その後軍隊の船に拾われて、どうにかつて感じだよお……」

話を切ると昔を懐かしむように斜め上に向かってうんうん言う永島さん。なんでも今の話は永島さんが高校生の時の話らしい。話だけ聞くと昨日見た映画の解説を聞いたような気分だった。

「中々面白かつたすよ。じゃあ俺は上がるつす」

永島さんの話が終わると同時に食器は洗い終わっていた。時間は十時過ぎ、バイトの時間も丁度終わりの時間なので上がらせてもらう事にした。

「おお、もうそんな時間かあ。いいぞお、あがつちまえ。今日もお疲れだなあ」

永島さんも軽いノリで労ってくれた。

「はい。お先に失礼します」

俺も笑顔を返して、厨房を後にしようと踵を返した時。

「塩田あ……おめえ……何かあつたかあ？」

「えっ？」

永島さんの意外な言葉に振り返ると、心配そうな表情の永島さんが俺の顔を窺っていた。

「今日よお、ずっと気になってたけどよお。おめえ顔色悪いぞお。大丈夫かあ？」

「い、いや。何も無いっすよ。普通っす」

俺は慌てて取り繕う。

正直、永島さんが何を言っているのかわからなかった。しかし、俺を心配する人に指摘されただけで、自分自身の情けなさが晒け出された気分になる。

「まあいいか、あんまり無理すんじゃねえぞお？ 一人で抱え込むとろくな事ねえぞお？」

「……は、い。お疲れ様でした……」

項垂れたまま、leafを出る。永島さんの言葉が胸に突き刺さった気分だった。見透かされてしまったようで酷く恥ずかしかった。

駅前の片隅に位置するleaf、もう夜も遅いせいだろう……静かだった。

「十八」

俺を呼ぶ声に顔を上げる……瞬がいた。

瞬に会って。瞬の表情を見て。

……俺の心が露呈した。

自分ですら気付かなかった馬鹿げた被害妄想であったと実感する。

昼休み……時計棟での一件以来、瞬とまともに会話をしていない。放課後だって、瞬が生徒会なのをいいことに逃げ出した。瞬と顔を合わせるのが嫌で終業のチャイムと同時に教室から逃げ出した。せつちゃんの手前だからって都合のいい事を言って取り繕った。瞬の行為を無下にしたんだ。

いや、違う。さっきから自分でわかっているじゃないか。

茶番、下らない事、俺の事……。

俺はせつちゃん言葉に憔悴していたんだ。どんなに隔たりがあったとしても彼女は俺の大切な人の一人だった。その大切な人の言葉が痛かったんだ。被害妄想も甚だしい。

「お疲れ様」

「……ああ」

瞬と目が合わせられない。

「十八。……その、悪かったな……。俺、少しお節介で、無責任だったよ……」

酷く顔を歪め、申し訳なさそうに言う。

「……ああ」

そんな事ない。俺が悪かったんだ。しょうがないよ。ありがとう。言いたい事の全てが出て来なかった。自分の発する言葉全てが酷く恥ずかしく思えてしまう。

「帰るか？」

「……ああ」

結局、二人で家路を辿る事になった。今日も俺の家に泊まるつもりなんだろう。たぶん俺を気遣つての事。

無言で並んで歩く俺達。

瞬。俺の友達、親友。せつちゃんの弟。恐らく俺を一番気遣つてくれている奴。俺が生まれてから一番一緒に時間を共有している奴。せつちゃんを気遣っている奴。俺と同じように五年前のみんなの関係を大切に思ってくれている奴。

せつちゃん。俺の友達、だった人。親友、だった人。五年前までは瞬よりも同じ時間を共有していた人。瞬が気遣う人。……俺が気遣う人。

彼女にとって五年前の思い出はなんなのだろうか……。

次の日。

「おっはよおっ！」

「……………」

突然の挨拶への反応は無い。挨拶の声は教室の入り口で声の主は
渉へんたいだった。

「なんだよー。みんな冷たいなあっ！ シオっ！ おはようっ！」

自分の席に向かう途中に俺に再び挨拶する渉へんたい。

「いや、うん、おはようなんだけど…………いや、おはようっていつか
……………」

「山崎君。挨拶はとても大切な事ですが、今は授業中です。もう少し
皆さんに気を遣って下さい」

そう、徳川先生の言う通り、今は数学の授業中である。まだ一限
目だが渉へんたいは全開で遅刻である。

「あつ、うんっ！ そうだよねっ！ みんなごめんねっ！ でもさっ！ 俺ってば偉くないっ？ いつもならもうちよい寝ちやうトコだけど、志乃先生の授業であゝって思ってたさっ！ 頑張ってるんだよっ？」

宇宙レベルのアホだと思った。

「それは……ありがとうございます」

徳川先生は普通に照れてるし。

「いいから席に着いて黙れ」

照れてる先生の代わりに隣の隣の隣が渉へんたいを促す。

「あつ。ごめんごめんっ！ っつーかシオっ！ 渉へんたいって書いてへんたいつて読まないよっ！」

席に着く前に俺にももの申す渉へんたい。

「えっ？」

「さっきからぶつぶつ聞こえてるしっ！」

どうやら声に出していたらしい……。

昼休み。今日は昨日の宣言通り、瞬と渉と俺の三人で弁当を囲む事になった。もちろん場所は時計棟ではない、教室である。

「シオっ！ 美味しいねっ！ 美味しいよっ！」

「あ、ああ。ありがとう」

いつもの事だが、渉は超ハイテンションだ。俺の作って来た粗末な弁当を満面の笑みで食べてくれている。瞬も同じだった。

同じように友達同士で食べているクラスメイト達。教室、俺のいてもいい場所。うん、大丈夫そうかな……誰にも迷惑掛けてなさそうだ。

そっだ。

俺の日常。

瞬と渉には悪いが、これでいい。

「シオっ？」

「えっ？」

声に反応し、顔を上げると二人とも俺を心配そうに見ていた。

「シオ………どうしたの？ 大丈夫？」

食べるのを中断し、眉をまわめ、自分自身に降り掛かった痛みを堪えるように俺を窺う渉。俺を心から心配してくれているように見える。

「い、いや……」

何も言えない……。酷く後ろめたい気持ちになる。渉の顔が見れない。隣にいる瞬の視線が酷く気になってしまう。

恐らく原因であろう昨日の一件……瞬ならば仕方がない。しかし、何も知らない筈の昨日の永島さん。永島さんに続き渉。

俺はわかりやすいのだろうか？

「渉、十八は疲れてるんだよ。早朝のバイトの後に俺達の弁当を作ってくれたんだぞ？ 疲れてるに決まってるだろ？」

口を閉ざす俺の代わりに渉をたしなめる瞬。いや、俺を気遣い、吐かなくてもいい嘘を吐く瞬。

「そ、そっか。ごめんねっ！ うん。いや、そうだよねっ！ いやっ！ ……ごめん」

違う。謝ってほしくなんかない。俺がうじうじとしているのが悪いに決まっている。謝るのは俺なのに。

「わた」

「十八っ！ 渉っ！」

渉に謝罪しようとした俺を遮るように瞬が言う。

「合コンだ」

「えっ？」

「??？」

「「えっ？」」

「合コンするぞ。俺が綺麗どころとの合コンを企画してやる」

「はあ？」

「マジくわあっ!! マジなのくわあっ!!」

いきなり何を言い出すのかとツッコもうとすると、今度は渉が俺を遮るように身を乗り出してくる。っていつか目が血走ってるし。

「いつだっ！ いつなんだっ！ 瞬っ！ 瞬っ！ 瞬っばさっ！」

くわっと思を見開いて瞬に覆い被さる勢いの渉。ハアハアしてるし、ちよっと引いた。

「あ、ああ。ちよっと落ち着けよ！ 近いウチにっ感じてだけどさ……」

渉のあまりの勢いに流石の瞬もたじたじになっている。俺はなんとなく一歩引いたまんま。

「ど、とにかく！ 合コンやるぞ！ いいな？」

何か無理やり締めようとする瞬。

「十八もいいな？」

「お、俺は……」

「強制！」

いいよ。って言わせてくれなかった。

何故だか長く感じた学校を終え、日没がすっかり早くなってしまった夕暮れの町を歩く。

一人だった。

瞬は生徒会、渉は部活、他に俺と一緒に帰るような奇特なヤツはいない……。

町を包む赤は綺麗だった。低い太陽に照らされる町は何故だか懐かしい。

赤く染まる道路。踏みしめる足で辿る。長く伸びた影も俺に追いつかんばかりに辿る。

紅く染まる街路樹。木の匂いは冬であっても鼻孔を撥ってくれる事に気付く。

緋く染まる空。昼と夜のグラデーシヨンのようなコントラストに目を奪われる。

朱く染まる俺。

「……………」

……異物、そう思った。綺麗な町を汚している気がした。

足を止める。

沈む太陽が山際に吸い込まれるところだった。俺は思わず目を奪われる。

ゆっくり、ゆっくり、けど確実に吸い込まれて行く太陽。

足掻いているように見えた。どうしようも無い事に必死に抗っているように見えた。無理なのに馬鹿みたいにもがいているように見えた。

……俺と同じだ。

町を彩る『あか』のように……。
町に残る『おれ』のように……。

すぐに黒く塗り潰されるのをわかっているのに……足掻く。

「……………」

馬鹿馬鹿しい。ふと考えていた事がとてつもなく馬鹿らしい事に気付く。

自嘲気味に笑つと視線を辿るべき家路に戻す。

……太陽が沈む瞬間は見たくなかった。

「えっ？」

思わず声を上げてしまった。

赤く染まる道路には先ほどまで無かった『あか』が存在していた。ついさっきまで見惚れていた『あか』達が霞んでしまっ『あか』が存在していた。

「塩田十八」

その存在が何か音を発した。俺は反応出来ない。

「第十六期生徒会執行部会長、佐山刹那が申し上げます。2年F組塩田十八の生徒会執行部への出向を命じます」

「あつ、えっ？」

必死について来ようとする思考だが音の意味が理解出来ない。

せつちゃん？ 夕暮れの赤に染まる存在は間違いなくせつちゃんだった。

「これは生徒会長権限を行使した決定事項です。拒否は許されません。明朝8時、時計棟二階生徒会長室にて正式に勅命致します。欠席は許されません、遅刻も許されません。……以上です」

捲し立てるようにそう言うと、俺の脇をすり抜けて行く。真顔のまま、俺と目を合わせる事も無い。

俺は固まってしまっていた。彼女を視線で追う事も出来なかった。

辺りが黒く塗り潰されて行く。

光を失って行く。

でも……。

思っていたよりも寂しさは感じなかった。

玄関を開けると眩しい朝日が歓迎してくれた。

冷たい空気のお陰だろうか、抜けるような青空。曇ひとつ無く、際限なく広がる水色は何処か優しく感じた。

俺は毎朝、余裕を持って家を出るようにしている。だからいつも通学路はゆっくり歩く事になっていた。いつもより少しだけ早い時間。今までと同じように急ぐ必要は全く無い、8時には十分間に合うだろう。しかし何故だろう……俺の足は逸っていた。

今日は一人だった。瞬は昨日、泊まりに来ていない。見慣れた景色が過ぎ去って行く。代わり映えない景色。……今日は違った……今日の景色は何故だか新鮮だった。初めて通るような通学路。例えるなら入学式に向かう新鮮さだった。

何故？

理由は……せつちゃん。やはり彼女のお陰だろう。

生徒会執行部への出向。はっきり言って意味がわからない。俺が入部するという事なのだろうか？

彼女の真意はわからない。でも、彼女が俺に歩み寄ってくれた事が嬉しかった。小学校卒業以来、お互いに距離を置いて来た俺達。彼女からまともに声を掛けられたのは実に五年振りだった。勅命とか言っていたが、どうなるかはわからない。正直、そんなのはどう

でもいい。

今日ほど軽い気持ちで登校するのは初めてだった。

クズ校のシンボルのひとつである時計棟校舎の時計塔。全高46メートル、東西南北に設置された大時計は長針1メートル以上、短針80センチ以上で直径は3メートル近い。見上げるとそうでは無いが、めっちゃくちゃでっかい。

一応呼び出されたわけだから堂々と入っていい筈なのだが、何とも近寄りがたい。その時計塔を見上げたまま、アホみたいに立ち尽くしてしまう。

「……………塩田……………」

「ふえっ？」

突然の声。俺を呼ぶ女の子の小さな声。あまりに予想外であった為、俺は間抜けな声を出して視線を移す。

「……………」

じい〜

既視感に近い感覚を覚える。長い前髪越しの視線。いつかの似たような状況を思い出してしまう。

「あ、あの？」

視線に耐えきれなくなって尋ねてみる。その子、名前は確か海老原曜子さん。

「……………こつち……………」

俺の声を聞くと、そう言いながら時計棟の中に歩いて行ってしまふ。ついて来いという事だろう。

海老原さんの先導で時計棟の廊下を歩く。行き先は恐らく生徒会長室。やはり海老原さんは案内役として声を掛けてくれたらしい。

なんだろう……………連行されてるみたいで落ち着かない。緊張してきてしまった。

コンコン

海老原さんが生徒会長室の扉をノックする。激しくなる心臓の鼓動……………やっぱり緊張する。

「……………失礼します……………」

小さな声と共に入室する海老原さん、に隠れながら俺も続く。

２メートルはある長机、そんなこたあわかつてるって感じの『生徒会長』のプレート、ノートパソコン、積まれた書類、それらが置

かれた机の向こうに座る彼女、佐山刹那、無表情で俺を見つめていた。

「おはようございます」

無表情のまま朝の挨拶をするせつちゃん。斜め後ろにはいつの間にか海老原さんが秘書のように控えていた。

「お、おはよう」

条件反射的に挨拶を返す。するとせつちゃんは少し不愉快そうに顔をしかめた。

「……まあ、いいわ。早速ですが本題に入ります。曜子」

僅かに顔をしかめた後、海老原さんに何やらを促すせつちゃん。

「……はい……塩田十八……2年F組、出席番号9番……保健委員、体育委員、美化委員、他所属委員多数……ほぼ全ての生徒会管轄外の……委員会に所属している……」

???

「えっ？ えっ？」

「……部活動無所属……成績は平均……一学期末考査結果、二年生520人中226位……運動系の授業でも、特に目立った結果は……残していない……家族は居らず一人暮らし……後見人による援助は無く……朝晩のアルバイトと祖父の遺した遺産で生活費を工面している……交友関係は同F組の佐山瞬……同じくF組の山崎渉……」

異性の友人及び恋人は、いない……以上……」

「ち、ちよっと?」

何なんだ? 海老原さんが淡々と読み上げたのは俺のけっこう深いところのプロフィールだった。別にいいっちゃいいが一応ツッコむ。

「はあ……」

俺のツッコミに対しての返答は何とも嫌味つたらしいせつちゃんのため息だった。

「塩田十八。あなたの罪状は三つです」

????

「えっ? ざ、罪状?」

激しく意味がわからん。

「一つはアルバイトの件、早朝の新聞配達はともかく夕方からのレストラン。えー、leafですね。ここは未成年の、しかも高校生のアルバイトとしてはあまりにも好ましくない場所であると判断します」

手元にある資料らしき紙をぺらぺら捲りながら言うせつちゃん。

「二つ目は家族構成の件。後見人の存在はあるようですが、調査した結果によるとほとんど見放されている状態。まともに就職してい

ない高校生である以上は公の施設などのお世話にならなくてはいけない……わかりますね？」

「……………」

俺は何も答えない。彼女が無表情で発する言葉に酷く悲しい気分になる。せつちゃんがずっと遠い所に行ってしまったような寂しさを覚える……。

「……………最後の三つ目」

彼女が続ける言葉に耳を傾けるが、なんだかもうどうでもいい。

「……………いい加減、忘れなさい……………」

「……………えっ？」

呆気に取られた。

彼女の声のトーンが著しく変わっていた。優しく諭すような暖かい声に変わっていた。彼女の表情が変わっていた。眉をまわめ、苦しそくに顔を歪めていた。問掛けられた内容を頭の中で繰り返し返された。

忘れる？ ……『あれ』を？

「……………以上の罪状により、塩田十八の生徒会執行部への出向を命じます。……………何か意見や質問は？」

体も思考も固まったまま、彼女の声を聞こうとするが全くついて

いけない。彼女の声のトーンは元に戻っていた。

「い、いや、あの?」

わからない。

「よろしいですね。では下がって頂いてけっこうです。放課後にもう一度ここに来て下さい」

「い、いや。だから……さ、佐山さ」

「黙りなさい!! 下がっていいと言った筈です!!」

あわわわ。絶句。半端じゃなく怖い。

結局、追い出されてしまった。

気の抜けたような足取りで教室に向かう。そして、考える。

彼女がわからない。いったい俺に何をやらせたいのか。彼女は罪と言った。バイト、俺の生活……そして……はつきりと口にした訳ではない。でも彼女が忘れろと言った事は『あれ』だろう。

……忘れられる訳がないじゃないか。

「十八! 十八っ!」

もうすぐ教室という所で声が掛かる、瞬だ。

「おはよう。瞬」

とりあえず挨拶。

「おま あ、うん。おはよう……って、それよりも十八！ お前、執行部に入るって？」

瞬にしては珍しく酷く取り乱した様子である。

「ああ。なんだかそういう事になっちゃったよ」

「おいおい。意味がわかんねえよ、刹那に言われたんだろ？」

「そっだよ」

肯定すると、瞬は疲れたようにため息を吐く。そして肩をすくめながら言う。

「……あいつ。十八はそれでいいのか？」

生徒会執行部に入ってしまった方がいいのかという事だろう。正直、あまり考えていない。ほとんど成り行きに任せて話が進んでしまったからである。それに……。

「拒否権は無いらしい」

苦笑混じりの俺の言葉に瞬はがっくりと頭を押さえながらため息

を吐く。やっちゃった、って感じ。

「まあ、もうしょうがないな。でも、俺としては正直嬉しいよ。男手が足りなかったのもあるけど、十八が入部してくれるなんてな」

そう言つと瞬も諦めたような苦笑と共に言つ。

「ああ。まあよろしく」

俺も同じような苦笑で笑いながら返す。

「おう」

そして。

「……という訳で、今日付けで執行部入りとなった塩田十八君」

放課後、俺は瞬と共に再び生徒会長室に来ていた。会長室には見た事ある人達が集まっていて、誰もが好奇の視線を俺に向けていた。

「あ、えーと2年F組の塩田十八です。よろしくお願いします」

せつちゃんに促されるまま、とりあえず自己紹介してみる。

「私と瞬はいいわね。みんなも自己紹介してあげて」

せつちゃんが俺と同じようにみんなに自己紹介を促す。気のせいかもしれないけど、ちょっと楽しそう？

「……私から……？ ……2年E組……海老原、曜子……書記……
よろしく……」

じい〜

例の如く凝視される。

「よ、よろしく」

カクン

と頷く海老原さん、相槌なのだろう。

「次はルナです。1年A組の毬谷るなです。会計やってるです。よろしくです！」

はきはきと自己紹介を言う、『よろしくです』の辺りで満面の笑みで笑ってくれた。かわいい。

「よろしくね？」

「はい！」

満面の笑顔のまま、元気に返事を返してくれた。……かぁいい。

「同じくA組、進藤円、会計監査」

続いた自己紹介に視線を移す……と、毬谷さんの笑顔の余韻でにやけた俺の顔が引きつる。隣の進藤さんは明らかに俺を嫌そうに見ていた。光の加減なのか眼鏡の奥が見えないから余計に怖い。……俺ってまた調子に乗った？

「次、橋だろ？ 自己紹介」

更に隣の橋さんが自己紹介を始めないので瞬が促す。

「ちつ。橋巴、A組、会計監査」

舌打ちされた。しかも、自己紹介もすんごい面倒くさそうに言われた。どうやらコイツには嫌われてしまったらしい。

「なんだよ？ 先輩。何か文句あんのか？」

思わず見てしまった俺の視線が不快だったのか、橋さんは喧嘩腰。食堂の時もそうだったがコイツはかなりの短気かもしれない。

流石にカツチンときた。

「別に。君さ、いつもそうなの？ 感情でばっかり動いていると満足できるのは自分だけだよ？ 少しは君の起こすトラブルで周りにどれだけ迷惑掛けてるか知ろうね？」

一般的解釈でおよそ間違っではないのであるう常識を言ってやる。っていうか言っただけあげないといけないだろ、先輩として。

「なっ！ なんだとお！ こんの野郎っ！ アッタマ来た！

アツタマ来た！ アツタマ来たああ！！」

うきーって感じで激昂する橘さん。

「トモちゃん！ だめだよっ！」

すかさず毬谷さんが止めに入る。

「でもよ！ ルナっ！ こんのイカ野郎っ！ アツタマ来んじゃねえか！」

引く気ゼロの橘さん。

「橘！ やめなさい！」

せつちゃんの声も掛かる。

「あ……会長、すみません……」

はっとしたように怒りを抑える橘さん。どうやらせつちゃんに逆らう気は無いみたいだ。

「塩田十八もあまり余計な事を言わないように」

確かに余計だったかもしれない。少なくとも今言うべきではなかった事だろう。

「ああ、ごめん」

「まあいいわ。私と瞬を含めた以上が第十六期生徒会執行部よ。生

徒会顧問は数学の徳川先生よ」

「??？」

「えっ？　これだけ？」

六人？　俺を入れたとしても七人？　クズ校の生徒数は1500人なんだぞ？

「会長の方針でさ、少数精鋭なんだってさ。まあでも、男子加入はやっぱ嬉しいよ。十八」

笑顔の瞬が言う。

「執行部の他にも生徒会はあるわ。生徒会風紀委員会……生徒会図書委員会……私も詳しくは知らないけど生徒会暗部なんていう怪しいのもあるわ」

せつちゃんが補足する。

「ぶ、ふうん……」

詳しくはわからないけど、確か青葉先輩の時は50人位いた気がする。いいんだろうか？

「あ、あ、あ」

話が切れたのを見計らったように毬谷さんが小さく手を挙げた。

「どっつしたの？」

優しい声で訊くせつちゃん。明らかに毬谷さんには扱いが優しい。まあそうなる気持ちはわかるけど。

「塩田先輩の役職は何になるですか？」

役職？

「そうだな、十八。例えば俺なら副会長だろ？ 執行部に所属する以上、必ず何かしらの役職に携わる必要があるんだ」

首を傾げる俺を見て瞬が教えてくれた。

「そうね。塩田十八は成績も並だし、パソコン使えるようにも見えないし、交友関係が幅広い訳でも無いし……」

そう言うのと、哀れむように俺を見るせつちゃん。

「えっ？」

「あ、いや！ 十八は料理が出来るぞっ！」

呆気に取られる俺の代わりに瞬の必死そうなフォローが入る。

「いや、料理は生徒会には必要ないわ……」

疲れたようにツツコむせつちゃん。……って酷いっ！ とんだお荷物扱いじゃなか！ 云わばこれってヘッドハンティングだろ？

「違うのか？」

「い、いや、何が違うっていのよ」

思わずツッコんでしまったせつちゃんは軽く驚いた様子で俺から後退る。そのまま周りのみんなも哀れむような視線を俺に寄せす。ちなみに瞬もっ！

つて、えっ？

何？ この状況……。

「どうしようです」

堪り兼ねたように毬谷さんが口を開く。

「……………」

みんな沈黙。

超絶に居た堪れない。

「……………会長補佐。確か何期前かの執行部に会長の補佐役職があった筈だわ。仕方ないわね……………それで行きましょう」

若干投遣りな感じで言うせつちゃん。

「……………秘書役……………つて、感じ……………？」

静かにツッコむ海老原さん。その声に俺を含めた全員がせつちゃんに注目する。

「あつ、何かそれヤダ。塩田十八は素行不良として執行部で接收した生徒よ。しょうがないから役職は会長補佐で落ち着くとしても、扱いは雑用ね。執行部のみんなの雑用。はい決定！」

あつさり秘書役を否定するせつちゃん。っていうかなんか酷い。

「とにかくそういう事よ。長くなってしまったけど塩田十八の加入挨拶はここまでね。みんなは今日の分の仕事に戻ってけっこう。はい解散」

俺の意見を言う機会は与えられず、場を締めてしまったせつちゃん。周りのみんなも特にいらしく次々と会長室を後にしようとする。

……何か言いたいけど何も言えない。

「ではせんぱい。またです」

会長室を出る前に声を掛けてくれた毬谷さん。やはりかわいい笑顔付きである。

「あつ、うん。またね」

俺も笑顔で返す。更なる笑顔と共に会長室を出ていく毬谷さん。

……の脇の粘着質なジト目が二つ残っていた。

「ふ……」

ジト目のまま鼻で笑ってから毬谷さんに続く進藤さん。

「アンタ、覚えとけよな」

ジト目から攻撃的な視線に変え、嫌な言葉を残して毬谷さんに続く橘さん。

「……………」

なんともやるせない。確かに言い過ぎだし、毬谷さんに少しでもつとしたけど、酷いなあ。

「……………塩田……………」

「えっ？ あっ、海老原さん」

一年生二人の非難に頂垂れようとすると背後から、それもスツゴに近い所から声が掛かった。振り返ると超至近距離に海老原さんが立っていた。

「……………わからない事……………聞いて……………？」

「えっ？ あっ、うん。助かるよ」

「……………じゃ……………」

会長室から出ていく海老原さん。……………一番わからないのは海老原さんかもしれない。

「塩田十八。今日は帰って構わないから出て行ってほしいわ。私も仕事に戻りたいの」

せつちゃんの声。声の方を向くと、既にデかい机に座ってパソコンのキーボードを叩いていた。視線を俺に向ける事はない。俺の後ろ、扉の近くから瞬のため息が聞こえる。

「い、いめん」

すぐに出て行こうと扉に手を掛ける。その前に。

「佐山さん、またね」

再会の挨拶をする。

「……………」

無視だった。

扉を開け、瞬と共に会長室を後にする。

「まあ、刹那の事は深く考えるな」

会長室の前、扉を閉めたと同時に瞬が言う。

「ああ」

考えるなつてのは無理がある気もするけど、たぶん瞬の言う通りなんだろう。

「とにかく。おかしな事になっちまったけど……よろしく、な？」

俺の顔色を窺うように、慎重そうに言う瞬。俺を気遣ったの事だろう。

「大丈夫、厄介事だなんて思ってないよ。……よろしくな、瞬」

俺がそう言うと、にーっと顔を綻ばせる瞬。心から嬉しそうだ。

「ああ。楽しくなるといいな！」

言いながら笑顔のまま肩を組んでくる瞬。瞬の嬉しい時の癖だ。

こうして俺の『生徒会執行部』への入部が決定した。

厄介事だなんて少しも思っていない。

俺はこう思っていた。

……また、居場所が出来てしまった、と……。

そう。

生徒会執行部。

この時、俺が予見した通り、俺にとってかけがえの無い『居場所』になる。

そして

心を擦り減らすような

俺の『最後』が始まったんだ

俺は諦念していた。

過去、尊いもの。人が人である為の全てだと言ってもいいと思う。自分の記憶、他人の記憶、使ってきた物、物や人に遺した痕跡、写真、ビデオ、まだまだあるが、全て過去だ。

過去が有るから現在がある。過去が有るから未来がある。過去が有るから希望がある。過去が有るから絶望がある。

過去、変えられないもの。

現在、移ろうもの。

多分。かもしれない。是か非か。否か応か。

誰にもわからない。自分自身だってそう、人の心だって移ろうものの。

未来、想い馳せるもの。

後で、明日、明後日、来月、来年、誰もがそこに望みを掛ける。希望、欲望、志望、願望、要望、抱負、期待、それらが行き着くところ。

……本当に人が人である為に必要なのは未来へ望む心なのだろう

か。

……現在が移ろうのも先に望むものがあるからだろうか。

望むものが無ければ。

行き着く答えを知っていたら。

ただの幻に過ぎない。

俺は諦念していた。

坂を上る。

緩やかな坂道。頂上まで絶え間なく続く桜の木のアーチ。残念ながら今は冬、青く茂る葉も無ければ淡い色で咲く花も無い。ちらほらと残る枯れ葉が少し寂しい。

しかし、周りにはそれを気にしているような人はいない。急いでいるのか駆け上がって行く人。楽しそうに談笑を交す人達。自然と俺の気持ちも軽くなってくれる。同じ目的地を目指して肩を並べて坂を上る、周りの人達と時間を共有している。皆それぞれの幸せや大切なものがあるだろう。その人達と同じ目的を持って一緒に坂を

上るだけで……嬉しい。

俺はおかしいのだろうか……？

「だるうーっ！ だるいよーっ！ シオーっ！」

隣から聞こえてきた声に、いい感じに膨らんでくれてた軽い気持ち
ちが萎れる。

「何だよ渉。朝一からお前らしくないな？」

反対隣から俺越しにツッコミが入る。

「だってさあゝ、毎日毎日、朝から坂を上ってさあゝ、だるいっし
よおっ！」

ほっぺを膨らませてぶんぶんする渉。野郎がそんな顔しても可愛
くもなんともない。

「そんな子供みたいな事言つなよ。しょうがないだろ？ 学校なん
だから」

律儀にも渉のわがままに更にツッコミを入れる瞬。

「わかってるよ。多分みんなが思ってるだろうなああって事を言っ
ただけだよっ！ シオもそう思うっしょ？」

瞬に邪険にされたからか、今度は俺に振ってくる。

「俺は……けっここう好きかも。だって唯一の入り口の正門に続く坂

だろ？ みんな一緒ってなんかいいじゃん。今日なんて、ほら、俺達も三人一緒だぞ」

そう、今日は珍しく坂下寮の前で三人が鉢合わせた。そのまま三人で校門に続く坂を上っていたりする。

「……………」

二人とも俺を見て啞然としている。俺も言ってから気付いたがちとキモかったか？

「うん、いいかも……………」

「十八……………」

啞然とした表情から一変して笑顔になる二人。

えっ？ ……なんだ？

こうして、普段とはちょっとだけ違う形で始まった日常。

でも本当に違う日常はこれからだった。

一時間目、現国。

俺は必死にノートを録っている。勉強は苦手だがサボりは絶対にしない。

じいちゃん。亡くなる前に学校の授業料を卒業まで全て払ってくれている。サボるなんて馬鹿馬鹿しいし、何よりじいちゃんに申し訳ない。身寄りも無く、養ってくれる人もいない俺が就職もしないで学校にこだわる理由の一つがこれだ。

それに授業は嫌いではない。苦手な教科もあるけど勉強自体は好きなので授業は楽しかったりする。

苦手なのは体育。体を動かす事自体は別にいい。しかし、団体でやらなくてはいけないスポーツなどはことごとくみんなの足を引っ張る。ぶっちゃけると俺は運動ができないのだ。球技なんかはもちろん、走るだけでもずっこけまくってしまったりする。情けない……。

と、そこで授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「今日の授業はここまで。ノートは録っておけよ〜」

そう言ってさっさと教室を出て行ってしまおう現国の先生。

ヤバイ。考え事したらノートがまだ録り終わってない。せかせかと黒板写しを再開する。

「塩田十八」

ん？ 今呼ばれたか？ 瞬か？ 女の声だった気もするけど。

必死に走らせていたシャーペンを止め、きよるきよると見回すが瞬は自分の席で寝てるし、渉もどこかに行ってしまったようではないなかつた。

「塩田十八っ！！！」

「ハイッ！！！」

再度聞こえた声に条件反射で勢いよく振り向く。ついでにクラス全員振り向く。

声のした教室の入り口にはせつちゃんが体半分だけ出してオイデオイデしていた。

「せ、せつ、佐山さん。どうしたの？」

急いで駆け寄って訊いてみる。当然、背中にクラス全員の視線が突き刺さってくる。

「塩田十八……あなたは雑用なのよ。雑用なのに今朝時計棟に来ないのはどういう訳？」

駆け寄った瞬間、凄い不機嫌になった気がする。ちょっとだけ傷付いてしまった。

「ご、ごめん。えっ、と、知らなかったよ」

怒ってるみたいだし素直に謝る、しか無いでしょ。

「……まあいいわ。えー、替わりのペナルティーとして、昼休みに

時計棟に来なさい」

よその教室の入り口付近であるにも拘らず、やたらと堂々とした態度で言うせっちゃん。周りの視線を気にもせず『来なさい』の辺りで長めの髪をふわっさあってやった。どっかで見た気もするけど、なんかかっこいい、っていうか凄いいい匂いがした。

「もちろん、いいよ」

ペナルティーって辺りがちょっとだけ納得できないけど、断る理由も無いので了承しておく。

「そう、昼休み開始のチャイムから五分以内に会長室をノックしなさい」

俺が了承するのは当然って感じ、やたらと高圧的。

「あ、ああ」

「じゃ」

って言うって行ってしまっ。せっちゃんはA組である。

「……………」

振り返るのが怖い。

ひそひそ声が凄い。

と、そこで2限目開始のチャイムが鳴り響いた。俺はしめた、と

ばかりにみんなの視線を交いくぐって席に着いた。

二時間目、世界史。

「今日は世界史の先生が病欠なので自習です」

委員長がそう言った瞬間。

ガタタツ!!

俺の席にクラス全員が群がって来た!

「今の会長でしょ? なんでなんでなんで?」

「待ち合わせみたいな事言ってたな? 時計棟? どういう事だ?」

「付き合ってるのか?」

「っていうか塩田君って執行部だっけ?」

「あわわわわわっ」

「なっ? 十八っ? どうしたっ? 十八っ!」

ほとんど話した事も無いようなクラスメイト達に物凄い勢いで詰め寄られてしまう。なんか胸ぐら掴まれてるし、っていうか掴んでるの涉だし。騒ぎに目を覚ました瞬もパニック状態である。

「おいっ！ ちょっとみんなやめろよ！ 刹那は俺の姉弟なんだから十八が知ってるのは当然だろ！」

瞬が仲裁しようとしてくれるが、あまりにももみくちゃなので流石にどうにもならない。

「でも、話してるの初めて見たあ」

「付き合ってるのか？」

「あっ、いい。」

「違うって！ 執行部を手伝ってるだけだっ！」

みんなのハイテンション振りに俺も必死。

「おい。ちょっとうるさいぞ〜」

隣のクラスの担当教師が注意に来てくれて、ようやく解放された。

「ふう……」

静かになってくれた教室で息を吐く。

「塩田君って刹那と仲良しだったんだねえ」

「えっ、あっ、うん」

突然の声に思わず肯定してしまった。まあ、『だった』ってのは

間違いない。声の主は隣の席の阿部さんだ。

「あたし一年の時に刹那とクラス一緒に仲良しだったんだよ。今もだけどねえ」

とても明るい印象の阿部さん。まともに話すのは初めてだった。

「そうなんだ」

「でも意外だなあ。刹那がさあ、瞬君以外の男の子とまともに話してるの初めて見たよお」

「そ、そうなんだ……」

なんか独特の雰囲気のある子だな。

「そうだよお。刹那、男嫌いで有名だよお」

「へえ〜」

はっきり言って俺もまともに扱われてない気もするけど、どうなんだろっ。

「でも塩田君もあの執行部にいたんだねえ。意外だよお」

入ったのは昨日からなんだけどね。

三時間目、化学。

移動教室中。

「本当に付き合ってたないのっ？」

「だから違ってた言ってるだろ！」

涉がウザイッ！

「あつ、せんぱあい。こんにちはです」

声に反応すると、正面の一年生集団の一人がめっちゃ笑顔で駆け寄って来た。

「ま、毬谷さん」

「せーんぱい！ ルナの事は『るな』でいいですよ」

とか言いながら俺の腕を取る毬谷さん。

って……えっ？

「ま、ま、毬谷、さん？」

なんか俺の腕をぎゅっっしてしてる毬谷さんにツッコむ。

「だから違つです！ る・な・です！」

俺の肩越しに見上げる形でそう言う。俺の腕を掴んでいるのだから当然の構図である。っておい。これはかわいいなんてレベルじゃ

ないぞ？　これは兵器だ。

「…………る、るな…………ちゃん」

俺の理性が辛うじて呼び捨てを回避する。

「はい！」

同じ構図で笑顔の元気な返事。兵器が核クラスに…………。

「せんぱいはお昼ご飯はどうするですか？　学食ですか？」

笑顔のまま訊いてくる。

「えっ？　あつ、うん、いや。今日はパン、かな、ちょっと予定があつて時間が無いん、や」

昼休みはせつちゃんに呼び出されている。昼休み開始5分前までに行かなくてはいけないので学食で食べる時間は無い、今日は弁当も持って来ていないし、購買に寄ってパンを買って行ってギリギリだろう。

「そう、ですか…………。良かったら今日も四人で一緒に食べれたらなつて思ってしまったです。用事があるならしょうがないです…………」

と、俺の腕を掴んだまま、しゅんと頂垂れてしまったルナちゃん…………の後ろから物凄い殺気が膨れ上がる。

「ふ、ふふふ…………ルナの誘いを断るとはね。くくく…………」

やはり不可思議にも白くなった眼鏡の奥で怪しげに笑う進藤さん。

「あー、殴りてー殴りてー殴りてーなー。レディの誘いを断る下衆を殴りてーなー」

最早、殺る気満々な橘さん。

「でも仕方ないです。また今度です」

殺気の立ち込める中でそう言いながら顔を上げるルナちゃん、元の笑顔だった。

「う、うん」

どうにか返事を返す俺。

「じゃ、またです。バイバイです」

俺の腕から離れて行ってしまいうルナちゃん。

「ふ……」

進藤さん。

「けっ！」

橘さん、いや、コイツはもう『さん』は要らねえな。橘。

「バイバイ……」

と、三者三様の三人を見送ると、またしても背中にも痛い視線を感じる。今度は瞬も先に行ってしまったっていいし。

「シオ〜！ 貴様あ〜っ！ 今のは一年生美少女四天王の一人、俺的美少女NO1の毬谷るなちゃん……。実は眼鏡萌えのスキルを持つ俺には堪らない進藤円ちゃん……。ツンデレにしたい萌えポニテNO1の橘巴ちゃんじゃないかあ〜っ！！」

ゴゴゴゴって効果音が聞こえて来そうな感じで言う渉。

「そ、そうなんだ。い、いや、っていつか執行部と一緒にだけだつてば〜！」

全くなんなんだ……。

渉がウザイのはもちろんだが、何だかおかしく思える一日。

怠惰だった筈の日常の変化はまだまだ始まったばかりだった。

四間目、体育。

E組との合同授業である。移動教室の後に体育がよって感じ、着替えたら休み時間ないじゃんって感じ。

「ハツハツハツ！今日は男女合同でソフトボールをやりますよー」
心の中でぼやいていると、くそ寒い校庭なのになぜかタンクトップに短パンのむさくるしいマッチョ体育教師が今日の授業の内容を言う。

男女合同とは珍しい、それにソフトボールとは中々いいぞ。あの体育教師のスポーツの授業は絶対に試合形式だ。校庭に取れる野球場は面積的に二面、ニクラスでしかも男女合同なら必ず人数的にあぶれる。ギャラリー兼球拾いをゲットすれば俺の運動音痴を発揮しないで済むかもしれない。

そして、授業開始。まんまと外野の更に外野の球拾いをゲットした俺。

そこで意外な人物にエンカウトした。

「よう」

声を掛ける。

「……………」

カクン

頷く海老原さん。相槌なのだろう。

「そういえば隣のクラスだったんだよね。知らなかったよ」

「……………私……………知ってた……………瞬の、友達……………だし……………」

「なるほど」

納得と同時に意外に思った。俺と渉、それにせつちゃん以外で瞬を呼び捨てにした人を初めて見た。ちなみに瞬はF組Aチームのピッチャー、渉は同Aチームのセカンドである。

「……………それに……………」

じい〜

そう言うつと恒例となった俺の凝視を始める海老原さん。

???? 何だろう??

「それに??」

俺を見つめる海老原さんに、小さな子供の相手をするように訊く。なぜだろう……海老原さんはとても話しやすい。学校内で異性とまともに会話をした事が無い俺がだ。どこか一生懸命に話してくれるような海老原さんだからだろうか?

「……朝……新聞配達……やってる……でしょ……？」

「えっ、あっ、うん。よく知ってるね。そうだよ、今朝もあつただよ」

意外だったので少し感心したように言ってしまう。

「……朝……見た事、あるし……ウチも、頼んでる……いつも……ありがとう……」

俺を真っ直ぐに見つめたまま言う。

「う、うん。こちらこそ」

「……うん……」

不思議な子だと思った。話しているとなぜだか暖かい気持ちになった。話していても緊張しないし……せっちゃんやルナちゃんは緊張するのに。

昼休み。

「じゃあ海老原さん、またね」

四時間目の授業を終え、クラスの違う海老原さんと別れる。

カクン

例の如く頷いてくれた。

行ってしまった海老原さんを見送っていると、背中に嫌な気配を感じる。

ゴゴゴゴゴ

「シオおー！ 貴様あー！ 二年生の俺的隠れ美少女NO1の海老原曜子ちゃんまでい！ 口惜しいヤツめい！」

「うわあ！ なんだなんだ！ 涉？」

いつの間にか後ろにいた涉がふるふるしてた。

「瞬ならいざ知らずシオまでい！」

今にも掴み掛かって来そうな涉。

「だ、だから執行部で一緒なだけだってばあ」

「だからそれが分からんっつーのっ！ なんでシオが執行部にいるんだよっ！」

あっ……そういえば涉に何も言ってないや。

「いや、なんか俺さ、執行部に接收されちゃった」

自分で言うとなんかシユールだな。

「はあ？ なにそれ？」

変な顔の涉が変な顔で首を傾げる。かなり意味不明なんだろう、
って、こんな事してる場合じゃないじゃん！ 昼休み始まってるし、
会長室行かないとだし。

「涉、ごめん！ 後で話すから！」

「えっ？ おいつ！ シオっ！」

放置！

しばし後、時計棟会長室。

コンコン

「入りなさい」

ノックの直後に中から不機嫌そうな声が返ってくる。ちなみに今は
昼休み開始から7分後。大急ぎで着替えて購買に寄らずに来たが
間に合わなかった。……かなり怒ってそう。

「し、失礼します」

緊張というより、軽く戦慄しながら入室する。

俺に見向きもしないせつちゃん。机に座ってカタカタとパソコンを打っていた。

「え、えーと、遅れてごめん」

とりあえず謝らないと始まらなさそうだ。実際、申し訳なかった。

「いいわ。体育でしょ？ 窓から見ていたから知っているわ」

タイピングを止めずに言う。窓？ せつちゃんの後ろの窓からは校庭が見渡せる、まさかとは思っけど。

「窓ってここなの？」

訊いてみる。

「そっよ」

あっさり肯定。いやいや、おかしいじゃん！

「授業は？」

更に訊いてみる。

「私、免除だから」

パソコンのディスプレイを見たまま、やはりタイピングは止めずに言う。

免除？

「とりあえずお茶を淹れてちょうだい。階段脇に給湯室があるから話の続きではなく用事を言い渡すせっちゃん。どうやら今の話は彼女には余計な事だったらしい。」

「……わかった」

いろいろとわからない事だらけだけど、最初の内は流されておこう。

給湯室。普通に立派な流し台と冷蔵庫、趣味で集めてるとしか思えないようなティーカップの群れが並ぶ食器棚。間違いなく俺んちの台所よりグレードが高い。

まあそれはともかくと、必要な物を漁らせてもらった俺は慣れない手付きで紅茶を淹れる作業を開始する。せっちゃんのご所望は紅茶だった。

軟水のミネラルウォーターを沸かして、カップとポットを温めて、ポットの中で茶葉を踊らせて、冷めないように布で覆ってから放置して、後は最後の一滴までしっかり注げば……。

……完成？

なんとなく記憶していたうる覚えの知識で淹れてみたが、何だか順番が無茶苦茶だった気がする……大丈夫か？ 全く自信が無い。

実は俺は紅茶が嫌いなのである。好き嫌いはほとんど無いつもりだが、唯一として紅茶が苦手だった。ちなみに好きなのはコーヒー飲料。コーヒー牛乳だろうがブラックだろうがコーヒーは何でも大好きである。

「お待たせ」

「ありがとう」

会長室に戻るとせっちゃんが出た時と同じように高速タイピングでパソコンと睨めっこしていた。邪魔にならないように机の端っこに紅茶を淹れ、置く。

「塩田十八はその書類を片付けてちょうだい」

そう言うつと来客テーブルの方に一瞬だけ視線を移すせっちゃん。高速タイピングはやっぱり止まらない。

「えっ？」

テーブルの上にはどっさり書類が積まれていた。ってマジで？

「大丈夫よ。書類の頭に書いてあるクラス毎に分けるだけだから簡単だわ」

俺の驚愕を察知したのか補足するせっちゃん、俺の方を全く見えないの的確な補足だった。……一番の驚愕の理由は内容よりも量だったんだけどね。

タイピングの音だけが響く会長室で作業を開始する。確かに作業自体は実に簡単だった。生徒会管轄の委員会やらの書類らしく、その委員会毎の書類を各クラスに振り分けるだけだった。そのお陰か、どうしてこんな事になったんだっけ……とかは考える暇も無く作業に集中できた。

どうでもいいけど腹減ったなあ……。

とか思った時、タイピングの音が止んだ。

思わずせつちゃんの方を見ると、紅茶に口を付けていた。……俺はさりげなく作業に戻る。ちゃんと出来たか自信が無いので少し後ろめたい、いや、けっこう後ろめたい。

「おいしいじゃない。塩田十八」

「えっ？ マジで？」

そんな馬鹿な、あれだけ適当に淹れた紅茶が美味い訳ないぞ？

「どうしてあなたが驚くのよ……。まあでも、料理が出来るとも言っていたし、一つくらい取り柄みたいなのはあるものね」

誉めてるんだかけなしてるんだかよく分からん事を言うせつちゃん。好感触だったようで何処となく表情が柔らかい、笑顔とも取れる優しいな表情。

懐かしいせつちゃんがだぶった。

適当な淹れ方だったけど、余程上手い事ハマってくれたのか紅茶は美味いらしい。せつちゃんはかなり上機嫌である。その表情を見て、俺も思わず顔が綻んでしまった。

「……ねえ、塩田十八？」

「うん？ 何？」

呼ばれて、せつちゃんを見て、気付く。優しい彼女を前にして、懐かしむあまり勘違いをしていた事に気付く。思わず出た返事も慣れ慣れしいにも程がある。

しかし、せつちゃんは気にした素振り無く、真剣そうな、いや、どこかばつが悪そうな、俺に気を遣うような……そんな表情で俺を見据えていた。

「……おじいさん……。亡くなった、のよね？」

俺から僅かに目を反らした彼女は消え入りそうな声で言う。

瞬間に彼女の心情を察知した。せつちゃんはずっとこの事を訊く機会を窺っていたんだ。

俺のじいちゃん。塩田時貞しおだときさだはせつちゃんも知っている。ずっと小さい時から仲良しだった俺と瞬とせつちゃん。俺との繋がりから佐山姉弟はじいちゃんの柔術道場に通っていた。俺と……遥も含めていつもみんなでじいちゃんにしごかれていた。

小学校卒業前まで。

「……ああ。春に、ね」

それ以上言葉はいらなかった。

「そう……」

視線をパソコンのディスプレイに戻すがタイピングの音は聞こえて来ない。昼休みの喧騒も届かないのか、嫌に静かだった。

懐かしさのお陰で少しだけ昂ぶっていた気分が急速に冷めた。

目の前にいる懐かしい人よりも、既にいなくなってしまった懐かしい人の記憶が俺の頭の中で揺れる。

でも、その冷めきった頭の中でも……懐かしい人の記憶が揺らめく中でも……。

俺は大きく安堵していた。

変わっていたせつちゃん。

変わっていなかったせつちゃん。

彼女の心に俺の大切な人が残ってくれていた事が嬉しかった。

自己堅持欲が強くて自意識過剰で我が儘なくせに、いつも他人の

事ばかり考えていたせつちゃん。

一番好きだったところは少しも変わっていなかった。

俺を気遣ってくれた彼女が優しかった。

嬉しかった。

例え『今』の俺が彼女の中になくても……。

五時間目、数学。

数学は比較的得意な方である。いくつかの方程式さえ覚えておけば割と解ける問題は多い、問題の傾向にもよるがテストでもだいたい平均点以上は行く。何より得意になれた一番の理由は授業のわかりやすさである。二年生A組、F組担当数学教師の徳川先生は教えるのがとにかく上手い。先生のお陰で中学までお手上げだった数学が今では好きな教科になってしまった。ちなみに瞬はもちろん得意らしい。どうでもいいが渉はもちろん問題外らしい。

「皆さん、お疲れ様です。今日の授業はここまでにしておきます。チャイムが鳴るまでは教室を出ないようにお願いします」

???

五時間目終了までまだ5分くらいあるのに終わってしまったぞ？

「塩田君」

「えっ」

教室を出ようとする先生に呼ばれた？

「塩田君、少しお話があります。廊下に出て頂けますか？」

「は、はい」

数学の徳川先生。一緒に廊下に出る。

「あのおう、なんでしょうか？」

多分だが呼び出されるような事をした覚えは無いので訊いてみる。

「生徒会長さんから聞いていませんか？ 生徒会顧問の徳川です。今日も放課後には顔を出せないのご挨拶をしておきたいと思いついて」

生徒である俺と対峙している筈なのにまるで目上の人を敬うような丁寧な物腰の先生。

生徒会顧問。そういうばせつちゃんが必要な事を言っていた気がする。

「は、はい、こちらこそ」

先生の丁寧すぎる態度にももちろん俺は恐縮してしまつ。

徳川志乃先生。腰まで届く長く長くて綺麗な髪がさらさらのつやつやで眩しい。はつきり言つて物凄い美人である。二十代後半だが歳相応に見える時もあれば、年下に思えてしまう事もある。

「会長補佐への就任でしたね、正式な内定は後日になってしまいましたが、よろしく願います」

深々と頭を下げてくれた。

「あわわわわ、よよよよろしくお願いします」

俺も慌てて先生に倣う。

「では、失礼します」

「はい！」

ぐわあゝ緊張したあ。

六時間目、物理化学。

化学室にての実験授業。二人一組に別れ、各々のペアごとに実験をしている訳なんだが俺はちんぷんかんぷんである。この教科は選択教科、なぜこんな教科を選択してしまったのだろうか？

「十八？ どうした？」

実験の手を止めた瞬が俺を心配そうに窺う。……まあこの教科を選択したのはコイツがいるからだろうな。

「何でもないよ」

特に何かを考えていた訳ではない。この授業への愚痴は今に始まった事ではない。いつもの事。瞬への相槌もいつもの事。しかし、瞬の手は止まったまま。どうやら瞬は勘違いして捉えてしまったらしい。

「十八……執行部はどうだ？」

少し遠慮がちに訊いてくる。

生徒会執行部。どうだと言われても正直言ってわからない……。生徒会という環境だけを考えればはつきり言って不安だらけだ。

それ以上に不安なのは人間関係。

せつちゃん。

海老原さん。

ルナちゃん。

橘。

進藤さん。

俺にとっての不安は環境の変化や『俺自身』が感じる人間関係への不安ではない。

『彼女達』の中に俺という存在が根付いてしまう事への不安だった。

でも……。

「瞬……」

「なんだ？」

「成り行きだけどさ……入って良かったかも」

矛盾。

「何がだ？」

既に俺の言いたい事がわかっていているような瞬。続きを促すのではない、俺が話しやすいように誘導してくれる。

「生徒会……」

矛盾している。

わからないとか不安だと言っておきながら俺の中には幾つもの膨れ上がる感情が芽生えていた。

懐かしさ……安心感……責任感……。

大きな不安に襲われながらも、大きな期待を膨らませている。

不安と期待は隣り合わせであると痛感した。

「へえ……十八らしくないな」

とても興味深そうな瞬。

「そう、かな？」

「そうだよ。どうだ？ 刹那とまた仲良くなれそうか？」

困ったような顔で言う。

「わからないよ。せつちゃんの考えも、わからないし。これからど

うなるかなんて、わからないよ……」

俺のこれから。そんなものは考える必要は無い。しかし、生徒会執行部に籍を置いてしまった以上、『俺以外』の人達のこれからを考えなければいけない。

「十八。深く考えるな。俺はいい機会だと思っぞ？ お前にとっても、刹那にとつてもな。だからお前の思ったように行動してみる。俺がいるんだから安心して、な？」

おどけたような言い方だが、瞬らしい優しさが痛いほど伝わってくる。

「ありがとう、瞬」

だから俺も大切な言葉を伝える。

「とにかく、実にいい機会だぞ？ 前にも言ったけど、頑張っつて刹那とよりを戻しちまえよ」

「な、何だよ……よりっつて」

馬鹿丸出しで照れてしまう俺。別に俺とせつちゃんは付き合っていた訳ではない。だいたい小学校の時の話だし、俺もせつちゃんもそういう意識は皆無だった筈だ。

「ははっ、冗談だ。まあ別に刹那じゃなくてもいいんだぞ？ 海老ちゃんでもルナでもいいし、橘や進藤でもいい。お前も高校二年になつたんだから彼女の一人でも作っちまえて事よ」

にやははと笑いながら言う、これは瞬の楽しい時の特徴である。ちなみにこの心からの笑顔は俺にしか見せないらしい。前にわざわざ言われた事がある。

「いや、それはまあ、置いておいて。なんつうのか、せつちゃんがついて、海老原さん、ルナちゃん、橘に進藤さん、徳川先生、そんでお前もいてさ……楽しくなりそうだ……」

自分でも驚いてしまう。明日への期待をここまでではっきりと口にしたのは初めてだった。

「……そっか。お前つてさ、今まで何でもめんどくさいとか、今のままがいい、つて言ってただろ？」

「……？ ああ」

「今回の事はお前には丁度良かったんだよ。まあちよつとばかり俺の計画とはずれちまったけどさ……。刹那が何を考えているのかは俺もさっぱりわからない。でも、お前が少しでもやる気になったのは本当にいい傾向だぞ？」

「そ、そうなんだ」

「ああ。何か寂しいけど、刹那じゃなくてもいいから彼女作っちゃまえー！」

そう言いながら、再びにやははと笑う。

「や、いや、どうなるかはわからないけどさ……」

「はは！ 頑張るうな」

放課後。

「じゃあ話してもらおうよっ！」

目の前には渉。俺は自分の席に座らさせられ、渉も自分の席である前の席に後ろを向くように座っている。

「いや、だからさ……俺は素行不良の生徒として執行部に接收されちゃったんだよ」

「何だよそれっ！ 素行不良でしょっぴかれるなんておいしいにも程があるよっ！」

「おいしい？」

訳がわからん。

「生徒会執行部に入部できるなんて夢みたいじゃんかつ！ 超美人の生徒会長を筆頭に周りには美少女達がひしめきあってるんだぞっ！」

興奮状態の渉。訳のわからん身振り手振りのジェスチャーをしな

がら捲し立ててくる。ハアハアしながらだから凄いキモい。

「それはわかるけどしょうがないじゃん」

「うつきーっ！ シオ〜！ 羨ましすぎるよおっ！ 入部希望者は問答無用で門前払いの筈なのにいつ！」

うつきー？ というか入部希望者が門前払い？

「執行部の精鋭の中にシオが混ざるなんて凄い違和感だろっ？」

変な顔の涉が更に変な顔で言う。よっぼど気に入らないらしい。

「失礼なヤツだな。しょうがないって言ってるだろ？」

埒が明かない、しつこすぎる。

困り果てていると、臨時放送のチャイムが鳴り響いた。ぴんぽんばんぽんの定番のヤツだ。

『2年F組塩田十八。2年F組塩田十八。至急、時計棟校舎、生徒会長室まで来なさい。繰り返し。2年F組塩田』

スピーカーから流れた放送の声はせつちゃんだった。淡々とした口調だが何やら怒っていきそうな気がする。

「えっ、と。俺？」

思わず涉に訊いてしまう。

「知るかよっ！ くううそお〜！ 俺も呼び出されたいよおっ！」
またハアハアしながらぶるぶるする渉。いい加減めんどくなってきたので放置して時計棟に向かう事にした。

「あなた非常に遅いわ！」

会長室に入った瞬間、せつちゃんに怒鳴られてしまった。

「う、うめん」

俺は条件反射で謝ってしまう。

会長室には執行部の全員が集合していた。

「早速だけど塩田十八。みんなのお茶を淹れて来なさい」

「えっ、あ、ああ。えーと、紅茶でいいかな？」

「そうよ。紅茶がいいわ。みんなも紅茶でいいわよね？ いいみた
いだわ。ほら、早く早く！」

ふんって感じだけど、何だかそわそわしてるせつちゃん。一人で喋るせつちゃんにみんなもぼかんとしてる。

「予算ですが運動部、文化部、併せて大きなマイナスはありません。先週から平行線を辿っています」

大急ぎでお茶を淹れて来ると、ルナちゃんが何やら報告らしき書類を読み上げていた。

???

「今日は金曜だろ？ 毎週金曜の放課後は各部所の報告があるんだ」

隣に来た瞬が教えてくれる。

なるほど。

とりあえず、みんなにお茶を配って回る。せつちゃん以外は全員立っているの、みんなが囲んでいる会長の机に置かせてもらう事にした。

「……ありがとう……」

「あっ、ありがとうございますっ」

「サンキユ」

海老原さんとルナちゃんと瞬がお礼を言ってくれた。橘と進藤さんは全開で無視。せつちゃんは既に砂糖の投入を完了していた。

「ルナ。残りの報告は？」

カップを手に添えながら訊くせつちゃん。

「後は同好会の予算だけです」

「来週に持ち越し、報告終わり。さっ、みんなでティータイムよ」

かなり適当に切り上げると紅茶を飲み始めるせつちゃん。さっきの怒っていたような余韻は全く無く、見るからに上機嫌である。何だかみんなも呆気に取られている。

「塩田十八の分は？」

「えっ？ ああ、みんなでティータイムとは思わなかったから淹れて来てないや」

「馬鹿ね、そんなに堅く考えなくても平気よ。みんなでゆっくり頂いているから淹れてらっしゃい？」

物凄い優しい口調で言う。

「あ、ああ。ありがとう、せつちゃん」

ピシッ

ぴし？ 何かかヒビ割れたような効果音が聞こえなかったか？

「塩田十八」

ゆらりと俺を見据えるせつちゃ……って怖！ さっきまでの上機嫌が嘘のようだ！

「ふふ、まさか小学校の時のあだ名で呼んで来るとはね……ちょっと慣れ慣れしいにも程があるわ。ふふふ、調子乗ってるわ」

「あつ、いや。その」

「ふつ、ふふふ……。今日は解散よ。みんなも後始末して上がりなさい」

「あ、あのつ、会長さんと塩田せんぱいはどういった関係なんですか？」

ルナちゃんの質問。

「別に、ただの昔馴染みよ。瞬の友達として面識があるだけ、生徒会への加入だって瞬にとって良かったと思っただけ」

不機嫌な様子もそのままに捲し立てる。

「……………」

……俺はショックを受けてしまった。

口を滑らせてしまった事は確かだが、ここまで機嫌を損ねるとは思わなかった。気兼ねなく呼び合ったあだ名も彼女にとっては煩わしいものなのだろうか……。

せつちゃんはカバンを持ってさっさと出て行ってしまった。

呆然と見送る俺。周りのみんなも呆然と佇んでいた。

「ルナ……余計な事を言ってしまったのですか？」

しょんぼりとしてしまったルナちゃんが咳く。

「君は関係ないよ」

どうにかフォローする。

「新入りのくせに慣れ慣れしいからじゃないですか？」

「橋……！」

ここぞとばかりに口を挟んだ橋に怒りの声を上げる瞬。

「す、すいません……」

「いいよ。今のは俺が悪かったんだ……」

場の雰囲気が悪くなりそうだったので橋にもフォローする。

「俺もバイトあるし帰るわ。食器、頼むね？」

いづらい雰囲気に堪えきれそうにないので退散させてもらおう事にした。……というよりこれは間違いないで逃げだろっな。

夜、10時半過ぎ。

バイトを終えてようやく帰宅した。憂鬱なまま仕事は出来ないから空元気で頑張ったせいかもしれないもより疲れた。

「いきなり気まずくなっちゃったなあ」

独り言を呟く。

自分という存在が馬鹿らしく思えてしまう。せつかく懐かしい優しさに触れる事が出来たのに……せつちゃんの言う通り調子に乗っていたのかもしれない。

そうだろう……五年も経っているんだ。

変わっていたかと思っていたせつちゃん。変わっていなかったせつちゃん。

せつちゃんはせつちゃん。瞬は瞬ちゃん。俺は『トヤ君』。

遙だっていない……。

昔の通りにはいかない。

「……はあ」

お決まりのため息。

ピリリリリ

携帯が鳴った。瞬？ いや、知らない番号だった。

「もしもし？」

「……………」

「あれっ？ 瞬……………」

『……………あの、私……………刹那』

せつちゃん？

「せつちゃん、さ、さ、佐山さん？」

当然テンパる。

『……………今日は、ごめんなさい。番号、瞬から聞いて』

テンパる俺を気にする風ではなく、明らかに低い声のトーン。昔、親に怒られて気落ちしていたせつちゃんを思い出してしまった。

「えっあつうん。俺も昔みたいなノリで、ごめん」

俺は突然のせつちゃんの謝罪についていけない。

『うん。あの、さ……私……』

「……………」

とても、長い沈黙があった。

『……………嫌われてないよね？』

???

「えっ？ 嫌われてるって？ 誰に？」

『塩田十八に……』

???

「えっ？ 俺？ 何で？ 意味がわかんないよ？」

『だって中学くらいから避けられてるから』

「 なっ！！ 避けてないよ！ ただ……あの、時から……何か
気まずかったていうか、なんつうか……」

『そう、なんだ。私お見舞いにも行かなかったし……。塩田十八、
大変だったのに……』

「いいよ、そんなの。瞬がいつも来てくれてたし。そんなの気にし
ないでくれよ」

小学校六年の冬。

俺は事件に巻き込まれて重傷を負った。

五ヶ月入院していた。

退院と同時に入学した中学ではせつちゃんは素気無くて、よそよそしくて……何処か遠くに行っちゃったみたい……。

『そう……なんだ……良かった……』

電話越しでもわかる安堵の声。

「……俺も」

恐らく似たような声の俺。

『私の事、刹那、呼び捨てでいいから。せつちゃんはちょっと恥ずかしいし』

「わ、わかった」

『この電話の番号、私のだから』

「お、おう、登録しとく」

『じゃあ、月曜日の朝も生徒会あるからね？……おやすみ、なさ』

い
『

「わかった。おやすみ……」

ツーツー

「……………」

正直いって会話に頭がついて行ってなかった。上手く返事を出来たかわからなかった。

でも、刹那の言葉一つ一つが頭から離れなかった。

……心から嬉しかった。

心臓がはち切れんばかりに高鳴っていた。

「刹那……………」

虚空に語り掛ける。

沈みきっていた心は穏やかに凪いでいた。

『各地のお天気でした。続きまして本日の運勢です』

朝食を摂りながら眺めるテレビ。早朝のバイトで既に外に出ている俺は天気を知っている。新聞の一面も読んでいたので、特に見る必要も無いのだが、見ないで家を出ると落ち着かない。習慣というヤツだろう。

テレビに表示された時計を見ると家を出るのに丁度いい時間だった。テレビを消し、食器を片付けると居間を出た。

出かける前の習慣がもう一つある。

居間の隣の部屋。元々はじいちゃんの部屋であったが今では仏間と成り変わっている。カーテンを開け、仏壇の観音扉を開いて水を替える。仏壇の前に腰を下ろし、四つ並ぶ遺影に手を合わせる。

「……………」

毎朝見るその遺影は表情を変えない。みんな『あの時』のままだった……………」

「え、とき。俺、学校で生徒会に入ったんだ……………」

語り掛ける。

「生徒会長はさ、せっちゃん……いや、刹那なんだけどさ。瞬もいてさ、何だろ、忙しくなりそうだよ」

当然、言葉は返って来ない。

「どうして俺なんだろう、って感じだけどさ……不安で自信も無いけどさ……ちょっと頑張ってみようと思っただ」

大丈夫だよ

妄想か、幻聴か。

「ありがとう……」

届かない大切な言葉。

「……行ってきます」

行ってらっしゃい

今日は休日明けの月曜日。俺が生徒会執行部に入部してから最初の月曜日。

……俺は月曜日が好きだった。

一人でいる休日より学校のある平日の方が好きだった。だから休日明けの月曜日が好きだった。同時に不安もある、いや、恐れといつてもいいだろう。誰かの幸せを壊してしまうのではないか。誰かの時間を奪ってしまうのではないか。

でも、俺は一人でいると、きつと壊れてしまう。悪夢を振り払うには現実に向き合わなくてはならない。俺が現実にいる事を確かめなくてはいけない。

自分自身に課せた戒めと無意識に沸き上がる欲求が交錯する思考に廻るものがある。

せつちゃん……いや、刹那。

早く刹那に会いたかった。

「すう、はあぁ」

コンコン

緊張と不安の深呼吸の後、期待を込めたノックをする。

「どうぞ」

刹那の声。扉を開ける。

「失礼します」

ひんやりとした廊下に比べて暖かい会長室、当然のように俺を見据える刹那。そのお陰なのか、凍えていた体と共に緊張が少しだけ和らいで行く。

「おはよう」

朝一にも関わらず凜とした挨拶をくれる。

「お、おはよう」

情けない挨拶を返しながら見回して気付く、部屋の中には刹那だけだった。時間がわからなかったので、最初に呼び出された8時に来てみたのだが早かったのだろうか？

「他のみんなは？」

訊いてみる。

「図書館棟に行っているけど曜子は来ているわ。他のみんなは朝には来ないわね」

「来ない？」

マンツーマン？

「一年生達に朝早くから仕事させたくないし、瞬は言っても来ないのよ」

補足する刹那。なるほど。

「とりあえず……と、と、と……」

?????

と？

堂々とした態度でかつこよく座っていた刹那が急にもじもじしましたぞ？

「……とぉゃ」

「えっ？」

よく聞こえなかったぞ？

「お茶っ！！ お茶淹れて来なさいよっ！！」

「えっ？ あっ、うん、紅茶だね。わかったよ」

どついつ訳か刹那が俺の淹れた紅茶を気に入ってくれたのはわかる。怒鳴られた理由はわからないが、少し嬉しく思ってしまったがら給湯室に向かった。

「あっ、海老原さん。おはよう」

給湯室に向かう途中に海老原さんに出会した。

「……塩田……おはよう……」

海老原さんは両手で数冊の分厚い本を抱えていた。かなり重そうである。

「どこに持っていくの？ 持つよ？」

男として当然、手伝いを申し出る。

「……いい……重いし……悪いし……」

逃げるように体をよじる海老原さん。

何だろう……。俺の中に沸き上がるものがある。ひじょくを守つてあげたい衝動に駆られてしまう。

「重いから俺が持つんだよ」

回り込んで奪い取る。

「……………」

本を支えていた両手をそのまま固まってしまう海老原さん。

「どこに持って行けばいいのかな？」

やはりというか、どうしても小さな子供に訊くように訊いてしま
う。

「……事務室……」

のんびりした動きで俺を指差す海老原さん。……俺？

「……後ろ……」

「あっ」

俺の真後ろの扉、プレートには『生徒会事務室』と、書いてあっ
た。

「あはは……。俺、出しゃばっちゃったかな？」

ちょっと恥ずかしくなって、わざわざ訊いてしまっ。

ふるふる

首を振り。

じゅー

見つめてくる。

「……ありがとう……」

感謝の言葉。大切な言葉。海老原さんの優しい言葉に恥ずかしさが吹き飛ぶ。

俺が学校にこだわるもう一つの理由。

「……………うん」

ありがとう海老原さん。

「あなた非常に遅いわ！」

お茶を淹れて会長室に戻った瞬間に刹那に怒鳴られる。海老原さんと話していたから、というより俺のお節介で、かなり遅くなってしまう。

「ごめん、刹那。紅茶はちゃんと暖かいからさ」

申し訳なく思いながら机に紅茶を置く。

「……………」

?????

俺を恨めしそうに見る刹那。ん？ 少し顔が紅いか？

「あなた……………ちょっとずるいわ……………」

「えっ？ ずるい？」

何だ？ 俺、また余計な事を言ったか？

「うるさいわね、十八！！ もういいから教室に行きなさい十八！
わかった？ 十八十八！」

「わっ、わっ、わっ、ごめん。じゃあ」

何だかよく分かんが、別に本気で怒っている訳ではなさそうだ。

懐かしい刹那。『せつちゃん』の時と同じだった。

教室に戻ると、丁度HRが始まる少し前だった。

「おはよう、十八」

既に登校していた瞬が挨拶をくれる。

「おはよう、瞬」

俺の日常は変わったが、瞬との関係は何も変わらない。朝の挨拶も今まで通り。

「刹那から電話あったか？」

少しニヤニヤしながら訊いてくる。恐らく俺の事も刹那の事も察しているであろう瞬間。無事に解決した事も知っているのだろう。だから敢えてからかうように訊いてくるのだと思う。

刹那からの電話の事を思い出す。彼女の優しさを思い出す。

「ああ、昔みたいになれたらいいな」

自然に出た言葉だった。

最近はどうも俺らしくないと思う。明日への期待の言葉。俺はそれがどれだけ馬鹿げているかを知っている筈なのに……。

「そつだな……」

おどけたような表情を引き締め、安心してくれたような暖かい表情で言う瞬間。

嬉しそうに笑ってくれた。

放課後。俺は瞬と一緒に時計棟の来ていた。

「涉のヤツ、結局来なかったね」

会長室に向かう廊下を瞬と雑談しながら歩く。

「どうせまたサボりだろ？」

今日は涉が学校に来なかった。遅刻常習犯の涉だが、稀に学校自体に来ない時がある。

「だよな。今日は数学も無かったし」

徳川先生大好きな涉は数学の出席率が高い。体育を除く他の教科は学校に来ていてもサボる問題児だ。

「数学がどうかしましたか？ 質問なら承りますよ？」

「「えっ？」」

突然の第三者の声に俺も瞬も軽く驚く。声の主は徳川先生だった。

「ごめんなさい。驚かせてしまいましたか？」

俺達の反応を見て、酷く恐縮してしまう先生。

「いえいえ、大丈夫ですよ先生。丁度今日は数学が無くて残念だったなあ、と二人で話していたところですよ。少し驚きましたが今日も先生に会えて良かったです」

あまあい声の瞬が訳のわからんフォローをする。

「まあ……佐山君、お上手ですね」

両の掌を熱った頬を隠すようにあてながら照れる先生。かわいい。

「さっ、一緒に会長室に行きましょう?」

すっとかっこいい動きで自分と俺の間にスペースを作る瞬。

「はい。御一緒しましょう」

はにかみながら俺達に並ぶ先生。

……瞬が先生のナンパに成功した?

三人で会長室に入室する。会長室には執行部の全員が集合していた。

「全員揃ったわね。じゃあ、早速始めましょうか」

言いながら会長の机から立ち上がり、部屋の中央付近に立つ刹那。先生以外の他のみんなも刹那に向き合うように整列しだした。

????

始める?

「十八、並んで」

瞬が自分の隣の床を指差しながら言う。

「あ、ああ」

「言われるがまま並ぶ。」

「悪い。言い忘れてたけど、これから十八の任命式なんだ」

「ごめん、というジェスチャーをしながら、瞬が小声で言う。

任命式？

「では、任命式を始めます。塩田十八君、前に出て下さい」

「えっ？ は、はい」

真剣な表情の刹那に気圧されながらも一歩前に出る。

「2年F組塩田十八。貴方を第十六期生徒会執行部、生徒会長補佐に任命致します」

「……はい」

なるほど、任命式。そういう事か。いきなり過ぎて分からなかった。

「よろしい。では、これを」

俺の前に何やら小箱を差し出す刹那。

受け取る。

指輪の入れ物のような小箱の中身は襟章だった。刹那の制服にも付いている物。どうやら生徒会の証らしい。

「付けなさい」

「はい」

言われるがまま自分の制服の装着する。

「これで貴方が生徒会役員の一人である事を生徒会会長である佐山刹那が承認します。では、塩田十八、下がって結構です」

「はい」

一歩下がり、列に戻る。

……

「はい、終わり。じゃ、十八、お茶を淹れて来て？ 全員分よ？」

「は？」

真剣な表情から一転、かったるそつにお茶を要求する刹那。

「一応、正式なものだからね。ちゃんとやったんだよ」

呆然とする俺に隣の瞬が苦笑しながら教えてくれる。

「ほら、俺も手伝うからお茶淹れに行くぞ」

「えっ、あ、ああ」

給湯室。

女の子が大半の生徒会執行部。野郎二人でお茶を淹れる。

「十八……任命式の事……言わなくてごめんな」

お茶を淹れる作業はそのままに申し訳なさそうに言う瞬。

「いいよ、そんなの」

少し驚いたが、別に大した事ではない。酷く申し訳なさそうな瞬が意外だった。

「実はさ。さっきの任命式……ちゃんとしたやり方じゃないんだ……」

「えっ？」

「本当なら、刹那やみんなの前で学校の為に働く事を誓わないといけないんだ……」

誓い……。

約束……。

「任命式は形だけの儀式みたいなもんだから、普通なら口約束みたいに流してもいいのかもしれない。でも、十八、お前……『約束』できないだろ？」

約束……。

絶対だよ？ 約束だよ？

遠い昔の声が聞こえる。

「刹那に頼んで、その行程を省いてもらったんだ。……十八には悪いけど遥の名前を出してな」

「……………」

「すまん……………」

心底申し訳なさそうに頭を下げる瞬。

「……………やめてくれ、瞬……………」

胸が熱かった……。親友の心遣いが痛いほど嬉しかった……。

「刹那って少し堅いところがあるからさ、もしかしたら省いてくれないかもって心配していたんだ。それで言い辛かったんだけど、流

石に察してくれたらしい……」

俺を気遣う様子はそのままの瞬。

任命式の事を知っていた瞬は酷く苦悩しただろう……俺の為に。

俺は刹那との関係の回復に少し浮かれていた。

瞬の優しさに気付けなかった。

「ありがとう、瞬……」

ここで謝罪の言葉を送ってはいけない。

刹那も……。

ありがとう……。

絶対だよ？ 約束だよ？

遥……ごめんな……。

カチカチと響く音。

暗い静寂の中で定期的に響く時計の音。耳障りではないが、単調なリズムの湧いた音は嫌でも耳につく。この音が気になりだして何分、いや、何時間が経っただろうか……。

学校を終え、バイトを終え、いつものように布団に入って眠るだけの筈だった。

……目を閉じてから、ずいぶん時間が経ってしまった気がする。

これは『いつもの』事だった。

正直言つて眠い。気を抜いたらいつでも眠れそうだ。それに数時間後には新聞配達の仕事もある、眠らなくてはいけない。

しかし気を抜く事が出来ない。

怖い……眠るのが怖い……。

明日に備えて自分の部屋で眠る。人間としての当たり前前の毎日の習慣。俺にとってこの瞬間は苦痛でしかない。瞬が泊まりに来ていない日はいつもこの有り様だった。

怖い。また悪夢を見てしまう。

駄目だ。毎日の事だが、今日は特に酷い。

今日は遙の事を思い出す事が多かったからだろう……。

時計棟で任命式を終えた俺。瞬の優しさを貰えた。刹那の優しさも貰えた。懐かしい幼馴染み達との触れ合いに心から喜びを感じている。

しかし同時に遙への罪悪感が浮かび上がった。

経過する時間の中に隠し、誤魔化してきた俺の『罪』。

約束したのに……。

信じてくれたのに……。

大好きだったのに……。

遙……。

凍える体を丸めながら走る。宵闇に包まれた町の中に俺の踏み鳴らす足音だけが響く。

結局一睡も出来なかった俺はふらつく足取りでバイトに励んでい

た。突き刺すような寒さの中であっても朦朧としてしまう。曖昧な意識を総動員してもつれる足を必死に前に出す。弱々しく照らす街灯の明かりと体が覚えた感覚だけが頼りだった。

住宅街を配達しながら思う。ここに住んでる人達の中にも俺と同世代の高校生がいる。彼、彼女達は恐らくまだ寝ているだろう。あとしばらくしたら目を覚まし、母親が作ってくれた朝食を食べる、そして学校へ行く。

違うところもあるかもしれないが、多くの人が『同じような』日常を送っていると思う。

ごく当たり前の幸せがあるだろう。

早朝から新聞を担いで走り回っている高校生なんてこの町では俺だけかもしれない。

俺の配った新聞を取りに出てくるのは誰なのだろうか？

母親？ 父親？ 俺と同じ高校生の子供だろうか？ あるいはその兄弟？ 姉妹？

「……………」

立ち止まり、振り返る。さっきまで配って来た家々を視線で追う。

幸せな家族。立ち並ぶ家々に生活する人達。

ほんの少しでも俺という歯車は絡んでくれているだろうか？ ……

…俺は役に立てているだろうか？

今まではこんな事は考えもしなかった。俺にとっての当たり前はずっと昔から変わらない筈だ。

でも、どうしても思ってしまう。

ただ怠惰なだけの俺の日常に疑念を抱きつつある。

俺の中で何かが変わっていつている気がする。

生徒会がある為、いつもより早くに辿り着いた学校。教室には行かず、時計棟に直行する。

いつもの事だが……いや、いつも以上に安心した。

俺の好きな場所である学校、その学校の中でも今までは教室が一番好きな場所だった。瞬がいる、渉がいる、気のいいクラスメイト達がいる教室。

時計棟、生徒会執行部のみんながいる、刹那がいる。俺の中で早くもかけがえのない場所に成りつつある。

「あら、早いよね？」

思考を廻らしながら時計棟昇降口に入ると声が掛かる。

声を聞いた瞬間、思考が止まる。頭の中を駆け巡っていた疑念をおいてけぼりにして新しい思考に支配される。いや、何も考えられないのかもしれない。

「おはよう、刹那」

声を掛けてきたのは刹那だった。彼女を前にすると考えていた事がとても馬鹿らしく思える。

「おはよう。……ねえ、あなた顔色悪くない？」

俺と顔を合わせた途端に眉をたわめた彼女は言う。俺の顔色、一睡もしていないのだから当然だろう。

「いや、早朝のバイトがあるからね、少し寝不足かもね」

取り繕った言葉を返す。嘘を吐いた訳ではないが、少し自分が嫌になる。しかし、下らない愚痴を溢す訳にもいかないし、自分の情けない生活を晒すのも嫌だった。

「そう……まあ生活の為だし仕方ない事だけど、自己管理は怠らないようにしなさい」

目を細めながら呆れたように言う刹那。俺は合わせていた視線を外してしまう、見透かされてしまったようで後ろめたい。

「ああ、気を付ける……」

正論を突き付けられたようで否応なしで気分が落ちてしまう。自覚はしているが彼女に言われてしまった事が些かショックだった。

「もう、馬鹿ね、別に怒ってないわよ。生徒会の仕事をする以上よろしくって事を言いたかっただけよ。朝から暗くならないのっ」

呆れを通り超して困ったような様子の刹那、出来の悪い子供を叱る母親を連想してしまった。

「ほら、行くわよ？」

「えっ？」

「中に入るわよ？」

既に上履きに履き替えた刹那が俺を促す、待っていてくれる。

既視感、だろうか……遠い昔にも似たような事があったのかもしれない。いつだったかは思い出せないが懐かしい嬉しさを感じた。

「ああ」

嬉しくなりながら後に続く。自分の単純な思考に感謝した。

「あっ、そうそう。今日の放課後から少し忙しくなるから」

冷えきった廊下を先に歩く刹那が振り返らずに言う。

「球技大会？」

「ごく最近に生徒会執行部に入部した俺だが、執行部在籍前から多くの委員会に所属している。その中の一つである体育委員会。その委員会の影響と俺自身が正直嫌なイベントとして認識している学校行事。」

球技大会。

三つある運動系行事の中でも運動音痴な俺には特に嫌なイベントだった。

「そうよ、よく覚えていたわね。今日から体育委員会や協賛してくれる運動部と一緒に準備に入るわ」

歩く足は止めないが振り返って少し感心してくれる刹那。

球技大会の準備、か。生徒会執行部に入部した俺にとって最初の仕事になりそうだ。

「でも刹那、俺って体育委員会にも所属してるんだけど、どうしようっ?」

俺の体は一つ。執行部であろうが委員会だろうが、学校の為にはどんな事でもやるつもりだが、流石に二つの事を同時にはできない。

「ああ、それね。あなたの委員会は全て退会処理をしておいたわ。安心して執行部の仕事に専念しなさい」

は？

「えっ？ つて、ちょっと」

「何よ。文句あるわけ？」

会長室の扉に手を掛けながら不機嫌そうな視線を寄越す。

「だってさ、俺がやってた委員会は誰がやるのさ？」

俺がやっていた委員会は五つ。体育委員会、保健委員会、美化委員会、緑化委員会、整備委員会。どれも面倒な委員会ばかりだが、一応無くてはならない委員会である。

「F組のヒマそうな生徒を推薦しておいたわ」

「そんな……」

みんなに迷惑を掛けてしまう。

「意味不明ね、どうしてあなたがショックを受けるのよ？」

右手を会長室の扉に掛けたままで、言葉の通りに疑問符を浮かべたような表情をする刹那。

「い、いや、みんなやりたくないんじゃないかな？」

「……………」

一転して酷く不機嫌そうな表情で俺を値踏みするように見る。嫌な物でも見たみたいに険しい感情を露にしている。

「十八、あなた……………馬鹿じゃないのっ!!!」

怒鳴られてしまった。時計棟の廊下に刹那の怒声が響き渡る。

「い、いや……………」

心底怒っている様子の刹那。扉に掛けていた手を離して俺に向き合う。

「やりたくないから何？ 学校に来ている生徒が学校の委員会をどれだけ拒否する権利があるワケ？ 理由は？ 面倒だから？ 遊べないから？ 十八がいくつもの委員会を掛け持ちしてあなたのクラスメイト達がどれだけあなたに感謝をするの？」

「……………」

完璧な滑舌で捲し立てられた刹那の啖呵が俺を穿つ。正に俺の深いところを穿った啖呵だった。

「あなたがクラスメイト達にどういう扱いを受けているのかわからないけど、少し調べれば簡単にわかる事なのよ？ いい？ 十八。あなたはもう生徒会執行部の生徒会長補佐なのよ？ 生徒会長である私の補佐役職に就いたのよ？ あなたのやるべき事はここにあるのよ？ 理解できるかしら？」

言葉の勢いはそのままだが何処となく表情を歪める刹那……………まるで懇願してくるように言う。

「うん……………」

刹那の勢いに吞まれた訳ではない。

刹那の言った一言一言を理解したつもりだ。

「そう……ならいいわ。では仕事を言い渡すわ。十八、お茶よ」

ふつと力を抜いたように肩を下げると穏やかに言う。少し呆れた様子は拭えないが表情も穏やかに戻っている気がする。

「わかった」

刹那は俺の了承を確認すると、さっさと会長室に入ってしまった。

「ありがとう……」

既に廊下には俺一人。大切な言葉は届かなかった。でも、別に良かった……。

給湯室にて、少し慣れてきた紅茶を淹れながら思う。

刹那が怒ったのは俺の為だろう。

刹那の言葉は理解したつもりである。

嬉しく思う。

しかし、俺の感情は冷めていた。

頭の中で酷く冷静に刹那の言葉を反芻する。

そして思い出す。

幸せになるのは自分以外の人。誰かの笑顔っていいだろ？
そう思わないか十八

「……………」

自然と口元が緩んでしまう。

今の俺を形作る言葉。

刹那の言葉は理解する。

でも、俺の信念は変えない。

約束だからだ。

朝の生徒会を終え、教室に戻って来た。

HRまではまだ早い時間だが遅刻王渉がいた。渉は自分の席に突っ伏していた。

「あれっ、珍しいね？ おはよう」

とても意外だが、とりあえず挨拶。

「シオ？ おはよう……」

???

なんだろうっ、渉らしくないな。

「どうしたの？ 何かあった？」

少し心配になって覗き込むようにしながら訊いてみる。

「いや、ごめん。違うんだっ、疲れてるだけってやつ？」

俺の声に慌てたよう顔を上げた渉は言う。

「って？ 渉？」

顔を上げた渉、その渉を見て驚く。頭には包帯、顔にはいくつも

の絆創膏が貼られていた。

「どっ、どっ、どうしたのっ!？」

明らかに異常な渉の怪我を見て狼狽える俺。渉は剣道部だが見る限り部活で負う怪我には見えない。

「はははっ! シオっ! 心配してくれるのは嬉しいけど、びっくりしすぎだしっ! 別に大した事ないよっ! ちよっとてこずっただけ……いや、なんでもない」

いつもの渉っぽくおちゃらけたと思ったら、はっとしたように口をつぐむ渉。

てこずった?

「何? 何かあったの?」

どっやら何かしらの事情があるらしい渉。興味本意というより本当に珍しい渉の異常事態に思わず尋ねてしまった。

「違う違うっ! なんでもないっばっ! 変な事は何も無いから心配いらなっつてっ!」

いつものようにハイテンションに戻るが、どこかばつが悪そうである。

「別に言いたくないなら言わなくても平気だけど、何かあるなら言っつてよっ?」

とりあえず追求はしないが、本当に心配なのでそう言っておく。

「うんっ！ はははっ！ シオちゃん優しいっ！」

「わかったわかった」

くねくねしながら甘えようとする渉をぺっと振り払っておく。

昼休み。

瞬と渉と三人で久しぶりに来た学食。前回とは違い、今日は三人一緒の席を確保できていた。

「あのさ〜瞬ちゃん」

三人で雑談しながら食べていた昼食、話が切れたのを見計らったように瞬を呼ぶ渉。

「なんだよ？ キモい呼び方すんなよな」

本当に嫌そうな表情の瞬。

「いや、この間のさ〜、合コンの話なんだけとさ〜……どうなったの？」

あ、そういえばそんな事があつた気もする。瞬を見ると瞬も困つたような意外そうな、どちらとも取れる微妙な顔をしていた。

「あ、あー、えー」

何か言おうとするが、困つた表情のまま唸つてしまう瞬。

俺には分かっている。

瞬が言つてた合コンの話は俺を元氣付ける為のちよつとした軽口だつたんだと思う。俺が刹那の事で酷く落ち込んでいた時の瞬なりの少し無理矢理なイベントだつたに違いない。しかし、刹那の心変わりか、本当に俺の素行不良による事なのかは分からないけど解決してしまつた（疑問点はたくさんあるけど）。

だから合コンの話はぶつちやけどうでもよくなつた訳だ。

「瞬？ 合コンはっ？ 合コンはいつやるのさっ！」

怒つたような不安そうな必死そうな渉。立ち上がってテーブル越しに瞬に詰め寄っている。

「渉、すまん……合コン、流れたわ……」

はははと困つたように苦笑しながらぶつちやける瞬。

「……？ 流れた、って？」

もはや顔面蒼白の渉。

「無しになつたつて事」

ガタンツ！

立ち上がったしていた渉が後退る、当然座っていた椅子が倒れる。椅子の倒れた大きめの音に多くの人が注目を寄せた。

「ノオオオオオオオオオー！！！！！！」

学食中に響き渡る渉の絶叫。両手をわななかせてふるふるしながら息の続く限りの絶叫……うん、すごいすごい。

流石にちょっとかわいそうになった。

放課後。

生徒会執行部の全員が生徒会事務室に集合していた。

「今日から来週の球技大会に向けての作業に入るわ」

教室と同じ位の事務室、本来の教室なら黒板のある辺りにあるでかい机に座った刹那が今日の予定を言う。

「曜子は去年あった問題点をチェック、ルナ達会計班は各予算の検討、瞬は必要備品の割り出し、私は学校への許可申請の作成に掛かるわ」

刹那の指示に了解の返事を返すと、みんな慣れたように作業に取り掛かる。全員が自分のらしき机に座ってファイルやパソコンとにらめっこしだした。

「……………」

……………。

「えっと、刹那、俺は？」

しばらくぼお〜っとしていたが、流石に居た堪れなくなったので訊いてみる。

「十八は私のサポートよ、の前にお茶を淹れて来なさい。全員分よ」

お決まりの高速タイピングでキーボードを叩きながら、お決まりのお茶の要求をする刹那。

なんだか執行部に入ってからお茶汲みしかしていない気がする。というより完全に刹那の秘書役になっている気がする。ヤダとか言っただけに。

「十八、早くしなさい。余計な事は言わせないでほしいわ」

不満だった訳ではないが、ほんの数秒だけ返事が遅れてしまった俺に催促をする刹那。『余計な』の辺りをやたらと強調した言い方

だった。

「ご、ごめん。すぐに淹れて来るよ」

怖かったのも確かだが、何もしないのは流石に嫌なので急いでお茶を淹れに行く。お茶汲みだろうがなんだろうが立派な仕事だ。

それからしばらくして。

みんなのお茶を淹れた後、俺は指示通りに刹那のサポートに徹していた。

サポートといっても刹那の指示した物を取って来たり、刹那が作った書類のコピーなど雑用にも程がある仕事だった。この程度ならいくら俺でもみんなに迷惑掛けずに済みそうで正直ホツとした。

「十八、これもコピーをお願い」

脇で待機する俺に出来たばかりの書類を寄越す刹那。

「了解。刹那、紅茶が切れてるけど、ついでに淹れて来ようか？」

空になった刹那のカップを見ながら言ってみる。仕事が少ないというのもあって、実は言うタイミングを計っていた。

「あら、気が利くわね。よろしく頼むわ」

終始ディスプレイに固定されていた刹那の視線が俺に向く。どうやら好感触だったらしい。

「…………刹那…………十八…………」

ぼそつと海老原さんの声。

「…………呼び捨て、です」

続いてルナちゃんの声。

「…………えっ？」

二人の声にみんなの方を見ると、全員が俺と刹那を注目していた。みんな作業の手を止めて、何か言いたそうである。

刹那、十八、呼び捨て。俺達の呼び方の変化の事を言いたいらしい。

刹那を見てみると…………つて、えっ？

「あー呼び方の事ね確かにみんなが疑問に思うのも無理はないかもしれないわねまあもちろんそれは十八が私の事を呼ぶ時に困ると思っただけだからんだけどそれは十八にも言えるわけ私も瞬も佐山なんだから今更名字で呼ぶのも呼ばれるのも微妙だし十八君って呼ぶのも何か微妙だしそれで私だけ呼び捨てにするのは不公平だから私の事も呼び捨てにしたもらったわけ大した事ではないわ昔馴染みってこういう時困るわよね参ったわ」

しーん

ぽかーんとした。

みんなも絶句してる。

「ほら、十八？ コピーとお茶よ？」

しーんとした事務室、呆気に取られた俺を促す刹那。

「えっ？ あっ、うん」

いろいろツツコミたいところだがやめておいた。

しばらくして許可申請が完成した。

「じゃ、私は職員室に提出してくるからみんなは切りのいいところで切り上げて構わないわ。後片付けをお願い」

そう言つと、刹那は職員室に行ってしまった。

「意外です、刹那先輩ちょっと焦ってましたです」

刹那が事務室を出たと同時にルナちゃんが言う。

「……初めて……かも……」

海老原さんがルナちゃんの話に乗る。

「何が？」

片付けをしながら訊いてみる。

「刹那先輩、いつも完璧です。揚げ足取るところ一個もなかったのですよ」

「確かに会長さんらしくなかったよな」

橘まで乗ってくる。

「へ、へえー」

「俺が見てても何か初々しいぞ」

瞬ですら今回の事は興味深いらしい。

「じゃあお疲れ様です」

刹那が戻って来て解散となった。

「俺、時間ないから急ぐよ。お疲れ様」

今日もバイトがある。時間的に急がないとヤバかった。

「十八、待って」

「刹那に呼び止められた。」

「……？ 何？」

「アドレス教えて？」

ポケットから携帯を取り出しながら言う刹那。

「えっ、アドレスって？ 携帯の？」

「当然でしょ？」

「もももちろん」

「あゝルナもです」

ルナちゃんが笑顔で駆け寄って来る。

「そうね、ルナ達と曜子とも交換しておいて」

当然のようにみんなに指示する刹那。

「ちょっと！ あたしは嫌なんだけど！」

橘である。

「却下ね。執行部で連絡を取る時に支障が出るわ」

あっさり橘を一蹴する刹那。

「く……っ！ 変なメールとか寄越したら先輩の携帯ぶん投げるからなっ」

恨めしそうに俺を睨む橘。

カチーン

「悪いがお前に送る気はゼロだ。安心しろ」

「なっ！ ちょっ！ くうう！」

俺の反撃に言い返すに言い返せない橘。

「冗談だ」

ちょっとかわいそうなので訂正してやる。

「うっせえばーか」

幼稚な反撃に転じる橘。

「冗談が冗談だ」

言い返す。

ぴっぴっ

「オツケーだぞ。これで全員分の番号もアドレスも交換終了だ」

自分の携帯だが、使い方のよく分からない俺は瞬にやってもらった。赤外線受信とか意味わからん。橘とうだうだ言い合ってる内に終わったらしい。

いや……………。

っていつかさっ！

なんだろ？ この役得感は!？

昨日とは違って変わってウキウキでバイトに向かう俺。

どうしても携帯をちらちらとチェックしてしまう。顔がにやける。

レストラン&ダイニングバーleaf

「おっはようございま〜すっ!」

意気揚々と挨拶して勝手口を開ける。

「お、おはよう」

「お、おう」

怪訝な顔で店長と永島さんが挨拶してくれた。

「じゃあ予約分のディナーの下拵えからですね」

着替えて準備を済ませた俺はふんふんとかしゃべつを刻み始める。

「何か気持ち悪いですね、あいつ」

「そつとしておいてあげよう……」

「……………」

おかしい。

バイトを終えて家に帰ってきてしばらく経つ。

おかしいぞ。携帯が鳴らない。着信はもちろん、メールも。

いい加減夜も遅くなってきたし、きつとみんなの家は電波状況がよろしくないんだろう、とか無理やりな言い訳をしながら諦めようとした頃。

ピュッピュッ

「来た、メールだ！」

f r o m 佐山瞬

s u b まだ起きてるか？

今夜は冷えるらしいから暖かくして寝るんだゾ！

「……………」

瞬…………お前って奴は…………。

とてつもない脱力感に駆られて布団に入った。

放課後の生徒会事務室。

昨日に引き続き、今日も球技大会へ向けての生徒会活動中である。

それはいいんだけど……、

「ちよつと十八！？ まだ終わらないの!？」

「あつ、いや。ごめん」

「あはは、慣れていないからしょうがないですよ。せんぱい、こっちは終わったから手伝うのです」

「甘やかせたらダメよ！ ルナ」

生徒会執行部。こいつらはとんでもない。

刹那は常に学年トップの成績、瞬と海老原さんも刹那に次いでトップを争う仲らしいし、ルナちゃんだって一年生でいつもトップ、橘はわからんけど進藤さんの成績もトップクラス。

なんでこんな超人軍団に俺が混ざってるんだ？

まったく仕事についていきません！

「……塩田……手伝う……」

自分の分の仕事を終えたらしい海老原さんが手伝いを申し出てくれた。

「あうう、すいません」

情けない。

生徒数1500人で催される球技大会に向け、生徒会事務室はもう戦場である。

コンコン

入り口を叩くノックの音。誰か来たみたいだ。

「失礼」

堂々とした態度で生徒が入室してきた。

「ああ、青葉先輩。どうしたんですか？」

瞬が対応する。

女生徒は元風紀委員長の青葉先輩だった。先輩は瞬を無視して何かを探すみたいに事務室をキョロキョロと見回している。

なんだろう？

「新しく執行部に入った生徒がいるらしいじゃない」

誰に問い掛けるでもなく言う。というか俺の事っばいし。

「あら先輩、受験生なのにヒマねえ」

作業の手を止めた刹那が言う。というかやたら嫌味っぽくて挑発的だよう。

「うるさいわね刹那！ 私は推薦狙いだから大丈夫なの！ ……で、もしかしてコレ？」

入り口近くにいた俺を指差しながら言う。座っている俺を立っている青葉先輩が上からかつたるそつに指差す。なんだろう………すこいつらい。

「あつ、あつ、と、塩田十八、です」

やたらと自信満々気な青葉先輩に気圧されてしまったのだろうか、声の上擦ってしまう俺。

「何よ、この冴えないのは………ずいぶん思い切った事したわね刹那」
「？」

チクツとした。

「仕方ないでしょ！ 人手不足だったんだから！」

グサツとした。

おいおい、何かフォローしてくれよ。

「俺の親友なんですよ、先輩」

とっさに親友がフォローしてくれた。

「あつそ。それにしても、少数精鋭が刹那のやり方じゃなかったの？ それともコイツって実はすごいのか？」

しーん

「……瞬？」

少し考えるような素振りの後、瞬に振る刹那。

しーん

「……十八？」

少し考えるような素振りの後、俺に振る瞬。

???

「えっ？ 何か無いのかよっ！」

つて、あつ！！ 二人して微妙な顔しやがった！

「……まあいいわ、せいぜい球技大会では失敗しないようにね」

とてもつまらそうな表情でそう言い残すと、散々人の事を罵倒した青葉先輩は行ってしまった。

「ははは、散々言われちゃったね十八」

苦笑の瞬、こんにやろ。

「あの先輩は暇人なのよ、気にしたら負けよ、十八」

それは無理ですわい。

「どんまいです、せんぱい！」

笑顔のルナちゃんのフォローが余計にイタかった。

すっかり暗くなった頃に解散となった。

「バイトの時間大丈夫か？」

帰りの道中、一緒に帰っている瞬が言う。

「あ、ああ」

気持ち上の空で返事をしてしまう。瞬と肩を並べて帰るのはいい、生徒会の無い日はいつも一緒に帰っていた。それは普通なんだが…

…。

隣を見やる。

「……………」

ぶすつとした刹那がいた。

作業を終えて解散した後、瞬と一緒に時計棟を出ると刹那に出会った。特にそうしよう、などと言いつた訳ではないが、一緒に帰る事になった。瞬と刹那は同じ家、俺も途中までは同じ道。俺達の関係なら一緒に帰らない方が不自然だった。

俺を挟むように右に瞬、左に刹那……わざわざこんな風に並ばなくてもよかつたろうに、とも思うが、これには理由がある。

ずっと小さい時から一緒だった俺達。昔から並んで歩く時の立ち位置は決まっていた。

俺がいて、左に刹那、右には遥、更に右には瞬。

時計棟を出た俺達は無意識にこの構図で並んでしまった。

……もちろん遥はいないが……。懐かしさからか右手が落ち着かない。遠い昔に繋いでいた小さな手の温もりを思い出す。

学校からしばらく歩いているが、今さら立ち位置を変えるのもおかしいので、そのまま通学路を辿っている。刹那は何やら仏頂面だ

が、瞬はどこか嬉しそうに歩む足を弾ませているように思える。瞬の気持ちはなんとなくわかる、瞬が望んでくれた『普通』。形だけかもしれないが実現してくれた。

決定的に足りないものはある。

しかし、この状況に喜びを感じる気持ちは分かる。いや、喜んでくれる瞬が堪らなく優しい。

大した会話も無く、瞬と弾む足を合わせていると刹那は口を開いた。

「十八、leafのアルバイトはいつから始めたの？」

何故だかむくれたような表情はそのままに言う刹那。ずいぶん急な質問だった。

「leafのバイトは春からだよ」

今年の春、じいちゃんが亡くなってしまってから。じいちゃんの葬儀に来ていた店長の優しさを受け取った時から……。

「そう、新聞配達は？」

???

なんだろう？ やたらと質問してくるな。

「新聞配達は高校に上がってからずっとやってるよ」

「ふーん……」

納得したというより知っていた事を確認したような刹那、やっぱりね、といった感じだ。

「何？ どうしたの？」

訳がわからないので自然と訊いてしまう。

「別に……いえ、十八、アルバイトをしないと生活は難しいの？」

並んで歩く刹那、前を向いたままで言う。俺に問い掛けてはいるが不自然なほど俺に目を合わせる事は無い。反対側の瞬が表情を強張らせたのがわかる。

「……そんな事はないよ、じいちゃんの遺してくれたお金もあるし、俺一人だけだから生活費だけなら新聞配達だけで十分だよ」

偽るつもりは無い、有りのままを言う。

「だったら夜のアルバイトを辞める事は出来ないの？」

やっぱり……刹那の話振りからして予想していた通りの問い掛けだった。刹那は俺を気遣って少し遠回しに訊いてくれたのだろう。

しかし、俺の返答は一つだ。刹那には悪いが、こう言う以外に無い。

「辞める事は出来ないよ」

刹那が息を呑んだのが分かる。

「どうして？」

やはり前を向いたままで再び問い掛けてくる、声の感じから苛立ったのがわかる。

「どうして？ そんなの決まってる。」

もう俺には時間が無いからだ。

leafは俺の欠かせない『居場所』の一つ。店長、永島さん、伊集院さんを始めとした出会った人達……絶やす訳にはいかない。

「刹那、もう止める。十八にだって事情があるんだ」

瞬が言う。

「事情って何よ？ 無意味なアルバイトに時間を費やす十八の事情って何？」

無意味。その言葉がゆっくりと俺の胸に染み込んでいく、毒のよう……。

今の刹那の言葉が昔の俺を気遣っている。今の俺ではない。隔たりの時間があつたとはいえ、一番身近だった幼馴染みが発した言葉

が俺の意識を急速に冷ましていく。いつでも一緒にいた幼馴染み、お互いを知り尽していたあの頃が嘘のようだ。

「刹那、もう止めろって」

明らかに苛立った声を上げる瞬。

「わかったわよ……」

口ではそう言うが、全然納得いってなさそうな刹那。しかし、と
りあえずは収まってくれたらしい。

俺は心の中で安堵すると、二人の間から離れる。

「「えっ？」」

二人同時に振り向き、小さな驚きの声を漏らす。

「俺、こっちだから……」

数歩離れた位置から二人に向けて言う。

二人の家は真っ直ぐ。俺はバイトがある為、駅への道へ逸れる。

「あ、ああ、もう別れ道か」

瞬。

「十八……？」

刹那。

「じゃ」

別れの挨拶を残して駅への道へ歩く。

「と、十八！」

酷く慌てたような刹那の声。

「どうしたの？」

慌てた様子の刹那に反して俺は冷静だった。呼び掛けに反応を返すが、あまり興味が無かった……早くこの場を立ち去りたかった。

「……あ、いや、また明日……」

刹那の口から漏れた再会の言葉。

いつか俺から刹那に送った言葉である。その時、返事を貰えなかった言葉をその刹那から聞けるとは思わなかった。

少し嬉しく思いながらも気付いてしまう、これもある意味『約束』

逡巡。

しかし、それも一瞬。

「バイバイ、瞬、刹那」

同じ言葉を返せなかった。

どこか悲しそうな表情の二人と別れる。……逃げるように。

ふと思う。

別れ道。並んで歩いていった道。進むべき道が逸れてしまった。胸が締め付けられる。あまりにも自分と重なってしまふ。

二人の悲しそうな表情が頭から離れない。小さい時にたくさん見てきた二人の笑顔が思い出せない。

五年前。さつきみたいに学校が終わって一緒に帰った後にいつも交していた言葉。くたくたになるまで遊んで一緒に帰った後にいつも交していた言葉。

バイバイ、瞬ちゃん、せつちゃん

何百回と交した言葉。あの時は再会の約束なんか必要なかった。別れが来るなんて夢にも思わなかった。バイバイで終わる事の悲しさなんて知らなかった。

視界がぼやけそうになる。俺には必要ない感情が溢れそうになる。

右手が妄想で包まれる。ある筈のない温もりに包まれる。

ああ、そうか……遥は『こっち側』だったな……。

少しだけ軽くなった心を頼りに駅への道を辿る。すっかり寒くなってきた外の空気、自然と体を丸めてしまう。

左手はポケットの中。

右手は外。

歩幅を合わせてゆっくりと歩いていった。

ねえねえ。

声が聞こえる。俺を呼ぶ声が聞こえる。いつも、いつでも、どんな時でも、一緒にいた女の子の声が聞こえる。

温もりがある。俺の手を包む温もりがある。その子の体温と俺の体温が混ざり合った温もりがある。

『どうした？ 遙』

俺は当然、応える。名前を呼ぶ。

すぐ隣、お互いの息が掛かる距離、お互いの鼓動が聞こえそうな距離。

『へへ、なんでもないよ』

笑顔、すぐ隣の彼女が近い距離を更に縮めながら笑う。繋いだ手はそのままに、俺の腕を空いている手で包む、悪戯っぽい無邪気な笑顔が更に近づく。

心から嬉しそうに笑う。

俺も笑う。嬉しいから。隣で笑う女の子の全てが大好きだから。

無駄に高いからぼそぼそと喋っていた声も。

右に跳ねるから伸ばせないと悩んでいた黒い髪も。
いつも自信なさそうに伏せ気味だった眉も。
悲しくても嬉しくてもすぐに涙で濡れてしまう大きな瞳も。
子供っぽい低い鼻も。
軽く開いてしまう癖がなかなか直らなかつた唇も。
みんなに虚弱の見本とまで言われていた華奢な体も。
俺が側にいないと俺の手を探して落ち着かない小さな手も。
クラス一鈍足の細い足も。
気にしていた低い身長も。

みんなみんな大好きだから。

『ねえねえ』

再び声が掛かる。距離はそのまま、体に伝わる温もりの面積もそのままだ。

『どっした？ 遙』

やはり俺は応える。

『えっ？』

????

遙？

えっ？

「あれっ？」

温もりが消えていた。目に映る光景が変わっていた。

遙が消えていた。

「シオ君？ どうしたの？」

「えっ？ い、伊集院さん？」

目の前には伊集院さんがいた。隣には誰もいない。

見回してみると、leaf？ そうだ、俺はバイト中だった。

「シオ君さつきからはおっつとしちゃってさ、いくら呼んでも返事してくれないんだもん」

「あ、あ、すいません……」

どうやら俺は妄想の世界に旅立っていたらしい……。こんな事は初めてだ。夕方の事もあって俺は相当参っているのかもしれない。

「別にいいけどさ……それよりシオくん？」

何やら為てやったり的な含み笑いの伊集院さん。

「な、なんすか？」

「遙って誰よ？」

「えっ？」

遥？

「彼女かなあ？」

「……は、るか……？」

俺の一番大切だった人の名前。恐らく俺が生まれてから一番多く口にした名前。瞬以外の人からこの名前を聞いたのは酷く久しぶりだった。

???

伊集院さんが遥を知っている筈がない。

「ち、ちょっとシオ君？ どうしたの？」

からかうような含み笑いから一転、酷く慌てたような伊集院さん。

「伊集院さん？ 遥を知ってるんですか？」

何やら俺を気遣ってくれている伊集院さん。しかし自分の状況なんかよりも、とにかくそれが気になった。

「いや、さっき自分で言ってたじゃない。どうした？ 遥？ って

自分で？

……そうか。馬鹿げた妄想を現実にまで引っ張り出したか……
…本当に俺は酷い状況みたいだな。本当に馬鹿げている……。

「十八君、ちょっといいかい？」

カウンターの中に立つ俺に声が掛かった。ハツとして反応すると、店長だった。

「どうしたんですか？」

「十八君にお客さんだよ」

自分の背後、店の入り口付近を立てた親指で指差しながら言う店長。

「お客さん？ 俺にですか？ あっ！」

刹那？ 薄暗い店内越しに見える人物は間違いなく刹那だった。刹那は何故か店内の様子を窺うように入り口から半身を出して見回していた。

「ど、どうしたの？ 急にこんな所に来て」

どうして刹那がここにとか、明日も学校で会うのに何の用なんだとか、色々と気にはなったが、とりあえず駆け寄って訊いてみる。すると刹那は不思議な物でも見たみたいに俺を凝視した。

???

「ちょっと来なさいよ」

「えっ？ ぐえっ」

ネクタイを掴まれて店外に引つ張られる。

「店長、ち、ちょっと抜けます」

呆気にとられたような表情の店長と伊集院さんに見送られながら、
ずるずると出入り口から引き出されてしまった。

強引な刹那がちょっと懐かしかった。

店の前、何やら不機嫌そうな刹那に睨まれる。刹那は制服姿だったが、いつもは着ていない黒いコートを着ていた。なんだろう、訳が分からない。ついさっきの夕方に一緒に帰ってはいたが普通に別れた筈なのに。一応引いてはくれたみたいだが、やはり夕方の事が
気に入らなかったのだろうか？

「何よ、その格好」

「えっ、あ、うん、変かな？」

俺のしている格好を見て目を細める刹那。俺はスラックスに革靴、
Yシャツにベストといった如何にもウエイターといった装いである。
自分でいうのもなんだが、かなり似合っていない。

「別に变じゃないけど……って違う、そうじゃなくて、十八」

「な、何？」

困ったような悩んだような表情で俺を見定める刹那。言い辛い事を打ち明けるみたいに唸っている。

???

なんだ？ なんとなく怒っているようにも見えるけど……。

「……ごめん」

ぼそつと聞こえた言葉。

「は？」

ごめん？ 謝られた？ 言った事が俺の頭の中の検索にあまりに一致しないので俺の頭の上に疑問符が浮かぶ。謝られる意味がわからない。

「瞬に散々言われたわ……え、と……あの子の十八の事を知りもしないのに無意味は酷いって」

「……………」

そうか……瞬。俺の、いや俺達の普通を願ってくれた瞬。夕方の刹那の言葉は俺だけではなく瞬にとっても重い言葉だったのかもしれない。

「私ってね、無駄とか余計とかが駄目なのよ。それに言いたい事ははっきり言っちゃうし、私の考えが間違ってるかと思ってない。で

もあなたにだって自分の考えがあつて譲れないものがあるのは、わかる……。さつきはちよつと平気そうで気に入らなかつたけど謝らなくちゃいけないのも、わかる……」

「……刹那」

刹那が自分を晒してくれている。瞬の指摘があつたとはいえ、俺なんかは自分を晒してくれている。

「……ごめん」

再び俺への謝罪の言葉を漏らす刹那。

……自分が嫌になる。自らを晒し、必要ない謝罪までくれた刹那。俺は偽つてばかりなのに……。

「……」

何を言えばいいのかわからない。刹那の謝罪に何を返せばいいのかわからない。偽り続けた俺には自分の惨状の晒し方がわからない。……どうやっても刹那を傷付けてしまいそうなんだ……。

「用はそれだけよ。私は帰るからあなたも中に戻りなさい」

何も喋らない俺を待つ訳ではなく、気持ちを切り替えたような刹那、今まで通りの口調で言う。

「……ああ」

頂垂れたまま、どうにか相槌を返すだけの俺。本当に自分が嫌に

なりそうだ。

「じゃあ十八、また明日ね？」

「えっ？」

印象が強かった言葉だからか、聞き返してしまっ。

「十八、また明日」

しっかりと俺を見据えた刹那、再び同じ言葉をくれる。

「……………」

頭の中がめまぐるしく廻る。

思考が廻る。

夕方の一件が廻る。

遠い昔の刹那が廻る。

遠い昔の遙が廻る。

今度は逡巡じゃない…………葛藤だった。

「十八、また明日」

三度目の同じ言葉。

外していた視線を合わせると俺の目を見つめた刹那と目が合う。先ほどとは違い、俺が返す言葉を待っている。真っ直ぐな視線を俺の瞳に合わせて、待っている。

「……うん、また、明日……」

言ってしまった。三度目に迷う暇なんて無かった。

「はい、またね」

そう言つと踵を返す刹那。振り返ること無く行ってしまう。駅前
の片隅のleafから続く煉瓦造りの歩道を歩いて行く刹那。

外の空気は冷たい、早く中に戻らないと俺のしている格好では凍
えてしまいそうだった。

でも、俺の足は動かない。動けない。

彼女を追う俺の視線は彼女が見えなくなるまで外せなかった。

帰り道、寒空の下をいつも通りにゆっくり歩いている。

いつものように星が綺麗だった。

いつものように月が綺麗だった。

いつものように僅かに輝く町のネオンが綺麗だった。

いつものように見るものが全てが眩しかった。

しかし……いつものように辛くはなかった。

『じゃあ十八、また明日ね？』

彼女の言葉が俺を暖めてくれている。誰もいない家に戻る帰りをこんな軽い足取りで辿るのは初めてだった。

その軽い足取りが嬉しくてゆっくり歩いていたが、僅か15分足らずの帰り道。気が付くと家の門が見えてきていた。

ポケットから家の鍵を取り出しながら顔を上げて少し驚く。

家の門の前……………。

「……………瞬」

瞬がいた。冷たい空気に体を丸めた瞬が門に寄りかかるように立っていた。

ポケットに両手をつっ込んだ瞬は俺を見付けると口を開く。

「……………おかえり」

「……………」

とても自然で優しい言葉だった。……………なんだろう、胸が熱い。

「……………ただいま」

言葉を返す。同時に胸の熱が増した。……………この言葉を返す事がこんなにも嬉しい事だなんて知らなかった。

「ほら、早く中に入ろうぜ？ さみーよ」

いつもの瞬。わざとらしい位にいつもの瞬。

「……………うん」

もう深夜といってもいい頃。俺は自分の部屋で瞬と布団を並べていた。

後は寝るだけ。

照明と暖房を落とした暗闇。布団の温もりと隣の布団にいるヤツの温もり。念の為言っておくが直接感じている訳ではない、布団は別々である。……………とてつもない安心感がある。この安心感のお陰だろうか、瞬が泊まりに来てくれる時、俺は悪夢を見ない。

「十八、寝ちやつたか？」

暗闇の中、瞬の声が俺に届く。布団の衣擦れの音は無い、瞬は横になつたままだろう。

「起きてるよ、何？」

「怒らないで聞いてほしい……遥の事なんだ」

低い声のトーン。それだけで瞬の心境が感じ取れる。

遥の事。『あれ』以来、間違いなく瞬がその話題を振るのは初めてだ。

考える。瞬が泊まりに来てくれた理由。一つは落ち込む俺を気遣つて。もう一つはこれを訊く為。何故訊くのか？ いや、考えるまでもない……全て俺の為だろう。

「怒る筈がないよ……。なに？ 瞬」

だから俺は瞬の話を聞かなくてはいけない。

「……わかった、じゃあ訊く。遥、いや、ハルちゃんとお前はどんな約束をしたんだ？」

「……………」

約束。

遥と俺が交した約束。

俺を蝕む傷痕が痛みを帯びる。

「……俺なんかにお前が背負っているものの重さは計り知れない。けど十八……やっぱり知りたいよ」

暗闇に乗せて続く瞬の言葉。心からの言葉だろう。

「……瞬」

遥は瞬にとっても深い繋がりを持った存在だった。そして瞬の中に在る俺という存在……俺の中に広がる嬉しさが溢れてしまいそうだ……。

「……遥ってさ、何をやっても駄目だったろ？」

自然と語り出していた。

「……………」

瞬は何も言わない。でも無言の相槌を感じ取る。長い俺と瞬の親友という関係。稀に言葉が要らない時がある。

「俺と瞬、刹那と遥。いつでも一緒だった。いつもみんなの中心の刹那は何だっただけ来た。瞬だっただけ来た。何だっただけ来た。俺もあの時は何だっただけ来た。……でも、遥は違っただけ？」

俺達四人の幼馴染み。刹那、瞬、俺、遥。

いつも中心にいたのは刹那、俺達どころか学校全体の中心だった。いつも刹那や俺に流されて行動していたけど何でも出来た瞬間。刹那に真っ先に引っ張り回されていた俺、後ろの遥を気遣いながらもあの時の俺は平気で行っていた。

遥は違った。

いつでも一緒にいたけど、明らかにみんなの足を引っ張っていた。自分に自信がなくて隠れてばかりいた。泣いてばかりいた。何も出来ない自分が大嫌いだと言っていた。

「だから俺は……遥は俺が守るって……約束、したんだ……」

「……………」

瞬は何も言わなかった。いや、言えないのかもしれない。俺がこの約束を守れなかったのは瞬も知っているから……俺が地獄に堕ちた瞬間も知っているから……。

もう寝よう、俺のその言葉を最後に暗い部屋は静寂に包まれていた。

俺は瞬のお陰で安心して眠れる筈なのに眠れなかった。瞬も同じなのだろうか、いつもの静かな寝息が聞こえて来ない。時計の音が気になる。瞬が泊まりに来てくれた日にこの音が気になったのは初

めてかもしれない。

その時計の音が気になってどれくらいの時間が経ったか考えようとした時。

「十八」

やはり眠っていなかった瞬、俺の名前を呼ぶ。俺が眠っていないのも気付いていたらしい。

「……何？」

俺は静かに応える。きつと瞬はさっきの話に対しての言葉をくれるだろう。しっかり聞かなくてはならない。

「俺は、いや、俺と刹那はハルちゃんの代わりにはなれない……。けど十八、忘れないでほしい……。俺達は十八の傍にいる……。」

「……………」

静寂を取り戻した暗闇。

瞬はそれっきり何も言わなかった。

上手く見えない天井がどんどん霞んでいく、滲んでいく、瞬がくれた言葉が俺に染み込んでいく。隣にいるヤツが道の逸れた俺を呼んでくれている気がする。

今の瞬の言葉。さっきの刹那の言葉。二人の言葉が頭から離れな
い。

俺は遥に縋る人の大切さを嫌というほど教わった。誰かの為とい
う事がどれだけ大切かを知っている。

遥が俺に縋ってくれたように……俺も縋っていいのだろうか……？

遥……俺はもう少しだけ『あっち』に残ってもいいのだろうか？

久住ヶ丘高校、三大スポーツイベント。

体育祭。

武道祭。

球技大会。

来週行われるのはその内の一つである球技大会。

開催期間は三日間。

初日は団体スポーツによる各クラス対抗戦。

二日目は希望参加者による個人戦。

三日目は希望参加者による部活対抗戦。

初日以外は任意参加で、やりたくなければ見学していればOKである。それぞれの競技内容は毎年違っていて、去年の場合は初日にサッカー、二日目は卓球、三日目はバスケットだった。

ちなみに三年生は受験生達への配慮から、二日目だけ参加可能らしい。

「……という訳で、スタメンは以上の皆さんです」

黒板の前に立つ委員長が言う。

ここは2年F組の教室で、今はLHR中である。ロングホームルーム

教壇付近に立つ委員長の後ろの黒板に書き出されているのは球技大会の初日のクラス対抗戦のスタートメンバー。競技内容は今年もサッカー。書かれている名前には数人いるサッカー部のヤツやクラスでも一番運動神経のいい瞬とそれに次ぐ渉の名前がある。当然運動音痴である俺の名前は無い。

「去年は二回戦敗退だったからねっ！ 今年はやるよっ！ ひゅっ！ ちえいつ！」

前の席の渉が誰に言うでも無く宣言している。サッカーなのにバツトの素振りのような動きをしている為、とてつもなくアホっぽい。

「このメンバーならいけるかもな。俺も少しやる気出してみるか」

珍しく瞬が渉の意見に乗っている。瞬の言う通り、ウチのクラスは運動部の比率が高い、そして何より学校内でもトップクラスの運動神経を誇る瞬と渉がいる。十分優勝も可能であろう。

「やる気だねえ、瞬君と山崎君」

「えっ？」

頭の中で解説に専念していると隣から声が掛かる。声の主はもち

るん隣の席の阿部さんである。

「なんだか楽しみだねえ、塩田君」

阿部さんの方を向いてみると言葉の通りに楽しそうに笑う阿部さんと目が合う。教室に刹那が来たあの一件以来、阿部さんとは割と喋るようになった。

「そうだね」

実際俺が参加する事に関してはげんなりだが、瞬や渉、クラスメイト達が活躍する姿を見れるという事は楽しみかもしれない。ちなみにクラス対抗戦ではメンバーの半数は女子を入れなくてはいけないルールがある。活発そうな阿部さんは運動神経も良いらしく黒板のスタメンの一人として数えられている。

「あんまり乗り気じゃないでしょお？ 強制メンバーチェンジで絶対に一回は参加になるよお？ 塩田君も頑張れば活躍出来るってえ」

俺の流し気味の相槌から察したか、核心を付きながら笑顔でしゃべってくる阿部さん。『出来るって』の辺りで俺のおでこをぐいつてした。阿部さんの言う通り、クラス対抗戦はクラス全員強制参加、サッカーであるなら一分でもいいから一度はフィールドに立たなくてはならない。この学校は訳のわからんところにこだわる傾向がある。

「い、いや、参加したら頑張るしかないけどね、はは」

瞬と渉以外のクラスメイトと、しかも女の子と話すのは、どうも

慣れない。話し掛けてくれる阿部さんには申し訳ないが上手く話す事ができない俺。

「まあ怪我しないように頑張ろうねえ」

俺のつまらない回答を気にするでもなく、朗らかに笑う阿部さん。

夏休み明けに席替えしてしばらく経つが、まともに話していない今までを、もったいなかったな、と思ってしまった。

放課後、生徒会事務室。

今日も球技大会へ向けての生徒会活動。俺は昨日与えられたばかりの自分の机に座っていた。みんなの机は事務室中央に向かい合うように並んでいるのに、俺の机は黒板付近の刹那の机の真隣の入りの目の前である。恐らくいつでもお茶汲みやコピーに行けるようにだろう。

「今日は球技大会の準備作業に入る前に部活対抗戦のメンバーを決めるわ」

会長机に座る刹那がみんなに今日の予定を言う。

???

部活対抗戦？ おかしいぞ、確か今年は。

「ちょっと待ってよ、三日目の対抗戦に執行部が参加するの？」

「当然ね、せつかくの学校行事に参加しない手は無いわ」

いやいやいや、そうじゃなくて。

三日目の部活対抗戦。

「今年は野球だろ？ メンバーって言っても足りないじゃん！」

そう、今年の部活対抗戦は野球。すなわち参加する人数はどうしても9人必要になる、そして生徒会執行部の部員数は7人。

「二人足りないじゃん！」

やたらと堂々とした刹那にツッコまずにはられない。

「足りないのは3人よ、もちろん補充要員は確保してあるわ」

3人？ 補充要員？

「私は出ないから」

当然でしょ？って感じの刹那さん。

「いやいやいや、意味がわからないよ」

「あゝもつっ！ うるっさいわねっ！ 私は監督なの！ いいか

ら黙って聞いてなさい！」

痺れを切らしたように無理矢理まとめられてしまう。

「決めると言っても既に私が決めてあるから発表するわ」

えっ？

「一番センター塩田、二番レフト補充要員1、三番キャッチャー橘、四番ショート佐山、五番ピッチャー毬谷、六番セカンド補充要員2、七番ファースト進藤、八番サード補充要員3、九番ライト海老原、以上よ」

いつもの自信満々の口調で、さも当然の如く語る刹那。

ツッコミどころが満載過ぎてツッコむにツッコめない。

「私の綿密なシュミレーションによる完璧なシフトよ。このメンバーで私の指示が有れば間違いなく優勝出来るわ」

ツッコミどころがレベルアップした。

ちなみに触れてはいなかったが、執行部の他のみんなは終始真顔で傍観している。ああ、いつもの事ですよ、とでも言わんばかりである。

「三日目に出る事に関しては俺も賛成だけど、一ヶ所だけちょっと変えないか？」

傍観に徹していた瞬が言う。

「何よ」

自分の考えたメンバーが不服なのか、とでも言いたそうな仏頂面で応える刹那。

「一番と八番の打順を変えよう。本当なら守備位置も変えたいところだがショートに俺がいればまあ大丈夫だろ」

親友が俺の言いたい事を言ってくれた。

そう、だいたい三日目の野球に出る事だけでも俺的にどうしようもないのにトップバッターなんて恐れ多い。というよりみんなのお荷物になるのが明白な俺が打順が一番回ってくるトコなんてマズイと思う。

「何よそれ。十八が一番じゃないとかなり計算が狂うわ、十八が少しやる気を出せば大丈夫でしょ？」

???

刹那の言ってる事が少しおかしいぞ？

「はあ？ 何言ってるんだよ刹那」

瞬も俺と同じらしい。ひょっとして刹那って……。

「瞬が十八に甘いのはわかってるけど、そうはいかないわ。十八は一番センターで断固決定よ！」

「いや、そういう意味じゃなくて……」

「私の決定は絶対です!」

結局、何を言っても退いてくれない刹那に押し切られてしまった。

生徒会活動後。瞬と一緒に帰り道を歩いていた。

「はぁ……」

時計棟を出てしばらく、堪り兼ねたようにため息を吐いてしまう俺。

「なんだかおかしな事になっちまったな、十八」

隣に並んで歩く瞬もそうは言いが疲れたような声である。

「執行部に入った途端にこんな激しい難関があるなんて。頑張るは頑張るけど……刹那、期待しちやってるよなあ」

そう言つと俺は再びため息を吐いてしまつ。

「ああなつた刹那は絶対に止められないんだ。仕方ないな、俺が何とかフォローするからやるしかないぞ?」

どうしようもない愚痴を溢す情けない俺を律儀に気遣ってくれる

瞬。

「刹那が集めたっっていう補充要員に期待するしかないかな？」

その補充要員とやらが活躍してくれれば俺のお荷物具合も少しは緩和されるかもしれない。

「……たぶん期待出来ないと思うぞ……」

「えっ？ どうして？」

「当日になれば分かるが、刹那の変な趣味が明らかになるぞ」

「??？」

苦笑混じりに何処かばつが悪そうに言う瞬。あまり言いたくない事らしい。

「ところで十八、さっき気付いたんだけど、刹那のヤツ……」

急に話が変わったが、俺はすぐにピンとくる。

「ああ、俺の事を運動音痴とかじゃなくて怠けてるだけだと思ってるみたいだ……」

さっきの刹那のスタメンにしろ、そのスタメンを断固として変えない事といい、刹那はそう思っていると見て間違いない。

「はあ……」

当日の事を考えると吐く息が全てため息になってしまつう。

全校のみんなの前で恥をかくのはいい、でも俺のせいで執行部が恥をかくのは嫌だった。いや、それだけじゃない。俺は刹那の前で恥をかくのが嫌なのかもしれない。

「そんなに気負うな。俺がどうにかフォローしてやるから、楽しくいこうぜ楽しくっ!!」

にやはつと笑う瞬。釣られて俺も軽くにやけてしまった。

「お、お前っ、余裕だけど大丈夫かよ？ クラス対抗戦と部活対抗戦の他にも二日目の個人戦にも出るんだろ？」

二日目の個人戦、今年はテニス。なんだかんだこついったイベントが好きらしい瞬は当然のようにエントリー済みだった。去年の個人戦にも出て、一年生ながら準優勝した栄光がある。

「十八の応援があればなんとかなるよ。頑張るからさ、なっ？」

きらきらした視線を向けてくる瞬。

ぞわつとした。

「勝手にしてくれ……」

当然吐き捨てておく。

球技大会。

こういったイベント行事はいつも瞬に隠れるように参加していた。

執行部に入って間もないのに、何やら波乱の予感がする。

学校行事。学校での勉強以外の時間の一つ。

瞬や阿部さんのように楽しみにしている生徒。授業が無いだけで嬉しい生徒。俺のように行事毎に気分を落とす生徒。ただでさえ生徒数の多いこの学校、みんなそれぞれの思い入れがあるだろう。

そして、それぞれに残る大切な思い出になるだろう。

楽しかった思い出。

辛かった思い出。

仲のいい友達との思い出。

そうでない新しい友達との思い出。

それぞれに残る大切な思い出があるだろう……。

俺以外は……。

曇一つない晴天だった。

球技大会当日。黒に青いラインが入った学校指定ジャージを着込んだ俺はグラウンド前の広場に来ていた。時間はまだ始業前、今日の場合は球技大会の開会前である。

「私達は第一から第三までグラウンドのライン引きと来賓席のテント設置作業よ」

俺と同じように指定ジャージを着込んだ刹那が朝の仕事の内容と言う。刹那に向かい合うように並んだ俺を含めた執行部の部員達も同じように地味な指定ジャージ姿である。

「何か思ったより地味な作業だな」

ジャージも地味だが指示された作業内容も地味極まりないものだった。刹那には聞こえないようにひそひそと呟いてみる。

「俺達がやる当日の作業なんてこんなもんだよ。十八のいた体育委員の方がよっぽどメインの仕事をしてただろうさ」

隣に並ぶ瞬がひそひそと返答をくれた。

「ふうん」

「ちょっと！ お喋りしないの！」

刹那の注意の声上がる。

「いっ、いっめん」

聞こえないように話していたのに。刹那は地獄耳と、覚えておく。

それにしても刹那、張り切ってるなあ。

うちの学校の校庭は五つ。今回使うような土のグラウンドが三面、サッカー部専用の芝のグラウンドが一面、陸上部専用のウレタン製の全天候グラウンドが一面。今日のクラス対抗戦も決勝まで上げればサッカー部専用の芝のグラウンドでプレイ出来るらしい。

俺と瞬は二人でグラウンドのライン引きを受け持つ事になった。他のみんなは体育委員と共にテント設営やイス並べだ。

右手に石灰の詰まった赤いラインカーを引き擦りながら校庭に下りてみた。

「あれっ？」

見回した校庭に違和感がある。

人がいた。校庭のど真ん中に背中を向けた人が佇んでいた。

「執行部ではないし、体育委員でもなさそうだ、誰だろうな」

そう呟く瞬と共に近付いてみる。

「あれ？ 涉じゃん？」

近くに寄って見てみるとその人物は見慣れた後ろ姿をしていた。

涉は何故か小脇にサッカーボールを抱えている。というか白い半袖半ズボン……ユニフォーム？

「涉……？」

呼んでみる。

「えっ？ ああっ！ 瞬とシオっ！ おはようっ！ 今日もいい天気だねっ！ サッカー日和だねっ！ イヤッハウツ！」

いつもの事だがいきなりウザいハイテンションを撒き散らす涉。振り向いた涉の格好は正にサッカーのユニフォーム姿だった。

「何やってんだ？ お前」

とても疲れたように尋ねる瞬。

「何をやってるって何を言ってるんだよロベ〇トっ！」

ロ〇ルト？

何を言っているんだ？ このアホは。

「ボールは友達さっ！！」

小脇のボールをぐいっと俺達に誇示しながら爽やかに微笑む渉。

めんどくせえ……。

「十八……。ほっという作業に掛かるっ……」

「ああ……」

どつと疲れてしまった俺達はアホを放置して作業に取り掛かる事にした。

「あれっ？ ちょっと、二人ともっ？ ねえっ！」

無視！

ライン引きを終えた俺達は広場に戻って来ていた。元体育委員であった俺や瞬の手際の良さのお陰でライン引き作業は早々に終わってしまった。

広場には先ほどまで無かったイベント用のテントがずらりと設置されている。テントには『久住ヶ丘高校』と仰々しい書体で書いて

ある。その一画のテントに何やら雰囲気の違いを感じる。明らかに雰囲気の違いそのテントには『生徒会執行部』とある意味仰々しいものが書いてあった。

「あなた非常に遅いわ！」

そのテントの下、設置された長机の向こうに並ぶ折り畳みイスに座る刹那の声。いつものゴージャスな会長机ではなく簡素なテーブルとイスに座った刹那、堂々とした態度や凜とした表情はいつもとなんら変わらない。

「俺？」

かなり早く作業を終えた筈なのに刹那はお怒りのご様子、なんでやねん。

「十八、お茶よ」

「……………」

うわぁ…………怒ってる理由ってそれかい。瞬と二人、絶句した。我が儘にも程があると思いますよ。

「聞こえないの？ 十八！」

「あつ、いや、了解だよ」

場所が変わるうがイベントだろうが何だろうが俺の仕事の基本がお茶汲みなのは変わらないらしい。

始業の時間と同じ時間に開会式となった。

俺は今までとは違い、2年F組の列ではなく生徒会執行部の列に並んでいる。三年生を除く全校生徒1000人に向かい合う形である。もちろん非常に落ち着かない。

「……以上を守り、正々堂々球技大会を楽しみましょう。では各クラスの体育委員の指示に従い、所定の場所に移動してください」

おっと、刹那の開会の挨拶が終わったみたいだぞ。

「俺達はテントの下でいい筈だ。行こう」

瞬が俺だけではなく執行部のみんなに言う。瞬がいると長年付き合ってきた気兼さから緊張が和らぐ、それにこうして率先して間違いないように引っ張って行ってくれるから楽、というより安心する。

「せんばい！　せんばい達のクラスの試合はいつ頃ですか？」

ルナちゃんである。並んでテントに向かう途中にルナちゃんが隣に並んで話し掛けて来た。

「F組は第一グラウンドで三試合目だよ」

クラス対抗戦はあまりにクラスが多すぎるせいかトーナメント制である。総当たり戦をやっていると一日二日じゃ絶対に終わらない

からだろつ。クラスのみんなには悪いけど俺的には一回戦敗退した
いと思ってる。

「ルナ達のクラスとは被ってないです。トモちゃんと円ちゃんと三
人で応援に行くです！」

「えっ？ 俺らの？」

「当然です！」

そう言つとむぎゅつと俺の腕に抱きつくルナさん。

???

「は、は、は、はわにゃふっ！ 何をやってるの！ ルナっしゃん
！」

「しゃん、ですか？ あはは！ わかんないけどせんぱいおもしろい
です。とにかく応援は任せるです！ 盛り上げるですよ！」

そしていつかのように肩越しにかわいすぎる笑顔をくれるルナち
ゃん。

「う、うん、あり、がと、頼む、よ」

「はい！」

元気な返事と共に俺の腕から離れるルナちゃん。とてとと駆け
て行くルナちゃんの背中をほんわくと見送る。

「　　つて、えっ？」

ルナちゃんが駆けて行った先には瞬。その瞬の腕にむぎゅっと抱きつくルナちゃん。

「えええええーっ！！！」

なんだろう、なんだろうなんだろう！　何故だか納得いかない！

「くあーっはっはっ！　なぐに期待してたんだか知らねーけど残念だったな先輩よっ！」

狼狽える俺に大爆笑の橘が立ち塞がって来た。

「ルナには引っ付き癖があんだよ！　別に先輩だからって訳じゃねえつての！　ええーっ！　じゃないって先輩！　あっはっはっ！」

「なっ！　えっ！　くっ！」

これみよがしの橘、悔しいが何も言い返せない。

「くっくっくっ」

いつの間にか背後にいたらしい進藤さんの嘲笑。橘に笑われるのも悔しいが、この子の方が地味に傷付く。

引っ付き癖。

あの見た目でそれは反則だろ。

第一試合。対抗戦は各校庭で三つの試合を一辺にやる。その中の2年A組対2年E組。刹那のクラスと海老原さんのクラスの試合である。

瞬と観戦しに行く事にした。

「どう？ 見える？」

ギャラリーの人垣に混ざって見回すが俺にはよく見えなかった。クラス対抗戦のサッカーは通常のチーム11人ではなく、男子8人女子7人の15人。女子も混ざってのサッカーだからだろう。既に始まっていた試合を見ってみるが、あまりにもみくちゃで意味がわからなくなっていた。

「あつ、いたいた、海老ちゃんはベンチにいるな」

瞬が海老原さんを発見した。大きめの指定ジャージを着込んだ海老原さんはベンチの端っこに座ってぼくっつとフィールドを眺めていた。

「刹那は？」

フィールドを走り回っている生徒達やA組のベンチも見てみるが刹那らしき人物はいない。

「刹那は、まあ、いないだろうな」

ぼそつと呟く瞬。

「はあ？」

「十八は刹那が授業免除なの知ってるか？」

授業免除。いつだか刹那が言っていた。

「ああ。ちょこつとだけ聞いたよ」

「刹那のヤツ、少しでも男が絡む授業とかにほとんど出ないんだよ」

「えっ！ そうなの？」

「ああ。刹那は大の男嫌いなんだよ」

そういえば前に阿部さんがそんな事を言っていた気がする。昔はそんな事はなかった筈だ。

「俺は姉弟だからだろうけど、どうやらお前も平気らしいな。良かったな十八」

にいくつて笑う瞬。

俺はどうしても照れてしまう。執行部に入ってから刹那の我が儘な態度もなんだかどうでも良くなってしまった。

「まあ刹那がその授業免除を維持する為には会長で在り続ける事と、

全ての定期テストで一番を取り続けないといけないらしいけどな」

「マ、マジかよ」

凄え。刹那が執行部の仕事を張り切るといっかっしっかりやるのはそのせいもある訳か。

なんだってそこまでやるんだろう？

「おっ、海老ちゃんが交代するみたいだぞ」

「えっ？」

審判の体育委員に指示されたフィールドに立っていたE組の生徒がベンチに走って行く。その生徒に代わるように海老原さんが立ち上がって待機していた。

「海老原さんって体育とか、どうなの？」

実際どうかは分からないが細くて低めの身長でおとなしい海老原さん、失礼だが俺と同じようにこの強制メンバーチェンジは辛いのではないだろうか。

「海老ちゃんはもうびっくりする位の文系だからな、十八の思っている通りだよ」

「……………」

やっぱり。

ああ、心配になってきた、心配になってきたぞ。

海老原さんがフィールドに立つと試合再開となった。E組のゴール前、A組のフリーキックから始まるらしい。海老原さんはゴール前の密集ではなく少し離れた所でぼくっつとボールを見つめていた。

ホイッスルと共にA組の男子生徒がボールを蹴る。直接狙ったらしいボールは両チーム密集の頭を越え、枠内を捕えるがキーパーに弾かれて海老原さんの方に……えっ？

「海老原さんっ！！」

思わず叫ぶ俺。

それほど勢いの無かったボールは数回のバウンドを経て海老原さんの足元に辿り着く。海老原さんはほとんど動かずにボールをキープしてしまった。

じい〜

やはりほとんど動かずにボールを見つめる海老原さん。両チームのプレイヤー達がハイエナの如く海老原さんに、いや、ボールに群がって行く。

「海老原さん！ 早く早くっ！！」

若干テンパリ気味の俺の声が届いたのか、くるつと俺達の方を向く海老原さん。『……なに……？』って感じでのんびり首を傾げるだけだしっ！

「違つつて！ ボール！ 海老原さん危ないってえっ！！ ほらほらあっ！！」

身振り手振りを混ぜて必死にアピールする俺。

もうダメだ！と目を瞑ろうとした時。ピン！としたように顔きながら相手ゴール側にボールを蹴ってくれた海老原さん。ボールはハイエナ達をすり抜けて相手ゴール方向にいたE組の生徒の足元に転がって行った。

A組を散々引き付けた海老原さんは結果オーライになったようだ。

「……ふう……」

自然と安堵の息を吐いてしまう。なんか知らんがどっと疲れてしまった。

「ぷっ！ くくくっ！ 十八、やっぱりお前最高だよ」

「えっ？」

隣の瞬。何かガツポにはまったのか堪えられない笑いを必死に堪えているように見える。腹まで抱えて涙まで溜めている。

???

「な、なんだよ！ 俺ってなんか変な事やったか？」

「い、いや、ごめん。海老ちゃん危なかったもんな！ くくくっ！」

「なんだよお！ 笑うなよな！」

俺の必死さが面白かったのだろうか？ 笑いまくる瞬間に非常に納得がいかない。

結局のところ、試合は2対0でA組の勝利だった。

第三試合。俺達の一回戦、午前中最後の試合である。

「行くよっ！ 瞬！！」

名前を呼んだと同時に右足でボールを強烈に蹴り上げる。わざわざ名前を言ってしまったら相手チームにもバレバレだろうってツッコミたいが、そんなもんは関係ない。

慣性の法則に逆らうかのような不自然な放物線を描く凄まじい勢いのボールは相手チームが反応する間もなくフィールド中央の左サイドにいた瞬の前方に落ちる。

既にマークを振り切っていた瞬はすかさず暴れようとするボールを右足で相手ゴール側に押し出す。それに続くように瞬の体も相手ゴール側に加速する。速い。蹴り出したボールも踏み出した一歩目も最初からトップスピードだ。一人、また一人と相手チームのディフェンスをすり抜ける瞬、相手のディフェンスも何かやってみたいたが、あまりに速すぎるので瞬はただ通過しているようにしか見えない。

最後の一人を抜き去った瞬はゴール前に辿り着く。ゴールキーパーと一対一、しかし瞬のスピードは全く緩まない。対して大柄な相手チームのゴールキーパーは瞬のスピードに怯む事なく前に出て来る、瞬との距離を詰めてゴール枠の面積を狭めると同時にプレッシャーを与えるつもりだろう。理にかなった条套手段ではある、瞬に向かつて行く度胸も大したもの。だが相手が悪かった、ただでさえ

一対一ではキーパーの方が不利、それが瞬であるなら方が一も有るまい。

一瞬。正に一瞬でスピードをゼロにした瞬はそれまでのスピードが嘘のような動きで緩やかにボールを蹴る。

ふわりと舞うボール、飛び出したキーパーの頭の上をゆっくり越えるループシュート。

ゴール。

所要時間は10秒に満たなかっただろう。

あまりのあっけなさに目にした全員が唖然としてしまった。瞬と渉は駆け寄り合ってハイタッチなんかしてるが、周りでは味方のF組の生徒でさえ唖然としていた。

その暫し後、試合終了を告げるホイッスル。

試合結果は11対2でF組の圧勝、というかほとんど瞬と渉だけで勝利してしまった。相手チームであったI組の連中も二人のマークを三人つけるなどしていたが二人はものともしなかった。

ちなみに俺は後半開始直後にチラッとだけ出て、ズッコケてオウンプスしたり、せっかくクリアしたボールがつっ立っていた俺の頭に当たってオウンゴールしたりした為、オウン引っ込め、非国民、などのギャラリーの熱い声援を受けて退場となった。

少し回想しよう。

『ぎゃっはっはっ！ 見てみるよルナ！ カエルみたいにひっくり返ってるよ！ だせえ！ だせえよ先輩！』

『トモちゃん！ 一生懸命やってる人を笑っちゃダメだよ！』

『くっくっく』

……………。

ルナちゃん達は俺の情けない姿を見るだけ見たら執行部の仕事に戻ってしまった。

ちなみにオウン引っ込め！や非国民！は全て橋の声援である。

スポーツの時に情けないのは慣れ切っていたと思ってたけど流石にへこんだよ、ははは……………。

272

「お疲れ様です、お二人ともっ」

ベンチに戻って来た瞬と涉にタオルを渡しながら労う俺、雑魚キヤラ丸出しである。

「いやっはあっ！ お互いを譲らないいい試合だったよねっ！ シオも惜しかったねっ！」

どごが？

「このいい調子が続いてくれれば、やっぱり優勝も狙えそうかもしれないな」

いやいや、あれだけ圧倒的な試合の後に息一つ切らしていない二人からそんな事言われても困るって！俺が相手チームだったらとつづくに試合放棄しとるわ！

「まあ無事に二回戦進出も果たしたしっ！お昼ご飯にしようお昼ご飯っ！」

よっぽど嬉しいのか楽しいのか、ちっちゃい子供のようにはしゃぐ。渉。

「よし！三人で学食行くか！」

なんだか瞬までテンション高いし。

いつもの第一学食ではなく一番近かった部活棟の学食、通称『特食』にやって来た。この特食、名前の由来は特盛り学食である。瞬と渉のリクエストで今回はここで食べる事になった、二人とも相当お腹ペコペコらしい。

「な、なんだよ、このメニュー」

実は特食に来るのが初めてだった俺はいざ食券を買おうと食券購入機を見て驚愕した。

食券機に書かれているメニュー。

A 定食（ラーメン大盛り、餃子十個、チャーハン大盛り、サービ
ス杏仁豆腐特盛り）

B 定食（カツカレー超大盛り、サイドサラダ5種）

C 定食（牛丼お代わり自由、豚汁大盛り、唐揚げ大盛り、お新香
特盛り付き）

な、なんだこの異常なメニューは？ 食べ切ったら何か貰えるの
か？ その他のメニューも見てみるがどれも有り得ない量の物ばかり
だった。

「俺は無難にB定かなあ」

おいおい、瞬君？ 長い付き合いだがお前がそんな大食いだなん
て知らなかったぞ？

「俺はねっ！ 本日のおすすめのトリプル Pasta にしようかなっ！」

トリプル Pasta？ メニューを見てみると『トリプル Pasta（ミ
ートソース大盛り、ペペロンチーノ大盛り、カルボナーラ大盛り）』
と書いてある。涉、俺よりずっと体が小さいのに……大きくなれよ。

「シオはっ？ どれも第一学食と同じくらい美味しいよっ！」

「お、俺は……」

正直どれも食い切る自信が無い。どうしよう……。

ピピッピピッ

「あれ？ メールだ」

誰だろう？ 瞬も涉も一緒にいるのに。

f r o m 佐山刹那

s u b 大至急

大至急大至急大至急大至急大至急大至急大至急執行部テントまで
来なさい！

「う、うひいい〜……」

なんだこの恐ろしい文章は……。

「十八？ どうした？」

「ごめん！ 二人で食べてて！」

すかさずダッシュ！！

「あれっ？ シオっ？ シオっ！？」

構わずダッシュ！！

「あなた非常に遅いわ!」

執行部テント。ジャージ姿であるにも拘らず優雅に座っていた刹那。俺を確認した途端にぐいっと眉をつり上げる。

「ごめん、学食行って」

呼ばれた覚えは激しく無いが、とりあえず謝っておく。

「何を言ってるのよ、ご飯ならここにあるじゃない。私はもう食べちゃったわよ」

刹那の座るテーブルの端には何故だか仕出弁当が積まれていた。

「何これ? 食べていいの?」

「当然よ、執行部なんだから。それより十八? お茶! お茶を淹れて来なさいよ!!」

やっぱりそれが。別に良いけど、なんか昼飯も確保出来たみたいだし。

「わかった、すぐに淹れて来るよ」

「一つ余分に淹れて来て? 曜子も来る筈だから、あなたの分と併せて三人分よ? 早くよ? 大至急よ?」

「わ、わかったよ」

よほど俺の紅茶が気に入ってくれたのか、刹那はこういう時かなりせかせかしい。どうやら俺は刹那がお茶の欲しがるタイミングに慣れないといけないみたいだ。

戻って来ると海老原さんがいた。いや、海老原さんだけではなく徳川先生も一緒だった。

手に持った飲み物は三つ。分かっていたらもう一つ余分に淹れて来たのだが仕方ない。

「お待たせ」

とりあえずお茶を進呈しよう。

「あ、十八。一人増えてしまったわ」

「わかってるよ。先生、コーヒーは好きですか？」

「えっ塩田君？ あ、はい。好きですけど……」

刹那と同じテーブルに座る先生。いきなりの俺の質問に首を傾げている。

「ではどうぞ。俺の趣味だから少し濃い目ですけど」

まずは先生の前に俺用に淹れて来たコーヒーを置く。

「????」

置かれたコーヒーと俺を交互に見比べる先生。

「海老原さんも、はい」

海老原さんには刹那に淹れて来たのと同じ紅茶を置く。

「……塩田……?」

先生の隣に座っていた海老原さんも首を傾げている。

「はい、どうぞ」

最後に刹那の前に紅茶を置く。

「」「」「」

三人が三人とも首を傾げながら無言で俺を凝視している。いや、刹那は何やら訝しげな表情をしているかもしれない。

「塩田君? これは?」

困ったような表情で恐縮してしまっている先生。

「……私、に……?」

きよとんとしたように首を傾げる海老原さん。

「もちろん！ 先生と海老原さんはお昼ご飯は食べたんですか？」

「いえ、これからいただくこうかと……」

「……私も……」

「俺もまだなんです。ここで食べるなら一緒に食べていいですか？
海老原さんもいいかな？」

「えっ？ もちろん構いませんが、その前に、このコーヒ―は塩田君が飲む為に淹れて来たのではないのですか？」

まあ、二人の恐縮の理由はそれだろう。先生の場合は俺用に淹れて来たつばい事を言ってしまったし。

「いいんです。さっ、いただきましょう？」

そう言いながら積み重ねていた仕出弁当を二人の前にほいほいと配る。

「じゃあ、いただきます！」

一番近かった刹那の隣に座ると自分の分もほいっと頂いて、無理矢理『いただきます』の挨拶をしてしまう。

「……………」

と、先生と海老原さんは俺のペースに引き込んでしまえたが、隣

の彼女は別らしい。なんとも居心地が悪くなりそうな無言の圧力を感ずる。

「ちょっと、なに勝手に隣に座ってるのよ」

弁当を開けて割り箸を割ろうとした時、声が掛かる。ヤバイヤバイ、二人に遠慮させない為に強引気味に行動したせいかわいらしい気遣いが足りなかったかもしれない。

「嫌だったよな、ごめんよ」

弁当を持って先生の隣に移ろうとする。

「 なっ！ ちょっと！ なに移動しようとしてるのよ！」

????

「はあ？ じゃあどうしろってのさ」

「私は『勝手に』って言ったの！ ちゃんと断わりなさいよね！」

何やら凄く不機嫌な刹那。ちゃんと断われればOKと言う割にはやたらとぶんすかしている。やっぱり嫌なんじゃないのか？

「じゃあ、刹那。隣に座っていい？」

言われた通りにしてみる。

「……………」

そう言つとぶいっとなつぽを向いてしまつ刹那。

???

意味がわからん。まあ本気で怒っている訳ではなさそうだ。早く食べないと午後のプログラムが始まつてしまつので食べてしまおう。

「じゃつ、改めて、いただきます！」

再度号令を掛ける。

「いただきます。……塩田君？ よろしければ私と一緒に飲みますか？」

は？

「……私のも……一緒に……」

は？ は？

んなはあつー！

「いやいやいやいやつー！一緒に飲むってん！そがんなんヤバイヤん！ヤバイに決まつとるでがす！」

あまりにテンパって思わず『塩田方言』が発動してしまつた。

塩田方言

十八があまりにテンパると発動する塩田家に伝わる方言。塩田家

は辛うじて関東地方に収まる久住市に根付く生粋の地元である。つまり、塩田方言は別にどここの地方の方言という訳ではなく、どこかで聞いたような聞いた事ないような方言を連発してしまうただの挙動不審の事なのだ！

「嫌でしたら仕方ないのですが、私達だけいただくというのはあまりも悪いです……」

「……さつき……助けて、もらったし……私も……塩田が……飲まない、なら……飲めない……」

「い、いや。嫌という事は絶対に絶対に無いけど。後でいくら請求されてもいい位だけど。えっと……」

「でしたら一緒に頂きましょう?」

ねっ、って感じで微笑む先生。綺麗綺麗とは思っていたが、今の表情は半端じゃなくかわいい。

じい〜

熱い視線も感じるし……。

「じ、じゃあ一緒に……」

考えてみたら俺だけが好意の押し売りしてるみたいだし、二人もいいて言ってるんだし。

しょうがないよな?

そうだよっ、しょうがないよっ。

「十八っ!!」

「ハイッ!!」

突然のお隣からの呼び掛けに条件反射でビシッと返事をしてしまった。

見てみると刹那が先ほど以上の怪訝な表情で凝視していた。

「お茶が切れたわ。お代わりよ? ついでに自分の分も淹れ直して来たら?」

そう言うときまたふいっとそっぽを向く刹那。

……なるほど、こんなオチですか。

「……………はい。先生と海老原さんは先に食べてて下さいな」

それは断われる筈が無いわけで……………ぶんすか刹那と未だ状況が飲み込めていない二人を残して、しょんぼりと給湯室に向かいます。

馬鹿みたいに盛り上がった分、落胆も大きかった訳です。

輝くように青く茂る芝生、雛段状の観客席、防風ネット、専用の巨大な屋外照明。

「いくら掛かってるんだ……これは……？」

とても学校の施設とは思えない光景を見て感嘆の声を漏らす俺。

「すごいよねえ、びっくりだよねえ。わくわくだよねえ」

俺の声を聞いた阿部さんが話に乗ってくれた。

「すごいよねえ、決勝だよねえ。ドキドキだよねえ」

ちよつとずれてたけど。

阿部さんの言う通り、今は決勝戦。そして、俺たちF組はその決勝戦に出場する側である。瞬と渉の活躍により俺達F組は余裕で決勝までコマを進めてしまった。

相手のクラスは2年G組、何故かはわからないが男女の比率が男8女2のかわいいそうなクラスだ。

決勝戦は今までと舞台を変え、サッカー部専用の芝の専用校庭を使うらしい。

「この芝生ってさ、俺達の履いてるようなスニーカーだと滑っちゃ

うんじゃない？」

「それは言いつこ無しってやつだよ」

「へえー」

ともかく、雛段状の観客席を超満員にしたクズ校サッカー場にて、本日の最終試合、2年F組対2年G組の決勝戦の火蓋が今切つて落とされたのだった！

「じゃあ行つて来るよお」

「お気を付けて行つてらっしゃいましっ！」

燃える展開であるにも拘らずフィールドに向かう阿部さん達スタメンを見送る主人公でベンチウオーマーな俺。

ホイッスルと共にキックオフ。

俺達F組チームにはフォアードに瞬や阿部さん、ミッドフィールダーに涉、もちろん俺はベンチだ。

『おーっとF組の山崎君、早くもインターセプトお！ ハッハッハッ！』

何故だか体育のマツチヨ先生が実況してるし。

『F組山崎君、そのままオーバーラップ！　しかしG組のディフェンス陣も黙っていない！　次々に山崎君に襲い掛かるぞお！　ハッハッハッ！』

……この実況についてはツッコむの止めよう、疲れそうだ。

「涉っ！」

G組ディフェンスに囲まれそうになる涉に瞬がな、

『ピンチの山崎君に佐山君が並んだぞお！　ハッハッハッ！』

……………。

「瞬っ！」

『おーっと山崎君、並んだ佐山君に素早いサイドパス！　これにはG組のディフェンス陣も反応出来ない！　早いぞお！　F組のゴールデンコンビ！　ハッハッハッ！』

えー、実況は続くみたいだが、ここからマッチョ先生の実況は聞こえない事にします。

瞬、涉、瞬、涉と素早いパス回しでG組ディフェンスを翻弄しながら確実にゴールに切り込んで行く。一回戦、二回戦ともにゴールのほとんどがこの素早いパス回しからの発展だった。

ゴール前、素早いパス回しから一転、ボールを止めた瞬がゴール付近を一瞥、一呼吸置いて大きなセンタリング。完全に守りに入っているG組ディフェンスの密集地帯に向かってる？　一瞬。パスミスか？　とも思ったが、これは、違う。

「フライングドライブシュートッ!!」

自分より遙かに長身のディフェンスの頭を越える高い位置のボールを確実に捕えた涉の右足。

オーバーヘッドシュート。

ゴール。

G組のキーパーは一步も動けなかった。何処かで聞いたような必殺シュートを叫びながらつてところはともかく、凄まじい回転の掛かった涉のシュート、ゴールネットを揺らすどころかネットを突き破らん勢いで回転し続けていた。

試合開始から一分ちよい、またしても瞬と涉の二人だけで得点してしまった。

その後も瞬と涉を中心に試合はF組の圧倒的優位のまま進んだ。

そして前半終了。

ここまでの得点は7対1、もちろん優勢なのは俺たちF組である。

「いやあ、やっぱり決勝戦! 手強いよねっ!」

お前は相手チームを馬鹿にしてるのか?

「俺、イエローカード貰っちゃったよ、ヤバイなあ」

相手チームの三人掛かりのショルダータックルを弾き返した時のな。

「後半からはシオもフォアードでしょっ？ 俺がばんぱスあげるからねっ！」

「俺にはお前の弾丸パスを受ける自信なんか無いぞ……」

渉の言う通り、担任が適当に決めたらしいローテーションにより後半開始から俺はフォアードで出なくてはならない。せめてディフェンスなら良かったのだが嫌とも言えず、やるしか無い状況なのである。

「まあ点差もあるし、学校のイベントなんだから気楽に行け気楽になっ？」

「あ、ああ。なんとか頑張ってみるけどさ……」

と、口では言うが内心かなり憂鬱だった。

しばらくして、後半開始前。

俺は阿部さんに代わりフォアードとしてフィールドに立っていた。

瞬は気楽にと言っていたが、どうにか頑張っただけでもF組の為にならねばならない。

フィールドに立った瞬間から心臓がばくばくでうるさい、超満員

の観客席の視線によるプレッシャーと少しでも活躍しなくてはいけないと思うプレッシャーが合いまって緊張が頂点に達しつつある。

「せんぱい！ 頑張ってください！」

ざわめく観客席からよく通る黄色い声援、瞬に向けられたものだろうと思っただが、その声援は聞いた事のある声だったので視線を観客席に向けてみる。笑顔のルナちゃんが手を振っていた、橘と進藤さんも一緒、更に隣には海老原さんと徳川先生も一緒である。

「ほら十八、応えてやれよ」

同じフォアードとして並ぶ瞬が言う。少し迷ったが、言われた通りに手を振ってみる。

「わ〜！ ファイトです〜！」

俺の反応を見て大喜びで手を振り返してくれるルナちゃん、並んでいる徳川先生も一緒に手を振ってくれた。

ほわ〜と嬉しくなつてにやけてしまう。

「こりゃ頑張らないといけないな？ 俺が上手くフォローするから良いトコ見せようぜ？」

何か言い出す瞬君。

「おい、俺には無理だつて」

「大丈夫だつて、俺に任しとけ！ 余裕余裕！」

「瞬……」

にやはは笑いの瞬に困りつつ相手チームを見つめる。

「えっ？」

相手チームからはものすごい殺気が溢れていた。鬼の形相のG組男子が明らかに俺だけを血走った目で睨み付けている？ さっきまでは普通だったよな？

ホイッスルと共に後半開始。

瞬が弾いたボールを受けつつ、相手ゴール方向を、

「シャアアッ！！」

向いた瞬間、ものすごい形相のG組FWがスライディングしてきた！

「うわわわっ！」

俺は慌てて瞬にボールを戻す。俺の足をギリギリでかすめるスライディング。かなり危ない！

「ちっ！」

舌打ちした？ なんで？

「十八！ 上がるぞ！」

巧みにボールをキープしながら俺を促す瞬。

「お、おうー！」

言われた通りに相手ゴールに向かう。

密集するG組ゴール前、瞬の抜群のキープ力によりボールはまだ俺達の物。しかしG組の連中、前半とは動きがまるで違う。凄まじいフィジカルで俺のスペースを全く空けてくれない。

「くそお……俺の毬谷さんが、何でこんなヤツに……」

「徳川先生のおんな笑顔初めて見たぞ……くそつくそおっ！俺達は先生の授業を受けたくても受けられないのにい！ちつくしよお！」

G組の野郎どもの呟き、っていうかぼやき。G組の男子達の豹変振りが納得出来た。

「シヤアアツ！お前もじゃあい！かっこよすぎなんだよお！お前はあ！」

「くっ！？」

ゴツイ顔したG組の10番の選手の豪快なスライディングに瞬はボールを奪われてしまった。

「オラオラオラオラオラオラオラ！」

ゴツイ顔のG組10番はそのままF組ゴール方向に突進して行く。

「瞬っ！ 何やってんだよっ！」

上がって来た涉が瞬に文句を言いながらゴツイ顔にスライディング。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

「えっ？」

ひょいっと涉をあっさり飛び越えるゴツイ顔。一瞬涉の動きが止まった？ ザ・ールド？

ゴツイ顔の激しいドリブルは瞬と涉を欠いたF組ディフェンスを弾き飛ばして行く。

ゴール。

前半とは違い、後半は開始三分のG組ゴールから始まってしまった。

それからゴツイ顔10番を中心に完全にG組ペースで試合は進んだ。

そしてロスタイム間際。

『ゴーーーーール！！ G組ついに勝ち越したぞおおおおっ！！
ハッハッハッ！』

7対8。

逆転、ついに逆転されてしまった。

更に続くG組の猛攻の中、ロスタイム。ここでF組は最後のメンバーチェンジ。G組の猛攻により俺達F組はこれまでほとんどメンバーチェンジが出来なかった、ルール上全員交代しなくてはいけないのだが、残っているのは女の子や俺のように運動に自信の無いヤツばかり、非常にヤバイ状況である。

「ヤバイねっ！ このまま行くと負けちゃうよっ？」

メンバーチェンジの間、俺の所に瞬と渉が来る。

「お前がフリーの十八にパスしないからだろうが！」

「だって、シオってばさ！ ルナちゃんや志乃ちゃんに手振ってもらってんだもんっ！ 瞬だってG組の10番にボール取られてばっかじゃんっ！」

「いや、G組のアイツ顔ゴっツイんだもん、やだよ」

うだうだと言いつつ瞬と渉。ちなみに俺は大きなミスはしていないが、一番最初以外ボールにほとんど触ってない。だからなのか、俺は交代させてもらえなかった。

「とにかく！ もう時間が無い。ゴールキックの後、渉から俺、最後に十八だ！」

「えっ？」

「トリプルカウンターアタックだねっ！」

「ちょっと違うが、もうそれしか無い。やるぞ十八！」

「えっ？ えっ？」

試合再開。

キーパーが涉にボールを蹴り渡す。俺は相手ゴールを目指してひたすら走る。

「行くよおっ！！」

掛け声と共に大きく振り被った涉の大きなパス。

うわわっ！ 早いつて涉！

「よっしやあ！」

右足でボールを受ける瞬、流石にノートラップからのセンターリングは無いらしく、右ライン際を華麗なドリブルで駆け上がる。既にゴール前に到着していた俺にたびたび目配せしてくる。

『上手く上げるからスペース作れ！』

って言ってる気がするけど、マークがきつくて抜け出せない。

マズイ、時間が無いのに。

ボールの方を見ると瞬も数人のG組ディフェンスに囲まれてヤバそうである。涉も上がって来ているが間に合うかどうか。

ルナちゃん達……せつかく応援に来てくれたのに、多分ダメだな……。

そう思って観客席を見る。

視線が合う。

自分の視力の限界を超えた先にいる人との視線が合った。

無意識に頭の中の迷いが消えた。

俺を取り囲むG組男子の一人の肩を軽く押す。ほんの少しだけよろめいたソイツの体を今度は軽く引く、同時にソイツの後退る足の行き場を奪っておく。

大きくよろめくソイツ。

スペース完成。

すかさず自分の体を滑り込ませる。

わかっていたと云わんばかりの瞬、既にセンタリングを上げてくれていた。

俺の空けたスペースにこれ以上ないくらいのセントリング。スペースとゴールの間にはキーパーとディフェンスが一人、どうする？

ダイレクトボレーは無理、トラップしたら囲まれるだろう。

迷っている時間は無い。

頭、瞬のセントリングの勢いを利用してヘッドで合わせる。

それしか無い！

親友の的確なアシストを

「へブシツ！！」

！？ 痛いっ！？

視界が真っ白になったぞ！

???

.....

.....

.....

……

「……？」

何やら朦朧とする。

「……塩田……」

「えっ？」

声に反応する。

俺は横になっていた。傍らに居るのは。

「海老原さん？」

並べられたイスに横になっている俺、場所は執行部テントだった。海老原さん以外の姿は無い。

「……塩田……大丈夫……？」

泣きそうな表情で言う海老原さん。

「あっ、え、えーと、俺は……？」

海老原さんの表情に狼狽えながらも今自分が置かれている状況がどうしても気になってしまっ。

「……塩田……顔面に……ボールが……あの……鼻血が……凄くて……」

……

そう言いながら更に泣きそうな表情を濃くする。

思い出した。俺は試合終了間際の瞬のセンタリングを……顔面で受けたのか。うわぁ、俺すんごいみつともないじゃん。

「……大丈夫……？」

顔を近付けて来る。

普段は見えない澄んだ綺麗な瞳に吸い込まれそうになった。

ふおおっ！ 近いっ！

「で、大丈夫！ 痛えけど痛くねえから！ とととところで試合は？ 試合はどうなっただ？」

「……塩田の……最後の、シュートは……外れちゃったの……」

執拗に俺から視線を外す海老原さんは言い辛そうに、でもしっかり教えてくれた。

「……そっか」

……駄目だったみたいだ。やっぱりどう考えても俺がFWって時点で間違ってたんだ。頑張っていた瞬と涉に申し訳ない。

「……塩田……頑張ったね……お疲れ様……」

海老原さんの言葉にはっとする。視線を移すと海老原さんと目が合う。

「……………」

真っ直ぐに俺の目を見つめる海老原さん。

「……………」

そうか…………俺は頑張ったんだな。ここで俺が否定したら海老原さんに申し訳が立たない。

「うん……………」

海老原さんは俺を信じてくれたのだろう。

そして俺の惨めな姿でさえ汲み取ってくれている。

ありがとう。

…………しかし思う。

最後に瞬のセンターリングを受けた時。俺を信じて疑わない真っ直ぐな視線と目が合った。

刹那。

執行部のみんなが並ぶ観客席の上段にいた刹那。

俺を奮い立たせたのは彼女の視線だった。

遠い昔と同じように自分を信じてしまった。

なんでも出来る。

期待に応えるのが当然だった。

裏切ってしまった自分が許せなかった。

球技大会二日目、個人戦。

今日も準備作業の為、開始前に執行部テントに向かっていた。

「十八……大丈夫か？ 痛くないか？」

隣の瞬がおろおろと俺の顔を窺いながら訊いて来る。

「大丈夫だって！ 鼻血だってすぐ止まったし、もうなんとも無いよ。だいたい瞬は何も悪くないだろ？」

「いや……でもよ」

朝から終始申し訳なさそうな表情の瞬は何を言っても聞いてくれない。大丈夫か？って何回言われた事か。

昨日。

結局、決勝戦の結果はG組の優勝、俺達F組は準優勝だった。俺の最後の顔面ボレーは当然の事ながら見事に外れたらしい……。それどころか俺はそのまま気絶して救護テントに担ぎ込まれる始末。大した事は無いだろうという事でその後は執行部テントへ、で、みんなが後片付け等の仕事をしている中、呑気に海老原さんに介抱されていた訳だ。

とんでもなくどろじょうも無いな、俺。

「おはよう」

執行部テントに着くと、既に優雅に座っていた刹那がいつも通りの凜とした挨拶をくれる。

「おはよう刹那……」

対して俺の返した挨拶はいつも以上に情けないものである。昨日、海老原さんに介抱された後、俺はみんなが戻って来る前にバイトに行ってしまった。つまりあの醜態以来、刹那と顔を合わせていない。非常に気まずいので刹那の顔をまともに見る事が出来ない。

その俺の態度が気に入らなかったのか、元々機嫌が悪かったのか、刹那は表情をひときわ険しくする。プルプル震えていて我慢の限界が今にも爆発しそうである。

「……………!」

怒りを溜め込んだような表情で俺を睨み付ける刹那。まあこれで刹那もわかっただろう、俺が昔とは違う事が……。

「ぷっ！ くくく……！ あははははっ！」

んっ？ なんだ？ 吹き出したぞ？

「はあ？」

怒りを堪えたような表情から一転して大爆笑する刹那。どうして突然笑い出したのか全く分からない。隣の瞬も怪訝な表情で傍観している。

「い、いや！ だって十八！ 何かやるなって思ってたら、ボールを顔で受けるんだもん！ あんなの狙ってやるものじゃないわ！

……ふふふ！」

「はあっ！？」

何を言ってるんだ！？ この娘は！

「ち、ちよつと刹那？ 十八はな……」

愕然としてしまった俺に代わり、とっさに刹那に弁解しようとする瞬。

「はいはい、わかってるわ。上手くやればゴールしてたわね」

「いや、違」

「もう！ いいから作業に向かいますしょう？ 曜子達は校庭で待っている筈だわ」

わざとやってるとしか思えないほど話を聞いてくれない刹那、すたすたと校庭に向かおうとする。俺も瞬も呆然と立ち尽くしてしま

「ちよつと？ 瞬！ 石崎！ 行くわよ？」

い、石崎？ 顔面だからか？

「あ、ああ」

仕方ないので、首を傾げながらも渋々ついて行く。

「瞬……」

思わず呼んでしまう。

「ああ。冴えてるんだか冴えてないんだか、よく分からない刹那のヤツ」

瞬も俺と同じ心境らしい。

無理やりで強引な刹那。一番変わってしまったと思っていたが、一番変わっていないのかもしれない。

校庭。

三人でそこに着くと、海老原さん達が待っていてくれた。

「……塩田……」

俺の顔を見るや否や昨日も見た不安そうな表情で俺の顔を窺う海老原さん。

「お、おはよう。昨日はありが

すりすり

鼻の頭を撫でられる。

じい〜

見つめてくる。けどいつもより遙かに近い、近すぎる。

「……大丈夫……？」

そのまま泣きそうな表情で訊いて来る。

た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た

「たわっ！！ なんとともにゃー！！ 大丈夫やけんのうっ！！」

のけ反りながら高速で後退る。心臓が爆発するかと思った。

「わっ」

後退ったせいで誰かにぶつかってしまった。

「ごめん、大丈」

ぶ、と言おうとしたが言えない、戦慄した。

振り向いた先には尻餅をついたらしいルナちゃん。どうやら後退

りした俺にぶつかって倒れてしまったようだ。すぐに駆け寄りたいが俺は動けない。

俺の首元には進藤さんの手刀が突き付けられている、いや、手刀の中に握り込んだ『何か』を突き付けられている。背中には橋が密着した状態でやはり『何か』を突き付けている。

その『何か』がなんだかはわからないが、俺の五感がかなりの非常事態である事を訴えている。動きたくても動けず、声を上げる事も出来ない。

「ルナ、大丈夫かい？」

俺の背中側にいる橋が俺越しにルナちゃんの安否を訊く。

「う、うん。大丈夫だけど……何してるの？ 二人ともせんぱいにべったりして」

とてもわかりやすい構図であるにも拘らず、きよとんとしたルナちゃんは首を傾げた。二人の『何か』も知らないらしい。

「いいえ、ルナ。私達はこの愚物に他人とのコミュニケーションの取り方を講義していたまで」

俺の首元に『何か』を固定したままの進藤さんが言う。初めてまともに話した進藤さんを見たけど……なんすか？ 今のトンデモ発言は？

「ええ！ なになに？ いつの間に先輩と仲良くなったの？ 二人ともずるいよ〜」

「ばしばしとジャージを叩きながら立ち上がるルナちゃんと言う。あの………このどこが仲良くなったように見えるんでしょうか？」

「まあルナにはなんとも無いみたいだし、今回は見逃してやるよ先輩。副会長もそれでいいだろ？」

背中にいる橋が『何か』を引つ込めながら言う。同時に進藤さんの『何か』も引つ込んだので振り返ると瞬が二人の一年生の襟首を掴んでいた。瞬の表情は穏やかだったが瞬らしくない殺気が溢れていた。

「ああ。ルナ、大丈夫か？」

二人から手を離れた瞬がルナちゃんに訊く。

「はい。なんともないです」

良かった。さっきの非常事態はともかく、ルナちゃんは大丈夫みたいだ。

「ルナちゃん、ごめんね？」

当然謝らなくてはいけない。大丈夫らしい事はわかったので気を遣われないように簡単な謝罪をする。

「いえいえ、ルナもごめんなさいです。せんぱいが曜子先輩とイチヤついているから、そっつと近付いてハグしようとしたらせんぱいのバックステップに轢かれたです。ルナも悪いからせんぱいは気にしちゃダメです」

「えっ？ えっ？」

ハグ？

抱擁？

ていうかイチャついてるって……。海老原さんを見てみるとなんとなく赤面しているような気がするし、もちろんだが俺も赤面している気がするし、みんなの視線も何やら生暖かい気がするし……。

「……終わったかしら？」

背後からの冷淡な声に振り返ると半端じゃない位の訝しげな表情の刹那が腕を組んでため息を吐いていた。

スゲエ怖い。

シュババツ！

軍隊ばりに統率された動きで全員が無言で刹那に向かい合うように並び、多分みんなも刹那が怖いんだろう。

「今日は個人戦、テニスね。私達は体育委員やテニス部と一緒に校庭のローラー掛けと予選用のコート造りよ」

「……サー！ イエッサーッ！！」「」

刹那の指示にみんな元気に返事をする。

流石は会長、というかこの異色集団を一言で統率出来るのは刹那だけだろう、絶対教師達でも無理だと思う。

個人戦のテニス。三年生も参加出来るので参加人数が多い。俺達は校庭に予選リーグ用の簡易コートを大量に造る作業をするらしい。瞬と一緒に既に体育委員達が作業をしている校庭に下りてみた。

「……なあ」

瞬に呼ばれる。

「なに？」

瞬の方を向くとなんと迷惑そうな表情の瞬と目が合う。……この表情の時はだいたいヤツ絡みだ。

「あれ、渉だよな？」

校庭の一角を指差しながら言う。

その先を見してみる。

そこには帽子にテニスウェア？ 肩に何故かジャージの上だけを羽織った渉がいた。渉はテニスラケットを持って校庭の作業風景を眺めていた。

近付いてみた。

「あっ！ 瞬とシオっ！ おはようっ！ 今日もいい天気だねっ！
テニス日和だねっ！ イヤッホウッ！」

昨日と同じようにウザイハイテンションを撒き散らし出す渉。

「何やってんだ？ お前……」

とつても疲れたように尋ねる瞬。

「何をやってるって何を言ってるんだよっ！ 竜〇先生っ！」

○崎先生？

何を言っているんだ？ このドアホは……。

「You still have lots more to work on (まだまだだね)」

生意気そうな顔で右手に持ったラケットをびしっと誇示しながら
言う渉。

微妙に発音がいいところがスゲエむかつく。

「十八。この宇宙バカはほっというて作業に掛かるっ、このままだと
殴ってしまいそうだ」

「ああ、同意見だ」

イライラが頂点に達する前にほっという作業に取り掛かる事にする。

「ちちちちよっつ！ 最近なんか冷たいんじゃないっ!？」

シカト！

程なくして作業を終え、球技大会二日目の開会式も滞り無く終えた。

球技大会二日目個人戦。競技内容はテニス。

今年の個人戦の参加人数は男子215人女子125人の計340人。

生徒会執行部からは瞬と刹那、一年生の会計トリオがエントリーしている。瞬と刹那と橘は優勝候補らしい。刹那に俺も出るように言われたが丁重にお断わりした。俺がテニスとか無理だし、執行部の仕事をする人が海老原さんだけになっってしまうは酷いと思ったからだ。

ちなみにさっきの宇宙バカもエントリーしていて同じように優勝候補らしい。

執行部テント。今のところ執行部には大した仕事も無く、留守番の俺と海老原さんはぼろっつと校庭を眺めていた。

俺達が校庭に造った15面の簡易コートでは既に予選リーグが始まっている。近くでギャラリしようと思ったけど海老原さんが行かなそうだから俺も行くのをやめた。

「……………」

「……………」

楽しそうに盛り上がっている校庭の喧騒に対して執行部テントは静かだった。隅っこに座っている海老原さんから二つ席を挟んだイスに座る俺。静かすぎて非常に気まずい。

「あー、海老原さん？ お茶淹れて来ようか？」

俺の唯一のアビリティを披露させてもらおうか。

「……………私は……………大丈夫……………」

要らないらしい。

「……………そっか」

そして無言。

うーん、何かダサいな俺。甲斐性が無いモテナイ君みたいだ……………

実際そうだけど。

「……塩田は……どうして……エントリー……しなかったの……？」

ぐるぐる話題を探す俺に意外にも海老原さんが話を振ってくれた。

「あ、あーえー……情けないけどさ、俺って運動音痴なんだ」

嘘を吐いてもしょうがないので正直に言う。

「……そう……私と……一緒、だね……」

俺の方を見ながらそう言う。

「そう……だね」

……厳密に言うと一緒にではない。運動音痴というのも語弊がある。

俺の運動音痴は『後天性』だから……。

考える。

刹那、彼女はそれを知っている筈だ。『あれ』までの俺を誰よりも知っている刹那が気付かない筈が無い。

刹那………いつたいキミは俺に何を求めているのだろうか？

「……塩田……」

「えっ？」

考え込む俺に海老原さんの声が掛かる。

「……みんなの……応援、行く……？」

立ち上がりながらそう言う、同時に微かに微笑んでくれた。

初めて見た海老原さんの笑顔だった。

感慨しく考えていた事が馬鹿らしくなる。

そうだ、今は俺の事なんかよりみんなの応援の方がずっと大切だ。

「うん、行くう」

出来ると出来ないは違う。

みんなの出来ないと俺の出来ないは違う。

頑張ってもどうにもならない。

でも、俺にだってまだ出来る事がある。

それを頑張ればいい。

蒼穹によく映えるボール。

高く高く上がったボールはゆっくりと落下する。

「ハアッ！！」

短い掛け声と共に強烈にラケットを振り下ろす瞬。真芯で捕えられたボール、周りの喧騒をかき消す位の大きな音、早いなんてレベルじゃないスピードで振り下ろされたラケットは離れていても風圧を感じそうなほど凄まじい。

一瞬を置いて違う大きな音。ボールが地面を跳ねた音。爆音と云っても過言ではない荒々しい音。

びっくりとも動かない対戦相手の生徒は何が起こったのかもわかっていないように見える。

「ゲ、ゲームセット……。ゲーム&マッチ、ウォンバイ佐山」

審判をやっているテニス部のヤツも驚愕を隠せない様子である。

それはそうだろう。

今の試合。瞬の相手は三年生、しかも元テニス部員の先輩である。この個人戦、協賛してくれているテニス部の生徒は参加出来ない。しかし既に引退している三年生は別である。つまり瞬の相手の先輩

は間違いなく有利極まり無い優勝候補だった。

だが、今の試合。

ラブゲーム。

驚く事に瞬のサーブは全てサーブエースである。

相手の先輩のサーブも強烈だったが瞬はそれ以上の強烈なレシーブで叩き返した。

ミスとは思えない先輩のレシーブを強烈なスマッシュで叩き返した。

先輩の得点ボードはただの一度も0（ラブ）から変わる事は無かった。

2年F組、佐山瞬、決勝リーグ進出。

「ははは。応援、必要なかったかもね？」

隣に並ぶ海老原さんに尋ねてみる。

「……そんな事ない……瞬も……嬉しい筈……」

まあそう言ってくれると思っていた。海老原さん。まだ知り合っていない時間しか経っていないが、この子の言葉はとても優しい。

いつも俺の濁った感情を洗い流してくれる言葉をくれる。

本当にいい子だと思った。

続いて見た試合はルナちゃんの試合だった。

「えいつ！」

かわいらしい掛け声と共にボールを打ち返すルナちゃん。瞬の試合を見た後という事もあり、俺でも目で追えるくらいの緩やかな物だった。

しかし対戦相手である二年生女子は打ち返す事が出来ない。的確にライン際を狙ったボール。ぎりぎり届かない所に確実に打ち返している。瞬の試合はただ驚くばかりだったが、ルナちゃんの試合はため息が出るほど感心してしまう試合だった。

1年A組、毬谷るな、決勝リーグ進出。

「だーっしゃっ！」

訳のわからない掛け声と共にバックハンドからの豪快なレシーブ。凶悪な回転の掛かった橘のレシーブは対戦相手の打ちやすい所で跳ねる。しかし打てない、対戦相手の一年生はラケットを引いて逃げてしまった。無理もない、見るからに凶悪な回転の掛かった凄まじいボール、慣れない人は条件反射で身を引いてしまっだろう。

橘の試合。ルナちゃんのように相手の裏をかく事など一切ない力

技ばかり。しかし一方的な試合だった。

1年A組、橘巴、決勝リーグ進出。

延々と続くのかと思えるようなラリー。

進藤さんの試合、さっきまで見てきた試合に比べると地味だった。お手本を模した練習風景のように対戦相手の生徒と地味で単調なラリーを繰り返している。

ふと対戦相手がリズムを崩した。打ち損ねた返球は対戦相手側のネットに当たって落ちる。仕方ないと思う。如何に単調で緩やかなラリーとはいえ誰だってミスはしてしまうだろう。

そしてゲームセット。終わってみれば進藤さんの圧勝。驚くべき事にほとんど対戦相手のミスによる得点だった。勝者である進藤さん、平然とした顔で眼鏡の位置を直していた。

1年A組、進藤円、決勝リーグ進出。

次は刹那の試合、なんだけど……。

予選リーグ表を見ながら刹那の試合をやっているコートに向かうとするが……。

15面ある簡易コートの一つ。

「な、なんだよ。あれ……」

尋常じゃない位の人垣が出来ていた。しかもその人垣はほとんど男。野郎だけで100人位いる。刹那の試合をやっているらしきコートを綺麗に囲むような野郎の壁で中の様子が全く見えない。たびたび野郎どもから『おお』と熱狂的な歓声が上がっていた。

海老原さんと二人で唾然としてしまった。

「……あれ……ほとんど……刹那の……ファンクラブ……」

ぼそつと呟く海老原さん。

って、えっ？

「フ、ファンクラブ？」

「……うん……非公認の……」

なんだそりゃ。

「……瞬と……ルナのも……ある……瞬のは……公認……」

「へえー」

親友……お前ってヤツは。

「」「うおおおおおおおお！！！」「」

頂垂れようとすると目の前の人垣から一際大きな歓声上がる。あまりに異常な大歓声に思わず海老原さんを庇ってしまった。

地響きが起こりそうな低いダミ声の歓声。それに混ざって『ビバ刹那』とか『刹那万歳』とか訳のわからない掛け声も聞こえた。

どうやら刹那が勝ったらしい。

2年A組、佐山刹那、決勝リーグ進出。

「結局さ、執行部から参加した全員が決勝リーグに進出したね。みんなすごいよね」

執行部テントに戻りながら海老原さんに訊いてみる。

カクン

頷いて同意してくれる海老原さん。

「ちえいっ！」

と、そこで突然遠くからの異音。

「2年F組、山崎渉、決勝リーグ進出ううう！」

そう言いながら目の前を駆けて行く渉の背中を見送る。いつだったか習ったドップラー効果を思い出した。

「……………」

何か言いたいが何を言えばいいのかわからないような海老原さん。今の何？今の何？って感じの視線を投げ掛けて来る。

「気にしないで？ ある意味、宇宙の真理の一つだから」

「…………？ ……………？ ……………？」

困ったようにおろおろする海老原さん。ちょっと可哀想っていうかわいいのだが仕方ないのだ。

海老原さんがあのアホの毒気にあてられてしまうのはあまりに心苦しい。意味がわからないような言い方しておくしかないのだ。

執行部テントに着くと刹那以外の全員が集合していた。

「十八！ 見たか？ 俺の勇姿見たか？ 俺のカッコいいトコ見たか？」

俺の顔を見た途端、掴み掛かって来そうな勢いで訳のわからん事を言い出す瞬。

「あ、ああ。凄かったな……うん、凄かった」

瞬のおかしなテンションに引きながらも正直に言ってる。

「だ、だろお？ ははは、頑張ってる良かったよ……はは、参ったな……」

俺の言葉に照れる顔を隠すように下を向くと、何やらもじもじしやがる瞬。おいおい、親友？ 今のお前は間違いなく変なヤツだぞ？ ぶつちやけキモイぞ？

「せんぱいせんぱいつ！ ルナは？ ルナの試合は見てくれたですか？」

むぎゅつと俺の腕に絡み付きながらきらきらした視線を向けて来るルナちゃんが言う。

俺の脳内メーターが一瞬でレブった。

「うっうっうん。ばっちりや！ ルナはんばっちりやったがや！」

発動する塩田方言。そりゃテンパる。顔もにやける。

「はっ！ 見ろよ円、『変態の出来るまで』って感じじゃねえか？ やっぱり今の内に殺^やつとくか？」

わざとみんなに聞こえるような橘の嫌味。

「ぬるいだろう巴。私は殺^やる前に死ぬほど恥をかかせてやりたいがな。くっくっくっ」

冗談など欠片も感じない言い方の進藤さん。

カッチーン

今回はかりは橘だけでなく進藤さんにもイラッとした。

同時にピーンと来た。

「ルナちゃん。ちょっとごめんね?」

名残惜しい気もするが腕に絡まっているルナちゃんの手をほどく。

「橘! 進藤! ……さん」

早速へタレた。

「あんだよ? 先輩……文句あんのかよ?」

へタレ気味だが攻撃的な俺の勢いにノリノリの橘。進藤さんはいつものように白くなった眼鏡越しに睨み付けて来る。

「お前達のファンクラブはあるのか?」

二人の威圧感に気圧されながらも、どうにか言う。

「は、はあ? ファンクラブって、あたしや円のって事か?」

とてもわかりやすい困惑顔の橘、俺の突然の質問の意味が全くわからないのだろう。

「無い。だからどうした？ 塩田先輩」

ちよっぴり不機嫌度が上がったような声色の進藤さんが言う。

「俺がお前らの……いや橘巴ファンクラブ並びに進藤円ファンクラブの第1号だ。喜べ」

「「?????」」

わかりやすく言ってやったつもりだが、全く理解出来てない様子の二人。一時停止を押されたみたいを考えるような素振りの形で固まってしまった。

ふふふ。嫌だろう？ キモイだろう？ 明らかに俺を嫌っているだろうお前達からしたら嫌だろうが！ しかし、ルナちゃんの手前、断れるかな？ ふふふ。

この時は勢いだけで後の事など少しも考えていない俺である。

「……ってアホかあ！！ ざっけんなよ先輩！ なんでアンタがあたしのファンクラブなんだよっ！ 意味わかんねえ！ 意味わかんねえ！！」

誰かが再生ボタンを押したらしい。静から動へ一瞬で切り替わったある意味すごい橘の激昂。しかし俺は怯まない。あまりに俺の予想通りの反応すぎて冷静になった位だ。

「……応援したいんだ」

激昂する橘に言っでやる。

「 な！ な？ …… な？」

さつきとは違い、動から静にゆっくりと切り替わって行く橘。口イツおもしろい。

「 応援したいんだ」

もう一回言っでみる。

「 …… 」

目を逸らされてしまった。

まあいい、ちょっとかわいいから許してやろう。

「 進藤さんは？」

一時停止中の進藤さんに訊いてみる。

「 私は別に嫌では無い、好きにしてもらっで構わない。巴も別に嫌では無さそうだ、好きにしてくれ。先輩」

真顔で地味に了承された。

橘は思った通りに動揺してくれたが、進藤さんには肩透かしを食らっでしまったようだ。

…… 勢いと思いつきだけで何やら橘巴と進藤円の『公認』ファン

クラブの1号になってしまった。

まあいいか。

おとなしくなってくれた二人に満足しながら振り返る。

「えっ？」

瞬と海老原さんとルナちゃん。

三人が三人とも、らしくない怪訝な表情で俺を凝視していた。

「十八……」

切なげな表情で俺の名前を呼ぶ瞬。

「あっ、いや、その……」

長い付き合いだが、すねてしまった瞬は一番厄介である。余計な事は言えまいと口籠ってしまう。

「ルナの応援はしてくれないですか？」

瞬の隣に並ぶ悲しそうな表情のルナちゃん。

「い、いや！ もちろん応援するよ！ ばんばん応援するよ！ そりやもう大変なくらい応援するよ！」

あたふたとそう言うが、いつものような笑顔をくれないルナちゃ

ん。

……の隣の視線が凄いい気になる。

じい〜

「あつ、あの、えーと……」

じい〜

「その……」

じい〜

「……ごめんなさい……」

何故だか謝ってしまった。

なんでこんな目に……なんだか執行部内での俺のポジションがわかんなくなってきたぞ？

いじめられっこでいいの？

「十八っ！……」

「ハイッ！……」

困り果てていた俺によく通る声の呼び掛け。返事どころかビシッ

と姿勢を正してしまった。

「お茶お茶お茶お茶あ！ 早く早く早く早くう！」

戻って来たらしい刹那がイスにぐったりしながら言う。

いつもの刹那のような堂々としたような凜としたような雰囲気は無い。酷くお疲れのご様子である。

「わかった。すぐに淹れて来るッス」

正直助かった。自分で撒いたような物だが、あの雰囲気は辛かった。

一応、もうすぐお昼時というもあり、ご機嫌取りというもあり、全員分のお茶を淹れて行く事にした。

俺のポジションはパシリかもしれない。

「棄権しちゃおうかしら……」

誰に言うでもなく呟く刹那。いや、たぶん俺に言ったのだろう。

昼食後の執行部テント。ど真ん中に座る刹那、そのすぐ側に俺と瞬、隅っこでは海老原さんが読書中、会計トリオは三人でどこかに行ってしまった。

刹那はさっきから機嫌が悪い。でも俺に対してではないと思う。

なんだかぐつたりしちやって明らかにダルそうだ。みんなで食べた仕出弁当もほとんど食べずに瞬にあげてしまっていた。

棄権したいという刹那、個人戦の決勝リーグの事だろう。

「どっして？」

訊いてみる。

「あいつらに決まってるでしょ！ あいつらにいー！」

そんな事もわからないのか？とでも言わんばかりの刹那。同時に不快そうに顔をしかめる、思い出すのも嫌みたいな感じだろう。

あいつら……それって。

「刹那のファンクラブの連中の事だよ。十八」

少し離れた所に座る瞬が言う。

ふむ、やっぱり。

大の男嫌いらしい刹那。そして男、漢、おとこ、おとこ、狭おとこつて感じだったあの人垣から察するに男だらけのファンクラブ。刹那は決勝リーグでもあの状態になるのが嫌なんだろう。

「でも刹那？ この個人戦で上位に入らないと体育の単位を貰えないんだろ？」

軽く呆れてしまったような瞬が言う。

体育の単位。なるほど、刹那が今朝個人戦にやる気になっていたのはその為か。

「わかってるわよ……ちょっと試してみただけよ。十八、おかわり淹れて来て」

机にぐったりしたままぼやくと、空のカップを俺にひらひらする刹那。ご飯は食べれなくても、俺の淹れた紅茶は飲めるらしい。ちよつと嬉しかった。

午後。決勝リーグ開幕。

決勝リーグは場所を移してテニス部専用のコートを使う。勝ち残った生徒は男女16人ずつで決勝リーグといってもトーナメント制である。男子の部、女子の部ともに4回勝てば優勝である。

男子の部を見てみると瞬と渉を始めとした学校内の運動系の有名な名前が並んでいた。瞬と渉は順当に勝ち進めば準決勝で当たるだろう。

女子の部も同じで知ってる名前がいくつもあった。その中の4分の1が生徒会執行部のみんなである事に改めて驚く。

みんなの一回戦、身内同士の対戦は無いようであまり安心し……？

第一試合、ルナちゃんの一戦。

1年A組、毬谷るな VS 3年A組、青葉華朱美。

知ってる名前だった。元風紀委員の青葉先輩……確か運動神経抜群だった気がする。

四つあるテニス部専用コートで男女並行で行われる決勝リーグ。同一回戦に涉の試合もあったがルナちゃんの方が心配だった為、そんなもんは無視してルナちゃんを応援しに行く事にした。自分の試合が7回戦の瞬も一緒である。

一回戦のコート。

刹那の予選の時くらいの人垣で溢れていた。しかし野郎の壁という訳ではなく、女の子もたくさんいた。

「ルナと青葉先輩の試合だからな。二人とも一年と三年の美少女四天王の一角だ。正に決勝リーグ随一の好カードって訳だ」

淡々と語る瞬。

「へえー……」

「ここじゃ見えない。一応関係者だから、ルナのベンチで応援しよう」

人垣で溢れ返る観客席やフェンス際。それらを迂回すると瞬はあっさりフェンスの中に入ってしまう。俺も周りの視線に怯みつつちっちゃくなってついて行く。

中に入ると丁度試合が開始するところだった。ベンチには自分達の試合がまだ後の橘と進藤さんの姿があった。

「つて、えっ！」

コートにはラケットを構えて先輩のサーブを待つルナちゃん。

その向こう、高いトスを上げた先輩の……、

「やあっ！！」

綺麗なフォームからの鋭いサーブ。……それはいいんだが俺の視線はある一点にどうしても集中してしまう。

「なんで制服なんだ！！」

俺がそう言ったのと同時に先輩の素早いサーブを打ち返すルナちゃん。しかし予選の時のようにライン際を狙ってではない、苦し紛れにどうにか返したという感じだろう。

待ってましたと不敵に笑う青葉先輩。既にルナちゃんの返したレシーブのフォアに回り込んでいた。

「甘いわねっ!!」

やはり綺麗なフォームで華麗にラケットを振り抜く先輩。……の一点をまたしても凝視してしまう俺。

「だからどうして制服なんだ!!」

ラケットを伸ばすが届かない。今度は俺の声と同時に先輩の得点が決まってしまった。

観客席からは過半数を超える野郎どもの歓声上がる。少なからず落胆したようなため息混じりの声も聞こえるが野郎の熱気にかき消されてしまった。

それもその筈、青葉先輩はなぜか制服姿。つまりはスカート。

さっきからパンツ丸見えなのである。

しかも見た感じ絶対に生パンなのである。

「行くわよ! 毬谷!」

華麗に構えるとルナちゃんに宣言する先輩。

「いやいやいや！　だーかーらーっ！」

「なんで制服なんだってばー!!」

「　　だあああ！　うつせー！！　ジャージじゃなくちゃいけねえルールは無えんだからいいじゃねーか!!」

ベンチに座っていた橘が痺れを切らしたように声を上げた。

「でも！　ほらっ！　ほらあっ！」

先輩の方を示しながらマズイだろって感じに訴える。

「知らねーよ！　パンツくれえ別にいいじゃねーか！　それよりルナの応援しろってんだよ！」

「いやいやいや！！　良くない良くない良くない！！」

「十八、マジで応援してやった方がいいかもな。ルナ、ヤバイぞ」

「えっ？」

悶着かましている橘からコートに視線を移す。

そして驚く。

試合は完全に一方的。ルナちゃんは1ポイントも取れないまま、1ゲームが終了していた。

「流石は青葉先輩。運動神経なら学校内の女子でも五本の指に入るだろうからな。瞬発力を活かした素早い試合展開はルナには相性が悪いのかもしれない」

「……ルナちゃん」

確かにさっきのサーブを見る限り、女の子とは思えない位に凄まじい弾丸サーブだった。いくら運動神経がいいっばくても小柄なルナちゃんには敵しそうだ。

「おっ、2ゲーム目が始まるぞ」

瞬の声に再び視線をコートに移す。

「行きますです！先輩！」

諦めた様子は全く感じられないルナちゃん。元気な声と共にサーブを放つ。先輩から逃げるように跳ねるスライスサーブ。

「素晴らしいわ毬谷！でも！甘いわね！！」

しかし先輩は余裕で追い付いて華麗にレシーブする。もちろん全開でパンツ丸見え、ちなみに色は白である。

対するルナちゃんは先輩の鋭角なレシーブを読んでいたらしく、ネット際に走り込む。ネット際、ブロックのようなボレー。サーブ&ボレー。自分のサーブになったルナちゃんは戦術を切り替えたようだ。

でも……。

ワンバンで高く上がったボレー。その先には既に下がっていた先輩。

華麗にスマッシュ。

ルナちゃんは動けない。

ダメだ……。素人目から見ても実力差は歴然である。

結果はやはりストレートで先輩の勝利だった。

「負けちゃったです」

ベンチに戻って来たルナちゃん、がっくりと肩を落として苦笑していた。

「ルナ……」

橘と進藤さん、心配そうに名前を呼ぶがそれ以上何も言わなかった。俺と瞬もなんて言っていないかわからず黙っていた。

「毬谷」

青葉先輩だ。

「素晴らしい試合だったわ。ありがとう」

ルナちゃんに向かい合うとそう言って爽やかな笑顔と共に右手を差し出す。

「青葉先輩……」

一度俺達に視線を向けるがすぐに先輩の右手を取るルナちゃん。

「はい！ こちらこそです！」

先輩に負けない位の笑顔を返すルナちゃん。そのルナちゃんに出来るように更なる笑顔を返す青葉先輩……。

青春だ。爽やかだ。

青葉先輩、堅苦しいイメージがあったが、とても堂々としていて気持ちのいい人だ。

しかし……、

「先輩はどうして制服なんですか？」

これだけは気になる。失礼だが訊かせて頂く。

「……誰よアンタ」

爽やか笑顔から一転、怪訝そうに表情を曇らせる先輩。

「あ、いや。前にも言ったんですけど、塩田です。こないだ執行部に入った塩田、塩田十八です。塩田十八を今一度、今一度、お願い

致します」

ちよつぱり傷付いたが再度自己紹介を試みる。悲しくてか、余計な事も言ってしまった気がする。

「あゝ……で、なに？ これ？」

思い出したのか、どうでも良くなったのか、質問に話を戻す先輩。自分の制服を指で摘みながら訊いて来る。俺を怪しむような表情はそのまんまだ。

「は、はい。えっと、その格好だと………動きづらくないですか？」

パンツ丸見えじゃないですか？とか言いそうになったが流石に飲み込んだ。

「べ、別に……私ぐらいの実力になればわざわざ着替える必要が無
いだけよ」

何故だか少しムツとしたように言う先輩。

???

「絶対、忘れて来ただけと見た……」

ぼそりと呟く進藤さん。

「うっ、進藤」

凶星らしい。

うーむ、これは考えるまでも無いな。

「先輩、ちょっと待ってて下さい」

「はあ？」

「すぐに戻るんでそのフェンスの所で待ってて下さい」

「どうして私が……ってちょっと！！ 待ちなさいよ！！」

首を傾げる先輩とぽかーんとしているみんなを残して俺は駆けて行く。

しばらくして戻って来ると、先輩はちゃんと待っていてくれた。他のみんなの姿は無かった。

「すみません。お待たせしました」

待ってはくれたみたいだがずいぶん機嫌を損ねてしまったようだ。何も言わず、ぶすつとしながら俺を見て来る。

「……で、なに？」

不機嫌そうな表情のまま俺を促す先輩。早く目的を知りたいらしい。

「あつ、いや。えーと、これを」

俺は手に持っている物を渡す。

条件反射で受け取る先輩。

「????」

渡した物を見て先輩は目を丸くしてしまつ。

俺が渡したのはジャージ、俺がさっきまで着ていた脱ぎたてほやほやの俺のジャージである。必然的に今の俺の格好は制服だったりする。

「えっ？ なに？」

最早びっくりしたような表情の先輩。俺の顔と俺のジャージを交互に見比べている。

「ちょっと？ もしかして着ろつて事？」

びっくりしたような表情のまま訊いてくる。

「はい」

やはり失礼だがはっきり言わせて頂く。

「ラインの色は違うし、ちょっと大きいかもしれないんですけど使つて下さい。洗濯してあるし、今日は汗掻いてないから大丈夫です

よ

先輩であり、面識もほとんど無い人であるにも拘らず、些か慣れ慣れしい俺。普通に考えたら言葉を選ぶところが思った事をずけずけと言ってしまう。

どうしてかはわからない……不思議だった。

「 なっ！？ 意味不明だわ！ どうして私があなたのジャージを着なくてはいけないの！？」

苛立ったような先輩。

うーん……先輩には申し訳ないが全く怖くない。刹那と比べるとまるで普通だ。

「先輩がパンツ丸見えだからです。良くありません。俺のジャージが嫌だったら瞬のジャージを持って来ます。それでも駄目なら仕方がないので試合前に人払いをします」

明らかに俺らしくない。しかし何故だろうか……この人を見ていと無性にお節介を焼きたくなる。

「……刹那に……言われたの？」

俺の捲し立てた啖呵が効いたのか、おとなしくなった先輩は言う。

刹那？

「いえ。刹那も執行部も関係ないですよ。俺のお節介です」

俺の言葉を聞くと考えるようにジャージを凝視する先輩。迷っているように見える。

「……そ、わかったわ、着てあげる」

ため息混じりに言う。

「そうですか、良かった。好きに使ってもらって構わないんで」

ちよつと強引すぎた気もするが、これで先輩はあんな見世物みたいな視線を受けずに済むだろう。

「ところでみんなはどこに行つたかわかります？」

待たせていたのは先輩だけだが、瞬までいなくなつてるのがちよつぱり寂しかった。

「第二試合の刹那の試合を応援に行つたわ」

「……………」

やっぱあい……応援に行くと言つた訳じゃないが、なんとなく怒られそうだよ。

「お、俺、もう行きますー！」

言いながら踵を返す。

急いで応援に行かなくてはならない。

「ちょっと待って!」

駆け出そうとすると先輩に呼び止められた。

「えっ? はい?」

「えっ、と……」

振り返って見た先輩は言葉を切ってもじもじしていた。

「……ありが、とっ……」

そのまま俺のジャージに向けてぼそりと呟く。何やら恥ずかしそうである。

「……………」

とても小さな声での言葉であったが俺にはわかった。

しっかり伝わった。

この言葉が先輩の心からの言葉である、と。

……やっぱりこの人はとても気持ちのいい人だ。

自分の考えを押し付けようとしな。自分の考えを真っ直ぐに伝えようとしてくれる。しかもその考えはとても優しい。とても不器用だけど、大切な所は本当に優しい。

俺は彼女に対して肩書きや噂話で大変失礼な偏見の目を持っていたようだ。

「はい。先輩も頑張ってください！ じゃっ！」

嬉しさと恥ずかしさと後ろめたさの入り混じった言葉を残してその場を後にする。

何故だか振り返るのが恥ずかしくて振り返れなかった。

二回戦、第一試合。刹那と青葉先輩の試合である。

試合開始前、刹那側のベンチには執行部の全員が集合していた。

「私のルナをコテンパンにしてくれちゃってさ！ ただじゃおかないわー！」

何やらやる気満々の刹那。ぶんすかしているだけにも見えるが試合に対してのモチベーションは高そうだ。

それにしても俺はさっきから非常に落ち着かない。ぶんすか刹那が気になるからというのもあるが他にも気になるものが二つある。

一つは周りの視線。ルナちゃんと青葉先輩の試合の時のギャラリ―も凄かったが、この試合、明らかにそれ以上の人垣で溢れ返っている。人数が増えただけではない。男9に対して女1、フェンス付近は見るだけでも暑苦しい野郎の壁が構築されている。野郎どもの視線は刹那やルナちゃんに向けられている気もするし俺に向けられている気もする……。なんかG組の連中みたいな視線を感じるからたぶん間違いない。

気になるものはもう一つ。反対側のベンチ。しっかり俺のジャージを着てくれてる青葉先輩。独りぼっちでストレッチなんかやっている。

対してこっちのベンチでは選手である刹那を含めて7人。座れない俺と瞬は立っているくらい。

うーむ……やっぱり考えるまでも無いな。

「俺さ、あっち行くから」

さり気なくみんなに言う。

「あっち？ あっちってどっちだ？」

隣に並んで立つ瞬間が反応してくれた。トイレか？みたいなノリである。

「青葉先輩んト」

「ああ、そうか……って、えっ？」

しーんと間が空く。

みんなきょとんとして、目をぱちくりしている。軽く驚いたような瞬間は固まってしまっているし。

「えっ？ 偵察？」

ぱちくりしながら言う刹那。

「いや、違うよ。なんか先輩一人だからさ、なんとなく」

再びしーんと間が空く。

みんな鳩が豆鉄砲って表現がぴったりな表情で俺を見てくる。

「はあ〜？ どうして敵陣地にあなたが行くわけ？ あなたは執行部で会長補佐でしょう？」

思い出したようなはっとしたような勢いでくわっとする刹那。

「いいじゃん、こっちいっぱいいるし」

「あんたは」

「いいよいいよ。こっちの事は気にしないで行って来い行って来い。うんうん、いいぞお〜、十八が自発的に女の所に行くなんて初めてじゃないか？ くくくっ！ いいぞお！ 行って来い！」

俺の行動を推してくれているらしい瞬が刹那を制する。にやはは笑いでなんだかやたらと嬉しそうである。

「ちょ！ 十八！」

納得いかないらしい刹那が何か言おうとするが、にやははな瞬に完璧にブロックされてる。瞬は親指を立てて爽やかに笑いながら、ここは任せる！みたいな目配せを送ってくる。

「大丈夫、刹那の応援はちゃんとするからさ」

後が怖いので一応そう言っておく。

「せんぱい。ルナも行ってもいいですか？」

橘と進藤さんに挟まれて座っていたルナちゃん、なんだか嬉しそうに訊いてくる。

「は？ ちよつと！ ルナ！」

驚いたような表情の橘が追い縋ろうとするが、ルナちゃんはやんわり笑顔を向けるだけで俺の腕にしがみついてきた。

「ルナも青葉先輩が寂しそうって思っていました！」

そう言っつていつものように笑顔で見上げてくる。心なしいつもより笑顔もむぎゆ具合も強力な気がする。

流石に察した。

「オツケーオツケー！ 行こ行こおっ！」

ルナちゃんの自然な優しさを感じる事が出来たから敢えて軽いノリで了承しておいた。

俺のお節介に賛同してくれる人は瞬だけだと思っていた。もちろん俺なんかの為ではなく先輩の為だが、ルナちゃんの笑顔が心から嬉しかった。

「青葉先輩！」

青葉先輩のベンチに着くや否や元気に先輩を呼ぶルナちゃん。

「えっ？ ……毬谷？」

ぐいぐいストレッチをして試合開始を待っていたらしい先輩。突然声を掛けられたルナちゃんにびっくりしてる。

「先輩のサポーターが到着です！」

驚く先輩に対して嬉しそうにはしゃぐルナちゃん。

「サ、サポーターって……何よそれ？ もしかしてソイツも？」

俺の方をチラ見しながらルナちゃんに訊く先輩。

「はい！ ルナ達、刹那先輩にも頑張ってもらいたいけど青葉先輩にも頑張ってもらいたいんです！」

元気に笑うルナちゃんは狼狽え気味の先輩を無視して捲し立てる。俺も含められて言っていたみたいだが、言ってる事はその通りだった。

「い……意味不明だわ！ あなた達は執行部じゃない！ だいたい刹那に怒られちゃうわよ？ ちょっと！ あなたも何か言いなさいよ！」

困り果てたのか俺に振って来る。

「いや、何かって言われても別に……ルナちゃんの言う通りだし」

先輩の言いたい事はわかるが、はっきり言って俺達の事はどうで

もいい。

球技大会という学校行事。この個人戦が自由参加であるように応援する事だって自由な筈だ。迷惑かもしれないが頑張っしてほしい人の応援をする事は自由な筈だ。

先輩が嫌だと言えばそれまでだが、青葉先輩はそんな事を言う人じゃないと思う。

「先輩の、お友達の応援しちゃ……ご迷惑ですか？」

ひたすら困り果てる先輩の反応を見て悲しそうに呟くルナちゃん。

俺の思っていた事を綺麗に伝えてくれた。

「ちちちよっと！ 迷惑なワケ無いじゃない。う、嬉しいに決まってるでしょ？」

途端に高速であたふたする先輩。その反応を見て、やっぱりいい人だなあ、って思ってしまう。

「じゃあ……ここで応援してもいいですか？」

反則とも取れるうるうるな上目遣いのルナちゃん。それを見た先輩は困った表情で中空を眺めると息を吐く。そして肩を落としながらもどこか嬉しそうに呟く。

「昨日の敵は今日の友……わかったわ、毬谷」

「先輩？」

「頑張るから応援、してくれる？」

先輩よりも背の低いルナちゃんに視線を合わせるように屈みながら言う先輩。

「……は、はい！ 頑張ってください！」

元の元気な笑顔で先輩に応えるルナちゃん。

「……………」

……ええ話や。若干俺が蚊帳の外気味だったが良しとしておこう。

少しして審判に呼ばれてコートへと出陣する先輩を見送る。刹那ベンチからも刹那がコートへと歩いて来る。途中、振り返ってルナちゃんに笑い掛ける先輩。俺の方もちょっとだけ見てくれた気がする。

先輩と刹那、二人がコートに入ると会場が湧く。主役となる二人の有名人の入場にギャラリィは興奮状態である。その熱気に当てられたのか俺までハラハラして来た。先輩もかなりのやる気のようにだし、刹那も……？

「えっ？」

胸元に構えたラケットのガットを指でカリカリしている刹那。闘

争心むき出しといった感じでかなり迫力がある。

しかし、なんだろう……その闘争心、青葉先輩を通り越して先輩の後方にいる俺に向けられているっぽいのは気のせいだろうか？

「刹那！ 去年はあなたにいいようにやられたけど今年は負けないわよ！」

何やら因縁があるらしい刹那と先輩。ラケットを刹那に構えながら宣言する姿は見た事ないけど昔のスポ根アニメっぽい気がする。

「はいはい、いいから早く始めましょう？ 少しばかり予定があるので急ぎたいわ……」

かったるそうな刹那は先輩の方を見ないでそう言つとギロリと俺を視線で射抜く。

予定つて俺？

「せんぱい、ロックオンです……」

ぼそつと呟くルナちゃん、意外と鋭いらしい。

試合開始。

サーブ権を得た刹那がサーブを

ヒュッッ……！！

「えっ!?!」

ひゅご? なんか一瞬ほっぺが涼しかったぞ?

「フィフティーン ラブ」

審判さんがおっしゃる。

恐る恐る振り向いてみると俺の後ろのフェンスにテニスボールが突き刺さっていた。ぞくりと背中に寒気を感じながらコートに視線を戻してみる。

もの凄い残念そうな表情の刹那と目が合った。

「せんぱい、ロックオンです……」

ぼそつと呟くルナちゃん、意外とボキャブラリーに長けているらしい。

刹那と先輩の試合は凄かった……いや、刹那が凄かった。

感心してしまうほど上手なテニスをするルナちゃんを圧倒的な実力差で破った青葉先輩。刹那はその青葉先輩を完全に子供扱いしていた。刹那と先輩の実力差のルナちゃんと先輩のそれ以上である事は間違いない。

「ゲームセット。ゲーム&マッチ、ウオンバイ佐山」

試合結果は刹那のストレート勝ち。完全に刹那のワンサイドゲームだった。

予選、一回戦ともに見ていなかった俺は初めて見る刹那の超人っぷりにひたすら愕然としていた。

「くーやーしい！！ なんなのよお！ あの化け物はあ！！」

ベンチに戻って来た先輩はジタバタと地団駄を踏む。

「どんまいです！ 青葉先輩！」

いや、今それを言ってもしょうがないでしょ。

夕方。執行部テント。

今日の個人戦は片付けも少くもあり、あっさり終わってしまった決勝リーグの影響もあり、手持ち無沙汰の俺はまったりしていた。

決勝リーグ、優勝は女子が刹那、男子が瞬だ。瞬はともかく、刹那の試合はあまりに圧倒的過ぎて、圧倒的でした、としか表現出来ない。

橘や進藤さんも頑張っていた？ 頑張っていたようだが残念な結果に終わっていた。

二回戦の橘対進藤戦を回想してみよう。

『決勝まで行ったら会長と試合しないといけないんだよなあ』

ばーん

『巴に譲るんじゃないか』

ばーん

『いやいや、あたしじゃ荷が重い。巴に任せるよ』

ばーん

『ちょっと！ 試合中の私語は厳禁です！ しかもラリー中に！』

なんて感じて早々に試合を投げていた。結局橘が勝ったのだが、準決勝で三年生に素で負けてしまっていた。

男子の方はあんまり見ていないから涉がどうなったかは知らん。

「十八？ 訊きたい事があるけど……いいかしら？」

全試合を終えた刹那、ひたすらぼくっとする俺に静かに訊いて来る。

半端じゃなく怖い。俺が先輩ベンチに行った二回戦以来、刹那は終始おかんむりのご様子で口を利いてくれなかった。だから改まれると凄い怖い。

「な、なに？」

いろいろ構えながら応えてみる。

「ずいぶん青葉華朱美と仲がいいみたいだけど……あなた、風紀委員の回し者かしら？ ……そうそう、ルナまでたぶらかしていたわね……そういえば」

「な、何を言ってるんだよ刹那。そんな訳ないよ。先輩とまともに話したのだから今日が初めてだし、ルナちゃんだって関係ないよ」

ちゃんと正直に言っているのに後ろめたいのは何故だろう。

「ふうん……私って視力両方2・0なのよねえ……。先輩の着ていたジャージ、胸元に『塩田』って書いてあったのよねえ……。2年生のラインだったし、あなたは何故か制服だし……。不思議よねえ……」

明後日に語り掛けるように俺を全く見ないで言う。

「い、いや……その」

「更に聞いた話によると橘と進藤のファンクラブなんかを作ったらしいじゃない……」

絶対話したの瞬だし、面白がって……。

「えーと、刹那？」

これってヤキモチなのだろうか？ だとしたら嬉しいが……。

「ヤキモチとか訳のわからない事を考えてたらひっぱたくわ。悪いけど欠片もそんな物感じないから」

読心術？

「とにかく、あなたの行動は少し目に余るわ。明日の野球、大丈夫なの？」

「大丈夫って？ いや、頑張る……けど、さ……」

言いながら気付く。

何を頑張るんだ？ 俺は？

「真面目に出来るワケ？」

既に苛立ったような刹那が念を押すように言う。

真面目に、か……。

言い方から、刹那の表情から、刹那が俺に抱いていた期待が薄くなくなってしまった事を感じ取る。

刹那の期待。

そんな物は始めから幻想に過ぎない。

俺がそれに応えたいと思う事も……。

刹那が俺に抱く理想も……。

始めからどこにも存在しない。

「十八？ 聞ってるの？」

黙り込んでしまった俺を刹那が訝しげに覗き込む。

幻想か……振り払うなら早い方がいい。

「頑張る、目一杯頑張る。だから刹那、見ててくれ」

我ながら馬鹿な台詞を言ったものだと思った。

「えっ？ ああ、はい。しっかりやってくれるなら私は、いいけど……」

俺の返答を真面目に受け取った刹那は困惑気味である。

これでいいんだ……。

下らない妄想なんか引き摺るだけ馬鹿げている。

刹那が抱く幻想も……俺が抱く妄想も……。

……馬鹿げている。

嘘でも夢でも無い。

『今』の俺を晒せばいい。

これは現実なんだから。

朝から酷く憂鬱だった。

球技大会、三日目。部活対抗戦。

今日行われるそれを思うと初日のサッカー以上に気分が落ちる。

俺が惨めな姿を晒すのはわかっている。みんなに迷惑を掛けるのはわかっている。

それらは俺が慣れ親しんでしまった自己嫌悪を通り越した恥部でしかない。割り切ってしまった常識の筈だ。

……いつも以上の憂鬱に拍車を掛けているのは俺の下らない自尊心。

それと彼女の存在。

一番センター塩田。

滑稽だ……声に出して自分を嘲笑ってやりたくなる。自分の下らない自尊心を踏みつぶしてやりたくなる。

そうして、いつものように自分自身への蔑みを繰り返しても心のどこかで見栄を張ろうと燻る自尊心は晴れてはくれない。

……彼女の期待を裏切る事が嫌だった。

「はぁ……」

やはり俺の思考の果てには嘆息がある。

せめて準備だけでも頑張ろうと早めに学校に来てみたはいいが、執行部は誰も来ていないし準備が始まる様子も無い。

仕方ないので温かい飲み物でも飲みながら待つ事にする。

校庭近くの自販機でいつものカフェオレを買う。このお気に入りのカフェオレ、俺的には美味しいのだが校内ではこの自販機でしか売っていない。

飲みながら執行部テントで待とうか、と考えていると。

「あああー！！」

何か凄い物でも見付けたみたいな声上がる。

軽く驚きつつ視線をやると、先ほど俺が買った自販機の前に女の子がいた。

「ざっけんなや！　こんな朝一から売り切れになるなんてアホな事

あるかい！」

何故か女の子は自販機に文句を言っていた。どうやら買いたい飲み物が売り切れていたらしい。気の毒に、この自販機はマニアックな飲み物ばかりな為か、業者がたまにしか入らない。何が飲みたかったのか分からないが諦めるしかないだろうな。

「おい」

ん？

「おい！」

もう一度聞こえた声に周りを見渡すが誰もいない、俺だけである。

「えっ？ 俺？」

「おめえしかいねえだろが！」

な、なんだこの子は……やたらと上から目線だぞ、ちっちゃいけど……。

「俺に何か用？」

なんだか嫌な予感がするが訊いてみる。

「用ってかなんてうか、ほれ」

何かを渡された。

???

120円？

「えっ？ えっ？」

「悪いな」

ひょいっとカフェオレを奪い取られる。おかしいな発言に気を取られ過ぎて油断してしまった。

女の子は俺のカフェオレを持ってたかど走って行ってしまった。

???

「えっ？」

その後、俺は状況を理解するのに数分を要した。

しばらくして登校して来た瞬と一緒に作業に掛かる。

今日の作業は初日と同じく校庭のライン引きだった。

「今日もいる気がするな……」

ぼそりと呟く瞬。何の前振りも無く振られた話だったが瞬の表情

を見てピンと来る。

「多分いるね、アホだから」

そう言っつて校庭を見回すと初日と同じど真ん中になんかいた。

「どうする？ 絡むだけで後悔するのは明白だが、ほっとくか？」

迷惑そうな表情はそのままに訊いてくる瞬。

「今日もわざわざユニフォーム着てるっばいからちょっとだけ絡んであげようよ」

流石に全部無視はかわいそうなのでネタだけでも聞いてあげた方がいいだろう。出番少ないし。

「そうだな、面倒だけど仕方ないな」

本当に面倒くさそうな瞬。

「渉、おはよう」

近付いて挨拶してみる。

「えっ、ああっ！ 瞬とシオっ！ おはようっ！ 今日もいい天気だねっ！ ベースボール日和だねっ！ イヤッホウッ！」

挨拶と共にウザイハイテンションを（中略）渉の格好は野球の（以下略）。

「何やってんだお前」

若干棒読みな瞬。

「何をやってるって何を言ってるんだよっ！ おとさんっ！」

おとさん？

そう来たか……。

「君となら海堂を敵に回すのも面白いつ！」

手に持った（以下略）。っていつか主人公のセリフじゃないし。

「十八、もういいだろ……早く作業を始めよう」

「ああ、何か悪かったな……瞬」

やっぱり瞬の言う通りほっとけばよかった。

「えっ？ 嘘？ もう行っちゃうの？ 俺ってしばらく出番なくなるっぽいんだけどっ！」

以下略！

作業を終えて執行部テントに戻ると既に執行部全員が集まっていた。みんなは輪になって何やら議論しているみたいな様子だった。

「どうしたんだ？」

輪の中を覗き込みながら訊く瞬。俺には女の子だけの輪に突撃する根性は無い。

「瞬……困った事になったわ」

言葉の通りの表情で輪を開ける刹那。輪の中には俺達の名前が書かれた今日のメンバー表が置かれていた。

「補充要員が一人来れなくなってしまったのよ」

はぁ、とため息混じりの刹那。

今日の部活対抗戦の野球。執行部の部員数では足りないからと刹那が確保した補充要員。

確か三人だった筈だ。

「一人来れないって残りの二人は大丈夫なの？」

と、俺が訊いた瞬間、

「瞬ペーとシオっち、おっはよ〜」

「は？」

何やら聞き慣れない呼び名で呼ばれた？ 瞬と二人で声を合わせてしまう。呼ばれた方を見てみると小学校も中学校も一緒だった桂かつ由ゆがいた。

「えっ？」

なんで？

「もしかして補充要員って……」

「補充要員一番の桂由さんよ」

刹那が何故か誇らしげに紹介する。

「もう一人は、ほら、あつちでつまんなそうに座ってる」

刹那の示す方を見してみる。テント内の隅っこにはダルそうな女の子が座っていた。しかも俺はその子にも面識があった。

「カフェオレ！」

女の子は間違いなく今朝俺のカフェオレを持って行ったヤツだった。

「なに？ 知り合い？」

怪訝そうな表情の刹那が訊いてくる。

「いや、今朝自販の」

「誰だおめえ」

「……………」

カフェオレの無念は俺の胸にしまっておこう。

「まあとにかく、彼女が補充要員一番の八神棗やがみなつめさんよ。とりあえずこの二人は参加してもらおう事は確定だわ」

やはり何故か誇らしげに紹介する刹那。

「よろしく」

何故か楽しそうな桂。

「ちっ」

不機嫌そうに舌打ちする八神さん。

「瞬……………」

俺は頭の中に浮かんだ疑問を瞬に尋ねてみる事にした。

「ああ、十八の言わんとしている事はわかる。桂もあっちの八神も恐らく成績不良の帰宅部だろう。それで刹那は補習免除とかを条件に今日だけ仮入部させたんだろうな」

「でもどうして……………」

女の子ばかり？って言おうとするが、瞬はわかっているって感じで俺を制した。

「直接訊いてやるよ」

そう言うと刹那を呼んだ。

「また女の子ばかり……補習免除を希望する帰宅部は男子もいた
だろう?」

わざとらしく呆れた口調で訊く瞬。

「嫌よ、男なんて。いいじゃない、かわいいんだから」

ふんって感じで言う。

かわいい?

「瞬?」

「ああ。男が嫌だったのもあるだろうが、一番の理由はかわいいから……たぶん来れなくなった三人目も女の子だった筈だ。……つまり刹那はかわいい女の子が大好きなんだって事だよ」

言い終わると、とても疲れたようにため息を吐く。

瞬は自分の姉が男嫌いでかわいい女の子大好きな事に呆れている
みたいだ。なんか瞬も人の事言えないと思うのは俺の勘違いだろ
うか?

「……三人目……どうしよう……」

海老原さんの眩きで話題が戻る。

「やっぱり会長が出るしかねえんじゃないか？」

橘が言う。確かにその通りだ、刹那が出ればぴったり9人である。

「女子部が相手ならいいけど、それ以外は絶対にイヤ！」

うわあ……ただの我が儘だし。桂達を含めたみんなも、うわあ、
って顔してる。

「ねえねえ、帰宅部ならいいのかな？」

何か思い付いたらしい桂が訊く。

「まあ、ね。この際仕方ないわ」

全然納得いってなさそうな表情で答える刹那。

「じゃあヒマ人連れて来るよ」

そう言ってたったか駆けて行く桂。

「あたしも当てがある」

小声で言うとおもしろそうに携帯を操作しだす八神さん。

しばらくして。

「連れて来たよ」

「おい！ 由！ 痛ってえって！ わかったから引つ張んなよ！」

桂に手を引かれて、っていつか引き摺られて連れて来られたのはやはり同じ小学校で同じ中学校だった藤村恭介ふじむらきよすけだった。

「あれっ？ 瞬とシオじゃん？ えっ？ 何この集り」

全く理解してないっぽい藤村、瞬と二人で苦笑で応えておく。

「おい！ そっちやないわ！ こっちちゃんボケカス！」

藤村の登場に驚いていると後ろからデカい罵声が聞こえてくる。振り返ってみるとまたもや知ってる顔が恐る恐るといった感じで歩いて来る。

「おっそいんじゃ！ ヘッポコつさぎが！」

ヘッポコつさぎ？

「棗が急に呼ぶからだろ？ まさかこんな所にいるなんて思えない
しよ」

どうやら八神さんに呼ばれたらしい男子生徒は藤村達と同じように小中一緒だった河本竜一かわもとりゅういちだった。

「まあ仕方ないわね……残りの補充要員はその二人でいいわ……」

かったるそうに投げ遣りな感じで言う刹那。

藤村も河本も小学校からの知り合いの筈なのに刹那は嫌らしい。

「えーと、もしかしてさ……部活対抗戦に出るの？」

未だ状況を把握していない河本が訊いてくる。

「残念だが諦めてくれ」

ひたすら苦笑いの瞬は申し訳なさそうに言う。

「まあやるしかなさそうだし、いいけどさ。しかし驚いたな、シオが執行部に入ってるなんて知らなかったよ」

「あつ、俺も驚いたよ」

藤村と河本、二人して意外そうに訊いてくる。

「いや、ついこないだにさ、成り行きで入ったんだよ。はは……」

実は二人と話すのは酷く久し振りだった。少し気を遣って話してしまう。

八神さんは違うが、桂を含めた三人は小学校の時はよく一緒に遊んだりした事もあった。ほとんど変わっていない懐かしい顔ぶれに

俺はほんのり嬉しくなってしまうている。

懐かしい……ずっと一緒に学校だったのに懐かしい……。

刹那と同じ。

『あれ』以来めつきり話す機会が無くなったからだ。

いや、そうではない。やはり刹那と同じように俺が周りから距離を置くようになったんだろう。瞬だけは別だったが俺から離れたんだ。

藤村も河本も桂も『あれ』を知っている。

遥を知っている。

みんな俺を気遣ってくれていた。俺はそれからひたすら逃げ続けていた。

周りの優しさが怖かった。堕ちた自分を見られるのが嫌だった。

遥を知ってる人が怖かったんだ……。

「それじゃあみんな、これを着てちょうだい」

全員を集めた刹那が何かを引っ張り出す。

段ボール？ に入った？

「な！ なにこれ！？」

口の開いた段ボールの中に入っているのは恐らくユニフォーム。しかも……。

「ピンク色？ それにこれ、野球のやつじゃないか？」

取り出して広げてみてドン引きした。白地にピンクの縦縞、見た感じは野球のユニフォームかと思ったがよく見ると下はハーフパンツ。なんともかわいらしい女子ソフトボールユニフォームだった。

「刹那？」

まさか俺達にも『これ』を着ると？

「デザイン部と手芸部が協力して作ってくれた力作よ。大丈夫、全員分のサイズを調べて作らせたからぴったりの筈だわ。余分にあるし、ゆったりした造りになっているから増えた男連中にもなんとか着れるわ」

「いや、あの？」

「背中には生徒会執行部の刺繍を入れたの。これを着るからには負けは許されないわよ！ 十八！」

「う、うん」

ひっくり返すと背中部分にローマ字で生徒会執行部と書いてある。ダメだ、刹那、半端じゃなくやる気になってる。着るしかないじゃん。

流石のみんなも俺と同じようなリアクションを？ してるのかと思ったが、それでも無くて野郎以外は平然としている。

「かわいい……」

小さな呟きが聞こえたと思って視線を移すと、八神さんがユニフォームをキラキラした瞳で愛でるように見つめていた。

がっかりした。

球技大会三日目、部活対抗戦。

今年は野球。野球は野球でも軟式野球でイニングも五回のコールド無し、対戦する組み合わせもやはりトーナメント制らしい。

クズ校の部活総数は文化部、運動部、同好会合わせて141個ある。今回の部活対抗戦に参加する部活はその内の20。協賛してくれている野球部以外のサッカー部や陸上部などを中心とした実力のある運動部ばかりである。まあ数多くの同好会は人数が足りなくて参加出来ないのが実情だろう。

その中に何故か混ぜって参加している我らが生徒会執行部。部活として成り立っているかどうか激しく疑問である。

始業時間と共に対抗戦が始まった。

しかし何故か第一シードを獲得している執行部は暇だった。

目の前の校庭では青空の下で白球を追い掛ける同級生達。実に爽やかな光景を目の当たりにしている筈なのにちっとも気分が乗ってくれない。

「なあ………」

爽やかな喧騒に混じって囁くような静かな問い掛け。左隣に並ぶ藤村だった。

「何やってんだろうな、俺達………」

相槌を打つ前に再び小さく囁く藤村。とても寂しそうである。

「俺は今すぐ逃げ出したいよ……」

藤村の表情に顔をしかめようとすると藤村の向こう側からやはり寂しそうな声が聞こえる。河本である。

「俺も同意見だが刹那には逆らわない方がいい……」

藤村達とは逆の右側から瞬が俺越しにそう言うと二人とも黙り込む。瞬もそれ以上何も言わなかった。真ん中に立つ俺も黙っていた。

執行部テント前。白ピンクのかわいいユニフォーム姿で校庭を眺めながら佇む野郎四人、身も心も脱力しまくっていた。

通り過ぎる人達全員が俺達を見た途端、見てはいけない物でも見たみたい目目を逸らして走り抜けて行く。

非常に切なかった。

いろんな意味で切なかった。

「ところでさ、リュウ。お前はあの、えー……八神と、付き合ってるのか？」

少し離れた所で刹那と話している八神さんを見ながら呟く藤村。

「う、うん。まあね」

見るからに照れまくりながら肯定する河本。

「へえ、やっぱりか。チラッと噂で聞いてたけどリユウもやるじゃん」

言いながらからかうように河本を小突く藤村。

「や、やめろよ。そう言うお前は桂とどうなんだよ？」

顔を真っ赤にして小突き返す河本が反撃に転じた。

「はあ？ い、いや、由とは何もねえよ」

河本の反撃に微妙にたじろぐ藤村。

「恭介、俺は知ってるぞお？ 家のバイトの超美人の年上と付き合いってるらしいじゃないか……しかも二人いるバイトにフタマタ掛けてるって？」

俺越しにニマーっと二人の会話に参加する瞬。って、何い！？
フタマタだとう！

「ばっ！ レオナはちげえって！」

凄いい勢いで振り向くと必死そうに否定する藤村。俺にばしばし唾が飛んで来た。

「ほう、レオナさんというのか……」

顎に手を当てたしたり顔で揚げ足を取る瞬。

「か、勘弁してくれよ、瞬。付き合っている人はいるけど、由でもレオナでもない別の人なんだからさ……」

「はは、わかってるよ。お前がフタマタ掛けれるほど器用なヤツだとは思わないからな」

そう言う瞬の笑いに釣られたのか河本も笑う。藤村も苦笑いを返すが何やら嬉しそうである。なんとなく俺も笑っておく。

しかし、何かな、この疎外感。

なんだか知らんがモテまくっていきそうな藤村。美形で有名だった河本にもついに彼女が出来たらしいし。二人の話を笑顔で聞く瞬は余裕そうだし、ファンクラブあるし。

「シオは？」

そう、俺だけどうしようも無いじゃん……って、俺？

笑顔のまま話を振る藤村、他の二人も笑顔で俺を見てくる。

やっぱり俺？

「佐山と付き合ってたのか？」

は？ 佐山って刹那の事だよな？ 瞬の筈ないし……。

刹那？

はあ！？

「や、や、や！ 違うっしょ！ 絶対に違うっちゃ！ どげんやったらそういう話が出てくるんだっさもっし！」

馬鹿丸出しであたふた照れまくってしまふ俺。同時にどうしても横目で刹那を見てしまふ。聞こえたんじゃないかとハラハラした。

「なんだよ？ ずいぶん激しく否定するな、シオ。いや、だってさ、佐山って男嫌いで有名じゃん？ 瞬以外でお前も平気なのはなんとなくわかるけど、それにしてもって思ったからさ」

何が？

「まあまあ。とりあえず今は違うが、その内もしかしたらもしかするかもしれないぞ？」

瞬が、あんまりいじめんなよ、みたいに藤村をたしなめる。

いや、だから何が？

「俺が思うには佐山よりあの海老原って子の方が怪しいけどな」

笑顔のままの河本が変な事を言う。

いやいや、だから何が？

「あつ、言ってる。さっきシオの着替えを手伝ったりしてた子だよな」

だって上手く着れなかったんだからしょうがないじゃん。

「くくく。残りの連中もどうなるかわからんぞ？ ……賭けるか？」

何やら盛り上がる藤村と河本に含み笑いで何かを持ち掛ける瞬。

だからなーにーがーっ！！？

昼前、ようやく二回戦である俺達の試合となった。

対戦相手となる部活はラグビー部。一回戦ではなんとなく強そうな陸上部を大差で破ったらしい。部員数の多い部活は野球の出来そうなヤツをたくさんの中から選出できるから有利なのだろう。

「はっ！ 何か弱そうだわ、余裕ね」

いざ整列しようという時に言う刹那。いやいや、ちよつと刹那さん？ 目の前の屈強そうな漢達おとこの事を言ってるんですか？

なんとも先行きに不安を感じながらラグビー部と向かい合うように整列する。

「くそお、野郎が増えてんじゃねえか……」

整列したら今度は相手側から何やら呟きつかばやきが聞こえた。見てみるとサッカーの時のG組のゴツいヤツが睨んでた。っていう

かラグビー部のほとんどがG組だった。

緒戦から非常に不安である。

一回の表、生徒会執行部の攻撃から。

トップバッターはやっぱり俺。

「どうにか塁に出ないとどうにか塁に出ないと……」

バッターボックスに入りながら自分に言い聞かせるようにぶつぶつ呟く。

ラグビー部のピッチャーはゴツい顔のヤツだった。どうやら顔も凄いが運動神経も凄いらしい。

審判の合図と共に試合開始。

ゴツい顔が俺を睨みながら大きく振りかぶる。意外と本格的な投球モーション。俺もバットを短く握り込んで構える。

よし、来い！

ズバーン！

「ストライークッ!!」

「えっ?」

思わずキャッチャーミットを凝視してしまった。ミットにはしっかりボールが収まっている。

「えっ?」

そのミットのボールをキャッチャーがゴツい顔に投げ返す。同時にキャッチャーのヤツは俺を見てニヤける、お前に打てる訳ねえよ、とでも言いたそうだった。

速い、確かに速い。全然見えなかった。いや、さっきのは多分ストリート、しっかり見ればタイミングを合わせるだけだ。よし、と再び構える俺を見たゴツい顔は二球目の投球モーションに……。

ズバーン!

絶対無理!! 俺の能力では到底捉えられそうに無い。

マズい。どうする?

どうにかしなくちゃと考え込もうとするが、ピッチャーは待つてくれない。三球目の投球モーションに入るゴツ男(命名)。

慌てて構え直す。

そつだ。考えてもしょうがない。やるしかないんだ。

出来なくてもやらなくてはいけない、後ろ足に重心を掛けて前の足でタイミングを測る。まぐれでも偶然でもなんでもいい、ギリギリまで短く持ったバットを握り込む。とにかくバットを振らなくては駄目だ、全神経を集中して目を凝らす。

ズバーン！

「ストライーク！ バッターアウト！！」

空振り。しかも明らかに振り遅れだった。

ため息を我慢しながらとほとほとベンチへと歩く。上手くやれるとは思っていなかったが、どうしても気分が落ちてしまう。

「シオっち、ドンマイドンマイ！」

途中、次の打順の桂に笑顔で励まされる。項垂れる俺とは正反対に元気な桂。はは、小学校の時から全然変わってないじゃん……。

ベンチでは瞬が出迎えてくれた。

「顔に似合わずなかなか速かったな。しかも顔に似合わずコントロールもいい」

戻った俺に瞬が相手投手の感想を振って来る。決して俺の惨めな部分に触れない。瞬らしい。

「ああ、確かに速かったけど……」

瞬に反応はするが意識は向かない。俺の意識はある一か所に集中していた。……しかしそこを見れない。

「十八」

そこから声が掛かる。呼ばれてしまった。

「……なに？ 刹那……」

応えるが視線は合わせられない。覚悟はしていたが正直キツい、後ろめたい、恥ずかしい……。

「こっち見なさいよ」

???

あれ？ 意外に思った。

今のはいつもの刹那なら苛立った言い方だっただろう。今のは違う、優しい言い方だった。刹那の心情が掴めない。怒ってないのか？ そう思って刹那の顔を窺ってしまった。

「……………」

視線が合う。見つめられる。俺を呼んだ筈なのに刹那は何も言わない。

刹那は怒っていないかった。いや、実際どうかは分からない。俺を観察するように……無表情で俺を見つめていた。澄んだ黒目が俺を

映していた。

再会した日を思い出した。

「見てたわ」

「えっ？」

無表情のまま言われた言葉。

見てた？

「次も見てるわ」

続いた言葉も無表情。

それだけ、と言うと刹那はグラウンドに視線を移してしまった。

見てた、見てる……。

そうだ。緊張や落胆のあまり自分の馬鹿な台詞を忘れていた。

刹那は昨日の俺の馬鹿げた台詞を受け止めてくれていた。

『頑張る、目一杯頑張る。だから刹那、見ててくれ』

刹那はどう捉えてたのか……いや、そこは関係ない。刹那が見てくれるならそれで良かった筈だ。だいたい俺はその台詞を言った時に決めた筈だ。惨めだろうと、愛想を尽かされてしまうとしても…

…。

晒すと決めた筈だ。

「あつ！ 由！」

刹那の声に条件反射でグラウンドを見ると桂がセンター前ヒットを打っていた。

それを見た刹那の表情が華やいでいる。嬉しそうに微笑んでいる。

その笑顔を見て俺の記憶が色付く。

モノクロだった記憶が色付く。

ああ、そうか……刹那はそうやって笑うんだっとな。

思えば再会してからちゃんとした刹那の笑顔を見ていなかった。昔のようにはしゃぎ回るような笑顔じゃない、どこか上品な笑顔。

でも刹那らしい笑顔だと思った。毎日見ていた笑顔と同じ気がした。

嬉しかった。釣られて自分の顔も綻んでいた。

昔とは違う俺の笑顔だった……。

カキイン！！

高くまで突き抜けるような快音。

「いよっしゃあ！」

やたらと威勢のいい声と共に一塁へと駆ける橘。帽子を被るからか、いつもならポニーテールにしている髪を襟足の所でまとめている。でも活発そうな雰囲気はそのまま、いや、いつも以上な気がする。テニスの時にも感じたが橘は体を動かすのが大好きなようだ。

橘の出塁でワンナウトー、二塁。バッターは瞬。

瞬がバッターボックスに入ると会場が湧く。黄色い声援があちこちから木霊する。きゃー瞬くうんかつこいい、瞬くうんあのゴツツいの退治してえ、などなど……ちよっぴりゴツ男がかわいそうになる位の大声援だった。

見るからに怒りの表情で瞬を睨み付けるゴツ男。対して瞬はギャラリーに手なんか振ってる。おいおい、余裕かまし過ぎじゃないか？と、俺が心配した通り、まだ構えていない瞬を無視して投球モーションに入るゴツ男、審判も黙認してるっぽい。ギャラリーからそれを伝える声も上がるが瞬はお構いなしで手を振り続けているって、あつ！ 投げた！

グワツキイーンツ！！！！

は？

手を振っていた筈の瞬がバットを振り終えた体制で空を見上げている。

ホ、ホームラン？

明らかに投手が投げ終えるまで明後日に向いていた筈の瞬。その瞬が打つたらしい打球は遙か遠くへと吸い込まれて行った。ガクツと膝を着くゴツ男……かわいそうに、瞬に真つ向勝負(?)を挑む時点で間違っていたんだ。

その後、五番のルナちゃんがフォアボールで一塁へ。六番の河本がサードライナーでツーアウト。七番の進藤さんもフォアボールで一塁へ。

ネクストバッターは藤村。

カッキーンッ!!

「はっはっは！ 小さい時には久住ヶ丘の扇風機と呼ばれていたこの俺を！」

走者一掃ツーベースヒット。

打った後に昔言われていた皮肉を公言していたあたりがマヌケっぽいのが、なんか凄い。

「なんかさ……みんな、凄くない？」

ルナちゃんの場合はストライクゾーンの小ささを利用したフォアボール。進藤さんの時はファールで粘ったのフォアボール。河本のライナーだって痛烈だった。そして藤村のタイムリーツーベースヒット。

「はは、俺のはまぐれ当たりだよ。結局アウトだったしね」

謙遜する河本。……チクショウ、かっこいいじゃねえか。

「よくわからんけど竜一だけダツサイのはなんとなくわかる」

野球のルールがよくわからないということでもスタメンから外れた八神さんが言う。かっこよく謙遜していた河本がずんってなっていた。

「十八。次のバッターだろ？ ネクストサークルに行かないと」

「あつ、そうか、そうだった」

瞬に言われて慌ててバットを持つと、そこで『チェンジ』と審判の声。

「あれっ?」

ベンチを出ようとした体制で固まっていると、海老原さんが戻ってくる。

「……………ごめん……………見送り……………三振、なの……………」

おお、海老原さん。申し訳ないが親近感を覚えてしまつよ。

一回の裏、ラグビー部の攻撃。

守りとなる執行部。遅れながらここでオーダーを発表しよう。

一番センター俺。

二番レフト桂。

三番キャッチャー橘。

四番ショート瞬。

五番ピッチャールナちゃん。

六番セカンド河本。

七番ファースト進藤さん。

八番サード藤村。

九番ライト海老原さん。

である。

ピッチャーのルナちゃんが投球練習を始めている。って、アンダー
ー slows だし！ 結構速いっばいし！

「オツシヤア！！ しまつて行くこつぜえっ！！」

三球の投球練習を終えるとキャッチャーの橘が叫ぶ。スゲエ様になつている。

一球目、コンパクトな投球フォームでボールを投げるルナちゃん。ゴツ男に比べると球威は無さそうではある、しかし外野手である俺の遠目からでもやはり様になっているように見える。

一球を見送った二球目、ラグビー部のバッターがフルスイング。ガキツという音と共にボテボテと転がるボール。どうやら引っかけてしまったようだ。サードの藤村が軽快に捌いてワンナウト。

二番、三番、同じようにルナちゃんの投球に翻弄されていた。

三者凡退、チェンジ。早いつて！俺、突っ立ってただけだし！

二回の表、執行部の攻撃。

バッターは俺。

今度こそしっかりやらないと……。当たらなくてもバットを振って三振しないといけない。上手くやらないと……。

「ストライク！ バッターアウト！」

「く……っ！」

三球三振。

駄目だ……。どうしてもベンチを意識してしまつ。

俺が打てないのは当然の事。晒している醜態は今までと同じ。掛けてある迷惑も今までと同じ。

しかし今の俺は違う。己の立場が違う。受ける期待が違う。

自分の能力の限界は知っている。しかし俺はそれを晒していない。忌まわしい過去のしがらみが俺の邪魔をする。

いつものように『上手く』出来ない。

自分の口で一から十まで説明した方が早いんじゃないか？ 無理して行動で示さなくても刹那は分かってくれるんじゃないか？

俺に期待しないでくれ……そうやってしまえばいい筈だ……。

試合結果は9対0で執行部の圧勝だった。

俺は5打数0安打5三振。最悪だ……。

結局、刹那にも何も言えていない。何も出来ない、何も言えない……自分に呆れてしまう。

試合後の執行部テント。

俺はみんなに戻って来たと同時に給湯室へと逃げ出した。馬鹿げた被害妄想で落ちた自分を見られるのが嫌だった。優しいみんなの同情が嫌だった。楽しそうなみんなの気分を害すのが嫌だった。…

…刹那と顔を合わせるのが嫌だった……。

しかし、いつ迄も給湯室に引き籠もっているのも不自然……戻って来るしかなかった。

「はい、どうぞ……」

少しでも刹那の機嫌が良くなるようにみんなの紅茶を淹れて来て……。

最低だな、俺は……。

「あら、ありがとう」

テントのど真ん中に座っていた刹那は紅茶を確認するとお礼を言ってくれる。機嫌は……わからない。刹那をまともに見れない俺は彼女の表情がわからない。自分がどんな表情でいるのかもわからない。

「十八……?」

「……えっ? なに?」

条件反射で刹那の顔を窺ってしまった。

「……いえ、なんでもないわ……」

俺と顔を合わせると疲れたように視線を逸らす刹那。

「……………」

呆れてしまったのか……それとも刹那も俺に同情しているのだからか……。

その後みんなにもお茶を配ると昼食となった。

俺は瞬と藤村と河本の男四人で食べていた。一緒に昼飯を食べるなんて、かなり久しぶりだったので談笑しながらの昼食だった。

「あの毬谷さんは凄いな。カーブなんか凄い曲がってたぞ」

「そうだな。なんでも、ちょっと前から練習していたらしいぞ」

「それにしても完封だかなあ」

先ほどまでの試合の話で盛り上がる三人。輪に入ってはいるが俺は聞き役に徹していた。試合の話をする三人だが不自然な位に俺の話題に触れない。本当に俺の周りの連中はいいヤツばかりだと思う。

しかし、

「野球なんて久しぶりにやったよ。授業以外だと小学校以来だよな？」

河本が何気なく言った。

「ああ。よく昔はみんなが集まって野球もどきをやってたもんな」

藤村がその懐かしい話題に乗る。

瞬だけは俺を不安そうに窺っていた。

そう、瞬の危惧した通り、俺は一人の話に息苦しさを覚えていた。

小学校の時。たくさんの友達が集まると公園や河川敷に行つて遊んだ。

刹那を筆頭に俺と瞬、藤村と桂に今日は来ていない土屋、よく弟を連れて来ていた河本。

もちろん遙もいた。

だから苦しい。

『またはるちゃんが余っちゃったな』

『うーん……ジャンケンする？』

どんくさくて足手まといの遙、遊びのチーム分けをするといつも余ってしまった。

『なんでいつもボクをのけ者にするんだよお』

『あつ、いや……えーと、ほら、シオとはるちゃんはセツトって事』

すぐに泣きそうになる遙、みんなはそういつ時に必ず俺に振ってきていた。

『でも……』

『そつだよ遙。藤村の言う通りだよ。僕と遙はセツトだろ?』

みんなに気を遣って言った訳ではなかった。俺がそう言うのは当然だった。振ってくれた藤村に感謝した位だった。

『……あつう……うん』

俺のその言葉に恥ずかしそうに顔を隠して頷く遙。俺も恥ずかしくて、とても嬉しかった。

あの時の俺は自信に満ち溢れていた。

遙の側にいる事にも、遙を守る事にも、俺にしか出来ない事だと信じて疑わなかったんだ。

「……十八? ……十八?」

「えっ?」

「大丈夫か?」

俯いていた顔を上げると俺の顔を心配そうに窺う瞬と目が合う。
後ろの藤村と河本も同じような表情だった。

俺は少し物思いに耽ってしまっていたようだ。

「大丈夫って……何が？ 別になんともないよ？」

なるべく平静を装いながら取り繕った言葉を返す。

「……十八……」

心配そうに窺う瞬の表情は晴れない、やはりお見通しらしい。藤村も河本も同じだった。当然だろう、自分でも自分が酷い状態であるのはわかる。

「とにかく飯は食っておけよ？ な？」

「……ああ」

最悪だな……俺。

午後、準決勝。対戦するのは空手部。

昼食は食べたが、俺の気分は落ちたまま。みんなに掛けた迷惑、これから始まる試合、刹那……遥……酷く、憂鬱だった。

「カマして来い！ 十八！」

わざとらしいにやはは笑いで送り出してくれる瞬。その笑顔に苦笑を返しながらも少しだけ気分が浮き上がった気がする。感謝した。

振り返る間際、視界の端に刹那。

一瞬だけ合った視線。たわめた眉、引き絞った唇。歪ませていた綺麗な顔。

俺の勘違いだろうか？ 俺に懇願するように、不安そうに、俺を心配してくれているような視線だった。

気にはなった。しかし、俺はすぐに外してしまった視線を戻す事は出来ず、バッターボックスに向かった。

プレイボール。

空手部のピッチャーは小柄な一年生だった。

俺を見据えた一年生ピッチャーは振りかぶる。俺もバットを握り直し、構え直す。自分の持てる最大限の能力に意識を凝らす。

……よくやる。

応えられない期待を真に受けた馬鹿な男。

這いつくばるのに慣れた男が懲りもせず、に這いずり回っている。

無駄なのに……さつさと逃げ出せばいいのに……。

もはや滑稽ですらない……無為を繰り返すだけの物体だ……。

試合終了。

4対1で執行部の勝利。

俺は4打数0安打2三振。どうにか当てた打球も全て内野ゴロだった。守備でも俺の逸らしてしまったフライを桂にフォーローしてもらったりなど目も当てられない。

みんなの活躍で勝ち取った勝利。

俺はただのお荷物だった……。

「なあ！先輩よお！」

テントに戻った途端、俺を呼ぶ橘。

……そろそろ来る頃だと思っていた。いや、よく今まで我慢してくれたと思う。

「先輩さあ！ 会長さんになに期待されてんだか知らないけどさ！ 真面目にやってくんないと気分悪いんだよね！！」

向き合った俺を睨み付けながら激昂する橘。

「トモちゃん！ やめて！」

すかさず止めに入るルナちゃん。何事かと周りのみんなも注目を寄せてくる。

「いや！ 悪いけど言わせてもらうよ！ いくらただの学校行事だからってダラダラやってる先輩にはアツタマ来たからねえ！」

割って入ろうとするルナちゃんを片手で制しながら怒りを吐き出す橘。

「なんとか言えよ！ 先輩！」

黙り込む俺が気に入らないのだろう、橘の激昂は激しさを増している。

橘が怒るのは当然だろう。恐らくルナちゃん達一年生や海老原さんは『あれ』を知らない。俺の中学時代を知らない。いや、俺を知らないだろう。

ただの愚図な男にしか見えないだろう。

「ごめん……」

他に何を言えればいいか分からなかった。

しかし、俺の情けない言葉は橘の怒りを逆撫でしただけだった。

「な……！ ごめんだと！ こんの野郎！ 見損なつたぜ先輩！
このあたしに意見出来る大したヤツだと思ってたけど……ただの雑
魚じゃねえか！ ……くそっ！！」

怒りを通り越して不快すら覚えたのか、嫌な物でも見たように表情を歪ませる橘。俺の取った態度は彼女にとって最悪だったのかもしれない。

苛立った様子もそのままに、橘は一人でどこかに行ってしまった。

「十八、気にするな」

複雑そうな表情で言う瞬。

「無理だよ……それは」

「ごめんな、橘……」。

「せんぱい、ごめんなさいです……」

酷く申し訳なさそうで元気の無いルナちゃん。

「橘の言った事は的を射ているよ。橘はもちろん、ルナちゃんが謝る事はないんだ……」

それつきりみんな黙り込む。海老原さんも進藤さんも、藤村も桂も、河本も八神さんも……ばつが悪そうに俺に気を遣っている気がする。

せつかく決勝戦進出を果たしたのに、俺のせいでぶち壊した。

みんなの視線が嫌だった。嫌な方ばかり考えてしまう自分が嫌だった。今すぐ逃げ出したかった。

みんなの視線……違う、俺が恐れているのは一つだ。

刹那。

彼女の表情だけは見れなかった……。

何をやっても楽しかったあの頃。

自然と集まる仲間、友達。

一緒に走り回って、笑い合って、楽しかったあの頃。

駆け足で過ぎ去った時間はもう、戻らない。

5人対4人の野球もどき。活発でいつもみんなの中心にいた刹那の影響でよくやった遊びの一つだった。

小学校六年の春先のとある日曜日。その日はいつもの野球もどきではなく地元の草野球チームと『野球』をやった。

他の草野球チームと対戦を予定していたその地元草野球チーム、相手チームにキャンセルを食らってしまったらしく、たまたま遊んでいた俺達に『遊び』で野球をやるうと持ち掛けて来た。もちろん俺達は二つ返事で了承した。

最初は胸を貸す位のつもりだったのか、ニコニコと手を抜いてくれた草野球チームの大人達。しかし、試合が進むにつれ、俺達の実力が分かったらしく容赦が無くなって来ていた。俺と瞬と刹那がいるんだ、当然だった。

『はるちゃん、行ったよ!』

『うわあ! 捕れないよお!』

草野球チームの打った打球に追い付いた迄は良かったが、グラブで弾いただけで取り落とす遙。俺達とは違い、どんくさい遙は何をやらせても駄目、仕方がないと外野に追いやられても、やっぱりみんなの足を引つ張っていた。

しかし俺がそれを見過ごす筈が無い。

俺の守備位置はセンター。もちろんライトを守る遙をカバーしやすい為だった。

『良く止めたぞ遙。任せろ!』

遙の取り落としたボールを走りながら利き腕で拾い上げる、足は止めずに振り向きながらホームベースを視認。前のヒットで塁に出ていた二塁ランナーが三塁を蹴ってホームに駆けている所だった。

『瞬ちゃん!』

振り向いた勢いを使い、キャッチャーの瞬目掛けて腕を振り抜く。

バシィッ!!

『ナイスボール! トヤ君!』

アウト。ランナーがベースに辿り着く前に余裕で届いた俺のバツ

クホーム。

『余裕!』

ずっとこけたままの遙にVサインと笑顔を送る。

『えへへ! 余裕!』

膝を着いた体制のまま、満面の笑みとVサインで応えてくれる。コケたからか土で汚れてしまっている遙の顔。無邪気とはちよつと違うただのおつちよこちよい。でも失敗を誤魔化すような作り笑いじゃない。俺だけに向けられた嬉しそうな心からの笑顔。

その日、俺は遙のその笑顔が嬉しくてやたらと張り切っていた。

……

……

「 塩田? 塩田!? 」

「 えっ? は、はい? 」

呼び掛けられた声にはつとした。突っ伏していた顔を上げる。

どうやらうたた寝をしまっていたらしく視界が安定しない、頭もぼやぼやする。

ぼやける視界の中心には怪訝そうな表情の青葉先輩がいた。見渡すと執行部テント。先輩は長テーブルを挟んだ俺の反対側のイスに座っている。テント内には突っ伏している瞬だけで他のみんなはどこかに行ったらしくいなかった。

「……あれ？ どうして先輩が？」

はつきりしない意識のまま訊く。

次の試合までの空き時間は少ない筈、恐らく俺は数10分と寝ていないだろう。しかし相当熟睡していたらしい……驚いたのに寝ぼけたような感覚が抜けない。

「……どうしてって、いや、それよりなんなのよ。アンタ達の格好」

俺のしている格好を嫌そうに見る先輩。

「い、いや、これは……」

「はあ……わかってるわよ。どうせまた刹那の悪趣味でしょ？ 全く……。まあいいわ、はいこれ」

がつくり呆れた表情の先輩にグイッと何かを押し付けられる。紙袋に入ったそれを見ると俺のジャージだった。

「ああ……わざわざ洗って返してくれたんですか？」

俺のジャージから洗い立てのいい匂いがしたっばいので、余計な事を言ってしまった。

「　んなっ！　おばか！　当たり前でしょう！」

あたふた照れる先輩。

「ははは………すみません………」

先輩のかわいい反応に嬉しくなるが、俺は心から笑う事が出来ない。

自分の中にある他の感情が邪魔をする。

「………あなた………大丈夫？　顔色悪いわ」

俺の暗い反応に先輩は不安そうに顔をしかめる。律義にも気遣ってくれる先輩はやっぱいい人だ。

「寝起きでボケてるだけですよ。心配してくれてありがとうとついでに
ます」

そう言いながら立ち上がると先輩の頭をなでなでする。

?????

なでなで？

………あれっ？

「　なっ！！　ちよちよちよちよちよっ！　何しているワケ

!？」

一瞬で真っ赤になった先輩にぶんぶん振り払われる。

「い、いや、あれっ？ ……つい？」

いやいや、ついっつーか、いや、なんでだろ？

「ついじゃないわよおっ！！ ばかばかあ！！」

「いや、痛っ！ すいませ 痛っ！ ちよっ痛っ！！」

真っ赤っかの先輩は目を瞑ってぶんぶん腕を振り回してぶつてくる。素で痛い。

「 ……あー …… 取り込んでるトコ悪いけど、そろそろ決勝戦始まるから行くぞ？」

酷く冷静な第三者の声に先輩の攻撃が止まる。見てみるとニコニコと微笑む瞬、後ろには怪訝な表情を揃えた執行部のみんなもいた。いつの間にか戻って来ていたらしい ……。

「イチヤつくのはいいが試合が終わってからにしような」

何かが嬉しいらしい瞬、ニコニコ笑顔で爽やかに言う。

「い、いや ……」

口籠る俺と恥ずかしさからか俯く先輩。

瞬のひやかしとみんなの視線がすごい恥ずかしかった。先輩と

瞬のお陰で沈み切っていた気持ちがかかなり回復してくれたいらしい。

でも……、

「刹那と橘は？」

みんなの中に二人の姿が無かったので訊く。

「刹那先輩はトモちゃんを捜しに行っただです。ルナ達も捜してたんですけど、もうすぐ試合が始まっちゃうから……」

明らかに俺に気を遣っているルナちゃんが言う。橘の事も心配なんでしょう、見るからに元気が無い。

「そうか……」

回復か。

執行部に入った俺、刹那との関係、橘が嫌悪した俺という存在。

根本は何も変わっていない。いや、何も始まっていないのかもしれない。

決勝戦、たくさんの方が集まるだろう。全てを晒す訳にはいかない。しかし、晒すには格好の舞台かもしれない。

ずるずると引き摺り続けた俺への報いだろうか……。

球技大会最後の試合。生徒会執行部VSソフトボール部。

ソフトボール部なんてずるい、って思うけど仕方ないらしい。

その試合開始少し前。

「皆さん、申し訳ありません！ 大変遅くなつてしまいました」

徳川先生だ。なんでも球技大会は三年生の進路指導も同時に行われていたらしい。だから先生が来れないのは仕方のない事なのに先生は酷く申し訳なさそうである。

「決勝戦進出！ 素晴らしいですね、皆さん。先生頑張つて応援しますからねっ！」

にこやかな笑顔と共に両手を胸元でぎゅってやる先生。対峙する執行部の面々、いや、俺を含めた男四人がほんわくってなる。

「痛っ！」

「いてっ！」

隣に並んでいる藤村と河本から声上がる。二人の隣に並んでいるのはそれぞれ桂と八神さんである。自業自得である。

ちなみにルナちゃんに半ば無理やり連れて来られた青葉先輩もベソチでの応援をしてくれるらしい。

「ハッハッハッ！！ プレイボール！！」

何故か主審を務めるマツチヨ先生の声と共に試合開始。

結局、刹那と橘は戻って来なかった。

仕方がないのでオーダーが変更されている。

- 一番センター俺。
- 二番サード桂。
- 三番キャッチャー藤村。
- 四番ショート瞬。
- 五番ピッチャールナちゃん。
- 六番セカンド河本。
- 七番ファースト進藤さん。
- 八番レフト八神さん。
- 九番ライト海老原さん。

後で刹那に何を言われるか分かったものじゃないのであまりオーダーをいじらない事になった。八神さんは嫌がっていたがどうしようも無いので無理を言ってお願ひした。外野に打球を運ばれたら非常によばい布陣である。

第一打席、執行部からの攻撃。バッターは俺。

ソフト部のピッチャーは同じ二年生。ジャージではなく俺達と同

じようにユニフォーム姿だった。

ズバァーンッ！！

「ストライーク！！ ハッハッハッ！！」

驚いた。スリークォーターから投げられたボール。恐らくストリートだがゴツ男と比べても明らかにレベルが違う物だった。

「ストライクバッターアウト！！ ハッハッハッ！！」

「く……っ！！」

刹那や橋がないからと真面目にやらなかった訳では無い。普段は下手投げの筈のソフト部のピッチャーが投げるボールは今までとレベルの違いが歴然だった。

ピッチャーだけではなかった。

狙い打ちされたような打球は外野にばかり飛んで来た。ぼろぼろボールを取り落とし、送球も大暴投ばかりの俺。どうしても反応がワントーン遅れてしまう海老原さん。どうやら運動があまり得意じゃないらしい八神さん。流石に瞬のフォーローも圏外らしく、フライすら捕れない外野三人は正にザルだった。

ソフト部は早々に執行部の『穴』を見出し、的確にそれをついて来た。

ボールに慣れているからか、ルナちゃんの変化球もほとんど通用

しない。加えて弱点を的確につくソフト部の攻撃に執行部は為す術も無かった。

そして、最終回である五回の表。

0対7。執行部劣勢。

俺は三打数0安打2三振。俺以外でもまともなヒットを打っているのは瞬のみ……完全にレベルが違う。

バッターは桂から。

最初は湧いていた会場も既に決まってしまったような試合展開からかおとなしい。

刹那と橘が戻って来る前に終わってしまうのか……。

「由ー！ 打てー！」

「「由ちゃんー！」」

ギャラリィからの声援。見てみると昔よく遊んだ土屋義人つちやよしとを始めとしたB組の連中がいた。

「ははっ、由！ 俺がホームに帰してやるから頑張つて打てー！」

土屋達の声援にネクストサークルの藤村も乗る。それに対して桂

は、

「うん!!! 任せて!!!」

目を輝かせてばっちりやる気になっている。藤村の鈍感も変わっていないようだが、桂の分かりやすい感情も変わっていないらしい。

キーン!!!

センター前ヒット。スリーボールからの甘い球ではあったが、きつちりセンター前に運んだ桂。そういえば桂は女の子とはいえ、小学校の時は刹那に次ぐ運動神経の持ち主だった。それも変わっていないようだ。

続くバッターの藤村。

「ストライク!!! ハッハッハッ!!!」

ツーストライクノーボール、桂に言った事とは裏腹に追い込まれた藤村。大きく言ってしまった手前、焦っているように見える。

「恭介!!!」

再びギャラリィから土屋の声。

「店の電話!!!」

そう言って携帯電話を構える土屋。

???

なんだ？ 意味わからんぞ？

カッキーーンッ！！

「はっはっは！！ 愛は勝つ！！」

は？

レフトオーバーのスリーベースヒット。

桂がホームへと帰って1対7。

後から聞いた話だと、自宅の店で働く彼女の応援を土屋の携帯のスピーカーから聞き取ったらしい。……有り得ない位の聴力だ。

ネクストバッターは瞬。

「十八……」

「えっ？」

バッターボックスにいる筈の瞬に話し掛けられてしまった。

「ち、ちよつと瞬？」

親友の不可思議な行動にもちろんツッコミを入れる。

「十八。試合、続けてもいいんだな？」

「えっ……？」

俺の慌てたツツコミに対して冷静な言葉を続ける瞬。表情は真剣だった。

「続けても、いいか？」

言葉を繰り返す瞬。

続けてもいい？ その台詞と表情。生まれた時から瞬と親友やっ
てる俺にわからない筈なかった。

「……もちろん。刹那も橘も今のままじゃ納得しないよ」

「了解だ」

笑顔でそう言い残してバッテリーボックスに走る瞬。

全く……俺の親友は本当にお節介らしい。

「ありがとう……瞬」

しばらくして、刹那と橘が戻って来た。

「お待たせ……やっと我が儘娘を見付けて来たわ。試合は？」

誰にでも無く訊く刹那。

「1対7。私達の劣勢です、会長」

進藤さんが答える。

「あら……何やってるのよ、瞬もいるのに」

はあ、とため息混じりに呆れる刹那。

そう、瞬。瞬がいるのに「未だ」1点というのは確かにおかしい。

規格外の運動神経を誇る瞬。先ほど俺にお節介な言葉を残してバッターボックスに向かった瞬。刹那達が戻って来たのは瞬がバッターボックスに向かってから実に「10分」以上経ってから。ただ今のカウントはフルカウント、しかし、実際にファールを数えたなら打った打球は三十球以上。明らかに時間稼ぎをしてくれている瞬。打ち頃の直球も、鋭い変化球も、大きく外れたボール球も全てファール。

プライドから敬遠しないソフト部のピッチャーも大したものだが瞬はもつと凄い。

その瞬が変化を現す。

ドグワツキーンッ！！！！

思いつ切り引っ張った特大ホームラン。

がつくり膝を着くソフト部のピッチャー。よく勝負してくれたと思う、瞬の思惑通りに刹那達が到着するまで試合を引っ張る事が出来た。……気の毒だけど。

3対7。

続くバッターはルナちゃん。

ソフト部打線にボロボロに打たれてしまったからか、酷く疲れた様子でバッターボックスに向かう。バッティングでも0安打、気落ちしてしまうのも無理は無いだろう。

「毬谷……」

心配そうに気遣う青葉先輩の声。

小さな幼い女の子のようなルナちゃん。その割に運動神経は優秀みたいだがあくまで一般レベル……瞬や刹那と比べるのはあまりに酷である。

ピッチャーで五番という期待。俺と似ているのだろうか……。

カキーン！

打った。しかしサード正面に転がる内野ゴロ。……仕方ない、頑張っても駄目な時もある。

軽快に捌くソフト部のサード、明らかにルナちゃんは間に合わない。でもルナちゃんは走っている。必死そうに、一生懸命に、走っ

ている。

「毬谷!!」

急いで! って感じで叫ぶ先輩。その声が届いたのか僅かに逸れた送球。捕球の為にファーストがベースを一瞬離れた隙にベースを踏むルナちゃん。

セーフ。

少しでも走るスピードを緩めていたら間に合わなかっただろう。

「……………」

凄いな、ルナちゃん……。ルナちゃんに限らないが、どうしてみんなはあんなに頑張れるのだろうか……？

「先輩」

「えっ？」

突然の呼び掛けは橘。グラウンドに固定していた視線を移すと真顔の橘と目が合う。

「先輩……さっきは……悪かったね……。はっきり言ってあたしは全然納得してないけどルナの為に謝るよ」

言葉の通りに全く悪びれた様子は無い。

「会長さんに言われたよ。アンタ、小学校の時に大怪我してから体

が思うように動かないんだろ？」

少しだけ表情を歪めせると俺を見据える橘。

考えてみれば当然の事だが、やっぱり刹那は俺の体の事をちゃんと知っているらしい。

そう……小学校六年の冬。

俺が終わった日。

橘の言う通り、俺の後天性の運動音痴はその日の怪我が原因だった。

「……ああ、橘の言う通りだよ」

隠すつもりは無い。

その日の事……つまり『あれ』に結び付いてしまったとしても、この球技大会で自分の醜態は晒すつもりだった。

ただ、上手く晒す事が出来なかった。

「そうかい……それに関してはあたしも余計な事を言い過ぎたよ、悪かったね……。でもね先輩。こうして先輩の事情を知った上でも言うよ……『真面目にやれ先輩』ってね」

真顔、というより真剣な表情で俺の目を真っ直ぐに見つめながら

言う橘。

「ルナはね、学校が大好きなんだよ。この球技大会だってずっと前から楽しみにしていたんだ。球技大会に限る訳じゃないけど、毎日がルナの大切な思い出になるんだよ。……だからあたしや円も練習に付き合ったり、今日だってあたしなりに頑張ってるつもりだよ……さっきはカツとなってつい見失っちゃまったけどな」

少し苦笑するが、真摯な態度は変わらない。

「先輩。別に活躍しろって事じゃない。失敗してもいいから笑えよ。間違ってもいいからルナの笑顔に応えろよ。ルナの思い出を暗くすんじゃないよ」

ゆっくりと俺に言い聞かせるように言う橘。

いつもの怒っているような橘じゃない。俺に一語一句を丹念に懇願する。

「……………」

橘の言葉を聞いた俺は自分で自分に憤慨した。

……橘の言う通りだ。俺は決して振り払えない妄想にばかり囚われていた。

絶対に忘れる事は出来ない……けど『それ』を周りに撒き散らすなんて絶対に間違ってる。

「その通りだ……ありがとう、橘」

自然と感謝の言葉が漏れていた。橘の真摯に応えるように、しっかり橘の目を見据える、真剣に精一杯の感謝を贈る。

「えっ？ あっ、いや、別にお礼を言われる事じゃないけど……それにあたしだって人のこと言えないからおあいこだよ……。まあ、いや……どう致しまして」

俺のド真面目な言葉が意外だったらしく、おたおたする橘。

「ほら、試合は？ 先輩にわかってもらっても試合が終わっちゃったらしようがないよ」

変に慌てる橘は無理やり話を終わらせんばかりにグラウンドの方を促す。

「……なっちゃ……ん頑張れ……!!」「」

それにつられて視線をやった瞬間、ギャラリーからやけに息の合った声援が上がる。

橘と話している内に試合は進んでいたらしく、バッターボックスには八神さんが立っていた。八神さんの友達らしいギャラリーの女の子達はきゃーきゃー言いながら八神さんに手を振っている。

一塁二塁にはいつの間にか進塁したらしい河本と進藤さんがいる、三塁にはルナちゃん。満塁のチャンスだった。

「うっさいわ！ だぁーっとなれや……!」

顔を真っ赤にしながらギャラリに毒を吐いた八神さんは短く持ったバットを構えてピッチャーと対峙した。

八神さんはこれまで二三振。ルールが分かっていたいなかったのもあると思うがバットを振ってすらいらない。しかし、この打席、何やら雰囲気が違う。明らかに打つ気満々でしっかり構えている。

一球目、二球目ともに空振り。全然タイミングが合っていない。

三球目……空振り。

三球三振。しかしアウトを宣告されても八神さんは構えたまま。ソフト部の連中もギャラリーの連中も怪訝そうな表情で八神さんを見やる。ひそひそと何かを囁く声も聞こえる。

次のバッターの海老原さんも動けず、ネクストサークルに向かう俺も動けなかった。

マッチョ先生に言われてようやくベンチに戻って来る。やはりルールがよくわかっていなかったのだろう。

「なっちゃんドンマイ！」

「頑張ってたよ！ かつこ良かったよ！」

とぼとぼ歩く八神さんにギャラリーの女の子達から声が掛かる。でも八神さんは女の子達に應えず、慌てたように顔を伏せるとベンチに走って行って奥に隠れてしまった。

すれ違った時に少し見えた。

八神さんは泣いていた。悔しそうに、泣いていた。

友達の期待に応えなかったのだろう。口では毒を吐いてはいたが、応援が嬉しかったんだろう。

それを見た俺の憤慨した心に更なる火が灯った。

ワンナウト。

続くバッターは海老原さん。

海老原さんも未だ0安打。今日一日を通して俺と同じ0安打。バッターボックスに入っても、ぼあくっとピッチャーを眺めるだけでバットを振ってすらいない。

八神さんと同じか、違うのか。

「海老原さん！ 頑張って!!！」

八神さんを見て再燃した俺の心が叫んでいた。自然と出たエールだった。

「……………」

じい〜

ピッチャーから視線を外した海老原さんはいつものように俺を見

つめる。

カクン

頷くとピッチャーに視線を戻す。

一球目、空振り。初めてバットを振った海老原さん。ふにゃふにゃした力ないスイング。

二球目、空振り。全く合っていないタイミング。それに海老原さんのスイングでは当たったとしてもまともに前に飛ばないかもしれない。

三球目、空振り。辛うじてわかる位の小さな動きで肩を落とす海老原さん……。

俺の心は爆発寸前だった。

憤慨した心が激しく燃え上がっていた。

バッティングの時は立っているだけでいい。

恐らく海老原さんは刹那にそう言われていたと思う。元々不得意な物を刹那が強要するとは到底思えない。

……俺の声なんかでそれを曲げた海老原さん。

俺が嫌だと認識していた学校行事。最初から間違っていたんだ。自分が思うものも、周りから受けるものへの認識も。

俺は初日。していたじゃないか、瞬と涉に、クラスメイトに期待を。

二日目。していたじゃないか、執行部のみんなに、青葉先輩に応援を。

そして今日。知っているじゃないか、他ならない自分自身が分かち合う辛さも、嬉しさも。

入れ違いに海老原さんとすれ違う。

「頑張ってくれてありがとう。俺も頑張ってきて来るから見ててね？」

「……………？ ……………？ ……………？」

首を傾げるような海老原さんを微笑ましく思いながらバッテリーボックスに入る。

迷いなんか吹っ飛んでいた。

だから俺が入ったバッテリーボックスは左。前の打席までは右だった。

当然だ、俺は元々『左利き』だからだ。

小学校の時に負った大怪我。俺はその影響で体に幾つかの障害を持つ。

ディスアビリティ
disability。

能力障害、事故や病気による心身の機能障害で能力が低下する。

左手の握力がほとんど無い。右利きを演じている俺がボールを取り落とすのはその為。

左目が全く見えない。右目だけで捉えるボールは当然遠近感が狂う。

俺の持つ障害は他にもあるが今回邪魔をしているのはその二つ。

右バッターボックスで左手と左目が使えないのは致命的だが、俺がこれを隠すには理由はある。右利きを演じる理由がある。

でもそんなもの、今は関係ない。

3対7。2アウト満塁、一発出れば同点。

ピッチャーと対峙する前に一瞬だけベンチや塁に出ているみんなを見る。

瞬。一度も触れて来ないが、俺の体の事は当然察しているだろう。

俺の馬鹿げた演技に付き合い、俺を気遣い、体まで張ってくれた。

俺の目を覚ましてくれた橘。分かち合う大切さを教えてくれた八神さん。俺に伝えてくれた海老原さん。知っていながら何も言わない藤村と桂と河本。みんなへ送る応援と同じものをくれる先生と青葉先輩。橘と同じ心を持っていながら何も言わない進藤さん。沈む俺に常に笑顔をくれたルナちゃん。

そして、刹那。刹那は最初から俺に期待なんかしていない。

いつかの草野球チームとの野球。結局負けてしまったが刹那は言っていた。

『ま、いつか。トヤ君が張り切ってたから楽しかったし』

今更その意味を理解した。

だから贈ろう。

遙に贈ったものと同じものを。

対峙したピッチャー。ほぼ一巡投げ切っているからか、疲れが見える。しかし俺をなめているのだろう、表情から安堵が感じ取れる。

満塁、大きく振りかぶった一球目。

ズバァーンッ!!

見送ったストレイトはストライク。

これでいい。いくらバッターボックスを変えたところで俺が隻眼なのは変わらない。

だから俺に残った『別の』能力を使わせてもらう。

ズバーンッ！！

続く二球目もストレイトのストライク。今までノーヒットの俺はストレイトだけで十分と思っっているのだろう……やはりなめているらしい。助かる。同じ物なら鈍った感覚でもどうにかなる。

三球目。振りかぶるモーション、一球目、二球目から弾き出した答えを変わずにトレースするピッチャー！

俺の残った能力。じいちゃんが残してくれた技の一つ。嫌という程たたき込まれた『塩田家』の技の一つ。

余程の実力者ではない限り、人間の動きには法則がある。同じ動き、違う動き、投球であれば指先以外にも必ず変化がある。

二球あれば十分。

大袈裟で単純なモーションから読む予測は容易い。

次もストレイト。球威と球速もほぼ同じ。来るのは間違いなくストライクゾーン。

タイミングも覚えた。

それさえ分かれば錆びた体を動かすだけ。既に振り出したバット。

残りカスの俺の全力で ！

振り抜く ！！

……

……

夕暮れの校庭。

誰もいない校庭はやけに寂しかった。球技大会という祭りの後だからだろうか。

「終わっちゃったわね」

「……ああ」

球技大会を終え、後片付けも終えた俺は片付けが翌日に持ち越しになった執行部テントに来ていた。

何故かついて来た刹那と二人で校庭を眺めていた。

「負けちゃったわね」

「……………ああ」

優しい刹那の声。

そう。刹那の言う通り、決勝戦は3対7で執行部が敗退した。

最後の俺の打球はセンターフライだった。

……………刹那も、みんなも……………誰一人俺を責めなかった。

「悔しい？」

刹那の声は続く。

刹那の問い掛けに俺の心に燻っていた物が再び熱を持つ。しかし火が灯る事は無い。ぶつける物が無いからだ。

でも……………、

「悔しい！ 悔しいよ……………！ 刹那！」

俺は心の熱を漏らしていた。自分の感情のまま叫び、校庭を見ていた視線を刹那に移す。

「そうね、私も悔しいわ……………。ふふっ、私は見ていただけだけどね」

今更熱くなる俺を見つめた刹那は微笑む。

何故か熱くなった心が沸騰した。

いや、違う……これは別の熱だ。

俺だけに向けられた刹那の笑顔。懐かしい嬉しさが酷く心地よい。

憤慨した自分の心の余韻からか、いつものように自分を否定できない。恥ずかしくて視線を校庭に戻しても熱は冷めない。隣にいる幼馴染みの存在が暖かい。

遠い昔にいつも感じていた安心感に包まれる。

遙に感じていた安心感に包まれる。

その日の俺は『人間』に戻っていた。

変わらないもの。

変わっていくもの。

知ってるもの。

知らないもの。

俺が受け止めるもの。

球技大会翌日。

今朝行われた執行部や実行委員による片付けで球技大会の余韻は無い。授業も通常通り、学校はすっかり普段の姿を取り戻していた。

今は現国の授業中。

俺は現国教師が語る少々脱線気味の説明を聞きながら黒板をノ―

トに書き写している。

前の席の涉はいない。恐らくいつものようにサボりであろう。隣の隣の瞬間は机に突っ伏して爆睡している。これもいつもの光景。

いつも通りの教室。

俺もいつも通り、『必死』に黒板を写す。

球技大会、晒した俺の醜態。俺を蝕む傷痕。

何も訊かないみんな。あれだけ迷惑を掛けたのに誰一人俺を責めない。

周りから見ればただの馬鹿げた独り善がりにはしか見えないだろう。それでも俺を気遣い、優しいみんな。『あれ』を知っている人も知らない人も。

……しかし思つ。

ノートに自分で書いた字。大分慣れたとはいえ、利き腕ではない右手で書いた字は笑ってしまいそうな位に下手くそ、まるで他人が書いたノートを見ているよう。

懸命に睨み付ける黒板。窓際最後尾の俺の席、右目だけで捉える先生の小さな字は霞んで見える。

俺の体の事は学校では誰も知らない。瞬や刹那のように昔の俺や『あれ』を知っている人は俺がおかしいのはとくに気付いているだろう。しかし具体的には知らない筈、教師達も知らない筈。

体育だけに限らず、俺が学校に来ているだけで誰かに迷惑を掛けているのは分かっている。誰かに足枷になってはいけないのも分かっている。

俺が馬鹿な道化を演じなくてはいけないのも分かっている。

「……………」

ペンを止めて息を吐く。

視線をノートから外に向ける。

生憎の曇り空の下で体育に励む何処かのクラス。球技大会の翌日だというのに楽しそうな声が三階であるこの教室にも届いて来る。

その校庭の向こう。

無駄に存在感のある建物……時計棟。

それを見ただけで自分の心が揺れる。忘れてしまったと思っていた暖かい感覚に心が揺れる。自分に課した戒めを否定している大きな存在に心が揺れる。

思考が終着してもいつもの嘆息が出ない……。

昼休み。

俺は昼食を摂る為に時計棟の屋上に来ていた。隣には瞬。正面には刹那と海老原さんがいる。四人で常設されているテーブルを囲んでいた。

昼休み開始後。うっかり俺が、時計棟の屋上で食べたい、なんて口を滑らせた瞬間、

『おお！ いいぞいいぞお！ こりゃ大変だ、刹那と……海老ちゃんも呼んじゃお呼んじゃお！』

とか言いながら高速で携帯をいじり出した瞬。そして、瞬の為すがままに購買でパンを購入し、屋上に辿り着いたら刹那と海老原さんが待っていたという訳だ。

この屋上、いつぞやの一件以来、来るのは二回目。

正面の刹那、その時のような仏頂面ではない。何処か呆れたような表情をしている気はするが、怒っている雰囲気は全く無く、ぱくぱく弁当を食べている。隣の海老原さんものんびりした動きで弁当をつついている。隣に座る瞬は何が楽しいのかわからないが、ニッコニコしながら焼きそばパンを食べている。

もちろん俺は落ち着かない。

前回同様に誰も喋らない屋上での昼食。前回はいなかった海老原さんの存在があるとはいえ、落ち着かないし居た堪れない。自分で買って来た昼食もまだ一口か二口位しか食べていない。

非常に落ち着かないがチラチラと彷徨う視線が……というより落ち着かないから彷徨い続ける視線が刹那が飲んでいるカップを捉える。最早定番となった俺が淹れて来た紅茶のカップである。

「せ、せ、刹那？　紅茶が切れているじゃが……お代わり淹れて来るがや？」

ここであつた前回の一件からか、相当緊張しているらしい俺。

「えっ？　ああ、いいわよ、別に……。あなたが食べ終わってからでいいわ」

空っぽのカップを見るがやんわりお断りを、というか拳動不信気味な俺に軽く引き気味の刹那。

「え、海老原さんは？」

どうやら俺はこの状況から脱出したらしい。

「……いい……まだ、あるし……悪いし……」

俺の方をチラ見すると自分のカップを引き寄せてしまつ。

「……………」

お茶を淹れに行く気満々で立ち上がっていた腰を渋々下ろす俺。

「……変なヤツね、アンタ。早く食べないとお昼休み終わっちゃうわよっ。」

俺からなんとなく一步引いたまま、怪訝そうな刹那が訊いて来る。

「あつ、いや……。せ、刹那はさ、いつも弁当なの？」

居た堪れない雰囲気強化しそうだったので、話題を振ってみる。
テンパった自分を隠すような少し強引な振りだった。

「ああ……。ふふつ、そうよ。私はいつもお弁当なの」

何故だか自慢気に言う刹那。

???

「海老原さんは？」

「……私も……。おべんと……」

何故だか恥ずかしそうな海老原さん。

???

「ふふふつ。曜子のお弁当はもちろん、私のお弁当も曜子の特製なのよー」

どじつ？って感じで嬉しそうに自慢気に言う。

「へえ〜」

適当に振った話題だったが、とても興味深い事実が発覚したぞ。

何故だか自慢気な刹那の言葉に隣の海老原さんは顔を真っ赤にして照れている。自分の弁当を隠すように引き寄せてしまう。

全然隠れてない海老原さんが作ったらしいお弁当。女の子らしい小さな弁当箱には狭いおかずゾーンを目一杯に使った色とりどりのおかず達。綺麗な色に焼き上がった卵焼きに絶妙なきつね色の一口フライ、食べやすそうな一口唐揚げときっちり区分けされたミニサラダ。ご飯ゾーンも三色のふりかけで綺麗に彩られている。めっちゃめっちゃ美味そうである。

「いいなあ。海老原さん料理が上手なんだねえ。凄い美味しそうだよ」

本当に美味しそうな弁当への自然な賛美だった。

それを聞いた海老原さんは、

「……………あつ……………あつ……………」

紅い顔を更に紅くしながら俯いてしまう。湯気でも出そうな位にぼっぼしている。なんだかすんごいかわいかった。

「お、俺は十八の弁当が好きだ!!」

海老原さんのかわいい反応にほんわかしていると、やたらと慌てたような瞬が叫ぶ。とりあえず変な瞬にはお礼を言っておくが、俺は海老原さんに興味津々である。

「俺のはともかく、海老原さんのお弁当は凄いなあ。丁寧に作ってあるし、見ていても楽しいし、何よりとても美味しそうだよ」

どうでもいい俺の話題をスルーしつつ、俺の大絶賛は続く。

「~~~~~」

真っ赤っかの顔を両手で隠す海老原さん。

やば、本心を言っただつもりだが持ち上げ過ぎたか？

「十八！ 美味しいのは本当だけどやめなさい！」

流石に誇らしげにふんり返っていた刹那も俺にツッコむ。

「い、ごめん……」

やり過ぎた感が否めない俺は海老原さんに、じゃなくて刹那に謝ってしまった。

「……作る……明日……作って来る……塩田と……瞬のもの……」

顔を隠したままで言う海老原さん。

「えっ？」

作る？ 弁当？

「あっ、あの……？」

「……嫌いな物……ある……？」

じい〜

隠した両手の隙間越しに見つめられる。

「い、いや……」

「……わかった……頑張る……」

頑張ってくれるらしい。

どういう訳か、明日は海老原さんのお弁当をいただける事になってしまった。

放課後。昼休みのかわいい海老原さんを想像して、明日の海老原さんのお弁当を想像して、綻びっ放しの顔もそのままに再び時計棟に来ていた。もちろん生徒会の活動をする為である。

とりあえず会長室に向かおうと廊下を歩いていると、橋に出会した。

「よっ」

綻んだまま声を掛けてみる。

「えっ？ ああ、先輩か」

気のない反応に声を掛けたのが俺で落胆された？　とも思ったが違う。これは橘の性格、言い方なんだろう。球技大会の一件で気付いたが、橘は短気で突っ走り気味の性格さえ長い目で見てやれば素直で絡みやすいヤツなんだと思う。

「一人？　ルナちゃんと進藤さんは？」

「ルナと円は中央委員会に行ってるよ。ルナはクラス委員長だし、円は副委員長だからね」

中央委員会とは各クラス委員や主だった委員会の代表が集まる定例会議の事である。

同じクラスでいつも一緒にいる三人、今日に限って橘が一人なのはそういう事らしい。何気に瞬もF組の副委員長なのでそっちに行っている為、ここにいなかったりする。

「そっか。じゃ、橘はこれから？」

「えっ？　ああ……いや、あたしは今済ませて来たところだよ」

「??？」

済ませて来た？　放課後はまだ始まったばかりだぞ？

「先輩も早い内に済ませておいた方がいいぞ？　仕事が始まってからだと能率が悪いからね」

そう言うと少し自分の位置をずらして通路を空けてくれた。橘の

後ろにはトイレがあった。

どうやら橘が済ませて来たのはこれらしい。

俺は『これから』生徒会の仕事？って意味で訊いたんだが……要は用足しをして来た筈の女の子に堂々と言われるとなんだか冷静になった。

橘が少しだけわかってきたぞ。そして、やっぱりコイツがおもろいヤツである事が判明した。

生徒会の活動が始まる迄はまだ時間がある。いい機会だし、興味深い事実が発覚しそうなので、ちよつと橘と絡んでおこう。……というより俺のちよつとした悪戯心が発動した。

「……いや、俺もさつき済ませて来たんだ。それよりさ、実は……橘に教えてほしい事があるんだ……」

真摯を心掛けつつ、なるべく真剣な表情で言ってみる。

「は？ な、なんだよ……？」

豹変した俺の態度に驚きながらも素直に聞き返す橘。

……反応が予想通り過ぎる。

「今さ……して来たろ？ ……そこで」

わざとらしく橘から顔を逸らしながら言う。促した所はトイレである。

「は、はあっ！…ば、ば、馬鹿野郎！ ……そこでするっついたら」

「つかねえだろが!!」

顔を真っ赤にしながら激昂する橘。

予想通り過ぎますよ、はい。

「違つよ、橘。もちろんそうだけど、他にも……あるだろ?」

真っ赤つかで激昂する橘に対して冷静に、できる限りド真面目に言う。

「えっ? えっ? 他に?」

俺の冷静過ぎる態度にまんまと吞まれる橘。

うう……早くもかわいそうになって来た……。

「なんだ、知らないのか? とうかやってないのか? 誰だつてやる常識だぞ? 子供じゃないんだからやるだろ? 普通」

ド真面目に、真摯に、真つ直ぐ橘の目を見て言う。

「そそそそそそなの? みんなやってるの? 先輩も? ルナや円も?」

不憫に思ってしまう位に素直過ぎて純粹過ぎる橘。真っ赤な顔をそのままに訊いて来る。

「当たり前だろ? もう高校生なんだからそれ位しなないとおかしいだろ?」

笑いを堪えるのに必死だが、俺の冷静な言葉は続く。

「えっ！ えっ！ マジ……かよ……」

もはや泣きそうな橘。

うーむ……流石にかわいそ過ぎる。ネタバレしてやるか。

「なんだよ……仕方ないな。教えてもらおうとしたのに俺の方が詳しくそうじゃん」

さてネタバレを、

「あれっ？ 十八と橘じゃん。何やってんだ？」

と、橘に本当の事を言っただけだと思っただけだと声が掛かる。瞬である。脇にはルナちゃんと進藤さんもいる。

「い、いや。普通に話してただけだけど、瞬達は？ 中央委員会だっただろ？ 早くないか？」

いつもなら放課後を目一杯に長々と続く筈の中央委員会。いくらなんでも早過ぎる。

「いや、参加率が悪過ぎたらしくてさ、延期になったんだわ」

ししして笑いながら言う瞬。面倒な委員会が流れて嬉しいんだろ。

「トモちゃん？ 顔が真っ赤だよ？ どうしたの？」

瞬と絡んでいると、放置してしまっていた橋の異常にルナちゃんが気付く。

「い、い、い、いやー！ ル、ルナ……。くくくく」

気遣うルナちゃんに反応しようとする橋。しかし余程恥ずかしいらしく、紅い顔を更に紅くして顔を背けてしまう。

キュピーンと来た。

ネタバレ、してやろうじゃないかい。

「全く……しょうがないな。よし、俺が教えてやる。ちょっと来い」
わざと呆れたように言って橋の手を引く。

「ちちちよつと先輩！！ あたしはいいつて！！」

泣きそうな顔で俺とみんなに視線を行ったり来たりさせる橋。反抗しないのが意外だったが、ぐいぐい連れて行く。みんなも首を傾げながらついて来る。

連れて来たのはすぐ側の給湯室。最近では俺専用になりつつある所である。流石にどっちのトイレの中にも連れては行けないのでここにした。

「先輩！ あたしはいいつてば！！ それにみんなの見てる前でないて……」

もぐもぐと口籠ってしまつ。本当に素直なヤツ。

「ほら、そこに立って」

シンクの前に立たせると体を強張らせて目を瞑る橘。カタカタ震えてこぶしを握り締めている。

「……………」

ちよつとやり過ぎたかな、と思いつつ橘の手を取る。ちなみに後ろからはみんなの疑問符がぼんぼん放射中である。

水道の栓を捻つて水を出すと橘の手を洗つてあげる。

「えっ!?!」

手に掛かる水に驚いた様子で目を開ける橘。きよとんとした顔で俺を見やる。

「……………何やってんだ? 十八……………」

いい加減傍観するのに疲れたらしい瞬が訊いて来る。

「いや、橘に手を洗う事について訊いたりしてたんだけどさ、橘があんまり知らないって言うから教えてやってたんだよ」

自分で言ってみると、相当無理がある話だ。騙された橘が不憫すぎる。

「えっ？ えっ？」

その橋、理解したのかしてないのか、かなり狼狽えている。

「せんぱい。トモちゃんは綺麗好きですよ？ 手洗いなんていつもゴシゴシでピカピカです」

笑顔で言うルナちゃん。

そりゃそうだろう。

「なんだ橋？ 違ったのか？ もしかして別の」

「い、いや！ これだよ！ これ！！ いやぁ先輩！ ありがとう！ はははははは！！」

俺が言い終わる前に無理矢理お礼を被せて来る橋。かなり笑って誤魔化している。

「変なトモちゃんです」

「くくく……なんとなく私は先輩のやった事がわかるがな……」

「俺もだよ、十八。はは」

ルナちゃんは分からないみたいだが、瞬と進藤さんは俺の悪戯に気付いたらしい。

その後。

天罰が下ったのか、刹那に『あなた非常に遅いわ！』を皮切りに
散々怒られた。

目の前の超絶イケメンは山崎渉。俺の親友であり、俺がもともと尊敬する男だ！

無造作に散りばめた少しだけ長めで明るめの髪。中性的な顔立ち。はかつこよくも見えるし、かわいくも見える。そう、要するにいい男だ！

くそう、羨ましいぜ！

顔がいいだけではない。身長は160センチそこそこ、しかし渉の堂々とした立ち居振る舞いからだろうかと、とても大きく見える。そう、要するに全て規格外だ！

くそう、男の中の男だぜ！

そして忘れてはならないのが、渉のカリスマ性だ。運動神経は超抜群でみんなの憧れの的。勉強では目立った凄さを見せないが、実力を隠しているに違いない。多分みんな知ってる。そう、要するにモテモテだ！

「くそお、スゲーぜ！ 凄すぎるぜ！ 渉！」

「……………」

瞬と二人、目の前で戯言を言ってる宇宙馬鹿を疲れた目で見やる。

周りにいるクラスメイト達も見慣れた馬鹿の異変を一瞥するだけで昼食を開始している。

一応言っておくが、冒頭の世迷言は全て渉の独り言である。

「さあ、エキストラは放っておいてさっさと行こう。刹那と海老ちやんが待ってる」

いつもの迷惑そうな表情のまま俺を促す瞬。

「ああ、同感だ」

昼休み開始直後。俺達はクラスメイトAを残して時計棟に向かったのである。

「ちよちよちよちよっ！ ごめんっ！ ごめんよっ！！ 久し振りだったからさあっ！ 調子乗りましたっ！ ああんっ！ 待ってえっ！」

放置である。

時計棟屋上。

空は灰色、昨日に引き続き生憎の曇り空。11月半ばを過ぎた外の空気は冷たい。如何に晴れていたとしても流石に外で昼食を食べ

るには無理がある季節になって来た。

しかし、どうだろう。

寒空の下に咲く可憐な花達。彼女達がいるだけで冬の到来を知らせる冷たい曇り空も晴れ渡るといふもの、実際晴れる訳ないけど晴れ渡る気分になるといふもの。

春だ。冬を通り越して春が来たに違いない。

「あなた非常に遅いわ！そして非常に寒いわ！」

さながら英国風のオープンテラスに座る淑女のようだった刹那が言う。

ぶち壊しである。

「い、いめん」

条件反射で謝る俺。だいたいスカートが短すぎなんじゃないか！とかツッコミたいが黙っておく。刹那の反応にも、いい加減体が慣れてしまった気がする。

「ほらほら、怒らない怒らない。せっかく海老ちゃん弁当を作つて来てくれたんだ。痴話喧嘩は後にしていただく」

苦笑する瞬がシルバープレートに乗った俺製のティーセットを並べながら言う。なんたる、凄いかっこいい。あまりに様になり過ぎていて、高貴な淑女に仕える若い執事を連想してしまう。……俺はその脇で奥様に怒られる庭師といったトコだろうか。

「ぷつ、痴話喧嘩？ このヘタレ下男と私がつれるような話があるなら聞いてみたいわ」

何故に吹く。せめて怒ってくれても良からうに。

「……とにかく、瞬の言う通り早くいたごう。海老原さん、いいかな？」

ツッコんだらツッコんだだけへこみそうだったので諦める事にした。ぼくつと成り行きを見守っていた海老原さんに尋ねてみる。

「……………」

カクン

頷くと目の前の包みを……………？

「じ、重箱？」

海老原さんがのんびり解いた風呂敷の中はなんとも豪華な三段重だった。俺はもちろん、瞬と刹那も驚いた様子で海老原さんを見やる。みんなツッコむべきかツッコまないべきか迷ってるような感じだ。

「……………」

少しカクカクしたような動きで御重を並べる海老原さん。俺達の視線に気付いているのか気付いていないのかわからないが、緊張してるのか？

開けてくれた重箱を見してみる。

「……って、すごいっ！…美味そおっ！…」

思わず叫ぶ俺。

見ただけで物凄い手間が掛かっているのが明白な海老原さんのお弁当。びっくりしてしまう位の凄い物だった。

一の重。たくさんの俵に結んだ小さめのおむすびが綺麗に並んでいる。たくあんやしば漬けなどの付け合わせも盛り沢山だ。

「……みんなで……食べられるように……おむすびにしたの……こつちが……お塩だけ……こつちのは、具入り……梅干し……シヤケ……昆布……明太子……それで……こつちのは……おこわおむすび……」

くいつくいつと指差して説明してくれる。

どれも均一の大きさに作られたおむすびは海老原さんの優しさが滲み出ているように暖かい気がした。

二の重。揚げ物と焼き物の重みだ。昨日も見た綺麗な焼き色の卵焼きと魚の照り焼き。多彩な種類の野菜の天ぷら、味付けが変えてあるのか区分けされた焼き肉。

「……卵焼き……半分は、甘く……もう半分は、甘くないの……
……照り焼きの……お魚は……鯖まぐいなの……寒鯖……今が旬なの……」

もじもじしながら説明してくれる海老原さん。

自分でも料理を作る俺にはわかった。所狭しと並ぶおかず達、どれも丁寧に綺麗に彩られていた。それがどれだけの手間や時間が掛かる事を知っていた。

三の重。煮物と和え物の重みだ。筑前煮、大根煮、挽き肉入りのひじき煮。春菊のごま和えとホウレン草とコンニャクの白和え。きんぴらごぼりもある。

「……………今日は……………全体的に……………和風に……………してみたの……………」

消え入りそうな声でそう言つと下を向いてしまふ。相当恥ずかしそうである。

はっきり言ってどれもこれもめっちゃめっちゃ美味そうである。しかし、三つの重箱に目一杯に詰め込まれたおかずやおむすびは明らかに10人前位はある。

俺達は四人。どう考えても多過ぎる気はする。

「随分と大きな包みだと思っていたら……………。曜子？ 少しやり過ぎじゃないかしら？」

苦笑いの刹那が優しくシッコむ。

「……………頑張ったの……………」

下を向いたまま答える海老原さん。

たくさんのおかず。

おせち料理を思わせるような重箱に詰められた海老原さんの手料理。

たくさんの手間が掛かったであろう。朝早くに起きて、いや、前日から買い物をして、下拵えをして、俺達の為に。

そう……間違いなく俺も含めてくれている。

俺が口走った言葉なんかにもこんなにも大きく応えてくれた海老原さん……。

「いただきます！」

手を合わせてそう言つと手近にあるおむすびを掴んで口に放り込む。

ほとんど無意識だった。

「ちょ、ちよつと！ 十八！ 行儀が悪いわよ！」

俯く海老原さんを気遣うように覗き込もうとしていた刹那が俺を窘める。

「だってさ、美味そうなんだもん。しょうがないじゃん」

しっかり飲み込んでから答える。

おむすびはとても美味しかった。俺が取ったおむすびは具入りじゃない塩むすび。でも本当に美味しかった。ご飯と塩と海苔だけのおむすびだけど、本当に本当に美味しかった。それを食べただけで海老原さんのお弁当が全て俺のどストライクである事がわかった。

どれも俺の一番好みの味付けだと確信した。

「もう！ 呆れちゃうわ。曜子がせっかく作って来たんだから、もっと感謝を込めて食べなさいよね！」

本当に怒ってはいないようだが、出来の悪い子供を賤るみたいに呆れる刹那。

感謝……してるぞ。

心から感謝してるさ……。

「いただきます！」

自分の中に波打つ『何か』の感情に入り込もうとする俺の隣からの能天気な声。

笑顔の瞬がばくばくおむすびやおかずを食べ始めている。

「ちょっと！ 瞬まで！」

呆れた表情をそのまま瞬に向ける刹那。

「堅い事言わない言わない。わかってたけど美味しいよ美味しい！ 海

老ちゃん！ 美味しいよ！」

無駄に高いテンションで刹那を受け流す瞬は俯く海老原さんに言う。瞬の本心からの行動だろうが、切っ掛けは恐らく俺。……本当にお節介な親友だ。

「……う、うん……ありがとう……たくさん……食べてね……」

顔を上げた海老原さん。そうは答えるが、瞬ではなく俺を見る。

じい〜

と、いつもの凝視かな、とも思ったが、少し違う。何処となく不安そうに見つめる視線だった。

俺は浮かんで来る自分の感情に任せて口を開く。

「刹那。俺が悪かったからさ、もう食べよう？ 時間がもったいな
いし、紅茶も冷めちゃうよ。海老原さんが作ってきてくれたお弁当
をみんなで楽しく食べる、その時間は長い方がいいだろう？」

海老原さんの視線を受けたまま言う。

「分かってるわよ……。いただきます！」

ちよっぴりすねてしまったような刹那は些か投げやりな感じで号
令した。

一瞬だけ隣の瞬と苦笑を合わせると俺達も続く。

「いただきます！」

「……いただき、ます……」

囁くように海老原さんも乗ってくれた。

短い昼休みも中頃まで過ぎてしまった頃にようやく昼食が始まった。

海老原さんのお弁当。思った通りにどれもこれも俺の大好きな味付けだった。俺は美味しくて、嬉しくて、昼休み中ずっと笑顔だった。

お腹が減っていたのもあるけど、少食を自覚する俺はたくさんたくさん食べた。

残さず食べた。

もちろんほとんどは瞬が食べてくれたけど、俺もたくさん食べた。

仏頂面だった刹那も笑顔の俺と瞬に釣られたのか、途中からは楽しそうに笑いながら食べていた。

海老原さんも食べている俺達を見守りながら楽しそうに微笑みながら食べていた。

「ご馳走さまを言った時に見た海老原さんのはにかむような表情は

一生忘れられないだろう。

楽しい昼休みの昼食。

みんなと笑い合いながら俺は思い出していた。

笑顔で囲む食卓。

美味しい手料理。

懐かしい幸せの光景。

毎日決まって訪れる団欒。

俺は思い出していた。

家族で囲んでいた食卓を……。

料理が得意だった母さんの事を……。

学校の一週間を締めくくる金曜日の放課後。

執行部でも金曜日には役員毎の報告やまとめなどがある。みんなが予算の報告や行事録の提出などの真面目な結果を出している中、俺は『お茶っ葉が残り少ない』とか『ミネラルウォーターをダース買っていていいか?』とか場違いな発言をしていた。

執行部内で俺とお茶汲みは完全にイコールで結ばれたらしい。

執行部を終えた俺は瞬に連れられて第一学食に来ていた。

「コーヒーでよかったよな?」

「あ、ああ……ありがとう……」

四人掛けのテーブルのイスに座る俺の前に紙カップのコーヒーを置きながら言う瞬。何故ここに連れて来られたのか未だわからない俺はぎこちなくお礼を返す。

教室の10倍はある学食。広大ではあるが昼休みには生徒で超満員に溢れ返る。しかし太陽も傾き終わる時間帯、最終下校時間間際

の学食には誰もいない。俺達だけだった。

「……………話って何？」

そう、俺達は別に食事をしに来た訳ではない。昼休みに海老原さんのお弁当をたらふく頂いた俺達はお腹が減ってここに来た訳ではなかった。

『話がある』

真剣な表情でそう言う瞬の提案でここに来ていた。

「……………別に大した事じゃない。そろそろ第二段階に移行しよう……………
って事だよ」

ここに来る前からの真剣な表情を崩さない瞬、そのまま言う。
閑散とした学食は静かで、やけに瞬の声が通る。

「第二段階……………？ どういう事だよ？」

話の内容は全く分からないが、瞬の真摯な態度に応えるように真面目に聞き返す。

「……………明後日の日曜日、バイトは？」

???

「……………いや、夜だけだよ……………」

日曜日？ 何かのお誘いか？ 休みになれば瞬とは出掛ける事は

多い。買い物とか、飯食いにいったりとか、ぶらぶらしたりとか。

まあ、俺が春からleafのバイトを始めてからはそれも少なくなつたが……。

「よし！ 遊園地行くぞ！」

「そうそう、二人で遊園地とかも行く事があるある……えっ？」

「ゆっ、遊園地い！？」

行かない行かない！ 瞬と二人つきりで遊園地なんか行かないつて！ 断固としてそれを主張したい俺は当然、真顔のままの瞬に聞き返す。

「そ、遊園地。夢いっぱいのレジャー施設の定番、遊園地だ」

「少しだけ微笑気味に表情を和らげるが、瞬の真面目な態度は変わらない。」

「ばばばっ！ なんで野郎と二人つきりで遊園地なんか行かないといけないんだよ！」

瞬の態度から本気である事を感じ取った俺は慌てふためきます。ぶっちゃけ身の危険を感じます。

「にやはは！ それでもいいけど違つよ十八。いいか？ 俺はまだお前と刹那をくつつけるつもりなんだぞ？」

俺の慌てた反応に軽く驚いた後、すぐににやははと笑つ。って何

？ 俺と刹那を？

「……………」

そういえば俺が刹那とまた話すようになった切っ掛けはコイツの仕業だった。

「俺も行きたいしい〜」

ド真面目な面で散々人の気を揉んでおきながら、本題に入った途端ににやははが止まらない瞬。

「そ、そ、そりゃあ、俺も行きたいけどさ…………。さ、三人で行くのかよ…………？」

思わず本音を言ってしまうながら気付く。瞬も行きたいと言ってる位だからコイツも行く筈。という事は瞬と刹那と俺…………あわわ！

想像したらかなり楽しそうだった。

「それでもいいけど海老ちゃんに協力してもらおう。その方が自然だ」

海老ちゃん、海老原さん…………。

またしても都合のいい想像をしてしまう。

「あううっ！！ 楽しそうだようっ！！」

「…………決まりだな」

馬鹿丸出しでクネクネする俺を見てニヤリとする瞬。

「二人を誘うのは俺に任せておけ。最高の日曜日にしてやる」

そう言うのと不敵なニヤリを強調する。俺も釣られてニヤけてしまふ。慌てて顔を引締めようとするが、日曜日の事を考えるとほわほわしてしまふ。

「楽しみだなあ」

隣に座る渉も日曜日を思い浮かべてかニコニコしている……？

「「えっ！！？」「」

瞬と二人して素っ頓狂な声を上げた。

渉？

「こっちは三人だからもう一人呼ばなくちゃだよっ、瞬っ」

語尾にハートマークでも付きそうな位の愛嬌で言う渉。

「わっわっわっ渉！！ どうしてお前がいるんだよっ！？」

焦りと驚きがごちゃ雑ぜの瞬。取り乱した様子で尋ねる。

「いっやっっ！ ベっつにっっ！ たまたま部活が長引いたのもあるけどさっ！ 俺の野生の勘がビビッと来てねっっ！」

分かりやすく口を尖んがらせた表情で言う渉。ちなみに俺は終始愕然である。

「ビビッとって……。いや、渉？ 悪いがお前は」

「シオっ！！ 俺とシオと瞬はさっ！！ ……友達、だよね……？」

瞬の声を遮るように大きな声を被せた渉。しかし瞬にはなく俺に、続く哀願するようなゆっくりした言葉も俺に向けて来る。

「あ、あっ、うん。渉は俺の大切な……友達だ……」

渉の勢いにたじろぎながら答える。……というより渉が言ってくれた言葉がとても嬉しかった。

「ちよっ……と、十八……。いや、渉は確かに友達だけどさ……」

がっくりしてしまったような瞬。それを見てようやく瞬の意図がわかる俺。

「い、いめん……」

「いや、別に十八は謝らなくていいけどさ……。まあ、仕方ない、渉も一緒に行くか？」

がっくりしたまま訊く瞬。

「行く行く行く行くっ！！ しゅんっ！ やっぱりF組の仲良しトリオはいつでも一緒じゃないとねっ！」

瞬の諦めたようなお誘いに表情を綻ばせる渉。そのままで瞬にじやれつき始める。

「だあぁー!! うっぜえー!! 言っとくけどお前はオマケなのっ! オマケっ! そこんどこちゃんとして理解しろよな!」

本気で嫌そうな顔をしながらじゃれて来る渉を懸命にブロックする瞬。

こうして、日曜日に遊園地に行く事が決定してしまった。

夜、レストラン&ダイニングバーleaf。

「お待たせしました……ドライマティーニです」

小さ過ぎず、大き過ぎず、なるべく低い声で言いながらグラスを静かに置く。

「……………」

カウンターのいつもの席に座る伊集院さん。注文してくれた飲み物で間違いない筈だが、訝しげな表情で俺を見つめて来る。

「伊集院様……如何なさいましたか? お気に召しませんでしょう」

か？ マスター特製のカクテルは最高ですよ？ まあ飲んだ事ないですけどね、はっはっはっはっ」

お客様の心のケアも立派なバーテンダーの務め。失礼の無いようにユーモアを混ぜた会話で気遣います。

「……シオ君、大丈夫？ 随分とご機嫌みただけど、はっきり言うってキモいよ？」

おっと、いかんいかん。少しユーモアが高度過ぎたようだ。

「失礼……レディ。つまり私の言いたい事は貴女がお美しい……。それだけです」

アルコールを嗜む大人の女性に対して捻りを利かせ過ぎてしまったよ……はっはっは。

俗世を逃れた一人の迷い猫。無粋な言葉は必要ないね。私もまだまだだね？

「……………」

訝しげな表情を濃く、いや、何やらかわいそうな物でも見るように顔をしかめる伊集院女史。

「絡むだけめんどくせえだけっスよ。塩田ってたまにこうやって意味不明になっから」

いつの間にかいた永島さんが言う。

やれやれ。

……と、浮かれている俺は何やら勘違い気味に仕事を張り切っていた。

更にバイト終了後、帰宅した自分の部屋。

もうすぐ日付が変わるという時間、突然掛かって来た電話の相手は瞬。遅くにすまん、の後すぐに続いた話はもちろん。

『渉の相手をどうするかだよ……』

「ああ……そうか……更にもう一人って事だよな？」

渉の相手。つまり日曜日の事で間違いなかった。

『ああ、男女で遊びに行くんだから必然的にペアが発生すると思うんだ。刹那には十八、お前だろ？ 協力してもらおう海老ちゃんの相手は俺がするつもりだったけど……。あの馬鹿の相手はどうするよ？』

電話口の向こう、酷く疲れた声の瞬はいつため息が混ざってもおかしくないように言う。

「うーん……やっぱりああいう所に行くとしたら偶数じゃないと駄

目なのかもね？」

全部が全部ペアで行動する事は無いと思うが、何かの乗り物に乗る時なんかはペアが基本になるのかもしれない。男女で遊びに行くという事なのだからどうしてもついて回る問題のような気がする。

『適当なヤツを連れて行ってもみんなに面識が無いと白けるだろうし……。執行部内ですっていつても……。なあ？』

恐らく学校一モテモテの瞬間に掛ければ誰かしらの女の子を連れて来れるかもしれない。しかし刹那や海老原さん、俺といったメインの面子がギクシャクしてしまうかもしれない事を危惧しているみたいだ。

「ルナちゃんとかは？」

執行部内で一番人当たりが良くて順応性の高そうな人物の参加を提案してみる。

『一応話は振っておいたが……。ルナは無理だと思う。橘や進藤も同じだと思う……。』

????

無理？

『あ〜、とにかく、なんとかしてみるよ。こないだの合コンの話で涉に悪いと思ってたのは確かなんだ……。頑張ってみるよ』

俺が悩み出したのを電話越しに感じ取ったのか、話を無理矢理ま

とめようとする瞬。

珍しく困った様子の瞬に嬉しくなってしまう。愚痴めいた事を俺に漏らしてくれた事が嬉しかった。

「…………瞬？　ちょっと言うのが恥ずかしいけどさ。俺さ、瞬がしてくれる事がさ…………嬉しいよ。いつもそうなんだと思うけどさ……………今回のもそうなんだろ？」

日曜曰。俺も行きたいとか言っていたが瞬が立てた計画の中心は間違いなく俺。

いろいろと考えてくれたのだろつ。涉というイレギュラーがあったとしても、その俺が涉の参加に喜びを感じている事もわかっていてくれている。悩んで悩んで、何が一番俺が喜ぶかを考えてくれている。

だから俺にこうして電話してくれたのだと思つ。

なんだって完璧な親友はこういう時だけわかりやすく困る。

『…………十八…………』

深い息を吐くように俺の名前を呼ぶ瞬。

「いつもいつも瞬によっ掛かってばかりで悪いのは分かってるけどさ…………。日曜曰…………楽しみにしても、いいかな？」

瞬だから。

電話だから言えた言葉。

偽らなくてはいけない自分の弱さを晒してしまっ。

親友の想いに少しでも応えなかった。

『……当然だ、十八。お前は当日に刹那とイチャつく事だけ考えてる……』

話す内容とは違い、静かな声で応えてくれる瞬。冗談にもいつものキレが無かった。

「馬鹿言つなよ……。俺はお前がいてくれれば楽しいよ」
本心を下らない冗談として返しておく。

『はは、了解だ。もう一人の事は任せてくれ。……明日、また連絡する。おやすみ』

「ああ……おやすみ」

ツーツー

眠る準備を済ませたままの体制で通話の切れた携帯を眺める。

冷えきった自分の部屋。

親友の願う最高の日曜日の光景を思い浮かべる。

当然笑顔が零れる。

しかし、すぐに笑顔が絶える。

自然と思い浮かべた楽しい日曜日の光景。

同時に浮かび上がった遠い昔の日曜日の光景。

遊園地。

笑顔が絶えない場所。

たくさんの幸せが溢れる場所。

あの時のように……。

俺はまた、笑えるだろうか……？

日曜日。

待ち合わせの久住ヶ丘駅南口。俺はその駅前にあるヘンテコなオブリエの前で佇んでいた。

俺たちの住むこの久住ヶ丘駅の周辺は、駅を挟んで馬鹿でかい豪邸が立ち並ぶ高級住宅街と俺ん家もある昔ながらの住宅街に別れている。

俺が今いる南口は高級住宅街側、何をイメージしたのか分からないが、統一した造りの建物やレンガ造りの歩道はおしゃれっぽい気がする。leafがあるのも南口なので毎日のように来るけど、こうして立っていると凄い落ち着かない。

この駅の待ち合わせ場所の定番という事で、オブリエ前に集合になったのだが、うんざりしてしまっていた。

時計を見てみると9時20分。待ち合わせの時間は9時30分。

しかし何を血迷ったのか俺は8時からここにいる。朝のバイトは休みなのに、遅れる訳にはいかないと同じ時間に起きてしまった(3時起床)。

もうすぐみんな来るだろう。そろそろ俺は自分の服装チェックをする。ちなみにこの行動は本日10回目である。

くたびれたような皮のブーツ（そういう仕様らしい）。ちらほら穴が空きそうなトコがあるGパン（そういう仕様らしい）。用途不明のベルトがたくさん付いたライダーズジャケット（そういう仕様らしい）。一瞬瞬に選んでもらった服だから大丈夫だと思うけど……不安だ。

うんざりの理由が周りの景色だけじゃないのは言うまでも無い。

待ち合わせ時間の少し前。

「おーっす！ 十八、おはよう」

声が掛かる。瞬である。刹那も一緒だった。

「おっ！！ ……瞬……刹那……おはよう」

ガバツと声に反応するが、返した挨拶は途中から小さくなって送った視線も逸らす俺。

私服の刹那。白いのブーツに膝上丈のチャコール小花柄のひらひらワンピース。前を開けた白いコート、首回りに黒いストール。そしてブーツとスカートの間に見えるのは網タイツ。……もう一度言う、網タイツである。

「……………」

地味な色で統一されてるのになんだこの着こなしは？ いちいち

エロくねえか？ いちいち俺にツボってねえか？ やべえっ！ 直視出来ねえよっ！

「おはよう、十八」

あ、挨拶されちゃったよ！

「ちょっと？ 聞いているの？」

黙って俯くだけの俺の反応で怒らせてしまったのか、刹那はムツとしたような声と共に俺の顔を覗き込もうとする。

「いや！！ いやや！！」

両手で顔を覆いながら叫ぶ俺。

「はは、刹那の私服がかわいいんだってよ」

暴露する親友。 高校生のくせにトレンチコートなんか着こなしてやがる。

「あら、当然だわ。 そう思うならいくらでも見ていいから、ちゃんと挨拶しなさいよ？」

当然と来たよ、この子は。

そして待ち合わせ時間ジャスト。

「……おはよう……」

海老原さんと、

「おはようございます。先輩方」

進藤さん。結局、更に呼ばれた三人目は進藤さんだった。

ここでまた解説しよう。

私服の海老原さん。黒いブーツ、しっかり閉じられたベージュのダブルコートにチェックのマフラー。普段以上に幼い印象だが、海老原さんのイメージにぴったりだと思う。

進藤さん。上下黒のジーンズ。アウターにミリタリージャケット。いつもの縁無しメガネではなく黒縁メガネを掛けている。……ぶっちゃけ凄い地味だった。見た目だけなら清楚で優等生タイプの進藤さんのイメージとは掛け離れている。

まあ二人とも普通レベルを大きく逸脱したかわいさであるのは間違いない。

それにしてもよく進藤さんが渉の相手をオツケーしたなと思う。

3分後。

「放置ね。行きましよう」

待ち合わせ時間を過ぎてても現れない渉。仕方なく待とうと言って1分後に放置を決定した刹那。

「ちよ、ちよっと。もうちよっとだけ待ってあげようよ。電話してみること」

と、俺がフォローしつつ携帯を取り出そうとすると、

「おっ・まっ・たっ・せーっ!!」

狙いすましたように馬鹿が来た。

「いつやーっ！ 主役だから遅れちゃったよーっ!!」

戯言は後にして、とりあえず遅れた事を詫びるべきである。

「瞬っ！ シオっ！ おはようっ！ そしてえっ！ 俺のエンジン達おっはよーっ!!」

馬鹿の咆哮が続く。

俺を含めた全員が真顔で宇宙馬鹿を見やる。

「さあ、渉は来ないみたいだから行こう」

瞬が言う。

「賛成だ。渉の事だからうっかり寝坊してるんだろっ、放置だね」

俺も続く。女の子達も馬鹿を見ないようにしてついて来る。

という訳で、俺達5人は遊園地へと向かう為、改札に向かったのである。

「えっ？ ちょっとちょっとと！！ ごめごめごめんっ！！」

放置である。着ている服も知らないのである。

遊園地は久住ヶ丘駅から6駅を越えた『御美ヶ浜駅』にある。

この御美ヶ浜、『おうつくしがはま』と読むのだが、漢字が悪いのか多くの人に『ゴミ浜』と呼ばれている。その御美ヶ浜市にあるのが今回行く遊園地、『御美ヶ浜遊園地』、そのまんまである。

移動中の電車、日曜日の電車はガラガラで全員座っていた。

「進藤さん、よくオツケーしてくれたよね？」

隣に座る瞬にひそひそと話し掛けてみる。

「ああ、俺も意外だったよ。ダメもとで会計の三人に振ったんだが、まさか進藤とはな……橘ならまだわかるが」

ダメもと……そういえばどうして瞬はルナちゃん達は来れないよ
うな事を言っていたのだろうか？

「十八が訊きたい事はわかるぞ？ ルナの家、つまり毬谷家の事だが、どうも厳しいらしくてさ。あまり外出が許されていないらしいんだ……。一緒に住んでる橘や進藤も似たようなものらしいぞ」

毬谷家。久住市、いや、恐らく日本でも有数の大富豪の家。あまり気にしていなかったがルナちゃんはそこのお嬢様だった。

それにしても橘と進藤さん、ルナちゃんと仲がいいとは思っていたが、一緒に住んでるとはな。そう思いながら進藤さんの方を見つしまう。女の子達は少し離れた席で三人で固まりながら談笑していた。こちらの会話は聞こえていないだろう。

「まあ、どういう訳か、進藤が来てくれて助かった。『あの馬鹿』の相手はかわいそうだが、面子が揃ってくれたのは実に有り難い」
言いながら視線を隣の車両に続く通路に移す瞬。そこには戯言のペナルティーとして同じ車両に乗る事を拒否された涉がいた。涉は車両を隔てる扉の窓越しにこつちを羨ましそうに見ている。

「ちょっとかわいそうだな」

見た感じあまりに不憫過ぎる。

「あの勘違い馬鹿の事はいい。十八、お前の今日の目的は刹那なんだぞ？」

「えっ？ あ、ああ……」

軽く呆れたような表情で言う瞬に気の無い相槌を返してしまう。

瞬の考えているような付き合つとかくつつけるとかいう事はともかく、俺は刹那と仲良くなりたいたとは思ってしまった。せつかくみんな遊びに行くのだから楽しければいいとも思ったが、瞬に任せる事にした。

御美ヶ浜駅で電車を下りて更にバスで10分。御美ヶ浜遊園地に着いた。

「イヤッホウツ！！ 着いたよっ！！ ほらほらっ！」

着いた早々にはしゃぎ回る渉。その無駄に高いテンションにみんなで疲れた気分になってしまう。

「じゃあ俺はチケットを買って来るよ」

瞬が苦笑しながら言う。

「俺も行くよ」

なんでも任せつきりじゃ流石に悪い。

「いって。みんなに変な事しないように渉を見といてくれ」

冗談とも本気とも取れる指令を残して駆けて行く瞬。

「先輩を遥かに陵駕したあの愚物はなんですか？」

瞬を見送ってすぐ、真顔の進藤さんが言う。頼むから『愚物』の基準を俺にしないでもらいたい。

「山崎渉。俺と同じクラスの友達なんだ。ちょっと変だけどいいヤツだよ」

このままだと渉の一日が終わる気がしたので、とりあえずフオロしてやる。

「ほう、確かに副会長も生徒会以外の友達と言っていたらしいな。しかし、会長はどうする？ 恐らくかなりご立腹だぞ？」

そう言って少し離れた所に立つ刹那に視線を促す進藤さん。刹那は見るからに不機嫌な様子で馬鹿騒ぎする渉を見ていた。

「い、いや……どうしよう……」

進藤さん、渉を頼むよ……とは言えず、情けない事を言ってしまう。

「くくくつ、悪いが私には無理そうだ。よって私は知らん。塩田先輩と副会長でどうにかするんだな」

含み笑いでそう言うと刹那の所に行ってしまった。

それを見送ると、刹那の視線を追う。はしゃぐ渉越しに遊園地の正門、奥に見えるアトラクション。御美ヶ浜遊園地は国内でも有数

の巨大テーマパーク、加えて日曜日というだけあって家族連れやカップルで行列が出来ている。俺達のようなグループもたくさんいる。誰もが楽しそうに笑い合っている。

「……………」

ふと隣に視線をやると海老原さん。相変わらずの無表情でぼろっと正門を眺めている。

「海老原さんは遊園地好き？」

話題を振ってみる。

カクン

恒例の相槌。

「……………わくわく……………」

「いや、わざわざ口に出さんでも……………」

どつちやらかなり好きらしい。

「……………」

俺も好きだけど、あまり来た事が無い。

最後に来たのは。

そう、小学校六年の夏休み明けの日曜日。

刹那と瞬。

俺。

……そして、母さんと来たんだ。

遥は季節外れの風邪を引いて来れなかったんだよな……。

『ほらほらトヤ君！ 早く早くっ！』

『痛いよ、せつちゃん！ どうせ行列が出来ているんだからすぐには入れないよ！』

遊園地とかが大好きだった刹那。あの時は着いた早々にはしゃぎ回っていたのは刹那だった。

『早く並んで少しでも早く入るの！』

『わざわざ走る事ないよ。僕は母さんとゆっくり行くから瞬ちゃんと行きなよ』

保護者として一緒に来てくれていた母さん。本音を言えば俺も刹那と一緒にすっ飛んで行きたかったが、母さんを置いてまで行きなかつた。

『十八。私の事はいいから、せつちゃんと瞬ちゃんと一緒に先に行きなさい』

『でも……』

『お願い、十八。私もみんなが楽しい方が嬉しいの』

大好きだった笑顔を添えられてそんな事を言われて断れる筈なかった。

病弱で体が弱かった母さん……。

優しくて暖かかった母さん……。

「十八？ 十八？ どうした？」

突然の呼び掛けにはっとする。

「えっ？ あっ、いや、なんでもない……大丈夫」

あぶないあぶない。ちょっとトリップしてしまった。

苦笑しながら前を見ると、みんなが怪訝そうに俺を見ていた。

???

いや……刹那。

すぐに逸らされてしまったが、みんなの一番後ろにいる刹那だけは違う表情だった。

いつかも見た表情。

見間違える筈なかった。

刹那は泣きそうだった……。

037 第一章刹那25 不測

午前10時30分。

ようやく入場する事が出来た。

まるで某ベイエリアにあるあのテーマパークを彷彿させるように園内は騒がしい喧騒とわらわらと人で溢れ返っていた。この様子だとどの乗り物も行列が出来ているに違いない。

「さあさあさあさあっ！！ シオっ！ まずは何から行くっ？ 何から行くっ？」

「いでででででっ！！！」

園内の様子に感嘆の声を漏らそうとすると、渉が凄まじい勢いで俺の腕を引っ張って来た。この上なくウザイし痛い！

どうして女の子がいるのにこのようなキモい状況になっているかということ……。

少し前、みんなで入場口に並んでいた時。

「生徒会長さあ〜んっ！ 俺さっ！ 山崎涉っていうんだっ！ 瞬とシオの大親友さっ！ ちなみに彼女は大募集中さっ！ よろしくよろしくっ！！！」

瞬と一緒に先頭を並んでいた刹那にいきなり自己紹介をさせた
渉。

「……………」

微妙に後退りしながらとてつもなく嫌そうな表情をする刹那。そ
してその嫌そうな表情を渉ではなく何故だか俺に向けて来た。

「いつやーっ！ 生徒会ちょ……刹那ちゃんとお出かけ出来るなん
てさあっ！ 夢みたいだよっ！」

なっ！ 渉のヤツ、何を言い直してやがる。初対面でしかも刹那
ちゃんなんて、呼んだ、ら……心の中で渉にツッコミを入れている
と言いよの無い殺気を感じる。

刹那、嫌そうな表情というか不機嫌そうな表情というかそれすら
通り越した表情というかなんというか怖い！ ていうかどうして俺
がロツクオン？

「わたっ渉？ やめておいた方が……………」

「なんだよ、シオっ。俺だって刹那ちゃんとお近付きになってもい
いじゃんさっ」

渉の為を思って阻止を試みようとする俺を不機嫌そうに遮る渉。
ヤバいって、ヤバいって！

「……………！」

おたおたする俺にグサグサと突き刺さる刹那の視線。

「あ、いや……」

見てるだけだけど怖いよ！ 刹那怒ってるよ！ しかも矛先が涉
じやなくて俺だよ！ 早くなんとかしる的な表情だよ！

「刹那ちゃんっ？ どしたのっ？」

気付けよ涉っ！ 明らかに不機嫌じゃん！ しかも原因はお前し
か無い感じじゃん！

「帰るか消えるかいなくなるか遠くに行くか黙るかさせなさい。十
八」

「お、おっけえ」

何故俺に言うか。

「その男を私の半径2メートル以内に近付けさせないようにしなさい。十八」

「お、お、おっけえ」

あまりに恐ろしい刹那の威圧感に為すがままに従う俺。

「あ、あの……刹那ちゃん？」

流石の涉もたじろぎながら軽く狼狽えている。自分の置かれている状況をようやく理解してきたみたいだ。

「今の呼び方もやめさせなさい。十八」

「……おっけえ」

渉を見ないで終始俺を睨み付けながら言う刹那。

「……………」

おとなしくなる渉。俺が言わなくても理解したようだが、ちょっと不憫だ。

「まっいいやつ。海っ老っ原っちゃんっ！」

刹那の口撃に頂垂れてしまったか、と置いていたらパツと顔を上げてくるっところを向く。そのまま俺の隣にいる海老原さんへラヘラしながら呼ぶ。

刹那が駄目なら海老原さんかよ。前言撤回、少しでも渉を気遣おうとした俺が馬鹿だった。

「俺は山崎（中略）よろしくねっ！」

二カツと爽やかそうな笑顔でさっき刹那にやったような自己紹介を شدした渉。なんだろ、イラツとした。

「……………」

渉の爽やか風の自己紹介に対して海老原さんは、って、えっ？
ササツと俺の後ろに隠れてしまったぞ。

「え、海老原さん？」

俺の上着をギュツとしている海老原さんに尋ねる。しかし黙り込んだままで俺の背中に顔を埋めてしまふ。

「ちょっとっ？ 海老原ちゃんっ？ 聞いてるっ？」

俺をそこら辺に生えてる木のように回り込みながら海老原さんの顔を窺おうとする渉。対して海老原さん。上着をギュツとする力を強めながらカタカタと震え出す。

ムカツとした！

「渉！ やめろよ！」

渉から庇うように体をずらして海老原さんを隠す。俺の中に無意識に湧き上がる衝動、海老原さんを非常に守ってあげたい！が発動した。

「えっ？ シオっ？」

鳩が豆鉄砲食らったみたいにぽかんとする渉。

「嫌がってんだろ！」

少々突っ走り気味の俺。渉、ゴメンね。

「い、いや。いいよ、俺が悪かったよ……怒らないですよ」

納得いかなそうな表情だが、降参降参みたいに両手を上げながら離れる渉。

「大丈夫？」

目の前のアホが不憫でかわいそうだったがとりあえず無視。後ろの海老原さんを気遣う。

「……うん……大丈夫……ありがと……」

言いながら俺から体を離す海老原さん。見てみると顔が真っ赤だった。当然俺も照れた。

「まっどっかつちゃ〜んっ！」

あんのボケ……無視しておいて正解すぎる。ダメージ0の渉の爽やかそうな声に俺のイライラはぶり返す。

「お（以下略）」

最後尾に一人佇む進藤さんにまたもや爽やか風の自己紹介をやつてやがる。なんとも子供っぽい笑顔付きの渉の自己紹介。三回目ともなると爽やかレベルがマイナス方向に振り切っている。

「……巴でなくて正解だったな。絶対殴っていたらうな」

目の前で自己紹介している渉をガン無視しながら呟く進藤さん。

「ちょっと聞いているの〜円ちゃんっ！先輩が自己紹介してるんだよっ〜」

先輩風吹かすな！ ドアホ！

「黙って頂けませんか塩田先輩と副会長の友人の方。はつきり言わせて頂くと迷惑です。付け加えさせて頂くと不快です」

ギラツと眼鏡を光らせながら涉を一蹴する進藤さん。

えっえっ、とキョロキョロした後、シユンとする涉。

わかる、わかるぞ涉。如何に勘違いでアホなお前でもわかるだろう？ あの娘の言葉はなんか辛いんだ。いつものノリだと辛いだろう。辛いだろうぞ。

「し、瞬っ！ 話が違っじゃんさっ！」

挫けない涉。顔を上げると刹那と一緒に先頭に並ぶ瞬に文句を言い出す。

「意味不明すぎるぞ涉。これ以上変な事言つと本当に帰るか別行動になっちゃうぞ？」

「……………」

瞬の真顔の言葉に黙り込む涉。

不憫すぎるっ！！ 初対面からアホな行動を取り続ける涉にも落ち度があるかもしれないが、楽しい日曜日なんだから大目に見てあげようよ！

気が付いたら俺は両手を広げて駆けていた。

「渉！ さっきは悪かった！ みんなの気持ちはわかるが俺は渉がいて嬉しいんだ！！」

意味不明フォローをしながら渉に抱き付く俺。

「シ、シオっ！！」

抱き付き返してくる渉。

もちろん周りのみんなは生ぬるい視線の真顔だった。

……と、そんな感じで女の子達や瞬に相手にされなかった渉。

「ほらっ！ 早く早くっっ！」

ぐいぐいと俺の手を引く。

さっきは思わず渉に抱き付いたりしてフォローしたが、ぶっちゃけ俺にじゃれつくのは勘弁してほしい。

「最初は絶叫系があっ！？ シオっ！！ ねえっ！ シオってばっ！！」

テンションすごっ！！ 目え血走つとるわ！！

「やっぱり『神風』から行くっ？ 行っちゃっ！？ 行っちゃっ！？」

もはや一人舞台の涉。

（神風）

この遊園地の三大絶叫マシンの一つ。国内で三番目か四番目の最高速を誇るジェットコースター。なんとも微妙な位置へのランクインではあるが、かなり怖いらしい。どうでもいいが、こういう乗り物にこんな突撃系の名前でいいのだろうか？

そんな訳で神風に並ぶ事になった。

目の前の大袈裟で物騒な建造物。それに続く長蛇の列。そしてたびたび聞こえてくる悲鳴。

「……………」

オートで出てくる脂汗。高鳴る鼓動。落ち着かない挙動。

そう、はっきり言って俺は絶叫系の乗り物が大の苦手だった。

ゆっくりゆっくりと進む列。それに応じて加速する鼓動。

「…………十八？もしかしたら怖いのか？」

ぼそつと呟く隣の刹那。実はこの列に並ぶ前、瞬の巧みな誘導により俺の隣には刹那が固定されていた。

「コッ、コワクナイヨ」

あつ、強がろうとしたら声が上擦って、といつか片言になってしまった。

「ふふつ、十八は苦手だったわよね、こつこつ」

バレバレだった。楽しそうにからかう刹那の声に思わず嬉しくなった俺は視線を彼女に移す。

「えっ？」

「なに、どうしたの？ 十八」

「いや、なんでもないよ。怖くもないよ」

誤魔化しながら視線を列の先に戻す。楽しそうに笑ってくれていたと思つて見た刹那の笑顔。違った……明らかに無理をしたような笑顔だった。

俺の気のせいだろうか……刹那、朝から元気が無い。

せっかくみんなで、いや、それもあるけどせっかく久し振りに一緒に遊びに来れたんだ。見た感じだと神風はペアシート、このまま列が進めば刹那と一緒に乗る事になるだろう。俺でどうにか出来るかはわからないが、刹那に楽しくなってもらおう。

「……なんだ先輩。さては怖いのか？」

これから乗る乗り物へのドキドキと何やら刹那に対するドキドキ、いやハラハラに考え込んでいると声が掛かる。

進藤さんである。

「い、いや。怖くないよ多分」

片言にはならなかったが上擦る俺の声。刹那に続き進藤さんにまで指摘された。どうやら俺の状態はかなりガクブルしているらしい。

「くくくつ、情けない先輩か……なかなか面白い話を持ち帰る事が出来るかもしれないな。いいだろう、私が先輩と一緒に乗ってあげよう」

「はっ?」

含み笑いの進藤さん。ぶつぶつ呟いた後、変な事を言う。

そして俺と刹那の間に入ると俺の腕を取る。まるでルナちゃんがやるように俺の腕を抱き締める進藤さん。

「「えっ?」」

呆気に取られたような声で驚く俺……に八モる刹那。

「くくくつくつ、なかなか恥ずかしいな、これは」

ちっともそうは見えない不敵な笑いを混ぜて言う。というか、とても近い。

「えっちょっとなっしてっ」

えっちょっと何をしてるの、が混ぜって変な事を言ってしまう。
というか、とても柔らかい。

「ルナの真似だ。先輩を安心させてやろうと思ってな。……もしか嫌だったか？」

ルナちゃんよりはずっと背が高い進藤さんだが、俺よりはずっと低い身長である。必然的に上目遣いの構図でそんなこと言われて嫌なヤツは男じゃない。というか、とてもいい匂いだ。

「い、嫌な筈は絶対ににやーが……」

激しく嫌では無い、むしろ半端じゃなく嬉しい。がしかし、元々高鳴っていた鼓動が一瞬でレッドゾーンに達した。というか、理性のメーターもレッドゾーン。

「ならばいいだろう。よろしく頼む、塩田先輩」

そう言っ上目遣いのまま微笑む進藤さん。よく見ると顔が紅い、恥ずかしいというのは本当みたいだ。というか、なんだかわわい。

ジェットコースター、密着する進藤さん、周りのイタイ視線。それを受けてやかましいアメリカンバイクのフルスロットル並にうるさい俺の鼓動。

急展開した状況に頭の中がパニック状態だった。

「……………」

押し黙る刹那だけがとても気になったが……。

俺と進藤さん。涉とは嫌だ流的流れから、刹那と海老原さん。必然的に瞬と涉。そのペアで乗る事になった。

俺を恨めしそうに見てくる涉にも悪いと思っただが、意外そうな表情をしながらも何故だか親指を立ててくれた瞬には凄い申し訳ない。

俺達の順番になり、案内係のお姉さんが誘導してくれた。

「こちらへどうぞ」

百点満点を付けたくなる爽やか営業スマイルのお姉さん。

「カップルの方はこちらへどうぞ」

俺と進藤さんとみんなの間にチョップをしながら言うお姉さん。チョップで仕切った俺達は前の方、刹那達は後ろの方へ誘導された。

カ、カップル？ 爽やかスマイルで死語のような事を言わないでくれ、とかツッコミたいが、それ以前に……。

「カップルって？」

俺の腕に埋まっている進藤さんに訊いてみる。

「当然、私と塩田先輩の事だろうな」

そんな事も分からないのか？みたいな顔で見上げながら言う進藤さん。俺の腕はギュツとしたまま。

「えっ、あっ、うん。そっか」

ちよつと冷静になれたよ、ありがとう進藤さん。

なんて思わない思わないっ！ どうしようも無いくらい恥ずかしいよ！俺のメーターとつくにレブってるよ！

「何故男女ペアとそれ以外を分けたのだろうな？ 興味深いな？」

いつものような淡々とした口調だが、何やら楽しそうな進藤さん。真顔ばかりの娘だと思っていたからか、微笑みだけでクラツと来た。

「わ、わ、わがんねえよ……ギュツとし過ぎ、ギュツとし過ぎ」

と、必死の抵抗も、くくくっ、と流す進藤さん。

「これは驚いたな」

案内された物々しくて物騒な乗り物。

なんだろ？ 名前だけじゃなくて見た目も日本軍の零式艦上戦闘機（零戦）っぽいのは気のせいかな？

そんなに不安を仰ぐなりをしているくせに最前列のシートは馬鹿丸出しだった。

「なんかさ、近くない？」

言われるがままに乗り込んだ零戦。

「かなりな」

俺と進藤さんとの距離はゼロ（シャレじゃない）。

「これって、ちょっと危くない？」

シートに取り付けられたベルトは一本、二人で一本。すっぽ抜けそう。

「同感だ」

他のシートは隣としつかり間隔があるし、いい感じのバケツトタイプ。頼り無さそうなベルトではなく頑丈で安全そうなバーが下りている。

なんとも嫌な予感が拭えないが、まあ待て。確か最前列は前が見える分予測しやすいから、かえって怖くないと何処かで聞いた覚えがあるぞ。

『間も無く発進します。……あっ、説明が遅れましたが、最前列の機体は壁や地面に大変接近します。というかかかります。ご注意ください』

「　　ちよい待てえーっ！！！！」

ジリリリ！！ ガコン！！

『発進しました』

オペレータールームっぽい所の係員さん！ しまったじゃねえよ！
！ 敬礼してんじゃねえよ！！

「っつて、あああああああああああ——」

あれ……ここは？

俺って何をやってたんだっけ？

「……輩……先輩！」

「えっ？」

あゝ、この子は？

「大丈夫か？ 先輩」

「えっ、あつ！ 進藤さん！」

そうだ。俺は遊園地に来ていて、進藤さんとジェットコースターに乗っていたんだった。

「耳元で大きな声を出さないでくれ……… 終点だぞ。先輩」

「ごめんと謝りながら自分の状況を思い出す。何やらふざけた先頭車両。超密着で頼り無いベルトで超高速で思いつ切り振り回されたお陰か意識が飛びまくって正直あまり覚えてない。危うく二階級特進してしま……？」

「って、えっ!？」

ジェットコースターは止まっているがベルトは俺達を固定したまま。それはいい。問題は俺が進藤さんの手をギユムっと握っている事だ！俺の凶悪そうな右手が（そう見える）小さくて白い華奢な手を思いつ切りふん掴んでいる。

「でやったあああつ！！ごめんやつさあああつ！！」

慌てて手を放す。しばらく握り締めていたらしく握っていた手が涼しい。色んな変な汗をかいていたみたいだ。

「くくくつ。構わんぞ、先輩。実は私もこの手の乗り物は初めてだな、先輩が手をつないでくれて安心したよ」

悪戯っぽく微笑む進藤さん。超至近距離でそんな反則的な誘惑をせんでくれっ一年生！っていつか早くベルトを外してくれっ係員！！

それから何故か進藤さんは俺にくつついて来るようになった。もちろん腕を組まれたのは最初だけだったが移動中も並んでいる時も常に俺の隣にいた。しかも進藤さんは凄い楽しそうにしてくれていた。必然的にどの乗り物でも、俺×進藤ペアが確定だった。

うう………どういいう意図があるのかわからないが、というかかなり嬉しいが当初の目的である『刹那と仲良くなる』を忘れてしまいうだ。

「そろそろ昼飯にしようか？」

幾つかの乗り物に乗り終えた後、瞬が言う。これまでコイツは俺と進藤さんの状況を終始嬉しそうに見ていた。今もみんなに意見を求める所なのに俺達の方を見てニコニコしながら返事を待っている。

「だいたい今日の企画は瞬が持ち出した話なんだから少しは助けてほしい。……いや、決して嫌という訳ではない。むしろ半端じゃなく嬉しい位なのだが、いかんせん周りの視線がイタイ。」

刹那。ジェットコースターの時からひたすら無言で俺と全く目を合わせてくれない。でも俺がよそ見している時に猛烈に攻撃的な視線を感じる。たぶん刹那だと思う。

海老原さん。刹那のような攻撃的な威圧感を感じないが、なんとなく俺を非難しているような視線を感じる。そしていつものようにほとんど喋らない。

涉。目は口ほどに物を言う、あからさまに攻撃的な視線でザクザクして来やがる。刹那達とは違ってぶつぶつ文句言うし。まあ俺達の状況を見たらそうだろう、逆の立場だったら俺もひがんで思う。

気が付けば時間はお昼過ぎ、瞬の提案通り昼食を摂りながら休憩する事になった。

みんなでオープンテラスが良さげなファーストフード店に入る。

寒いから中に座ったけど。

「まさか進藤ルートに突入するとはな」

みんなで座ったテーブルで瞬がひそひそと話し掛けて来た。

「……なんだよ、進藤ルートって」

なんとなく分かるが敢えてブスツとしながら聞き返す。

「くくつ。怒んなよ、十八。いやさ、珍しいんだぜ？ 進藤ってルナや橘以外とはまともに喋らないし、執行部の仕事以外でもあんまりみんなに関わろうとしないヤツなんだ」

「ふーん」

確かに、知り合って日は浅いが俺もそう感じた。どうしてだろう？ しかも今日になって急にだし。

「脈ありか？」

ニヤリとしながら言う瞬。

「ああ……ん？ って、はあっ！……！」

話が飛躍的すぎる！

「わっ！ 急に大声を出さないでくれ、先輩。何事だ？」

瞬とは反対側の隣から声上がる。もはや定位置とばかりに俺の

隣にいた進藤さんである。彼女の存在に気付いていなかったのか瞬は、おっと、って感じで引っ込やがる。

「い、いや、なんでもないよ」

いやいやいや、まさか有り得ないだろ？ 俺と進藤さんは知り合
ってまだ2週間だぜ？

何かしらの理由があるんだよ、多分。休日だから開放的な気分にな
ってるだけだよ、多分。ルナちゃんと橘がないから俺で暇つぶ
ししてるだけだよ、多分。

「……………」

進藤さんの方を向いてみる。

めっちゃ俺を見た。

「……………ふふっ」

わ、笑い掛けてくれた。かわいい。

いやいやいや！ だからさっ！

俺だぞ？

今まで女の子には嫌わない位置をキープするだけで精一杯だった
俺だぞ？

瞬と一緒にいれば……………、

『塩田君、ちょっと外して?』

とか、

『えーと……誰だっけ?』

だったんだ!!

ここで勘違いしたらせつかく親しく接してくれてる進藤さんに申し訳ない。

「……午後……から……どうするの……?」

俺が一人でアホな考えを巡らせていると、向かい側に座る海老原さんがぼそつと呟く。

「このエリアのめぼしいのはだいたい回ったからな。午後からは他のエリアに行こうか?」

海老原さんの意見に隣の瞬が提案する。

この御美ヶ浜遊園地は三つのエリアにわかれている。

今いるのが王道的なアトラクションがあるセントラルエリア。他に平和な家族向けのアトラクションがあるターミナルエリア。企画物みたいな無茶なアトラクションがあるエクストラエリアがある。

「……パレード……見たいな……」

再び海老原さんが呟く。

「確かターミナルエリアで2時からだな。行ってみるか？」

某ベイエリアのあのテーマパークほどではないが、この遊園地でもパレードなんぞが月一で開催される。都合のいい事にその開催日は今日である。

「興味深い。賛成だ」

進藤さんも乗り気だった。

という訳でパレードを見に行く事が決定。いい場所が取れるように早めにターミナルエリアに移動する事になった。

ターミナルエリアの中央広場。パレードまではまだ時間があるのに物凄い人で溢れ返っていた。

「うわあっ！ すんごい人だよっ！ 迷子にならないように気を付けてっ！」

広場の様子を見て感嘆の声を漏らす涉。

「俺の方を見て言うな」

失礼な。しつかり瞬について行くわい。

「とにかく突撃だ」

瞬の号令と共にすでにかなりの人で埋め尽くされている広場に突貫した。

「ここら辺なら見えるんじゃないか？」

人込みを掻き分けて進む事しばらく、それなりに見晴らしの良さそうな所に出たので訊いてみる。

「はあ？」

瞬……じゃないし！

「すみません、人違いでした」

瞬だと思って話し掛けた人は全くの別人だった。今まで気付かなかった……って事は？

はぐれた！？

「瞬！ 刹那！」

返事が無い、近くにはいないようだ。

「進藤さん！ 渉！」

返事が無い、近くにはいないようだ。

ヤバい！ 言われた側から迷子か？

「海老原さん！」

「……はい……」

「えっ？」

振り返ると海老原さんが俺の上着を掴んで首を傾げていた。

「え、海老原さん。他のみんなは？」

「……知らない……塩田に……任せてみた……」

どうやら俺にくっついてくればはぐれないと思ったらしい。

自分の情けなさや海老原さんに対する申し訳なさからため息を吐こうとすると頭上からの轟音に驚く。

号砲。パレードが始まってしまった。仕方ない、みんなとはパレードが終わってから合流しよう。

「海老原さん、離れないでね？ 合流は後にしてパレードを見よう」

カクンカクン

了解らしい。

広場に視線を移す。

「って何い！！」

馬がいた。武士がいた。大名行列がいた

某ベイエリアのあのテーマパークに対抗している感が否めないこのパレード。オリジナリティーを出したいからって武士は無いだろ、武士は。

その後続いたのは割とまとま着ぐるみ集団。コイツらはやはり対抗してなのか、この遊園地が企画したキャラクター達である。一応B級ながら映画やら何やらになっていて知名度はある。さっきの武士も確かそのキャラクターの一人だった筈だ……。意味不明すぎる。

隣を見てみると、なんとなく表情を綻ばせた海老原さんがパレードに見入っていた。こういうのが好きなのかもしれない。

そういえばこのパレード……。

母さんも好きだったな。

『ここからじゃよく見えないんじゃない？』

ちょうどあの日もパレード開催日だった。母さんが好きなのを知っていた俺は絶対に見せてあげたいと思っていた。

『いいの、十八。私は雰囲気だけで十分だから』

弱々しく微笑む母さんは言った。母さんは人込みや喧騒が大の苦手だった。

母さんの為を思えば言う通りにするべきだった。けどその時はガキだった。それにその時の俺は何だって出来ると自分を信じていた。頼りになる友達だった。

『僕たちが母さんを守るからさ、行くつよ』

『そうそう。私もそう思うよ』

『せっかく来たんだからねっ』

当然のように乗ってくれた刹那と瞬と一緒に母さんの手を引いた。

三人で壁を作って人込みに入って…、困ったように笑う母さんの手を引いて……。

いつの間にかパレードの集団は行ってしまったらしい。周りにいた大勢の人達は散り始めていた。

「とりあえず瞬達に電話してみよう」

「……うん……」

広場の隅にあったベンチに移動すると瞬に電話してみた。

『もしもし』

ワンコールで出る親友。

「瞬、すまん。言われた側からやっちゃった。海老原さんも一緒だからさ」

『ははは、十八らしいよ。まだ広場にいるのか？』

何も言い返せません。

「ああ、瞬達は？」

『俺達はパレードを追っかけてエクストラエリアの入り口の辺りまで来ちゃったんだ』

「そっか。じゃあそのまま待ってないで何かに乗ってるか何かしてて？　そこで合流しようよ」

ただ待たせるのは流石に悪い。

『いや、俺達も歩き疲れたからさ、待ってるよ。そうだな、『玉碎』に集合しようか。案内板にも載ってるデカイアトラクションだからすぐにわかると思う』

「ぎょくさい？ わかったよ、悪いな」

ピッと通話を切る。

「玉碎ってアトラクションで集合になったよ。行こうか？」

隣でおとなしく待つてくれていた海老原さんに電話の内容を伝える。

カクン

やたらと広いこの遊園地。その為園内を循環するバスなんかもある。しかし、そんな事すっかり忘れてしまってる俺はこのこ歩いてエクストラエリアに向かっていた。

海老原さんは相変わらず俺の上着を掴んでついて来る。

「……………」

うーむ。何かこの体制、話し掛け辛いな。

ちょっと体制を入れ替えてみる事にする。少し後ろを歩く海老原さんの横に並ぶ。

「……………あ……………」

俺が体をずらした拍子に手が離れてしまった、海老原さんが小さな声を漏らす。

「並んで歩こう？ 話が出来ないからね」

「……………」

カクン

ぎゅっ

「えっ！？」

手をつないで来た！？

んにゃああっ！！

「ちよちよちよちよっ！？ え、え、海老原さん？」

テンパる俺も何か定番と化してる気がするが、とりあえず慌てる俺。

「……………違うの……………？」

きょとんとした表情で首を傾げる海老原さん。

「い、いや……………」

「うおーい！ どろろなってんだあっ！！ おしゃべりしようがど
思っで並んだのに緊張しちまって話せねえべよー！！」

「……………塩田……………」

「えっ！ は、はい、何？」

じいゝ

すぐ隣からの凝視。

なんだ？ 話し掛けて来たのになかなか喋らないぞ？

???

「……………名前でも……………呼んでも……………いい……………？」

俺に固定していた視線を僅かに逸らしながら消え入りそうな声で言う。

「……………」

少し驚いたがそれ以上に心の中が暖かいもので覆われた気がした。

海老原さん……………この子は本当に優しく暖かい。酷く臆病だけど周りを気遣う事を知っている。

俺は心の中で息を吐くと口を開く。表情は誇ろんでいただろう。

「……………俺を、だよね？」

いつだかやったように、小さな子供に尋ねるように、出来る限り優しく訊く。

「……………うん……………」

僅かに逸らした視線はそのままに頷く海老原さん。

「もちろん、いいよ」

当然だ。拒否する理由が一つも無い。

「……………うん……………ありがとう……………十八……………」

言いながら俺に視線を戻してくれる海老原さん。

海老原さんは執行部のみんなを名前で呼ぶ。彼女は俺を執行部の一員として認めてくれたのか……………。いや、そうじゃない、彼女にとって名前で呼ぶという行為には別の意味がある気がする。

きっと彼女らしい優しい理由があるだろう。

……………ありがとう、海老原さん……………。

「……………十八……………」

「ん、なに？」

「……………多分……………あれ……………」

前方、海老原さんが指差した所を見た俺は愕然とした。

海老原さんが示した先。行列が出来た異様な巨大建造物。見るからに普通じゃない用途不明建造物。

……思い出した。

何年か前にCMでやってたヤツだ。

（玉砕）

この遊園地の三大絶叫マシンの一つ。地上70メートルから加速付きで地面スレスレまで垂直落下するアトラクション。しかも地面の方を向かされてっ！ だからこういう突撃系の名前を付けるなんてーの！

「あーっ！ シオーっ！」

遠くからの涉の声。見てみるとみんなもいる。俺は咄嗟につないでいた手を放してしまった。

「……あ……」

急に手を放したからか、海老原さんが小さな声を漏らした。

「十八。こっちこっち。最後尾はあそこだから並ぼう」

やたらとニッコニコした瞬。恐らく俺が海老原さんを連れてシケ込んだと思っっているのだろう。

「すまん。言われた側からやっちまったよ」

合流しながらも、まずは謝る。みんなに余計な待ちぼうけを食らわせたのは確かだから申し訳ない。瞬の勘違いニコニコはスルーしておいた。

「ははっ！ いったって十八！ その調子その調子っ！」

ニッコニコのまままでガシッと俺と肩を合体させる瞬。その調子っで、何が？

っと、肩を組んだ瞬の向こう、刹那と視線が合う。……俺を非難するような、軽蔑するような視線。瞬に釣られて綻んだ俺の顔が引きつって行く。

「よくないわよ。団体行動を乱したのにヘラヘラしないでもらいたいわ」

すぐに視線を外した刹那。腕を組んで明後日向きながら言う。言い方も冷たく攻撃的だった。

「……」

確かに、みんなが瞬のようにおどけて許してくれるとは限らない。

「刹那……そう怒るなよ。こうして無事に合流できたんだし、せっかく遊びに来てるんだからさ。そういうのは無しにしようぜ？」

俺と肩を組んだままの体制で刹那を窘める瞬。

「……うるさいわね。別に怒ってないわよ」

明後日に向けたままそう言うが、明らかな不機嫌を露にしている。

「会長。塩田先輩だって謝っています。失礼ですが少し酷いと思います」

進藤さん。白くなった眼鏡越しに言う。俺に対してではない、刹那に対してである。

「……だから怒ってないと言ってる」

やはり明後日に向けたまま答える刹那。少し声が弱々しい。

黙り込む刹那に合わせるように黙り込むみんな、なんともいえない微妙な雰囲気醸し出す。流石におどけていた瞬もばつが悪そうに引っ込んでしまった。

「え、えーっとさっ！ とりあえず並んでさっ！ 玉碎に乗ろうよっ！ ねっ！？」

へったくそな作り笑いで無理矢理そう言う涉。かなりのファインプレーだ。

「そっ、そっだよおっ！ 実は俺ってば、これに乗れたかったんだよねえ」

すかさず渋に便乗するが自分で言っておいてハツとする。んなワケ無いじゃん！

「ほう。先輩はこの手の乗り物は苦手だと認識していたが、違うのか？」

キュピーンとしたように眼鏡を光らせた進藤さんが言う。

「い、いや……」

バカ言った、と自分の発言に後悔しながら狼狽していると、ちょうど頭上からゴンドラが降って来た。

「ぎゃあああああああ——！！！！」

「……………」

なんでみんなはこんなのに乗れたがるんだ？

「……………十八……怖いの……？」

いつの間にか隣にいた海老原さんが呟く。

「い、いや……。だだだだだってさ、凄いや高いよ？ これ」

完全にテンパった俺はヘタレ全開である。

「……………ふふっ……………十八……かわいい……………」

俺のテンパリっぷりを見てほわ〜んと微笑む海老原さん。かわいい

いのはあなたです。

「……瞬。俺がオマケだっていうのはわかってるけどさ……。なんかさ、今日のシオはずるいよっ！ っていうか羨ますいっ！」

「言うな、渉。ひたすらお前とペアを維持してる俺の身にもなれ」
「なんだかしんどくなりそうな会話が耳に入って来るが、どうしても気になるのは一つ。」

「……………」

刹那。仏頂面というより明らかに無理をしているように見える……。

……………

「シャイイインスパアアアアクッ！！！」

……………

「十八。大丈夫か？」

「……………」

とんでもねえ……危うくペダルを踏むタイミングを合わせてしま
う所だった……。

「……十八……」

玉砕前のベンチでぐったりする俺の頭を海老原さんが優しく撫でてくれた。ちよつと安心した。

「……ずいぶん急速に仲良くなったみたいだね……海老ちゃん？」

瞬も意外だったらしく、訊いて来る。

「……急・接・近……」

「「「……」」」

みんなが凄い訝しげな表情を揃えて俺たちを覗き込んで来る。

「み、みんなごめん！ もう大丈夫だからさっ！！」

みんなの微妙な視線に堪えられなくなりそうだったので無理して立ち上がる。

「よしつ。じゃあ次は観覧車でまったりするかっ！」

俺の不完全な回復を確認した瞬が提案する。まったり、大賛成だ。みんなも賛成らしく表情を綻ばせている。

「……………」

刹那以外だが……。

という事で、次は観覧車に行く事になった。

〈超弩級展望観覧車〉

この遊園地の誇る巨大観覧車。某ベイエリアなどに出来た観覧車に次々抜かれたが、現在でも国内で有数の高さを誇る観覧車だ。それにしてもこの遊園地のネーミングセンスはどうかと思う。

「流石はこの遊園地の一番人気だな。行列が半端じゃない」

瞬の言う通り目の前には、これでもかって位の行列が出来ている。

この観覧車が出来たのは4年前。昔は二回り位小さくてネオンも無いシヨボい観覧車があった。

五年前はそれに乗ったんだ。

あの頃はそれでも高く思えて窓にはり付いていたっけ……。

「ははっ……」

思わず嬉しくなってニヤけてしまった。

「なんだよ、シオ。気持ち悪いな」

俺の意味不明な笑いに涉のツッコミが入る。まあ普通に考えたらただの挙動不信だろう。

「いや、懐かしくてさ。はは……」

「ん？ シオつてこれに乗った事あんの？」

どうでもいい事に鋭い涉。

「無いよ。これにはね」

「……？ なんだよ、それ」

首を傾げる涉。先頭に並ぶ瞬が少し悲しそうな表情で振り返る。

それを見てふと一番後ろの刹那が気になった。

瞬と同じ表情をしている気がした……。

「お待たせしました。グループですか？」

俺たちの順番になって係員さんが訊いて来た。この観覧車のゴンドラは大きく6人乗り、俺たちもちょうど6人である。

「では、こちらからどうぞ。足元にお気を付けてお乗り下さい」

瞬がグループである事に答えると係員さんが案内してくれた。

瞬が進藤さんと海老原さんに手を貸して乗り込む。渉には手を貸してあげないらしい。

俺も続こうとすると、

「えっ？」

上着の裾を引かれた。

「……？ どうしたの？」

「……………」

俺の上着の裾を引いたのは刹那。俯いて動かない。何も答えない。

俺も動けない。

ガー バタン

瞬たちを乗せたゴンドラは俺たちを残して閉じてしまった。

「お客様はお二人ですね。次のゴンドラへどうぞ」

係員さんが『はは〜ん』といった表情で案内してくれた。

何やら勘違いしている係員さんのなすがままに、俯いて黙り込む刹那と二人で次のゴンドラに乗り込む。

「刹那。どうしたの？」

扉が閉まって地上から離れてすぐ、もう一度刹那に訊く。

「別に……」

窓の外、まだ地上と大して変わらない景色を眺めながら答える刹那。

「なんだろう？ 怒っている？ 機嫌が悪い？ なんだって別のゴンドラに？ なんとというか話し掛けづらい……」。

「……十八は……つらくないの？」

地上から離れてしばらく。窓の外のほとんどが空になった頃。刹那は突然言った。

「……つらいつて？」

突然の言葉だったが俺にはわかった。だが敢えて聞き返した。

「だって……この遊園地は……」

「やっぱり……刹那も思い出していたんだ。」

この遊園地は母さんと最後に来た思い出の場所だから……。

昔。塩田家と佐山家の家は隣同士だった。

親達も交流があり、一緒に旅行に行くほど仲が良かった。当然刹
那も俺の母さんや父さんを知っている。

「……母さんの事？」

「……………」

訊いてみるが刹那は答えない。しかし瞬のそれと同じ無言の相槌
を感じ取る。

「思い出すけど……つらくはないよ」

嘘ではない。

思い出す所はたくさんあった。

揺られた電車やバス。

一緒に並んだ入場口。

一緒に見たパレード。

一緒に休んだベンチ。

これとは違うけど一緒に乗った観覧車。

「そう……私は少しつらい……。ここに来ると、思い出しちゃうよ……」

刹那……朝から元気が無かったり、進藤さんや海老原さんに浮かれた俺に冷たかったのはそういう訳か。

「俺はさ、思い出すけどさ。今日は嬉しくなるだけだよ？」

「どうして!？ この観覧車だって一緒に乗ったのとは違うんだよ!」

俺の言葉に信じられない物でも見たような表情で言葉を荒げる刹那。

「うん。でも刹那と瞬がいる。五年前の思い出と重なるんだ……思い出せる事が嬉しいんだ……」

そう、五年前の思い出。それは紛れも無い真実。大好きだった母さんの思い出。大切な親友との思い出。再会した優しい幼馴染みとの思い出。

「十八……」

俺の言葉を噛み締めるように俺の名前を呟く刹那。

「……前にさ、瞬が言ってくれたんだ……。代わりにはない……
……けど、瞬と刹那は、俺と一緒にいるってさ……」

いつかの瞬の言葉。俺を『こっち』に引き戻してくれた言葉。俺
が生涯忘れる事が出来ないであろう言葉。

俺の言葉に応えるように潤ませた瞳で俺を見つめて来る刹那。

ありがとう……刹那。

きつと瞬も色々悩んでこの遊園地を選んでくれたのだろう。

ありがとう……。

ふと外を見ると観覧車は頂上を過ぎた頃だった。

「高いな」

遊園地の中どころか御美ヶ浜の町全体を見渡せる。いや、隣町で
ある俺達の町、久住市ですら見渡せそうだ。

遠くに見えるのは水平線。沈み行く太陽が今日の役目を終えるべ
く空の色を変えようとしている。目に見える早さで空が茜色を彩っ
て行く。綺麗だった。

俺の眩きに対しての刹那の返答は無い。未だ俺の言葉を噛み締め
てくれているように見える。愁うれいを帯びた刹那の表情は茜色の空よ
りも、綺麗だった。

そういえば前に古い観覧車に乗った時。

『ほらほらっ！ トヤ君！ あれあれ！ 乗る乗る！』

『嫌だつて言ってるだろ！ あんなのただの嫌がらせみたいじゃん！ 瞬ちゃんと乗ればいいだろ！？』

『トヤ君と乗った方が面白いに決まってるじゃん！』

『僕が怖がるの見ただけじゃん！』

観覧車から見えた新しいアトラクション。絶叫系の乗り物が大好きだった刹那はそれが苦手な俺と一緒に乗りたいらしく、我が儘ばかり言っていた。

『一緒に行つてあげなさい。十八』

見兼ねたように母さんが言った。

『えええっ！』

『もう間に合わないんじゃない？』

『うっさいわね瞬！ 私とトヤ君なら走れば間に合うよっ！』

当時出来たばかりの最新アトラクション。それが目当てという位に刹那はずっと乗りたがっていた。嫌だった俺は閉園間近までひたすら反対していた。

でも、観覧車から見たもんだから結局乗る事になっちゃって…。

でも、間に合わなかったんだ……。

「刹那。あれに乗ろう」

「えっ？」

「ほら、あのうねうねのやつ」

「……あ」

約20分の周回を終え、ゴンドラの扉が開く。

観覧車の出口付近には先に降りていた瞬たちが待っていた。

「十八、刹那！ どうした　って、あれっ」

「瞬っ、みんなっ。ゴメンッ！」

「後で電話するからっ」

迎えてくれたみんなの脇をすり抜けて走る俺と刹那。

五年前と同じように、何もかもが幸せだったあの頃と同じように、俺達は手をつないで走り出した。

刹那と二人、走る。

現在、4時20分。

エクストラエリアの最終乗車締め切りが4時30分。セントラル、ターミナルはナイト営業をしているが、エクストラは昼間だけの営業しかしていない。加えて今は冬季の為、更に締め切りが早い。ぎりぎりだった。

刹那と二人、走る。

観覧車があったターミナルエリアからエクストラエリアに続くゲート。既に営業を終えようとするエリアを後にする人達で溢れている。

その人込みとは逆にエリアに向けて俺たちは逆流して行く。

刹那と二人、走る。

流石は刹那。コートを着てブーツを履いているにも拘らず滑るように走る。

俺も走る。右足、左足、右足、左足。全力で前に出す。

そう、『全力』で。

体育の時も。新聞配達のバイトの時も。涉を撒く時も。刹那の我が儘で呼び出されて急いでいた時も。球技大会の時でさえも。

俺は『全力』で走らなかったのに。

刹那の心に応えたいが為に無理をしてしまった。

グラリと揺れる視界　。

「　　！！」

マズい　　こんな時に　　。

「ちょっと！？　十八？　大丈夫？」

急に立ち止まって蹲ろうとする俺を見て慌てふためいた様子の刹那。

胸が焼けるようだ。

息が出来ない。

こんな時にまで俺の体はいうことを利いてくれない。

少し『全力』で走った位でオーバーヒートする。

落ち着け。

集中しろ。

研ぎ澄ませろ。

隣には刹那がいるんだ。

悟られるな。

「……大丈夫。急ごう！」

左胸を無理やり押さえ付けて刹那の手を引く。

「ちよっ！？ 十八……！」

4時31分。

”受付は終了しました”

また、間に合わなかった……。

「はあっ、はあっ……刹那……ごめん……！」

俺がモタモタさせたせいだ。

「はあ、はあ……。いい、よ……」

肩で息をしながらも苦笑する刹那。

五年前の時のように俺を責めない。

くそっ！ 刹那……ごめんっ……！

齒痒さから、もどかしさから、言いよつゝの無い虚脱感。悔しさから、申し訳なさから、熱を上げる心とは裏腹に全身の力が抜けて行く。

崩れ落ちそうだ……。

「……あら、塩田じゃねえか？」

「えっ？」

「なあにやってんだあ？ オメエ」

な、永島さん？ どうして遊園地の係員が永島さんなんだ？

「い、いや。永島さんこそどうして？」

「ああ？ オメエ知らねえっけか？ オレよお、土日祭日の昼間はここでも働いてんだわ」

「そ、そうなんですか？」

全然知らないって。

「っていうか、オメエ。女連れだとお？ うわっ、しかもメチャクチャかわいいじゃねえか」

俺の隣の刹那を見てかなり驚いた様子の永島さん。

永島さんの独特の雰囲気にとじたじの様子の刹那はチラチラと俺に目配せしながらも、どうも、って感じでお辞儀する。

「いや。えつと友達ですよ」

突然の永島さんの登場に色々とこんがらがった俺の頭の中。永島さんと刹那。どっちに対応すればいいかわからず、考えてから答える事が出来ない。

この人誰？みたいな目配せを無視されたと思ったのか、刹那の目配せがギラツと強化した気がするし。

いやいや、ちょっと待って。整理しよう。俺は刹那と二人で観覧車から見えたうねうねに乗る事になって。このエリアは閉園間近だから走って。俺がぐずぐずしていたせいで……、

「……ったく、特別だぞお？」

そうそう、俺たちは特別で……？

「「えっ？」」

特別？ 意味不明の話の展開に俺と刹那の声が八モる。

「ほら、入っていいぞお？ 列が捌けたら俺が案内してやつから」

『受付終了』の看板をずりずりつと引き摺って通路を開けながら言う。

「永島さん？」

「貸しーだぜえ〜」

言いながらくいくいと通路の先を顎で促す。ニヤリとするその仕草がやたらと様になっていた。

GO TO HELL

この遊園地の三大絶叫マシンの一つ。その中でも一番古く、五年前の夏に完成。神風同様ジェットコースター。神風がスピード重視ならこれはコーナー重視。非常識なカーブのオンパレード。……もうナーミングについては何も言うまい。

観覧車からも見えたらうねうね。間近でその非常識に伸びるレールを見ると、冷や汗っていうか脂汗が滲み出て来る。……ちよっぴり後悔して来た。

「流石にこれは怖そうだわ」

刹那も見上げながら微妙な表情をしていた。

「よおし、いいぞお」

「あ、はい」

永島さんに案内されて搭乗口に入ると他には誰もいなくて貸し切り状態だった。

「永島さん。いいんですか？」

流石に恐縮してしまう。隣の刹那も落ち着かない様子から察するに同じような心境だろう。

「構わねえよ。どうしても言い訳出来るし塩田なら特別だあ」

いかつい顔を綻ばせて言う永島さん。見慣れない人が見れば余計におっかないが、見慣れた俺には優しい表情にしか見えない。

「……ありがとう。永島さん」

「ありがとうございませ……」

明らかに永島さんを警戒している刹那も俺に倣うように言う。

「くっあぁ〜！ 羨ましいなあ！ こんちきしょおっ！」

刹那を知らない永島さん。刹那の引き気味の様子を気にするでもなく、笑いながら俺を小突く。

永島さんのわかりやすいひやかしに照れつつ刹那を見ると、照れ笑いを浮かべているように見える。

うわっ、なんか幸せだ。

「ベルト確認オーケエ。各セーフティロック解除確認オーケエ」

刹那と二人。最前列のシートに座った俺達を確認した永島さんがいつもの口調で言う。

「発車しまあす。お気を付けて逝ってらっしやいませえ」

ん？ 何か少しおかしくなかったか？

ガコン！

少し大きめの振動と共に動き出すジェットコースター。

カタンカタンカタン

隣を見れば刹那。正面を向く彼女と視線は合わない。

でも何故だろう？

瞬と一緒にいるように。渉と一緒にいるように。

遥と一緒にいるように……。

安心する。

カタンカタンカタン

瞬には悪い事をしてしまったな。

渉は怒っているだろうか？

俺の名前を呼んでくれた海老原さん。

何故だかいつもと様子が違った進藤さん。

カタンカタンカタン

時間的にこれが最後の乗り物だろうか？

遊園地。瞬の描いた最高の日曜日。

実現したのだろうか？

……母さん。

五年も遅れたけど、母さんに言われた通りに刹那と一緒に乗って
るよ。

だいたい刹那はどうしてこんなのに……。

カッタン！！

「えっ？」

「……なんで俺寝てんの？」

俺はベンチに寝ていた。刹那は俺が寝てるベンチの端っこに座って俺の顔を覗き込んでいる。ちなみに膝枕とかは無い。頭の下には堅いベンチ。

「さっきのジェットコースターで気を失ったのよ。アンタ」

薄く微笑んでいた刹那。言いながら俺をかわいそうな物でも見るみたいに見やる。

「う、ごめん……」

俺って情けなさ過ぎ。

「ふふふっ、いいよ。面白かったから。……ふふっ、はははっ」

途端に表情を正反対に綻ばせた刹那。笑いながら寝ている俺の顔を手でぐにゅぐにゅしてくる。

「はぶっはぶっ！ せつ、やめ。ぶむぶゅっ」

白くて綺麗な指先で顔面をほじくられてる。なんだろう……嫌だけれど嫌じゃない。

「あつ、ごめん。もうすぐ瞬達も来るから。さっきまであの永島さんもいたんだけど、もう行っちゃったわ」

俺の声のはつとしたように手を引っ込める刹那。

……そっか。永島さんがここまで連れて来てくれたんだな。さっき刹那が話していたのは電話越しの瞬か。

「……十八」

「えっ？」

体を起こそうとする俺に刹那の声が掛かる。

「……………」

俺の顔をいじくりながら綻んでいた刹那の表情が暗く沈んでいく。呼び掛けた俺から執拗に視線を外す。

俺は黙って刹那の言葉を待つ。

「……今日。私……嫌なヤツだったよね？」

思い詰めたような表情で視線を逸らした刹那。吐き出すように呟く。

……嫌なヤツ。

観覧車で俺の真意を聞いたからか、俺を心から気遣っているように見える。

今日一日の自分の行動を後悔しているのだろう。

刹那。本当に優しい俺の幼馴染み。

「……俺が『そうだった』とか言ってる？」

我ながら意地悪な聞き返しだと思っつ。

「……思わない……」

視線は逸らしたまま言っつ。しかし思い詰めた表情が優しく和らいだ気がする。

「刹那……」

無意識に呼んでしまった。俺の呼び掛けに応えてくれた刹那、和らいだままの表情で俺を見つめてくる。

和らいだ表情？ 違うか？ 俺は過剰に捉えているのか？ いや……そうじゃない、違うんだ、自然なんだ、ただ自然なんだ。

再会した刹那。思えば『せつちゃん』として接してくれた事は無かった。

俺は『今』、幼馴染みと再会した気がした。

ベンチに座る俺達。刹那との距離は30センチ。

五年間。途方もない距離に感じていた距離は僅か2週間でここまで縮まった。

一向に喋らない俺を待っていてくれる刹那。

俺じゃない俺が刹那に何かを伝えようとしている。

俺は……。

「十八！ 刹那！」

俺の思考を中断する瞬の声。ずっと固定していた刹那から視線を移すと駆けて来るみんな。

「瞬」

応える。

俺じゃない俺は引っ込んでしまった。

「瞬……ごめん……」

すぐに立ち上がった俺は駆け寄ろうとするが、言つべき事を言つた途端に俯いてしまう。

自分勝手に突っ走った事に今更気付いた。

「……あの時』と同じ事しといて言つなよな……。俺がわからな
いとか思ってたら俺は泣くぞ？」

俺だけに聞こえるように言う瞬。

「……うん……ごめん……」

やっぱり。瞬がこの遊園地を選んでくれた理由は俺の思った通りだった。

瞬は俺を懐かしい思い出の場所に連れて来たかったんだ。

未だ俺を見つめる刹那と一緒に。

久住ヶ丘駅。

結局、あのまま帰る事になって地元まで帰って来た。

「俺、バイトの時間ヤバいからさ。ここで」

すっかり暗くなってしまった時間。女の子達を送って行くべきなのだろう、とか思っていたが、瞬に、

『お前がそこまでやったら俺達の立場がねえ』

とか言われてしまった。

「また明日。学校でな？」

瞬が言う。

「ああ……また、明日」

今日の俺に迷いは無かった。考える間も無く応えていた。

「……アルバイト……頑張ってたね……」

囁くような海老原さんの暖かい声。

「えー、あー……今日はどうも……」

なんだか色々言いたそうに見えるが、それしか言わない進藤さん。

「俺って本当にオマケだったよね？」

そつだよ。今頃気付くな、涉。

「……………」

刹那はみんなの一番後ろで小さく手を振ってくれていた。

みんなに、刹那に、軽く手を振りながら視線を外した俺は踵を返す。

何を勘違いしている？

何を浮かれている？

散々考えて。散々悩んで。散々苦しんで。

行き着いた答えは一つだったんじゃないのか？

瞬だけじゃなくて刹那まで巻き込もうとしているのか？

「……………」

leafに続く僅か数百メートルの煉瓦造りの歩道。

立ち止まった俺は振り返る。

既にみんなの姿は見えない。

俺は考える。

刹那を、あの時の俺を、二人が交そうとした言葉を……………。

「幼馴染みだあ？」

レストラン＆ダイニングバーleaf

「昔家が隣同士だっただけです。それに刹那は瞬の双子の姉なんですよ」

みんなと別れた俺は大急ぎでleafに出勤した。遊び疲れた体でどうにかデイナータイムを乗り切って恒例のアナログ皿洗い。そこで永島さんに夕方の件をねちねち問いつめられていた。

「佐山の姉弟だったのかあ。そりゃあ驚きだな」

瞬はたまにleafに顔を出すので永島さんも知っている。

「親友の姉で同級生で幼馴染みだとお……幼馴染みだとお……」

ぶつぶつ言い始める永島さん。

「や。本当に仲良かったのは小学校までで。また仲良くなったのも最近で。別に朝起こしに来てくれたりとか無いっスよ？ あの、聞いてます？」

「あんなにかわいい幼馴染み、しかもツンデレだとお」

「ちょっとちょっと永島さん！？ 勝手に変に捏造しないでください」

いよー」

何を言おうと聞いてくれない永島さん。結局、上がりの時間まで
いじられまくってしまった。

最高の日曜日？

……落ちるぞ。

……墮ちるぞ。

……墜ちるぞ。

お前にそんなものがあると思っっているのか？

浮かれて立ち止まっても踏み外す落差が大きいだけだぞ？

信念も約束も後回しか？

お前に後なんて無いのに……。

黒い道路を歩く。

バイトを終えて外に出ると雨が降っていた。観覧車から見た綺麗な夕日が嘘だったみたいに、シトシトと冷たい雨が全てを濡らしていた。雨が傘を叩く音、雨が軒を叩く音、耳に届く音はそれだけ。海岸沿いの家路、いつもは聞こえてくる筈の波の音も雨音にかき消されていた。

黒い。

辿る家路は黒い。意味を為さない申し訳程度の街灯に照らされた黒い道路。分厚い雨雲に遮られた黒い空。店長が貸してくれた黒い傘。きつと俺も黒い。みんな真つ黒だ。

俺は不安だった。

あの時の茜色が嘘だったみたいに……あの時の刹那も嘘だったんじゃないのか……。俺の名前を呼んでくれた海老原さんも……。いつもと違った進藤さんも……。何やら不憫だった涉も……。なんだっってお見通しだった親友さえも……。

みんな嘘だったんじゃないのか？

ポケットの中の携帯を無意味に握り締める。力なく握る事しか出来ない左手では俺の不安が届いてくれない気がする。でも縋る、無意識に、湧き上がる衝動に任せるままに、渴望するかの如く縋る。

繋がってもいない携帯で届く筈ないのはもちろん知っている。でも今俺が縋る事が出来るのは唯一それだけかのように思う。俺を知ってる人とのたつた一つの繋がりのように思う。俺を現実につなぎ止めてくれる唯一の物に思う。

慣れた筈だったのに。

もう諦めた筈なのに……。

黒の先。役立たずの俺の視力でも確認できる。いや、体が覚えた距離感が弾き出した答えだろうか。自宅の門が見えて来ていた。

そこに違和感がある。

明かりが漏れている。門扉の隙間から漏れる明かりは間違いない。居間の明かりだった。消し忘れたのではないと思う。というより雨戸を開けた覚えが無い。

誰かがいる？

じいちゃん？ そんな筈は無い。じいちゃんはもういない。

瞬？ それも違う。瞬が何の連絡も無しに家に上がり込む事は無い。鍵だつて掛かっている。

不安が加速する。

「……………」

いや、何を考えているんだ。わかっている筈だ。都合のいい考えに逃げてても現実是不変わらない。妄想を膨らませて余計に苦しくなるだけ。明かりを見た時点で気付いた筈だ。馬鹿か、俺は？

玄関の扉を開ける。

「……………失礼致します」

いつもと違う挨拶をしながら。

返事は返って来ない。しかし明かり以外にも玄関に普段とは違う物がある。丁寧に揃えられた女性用の麻裏草履。当然の事ながらこの家に女性はいない。元より俺以外に住人はいない。

黒い廊下を進み、明かりが漏れる居間の前。俺は襖を開けず、その場に腰を下ろす。冷たい廊下に腰を下ろす。堅い廊下に正座で腰を下ろす。

「十八です。ただ今戻りました」

居ずまいを正した俺は襖の向こうに声を掛ける。

「……………随分と遅い、ご帰宅ですね……………十八さん。また、アルバイト、ですか？」

明るい居間から静かな声が返って来る。声の感じは丁寧で静かなものだが、冷たく苛立っている事を感じ取る。

「はい。いつものレストランのアルバイトです」

暗い廊下から言葉を返す。目の前には襖が見えるだけ。

「昼間も、留守にしていた、ようですが、どちらに、出掛けて、いらしたの、ですか？」

所々言葉を切る独特の喋り方で言葉が続く。どうやら昼間も来たか、昼間から待っていたらしい。

「昼間は……友達と、遊びに行っていました」

鳥肌が立った。廊下の冷たい空気のせいではない。雨に濡れたせいではない。

「……友達？ それは、それは。大層な、ご身分ですね、十八さん。学校以外で……アルバイトも、まあ、いいでしょう。それら以外でなるべく家を、空けないように。そう言い伝えた、筈ですが……？」

「申し訳ありません……」

寒い。全身の血が冷めていくようだ。心が寒い……。

「あなたが、ここに、住む以上、管理は、任せていた、筈です」

そう。俺がここに住んでもいい条件。じいちゃんの遺言のお陰もあるが遺言にも限界があった。

後見人。

俺が社会的に自立していない以上、どうしてもその存在が不可欠になる。そしてその後見人は俺との同居を拒み、遺言通りに俺が遺産として受け継いだ屋敷に住むように言われた。この屋敷の管理を怠らないという条件と共に後見人を引き受けてくれた。

「掃除の方は土曜日以内に済ませておきました」

実際その通りなのだが、言ってから後悔した。そう思っていると目の前の襖がゆっくりと開く。同時に居間の照明の光が俺を包み込む。長い間暗い風景を辿っていた俺の視界が真っ白になる。

「そういう事を、言っているのでは、ありません。十八さん、あなたには、『この屋敷の、管理を、怠らない様に』、と、言い伝えた、筈です」

白くなつた俺の視界の中心には『後見人』さんの足元。顔を上げて目を合わせる事は無い。許されていない。

「申し訳ありません……。今井さん」

足元に視線を固定したまま、正座の姿勢を保つたまま言う。

今井しえさん。俺の後見人で、いつも和服姿の老齡の女性。じいちゃんの奥さんの妹さん。つまり俺のばあちゃんの妹さん。俺の唯一の親類関係に当たる。

「まあ、いいでしょう……今日の、所は、『屋敷』の、様子を、見に来た、だけです。私は、帰ります」

そう言いながら襖を閉める今井さん。黒くなった廊下を玄関へと歩いて行く。

「……………」

俺は何も言わない。視線で追う事も無い。送り出す事は許されていない。

玄関の扉を閉める音が聞こえても俺は動かない。いや、動けない。暗くて寒い廊下で正座を続ける。

ほら。言わんこつちや無い。

現実なんてこんなもんだ。思い通りになんかいかない。お前の『居場所』なんてどこにも無いじゃないか。

這いつくばっていればよかったんだ。今まで通りに一人で這いつくばっていればよかったんだ。

落ちた時に苦しいだけじゃないか……。

早く眠りたかった。

悪夢でも何でもいい。早く現実から逃げ出したかった。

最低限の就寝準備を済ませた俺は自分の部屋に逃げ込む。押し入れから布団を引っ張り出して中央に乱暴に敷く。慌てたように布団に潜り込む。

ふと気付く。

俺の部屋。

俺の部屋？

六畳間の和室。たった今敷いた布団。隅に掛かった学生服。部屋の隅に置かれた旅行鞆に易々と詰め込む事が出来る程度の私物。

この部屋にはそれだけ。それだけしか無い。

自分の部屋？ 笑わせる。

俺はこんな所においても安心しない。

安心出来る筈が無い。

「……くくっ……！ ……ははは！」

込み上げる。

「くはははははははっ！！」

止まらない。

「くああーっはっは！ ははははははははははっ！！」

俺の残りカスの感情が溢れ出していた。

惨めな自分を隠して、誤魔化して、逃げて。

「……俺は……俺は！ 何を期待しているんだ！」

ピリリリ

「！」

携帯が鳴る。俺の最後の現実が呼び声を上げる。

枕元のそれを慌てて取る。左手で取る。俺は無意識に利き腕を使っていた。当然のように取り落とす、何度も、何度も、何度も。でも俺は左手で拾い続ける。

着信 橘巴

「……お前、かよ……掛けないとか言っておいて……」

開いた携帯のディスプレイには意外な人物の名前が映し出されていた。脱力しながらも思わず馬鹿なツツコミを入れてしまう。

鳴り続ける携帯。溢れ出そうになった感情に蓋をしているのは間違いないこの音。

「……もしもし」

震え出す左手で通話ボタンを押す。

『 出んのおっせえー!!! 』

「うわあっ！ なんだ!？」

思わず放り投げそうになる。

『 うわあ、じゃないよ先輩！ 寝てたのか? 』

「い、いや。起きてたよ。どうしたの？ こんな夜更けに……急用?」

あまりに唐突な橘の声。いつも通りの橘の声。咄嗟に返した自分の声は他人の声のように上擦っていた。

『 別に急用って程の事じゃねえけどさ、円に今日の事聞いてたからさ、一応先輩にも言っておこうと思っただけさ、いや明日の朝とかでもよかったんだけどさ、えーと、えーと 』

「なんだよ？ 橘?」

今日の事。遊園地の事で間違いないだろう。進藤さんから聞いたのはわかるが、なんだって橋から？ 中々言い出さないし。

『いや！ あれだ！ 明日の昼休み空けとけてって事だ！ わかったか？』

何やらやたらと声を張り上げる橋。昼休み空けとけ？

『……先輩か？ 私だ。進藤だ』

急に声が変わった。どうやら一緒にいたらしい進藤さんと代わったみたいだ。

『いや、巴が言いたいのは、明日の昼休みに一緒にご飯を食べよう、という事だ』

『円！ 言葉が足りねえだろう！ ルナと円とあたしと先輩！ 四人でって言えよ！』

ぎゃあぎゃああとうるさい電話の向こう。っていつかそうだろうなあってわかってたよ。

『そういう事だ、先輩。いいな？』

「あ、ああ……」

そういうっていつかどういつか訳か明日昼飯を一緒に食べる事になったらしい。

俺はそれが約束である事にも気付かない。

『先輩？ どうした？』

「えっ？」

『元気が無いな？ 疲れてしまったか？』

「あつ、いや、うん。そうだね。疲れたのかもしれないかな」

自分でもわかる気の抜けた声からか、気遣われてしまった。続いた言葉も気の抜けた強がり過ぎない。

『……………』

????

「あれっ？ 進藤さん？」

『先輩。私はな……………』

声のトーンが著しく変わった。

『最初はな、今日の遊園地は行くのが少し嫌だったんだ。でも、『絶対』に行けないルナの代わりに仕方なく行ったんだ。遊園地なんて行ったこと無かったからな、不安だったんだ』

語り出す進藤さん。俺は呆気に取られながらも聞き入ってしまう。

『始めはただの暇つぶしだった。…………けど先輩、なんというか、えー…………楽しかったぞ？ そう、私の想像以上に楽しかった。たぶん

先輩のお陰だろうと思う。ついさっきまでだって巴に自慢していたところなんだ』

嘘じゃなかった。

『だから先輩……今日はありがとう……。本当は夕方に言おうと思っていたんだがな』

「……………」

いつもと違う進藤さん。

『……話はそれだけ。おやすみだ。先輩』

「……うん……おやすみ」

ツーツー

嘘じゃなかった。信じられない進藤さんは本当だった。

電気を点けていない黒い部屋で膝の上の携帯を見つめる。

外の雨音が激しくなった事に気付いた。バタバタと雨戸を揺らす風が外の風雨の激しさを物語っている。

ピピッピピッ

膝の上の携帯が再び俺を呼び始める。測ったように。

新着メールあり 3件

「……………」

瞬と渉と海老原さんだった。

他愛の無い内容。おやすみ。お疲れ様。渉に限っては文句だった。

もう夜も更けるすっかり遅い時間。きつと寝る前に送ってくれたメールだろう。

嬉しさで、いや、最早そついうものを超越した優しさで包まれながら思う。

自然と思い浮かべる。

「……………」刹那

ピピッピピッ

無意識に呼んでしまった俺の呼び掛けに応えるように俺を呼ぶ携帯。

左手でメールを開く。

from 佐山刹那

sub

おやすみ

「……はは……素っ気ないなあ……」

黒い部屋に吸い込まれる俺の独り言。すぐに雨音にかき消されてしまう。

左手に治まる小さな携帯電話。

黒い部屋にぼんやり映し出された他愛の無い文章。

いつかの大至急メールに続く2回目のメール。改行の必要すらない短文メール。

「……くくくっ」

込み上げる。

「くくっ……くははっ！」

止まらない。

「くああーっはっはっ！ はははっ……」

感情が溢れ出る。

黒い部屋に俺の馬鹿な咆哮が木霊する。

俺の弱さが露呈する。

「……くく……うっ……」

込み上げる。

「……うううう……！くううう……ふっ……うう……！」

止まらない。

「……ふっうう……うう……うあああああああ……！」

感情が溢れ出る。

何も無い部屋のと真ん中で蹲る俺が叫ぶ。

自分で課せた戒めも。自分の信じた信念も。忘れられない約束も。失った大切な人達も。

みんな真っ白だった。

「……遥……遥あ！俺……！俺は……！もう限界なんだよお
おっ……！」

雨音にかき消された俺の叫びは黒に吸い込まれていった。

最高の日曜日が明けた夜。

鳴り続く雨音は朝方まで続いていた。

俺が辿って来た道がある。

俺が出会った人達がいる。

家族。友達。先輩。後輩。先生。親しい人。触れ合った人。言葉
を交した人。立ち止まった人。すれ違った人。

一緒にいた人。再会した人。

失った人。

俺が辿り行く道がある。

そこに見えるもの。

もうすぐ12月。

冷たい潮風に乗って遠くから波の音が聞こえる。足元の至る所には水溜まり。映し出された太陽がそれを避けながら歩く俺を照らす。見上げれば青。眩しい位に輝く青。足元から照り返す光よりも、顔を出して間もない光よりも眩しい青。

雨は上がっていた。

緩やかな坂道。始業時間の一時間前。俺はゆっくり、ゆっくりと歩く。

部活へと急いでいるのか駆け上がって行く生徒達が俺を追い抜いて行く。急ぎ行く彼、彼女達の向かう場所には待っている人がいるのだろうか。先生？ 友達？ 先輩や後輩達だろうか？

「……………」

ポケットの中の携帯を握り締める。無意識に浮かび上がる。僅かな時間に触れ合った出来事が揺らめく。おぼろげだった思い出が揺らめく。忘れる事が出来ない思い出が霞んで行く。

気が付くと自分の足が逸っていた。止まらない。

時計棟を視界に捉え、自然と息を吐く。自分でもわかる程の大きな安堵の息を吐く。

「……………十八……………」

小さな声が掛かる。

「……………」

俺は息を吐く。先ほどよりも大きな安堵の息を吐く。

「……おはよ………」

言葉は続く。

突然の声ではあったが、驚く事は無い。声に優しい気遣いが含まれていたから。とても臆病だけど俺を気遣ってくれていると知っていたからだ。

他愛の無い朝の挨拶。それが俺の深いところに染み込んで行く。

「……おはよう。海老原さん」

自分の出来る限りの優しい声で挨拶を返す。自分の出来る限りの自然な笑顔を添える。

「……十八……」ご機嫌………？」

「えっ？」

両手に数冊の本を抱えた海老原さん。首を傾げながら訊いて来る。

「ご機嫌？」

「……すごく……嬉しそう……」

首を傾げたまま言う。

どうやら俺の自然な笑顔はかなり不自然だったらしい。

「いや。えー……、朝一から海老原さんに会えてさ、嬉しくてさ……」

ん？ 俺って今なんだった？

自分で言っておいて自分にツツコミたくなる。本心からの言葉だが、あまりにストレートに言い過ぎじゃなかったか？

「……………」

本を抱えたまま固まっている海老原さん。俺のバカな発言でドン引きさせてしまったか？

「あ、あの……？ 海老原さん？ とりあえずその本、持つね？」

海老原さんの持つ数冊の本をひょいっと受け取る。

「……………」

本を持っていた体制のまま膠着を続ける海老原さん。

「……………あの？」

「！」

少し心配になって顔を覗き込もうとするとバツと同じ体制で後退する海老原さん。ってちよっと傷付くってそれ。

じい〜

俺から距離を取った海老原さんがいつもの凝視で俺を見て来る。何やら両手で口許を隠す仕草をしながらなので、とてもかわいい。

「海老原さん？」

「！？」

近付こうとしたらびくつとしたように体を引いて時計棟入り口に走って行ってしまった。

「ええええええ」

本を抱えたまま啞然としてしまう俺。マズった、と思ったけど追うに追えなかった。

生徒会長室。

大分早い時間にそこに来た俺は掃除、備品整理、お茶汲みの準備を済ませて刹那を待っていた。

8時前、もうすぐ刹那が来る。ポケットの中の携帯を握る。非常

に落ち着かない、そわそわする。実は刹那より早く来たのが初めての俺は色々と構えてしまっていた。どう挨拶しようとか。勝手に備品整理すんなどか言われたらどうしようとか。かなりテンパっていた。

「あなた……何やってるの？」

何って落ち着かないんだよつ。落ち着かなくて落ち着かないんだよつ。そうだ、事務室にいる海老原さんに来てもらおうか？ 二人で刹那を迎えようか？ いや、決して刹那に会うのに緊張している訳ではない。ただ、なんつうのか昨日の盛り上がった俺の行動を思い返すと不安っていうか、怖いっていうか。

「ちよつと！？ 十八！」

「えっ！？」

突然の大声に反応すると訝しげな表情の刹那が……。

「って、せつにゃんっ！！」

「せつにゃん言うな！」

ビシッと喉元に抜手でツッコまれる。当然『ぐえっ』ってなる。

「あっ！ ごめん、十八っ」

咄嗟に痛がる俺を気遣うせつにゃん、いや刹那。……って刹那？ 近くない？ 喉を抑えて固まる俺の目の前に俺を不安そうに窺う刹那。これは本当に『目の前』という意味、俺と刹那との距離は1

0センチ無い。遊園地の時の距離よりも全然近い。

「せ、せ、刹那……大丈夫やから……」

近すぎる刹那を直視できない俺は視線を逸らす。顔が熱い。かなり紅くなっているに違いない。

「あ……」

俺の行動を見て刹那も自分の状況に気付いたのか、視線を逸らして俺から離れる。

「……………」

無言。沈黙。

いやいやいやいや！！ 冷静になれよ俺！ 勘違いするな！

「おちゃ、おちゃ、お茶あ淹れて来るだよ」

上手い口実を見つけたので慌てて立ち上がると逃げるように会長室を出る。

「十八」

と、部屋を出ようとすると声が掛かる。

「な、なに……？」

ドアに手を掛けた体制で聞き返すがへタレなので振り返れない。

「……おはよう。十八」

背後から続く刹那の言葉。おはよう。朝の挨拶。一日の始まりの言葉。さっきまで俺が勝手に勘ぐっていた不安要素。

俺だけに向けられた言葉。

俺は振り返ると刹那と視線を戻す。

「おはよう。刹那」

交差した刹那との視線。不思議と照れくさいと感じる事は無かった。

朝の生徒会を終え、HR前の教室に入る。

???

俺の前の席の渉。俺の隣の隣の席の瞬。二人とも遅刻しないで来ているようだが……。

「おはよう、阿部さん。ねえ、どうしてコイツらって寝てんの？」

そう。瞬と渉は自分の机に突っ伏して爆睡していた。瞬はともかく渉が朝一からこんな状態なのは珍しい。

自分の席である俺と瞬の間の席に着いて携帯をいじくっていた阿部さんに訊いてみる事にした。

「おはよお、塩田君。なんかねえ、瞬君が言うにはねえ、夜中まで電話で山崎君に文句を言われてたらしいよお。文句ってなんの文句なのかなあ？」

「ふーん。文句ね」

思いつ切り心当たりがある。瞬……すまん。

「まあいいか。ところでさあ、今日からテスト準備期間だよねえ……やだよねえ」

「えっ？ ああ、そうだね」

瞬達の話題をあっさり終了させた阿部さん。新しい話題を振ってくる。

阿部さんの言う通り、今日から期末テストに向けて二週間の準備期間に入る。即ち二週間後の今日から二学期末考査が始まる。曲がりなりに進学校を謳うクズ校は二週間も前から一部を除いた部活動も活動禁止になる程の徹底振りなのである。

「あたし中間で赤点あったから期末は頑張らないとヤバイよお」

ガクーツと机に突っ伏しながらぼやく阿部さん。元気系の阿部さんは勉強があまり得意ではないみたいだ。

何やら突っ伏した三人に囲まれながら考える。

二学期末考査準備期間。生徒会の活動も休止してしまうのだろうか……テスト自体は少しも嫌ではないが、心の中にもやもやと不安が湧き出していた。

昼休み。

ぶるるるる

昼休み開始のチャイムと同時にポケットの中の携帯がブルツた。

着信 橘巴

「やっぱりお前なのね……」

思わずツツコんでしまいながら通話ボタンを押す。

「第一学食だかな！ 急いで来いよな！」

ツーツー

「……………」

まあ、とりあえず急いじつ。

「あれっ？ シオつてば、どこに行くのっ？」

くっ………渉。バレる前に教室を出てしまおうとしたが見付かっ
てしまった。

いつもなら俺と瞬と渉の三人はだいたい昼休みの行動を共にして
いる。渉がこう聞いて来るのも仕方ない。しかしこういう時の渉は
何故か鋭い、下手な言い訳をしてもねちねちしつこそうだ。

どうする？

- 1 たたかう
- 2 にげる
- 3 なかまをよぶ

「瞬っ！ 何も聞かずに渉をどうにかしておいてくれっ！」

速攻で3を選択する俺。

「………なんだか知らんが了解だ！ 十八！」

午前中の授業を全て寝て過ごした瞬。昼休みが始まっても机に突
つ伏した体制で寝ていた。だが俺の声を聞いた瞬間、ガバツと起き
上がる。

「えっ？ ちょっとちょっとシオっ？」

「ついでに学食にも来させないでくれっ！」

「任せろっ!!」

「意味わかんねえってばよおっ!!」

そして学食到着。

とりあえず速攻でサンドイッチとコーヒー牛乳を買った俺はキヨロキヨロと学食を見渡す。しかし昼休み開始直後のくせに学食は既に超満員で溢れ返っていた。とてもじゃないが簡単に見つける事は出来そうに無い。電話を……。

「せくんぱいつ!!」

ムギユウツ

「……は?」

ぼろっつと学食を見渡す俺の右腕がとてつもなくやわっこい感触で包まれる。

「こんちわです!」

「……………」

はい、右腕に核が投下されました。

「にゃふふふふっ! るるるるななな」

テンパって口が回りません。

「こつちです！ せんばい！」

壊滅的なほどに紅潮している俺を引つ張って行くルナちゃん。超満員で溢れ返る学食中の生徒の視線が俺に集中放火。

「連れて来たよ」

なんて言いながら俺を引つ張り続けるルナちゃんの向こうには第一学食のVIP席と名高い窓際のテーブル。そこに座る橘と進藤さんが居た。

「ちつ。バカ丸出しの変態面で登場すんなよな。先輩」

呆れたような表情で俺を見やる橘。イラッと来るが今の俺の状態を見れば言われても仕方ない。

「……………」

うう……………進藤さん。今まで通りの鋭い視線……………昨日とのギャップからなのか怖い。

「ルナ達の四時間目は体育だったです。クラスみんなにお願いして片付けの途中で抜けさせてもらっただです」

ルナちゃんが橘の隣のイスに座りながら言う。

「だからこんなVIP席をゲット出来たんだね」

「まあそういう事だ。先輩。とにかく座ったらどうだ？」

白メガネモードを解除した進藤さん。薄く微笑みながらそう言う
と自分の隣のイスを引く。

「……うん」

ギャップ？ ついさっきの自分のバカな考えを激しく後悔した。
当然、俺の心が暖まったのは言う迄も無い。

「じゃあ先輩。昨日の先輩の恥ずかしい話を全部暴露してもらおう
か」

俺が席に座った途端、何やら不機嫌そうな橘が言う。

「はあ？」

この子はいきなり何を言い出しやがる。

「くっくっく、先輩。違うんだ。昨日私がそういう風に話してしま
ったからなんだ。すまないな」

隣の進藤さんが言う。

「??？」

「『行けなかった』二人に昨日の話をしてあげたいんだ。この配置
で座ったのもその為だぞ？」

にこやかに言う進藤さん。

俺はハツとした。今進藤さんが言った『行けなかった』。昨日進藤さんが言った『絶対に行けない』。瞬の言っていた毬谷家の話。

正面のルナちゃん。見て取れる程に期待の籠った表情で俺を見つめいる。母親におねだりをする小さな子供のように……。橘もいつも通りに見えるが俺の話を聴く気は満々だ。

彼女達の実際の事情がどうかなんか俺にはわからないし聞くことも思わない。

でも、

「あんまり笑っちゃ駄目だよ……?」

昨日の俺が感じた優しさを少しでも聞いてほしかった。伝えたかった。

「はいっ!!」

俺の声に元気に返事をしてくれるルナちゃん。ルナちゃんに釣られてか橘の表情も綻んでいた。

いただきます。で始まった俺と進藤さんの他愛の無い話。

進藤さんにいじられて、橘に大爆笑されて、ルナちゃんにもやっぱり笑われてしまったけど……。

嬉しかった……。

自分の現実が歪んでしまったのはわかってる。

彼女達に追い付いてはいけないのもわかってる。

でも自分の想いを否定しなくなかった。

妄想じゃない。

幻想でもない。

たった一欠片の現実でいい。

彼女達が分けてくれるたった一欠片の優しさでいい。

俺は思った。

放課後。瞬と二人で時計棟に向かう。

「今日からテスト準備期間だけどさ、執行部も活動禁止になるの？」

執行部も活動禁止になるのではないか。そう思って朝から不安に駆られていた俺。刹那に訊こうとも思っていたが瞬に訊いてみた。

「あー、執行部は活動休止しないよ。というかテスト期間中にも仕事はある」

「そっか」

よかった。胸につつかえていた物が取れたみたいにスッキリした。

「なんだよ、十八。ニヤニヤして……。いや、待てよ……。そっか！……お前、さては！」

ホッと胸を撫で下ろした俺を見て、何やら盛り上がり出す瞬君。

「さてはって？」

瞬はたまにこうして意味不明になる。俺も人のこと言えないけど。

「お前、観覧車の中で刹那とどうなった！？ いや、刹那はどうだった!？」

くわつと目を見開いて詰め寄って来る瞬。何を勘違いしてるのか
すんごい興奮状態だよ。どうなった？ どうだった？

「いや、刹那は優しかったよ」

「んなあつ！！ お前つ急展開すぎだろおつ！ っていうか優
しかったって、十八がリードしなくちゃ駄目だろおつ！」

何が？

「いやあ……俺とした事が何やらドキドキしまつじゃねえか……。
自分の姉貴が身近なヤツとなんてよ……。深いぜ、ディープだぜ、
15禁突入だぜ」

何故かほんのり顔を赤らめて意味不明発言を連発する瞬。

「えーと、瞬？ 悪いけど瞬の考えてるような事は一個も無いよ？」

瞬の考えてる事はわかるが、目の前でこうまで盛り上がられると
逆に冷静になれる。

「……むう、つまらんなあ……。ちょっとは焦ってくれてもいいじ
ゃんかよお」

俺が冷静な返しをした途端に口を尖んがらせて顔をしかめる瞬。
そんなこつたるうと思っていたが、やっぱり俺を焦らせようとから
かっていたらしい。

「まあ俺が手を貸さなくても順調に進展しているみたいじゃないか」

変なノリを解除した瞬。いつも通りの口調で言う。

「進展してるのかどうかはわからないけど、ある程度は普通に話せるようになって来たよ」

それにその『普通』は瞬のお節介のお陰に決まってる。

「……そうか。えー……どうだ？ 刹那と一緒にいれそうか？」

「……………」

たくさん解釈で捉える事が出来そうな言葉。

いつかの質問と重なる言葉。

あの時は『生徒会はどうだ？』と、聞いてくれた。俺がらしくない期待を描き始めたあの時。……本当に俺の親友はこういう時だけわかりやすい。そして、どうしようも無い位にお節介だ……。

「ああ、大丈夫。お前がいる限り大丈夫だよ」

俺は知ってる。明日への期待がどれだけ馬鹿げているか。どれだけつらい事なのか……。

瞬は変わり始めた俺を心から心配してくれているのだろう。だから隣にいてくれる。言葉を返せば笑ってくれる。

「そうか……まあいいけどな。とにかく、多少の制限はあるが執行部はいつも通りだ。安心して刹那にアタックしろ」

にやはは笑いでそう言つと目の前の扉に手を掛ける瞬。

瞬が手を掛けた扉は会長室の扉。瞬と喋りながら歩いていたらいつの間にか会長室に着いていたみたいだ。

ノックの後、扉を開ける瞬。同時に俺の暖かい感情が強くなるうとする。

「 十八つ！！ ちよつと来なさい！！ 」

「 えええええつ！！ 」

扉が開き切っていない内に部屋の中から怒声が響く。刹那の声である。ほわりと拡がろうとしていた暖かい感情が行き場を失つたのか変な声を上げてしまった。

「 な、なんだなんだ？ 刹那。どうしたんだ？ 」

俺の前に立つ瞬も驚いた様子で中を覗き込んでいる。

「 うっさいわね！ ほらっ！ いいから机の前に立ちなさい！！ 」

「 わ、わかつたよ 」

尚も続く刹那の大声に俺は慌てて中に入る。何か知らんけど怖い。とうか会長室全体が息苦しい位の圧迫感で包まれてる気がする。恐る恐る机の前に立って刹那の方を見ると明らかに憤慨している刹那に睨まれる。

なんで？

「あなたにはちょっとがっかりしたわ」

怒りの表情もそのままにそう言うと大きなため息を吐く刹那。

「な、何が、かな？」

刹那の怒ってる理由が全くわからない俺は恐る恐るだが訊く。かなりビビってる。

「これは！ どういう！ 事なの！ 十八！」

バンバンと机を叩きながら言う。っていうか怒鳴る。刹那の示した方を見てみると数枚のコピー用紙。既にびっしり印刷されてるそれを取ってみる。

2年F組、塩田十八

二学期中間考査結果

現国	65点
英語	52点
数学	74点
化学	66点
e t c	……

などなど、その他の教科もどれを見ても平均点よりちょっと上くらいの数。

総合平均点 68点

b y 徳川志乃

……徳川先生、ひどいや。

まあ、勝手に公開された俺のテスト結果だが、別に悪くは無い。むしろ全教科を平均点オーバーしている訳だからいい位なんじゃないか？

「俺の中間の結果みただけど、これがどうかしたの？」

「どうもこうも無いわよ！ あなたがこんなしょっぱい点数取ってたなんてがっかりもがっかりよっ！ このゾウリムシッ！」

単細胞生物？

「なっ……そんなに駄目なのかよ？」

どうやら俺のテスト結果が気に入らないらしい刹那。でも赤点を取っている訳じゃないんだから、何もそこまでって感じである。

「駄目に決まってるでしょう！ このクロレラッ！」

単細胞植物だ！

「いいかしら！？ 私達生徒会執行部はね。生徒達の代表なの！ お手本なの！ そのお手本がそこら辺の生徒とどっこいの成績じゃ困るのよー！」

朝見た優しい雰囲気刹那の面影は欠片も無い位におつかない刹那。というか凜々しかった会長の面影もさっぱりだ。

「そ、そんな事言われたって……どうしろってのさ？」

完全にビビってる俺。ヘタレ全開で言う。

「だから決まってるでしょう！ 勉強するのよ！ べ、ん、きよ、うっ！ 明日からテスト終了までバイト禁止よ！」

「 なっ！ そんなの無理に決まってるだろ！」

突然の刹那の発言に勢い良く反論する俺。

「これは決定事項です。拒否は許されません。生徒会が終わったら一緒にleafに行くわよ！」

「ちよちよちよっど！？ なんでさー！」

「私がお店に直談判してあげるわっ！」

をいいい！ とツッコミたいが刹那のあまりの怒濤の勢いにどうにも出来ない。

何か瞬は終始『うんうん』ってにこやかに見守ってるだけだし。

そして。

レストラン&ダイニングバーleaf

「お、おはようございます……」

いつも通りにバイトがあった俺はいつも通りにキッチン直通の勝手口から出勤する。

「ああ。十八君。おはよ……?」

「おいっす。塩田あ……って、あれっ?」

店長と永島さんがいつものように挨拶が出来なかったのも仕方ないだろう。

「こんばんは。失礼します。初めまして。昨日はどうも」

仏頂面の刹那が一緒だからです。っていうか、もうちょっと普通に挨拶しようよお。

「あ、ああ。ええー……、確か刹那ちゃんだったよなあ?」

遊園地で一度会っている永島さん。見るからに困った様子である。

「はい、どうも。今日は店長さんをお願いがあつて参りました」

会長室の時の勢いを残した刹那。何だか強気だよう。

「えっ、俺にかい?」

当然の反応だが、驚く店長。

既に諦めモードの俺は苦笑いで傍観中。永島さんが『どういう事
だあ？ この野郎』みたいな目配せを送って来るが『俺が聞きたい
位です』って視線を返すしか無い。実際本当に誰か教えてほしい。

しばらくして。

「うん。いいよ」

笑顔の店長が言う。

「ちょっとちょっと！ 店長おっ!?!?」

店長はあっさり刹那の『テスト終了までバイトしない』を了承し
てしまった。

「十八君の成績やテストの点がこのバイトのせいなら俺も時貞さん
や悠しゆうに申し訳わけないからね」

時貞は俺のじいちゃん。悠は俺の父さんの名前。店長は俺の父さ
んと親友だった。

「で、でもディナータイムに一人欠けるのはつらくないですか?」

こんなにあっさり了承されるとは思っていなかったなので、半ば必

死に追いつがる俺。

「大丈夫、大丈夫。その分は永島君に頑張ってもらおうから」

「なんですとおー！！」

店長の楽観的なプランにかつたるそうに傍観していた永島さんが素頓狂な声を上げる。

「ありがとうございます。店長さん。永島さん」

全く衰えない勢いの刹那はさも当然とでも言わんばかりに言う。

「あ、いやあ……。別にいいけどよお……」

うう……。永島さん。申し訳ないっす。

「いい彼女さんじゃないか。十八君」

にこやかに笑う店長が妙な事を言う。

「それはありません。出来の悪い役員を持った生徒会長の役割を全うしているだけです」

不愉快を露にしたような低い声で言わんといて。せめて笑うとい

「幼馴染みから絶賛格下げ中だなあ。塩田あ」

永島さんも流して下さい。

「じ、じゃあ今日のところは仕事してもらっけど明日からテストが終わるまで来なくていいよ。十八君」

「そんな……店長……」

「はっ！ 最低でも平均点を90まで上げてもらっわよ！ 十八！」

ひいひい！ そのしてやったりな表情怖いよ！

刹那はやり終えた感に満足そうにさっさと帰って行った。

その後。恒例のアナログ皿洗い中。

「さつきよお、あの刹那ちゃんが言ってたけどよお。オメエ、役員うんぬんって何だぁ？」

皿洗いをしながら永島さんが訊いて来る。

「ああ。俺ってこないだ生徒会執行部に入ったんですよ」

パリン

「……はぁ？」

「えっ？」

「オメエが……生徒会？」

皿洗いの手を止めた永島さん。じとじとした目で見ながら訊いて来る。つていつか割れたよね？

「ま、まあ……」

肯定してみる。

「ああっ？　なんで？」

今度はすごい嫌そうな顔で訊いて来る。

「いや、なんでって言われても……」

「ぷっ、ははははははは！！　どうせ雑用とかかあ？　オメエが生徒会とか何よ！　笑えるぜえ〜！」

今度はすごい大爆笑された。まあ実際雑用だけどさ……。

何か悲しい……。

しばらくバイトに来ない俺への腹癒せだろうか……その後も永島さんに散々いじめられた。

そんな訳で今日からテスト終了までの二週間。勉強漬けの毎日になりそうである。

テスト準備期間二日目。俺がバイト禁止になって二日目の放課後。準備期間の影響をあまり受けたくない俺達生徒会執行部はいつものように時計棟事務室で生徒会活動をしていた。

「……で、今日から俺ん家で勉強会って訳か」

活動といっても資料整理メインの単純作業ばかり。みんなで雑談しながらだった。

「うう……決定事項らしい。刹那がウチでやるうって」

刹那の独断で進む俺のテスト前スケジュール。瞬に愚痴をこぼしたまではよかったが、自分でも言った通りに『決定事項』。どうにもならなそう。

ちなみに夜のバイトは店長公認のテスト前休みになったが、朝の新聞配達の方は勘弁してもらった。

「お母さん達に十八の事を話したら連れて来なさいって言うからね。仕方なくよ、仕方なく」

仕方なくとか言いながら刹那はやたらとノリノリだし。

「だっせえな、先輩。赤点でもあったのかよ？」

事務室では一番遠い席に座る橘がわざわざ絡んで来やがる。

もちろんカチーンと来た。

「赤点なんかあるわけ無いよ。俺は常にほぼ平均点をキープしているんだぞ。そういうお前はどつなんだよ？ 他のみんなが凄いのは知ってるけど、勉強面のお前の話は聞かなかつたぞ」

執行部に入った時に瞬がみんなの事を話してくれた。その時に瞬を含めたみんなの超人振りに驚いたが、確か橘の名前は出なかつた筈だ。

「あ、あたしだって赤点なんか取らねえよ！ それにあたしはいいんだよつ、あたしはつ」

少しムツとしたような表情で言い返してくる橘。決していい点ではないような口振りだが、あたしはいい？ どのような事だ？

「トモちゃんは運動部の助っ人王なのです」

橘の隣の席に座るルナちゃんがニコニコと言う。

「助っ人王？」

「橘はテストの点数は並以下だけど、運動部から練習試合の度に呼ばれる程の助っ人のカリスマなんだ。だから刹那の言う『生徒のお手本』というのはある意味通っている訳だな」

俺の聞き返しに瞬が補足する。

「なるほど……」

勉強面では駄目でも運動面で貢献している訳か。

橋を見てみると『フフン』といった感じで誇らしげだった。

「まあいいや。執行部の中で一番勉強が出来ないのは俺じゃないらしいし……」

悔しいから悪あがきしておく。

「そうそう。こん中じゃあたしが一番の出来損ないなわけ……？あれっ？」

フフンのままで俺の悪あがきに乗ってくる橋だが、途中で気付いたのか頭の上で疑問符をふよふよさせて、

「なんだとお！先輩みてえに可も無く不可も無くみてえな一般人に言われたくねえんだよっ！」

ワンテンポ遅れて激昂する橋。やっぱおもしろいなあ。

「とにかく！今日は私の家で勉強会をやるわ！もちろん十八は強請として、他の参加者は私と瞬。……一応、聞くけど誰か来たい人は？」

激昂する橋を遮るように刹那が話を戻す。

「……ルナは……ちょっと無理そうです……ごめんなさいです……」

最初に答えたのはルナちゃん。さつきまで元気に笑っていたのに消え入りそうな声だった。

「いいのよ、ルナ。念の為聞いたただだからね？　橋と進藤は？」

ルナちゃんを気遣うように優しく言う刹那。

「私達も参加は出来ません。会長」

刹那の問い掛けに当然のように答える進藤さん。

そのやり取りを見て思う。毬谷家。瞬が言っていた家庭の事情はやはり事実みたいだ。俯いてしまったルナちゃんを気遣うようにしている橋と進藤さん。お金持ちの事情はわからないが三人があまりにも窮屈そうに思えてならなかった。

「曜子は？」

刹那のお誘いは続いていた。一人黙々と資料整理を続ける海老原さん。

「……いいの……？」

ピタッと手を止めた海老原さん。不安そうに顔を上げると呟く。

「もちろんよ。どっかの出来損ないの更生が目的の勉強会で良かったらけどね。曜子が来てくれると助かるわ」

出来損ないと言う言葉に思わず橋の方を向いてしまう俺。橋も同じだったのか俺と目が合う。

なんだよ？

視線で訊いてくる橘。

いや。すまん。

視線で言葉を返す。

橘。よくわからんが超人ばかりだと思っていた執行部にお前がいてくれて助かった。ありがとう。

はあ？ よくわかんねえけどむかつくなあ？

いや、何でも無いぞ？

俺の視線に首を傾げる橘だが、どうやら伝わったらしい。

「じゃ、参加するのは私達に曜子を含めた四人ね。一応恒例にするつもりだからルナ達も良かったら言ってちょうだい」

橘とのアイコンタクトに夢中になってしていると刹那の話は終わってしまったらしい。というか恒例？ 毎日勉強会をやるのか？

「……十八……いいのか？」

「えっ？」

隣に座る瞬の声。

「……家で、いいのか？」

顔をしかめた瞬。気遣うように、いや、何処かばつが悪そうに言う。

家。瞬と刹那の家。

刹那がウチでやろう。なんて言い出した時には本当に驚いた。正直、迷った。

隔たっていた時間。誤魔化し続けていた俺。

簡単に答えられる筈なかった。

でも、

「……いいんだ。瞬」

俺は嬉しかったんだ。……ただ刹那が気兼ねなく言ってくれた言葉が……嬉しかったんだ。

「そうか……ならいい」

「うん……」

「なに？ どうしたの？ 二人でひそひそして」

正面の刹那が訝しげに言う。

「なんでもないよ」

資料整理を終え、いつもより早い時間に解散となった生徒会。一度家に帰ってから刹那の家で集合という事になった。

青が赤に変わり。赤が黒に変わる時。昼と夜の境界線。

逢魔ヶ時。^{おっまがとき}たそがれ時。大禍時とも書くという。読んで字の如く、厄災の起こる時。

長い影法師が一つ。

俺は立ち尽くしていた。

古い住宅が並ぶ北口でも比較的新しい造りの閑静な住宅街。その住宅街に並ぶ一つの一軒家。

俺はその家の前で立ち尽くしていた。

隣の家に視線を移す。

『佐山』、そう書かれた表札の家がある。

そして目の前の家の表札、知らない名字の表札。

そう、この知らない表札の家は俺が五年前まで住んでいた家。

正確には違う、今は立て替えられて違う家が建っている。

違う家族が住んでいる。

ここに来るのは五年振りだった。瞬とはずっと友達だけど、この五年間、ここには近付いていない。新聞配達のコースからも外してもらっている。

この家が視界に入る前に刹那の家に入ってしまおうとしたが、久し振り過ぎて上手く出来なかった。

「……………」

息苦しい。目眩がする。

…………駄目だ。今日は帰ろう。後で瞬に電話して謝ろう。瞬はわかってくれるから…………。

「…………どう…………したの…………？」

背後からの声。海老原さん…………。

「…………行かないの…………？」

振り返ると制服のままの海老原さんが首を傾げていた。

「……いや、行くところか？」

仕方ない……。

ピンポンと海老原さんがインターホンを押す。

『はい、曜子ね？ 開けるから入って来て？』

インターホン越しの刹那の声。玄関へと入って行く海老原さんに隠れるようにして行く。

五年前は毎日訪ねた筈の玄関。違う。初めて来たような感覚だった。思い出せなかった。

「あら、十八も一緒だったの？」

玄関先まで出迎えてくれた刹那。海老原さんの後ろの俺を見て言う。

「……ああ、そこで会ってさ」

上擦った俺の声。俺は平静を装うのが下手くそみたいだ。

「なに、どうしたの？ 顔真っ青よ？」

そう言われてしまっても仕方ないだろう。自分でも顔に出ているのがわかる。

「いや、これから勉強会だと思つとさ。気が滅入っちゃつてさ」

バカを言う。嫌いな嘘まで吐いて……。

「もう、何よそれ。ほら、いいから上がつて？ 私の部屋でやるわよ」

良かった。俺の今までのヘタレが効を奏したのか納得してくれたみたいだ。

「……十八……大丈夫……？」

静かに見守っていた海老原さんが呟く。俺の心の中を察してくれたのか、単に俺の体調を気遣ってくれているのか。まあ当然かもしれないな。

「……大丈夫。ほら、お邪魔しよう」

「ごめん、海老原さん。」

「……うん……」

海老原さんと一緒に上がった刹那の家。二階との吹き抜けになっている少し広めの玄関。改めて見回すと今更ながら懐かしい気持ちになった。

二階の刹那の部屋。やはり五年振りだった。

「あんまり変わってないね？」

八畳間の洋室。刹那の性格からか、あまり物を置かない地味な部屋。机とベッド。カーテンやカーペット。昔は少なかった本が増えている位で五年前とほとんど変わっていなかった。

「う、うるさいわね！ あんまりジロジロ見ないでよ！」

「あ、ごめん」

あまりに懐かしいままだったので、思わず見入ってしまった。女の子の部屋をマジマジと見渡すとか悪趣味だったか。

「とにかく始めましょう。瞬は遅くなるだろうから」

「あ、ああ」

瞬はまだ学校にいる。急遽行われる事になった中央委員会に出席する事になってしまったからである。この前に中止になった物だが、よりもよってそれは今日だった。

「まずは。十八、苦手なのは何？」

三人で部屋の中央にあるテーブルを囲むと刹那が訊いて来る。

「うーん……どの教科っていうか、記号とかが苦手かな？あとは、

しいて言うなら英語かな。英単語とか忘れる」

見栄を張らないで正直に言ってみる。

「何よ、やたらとアバウトね。まあいいわ、じゃあ英語からいつてみましょうか」

刹那がそう言うと勉強会が始まった。

刹那が教えてくれて、海老原さんは俺の為に小テストを作ってくれている。

あまりに自分の意志とは関係なしに進む成り行きに俺はそこが幸せ空間である事に気付かない。あまりに待遇が良過ぎなんじゃないかと気付かないで必死にペンを動かした。

「……なんだ。けっこう出来るじゃない」

幾つかの苦手教科の小テストを終えると刹那が褒めてくれた。

「流石に授業は聞いているからね」

「……テスト範囲……要点は……押さえて……あるの……」

海老原さんが何故か嬉しそうに言う。

「ふーん……じゃあ次は現国よ」

海老原さんに対して何故か不満そうな刹那。

「ところでさ、刹那。おばさん達は？」

刹那達の両親。仕事に行っている筈だ。

「お母さんはもうすぐ帰って来るわ。ほら、いいから教科書を開きなさい」

「あ、ああ……」

なんでムスツとしてんねん。

「やっぱり……あなた、暗記系が苦手なのね？」

9教科の小テストを終えると刹那がため息混じりに呟く。

「そうかな？」

正直、自覚がない。

「つまりは勉強時間が足りていないワケね。あなた……家で勉強してる？」

「……………」

してない。

「してないのね……………」

だってバイトあるし、俺の部屋に机ないし。

「……もし……ちゃんと……勉強……したら……？」

海老原さんが訊いて来る。

「そうね。そこそこの記述問題も解ける位の応用力もあるみたいだし……………」

そう言つとチラッと俺を見る刹那。

「いや…………俺に振られても困るんだけど」

「理解力、応用力ともかなりのレベルだと思うよ。十八は」

「し、瞬」

部屋の入り口にはいつの間にか親友がいた。

「十八、遅れてすまない。刹那、十八は好きな教科なら素で90点位は行くんだ。授業聞いてるだけでな。それに十八は小学校までは

俺よりも刹那よりも勉強が出来たじゃないか。元がいいんだよ、元が」

いきなり登場した瞬間の言う通り、捻りの少ない数学なんかはそれぐらい行く。小学校の時の話も本当だ。

「「「……………」」」

瞬間の言葉に俺を含めた三人が黙り込む。ってというか何？

「決めた！ やるわよ、十八！」

「えっ？ 何を？」

突然刹那が言い出した言葉が全くわからない俺。

「勉強に決まってるでしょう！ 勉強に！ あなた次のテストでト
ップ30に入りなさい！」

は？

「いやいやいやいや！ そんなの無理に決まってるだろお！」

いきなり何を言い出すんだ！ やたらと自信に満ち溢れた刹那の勢いに焦る俺。

「大丈夫！ 私が毎日教えてあげるわ！」

「えっえっ！」

怒濤の勢いの刹那。何やら自信満々のその勢いに驚きながらも『毎日』、それに意識が集中する。

刹那と毎日。

「ははは。いいじゃないか十八。刹那がここまでやる気になるなんて珍しいぞ?」

「……刹那……テンション……上昇中……」

傍観する二人もノリノリである。

……刹那がやる気に? 頑張れば喜んでくれる?

「刹那が……いいなら……」

自分勝手な欲望が口を開く。

「もちろんよ! 頑張ろ?」

隣に座る刹那。俺の顔を嬉しそうに覗き込みながら言う。というより既に完全に密着している。

「お、お、おう!」

嬉しかった。

刹那の笑顔が嬉しかった。

俺の為に笑ってくれる刹那が嬉しかった。

浮かれていた。

嬉しくて、優しくて、懐かしくて……。

俺は既に踏み外している事に気付けなかったんだ。

そこにあつた幸せ。

当たり前のように、ごく自然に、意識なんてした事ない。誰かに言われても受け入れない。続くと信じていたから、無くなるなんて思つた事なかつたから、前触れなんて無かつたから。

幸せは気付けないから幸せなんだろう。

失つて初めて気付くものなんだろう。

『なあ。寒いし、もう眠いから明日にしようよ』

『えええ？ うう……ねえ、じゃあさ、そっちに行つてもいい？』

『えっ？ ヤダよ、もう遅いじゃないか』

『いいじゃない、私まだ眠くなくてさあ。ねっ？ お願い』

『はあ………ったく………わかつたよ。枕は持つて来てよ』

『はははっ、うん』

刹那の部屋。

『この際だから関係副詞、複合関係詞は捨てるわ。レイチエル先生の英語は難しいらしいけど、難問とされる問題の配点は低い。基本を押さえた方が点数は上がるわね』

むにむに

「なるほど、わかった」

テーブルには俺と海老原さんが向かい合うように座っている。刹那は俺の隣から俺のペンが止まる度に色々と指摘してくれる。海老原さんもテキストを開いてふむふむしているのを見ると自分の勉強をしているらしい。瞬は刹那の机に座って俺をニヤニヤと見ていた。

「ほら、また間違えた。その訳は『しない』じゃなくて『する』に限らない』でしょ？」

むにむに

「あ、うん、そっか。ありがとう」

くおお……！ 教えてくれるのは嬉しいが、さっきから刹那の

色んな所が当たってるよおお。密着し過ぎだよおお。むにむにっつてやわっこいよおお。瞬と海老原さんの視線がイタイっつてばよおお。

「ただいまー」

俺が勉強に集中できる筈ない状況に頭を沸騰寸前まで暖めていると、階下から声が聞こえた。

「お母さんだわ。十八、下に行こ」

「ああ……っつて、刹那」

待つてました、つとでも言わんばかりの勢いの刹那、嬉しそうに俺の手を引く。突然すぎて焦る間も無く引つ張られて行く俺。ニンマーっとした笑顔の瞬とぼろっとした表情の海老原さんに見送られながら引き摺られて行く。

刹那と二人で階下へ。

「おかえり。お母さん」

「おひ、おひ、お久しぶりです！」

吹き抜けの階段の下の玄関。そこに帰宅したばかりの刹那達のお母さんがいた。

刹那と瞬のお母さん。五年前に俺が退院して以来だろうか……。

でも顔はほとんど毎日見てる。実は刹那達の両親は夫婦揃って二ユースキヤスターだ。佐山直之、早苗夫妻は朝の顔だったりする。

「トヤ君……」

「……あ」

懐かしい愛称で呼んでくれたおばさん……泣いている。

「元気にしてた？ 瞬から話を聞く位で……心配で……」

そう言つとおばさんは俺の胸に顔を埋めてしまふ。俺のワイシャツにおばさんの涙が染み込んで行く。

『上手くやつてる。心配いらぬ』。佐山の家に迷惑を掛けたくなかつた俺は瞬にそう伝えるように頼んでいた。

「おじいさんも亡くなつたつて聞いて……大丈夫？ 生活は出来ている？ 寂しくない？」

震える声で言つおばさん。

……俺はバカだ。この人も……おじいさんも……俺を心配しない筈ないじゃないか。

「……はい……瞬と刹那がいますから……」

俺も泣いていた。釣られた訳ではない。おばさんの優しさが苦しいほど嬉しかった。忘れていた懐かしい優しさが暖かかった。

「……十八」

後ろにいる刹那が俺の名前を呟く。震える手で俺のワイシャツを掴む。

……刹那、ありがとう。

しばらくして刹那の部屋に戻ると勉強会再開となった。

刹那は付きつきりで勉強を教えてくれている。

「いい？ 英語はね、まずは読む事なの。テスト範囲の中の例文でも過去問の例文でも何でもいいからたくさん読むの。後は例題に沿って数をこなして行けば、点数なんて簡単に稼げるわ」

ねっ？って感じでそう言うと、例文を完璧な発音で読み上げる刹那。わざわざ読み上げる単語と訳文を指差しながら読んでくれるのでわかりやすい。苦手だった英語が少しも苦痛じゃなかった。

密着する刹那には少し困ったけど刹那が強引に進める勉強会は楽しかった。

海老原さんはいつものようにあまり喋らなかつたし、瞬のニヤニヤ笑いは気になったけど楽しかった。

いつもより優しい刹那との空間が心地よかつた。

楽しかった。

でも楽しい時間はそこまでだった。

「十八、手が止まってるわよ？」

「ああ、教科書見すぎかな？ 目が痛いよ」

苦痛ではなかった勉強。しかし酷使し過ぎた俺の右目が悲鳴を上げ始めていた。

「ちょっと換気しようか？」

「えっ!？」

優しい雰囲気のままの刹那が窓を開けようと立ち上がる。何故か瞬が驚いたような声を上げた。

刹那が窓を開けた瞬間、俺は見てはいけない物を見てしまった。

隣の家。

隣の家の壁があった。

視界にモザイクが掛かる。目に映るものがぼやけて行く、霞んで行く。頭の中の妄想が加速して行く。ある筈の無い幻想がフラッシュ

ユバックして行く。都合のいい現実が音を立てて崩れ落ちて行く。

なんだ？　なんだ？　なんだなんだなんだなんだ？　何が起きている？

「刹那！　窓を閉めろ！！」

「えっ？　十八……？」

俺を見て固まっている刹那の代わりに窓を乱暴に閉める瞬。

乱暴だなあ。そんなに急いで閉めなくても………？　って、あれっ？　なんだっけ？　どうしてみんなは俺に注目しているんだっけ？

どうしてみんなの表情がわからないんだっけ？

「……十八……！　十八……！」

海老原さん？　そんなに慌ててどうしたのさ？

「

あれっ？　喋れない？

ガチガチガチガチ

なんの音だ？　って、えっ？　これ俺じゃん！　俺の歯がガチガチいつてる音じゃん！　寒いのか？　いや、別に寒くないよな。どうして？　俺は何をやってるんだ？

「十八！ 大丈夫？ 大丈夫？ どうして？」

刹那まで。いったい何が起きているんだ？

「昔この窓を開けたら何があったよ！！ 刹那あつ！！」

怒声とも取れる瞬の大声。

それを聞いた俺の震えが止まる。

窓を開けたら何があった？

自分の状況を理解する。

俺は号泣していた。止めどなく流れる涙が頬を伝って行く。役立たずの左目からも溢れている。人前で晒してはいけない弱さを晒している。

しかし状況を理解したと同時に、繋がった。

自分の妄想と都合のいい現実が、繋がった。

刹那の部屋の窓。

開けたら俺の部屋の窓があった。

五年前までは。

「今日は解散しよう……」

瞬が言う。

「」「」「」

誰も答えない。しかし誰もがそうするべきである事をわかって
いた。

「俺は十八を送って来る。海老ちゃんも送るよ」

「……私は……大丈夫……十八を……送って、あげて……？」

「わかった。気を付けて帰ってくれ」

俺を気遣っている二人の会話をぼんやりと眺める。

「十八……行こう」

部屋を出るように促す瞬。未だ余韻を引き摺る俺の背中を押す。

「……刹那、ゴメン……」

刹那の部屋を出る前に刹那に声を掛ける。

「……………」

背中を向けて座る刹那、俯いたまま何も答えなかった。

帰り道を瞬と二人で歩く。

「母さんには上手く言っておくから」

いつにも増して俺を気遣っている瞬、言葉を選んでいるように、慎重そうに言う。

「ああ…………悪い……………」

気分は最悪だが、俺はだいぶ落ち着いて来ていた。

「十八…………俺がちゃんと見ていれば……………すまない」

申し訳なさそうに、悔しそうに言う瞬。

「……………ばか。謝るのは俺だろ？ 刹那にも悪い事、したよ……………」

親友の声を聞いて俺の心が穏やかになって行くのがわかる。

「俺は最初から不安だったんだ。十八は言わなかったけど、十八が俺達の家を避けていたのはわかってた。今日の勉強会の事を聞いた時は本当に驚いたんだぞ？」

「瞬……」

お節介なくせにどうしようもない位に優しい親友。俺は長い間コイツを苦しめていたのかもしれない。

「突然の中央委員会で遅れてさ。俺はお前がどうにかなってるんじゃないかって、すっ飛んで行ったんだ。でもお前、刹那もやたらと仲良さそうでさ、昔みたいにさ……俺も思い抜けてたんだよな……」

「……」

瞬の話す言葉に妙に納得してしまう。

「……俺も、そうだよ、瞬」

「えっ？」

「俺もさ、最初は怖かったんだ。でも……刹那の部屋があんまり変わってなくてさ。おばさんに会えて、刹那が優しくてさ……気持ち
が昔に戻ってたよ……」

そう。嫌というほど理解した筈だったのに、自分の都合のいいように勝手な妄想を現実につ張り出したんだ、俺は……。

「十八……」

自宅に着いた俺はすぐにシャワーを浴びて布団に入った。

布団に入って何時間が経ったのだろうか。時刻は日付を変える時間を過ぎて深い夜の時間へと変わっていた。

バイトをせずに帰宅した為なのか、あるいは五年振りに訪れた場所を引き摺っているからなのか、酷く落ち着かなかった。眠れなかった。悪夢を恐れてではない。自分の中に渦巻く想いが俺を現実に残める。

いや、違う。俺が気になっているのは一つ。刹那だ。

部屋を出る時に見た刹那の弱々しい背中。俺のワイシャツを掴んだ震える手。楽しそうに勉強を教えてくれた刹那の声。俺に向けられた全てが彼女の優しさに思えてならなかった。

彼女の事が頭から離れなかった。

ピリリリリッ

「！」

驚く。暗い静寂に包まれた部屋に突然鳴り響いた電子音。

時刻は深夜1時を回っていた。

着信 佐山刹那

「刹那!？」

俺は慌てて通話ボタンを押す。

「もしもし! 刹那!？」

「……………」

大急ぎで応えた俺の声への反応は無かった。

「刹那? 刹那?」

「……………」

再度呼び掛けた声にも反応は無い。

「……………」

「……………」

声を発しない刹那に倣うように俺も口を閉ざす。何も無い部屋が再び静寂に包まれる。

ふと思い出す。

まだ小学生の頃、俺がまだ刹那達の隣に住んでいた頃、俺の部屋が刹那の部屋の隣にあった頃。今思えばただの欠陥住宅、近すぎる窓の向こうに刹那の部屋があった頃。

深夜だろうと何だろうと窓を叩く音に起こされた事があった。

『……………せつちゃん……………どうしたの?』

眠いままの瞼を擦りながら渋々窓を開けた俺はそう尋ねた。いつも。いつでも。

『……………』

決まって彼女は何も言わなかった。ただ俯いていただけだった。

『……………もう、しょうがないなあ……………ほら、こっち来なよ』

親に怒られて沈んでいた時、瞬とケンカしてむくれていた時、怖い夢を見て震えていた時、寂しくて眠れなかった時。

いつも彼女は俺を呼んだ。

それは当たり前だった。

「せつちゃん。どうしたの？」

俺は言った。当たり前のように。それが今言えるたった一つの言葉のようじ。

『……………』

刹那は答えない。五年前と変わらない答えが返って来る。

俺はそれ以上何も言わなかった。電話口の向こう。刹那の俯く姿を思い描いて虚空を見つめていた。

『……………うう……………』

携帯越しに彼女の声を聞いた。彼女の弱さを初めて知った。

『……………うう……………うう……………私、無神経……………だった……………』

やっと応えてくれた刹那。でもその声は別人を思わせるほど弱々しく、痛々しかった。

「……………刹那は悪くないよ……………？」

そう、刹那は絶対に悪くない。誰がなんと言おうとそれは間違いない。刹那の優しさを間違いだなんて、俺が許さない。

『うう……………！でも……………！』

刹那……本当に嬉しい俺の幼馴染み。

「刹那……いいかい？俺は嬉しかったんだ、刹那が呼んでくれてさ、刹那が優しくてさ、刹那の部屋が変わってなくてさ、刹那のお母さんに会えてさ、刹那が毎日勉強教えてくれるって聞いてさ、刹那に毎日会えるって……思ってたさ……」

俺は納得していた。瞬の言葉と同じように、それ以上に、自分の言葉に納得していた。

「五年前に『あんな事』なくてさ、俺はまだ隣に住んでてさ、いつものように、当たり前のように、ただ俺は刹那の部屋に遊びに行ってたんだなあ……ってさ……錯覚、していたんだよ……」

『……トヤ、君……』

刹那の声が俺の間違った心を覆う。五年振りに聞くせつちゃんの声落ちた俺の心を拾い上げる。

「だから刹那？悪いのは俺なの、わかった？」

『……でも……』

「いいんだよ、せつちゃん。俺はもう大丈夫だからさ。明日からまた勉強しようよ、ねっ？」

弱々しい刹那に優しく言う。『彼女』に言うように優しく、言う。

『……トヤ君……トヤ君……トヤ君……』

それから刹那は俺を懐かしい愛称で呼ぶばかりだった。

電話を切れない俺は刹那が泣き疲れて眠るまで、ずっとそれを聞いていた……。

一睡も出来なかった俺は朝のバイトを終えると、いつも通りの時間に登校していた。

いつも通りの時間といっても今までよりは早い時間だった。この時間、一昨日と同じ時間であればだが刹那が登校して来る時間は無意識にこの時間にここにいた。

海老原さんは図書館棟だろうか、姿は見えないが時計棟の鍵は開いていた。最近知った事だが毎朝の時計棟の鍵を開けるのは海老原さんの仕事らしい。

時計棟昇降口の扉を開く。

刹那がいた。

丁度登校して来たところらしく、背中を向けて時計棟用の上靴を履いていた。

瞬間に俺の胸が高鳴った。目の前の存在が僅かに残っていた不安感を拭い去った。意志とは無関係に湧き上がる嬉しさが俺を包む。不眠からの体の気怠さすらも吹き飛んだ気がした。

「おはよう、刹那」

湧き上がる思いに任せたまま、言う。

「　っ!？」

俺の声を聞いた刹那。突然の声だったからか凄いびっくりしたよ
うな反応だった。

「……おはよう」

「えっ?」

辛うじて聞き取れる位の小さな声で挨拶を返してくれた刹那。と
思ったら、凄い勢いで奥に歩いて行ってしまふ。

「ちょ、ちよつと?　待つてよ」

こっちを向いてくれないので表情がわからないが、明らかに逃げ
るように行ってしまふ刹那。なんで?　って感じで慌てて追い掛ける
俺。

「ついて来ないでよっ」

早歩きでずんずん行く刹那。それをちよつと必死に追い掛ける俺。

「なんでだよ?　俺って何かやったかよ」

心当たりといえれば昨日の一件。何かやったといえればやったが、深
夜に交したあの電話の後にそんな行動を取られても正直困る。

「別になんでもないわよ!　ああ……!　軽率だったわ軽率だった

わ軽率だったわ……！」

ぶつぶつ言いながら加速する刹那。

意味わからん。

……と、その途中で本を抱えた海老原さんを発見した。

「あっ、海老原さん。おはよう」

急ブレーキで立ち止まって挨拶をする。

「……おは、よ……」

じい〜

さあ早速とばかりに俺を凝視しながら言う海老原さん。俺を気遣うような不安そうな表情だった。

「……十八……大丈夫……なの……？」

じい〜

そうか……海老原さんは俺を馬鹿な醜態を晒した時までしか知らないんだ。

「……い、や……昨日はごめん……ちょっと懐かしくてさ。感極まったってヤツだったただだからさ、もう、大丈夫だから……」

何についてなのか言わない。大丈夫という漠然とした言葉を使う。

取り繕った言葉。上手く出来る筈ない作り笑いで視線を合わす。

海老原さんのしてくれた気遣いにそんな言葉を返した自分に心底腹が立った。

「……………」

俺の取り繕った言葉に対して海老原さんは何も言わない。ただ俺の顔を、いや、俺の瞳を見つめて来るだけだった。

じい〜

いつものような、少し違うような長い前髪越しの真っ直ぐな視線。

「……………それ、持つよ」

その視線に俺は堪えられなかった。卑怯な口実で合わせた視線を外す。

「ごめん……………海老原さん。」

本当に優しい海老原さんに申し訳ない気持ちで一杯だった。

……………と、自分の下衆な感情に嫌気が差して来た時。

「ちよつと十八っ！ どうして追い掛けて来ないのよ！」

！！？

はい？

突然、正に突然の大きな声に呆気に取られる俺と海老原さん。

「あの状況で諦めてどうするのよ！ 会長室に鍵まで掛けて待ってたのに！」

……えーと、廊下の奥からぶんぶんと文句を垂れ流しながら現れたのはもちろん我らが生徒会長の刹那さんです。

「い、いや、海老原さんがいたからさ」

色々と構えながら言い訳してみる。

「あら曜子、おはよう。……ほらっ！ みつともない言い訳している暇があったら、さっさとお茶を淹れて来なさいよ！ あなたの朝一番の仕事は先ずそれでしょう！」

両手を腰に当てて仁王立ちする刹那がいつ決定したのかわからない俺のダメ出しをしてくる。

「わかった、わかったから。海老原さん、この本と一緒に海老原さんの分も淹れて持って行くからね」

言いながら逃げるように給湯室に退散する俺。

逃げる理由は刹那が怒っていたからじゃない。突然で慌てた訳でもない。

自分の嬉しくてニヤけた顔が恥ずかしかったからだ。

思っていたより元気そうな刹那が嬉しくて、強引に怒る刹那が嬉しくて、それに困る自分が嬉しくて、俺達を見て不安そうな表情を和らげてくれた海老原さんが嬉しくて。

安心したからだ。

カタカタカタカタ

「……………」

カタカタカタカタ

「……………」

カタカタカタカタ

先ほどのやり取りから数分後。

刹那の指令通りにお茶を淹れて来た俺は事務室を経由して会長室に来ていた。しかし、『お待たせ ありがとうございます』からずっと無言。刹那にさっきの強引な勢いはさっぱり無い。彼女の叩くパソコンのキーボードの音だけが会長室に響いていた。

刹那。昨日の一件を引き摺っているのかいないのか、いつにも増

して不機嫌そうな仏頂面。

……でも良かった。もし俺なんかの為に罪悪感のような物を引き摺っているとしたら俺はどうしたらいいかわからなかった。昨日の電話のような事を面と向かってやれ、と言われてもたぶん無理だ。

ともかく、朝の生徒会活動といっても俺のやるような仕事は無い。お茶を淹れたらだいたい突っ立ってるだけ。今までそうであったように今日もそれは同じだった。

「なあ……」

さっきから自分の状況を整理しようと思いを巡らせているが、色々とこんがらがってさっぱりまとまらない俺の単純思考回路。そのこんがらがった色々の要因の一つである彼女に声を掛けてみた。

「なによ。疲れたなら教室行けば？」

カタカタカタカタ

……うわあ、怒ってる？ 刹那、怒ってるのかな？ 気持ちキーボードを叩く勢いが上がった気もするし。

「いや、大丈夫だけどさ。刹那……怒ってる？」

カタ……

ピタッと止まるキーボードを叩く音。

言うてから、言っちゃった、って思った。

「べ、別に怒ってないわよっ!」

えっ、なに? この反応。今みたいな聞き方したら怒られて当然
って思ってたのに。なんか自然と『ツンデレ』ってキーワードが浮
かんだぞ?

「刹那?」

「なによっ!」

カタカタカタカタ

不機嫌モードとタイピングが復活しました。

うーむ。まさか有り得ないと思うが、もしかしたらと考えると二
ヤけてしまいそうだ。……ちょっと調子に乗ってみよう。

「まだ教室には行かないよ」

「どうしてよっ!」

カタカタカタカタ

「ぎりぎりまでここにいますよ」

「だからどうしてよっ!」

カタカタカタカタ

「一緒にいたいから」

カタタタッ

「あっ！」

何やらミスってしまったらしい刹那。マジで？って思って刹那の表情を窺おうとすると、さっと紅い顔を逸らされてしまう。そう、紅い顔を逸らされたのである。

……って、いや、マジかよ？

必然的に俺も顔が紅くなる。何も言えない。刹那も何も言わない。

「……………」

しーんと静まり返る会長室。いつもは聞こえて来る筈の部活の喧騒も聞こえて来ない。嫌に静かだった。いや、静か過ぎる！

なんやねんっ！ この幸せ空間はなんやねんやっ！

「……………十八」

「えっ？」

一人盛り上がる俺に小さな声が届く。

俺は軽く驚いてしまう。静まり返っていた所で呼ばれて驚いた訳ではない。呼んでくれた刹那の声、暗く沈んだ悲しそうな声、ついさっきまでとはまるで違う暗い声、昨日の電話の声に重なってしま

う悲しい声を聞いたからだった。

幸せ空間は一瞬で消え去っていた。

「十八……私……」

俺から視線を逸らしたままの刹那。とても言い辛そうに、とても辛そうに、とても悲しそうに……俯いていた。

足元から消えていた不安が這い上がろうとしている。

つなぎ止めていた現実が足元から不安定になって行く。

いけない。この先を言わせてはいけない。俺の心がそう訴える。

「せつ」

コンコン

「……………」

突然のノックの音。それは俺の声と俺達の思考を、いや、この部屋の空間すらを中断した。

悲しそうな表情を一瞬だけ俺に向けた刹那。

「どつぞ」

『いつもの』ように凜とした声で応える。ついさっきまでいた刹那はいない。生徒会長、佐山刹那がそこにいた。

「……失礼……します……」

ノックの主はファイルの束を抱えた海老原さんだった。

「……曜子。どうしたの？」

生徒会長、佐山刹那は訊く。

「……来月の……定例説明会の案件と……目安箱の……件……まとまったの……」

胸元に抱えたファイルの束がそうなのだろう。

「そう。十八、受け取って」

凜とした声が告げる。

「わかった」

ぼおっとしたような海老原さんからファイルの束を受け取る。

「ありがとう、曜子。放課後までにディスクにまとめて発表できるようにしておくわ」

「……うん……」

そう言つと海老原さんは少し不安そうな表情で俺を一瞥してから会長室を出て行った。

「……十八。それを置いて教室に行っていていいわ……」

とても小さな刹那の声、凜とした雰囲気は消えていた。

「でも、刹那」

「お願い……」

凜とした生徒会長の雰囲気も、元気だったせつちゃんの雰囲気も、我が儘だけど優しい刹那の雰囲気も、消えていた。

机に付いた立て肘の上で組んだ両手で顔を隠す刹那。見てもらえない位に痛々しい。

「……わかった」

きつと俺がいるのは逆効果だろう。そう思って会長室を後にする。

部屋を出る前にもう一度刹那に刹那に視線を送る。

「……………」

俯く刹那を右目に焼き付ける。

会長室を出る。

静まり返る時計棟の廊下。海老原さんは教室に行ってしまったか事務室に行ってしまったかようでも右も左も誰もいない。

でも背中にある扉の向こうの刹那の存在が俺の思考を支配する。

「……………せつちゃん」

無意識に、無意味に呟く。

俺は彼女が何を言おうとしていたのか知っていた。

彼女が悲しい理由を知っていた。

全ては五年前のあの日の事に他ならない。

俺も刹那もそれを執拗に隠している。だからこそお互いの距離は開いていた。

縮まってしまった俺達。……………刹那は打ち明けようとしている。

「……………」

俺は無意識に拳を握り締めていた。右手も、役立たずの左手も、力一杯握り締めていた。溢れ出そうになるものを堪えるように、逆らうように、振り払うように、俺の精一杯の力で、心で、握り締めていた。

言わせてはいけない。

絶対に言わせてはいけない。

二度と刹那にあの表情をさせてはいけない。

遙だつてそう望む筈だ。

近づく距離とは正反対のものを見いだした俺の意志。動き出したその意志は今までの俺を否定するものに他ならない。

昨日から止まらずに流れ続ける俺の現実。

俺の過去。

刹那の現在^{いま}。

……未来^{あした}。

誰のものかもわからないこれから……。

自分の事を忘れ、『彼女』ではなく『彼女』を気に掛ける俺は…

…。

曖昧で不安定な現実に縋り付いていた……。

8時20分。予鈴が鳴る5分前の教室。

瞬と渉はまだ登校して来ていない。時計棟を後にした俺は自分の席に着いていた。

予鈴前という事で次々にクラスメイト達が登校して来る。そのクラスメイト達、軽く挨拶をくれるヤツもくれないヤツも朝から不可解そうな視線を送って来る。

当然だろう。俺が教科書を開いて勉強をしているからだ。

普通の俺であれば、瞬か渉とダべっているか、窓の外を眺めているのが普通。いくらテスト準備期間とはいえ、俺が授業以外、それも朝一から勉強をしているなんて異様だ。

「ええっ!」

ん?

「塩田君? どうしたのお? テスト前から課題出されちゃったのお?」

登校して来た阿部さんだった。課題? どうして勘違いしてるんだい? 俺が勉強とかそんなに珍しいかい?

「うおっ? 十八? 朝一から何やってんだよ!」

阿部さんの（ちよっぴり失礼な）反応に若干ショックを受けながらも説明しようと思っていると、またしても驚いたような声が聞こえた。

「やべっ、俺ってもしかして遅刻？ 授業始まつてる？」

登校して来た瞬だった。まだ予鈴前だよっ！ 阿部さんのそれと似たような反応してやがって。俺が勉強ってそんなに異常事態かい！

「おはよーっ！ ってそれ宿題？ マズいマズいつ！ 瞬っ！ 見せてよっ！」

涉。お前つてば、ナチュラルすぎ。もういいよ！ 確かに今まで俺が自発的に勉強なんかしなかったけどさ。みんなして驚きすぎだからさ。

659

勉強の理由、説明終了。

「刹那も無茶言つよねえ。塩田君」

「くっつ！ 羨ましいのか、そうじゃないのか、よくわかんないよっ！ でも刹那ちゃんの命令だったらっ！ くっつ！」

『期末テストでトップ30入りしなさい』を聞いた阿部さんと涉はあまり驚いていない。冗談や大袈裟な激励とも思っているのだろっ。ちなみに刹那が毎日教えてくれるっつのは言っていない。

「お前、マジでやってみるつもりなのか？」

瞬が言う。表情は普通だが、声の感じから真面目な問い掛けだろう。

涉達とは違って事のあらましを知っている瞬。俺が冗談なんかで時間を費やす事をする筈がないのを知っている瞬。

「ああ。頑張ってみる」

学年順位で200位を切った事が無い俺に刹那がどついた目的で言ったのだろうか。

はつきり言っただんなのどうでも良かった。

冗談でも、ほんの僅かの期待でも、無茶だろうと何だろうと、刹那の言葉に応えなかった。

だから、俺の見いだした意志の欠片を言葉にした。

「ほづ……」

???

俺の言葉を聞いた瞬が何故か驚いたような感心したような表情を呈している。

「どっしたの？」

「いや、少し十八らしくないと……いや、違うな、『十八らしい』」

なと思ったただけだ、気にしないでくれ」

嬉しそうな微笑混じりに言う瞬。

「何だよ、意味わかんないぞ？」

「だから気にするなよ。いいんだ、十八はやっぱり『その方』がいい」

「????」

親友の言ってる事がさっぱりわからない。

まあ、いいか。瞬が嬉しそうに言ってるんだからきつといい事な
んだろう。

「……ところでさあ？ みんなはどこに行っちゃったのかなあ？」

俺と瞬の会話が切れたのを見計らったように言う阿部さん。

確かに。話に夢中になっていて気付かなかったが、阿部さんの言
ったように教室には誰もいない。俺達四人以外教室は無人だった。

「一時間目が体育だからだよ！ HRも終わっちゃったよっ！」

「は？」

あっけらかんと言つてのける涉。つまり影の薄い担任のHRはと
つくに終わってて、クラスメイト達は一時間目の体育の為に着替え

に行ってしまった訳だ。もちろん呑気にくっちゃべっていた俺達は制服のままだ。

……と、そこで無情にも一限目開始のチャイムが鳴り響く。

「早く言えつてええ!!」

『えっ』ってなってる渉に瞬と二人でツッコミながらも慌てて教室を飛び出す。阿部さんはあははっって笑ってるだけだし。気付かない俺達も俺達だが、どんだけアホなんだよっ渉!

大慌てで到着した共同更衣室。

「ところで、えー……十八。お前、大丈夫なのか？」

着替えながら言う瞬。

「なにが？」

俺ではなく渉が聞き返す。茶茶を入れて来やがった。

「黙れ」

『えっ』ってなってからシユンとする渉は無視して俺と瞬は向き合う。

昨日も、今も、ずっと昔から俺を気遣ってばかりの瞬。その優しさに寄り掛かってばかりの俺。

俺は何も返した事が無い。何をどう返していいのかわからない。だからせめて言葉を返す。

「迷惑掛けたな。俺はもう大丈夫。どうしても『あれ』がついて回ろうと俺は大丈夫……」

否応にも言葉が途切れてしまう。

浮かび上がった無邪気な笑顔の女の子が俺の思考を中断する。

揺らぐ事なんて有り得ない俺の全てだった存在が思考を中断する。

……しかし、思う。その笑顔に笑顔を返しているのは俺だけではなかった。俺の隣には瞬がいた。刹那がいた。

『俺達』はいつでも笑い合っていたんだ。

「刹那や瞬は……これからもずっと友達なんだからさ……大丈夫、なんだ」

嫌な事を誤魔化して逃げ続けて来た俺。その卑怯な俺に付き合い続けて来てくれた瞬。近くにいたけれど離れてしまった刹那。

もつけない遥。

わかってる。俺の思い描く全てが歪んでいるのはわかってる。でも動いてる。無理やりにも、誤魔化していたとしても、俺の現実

は動いてるんだ。

俺はもっと『こっち』にいたいんだ。

「……迷惑とか言っつな……ばか」

嬉しそうな笑顔で言う瞬。潤んだ瞳には心からの安堵が感じ取れた。

『あれ』から、俺の入院からずっと隔たっていた俺と刹那。その俺達の板挟みになっていた瞬。辛かった筈だ、俺の為に『あれ』を隠して刹那に接して来た。辛かった筈なんだ。

「ありがとう……瞬」

精一杯の感謝を込めて瞬の瞳を見つめ返した。

「ねえ〜っ！ なに男二人で見つめ合ってたのっ！？ すんごいきもいよっ！ シオは下半身パンツだし、瞬なんか上半身裸だしさっ！ なんか二人の背景にポワワンってお花が咲いてるよっ！」

既に着替え終わったらしい渉のツッコミに瞬と二人でハツとした。自分達の状況を確認すると渉の言う通り、BLに突入しそうなくらい危険度MAXだった。

あぶねえって感じで慌てて着替えを再開する俺達。

「瞬。もう一個だけ」

さつさと着替えないとマズいが、もう一つだけ伝えなくてはならない。

「なんだ？」

さっきの変な状況の余韻からか、ちよつとエロい雰囲気の時。

「俺さ、刹那ともつと仲良くなるよ、『あの時』よりも」

瞬が想ってくれた『あの時の俺達』。俺に対しても、刹那に対しても、それが一番だと信じてくれた瞬。

俺達の道導みちしるべになつてくれた瞬。

俺が見出した意志をはつきりと伝えなくてはならない。

「そうか……頑張れ」

瞬は笑ってくれた。嬉しそうに……。

昼休み。俺は早速動き出した。

購買部のパンと教科書等の勉強道具一式を持った俺は時計棟に、刹那のいる時計棟に来ていた。瞬はいない。別に何を言った訳では

ない筈なのに、渉をブロックしながら親指を立てて送り出してくれた。

コンコン

一人、生徒会長室をノックする。もちろんご機嫌取りのティーセツトは持参済みだ。

「どござ」

凜とした声を聞いた後、自分の表情が綻んでいる事には気付かないまま、扉を開く。

「……十八、なにかしら？」

入室した俺を見た刹那は顔をしかめながら言う。入室前とは違い、呆れたようなため息混じりの声。ノートパソコンは閉じている、昼休みだからなのか、仕事の手は休めているみたいだ。

「いやさ、一緒に昼ご飯食おうと思ってさあ」

少しだけ怯んだが、刹那の反応が予想通りだったので、用意していた台詞を言ってみる。

「はあ？ なに調子乗ってんのよ」

キタキタ。キツと睨んで来る刹那はちょっと怖いけど、凜とした声が消えてるよ、せつちゃん？

「いいじゃん。ご飯食べ終わったら、勉強教えてよ」

俺の用意した台本通りの台詞を続ける。

「……………」

俺の台詞を聞いた刹那。少し考えるように黙り込む。

俺の予想では『し、しょうがないなあ…………真面目にやるならちよつとだけ教えてあげるわ』である。

刹那が俺をどう思っているのかはわからない。でも学校内の男子生徒の中ではかなりのいい位置にいる筈だ。俺が調子に乗るくらいがいい位置だと思う。刹那に男子の免疫が無い分積極的に行こうじゃないか。

「私と、十八と、二人で…………よね？」

考え込むようなままで呟く刹那。

「もちろんそうだよ」

瞬や海老原さんが一緒じゃないかって事だろう。どっちにしろ拒否する気はないみたいだ。

「…………鍵、閉めて…………」

「ああ、ありがとう……………つて、えっ？ ええっ！！」

台本通り、って思って台詞を続けようとしたら仰天した。ババツと刹那に視線を移すと刹那は俺から顔を逸らしているじゃないか！

なにになになにつ!?! これは台本に無いよ! 閉めるの? 密室
なの? その後どうするの?

おたおたと慌てふためいていると、背後からカチャリという音が
聞こえた。

「えっ!?!」

慌てて振り返ると俯いた刹那が後ろ手で鍵を閉めたところだった。
いつの間に……。

つて、密室完成?

「ふわうおうっ! ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ!」

ど? 動揺してるからかな? いやっ、俺はヴァカっ! どう
しよう! どうしよう! どうしようだろうっが!

「……………」

扉の前で俯く刹那は何も言わない。俯いているので表情もわから
ない。

やべえっ! ドキドキがすげえっ! どうしたらいいのかわかん
ねえっ! このハッピースペース(幸せ空間)はなんなんだよおっ!

「ぶっ……………ぶぶっ、あははっ!」

「えっ?」

俯いたままの刹那が……肩を震わせて、笑ってる？

「ふふふっ！ はははっ、十八？ 調子に乗るのはいいけど、中途半端すぎよ？」

顔を上げながら言う刹那。よっぽどおかしかったらしく、お腹を押さえて笑っている。

「あっ、いや、えーと……」

何やら一杯食わされたみたいだが、何も言えない俺。

「おかしな台詞を用意しても、棒読みじゃ意味ないわ。ふふふっ
俺ってば棒読みだったのかい。」

「いいわ。ご飯を食べて、勉強しましょうか？」

「えっえっ」

「ほらっ、そこに座りなさいよ。それがお望みだったんでしょっ？」
笑顔のまま言っ。

「あ、ああ……」

言われるがままに来客用のソファに座る。

色々考えておいたものの全部が役立たずだったが、目的は達成して

しまった。

俺が見いだした意志。

『刹那にずっと笑っていてほしい』

それは俺が見つけた決意。

俺が『こつち』にいる間に出来る俺の存在理由。

それは歪んでいる。

刹那の為に。

そう思う俺の決意は歪んでいる。

自分勝手な欲望でしかないのだから。

昼休みの生徒会長室。

「化学式を揃える上でのポイントは、そうね、質量保存の法則はもちろんだけど、順番を間違えないで。例えばこの式ならO₂は最後よ」

「なるほど……」

昼食後。俺の我が儘通り、刹那に勉強を教えてもらっている。教科は俺の苦手教科No.2の化学である。

「……………」

刹那は昨日に引き続き、とてもわかりやすく教えてくれている。元々少ない昼休み。むにむにと伝わる刹那の感触を……じゃなくて、貴重な勉強時間もあと少し……。

「十八、どうしたの？ そわそわしてるけど……」

落ち着かない挙動の俺に怪訝そうな刹那の声が掛かる。

「あ、いや、ごめん」

むにむにも勉強も気になるが、俺が気になるのはもう一つ。昼休みの喧騒もあまり届かない会長室。刹那は気付いていないのか気にしてないのかわからないが、俺は気になって仕方がない。

「ごめん、刹那。ちょっと」

「えっ？」

俺は立ち上がると入り口の扉目掛けてずんずん行く。

カチャリ ガチャ

刹那の閉めた鍵を開け、扉を開く。

「「「うわぁ」「」」

声を揃えた三つの人影がなだれ込む。同時に俺はため息。

「ちょっと、十八。って、どうしたのよ、三人とも」

どうやら気付いていなかったらしい刹那。なだれ込んだ三人を見て驚いている。

「ははは………こんにちはです」

「いやぁ、珍しく鍵なんか掛かってたからよ。ちょっとな、ははは………」

「漏れていた声から会長と塩田先輩である事が推測されたので盗み聞きしていた迄」

約一名を除いてテンパリまくっている一年生会計トリオ。

俺の気になっていたもう一つ。少し前から静まり返る会長室の扉から聞き取っていた彼女達のひそひそ声である。

「ごめんなさいです。12月の予算案の見直しをお願いしに来たのですけど、鍵が掛かっていたし、取り込んでるみたいだったので……あつ、いや、ノックはしたのですっ！ ホントですっ！」

なだれ込んだ体制で橘と進藤さんに覆い被さったままのルナちゃん、そう言いながら顔を紅く染める。有りのままと話をしてくれたみたいだが、何やら勘違いしてないか？

「いや、ちよつと待つてよ？」

「いやっ！ はっはっは！ あたし達は何も見てねえし、聞いてねえっ！ 放課後に出直す事にすっから続けてくれ！」

弁解を試みようとする俺にやたらとハイテンションで突っ伏したままの橘の声が被る。いやいやっ！ だから待ていいっ！

「ふっふっふ、橘……今までは運動部への助っ人の功績があったから大目に見てあげていたけど……やめたわっ！！ だいたい甘かったのよ。そうね、執行部内の赤点ボーダーラインは60点よ！ 決定よ！ はい、決定！」

「ほええ〜っ！」

マヌケな声を上げてハニワみたいな顔になる橘。どうやら橘は刹那を怒らせてしまったみたいだ。ちよつとかわいそうだが笑える。

「くっくっく、私はわかっていたがな。おおかた塩田先輩の次のテストに向けての対策中なのであろう」

「トモちゃん！　しっかりして！」

重なり合ったままで漫才やってる三人を見ながら刹那と二人でため息を吐く。

君たちデコボコすぎだよ……。

放課後。

予算や説明会に関する協議が行われた。11月も残り僅か、テスト前とはいえ生徒会執行部はやる事がたくさんあるらしい。ちなみに俺はぼへえ〜と突っ立っていただけだった。

「今日も刹那の家でやるの？」

今日もやる筈だと思われる勉強会。ひたすら傍観に徹していた生徒会活動が終わった後、刹那に訊いてみた。

「あゝ、そうね……」

そう言いながら上の空の視線を瞬に向ける刹那。

「……………」

瞬は何も答えずに俺の方を向いて苦笑する。どうなんだ？って視線で訊いて来る。

更衣室で俺の話を聞いた瞬だが、昨日の俺と刹那の状況と今の俺と刹那の状況を見比べて何て言っているのかわからないのだろう。

「大丈夫、刹那さえ良ければ刹那達の家でやろう」

なるべく屈託の無いように言う。

「……そう。じゃあ、そうしましょう」

俺に顔を背けながら言う刹那。表情はわからない。しかし声からは安堵を感じ取れた。

俺と瞬は顔を見合わせると思わず笑い合った。

再び訪れる佐山の家。生徒会活動が長引いたお陰で今日は学校から直接向かう事になった。既に辺りは真っ暗、どうしても感じてしまう不安感は……ほとんど無い。

視線を移す。左、右、そしてまた左。

「……なによ？」

視線の先。左側からの不機嫌そうな声。こっちは向かずに前を向いたままで言ってきた。

「あ、いや、ごめん」

ヤバイヤバイ、思わず見入ってしまった。っていつか、俺が見ただけでそれに気付くとはやっぱり只者じゃねえよな。

「十八。ニヤけてるぞ？」

今度は右側から何やら楽しそうな声。

「うつせえなあ」

正反対の二人に挟まれた俺はいつもとは違う家路。海老原さんは今日は来れないというらしく、俺達は三人で並びながら瞬と刹那の家へと続く家路を辿っていた。

昨日よりも不安を煽る暗い風景、しかし不安感を感じない。二人と一緒にだから間違いない。仏頂面の刹那も、笑顔の瞬も、二人は俺を気遣ってまたこの構図で並んでくれた。いつでも一緒だった通学路。あの時みたいに一緒だから。

……チクリと胸が痛む。

わかってる……遥、ごめん。

「あつ、お父さんとお母さん、もう帰ってるみたいね」

刹那の声にふと顔を上げると視界が違和感、いや、既視感に襲わ

れた気がした。

見た事ないのを見た事ある。実際は違う。俺にとって目の前の光景は飽きるほど見た光景なのだが、そう思えてしまう。そういえば未視感ジャムビュという物があった。こういうのをいうのかもしれない。

「ほら、十八、入るぞ？」

「えっ」

聞こえた声にも既視感に似たものを覚える。瞬ちゃん……？

「ただいまぁー」

見慣れたような、見慣れないような、そんな景色に吸い込まれて行くせつちゃん。……せつちゃん？

「ほらっ」

右手を引かれる。景色に吸い込まれて行く。

「ただいま」

瞬ちゃんが言う。

「おかえり。せつちゃん、瞬。トヤ君」

「えっ!？」

捉えた視界が一気に安定した。

既視感や未視感なんかじゃない。

俺達はいつだってそうだった筈だ。

どちらの家に帰っても、どちらの家に迎えられても。

一緒だった筈だ。

「……ただいま」

そう、言うべき言葉も一緒だった。ああ、なんだろう……自分の口から自然と出たフレーズに俺は心から安堵している。

玄関まで出迎えてくれた瞬達のお母さん。いつもそうだったように……というか、おばさん涙でグシヨグシヨだよ。

「十八君……」

おばさんの傍らで俺を呼ぶおじさん……ホッとしたように息を吐いている。おじさんまで出迎えてくれるなんて。

ダメだった。二人を見ていられない。俺は込み上げるものを隠すように俯いてしまう。

「瞬から連絡もらってね、飛んで帰って来たんだ」

おじさんは言う。おじさんはいつもなら夕方のニュース番組に出

ている筈だった。俺の為にそれをどうにかして来てくれたのだろうか？

「今日も家で勉強会、って思ったからさ。昼間の内に母さん達に連絡しておいたんだ」

そう言いながら隣の瞬が俺の背中をポンと叩く。

「……………」

……………つたく。このキングオブお節介め……………。

「ほら、夕飯できてるの。少し早いけどゴハンにしましょう？」

嬉しそうに俺達を促すおばさん。

俺は顔を上げると、瞬に、刹那に視線を投げ掛ける。

「諦めなさい、十八。勉強会は夕食を摂ってからにしましょう」

肩で息を吐きながら言う刹那。呆れたような表情だが、僅かに微笑んでいるようにも見えた。

思いがけないサプライズに胸が溢れそうなくらいに一杯だった。

「ありがとう……………」

佐山の家での夕食。

五年振りだった。

ウッド調の家具で統一されたリビング一体型の広めのダイニング。中央に置かれた六人掛けのダイニングテーブル。高めの天井から吊るされ、のんびりと回るシーリングファン。

何も変わっていないかった。

「手を抜いた訳じゃないんだけど、今日はお鍋にしたの。みんなで囲むには何かな、って思ったらやっぱりこれかなってね」

言いながら俺に微笑み掛けるおばさん。俺の前に食器を並べてくれた。

並べられた食器を見て軽く驚く。その食器は俺の専用の食器だった。ご飯茶碗も、お椀も、取り皿も、お箸も、五年前まで俺が呼ばれられる度に使っていた食器達だった。

帰り道と同じように俺を挟んで座る瞬と刹那。向かい側に並んで座るおじさんとおばさん。

「いただきますでしょうか？」

微笑んだままのおばさんが言う。

いただきますの号令よろしく、始まった夕食。おじさんとおばさ

んに代わる代わるにお鍋をよそってもらう俺。おばさんが作ってくれた付け合わせも、お鍋に合わせる物にしては明らかに量が多い。でもどれも俺の好きな物ばかりだった。

勉強会の予定で来ていた俺は呆気に取られる暇も無いまま、団欒に加わっていた。

刹那にも瞬にも似ているような美人のおばさん。失礼だが流石に少し老けてしまったかも、と思ってしまうたが微笑んだ表情は昔と少しも変わっていないかった。

店長に負けにくいぐらいのダンディズムを醸し出すおじさん。怒ったところを見た事が無いぐらいに温厚な人。やはり少しも変わっていないかった。

おじさん達もそうだが、瞬は嬉しそうに笑っていた。不自然なくらいに……。

刹那だけは違った。

時間が経つにつれ少なくなる愛想笑い。食いつくのはどうでもいい話題ばかり。ほとんど進んでいない夕食。時折見せる沈んだ表情。

俺も同じだった。

六人掛けのダイニングテーブル、空席が一つ。本来の席順は違っていた。五年前なら刹那は俺の隣ではなく向かい側に座っていた。

俺と刹那はそればかり気になっていた。いや……瞬も、おじさん達も、きっとそれには気付いていたのだろう。

それは遙の席だった。

夕食を終えた俺達は予定通りに勉強会を始めた。誰がそうしようと言った訳ではないが、そのままダイニングのテーブルでやる事になった。俺に合わせてくれたのか二人は制服のままだった。

「今回のテスト範囲は割と広い、中間の範囲からの延長となる教科がかなりあるからだな。逆に考えると、その分予想される問題がけっこうあるんだ」

「寝てばかりいて授業をほとんど受けていなくせにやたらと説得力のある事を言う親友。」

「瞬の言う通りね、教師のテスト造りの傾向からも先読みできる物がかかなりあるわ。簡単よ?」

授業免除で授業をほとんど受けていない筈の刹那も説得力十分である。先ほどの状況から一転した雰囲気。少し無理をしている気もするが切り替えたらしい。

「時事問題なら私達に任せてね」

向かい側に座るおばさんが言う。ニコニコとやたらと嬉しそうで

ある。

というか、あまりにも豪華すぎる講師陣に囲まれている気がする。入学から学年トップを維持し続けている刹那。まともに授業を受けてないくせに学年トップ5内にいつもいる瞬。現役ニューズキャスターのおじさんとおばさん。

なんだかトップ30も行ける気がしてきたぞ。

「ところで十八君。君は刹那と付き合っているのかな？」

「ぶふっ！」

突然のおじさんの発言に何か飲んでいた訳でもないのに吹いてしまった。

「そうよね、せつちゃん達ももう高校生だもんね」

すごく嬉しそうに話に食い付いてくるおばさん。

「いやいやいや！ あのおのあの！」

弁解しようとするが、何やらこっぴどくさかしくて口が回らない。実の親が娘の前でなんてこと言っんだい。

「なんだい十八君？ 誰か他にいい子でもいるのかい？」

何故そう発展する？

「いいわね、青春よね」

なんかおばさんトリップしてるし。

「十八と刹那は『まだ』付き合ってるよ。いい子というか候補生のようなやつらはいるね」

瞬やーい。お前はいつたい俺をどいうポジションに持って行きたいんだーっ。

「ほう、どうやら十八君はモテモテみたいだね。刹那もつかつかしてられないじゃないか？」

だめえ！ だめだよおっおじさん！ そんなこと言ったら刹那の何かが発動しちゃっよおっ！

チラッと刹那を見してみる。

「じゃあ、お昼の続きという事で化学の教科書を出してちょうだい。私のノートも見せてあげるから」

スルー？

テスト準備期間が始まって一週間。

刹那は意気込み通りに毎日勉強会を開催してくれた。時計棟の會長室や事務室や刹那の家、時間を見つけてはそれらで刹那が熱心に勉強を見てくれた。

放課前や放課後の生徒会活動でも会長補佐である俺は常に刹那の傍らにいた。もちろん通常通りに行われる授業は別だったけど、昼休みや長い休み時間はほとんど一緒だった。

目の回るような慌ただしさで過ぎる毎日は正直いって気の休まる隙なんて無かった。

小さい時にいつでもみんなの中心にいたせつちゃん。

一緒にいてわかる。生徒会というこの学校の中心にいる刹那はやっぱりみんなの中心だった。

気が付けば俺も刹那の輪の中にいた。

浮かれていたのか。

懐かしさから、また錯覚していたのか。

忘れるなんて有り得ないのに。

……俺は後ろを気遣う事が少なくなった事には気付けなかった。

どっきんどっきん」

アホな効果音で誤魔化しなくなるが、さっぱり誤魔化し切れない
マイチキンハート。

放送施設用の小窓から様子を窺うと、今か今かと待ち焦がれる群
衆の熱気に目眩すら覚えた。

「あなたの出番なんか一瞬よ。そんなに緊張してどうするのよ」

「い、いや……」

背後からの声にこれ以上ないくらいにみつともない表情で声にな
らない声を返す。それを見た声の主の刹那はがっくりと頭を押さえ
ながらため息を吐いた。

「だつせえな、先輩、別に先輩の事なんか誰も期待してねえよ。出たつても誰アレって感じでお終いだし、退場する頃には忘れられてっから緊張なんか意味ねえって」

カチーン

「うるさいなあ、俺と同じで今日やる事がほとんど無いお前に言われたくないんだよ」

続いた声には強気で言っておく。自分の威厳やら尊厳やらはどうでもいいが、途端にムキになってなったコイツにはどうしても反発してしまう。コイツとはもちろん執行部の中の俺的最後の砦、橋である。

「開会1分前だ」

進行役を勤める親友の声にドキリとした。落ち着かない拳動でおたおたと見回してしまう。

「あなたの出番は一番最後よ。カチカチのままでもいいから進行は見届けるのよ？」

呆れたようにそう言つと舞台へと歩いて行つてしまふ刹那。俺はカクカクと頷くのが精一杯だ。後ろで笑いを堪える橋に文句を言う余裕もない。

さつきから俺は何に緊張しているのか。それはこれからこの多目的ホールにて始まるうとする恒例行事、12月の生徒会説明会に對してである事に他ならない。

ただの説明会であれば流石の俺もここまで緊張しない。しかし、意外な人物ののほほん発言からそれは始まった。

今朝の説明会の打ち合わせの時。

『いつも任せきりで申し訳ないです。佐山さんも皆さんも……』

心底申し訳なさそうにそう言ったのは、久し振りに時計棟に顔を出してくれた徳川先生だった。

『いえ、任せて頂けるのは信頼してくれている証拠ですし、私は好きにやっているだけです。先生が気になさる事はありませんよ』

打ち合わせも無事に終え、俺はそんな風に謙遜しあう多忙な二人を眺めていた。しかし突然先生が俺を見てハツとしたように言った。

『そういえば……！ 塩田君のお披露目をしなくてはいけないのでは……？』

『はっ。』

もはやビックリしたような先生の発言に俺は首を傾げるだけだった。お披露目？ 俺の？

『お披露目……』

先生の発言に対して刹那は顎に手を当てて考えるような仕草でその言葉を繰り返す。すると刹那はニヤリと俺を一瞥した。

俺はその微笑にゾクリと身を強張らせつつ引きつった。とおくつても嫌な予感がしたからである。

そんな訳で説明会のプログラムに急遽組み込まれる事になった俺のお披露目、もとい新役員の紹介並びにご挨拶。俺の感じた嫌な予感は見事に的中してしまったのである。

ため息すら出ない状況で舞台を窺うと、凜々しい姿の刹那を捉える。説明会も中盤へと差し掛かったのだろうか、彼女は大きなホワイトボードを使って12月の行事や予定を公示していた。観衆は直接、スクリーンの映像越しにと、食い入るように彼女に目を奪われている。

凄い。そう思った。

今まで、俺がこの生徒会に籍を置く前、静かに耳を傾ける観衆の一人として彼女を見上げていた時。ずっと遠く、手が届かない、いや、声すらも届かないと思っていた時。それはついこの間のこと。

そして今。俺が彼女と肩を並べてから。雲の上だと思っていた場所に来てから。

生徒会。そこに降り立ってから。

そこに俺が携わってまだ僅かな時間しか共有していない。俺はまだその雲の上を知り得ている訳ではない。しかし、まだ片足を突っ込んだばかりの俺でも理解できる。遠くから見上げていた時とは違う凄さを知り得てしまう。

刹那だけではない。瞬も、海老原さんも、橋を含めた一年生達も、

雲の上に降り立った事でみんなの凄さは日々痛感している。

毎日が自分の小ささを確認しているような、そんな感覚で自身を見下ろしてしまっている。

刹那は素行不良からの出向と言った。けれど俺もいた観衆の中には俺よりも優れた人はたくさんいると思う。きっと俺よりも彼女達の手助けが出来る人がたくさんいるだろう。きっと観衆が、同世代の仲間達が、全校生徒みんなが願う毎日の手助けを出来る人が、数多くいるだろう。

立場が近いとはいえ、目に映る光景は遠い。

……いや、近いからこそ遠くに見えてしまう。

『 12月の要項、行事のお知らせは以上になります。通例に倣いまして、質問、要望などございましたら各クラス委員、もしくは生徒会執行部まで提示して下さい』

あ、終わっちゃった。って事は……。

『続きまして、11月より新しく我が生徒会執行部に就任した役員の紹介並びに挨拶へと移らせて頂きます』

進行役の瞬の声に代わり、打ち合わせ通りに会が移り変わる。

あわわ……た、た、確かここで舞台上に上がればいいんだっつたよな。刹那の隣に立って、刹那が紹介文を読み上げて、俺が挨拶を言えばいい筈だだだだ。

「ほ、ほ、ほらっ！ で、出番だぞ！ いいか？ 目の前の生徒達は力ボチャだ！ ジャガイモだ！ そ、そ、そう思ってるや緊張なんか、し、しねえ！」

ドンツと背中を押す橘。

っていかお前が緊張してどうする？ そんな上擦った声で送り出されても余計に緊張するわい！

……と、押し出されて数歩あゆみ出して気付く。見渡さなくてもわかるくらいに一気に広くなった視野。思考が追い付いてくればくるほど高鳴る鼓動。

そう、俺はもう大観衆の衆目に晒されていた。

だあああつ！！ 橘あつ！！

ぱくぱくと声にならない声を出しながらも橘の言っていた力ボチャとジャガイモを心の中で連呼する。それのお陰だろうか、足は止まらずにカクカクと刹那の元へと進んでくれていた。

長い。たった30メートルくらいの道のりなのに何倍にも感じる。急遽きまったという事もあるが、ぶつつけ本番だから突き刺さる視線はもちろん初体験。球技大会の時は瞬に隠れていられたけど、今は一人だし、俺って一応これから主役だし。

ガッ

「あ痛あつ！」

上履き越しに激痛。目の前には壇上中央に設置された演台。前も見えていなかった俺は当然のように前方不注意で自爆した。

カポチャやジャガイモ達からクスクスという笑い声が聞こえて来る。それに釣られて俺は正面、観衆へと視線を移してしまった。

「
」

人、人、人。何処を見ても人。知ってる人もいる筈なのに誰の顔もわからない。カポチャやジャガイモじゃないが誰の顔もわからない。

更に続く観衆からの囁き声。

目の前が真っ白になる。ついさっきの痛みも何処かに吹き飛んでしまった。弾かれたように俺は俯いてしまう。身を焼くような恥ずかしさで顔が熱い。

尚も続く観衆からの囁き声。

向いてない。俺には向いてない。俺はここに立つ気概も心意気も持ち合わせていない。逃げ出したい衝動に駆られるが足が竦んで動かない。

『 静粛に願います!! 』

ハッとされたように顔を上げる。

瞬、瞬の声。飽きるほど聞き慣れたその声の主は瞬。マイクを通

した声とはいえ、それはホールの隅々まで行き渡る澄んだ声。ホールを埋める1500人を超える全ての人達が一斉に静けさを取り戻す。

声に釣られて見た舞台脇には進行役を勤める親友。気楽に行け、とでも言いたそうに肩をすくめて微笑んでいた。

あまりに瞬らしくて心の中で苦笑してしまう。こんな状況にいるのにニヤけてしまいそうになる。

視界をずらせば刹那。すぐ隣の彼女は情けない姿で進行を妨げる俺を見ようとはしない。正面の観衆に視線を留め、凜々しい姿を維持していた。

ふわりと俺の右手が覆われた。

演台に隠すように刹那の左手が俺の右手に触れていた。握られた訳ではない、あてがうように触れただけ。刹那の視線が俺に向けられる事もない。凜々しい姿で正面を捉えたまま動いていない。長時間に渡って長い口上を読み上げていたせいか冷えきっていた彼女の掌、それは羞恥から火照っていた俺の熱を冷ますには十分だった。俺の意識を覚ますには十分すぎるぬくもりだった。

俺は彼女に倣うようにゆっくりと正面を見据える。

観衆の最前列より前には説明会の詳録を担当している海老原さん。姿は見えないが音響や映像の裏方を担当しているルナちゃんと進藤さん。背中を押してくれた橋。俺を見守っていてくれていたであろう瞬間。導いてくれた刹那。

俺には1500人よりもその存在の方が遙かに大きかった。

大観衆の視線は少しも気にならなくなっていた。

「せ〜んぱいつ！ お疲れ様です〜！」

生徒の退場が終わった瞬間、舞台袖に引っ込んでいた俺に突撃して来たルナちゃん。

「よいしやああっ！」

当然そのやわっこいチャージは核兵器並の威力。役目を終え、一度は解けていた緊張が一気にぶり返してハジけた奇声を上げる俺。

「ははは〜っ、な〜んかかわいかったですよ〜せんぱい〜」

ツインテールをひゅんひゅんいわせながら腕に絡み付くルナちゃん。先ほどの俺の大醜態に満面の笑顔でフォローしてくれた。

「い、いんやあ……みつどもねえだけだつたべよあ〜」

掴まれている腕を中心に急速に癒されてしまう俺。多分はたから見たらブっ飛ばしたい男ナンバー1だろう。

「くっくっく。名前を言つて、よろしく願ひします、の挨拶だけなのに噛みまくっていたけどな。というかなまりまくっていたけどな」

「アイタア！が笑えた。あれは保存版だ。あーっはっはっ！」

にこやか笑顔で俺の醜態をほじくり返しつつ現れた進藤さんと橘言いながら二人で左右からひよいっとルナちゃんを俺から引き剥がす。顔は笑ってるけど笑ってません。はい、すいませんっした。

「とにかく、どうにか無事に終わったな。一番の目的は全校への顔見せだったんだ。上出来だったよ」

延長コードをクルクルしながら瞬が嬉しそうに登場した。その後ろには海老原さんも。

『あ痛あっ！』

は？

何やら忘れたいフレーズがリプレイされた気がしたんですけど…
…そう思いながら視線をやると、

『 静粛に願ひます！！』

親友の声もリピートされています？

「……………保存版……………なの……………」

そう言いながら携帯を構える海老原さん。そして、その携帯には

壇上で哀れな一人漫才をやってる俺が映っていた。

「　　ヲイイツ!!」

ムービー撮ってたのかいいい！ 海老原さあんっ！

「……………かわいかったの……………」

ほんのりと顔を紅く染めて呟く海老原さん。ってそんなのかわいくもなんともないよお！ 消して消して！

「はっはっは、今日の主役はばっちり十八だな」

ぼんぽんと肩を叩く瞬が苦笑して言う。

「こんなんで目立って嬉しい筈ないだろ……………」

「あーら、じゃあもつと別のところで目立っちゃいませうか?」

トホホと脱力しようとする俺に超攻撃的な声が掛かる。

「……………」

そりゃあこの流れなら落ちはあると思ってたし、やたらと登場を引っ張るなあ〜とか思ってたけどさ。

「期末テストでランキング入りすれば、もう目立っちゃってしょうがないんじゃないかしら！ そうに違いないわ！ やるしかないわね！ 今日は耐久模擬テストをやるしかないわね！ 三部作のハリウッド映画の日本語訳を一人でやってみるとか面白いわね！」

なんでそんなに怒ってるんだよおっ！

” 本日の議題、塩田十八君の生徒会加入について”

でかでかとそう書かれた教室の黒板を見た俺は顔を引きつらせてしまう。

説明会を終えた後。通常通りの授業も程なくこなし、最後の授業である六限目、授業といってもそれはLHR。その時間に行われたクラス会議で議題が上がったのは何故か俺の生徒会加入についてだった。

元々、この2年F組のみんなはそれについて知っている筈だ。しかし、説明会あとの俺の加入挨拶を見たクラスメイト達は何故だかあーじゃないこーじゃない、と盛り上がり始めてしまった。ちなみに担任の先生まで一緒にである。

勘弁してくれ。

「では、塩田君。あなたはどのようにして生徒会執行部に入部したんですか？」

教壇の脇に立つ我がクラスの委員長が俺に設問してきた。

「いや……俺にもよくわかりません。刹……いや、生徒会長さんに強制……いや、好意的に出向を命じられただけです」

自分の席で立たされた状態の俺は引きつった表情のままです。つていうか何なんだ……俺は被疑者か？

「つまり生徒会長にスカウトされた訳ですね？」

「絶対に違います」

思わず即答してしまった。でもスカウトじゃないのは本当だと思う。今でこそ、それなりの仕事ハンリを任されているが、俺という存在を生徒が必要としていたかはどうかは疑問ではない。それに俺は素行不良の接収扱い、生徒会執行部が俺に関わった要因はそれに見える訳である。

なんか泣きたくなってきた。

「……わかりました。では、塩田君と生徒会長の関係を教えてください」

「は？」

続いた委員長の質問と同時にクラスのみんなが一斉に俺に注目した。怒ってるみたいなの、納得いかなそうな、みんながみんな不満そうな表情である。

「恋人ですか？」

「絶対に違います」

即答。照れくさいと感じる以前の条件反射だった。『あなたは女性ですか？ 違います』みたいな感じ。だいたいそういう話が出る

って事はとんでもないゴシップが広まってるに決まってる。

「佐山君、本当ですか？」

副委員長として委員長の後ろで立つ瞬に真偽を問う委員長。それに対して器用にも立ったままウトウトしていた瞬はハツとしたように口を開く。

「あー……最近の十八は刹那の部屋に入り浸ってるな、うん」

なっ？

「……って、コラアアッ！！　　どういう事なんだ、コラアアッ！！
ダアッシヤアアッ！！」

涉です。瞬の問題発言を聞いた途端、俺の胸ぐら掴んでの大咆哮です。他のクラスメイト達（男女問わず）も怒ってるヤツ、愕然としてるヤツ、この世の終わりみたいにいっちゃった顔してるヤツなどなど、様々な様子で俺に視線を注いでくる。何だか飢えた狼の群れに囲まれた気分である。とっっても恐ろしいっ！

「しゅ、瞬っ！　寝ぼけておかしなこと言わないでくれよ！　って
いうか肝心な部分を端折りすぎだっば！　っていうか涉……苦し
い……」

いつだかと似たような状況に必死になる俺。だいたいいつも瞬と一緒にいたし、海老原さんもほとんど一緒にいた。それに勉強会っていうちゃんとした理由があるってのに。

「わ、悪い、十八。いや、でもよ、最近のお前らってマジでよくー

緒にいるからさ、つい……」

謝りつつも、拗ねたみたいに口を尖らせてシユンとする瞬。明らかにジエラってます、どっちに嫉妬してるのか聞きたくないけど、野郎のそんな顔なんか勘弁、って思いたいけど周りの女子達は『ぽっ』ってなってる！……ごめん、ちょっと同感。

「三角関係ですか？」

委員長は黙ってくれっ！！

そんなやり取りを数回繰り返した挙句、論点がずれまくっただけで、ぐだぐたのままクラス会議は終わってくれた。

俺が生徒会執行部に入部して三週間。最近は勉強会ばかりではあるが、未だ俺に与えられる仕事は雑用ばかり。すっかり板に付いてきたお茶汲み、コピーや買い物を始めとした使いつパシリなどなどだ。

こんなんでいいの？とか疑問に思いながらも自分なりに必死に頑張ってきたと思う。役に立っているかいないかでいうとあまり自信は無い。でも、流石に最近は足を引く張らないように、少なくとも出しゃばらなくてもいいところは覚えてきたつもりだ。

初めての説明会を終えた放課後。そんな俺は新しい仕事に携わる事になる。

時計棟校舎一階、第一会議室。

ぐだぐたなクラス会議を終えた後の放課後。いつものように時計棟に訪れた俺を含めた生徒会執行部は会議室に来ていた。

生徒会合同会議。毎月始めの恒例行事らしい。

生徒会執行部。生徒会風紀委員会。生徒会図書委員会。

生徒会に携わるそれらの生徒が集まって議論を交す貴重な機会の一つ。

会議室には既に各部署の役員が集結していた。会議室にコの字に配置された長テーブル、その中央に座る俺達。そして、右に風紀委員会、左に図書委員会の役員達が座っている。何故だか引退した筈の青葉先輩の姿も見える。

風紀委員会は10人くらい、図書委員会は20人くらい、どちらも執行部よりも人数が多い。

「……暗部だっけ？ その人達は？」

もう一つ部署があった筈だ。確か生徒会暗部。隣に座る瞬に訊いてみた。

「暗部は生徒会と理事会のパイプ役なんだ。というより学校理事会直属って感じだな。だから生徒会の活動自体には絡んで来ないよ。っていうか、俺も暗部の役員は数えるくらいしか見たこと無いんだ」

もの凄い怪しいじゃん。

「本当は暗部の他にももう一つ部署があったんだけどな。生徒会庶務部ってあって、雑務を担当していた部署だったんだが……」

次の言葉を飲み込むように話を切ると、ど真ん中に座る刹那を見る瞬。

?????

「刹那の『予算の無駄』の一言で消滅しちゃったんだ……ついでに言っと、合同会議をわざわざ説明会の後にしたのも刹那だ」

そりゃ普通に考えれば会議は説明会の前だろう。各部署の説明もあるんだし。

刹那を見つめる。

「この字の中央にこれでもかって位の存在感でふんり返って、超ムスツとしてる。この会議自体が凄い面倒くさそうである。」

「……………」

超納得だった。

中心人物である刹那についてはともかく、合同会議は滞りなく進
行した。

ほとんどが形式的に意見を並べるだけで、先月の結果報告のよう
な合同会議。稀に青葉先輩が文句を言うくらいで、新しい意見を提
案する者などいない。刹那の用意した段取りをただただなぞるだけ
だった。

余計なことは言えないと、俺も半ば傍観状態で会議とは呼べない
ような演説の進行を見守っていた。

しかし、会議終了間際。

「……………あのう、少しよろしいでしょうか？」

初めて拳手が上がった。

それまで誰一人として刹那の進行を妨げる者はいなかったが、意
外にも手を上げていたのは俺と同じように傍観に徹していた徳川先
生だった。

「はい……………何かご意見ですか？」

成否も有無も一人で決めて完璧な進行をしていた刹那も少し驚い

ている。

テーブルには着かず、会議室の隅に座っていた先生。立ち上がる
と少し真剣な表情で言った。

「今日の議題に上がらなかつたようなんです……この学校の性質上、
私が意見するのもしかたと思いましたが言わせて頂きます。会長さ
ん、目安箱”……どうなつてしまいましたか？」

先生は生徒会顧問、いつもなら活動に顔を出したとしてもニコニ
コと見守るだけで口を挟むような事は無い。しかし今回、会議の腰
を折つた訳ではないが、先生はきつぱりと意見した。

「時計棟入り口に設置されていた目安箱……ですね。今月いっぱい
で撤去となりました」

”生徒会目安箱”

それは『生徒主義』を主張するこの学校らしく、一般生徒が生徒
会に意見できるご意見投函箱のような物である。

しかし、今月。刹那の意向から撤去が決まつた。

刹那の意向、それは先月の説明会の時から始まつたもので、質問
や要望がある場合はクラス委員を経由するか、正規の段取りを踏ん
で生徒会執行部に提示しなくてはいけない、というものだった。

刹那の意見が採用される以前は、手紙でもノートの切れ端でも何
でもいいから時計棟の前に設置された目安箱に投函するだけだった。
しかし、イタズラや無意味なものばかりであつたらしく、廃止と

なつた次第である。

「ごめんなさい……生徒の立場ではない私が意見してはいけないのかもしれない。でも、私は目安箱撤去には反対です……」

徳川先生個人の意見なのであろう。教師とはいえ、生徒主義の頂点にいる刹那を前にして大きく言おうとしていないように見えた。

「理由を聞かせて頂けますか？」

刹那は淡々とした口調で先生を促す。

「……はい。私も生徒主義は素晴らしい考え方だと思います。佐山さんの考える目安箱に代わる方法も理解できます。佐山さんを中心とした今の生徒会の良さも知っているつもりです」

話しながら、全員の顔を見回す先生。授業をやるのと同じように、ちゃんと全員が理解しているか見ながら話しているのだろう。

「でも、だからこそ思います。生徒会を中心としている学校であるならば、一人一人の声が届かなければ意味が無いのではないのでしょうか？」

俺を含めた全員が先生の発言に聞き入っていた。

「この町の子供達の多くが生活を共にする学校です。1500人を超える生徒達の中には1500人の声があると思います。イタズラでも、無意味に見えるものであっても、小さな声が届くことが大切なのではないでしょうか？」

生徒会であり、生徒でもある俺達に問い掛けるような先生の言葉は確かな主張だった。

口を開く者はいない。しかし、誰一人として先生から目を離す者はいなかった。

「……先生の言う事は理解できます」

俺達と同じように先生の言葉に聞き入っていた刹那、先生に応えるように静かに語り出す。

「でも、それは理想です。一人一人の声が大切であるように、一人一人の声すべてがとも困難あると私は思います。すべてを受け入れることは出来ないんです」

淡々とした口調はもう無い。それは刹那の心からの声であると俺は感じた。

「その為に私は生徒会執行部のやり方を改めました。成績だけが全てとは思いません。でも、生徒の生活を支えるのが生徒会なら、その生徒会の質を高め、生徒達の為の学校を『私達』が作っていきます。生徒の代表として精一杯、一番いいやり方を探します」

人員を削って少数精鋭にしたのはその為か……。俺の成績に関する今回の事も繋がっているのかもしれない。

「今回の私のやり方は私のできる最大限の譲歩です。目安箱は全ての声は届くかもしれませんが、でも、全てに応えることは出来ません。応えられなければ、きつとどこかで不満や反発が生まれます。それ

こそ全ての生徒の為にはなりません……だから……」

やり方を改めようとしたのか……。

二人の言葉は本物だった。

言葉として出た訳ではないが、二人にはそれぞれ大きな思い入れがあるように思えた。決して譲れない、とても大きな思い入れがあるように思えた。

二つの主張に口を挟む者はいない。みんな静かに次の言葉を待っていた。

「そうですね、その通りです。だから私は佐山さんの考え方に意見するつもりはありません。私が反対したのは”撤去”に対してだけです。……それで私は……」

意外にも刹那の意見を肯定した先生。しかし、撤去については引く気は無いみたいだが……。

「えっ？」

話を切った先生は思いつ切り俺を見ていた。なんだ？ 俺って何かやったか？ 邪魔はしてないと思うけど、なんだ？ 顔が変なのか？

「目安箱の件……塩田君にお願いするというのは如何でしょうか？」

……………？

先生の言った意味を理解できない俺は石化。周りのみんなもどうして俺なのか理解できないのだろうか、やっぱり石化。

「は？」

辛うじて刹那がツッコんだ。

時計棟校舎、生徒会第一会議室。

あまり長くは感じなかった会議だが、外を見れば薄暗い。そういえば部活動禁止のテスト準備期間とはいえ、生徒達の喧騒が聞こえて来ない。

陽が落ちるのが随分早くなった気がする……放課後ももう遅い、既に学校に残っている生徒は俺達だけなのかもしれない。

しかし、ここ会議室にいる二十余名の役員達はそんなこと気にする暇が無い。

「ですから塩田君に生徒会に関する窓口をやってもらえたらな、と考えたんです」

再度、徳川先生が少し直球気味に変化した事を言った。なんといつか自信満々な先生。授業で数式を口授するみたい。

どこをどうツッコんだらいいのかわからなくて、俺的にかなり非常事態だ。周りのみんなもハニワみたいな顔で膠着したまま、理解する事が出来ないでいるように見える。

「あ、あの？ そうじゃなくて……どうして十八なんですか？」

そう言うてどうにか反応している刹那の表情も引きつりまくっている。俺と先生の顔を頻りに窺っている。

「私は塩田君以上の適任者はいないと思います」

刹那から俺に視線を移すと真っ直ぐに言う。

凄い自信だよ……答えを導く方程式が一つであるように、この状況を打破できるのは俺だけであると信じているように見える。先生の授業の時の雰囲気とダブってしまって、そう感じた。

自意識過剰すぎだろ、俺。

誰も口を挟む事が出来なかった刹那と先生の主張。どちらか一つを優先すれば、どちらかに綻びが生じてしまう。俺ですら、そう感じてしまう、いや、ここにいる誰もがそう感じているのかもしれない。

それなのに、どうして俺の名前が出てくるんだ？ 全く意味がわからない。

「全てという訳ではありません。部活予算や行事予算についてなどは佐山さんのやり方でいいと思います。塩田君にお願いしたいのは”生徒会と生徒の掛け橋”です」

補足する先生だが、やっぱり意味がわからない。生徒会と生徒の掛け橋？

「もちろん、塩田君の判断で助け合うべき時は、執行部、風紀委員、図書委員、私も協力していきます」

希望する意向のあらましを言った先生は再度、俺に微笑み掛ける。

予算や行事について以外の窓口っていったら、クレーム係みたいな気がするんだけど。……被害妄想かな？

だいたい先生はどうして俺を指名したんだ？

俺は先生とはまともな会話すらした事が無い。一年生の時から俺のいるクラスの授業を受け持ってくれているが、簡単な質問程度の会話しかした事が無い筈だ。

先生が俺にこの役割を言い渡した理由が、いや、先生が俺に向けている信頼の篤さの理由がわからない。

「僕たち図書委員は何もいませんよ。図書委員会の管轄は図書館棟ですし、受付窓口もありますから、あまり影響を受けませんからね」

少しため息混じりの声。図書委員長らしき真面目そうな男子生徒だった。なんとというか、関心が薄いように見える。帰っていいですか？って言うような言い方だった。

「オレはあんまり賛成しねえな。やり方うんぬんよりも、オレはそいつをよく知らねえからな」

『風紀』と書いた赤い腕章を付けた少し怖そうな男子生徒が俺を一瞥しながら言う。恐らく風紀委員長だろう。俺がいつまで経っても返事をしないからか、苛ついたような雰囲気である。

いや、それプレッシャー……なんだかハラハラしてきた。

「塩田君はどう思いますか？」

いつものどこかぼけぼけしたような雰囲気先生ではない。俺を真摯な目で見据え、真っ直ぐに問う。

「あ……いや……」

俺にも思うところはある……しかし、はっきり言って俺には自信が無い。執行部、風紀委員、図書委員、ここにいる全員が俺なんかよりもよっぽど適任者に思う。周りの視線を受ければ受けるほど、自分が情けないものに思えてしまう。

でも、先生……俺を信じてくれているのだろうか。

そうであれば、如何に自信が無くても、反対の意見が出ているとしても、俺は真剣に答えなければならない。

俺が目安箱を担当する……それはどういう仕事だろうか？

今、俺がやっている仕事は雑用　お茶汲み、コピー、購買部への買い出し、掃除、資料整理　その他には……しか無い……いや、ちよっと待て、俺って生徒会としての仕事はほとんどやってないぞ？

こんな俺が生徒会としての窓口になるのか？　それってかなりマズくないか？

「……賛成……」

考え込んでる俺でも先生でもない声上がる。

「え、海老原さん？」

声のした方を見れば、小さく手を上げた海老原さんがおずおずと
していた。って……賛成？

「……私も……十八が……一番いいと……思っの……」

消え入りそうな声でそう言つと俺への、

じいゝ

凝視を開始した。

みんなに言つたような気もするが、明らかに俺をガン見してくる
海老原さん。発言したことで俺の代わりに周りの視線を一手に引き
受けた彼女はみるみる小さくなっていく。でも、俺への凝視はやめ
ない。

……って、海老原さんまで？ 俺ってそんなにスペック高いのか？

「……賛成の意見も出たようですが、すぐに返事をして頂くことは
思っていません。そうですね……出来れば期末テストが終わるまで
に考えて頂ければいいと思います」

決めあぐねる俺を見兼ねたように微笑んだままの先生は言う。そ
の様子を見た周りのみんなも心なしか安堵しているように見えた。

「佐山さんもそれでよろしいでしょうか？」

「えっ？ は、はい、構いません」

先生の独特の雰囲気と目安箱の話が俺に切り替わった為か、流石の刹那も未だ状況について来れてない気がする。

その後、今日のところは解散という事になり、釈然としないままの刹那の挨拶と共に合同会議は終わった。

次々と会議室を出て行くみんなの後に続くこうとすると声が掛かった。

「しお」

「十八、今日はこのまま上がっていいから、いつも通りに家に集合よ？ 目安箱の話もあるから早めに来なさい」

俺に声を掛けたのは青葉先輩。だが、先輩の後ろから先輩の声に被るように刹那が捲し立てた。

「わ、わかったよ」

俺は返事を返すが視界のど真ん中には、塩田の”だ”を発しようとしたままで固まっている青葉先輩。刹那は言うだけ言うと、さっさと会議室を出て行ってしまった。

「……………」

「……………」

なんとというか気まずい。最初は優しそうな表情で声を掛けてくれたっばかったけど、先輩の表情はみるみる引きつって行く。

「せ、先輩？ なにか俺にご用ですか？」

このままだと大変な事になる気がしたので、俺から振ってみた。

「ハアアツ！？ あなたに用なんて無いわよっ！ このコンコンチキのオタンコナスのストドツコイのヒョウロクダマっ！せいぜい刹那にいいように振り回されてしまいなさいなっ！！」

「なんでえーっ！！」

愕然とする俺をギンツて睨んでから、ぶんぷんと肩を怒らながら先輩は出て行ってしまった。

俺は別に無視した訳じゃないのに……。

「ははは、青葉先輩はともかく、おかしな事になっちまったな？十八」

ポツネンと取り残された俺に瞬は苦笑しながら言う。どうやら待っていていたみたいだ。

「おかしなって……まあ、うん、びっくりしたのは確かだよ」

瞬の苦笑に釣られて先輩の事も含めて俺も苦笑を返す。瞬の言う”おかしな事”は目安箱の事だろうけど。

「……で？ どうすんだ？」

苦笑のまま首を傾げると、困ったように言う瞬。

「先生の言っていた事だね。いや、俺さ、あまりに突然だったし、意外だったからさ、思考がまだついて行けてないんだよね」

ははは、と再び苦笑して、今の自分の心境を伝える。対して瞬は息を吐いて苦笑を引き締めると言った。

「自信が無いってどうか、あまりやりたくないなら、俺から言ってもやるぞ？ 先生はああ言ってお前を推してたけど、俺が代わりにやったっていい」

「瞬……」

俺がうじうじとしてるせいで、また瞬がお節介を焼きそうになっってしまった。

……確かに瞬がやった方が生徒達の為になるような気がする。俺なんかより頭がいいし、人望もある。生徒会にだって一年生の時から籍を置いているから、仕組みもわかってる筈だ。瞬には悪いが、きっとその方が良い結果がたくさん生まれるだろう。

でも。

「せっかく先生が猶予をくれたし、海老原さんみたいに賛成してくれた人がいたんだ……期限までちゃんと考えるよ。何より……」

俺を気遣うような表情で身代わりを申し出た瞬。その好意を俺は突っ撥ねようとしている。でも、瞬の表情はどんどん嬉しそうな笑顔に綻んでいく。

「俺を信頼してくれた先生を裏切りたくない」

そう、もう俺の中で返事は決まっていた。

ただ、目安箱の仕組み、他の部署との繋がり、刹那やルナちゃん達の意見。それらを見極めるまで、俺がやるべき事を見極めるまで、まだ返事をする訳にはいかなかった。

俺が言い終えると、瞬はいつそう嬉しそうに表情を綻ばせる。

「……わかった。野暮なこと言っちゃまって悪かったな」

俺が言う事をわかっていたんだろうか、驚いた様子は無く、瞬は綻んだ表情のままだった。

「とにかく、帰ろっか？ 今日片付けも無いし、真っ直ぐ瞬の家に行くつもりだったから一緒に帰ろうよ」

照れくささも手伝った為か、そう言っただけの瞬の立つ入り口に足を進めようとすると……出入り口を体で塞ぐ瞬に手で制されてしまった。

「はあ？」

なんで？ って首を傾げようとすると俺に親指でくいくいつて合図を送ってくる。表情はさっきよりも嬉しそう……っていつか楽しそうである。

???

瞬の示す方を向いてみる。

「！！！」

もう俺達以外に誰もいないと思ってた会議室に徳川先生がいた！
しかも、俺の方をチラチラ見ながらモジモジしてるっ！！

慌てて瞬に視線を戻すと、合図を送っていた親指が。

ぐい

立った！

「塩田君……」

「はっ、はいつっ！！！」

条件反射で振り向いて、ヤバいつて瞬にまた視線を戻して、って、
もういないし！ 扉しめられてるし！

「塩田君」

「えっ……」

再び呼ばれて振り向いた俺の体温が上がる。

当然だ。

「ちよっ！！！」

先生が俺の手を取って握ってきたからだ。しかも、俺の右手を両
手で大事そうに包み込むように！

一気に急上昇する俺の体温。血の温度が上がったのか？ 血の巡る速度が上がったのか？ 先生から漂う大人の匂いに頭をやられたのか？ どれが原因かわからないが、目眩すら覚えた俺は身動きが取れなくなってしまう。

「佐山さんも、佐山君も、皆さんも、気に掛けるのも当然ですね…
…あなたは素敵です」

ちよつと先生えっ！？ どうしてそんなに潤んだ瞳で見つめてくるんですかあっ！

衝撃的発言に先生の顔を窺うが、先生の真っ直ぐすぎる瞳に射抜かれてやっぱり固まってしまふ。あまりの急展開な異常事態に足が竦み、声すら出ない。

「佐山さん……刹那さんはあなたが執行部に入ってから、とても明るくなりました」

???

先生の声のトーンが変わった？ くすんだ声……泣いて……いる？
そう思って先生の顔を窺う。

「 !? 」

驚く。

先生は本当に泣いていた。

「……あなたの家庭の事情は知っています。出来る限り私も力になります。……どうか、生徒会に籍を置いてください……」

家庭の事情　　？

先生の熱に反応して加速していた早鐘が、全く別のところからブツ叩かれる。

一気に熱くなった全身の血の気が引いた。パニックに陥っていた頭が他のもので浸食されて行く。

知ってる。先生は知っている。どういう経緯かはわからないが、先生は俺の過去を知っている。しかも、恐らくだが、かなり詳しく、それを知っている。

「……………」

どうして？

「……ごめんなさい……ごめんなさい……気を悪くしないでください……」

俺はゆっくりと顔を上げ、先生の顔を窺った。

それは贖罪のようだった。

先生の綺麗な顔は激痛を堪えるように歪んでいた。先生の綺麗な声は涙混じりにかすれていた。俺の手を握る先生の手は何かを訴えるように震えていた。

俺の心が急ブレーキを掛けていた。俺の馬鹿げた理性だろうか……俺のいやらしいだけの欲望だろうか……？

「……先生、ありがとう」

気が付けば俺の一番好きな言葉を呟いていた。俺が知る一番大切な言葉を呟いていた。

「……塩田君？」

ピタリと先生の手の震えが止まる。そして、すぐに別の不安そうな震えが伝わる。

俺の確信は間違いじゃなかった。

「先生。俺、たぶん嬉しかったんです。ちょっとびっくりしたけど、先生なら知っててもらった方が、きっと、いいです」

本当の事だった。先生を氣遣ったのも事実だが、こうして先生のぬくもりと一緒に優しさを知ることが出来た。それが心から嬉しかった。

言葉で、視線で、伝えるよりも、伝わるよりも……ぬくもりで伝える方が、ぬくもりで伝える方が優しいに決まっている。

先生の涙の理由は聞く必要が無い。先生が何を知っていようと、俺が知る必要は無いんだ。

急降下した俺の頭の中はやけにクリアになっていた。浸食を続け

るものよりも先生の優しさの方がよっぽど大きかった。

「塩田君……」

俺の手を握る力が増した気がした。ほんの少し、本当にほんの少しだけ……俺に伝わる優しさが少し、増えた気がした。

とても。

安心した。

ふと、気がついた。

俺はこの生徒会に何を思っていたのだろう。何を縋ったのだろう。何に縋ったのだろう。

……違う。

俺は縋っている。俺は求めている。優しさを、ぬくもりを。

先生の優しさで再確認した。先生のぬくもりで再確認した。

置き換えていた。

彼女の顔が浮かぶ。彼女の顔が霞む。

朦朧と保ち続ける現実の中。

俺は曖昧で不安定なその現実には縋り付いていた。

見慣れた教室。

ざわざわとクラスメイト達の声が聞こえる。

『くああ！ トヤ君、また百点かよ！』

僕の答案用紙を覗き込んだ瞬ちゃんが悶絶した。教室に瞬ちゃんの声が響く。その声に合わせてるように見渡してみると、クラスのみんなも自分の答案用紙を見ていた。一喜一憂するのに忙しそうで、僕たちへの反応はなかった。

『いや、今回のテストは簡単だったからだよ』

自分的には謙遜したつもりだったが、瞬ちゃんは呆れたような表情で僕を見てから、かわいそうな物を見るみたいに悲しそうな視線を僕の隣に巡らした。

『うう〜……！ どうせボクは15点だよ』

瞬ちゃんの視線の先には遙。僕の隣の席でもある遙は僕を恨めしげに見ながら、自分の答案用紙を机の下に隠してしまった。

『い、いめん、遙』

僕は慌てて謝る。

『でも、おかしいよね。ハルは、いつも百点のトヤ君に教わってるのにさ、いつつもビリッケだもんね』

遙の後ろの席、僕の斜め後ろの席に座るせつちゃんが、からかうように言った。

『せつちゃんまで〜』

途端に泣きそうになる遙、慌てたようにせつちゃんもゴメンねを繰り返す。

その光景にため息を吐きながらも、僕の顔は綻んでしまう。クラスメイト達の喧騒の中でも二人の声が、やけに僕の耳によく届く。

僕の後ろの席に座る瞬ちゃんを見ると僕と同じような表情だった。それを見て僕の表情は更に綻んだ。

それは、ごく当たり前の光景。

僕の日常。

僕たちの日常。

……？

………僕？

？

「……！！」

大きく息を呑むのと同時に視界が別のものに変わる。『俺』の視界が回復する。

目の前には数学の教科書が開かれていた。

百点の答案用紙ではなく、泣きそうな遙の顔でもない。

全身が気持ち悪かった。じんわりとにじんだ脂汗が不快だった。汗を吸ったワイシャツが煩わしかった。

「ちょっと十八？　今、居眠りしそうになってたでしょ？」

すぐ隣からの声。視線をやれば頬を膨らませた刹那がいた。

「あ、ああ……ごめん」

視線を彷徨わせながら、曖昧な返事を返す。合わせて出来損ないの作り笑いも返しておく。意識はまだあやふやだった。

隣に刹那。視線の少し先には刹那の机で突っ伏している瞬。

見慣れてるような、見慣れないような、懐かしい筈なのに居心地の悪い部屋。

刹那の部屋。

そつだ……ここは刹那の部屋で、今は恒例の勉強会の真つ最中だつた。

刹那の様子から察するに、俺は盛大に居眠りしていた訳ではなさそつだ。恐らく数秒、いや、一瞬かもしれない。……もしかしたら、居眠りというより、意識が飛んでいたのかもかもしれない。

マズい。気を付けていた筈だったのに、かなり集中力が散漫になっている。数時間前の会議室、先生とのやり取りからか、俺は随分やられてるらしい。

最近は刹那とも仲良くなってきたし、佐山の家に来るのにも慣れてきた。いつも一緒だった刹那と瞬との日常が戻りつつある。

できる事は少ないけど、生徒会の仕事にも慣れてきた。海老原さんやルナちゃん達とも自然と接することができるようになってきた気がする。

今日の生徒会の説明会や合同会議。どういう訳か、俺に白羽の矢が立った”窓口”の件。そして、徳川先生……慣れてきたとはいえ、流石に疲れたし、驚いた。

でも、まさか先生から『あれ』に通ずる話を聞くことになるとは思わなかった。

先生がどうして知っているかとか、新しい仕事への不安は少ない。

遥。

今の俺は、酷い罪悪感に包まれていた。

「ほーらっ！　しっかりなさい！」

「ふみゆぶ」

妄想から帰還したばかりで、はつきりしない俺の様子を見兼ねたのか、刹那が両手で俺のホッペタを左右から引っ張る。

痛い。

ぐいんぐいん

「……………」

白くて華奢な指先で引っ張ったり戻したりされる。当事者の刹那は『おっ…………』みたいに目を丸くしながら、それを繰り返す。

…………いや、痛いって。

ぐいんぐいん

「…………ふふふっ」

…………ちよつと？　どうしてそんな”とっても楽しいオモチャを見つけたかった無邪気なチビッコ”みたいな表情をするの？

「えいつえいつ」

ぐいんぐいん

引つ張る。戻す。引つ張る。戻す。

痛いよ！ ああ……でも、嫌だけど嫌じゃないのは何故だろう。

はっ！

じい〜

尚も俺のホツペタを引つ張り続ける刹那越しに視線を感じた。

じい〜

海老原さあーんっ！！ そうだった。今日の勉強会には海老原さんも来ているんだっただよう。

「ちよぷむふゆ

刹ぱふう

やめぴゆふ

」

海老原さんのどこか非難するような、呆れたような、そんな視線が辛すぎるっ。俺で遊ぶのに夢中になってる刹那に抵抗してみた。

「むうつ、無駄な抵抗をする気ねっ。ふふふっ、よいではないか、よいではないか」

俺の必死の抵抗も空しく、タタテヨコヨコにエスカレーターする刹那のイタズラ。めちゃくちゃ楽しそうである。

じい〜

凝視を続ける海老原さんの瞳がウルウルしてるーっ！ 非難も呆

れも通り越して、軽蔑してるーっ!?

ちよっと刹那、やめてえっ! ……でも、やめないでえっ! あ
わわ……俺は何を考えてるんだっ!

っで、瞬! いつの間にか起きて、いつの間にか俺達の様子をム
ービーするなあっ!

遠くに聞こえる波の音を聞きながら歩く。頼りない街灯に照らさ
れながら歩く。生憎の曇り空で月が見えないのが、少しだけ残念だ
った。

隣には肩を並べるように歩く海老原さんが一緒だった。勉強会を
終えて佐山の家を後にした俺達は一人で家路を辿っていた。もちろ
ん海老原さんを無事に家まで送り届ける為だ。

会話は無かった。でも、俺の心はとても凧いでいた。冷たい空気
に運ばれて聞こえる波の音が心地よかった。海老原さんの歩調はと
てもものんびりで、ゆっくり歩くのが好きな俺には丁度よかった。

ふと、ついさっきの刹那を思い浮かべて、ニヤけそうになる。

「寒いね？」

それを誤魔化す為に話を振ってみた。

「……………うん……………」

似たような家が並ぶ住宅街、そこに住む人達の為の生活道路。俺達の辿る家路であるその先を見つめたままの海老原さんは応えてくれた。

「期末テスト、もう少しだね？　こつも毎日勉強してるよさ、ちょっと待ち遠しいね？」

自分で言っておいて、マジで？って思った。前の質問と少しも繋がってないじゃん、とも思った。

「……………うん……………十八……………頑張ってるから……………私も、楽しみ……………」

下らない質問にもかかわらず話に乗ってくれた海老原さん。視線は辿る道の先を捉えたままだった。

「…………………………」

あれっ？って思ってしまった。いつもなら俺に視線を合わせてくれるところだと思ったのに……………。

その後、他の話題を探したが、思い付かなかった。海老原さんも何も言わず、静かに歩くだけだった。

波の音が、少し煩わしくなっていた。

「……………送ってくれて……………ありがとう……………」

ピタリと足を止めた海老原さんは呟く。

「あ、あれ？ もう着いてたんだ。うん、どう致しまして」

いつの間にか海老原さんの家の前に着いていた。ずっと続いてきた住宅街に立ち並んだ家々と同じような彼女の自宅が彼女を迎えようとしていた。

海老原さんの家は、意外にも俺の家の近所である。

いつだか海老原さんが言っていたが、新聞配達のコースでもよく通る所だ。海老原さんの家にも、毎日俺が新聞を届けていた。

「えっと、じゃね、海老原さん」

俺がいつまでも突っ立ったままだと、海老原さんが家に入れない気がしたので、言いながら踵を返した。

「……………十八……………」

「えっ？ 何？」

呼ばれて再び踵を返す。このまま別れるのが、寂しかった俺は嬉しくなって笑顔になっていた。

海老原さんは自宅には入らずに、自宅の玄関の明りに照らされながら俺を見つめていた。

頼りない街灯よりも明るい光に照らされた海老原さんの表情は、
酷く不安そうだった。

もちろん、俺の表情は引きつった。

「どう、したの……？」

その視線を受けた俺の罪悪感が何故だかぶり返した。

「……うん……何でもないの……おやすみ……十八……」

海老原さんにしてははつきりとした口調だった。俺の罪悪感が増
した。

「……うん、おやすみ……」

嘘を吐いたような気がした。見透かされたようで彼女から視線を
外していた。

海老原さんは、ほんの少し間を置いてから、自宅に帰って行った。

その帰り道、海老原さんと並んで歩いていた時よりも、ゆっくり
と歩く。

自分の家に帰るのが嫌だった。足が鉛でも付いてるみたいに重か
った。

無意識に今日の出来事を思い返してしまう。瞬や刹那の顔を思い浮かべてしまう。

遙の顔を思い浮かべてしまう。

「あ、れ」

カクン、と膝が折れた。

宵闇を捉えていた視界が揺れる。

慌てて立ち上がろうとするが、力が入らない。

「……おかしい、な……」

自分の家の少し手前の海岸沿いの道、住宅地は途切れて周りには民家も無い。誰かに見られた訳じゃないのに、恥ずかしくなった俺は地面に手を付きながら、もう一度立ち上がろうとする。

パタン

地面に寝っ転がってしまった。ジャリ、と道路に転がっていた小石が体に当たって痛かった。

「ははは……」

誰に向けたのかわからない愛想笑いをする。

もう一度。

ゴロン

立ち上がれない。自分の意志とは無関係に膝が笑う。節々が痛い。肌が粟立つ。じわじわと不安が這い上がってくる。胸を突く恐怖から吐き気がする。街灯が届かない暗闇が怖い。冷たい筈の潮風が生温い。両手を使えばいいのに使えない。左手がポケットの中の携帯から離れない。動いていないのに、尚も揺れる視界が怖い。寒いなんて思わないのに、震える自分の体が怖い。

怖い。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

「せつちゃん……！」

聞こえる筈ない助けを呼んだ。

この姿を絶対に見られたくない人の名前を呼んだ。

波の音だけが、酷く煩わしく聞こえた。

朦朧とする。

パラパラと雨が降っていた。たくさんの小さな雨粒が降り注いでいた。氷水のシャワーを浴びているような冷たい雫が降り注いでいた。

視界が朦朧とする。

その霧のような雨が俺を濡らしていく。雨具の隙間から少しずつ体を濡らしていく。衣服を伝って四肢の先まで濡らしていく。

意識が朦朧とする。

冷たい外気と冷たい雫は俺の手足の感覚を奪っていく。寒さを通り越し、痛みを通り越し、感覚を奪っていく。這っているのか、歩いているのか、それすらもわからない俺のなけなしの体力を奪っていく。

感覚が朦朧とする。

冷たい雨のお陰だろうか、俺の体は動く。走る事はできない。でも、どうにか動く。繋ぎ止めることに集中すれば意識を保っていられる。惨めな弱音を押し殺すことができる。視界がぼやけると、時間が進むのが遅いのが厄介なだけ。

記憶が朦朧とする。

俺は何の拷問を受けているのだろう。そんな事を考えながら、ぼんやりと霞み掛かった視界の中心に誰かの家の新聞受けを捉える。俺は無意識に右手に掴んだ物をそこに動かしている。

あれ、と思うが、すぐに気付く。

……そうだった。

俺は今、新聞配達のバイト中だった。テスト準備期間だろうが、雨が振っていようが、都合よくバイトが休みになる事なんか無い。少しくらい体の調子が悪かろうが関係ない。

中空に彷徨わせていたビニールに包まれた新聞を投函する。

そして軽く思考を巡らせる。おぼろげな体内時計によると、時刻は恐らく5時前後くらいだろうか？

そのまま、小刻みに息を吐きながら、次の配達先に足を向ける。同時に節々に鈍い痛みが走った。冷たい物を食べた時に感じるような強烈な頭痛が走った。

無視しておく。

最近は少し無理をさせすぎたのだろうか……体の動きが鈍い。至るところが痛い。一人になるとだるい。一人になると時間の感覚がおかしい。一人になると酷く眠い。昨日の夜だつて家に帰り着くまで、すごい時間が掛かってしまった。

海老原さんと別れてからの事をよく覚えていない。

いつ降り出したのかわからない雨に濡れた俺はいつの間にか自宅に帰り着いていた。

俺の体が欠陥だらけなのはわかってるけど最近本当に厄介だ。それとも、勉強のしすぎのせいなのだろうか……。

このバイトが終われば学校。時計棟に行けば刹那たちに会える。みんなに会えば、元に戻る気がする。多分あれだ。体がおかしいのも、時間の感覚がおかしいのも、みんなと一緒にいないからだ。

そつに違いない。

俺ってば実は相当の”さみしがり屋”なんだ。

そつに違いない。

とにかく。体の不調のせいでいつもより倍くらいの時間が掛かってしまっている。さっさと配達を終わらせないと……。

正直、自分が今どこを歩いているのかはつきりしない。でも気が付くといつも通りの配達コースをすっかり辿っている。一年半以上つづけているお陰だろうか……。

「え」

ほとんど無意識に次の配達先へと首をもたげた時、ぼやける視界に映っていたものに息を呑んだ。

傘。

ポーチライトに照らされた光源の下に鮮やかな色彩が浮かび上がっていた。

「……海老原、さん？」

ぼんやりと浮き彫られた光源の下には黄色い傘を差した海老原さんが立っていた。

周りに張り詰めていた空気が収束したような気がした。ぼやけていた視界が安定した気がした。

下卑た俺が露呈した気がした。

よく見ると海老原さんが立っている所は彼女の自宅の目の前。その玄関の門扉の前に立った海老原さんが何故か俺を見つめていた。12月の早朝、日の出前だから当然辺りは真っ暗だった。海老原さんがここに立っている理由がわからない。

「どう、したの？」

問い掛けたその自分の声が他人の声みたいに聞こえた。

視線を合わすことができない。彼女の足元しか見れない。今の自分の姿を見られた事がとつともなく嫌だった。

「……………」

海老原さんは何も言わない。彼女の顔を見れない俺は彼女の表情がわからない。俺を見ているかどうかもわからない。

雨が止んだ。

いつの間にか、側に来た海老原さんの黄色い傘が俺を覆っていた。海老原さんが吐息が掛かるくらいの近くにいた。

「……………あ……………の？」

惨めな姿の俺は、惨めな視線を海老原さんの足元に向けたまま、訊く。

太陽の匂いがした。

白いタオル……………海老原さんは傘を持っていない方の手で、ずぶ濡れの俺の顔を白いタオルで拭いてくれた。真っ白なタオルが汚ならしい俺の顔を拭いてくれた。

突き落とされた気がした。

でも、引っ張り上げられた気もした。

コシコシ

丹念に、丁寧に、拭いてくれる。

暖かい。

俺は動けなくなっていた。海老原さんがどうしてここにいるとか、どうしてこんな事をしてきているのか……………そんな事はどうでもよくなっていた。

「……無理……しないで……」

コシコシ

澄んだ声だった。

優しい手だった。

下卑た俺の深淵まで届くような声だった。

醜怪な俺の隅々まで届く優しさだった。

何故か、とても、懐かしかった……。

俺は抗っている。

俺は藻掻いている。

俺は足掻いている。

俺は堕ちている。

冷たい雨は昼すぎに止んでいた。

上の空のまま過ぎ去った授業を終え、迎えた放課後。

いつも通り生徒会活動と思っていたら瞬に、

『今日の生徒会は無いらしいぞ。刹那が昼間の内に全部の仕事を片付けてしまったらしい』

とか言われた。

夜のバイトも無いので、早く帰れても嬉しくもなんともない。

久し振りの時計棟に寄らずに帰っている放課後。瞬はいない、一年生女子の大群にワツシヨイされてどこかに行ってしまった。

テスト準備期間の影響だろう、校門付近には下校する生徒で普段の倍くらいに溢れ返っていた。

「シオってさっ、やっぱり刹那ちゃんにロックオンなわけ？」

生徒会も無いし、瞬もいない。校門の下の寮までの僅かな時間だが、今日は涉と一緒に大勢の生徒達の波の流れに吞まれていた。

その涉、なんの前フリも無く、おかしな事を言った。

「なんだよ？ ロックオンって……」

言いたい事はわかるが、ムスツとして聞き返してしまう。というより、俺は生徒会活動が無いので少し不機嫌だった。

「好きなのっ？」

「 げほっげほっ！」

むせた。

「違うとか言わないっしょっ？」

誤魔化しても無駄だよって感じで顔を覗き込んでくる涉。

「……いや、別にそういう訳じゃ……」

好きか嫌いかだったら、絶対に好きだけど、ロックオンとか言われると……どうなんだろ……？

”好き”ってというのが一緒にいたいっていうのであれば、間違いなく瞬と刹那の顔が浮かぶ。隣の変なヤツの顔もチラツと浮かんだけど、それは気のせいだろう。

いや、っていう事は刹那も好きだけど、瞬も好きって事になるぞ？

……と、その時目の前が真っ暗になった。両目に暖かな感触。

「だ、れ、だ？」

「……………」

古典的すぎるのも、こんな往来でとかも、ツッコミ所は山程あるけど、なんかもう色々と有り得ない。問題はてんこ盛りの盛り沢山だ。瞬のものにしては細すぎる指先の感触とか、背中に感じるやわっこい二つの突起物の感触とか……有り得ない。

俺の男としての体中の機能がお祭騒ぎを起こしている。

両目を覆われているので見える訳じゃないが、目の前の渉が口をぱくぱくさせて愕然としている気がする。俺達と同じように校門をくぐるうとしている周りの生徒達も涉と同じように愕然としている気がする。

「せっ！　せっ！　せっ！　せせせせ刹……那っ！？」

テンパってデカい声を出してしまった。細い指先と刹那山脈の先端がビクツとしたと同時に視界が回復する。

「ちよつとっ！　大きな声出さないでよ！」

ギギギつと振り返った所にはやっぱり刹那がいた。『もうっ』と感じてぶんすかしている刹那の胸をどうしても凝視してしまうムツツリな俺。

その刹那と同時に目に入ったのは、もう泣きたい位の人垣だった。学校内でも一番人が集まるであろう放課後の校門、しかも部活動の

無いテスト準備期間中の終業直後。恐らく全校生徒の2〜3割以上はいるだろう……。隣で変な顔をしていて固まってる渉を含め、ギヤラリーしている生徒達みんなはこの世の終わりのように惚けてしまっている。男も女もである。

「今日の生徒会を休みにしたのは十八の為なんだからね？ 2 F
に行ったのに、もう帰ったって言うじゃない」

ちなみに俺も固まってます。刹那がぶんぶんしながら、なんだか幸せになってしまうようなことを言っているが、理解していいのかわからない。

「今日はあなたの家に行くわ」

時間が止まった。

「……………は？」

「いつも私の家じゃ十八も疲れちゃうでしょ？ 今日十八の家で勉強会しましょう？」

呼吸が止まった。

「瞬は来れないみたいなのよ……………」
「うがぁ！ 持病の原因不明の腹痛があ！」とか言ってたわ。サボリね……………。曜子は勉強会自体を中止にしようとか言って帰っちゃっし……………」

頭の中に『男を見せる』とか言いながら笑顔で親指を立てる瞬の顔が浮かんだ。海老原さんも来れない？ ……って事は？

刹那と二人つきり？

「まあいいわ。私がしごいてあげるから行きましょう」

固まっている俺の手をぐいって引つ張る刹那。人垣で埋まる校門にスタスタと歩いて行く。

現在進行形で惚けている人垣がサーッと十戒のように割れた。その間を当然のように進む刹那とオプシヨンの俺。

思考が全くついて行けずに引き摺られて行く坂の中腹くらいの時遠くなつた校門から『ノオオオオオオッ！』っていう渋の叫び声が聞こえた。

塩田本家。江戸時代からある増改築を繰り返しているあばら屋である。

「随分と久し振りだわ」

そんなほつたて小屋にはあまりにも場違いな刹那は嬉しそうに上がり込む。ふわっと漂ったフローラルな香りが家の中のおどろおどろしい雰囲気を一瞬で緩和した。

「十八の部屋は？」

ギシギシと鳴る廊下の先まで行ってしまった刹那は見回しながら訊いてくる。

「道場の手前の部屋だよ……その部屋と居間以外は使っていない部屋だから開けないでね……多分ホコリとかすごいと思うから」

なんだろう……この幸せすぎる展開は。俺ん家がどんどん天国に進化していくぞ？

楽しそうに笑う刹那を見てみると、今まで悩んでいた事やこれから考えなくてはいけない事が馬鹿らしくなる。

やっぱり俺は刹那の事が好きなんだろうか……。

『違うよ、僕が好きなのは遥だけだよ』

「っ痛う！」

こめかみに激痛が走った。

頂点に達した罪悪感が溢れ出たように。

「……十八、大丈夫？」

不安そうな表情の刹那が振り返る。玄関の土間で靴も脱がずに立ち尽くす俺の顔を遠目で窺っていた。

「何でもないよ……使える部屋は居間くらいだから、そこでやるっ」
思考を遮断した俺は取り繕った笑顔で言う。そのまま、訝しげな表情の刹那の視線を交すように居間に向かった。

12畳と無駄に広い居間。そこにあるやたらと年季の入ったコタツに隣同士で俺と刹那は座っていた。

教えてくれる刹那達のお陰か、俺は今回のテスト範囲の一通りを網羅していた。得意教科も苦手教科も、今回のテストに限ればかなり上位を狙える自信があった。

刹那と二人つきりで、いつもの居間にいる刹那への違和感の中でも俺は集中していた。

俺は刹那が言っていた『トップ30入り』を本気で狙っていた。
刹那が言ってくれた事だし、刹那が俺と一緒にいてくれる理由が勉強なら、絶対に応えたいと心から思っていた。

昨日みたいに意識が飛ぶ事がないように、俺は目の前の教科書と刹那の声に意識を集中させていた。

「……今日はこちらまでにしておきましょう……」

突然、刹那はため息を吐いたような疲れた声で言った。

「えっ？ まだ始まって少ししか経ってないし、すごい中途半端だよ？」

ここでの勉強会が始まってからまだ一時間くらいしか経っていない。いくら何でもこれではお粗末だ。

「十八……最近、少しおかしいわよ？ 私の言ったことに応えようって頑張ってくれるのは嬉しいけど、ちょっと無理をしすぎよ？」

呆れと不安の混ざったような表情の刹那は少し言い辛そうに言った。

「……えっ？」

俺を激しい不安感が襲った。とてつもなく嫌な予感がした。

「最近のあなた……充実しているように見えるけど、とても危なっかしいわ。十八の家でなら大丈夫かなって思ったけど、何も変わらないもの……」

少し呆れを強くしながら言う刹那。嫌な予感が膨れ上がって行く。

「私も無理を言すぎたわ。明日からの勉強会を中止にして、目標もトップ100くらいに下げましょうか？ キツイなら執行部の活動も」

「嫌だっ！！」

刹那が言い終わる前に叫んでいた。呆れと不安の表情のままビクッと体を強張らせる刹那。

勉強会を中止？

目標を下げる？

執行部の活動も休ませるつもりか？

そんな事をしたら……俺は一人になってしまっじゃないか……。

「ちよ、ちよっと、十八……？」

軽く引き気味の苦笑で言う刹那。

この部屋を包んでいた幸せな空気が醜い俺に浸食されていく。

「ごめん、刹那。でも、嫌だよ……勉強会を中止にするのも、テストの目標を下げるのも……」

優しい言葉を掛けてくれていたのに、自分の都合だけで我が儘を言う。まるで子供のおねだりだった。

部屋の空気がどんどん濁っていく。

「十八……あなたがそこまで言うなら、私も強くは言わないけど……」

苦笑すら作れない刹那は困った表情で俺から僅かに距離を取る。

嫌な空気を吐き出す俺から逃げるように。

「とにかく、今日は終わりにしましょう？ 私も家に帰らなくては

いけないし、十八も今日くらいは息を抜きなさい」

立ち上がる体制を作りながら言う刹那。

この部屋の空気の不味さに堪えられないように。

自分自身に対してか、濁っていく部屋の空気に対してか、俺は吐き気がしていた。刹那の目に映る俺が許せなかった。

「……わかった。ごめん、刹那……」

そう言った俺は醜い自分を隠すように俯く。恥ずかしくて逃げ出したかった。

「じゃ、私は帰るわ。また明日、十八」

既に立ち上がっていた刹那は言いながら襖を開けていた。

よせばいいのに、俺は慌てて立ち上がった。玄関に続く廊下を刹那に続いて歩いて行く。

「無理しちゃダメよ？ じゃね」

刹那はそう言って玄関の扉の向こうに吸い込まれて行った。よっぽど居心地の悪い空間に堪えられなかったのだろうか……刹那は逃げるように行ってしまった。

送って行くべきだろうと思ったけど、俺には怖くて出来なかった。軽く手を上げて送り出すので精一杯だった。

刹那が帰ってから、どれくらいの時間が経っただろう。

俺は刹那を送り出したままの体制で、冷えきった玄関に立ち尽くしていた。

カチカチ

カチカチ

屋敷の中の全ての時計の音が聞こえる。

カチカチ

カチカチ

幾つあるのかわからない時計の音の中に一つだけ重なっていない音があつた。

僅かに一つだけ出遅れた秒針の音は酷く不愉快に聞こえた。それだけでいびつな不協和音に聞こえた。

俺は思う。

俺みたいだと。

執行部……俺みたいな不良品が入ったから重なり合っていたものが歪んだんじゃないか？俺がいるせいで刹那はあのつらい表情をするんじゃないのか？俺がいるせいで瞬はお節介を焼かなくてはいけないんじゃないのか？

俺は弾かれたように居間へと戻った。

勉強会のままのコタツにしがみついてペンを取った。刹那がくれた優しさを無下にし、『いつものように』取り憑かれたように教科書を睨んだ。

その日の深夜。

流石に朝まで勉強をするつもりは無い。いや、俺はそうしたいとは思っているが、布団に入るようにしている。

ただ、自分を正当化しようと布団に入る。眠っている、休んでいる、と自分に言い聞かせる為に布団に入る。

ピリリリッ

暗闇の自室に鳴り響く電子音。

飛び起きた俺は携帯を掴むとその電子音を止める。

この電子音、着信ではない。自分で設定したアラームの電子音だった。

「ハアッ！ ハアッ！」

振り払える筈のない悪夢を中断した俺は小さな携帯を抱き締める。布団にくるまって蹲って小さな携帯に縋る。

蹲ったまま、震えたまま、携帯を開いた俺はアラーム設定画面を呼び出す。

30分後に設定する。

先ほどのアラームも30分前に設定したもの。更に前の一時間前にも同じ事をした。わざわざ着信音と同じ音を選んで設定した。

誰かからの電話と錯覚するように普段から使っている着信音を選んだ。

俺は深夜のこの作業を勉強会が始まってから、ずっと繰り返している。

曖昧で不安定な現実に縋り付く為に……。

みんなの優しさに包まれている俺が悪夢に引き剥がされない為に……。

俺は抗っている。

俺は藻掻いている。

俺は足掻いている。

俺は堕ちている。

『…………無理…………しないで…………』

…………わかってるよ、海老原さん…………。

明晰夢めいせきむというものがある。

明晰夢とは、眠っている時に見る夢の中で、自分が夢の中にいると自覚しながら見る夢のことである。

Lucid Dream (ルシッド ドリーム)ともいう。

俺はこの明晰夢を『必ず』見る。俺の悪夢は必ず明晰夢だった。

いや、明晰夢と呼べるものよりも、ずっとたちの悪い夢を必ず見
てしまう。

遙はもういない。

『あーうー……テストなんて、どうしてあるんだろ……』

僕の右手と左手でつながった遙は言った。朝から今日のテストの文句ばかり言っていた。

『頑張った結果を見せる機会、学校が生徒の能力を測定、評価する機会。意味を考えれば色々と出てくるかもしれないけど、僕もその意味を理解しかねているのは確かだね』

僕は苦笑しながらも優しく言った。

『うわぁーっ！ 難しいこと言わないでよーっ！』

……つもりだったけど、僕の言い方が悪かったか、遥は駄々っ子をするみたいにつないでいる手を振り回してくる。

『ごめん……い、いやさ、僕は遥に勉強を教えるのとか、楽しいよ？ それで遥が頑張ってくれば、もっと嬉しいし』

僕のフォローというか、とっさの苦しい言い訳みたいな本音を聞いた遥はピタツと駄々っ子を止める。そして、はにかんだような顔をチラチラ向けると、今度は恐る恐るといった感じで真っ赤な顔を僕に合わせてきた。

よくもまあここまでコロコロと表情が変わるものである。……かわいいけど。

都合のいい遥を造り上げるな。

『……ずるいよ……そんなこと言われたら、ボクも頑張るしかないじゃな……』

視線から、言葉から、つないだ掌から、遥の気持ち伝わってくる。

遥に当てられた僕の気持ちも伝わったに違いない。

とっても恥ずかしいけど、とっても心地のいい関係。

僕は遥の為だったら、なんだって出来る。遥が喜んでくれるなら、なんだって出来る。

僕の物語の主人公は僕じゃない、僕の物語の主人公は遥なんだ。僕は心の中心は遥なんだ。

都合のいい夢を見るな。

『……す、少し急ごっか？ せつちゃん達も待ってるし、遅刻しちゃうよ』

照れ隠しするみたいにわざとらしく言う僕。たぶん僕の顔も真っ赤であるに違いない。

つないだ小さな掌は僕の全て。

つないだ小さな掌は俺の全て。

呼ばれて振り返った世界が、俺の全てなんだ。

……

……リリッ

都合のいい妄想が霞み出す。

ぬくもりを伴った優しさが黒く塗り潰されていく。

ピリリリリッ

曖昧な現実にある俺の左手が動き出す。自分の意識がそうさせているのか、別のものなのか、今の俺にはわからない。

ピリ

掴んだ携帯を引き寄せながらアラームを止める。

「ハアッ！ ハアッ！」

真っ先に寝汗にまみれた体の不快感を感じ取る。気持ち悪い……激しい動悸がして、体がもつと酸素を寄越せと要求してくる。

布団の感触、愛用の銀色の携帯、寝汗を否応に冷ます窮屈な自分の部屋の冷気。意識が覚醒していく。

「……はる……か……！」

覚醒した意識が不快感の次に感じ取ったのは激しい孤独感だった。現実を理解すればするほど、胸を突き刺すような切なさが入み上げてくる。起き掛けの頭でもさつきまで見ていた遙の表情がはつきりと浮かぶ。

俺は両手で壊してしまいそうなくらいに携帯を握り締める。ガタガタと震える体を止めてくれ、と願うように。

アラームの設定を……と考えながら尚も震え続ける両手で携帯を開こうとして気付く。自分の馬鹿げた行動……反吐が出る。逃げてばかりいて誤魔化す事しか考えつかない自分に憎悪すら湧き上がる。

人間が夢を見るには1〜2分の睡眠で十分な夢を見る事ができる。たかが30分ずつ睡眠を刻んだところで意味は無い。ただ自分の体をいじめているだけのようなもの……。

……俺は何をやっているんだ。

そう頭では考えたとしても俺は携帯を開く。ただ自分は抗っていると言い聞かせるように行動する。もう俺にはそうする以外に考え付かなかった。……涙が出そうになった。

「……………バイト……………行かなきゃ……………」

開いた携帯に表示されていた時刻は午前3時を回っていた。馬鹿げた行動を繰り返している内に出掛ける時間が迫っていた。

既に頭の中のスイッチは切り替わっていた。時間通りに鳴り始める携帯のアラームのように、俺は痛む体を引き摺るように布団から這い出した。

全てが光り輝いていた。

楽しくて、優しかった。

笑顔を振り撒いて、ぬくもりを分け合っていた。

過ぎ去ったあの時は俺の心を捉えて離さない。

優しい人達の笑顔が俺の心を捉えて離さない。

……きっと、それは今も……。

だから、俺は抗ってしまう。

自分の運命を呪ってる訳じゃない。自分の過去を嘆いてる訳じゃない。不甲斐ない自分を蔑んでる訳じゃない。

俺はただ優しい人達に優しい笑顔でいてほしいだけなんだ。

たとえ自分を見失ったとしても。

新聞配達のバイトを終え、朝の鍛練を終え、俺は毎朝の習慣通りに仏壇の前に座っていた。

「……………」

四つ並ぶ遺影。俺は虚ろな目で見つめる。

変わらない表情を前にして俺の胸は切なくなる。痛いくらいに胸が締め付けられる。

静まり返る仏間。俺は語り掛けることができない。唇を噛んで写真を見つめるだけで精一杯だった。

湧き上がる罪悪感。

湧き上がる疚やましさ。

湧き上がる虚しさ。

それらに堪えられない。ある筈の無い視線に堪えられない。自分が造り上げた愚かな被害妄想に怖くなる。

俺は一度も語り掛けることもないまま、逃げ出すように仏間を後にするしかなかった。

部屋を出る時に聞こえた気がした声……優しく思えた筈のその声すら、怖かった。

集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中……。

晴れているのか、曇っているのか、雨が振っているのか、それすらわからない通学路を進む。いや、時計を見ていなければ、昼間なのか、夜なのか、それすらわからない。

神経を研ぎ澄まして意識を叱咤し続けなければ、その場に蹲ってしまいそうだった。

期末テスト、今日は最終日である三日目。よく覚えていないが、初日と二日目はどうにか乗り切ったと思う。正直、至るところで記憶が飛ぶ自分に不安を感じてしまう。しかし、テスト自体は確かな手応えだったのだけはしつかりと覚えている。

一生で一番勉強したんじゃないか、と思うほど勉強した結果を試す時。歩くことすら精一杯だが、今日も問題を解いて答えを書くことなら出来そうだ。……馬鹿げている。

家を出てからどれくらい時間が経っただろうか、周りには俺と同じように登校しているであろう生徒達の姿がある。……ような気がする。

最近の俺ならば、生徒会活動の為に始業時間一時間前には登校していた。しかし、テスト開始からは朝の活動だけは休みである。だから遅く登校した今日、学校の近くであろうここが賑わっている。……という事は始業時間の数分前くらいなのだろう。

周りの生徒達の表情はわからない。彼らが交わし合っている会話の内容もよく聞き取れない。テストの事か、それともテスト休みに關しての事か。今日はテスト最終日、明日はテスト休み、みんなのテストへの不安も、テスト休みへの期待もひとしおなのだと思う。……もちろん俺も。

「待って！」

自分に言い聞かせるように状況を確認している俺に突然の聲が掛かる。

数時間前の妄想と重なり合ったその声にドキリと心臓が跳ね上がる。

った。

遙？ そう思う。俺はまだ夢を見ているのか？ そう思う。

自分の虚勢が首をもたげ始める。一人の時には到底なし得ない集中力が自身を保とうと奮い立つ。

「……………」

……そうして意識がはつきりし始めると、思考の矛盾に気付く。

違う。

遙の筈がない、この声は刹那。今は現実に他ならない。

「おはよう、十八」

追い付いて来た刹那が隣に並びながら言う。走って来たらしい彼女は肩で息を弾ませていた。

「おはよう」

虚勢を絞り出すように挨拶を返す。表情はわからない、笑っているつもりだが、上手くできているかは自信が無い。

「……………十八……………」

やはり上手くできていなかったらしい……………俺の挨拶を聞いた刹那は苦しそうに表情を歪ませる。呆れたのか、心配してくれているのかは、わからない。

もうすぐ学校とはいえ、刹那がどうして俺の家の方角から来たのか尋ねたかったが、俺は半ば諦め気味に刹那の次の言葉を待つしかなかった。

「何でもないわ……あなたの好きなようになさい……」

「えっ……？」

思っていた事と違う事を言った刹那に、俺は呆気に取られた。

刹那はその俺をちらりと一瞥しただけで校門への坂を駆け上がって行ってしまった。

……胸に風穴が空いた気がした。

最近は何しかった刹那も、今の俺のどうしようも無い姿に呆れてしまったのだろうか……。

空虚な心で立ち尽くす俺はぼんやりと刹那の背中を見送った。

いつの間にか教室にいた。

自分の席である窓際の一番後ろの席。見慣れた教室の風景。テスト期間でも席順は変わっていないから、目の前の渉の後頭部がある。

「それでは、早速テストを配りたいと思います」

えっ？

「伏せたままで後ろに回していつてください」

影の薄い担任が問題用紙と思われる物を配っている。どういう訳だかもうテストが始まってしまっらしい。突然の事に思考が追いつかないせいなのか、もっと根本的な間違いなのか、俺にはここまでの経緯が全くわからない。

不安になった俺は条件反射に近い動きで隣の隣の瞬に視線を移す。

瞬は俺の視線に気付かないのか、机に肘を付いてつまらなそうに座っている。上の空で黒板を見つめる様子はどこか疲れているようにも見えた。

ふと気付く。

そういえば俺は瞬と久しく会話をしていない気がする。今までであれば、学校はもちろん、俺の家、最近では生徒会の仕事の時などに周りから変な噂が立つくらいに一緒にいるのが当たり前だった筈だ。

おかしい……最近、瞬と絡んだ覚えがほとんど無い。一番最後の記憶でも一週間以上前、合同会議の日だ。その日の勉強会が最後だと思うが、俺はその時に瞬と会話をしたか？ ……してない気がする。

たぶん最後の記憶では、合同会議後の先生とのやり取りの前が最後だ。それ以降に瞬と話した覚えが全くない。

……どうして？

「……シオ？」

「えっ？」

ズキズキと痛む頭を抱えていると、声が掛かる。顔を上げると、用紙を俺の眼前でヒラヒラしている渉が首を傾げていた。

「あっ……ごめん」

すぐに気付いて用紙を受け取る。

そうだった、今はテストが始まるうとしている時だった。俺はせっかくなかった。勉強の成果を示さなければいけないんだ。

今日の一限目は数学。俺が一番点数を稼げる教科だ。頑張らないと……。

瞬には、このテストが終わったら話し掛けてみよう……。

ハッとした。

気が付くと、目の前にはテスト用紙。いつの間にか意識が飛んでいたのかと慌てて問題を読むと……？

英文。

英文の羅列がある。

俺は目眩を覚えた。

おかしい、おかしい、おかしい。

今は数学のテストの筈じゃないのか？ どうして数学のテスト用紙に数字がほとんど無いんだ？ どうして英単語の群れが書き記されているんだ？

確かに今日は英語のテストもある。一限目が数字で二限目が英語で間違いはない。という事は俺は数字のテストが始まる前から英語のテストの二限目まで意識を失っていたという事か？

背中にも、額にも、脂汗がにじんだのがわかる。己の状況に大きな危機感を感じ取る。

遅かれ早かれ、馬鹿な行動を繰り返している自分がどうにかなるのはわかっていた。

……でも、テストが終わるまでは保ってほしかった。

どうやらそれは叶わない願いだっただようだ……。

理解した途端に頭はスッキリした気がする。周りのクラスメイト達が発するペンの音がやけにクリアに聞こえた。うるさいくらいに大きく聞こえた。

湧き上がる焦燥感は無視。幾つもの矛盾に気付かないのか、気付けないのか、心の中で自嘲しながら俺もペンを取った。

瞬間、ガタンという大きな音、同時に視界が掻き回されたように回転した。周りから悲鳴のような声が聞こえた気がする。

なんだろうっ？ と考えよつとするが叶わない。

俺の意識はそこまでだった。

怠惰の中に見いだした意志はわりと呆気なかったな。

必死に頑張つて、たくさんの人達に迷惑を掛けて、信じてきたものを犠牲にした結果は『裏切り』だ。

慣れない勉強をして、縋るものを間違えて、行き着いた先は身の破滅だ。

志半ばで終了。

傑作だ。

みんなを裏切った気分はどうだ？

嫌な現実を受け入れる準備は出来たか？

まだ誰かを信じているのか？

誰を？ 刹那？ 瞬？ 涉？ それとも知り合つて間もない生徒会のみんな？ 妄想の遥？

一番裏切った結果になった刹那に何を求める？ 昔と変わっていなかったとしても、刹那はがっかりするだろう？ どんな顔をして会うつもりだ？

いつも一緒にいてくれた瞬か？ いや、とっくに見限られてるだ

ろう？ 瞬が家に泊りに来なくなってどれくらい経つ？

生徒会とは関係ない涉？ 関係ないから信じるのか？

五年前に繋がらない他のみんなだつて同じだろう？ 何にも知らない彼女達からすれば、ただの狂気の沙汰にしか見えなかつただろう？

一緒にいて何故か安心する海老原さんなら大丈夫か？

誰かさんに面影が重なるルナちゃんなら大丈夫か？

瞬みたいに気兼ねのいらぬ橋なら大丈夫か？

苦手だけど楽しい思い出を作つた進藤さんなら大丈夫か？

妄想の遙に絶るのはいいけど、今は現実なんだ。ちょっと無理があるだろう？ また都合のいい妄想を引っ張り出すのか？

嫌味な声が俺を責め苛んでいる。

俺が落ちた時に聞こえる『俺』の声。……随分と久し振りに聞こえた気がする。やけにタイミングがいい。俺が本当に落ちるまで、傍観していたみたいに……。

自分に言い返すなんて馬鹿げている。というより言い返す必要が無い。無視しておく。

今が夢なのか、現実なのか、よくわからない。意識はあるが、目に映るものが無い。

眠っているのか、目を閉じているだけなのか、黒い世界は何も答えてくれない。

どちらとしても意識がしっかりしてくれているお陰か、それとも嫌味な声のお陰なのか、俺は気付く事が出来た……。いや、自分を取り戻したと言っている。

打ちのめされて、自覚して、ようやく自分を取り戻した。

馬鹿な事をやったものだと言わする事が出来た。

刹那が打ち明けようとしたあの日から、守るものを見つけたあの日から、走り出した俺は現実に縋り付いていた。

悪夢を見る事を恐れ、現実を維持している気になって、目的を見失っていた。自分を見失っていた。

俺の見いだした意志。そんなただの綺麗事だった。俺は嫌な思いつきから逃げただけだった。自分の妄想から逃げただけだった。

だから追い縋るものも受け入れる、幾つもの。だから見失う、幾つもの。

本当は忘れたくなくせに……現実が怖くて仕方なくせに……。

そうだ。

俺は現実と妄想を都合のいいように入れ替えていた。

都合の悪い事は忘れ、都合のいい妄想を現実に置き換えていた。ある筈の無い夢の中の出来事を自分の記憶に刷り込んでいた。

俺の見る悪夢はある筈の無い『今』を映す妄想。

自分の都合のいいように造り出した『遙』を登場人物にしている妄想。成長した遙を俺と同じ17才に勝手に想像した妄想。五年前の事件を都合よく無かった事に行っている妄想。

いない筈の遙と高校に通い、いない筈の遙と俺は笑い合い、いない筈の遙と瞬は笑い合っていた。

都合のいいだけの妄想は上手く出来ていた。俺が執行部に入った途端に登場人物に刹那が追加された。執行部のみんなも追加された。遙を中心とした妄想は執行部に舞台を移して続いた。

いない筈の遙は刹那と笑い合い、いない筈の遙は海老原さんと笑い合い、いない筈の遙はルナちゃん達と笑い合っていた。最近ではいない筈の遙と勉強会までしていた。

明晰夢であるその夢。俺は干渉する事が出来なかった。

『そこに遙はいない』……何度も言い聞かせた。

『これは妄想なんだ』……何度も言い聞かせた。

でも、俺の妄想は一人歩きしていた。そうあってほしい。遥なら喜んでくれる。遥なら応えてくれる。

都合のいい方向にばかり進んだ。

それが現実なら、どんなに嬉しい事か。

俺は干渉できなかったんじゃない。干渉しなかったのかもしれない。どんなに現実が歪んでいっても、そうなる事を何処かで願っていたのかもしれない。

そして、現実に戻った時に感じる絶望のような孤独感……目覚める度に俺は狂いそうになっていた。夢と現実、どちらも俺には地獄だった。

何処にも遥はいないのだから。

……これを悪夢といわずに何というか。

俺が現実には縋り付いてから、振り払える筈の無い悪夢は俺の縋った現実にも及んだ。

説明会や合同会議のあった日の勉強会。あれは俺の妄想だった。

意識が飛んだのも妄想。刹那が俺の顔で遊んでいたのも妄想。い

たずらな瞬の行動も妄想。見つめていた海老原さんも妄想……。

違う。あれは海老原さんじゃなかった。見つめていたのは遙だったんだ。

俺は自分の都合のいいように見た夢の中の遙を現実の海老原さんと置き換えていたんだ。矛盾が発生しないように。

あの日の真実は違った。

勉強会の中に意識を失った俺は、刹那達に気を遣われてずっと居眠りをしていた。

目を覚ました俺に刹那は優しく言った。無理しなくていい、目安箱の件も忘れていい、冗談だと忘れてしまえと。

俺はそれが嫌だった。刹那の言ってくれた勉強会の目標も、先生が信じてくれた目安箱の件も、俺にはそれを無かった事にするなんて出来なかった。

だから、夢に見た妄想を自分の記憶にすり替えたんだ。都合のいい方の記憶を選んだんだ。

他にもあるかもしれない。校門前の『だれだ』も、今日の登校の時に追い付いて来た刹那も……都合のいい遙を刹那にすり替えただけなのかもしれない。

まだある。

いくら自分の記憶を捏造したとしても、現実での俺の体はすぐに息切れした。

当然だろう。ただでさえ弱い体で、ほとんど睡眠を取っていないのだから。俺は日に日に弱っていった。

それに瞬が気付かない筈がない。

思い起こせば、瞬はいつも俺を気遣っていた。気遣ってくれていた。

『お前はいつも真に受ける……どうして気付かない振りをしないんだ……』

忘却した。

『一人で抱え込むなよ……』

忘却した。

『あと少しだ……頑張れ……』

忘却した。

瞬だけじゃない。海老原さん……彼女は最近、朝の新聞配達のパイトの度に自宅の前で待っていてくれた。

暖かいお茶を入れた水筒を持って待っていてくれた海老原さん。

忘却した。

手伝うとか言ってジャージ姿で待っていた海老原さん。これには本当に驚いた。

忘却した。

ルナちゃん達もそうだった。俺に与えられるかもしれない新しい仕事、目安箱の件。

『ルナ達って暇なんです。目安箱に関する下調べはルナ達がいたからです。先輩は勉強会に専念しやがれです』

忘却した。

『あたしだってやべえんだって！　こんな事してる暇ないんだって！　帰ったら円のスパルタな個人指導が待ってるんだって！　いや……まあ、ルナが言うからやるけどさ』

忘却した。

『理解しかねる……事が終わったら、簡潔な、いや、こと細かな説明を要求する』

忘却した。

自分を維持するのに、都合の悪い事を全て忘却してきた。

……そして、みんなを裏切った。やり遂げる事すら出来なかった。
なんて馬鹿げているんだろう。なんて愚かなんだろう……。

そう思った時。

風が頬を撫でた。

現実に呼ばれた気がした。

閉じていた目を開く。

浮き上がったような、落ちたような感覚が捉えた世界は白かった。

肌を感じる白いベッド、肌をくすぐる風に揺れる白いカーテン、
窓ガラスから差し込む白い光。

保健室。

僅かに鼻をつく薬品の匂い、自分が横たわる布団の感触、窓ガラスの向こうの風景、ここが一年二年校舎の一階にある保健室だとわかった。

俺はゆっくりと半身を起こす。ぴりぴりと痛む節々の痛みが現実を更に色濃くする。

12時。壁に掛けられた時計の針は二つとも真上を向いていた。午前で全て終わる予定であったテストは終わってしまっただろう。

この時点で俺のトップ30入りは消えた。いくら追試でいい点数を取ろうと掲示板には載らない。

俺の願った未来は叶わない。

風は尚も俺の肌をくすぐる。保健室の白に乱反射する白い光が綺麗だった。

「…………刹那」

風に語り掛ける。

俺の声に応えるように風が吹く。白いカーテンが揺れる。白い光が揺れる。

彼女の髪も揺れる。

窓際に寂しそくに佇む刹那の髪も揺れていた。

「……いつから気付いていたの？」

中庭の風景を見つめたままの刹那、独り言のように言った。

「……ごめん」

俺は答えない。自分の一番伝えたい言葉を言った。

「……どうして謝るの？」

窓の外に語り掛けるように刹那の声は続く。刹那の声は、横顔は、寂しそうなままだった。

噛み合わない会話。

しかし、成立してしまう会話。

刹那の言ったことも、俺の言ったことも、二人は理解できてしま
う。

……俺がそれに気が付いたのは、刹那が期末テストの目標を言っ
た時。

もちろん、ちゃんと気付いたのは冷静になってからだが、あの時
の刹那は明らかに刹那らしくない……。

当然だろう、刹那はあんな事を言いたくなかったのだから。あれ
は刹那の追い詰められた姿だったのだから。

刹那は昔からそうだった。己顯示欲が強くて自意識過剰で我が儘

なくせに、いつも他人の事ばかり考えている。誰かに無理を押し付ける事なんて絶対にしない。刹那の我が儘には、いつも優しさが隣り合っていた。

俺は刹那との距離を取り戻す度に俺はそれを確信していた。

「謝る事が多すぎるよ……心配かけた事も……テストの事も……何も言わなかった事も……何も言わないでくれた事にも……」

刹那に伝えられなかった俺には、裏切ってしまった俺には、言える言葉がわからない。

でも、足りない言葉は幼馴染みという俺達の関係が補ってくれる。五年間の隔たりはもう、消えていた。

「意味不明ね……本当にあなたはわからない……」

風が刹那の感情を俺に運ぶ。変わっていたと思っていた刹那は本当に優しいままだった。

「自分のこと『俺』とか言ってるし、へタレになってるし、何でも出来たのに何にも出来なくなってるし……私のこと『佐山さん』とか言っし……」

「……はは……」

本当に何も変わっていない。

「ム力つくから吸収してやれば使えないし、へタレのくせにモテるし、お茶は美味しいし……」

瞬のお節介が切っ掛けだったのだろう……。強引に狭まった距離で感じた隔たりは刹那も同じだったんだ。

「別人みたいに変わったかと思ってたのに……。何も変わってないし……」

「刹那……」

「自分のことなんて二の次……。自己犠牲のかたまり……。あなたは……ばかね……」

横顔を逸しながら言う刹那の声が掠れていく。風が刹那の優しさをはらみ、俺の頬を撫でていく。

「違うんだ、刹那。俺は何も出来なかった。一人で足掻いていただけだったんだ。切っ掛けはそうだったとしても、結局は自分の為だったんだ」

そう、全て自分の為。刹那の為という大義名分を振りかざした独り善がりだったんだ。

刹那が打ち明けようとした五年前も。

刹那が言った期末テストの目標も。

先生の言った窓口の件も。

全てが刹那の為だった。

でも、違う。刹那の為といいながら、自分の嫌なものを受け入れ
なかつただけだった。

その全てに応えようとして、自滅しただけだったんだ。

刹那、疎遠だった五年間を省いても十年の付き合いになる俺の幼馴染み。

小学生の時の刹那は元気で活発だったお陰か、クラスの中心人物の存在だった。

男子も、女子も、誰を隔てること無く接する刹那にみんなは自然とついて行った。

『トヤ君！ フォーメーションXで1組から校庭を奪還よ！』

刹那が引つ掻き回して、引つ張り回していたのはみんなだが、こうして第一犠牲者はとりあえず俺だった。小学校の六年間、いや、幼稚園の時からそれは変わらなかった。

『あだだだだだっ！ ちょっとちょっと！ そんな連携っぽい打ち合わせなんて、全くしてないじゃん！』

とか言いながらも、俺はノリノリで引つ張られていたと思う。

『刹那の事だから強行突破でいいと思うよ。トヤ君』

俺に続くのは瞬、そんな事を言いながら、結局は付き合ってくれていた。

『待つて！ 待つてよおっ！』

いつも出遅れていたのはやっぱり遙だった。ぶつかったり、ずっこけたりしながらも、一生懸命について来た。

そんな四人にクラスみんなは笑いながら付き合ってくれた。

代わり映えの無いその光景は、とても楽しくて眩しかった。

刹那と再会してから、俺は何度その光景を思い出し、何度そう思っただろう。

『ほら男子ども！ 突撃い！』

刹那の号令で突撃して行く野郎ども。

『私とトヤ君も突撃いい！』

『僕は嫌だあああ！』

笑い合っていた俺達の中心には、いつだって刹那がいた。

学校で、教室で、公園で、誰かの家で、刹那はいつでもみんなの中心だった。

あの時まで。

俺は思い出の中に焼き付いた笑顔を守りたかった、取り戻したかった。

浮かれて、見失っても……突き付けられて、誤魔化しても……つらくて、苦しくても……。

それだけは残ったんだ……。

授業免除。

その理由、今ならば、はっきりとわかる。

瞬の話もそう。男嫌い、かわいい女の子好き。……違う、男嫌いとはともかく、かわいい女の子が好きだったのは昔からだった。

球技大会の時の刹那。

今思えば、おかしい事だらけだった。いくら刹那が男嫌いとはいえ、運動が苦手な海老原さんや八神さんの代わりにグラウンドに出る事は無かった。他人に無理強いをするのが嫌いで、女の子なのに女の子の味方だった刹那の行動じゃなかった。

遊園地の時の刹那。

この日が決め手だった。渉に対しての態度や永島さんに対する態度。それもそうだが、一番の理由は観覧車の時。

刹那は母さんの思い出を大切に思ってくれていた。嬉しかった

……俺は刹那との関係を取り戻したと思った。
それは刹那も同じだと思っていた……でも、刹那にとっては、それだけじゃなかった。

俺と手をつないだ。

刹那にとって、かけ離れた距離を縮めた理由はそれだけだったんだ。

……理由は一つ。本当は瞬もわかった筈、刹那を知っているなら、俺を知っているなら、『あれ』を知っているなら。

俺と手をつなぐ前は瞬がいないと駄目、手をつないだ後は俺か瞬が側にいないと会話すら出来ない。俺達以外は触れる事すら叶わない。

刹那はただの男嫌いじゃない。

刹那は重度の『男性恐怖症』だからだ。

光の粒子に包まれた刹那が振り返る。

悲しそうで、寂しそうで、切なそうで、もどかしそうで……でも、

優しそうな表情の刹那。

目に見えるほどの憐憫の情を纏った刹那が俺を遠慮がちに見据える。こんな時でも刹那は俺を気遣ってくれていた。

「……………どうにかなるって、思ったわ……………」

言葉の通りなのか、無理に笑顔を作ろうとしているのか、困ったような表情で言う。

「変わってないって、思ったから……………トヤ君ならって、思ったから……………思っちゃったから……………」

身に纏う憐憫の情に諦めが混ざっている。

「言えなかった……………無理だって、無駄だって……………」

様々な感情が入り交じた刹那、どの感情も今の刹那には自分を苦しめているだけのように見える。

目の前に俺がいるんだ……………俺が思っている通りなら……………いや、もう間違いないだろう。刹那は俺を気遣っているから苦しいんだ。

遊園地の後の刹那は変わった……………いや、元に戻ったというべきか。

執拗に俺に近づくようになり、自宅に呼んでくれるなど、不自然な位に積極的になった。強引に昔を再現するみたいに感じた。

笑顔が増えたけど、思い詰める顔も増えた。

綺麗事を見いだした俺は、嬉しくて、浮かれて……………ついこの間ま

で、気付けなかったんだ。

俺も変わってしまったから。

「十八はどうして私の授業免除が解除になってしまいかもしれない事がわかったの？」

何も言わない俺に、何も言えない俺に刹那ははっきりと訊いてくる。

そう、俺がこんな状態になるまで行動した理由はそれを阻止する為だった。

疑念が確信を呼び、確信が疑念を呼んだ。一つを納得すれば一つ、また一つと違和感が増え、消えていった。僅かな時間で取り戻していく関係、らしくない刹那、打ち明けようとした五年前。

瞬も気付いていたのか、知っていたのか、俺をはっきりと止める事は無かった。暴走する俺を気遣うみんなを引き止めてくれていた。

確信なんて無かった。しかし、そうじゃないと全てのつじつまが合わなかった。

だから、俺の出した答えは一つだった。

刹那の今の質問、俺の答えが正解であった事を知った。

学校という組織、授業免除という有り得ない物、俺というイレギ
ユラー。

学校側が刹那の授業免除を取り下げる体のいい口実は俺だった。

トップ30は刹那が出した意向じゃない、学校が俺に課した物だったんだ。

考えすぎ、そうも思ったが、俺のマイナス思考が導いた答えは当たってしまった。

皮肉にもならない。

一人で足掻いたところで悲しい事実が浮き彫りになっただけだった。

……刹那は俺を見つめる。俺が答えるまで待っている。ちゃんと俺の口から聞きたいのだろう。その気持ち、俺にはわかる。

もうここに隔たりは無い。だったら俺達に隠し事なんか必要ない……あの時の俺達がそうであったように……。

「……はつきりわかったのはつい最近だけど、疑問に思ったのはちよっと前だったんだ。刹那がさ、毎日勉強会してくれるって、言っ
たろ？」

「……うん」

「俺、嬉しくてさ、舞い上がった時にトラウマ発動して、ぶち壊しにさせてや」

俺は饒舌に話す。言葉を用意する必要が無い、言葉を選ぶ必要も無い、気兼ねなんか今は必要なかった。

「夜中に電話で話してさ、次の日に刹那に会ってさ……ああ、刹那と昔みたいになって来たなあ、って思ってたらさ……」

自分自身を擁護するつもりは無いが、刹那には俺が足掻いた理由を知ってほしかった。しかし、この続きを言うのは躊躇ってしまう。自分が見いだした綺麗事がやめると訴える。

駄目だ、それじゃ何も変わらない。

全てに繋がる理由なら、俺達に繋がる理由なら、刹那に言わせたくないなら、俺が言わなくてはいけない。俺が最初に気が付いたなら、俺が言わなくてはいけないんだ。

「……思い出しちゃっただろ？ 刹那。その時から刹那は何か隠してるなって、思ったんだ」

刹那が打ち明けようとした五年前。

みんな誤魔化していた。俺も、瞬も、刹那も……悲しすぎて、離れすぎて、突然だったから……。

そう思っていたから、俺は刹那に言わせてはいけないと決意した……綺麗事を見いだした。

でも、それは間違っていた。

どんなに悲しくても、つらくても、認めたくない真実があるなら、認めなくてはいけない真実もある。間違っていた事は今の俺と刹那が証明している。

「……………あの日の」

「違うよ、遥の事だよ」

俺から目を逸らして答えようとする刹那を言葉で制する。

刹那は青白くなってしまった顔を上げた。

「あの日の事は悲しいよ……………思い出したくなんかない……………忘れたい……………でも、遥の事を誤魔化しちゃいけない……………忘れるなんてしちゃいけないだ……………」

あの日から……………俺も瞬も、遥の事を極端に話さなくなった。逃げて、誤魔化して、忘れようとした。五年間、その長い年月で俺や瞬から遥の名前が出たのは数回、僅かに数える程しかない。

再会した刹那の口からは一度だって出ていない。

それが刹那が変わっていない一番の理由なんだと思う。俺や瞬と同じ気持ちでいてくれたんだという理由なんだと思う。

刹那は何も言わなかった。でも、ショックを受けているのは明白だった。青白い顔を俺から再び逸らして俯いている。

俺が伝えなくてはいけない。受け入れなくては俺達は戻れない。

自分にそう言い聞かせて息を呑んだ時、俺の一番深いところが空

っぱになった気がした。

「遙はもういない。遙は……五年前に……死んじゃったんだ……」

真実を言葉にした。

俺の中で何かが消えてしまった。

……もちろん俺だってわかってた。毎日、毎日、夢を見て、思
い出して、探しても何処にもいなくて……頭ではわかってた……。

でも、俺は認めたくなかった。いない、いない、いない、いない
……そう思って受け入れたくない真実から逃げていた。

『死』という言葉の頭に浮かべる事すら出来なかった。

「……………ハル……………！」

……五年振りに刹那が遙を呼ぶ。何処にもいない……返事が返っ
てくる事がない名前を呼ぶ。零れ落ちそうな涙はそのままに、崩れ
落ちそうになる体を震わせていた。

「だから、ごめん……俺が遙の事を、もっと早く、認めていれば……
……こんな事にはならなかったのかもしれない……」

俺の涙も溢れていた。遙を想って泣いている刹那がよく見えない。
俺は泣いてはいけない、そうしなくては刹那の悲しみは増してしま
う。でも、止まらない、拭えない、遙の為に流した涙を止めるなん
て、拭うなんて俺には出来なかった。

白い世界は尚も輝き続けていた。

俺達はお互いを気遣い、意識しながら、慟哭した。

遠くから喧騒が聞こえる。

それを聞いて、俺は我に返る。ひたすら遥の事を想っていた思考が、目に映る白い光の光景が、霧散する。

俺の大切な何かが、霧散していく。

胸にぼっかり空いた風穴が苦しかった。

昼過ぎ。三限のみのテスト課程を終えてからしばらく経つ、誰もこの保健室に入って来る者はいない。別段おかしな事はないが、常勤している筈の校医すらない事に今さら気付く。

おかしな事など何も無い、容易に想像が付く……瞬だ。

俺をここに運んでくれたのも瞬。刹那をここに連れて来たのも瞬。誰も来ないように人払いをしてくれているのも瞬。

もしかしたら、扉の前にいるのかもしれない。もしかしたら、さっきの話を聞いていたのかもしれない。もしかしたら、俺達と同じように涙を流しているのかもしれない。

お節介な親友、優しい親友、大切な親友……俺が迷っても、俺を信じてくれた親友……。

俺は応えなくてはいけない……親友にも、目の前の刹那にも……。

ようやく気が付くことが出来たから……。

刹那はまだ小さな嗚咽を繰り返している。

俺はゆっくりベッドから下りる。軽く目眩がしたが、構わず立ち上がる。

窓際に佇む刹那を見据えるといつか右目に焼き付けた刹那が重なる、真夜中の電話で聞いた刹那の声が重なる。

遠くに感じていた刹那、もう俺には大切な友達の為に涙を流す普通の女の子にしか見えない。

一歩、衝動的に体が動く。

あまりに弱々しく、見ているのがとてもつらい。五年前の刹那との日々を思い出す。再会した刹那との日々を思い出す。俺の心の中の衝動が加速する。

また一歩、刹那との距離をゆっくりと縮めていく。確かめるように、思い出すように、ゆっくりと縮めていく。

「……刹那」

傍らに立った俺は呼び掛ける。

刹那の嗚咽が止まる。項垂れたまま、意識だけが俺に向けられる。

「……………」

刹那は何も言わない。自分自身が発するものに苦しんでいるように見える。俺自身が幾度となく体験して来たそれと同じものを体現しているように見える。

今、この瞬間、未練と罪悪感を有するのは俺の筈だった。たくさん
の迷惑を掛けて、為すべきことも出来なかった……そして遥の事
……俺は強い自責の念に駆られている。

しかし、この瞬間、この場所を支配しているのは刹那の感情だった。俺よりも深い感情が俺を取り込み、空間を支配している。

これでは駄目だ。こんな結末は誰も望んではない。

「……刹那はどうなっちゃうのかな？ 授業免除はやっぱり解除になっちゃうの？」

遥を想い、五年前を顧みる刹那の気を逸らしたかった。とっさに手近な話題を振ったつもりだったが、すぐに自分の浅はかさに気付く。

たくさんものを失ったあの日。俺のトラウマも、刹那のトラウマも、切っ掛けはその時に生まれた。授業免除……それは刹那のトラウマに大きく関わっている。

「……生徒会長の権限を行使したとしても、上手く保たせて学年末まで……その後は一般生徒と同じように授業に出なくてはいけないわ……」

俺の失言を受け止めてくれた刹那、頂垂れたままで力なく答える。

強い諦めを含むその声、俺はぶり返した自分の不甲斐なさを心の中で嘆く。

「刹那、ごめん……」

何度、謝ろうが結果は変わらない。でも、謝らずにはいられなかった。弱い自分を晒すのに慣れても、嫌な事から逃げるのに慣れても、人を傷付ける事に慣れるなんて出来る筈ない。

「……謝らないで……ふふ、十八だけじゃないのよ？ 三限目の保体は私も受けていないんだから……」

「えっ……？」

俯いていた顔を上げた刹那は薄く微笑みながら言った。言葉の意味も、微笑の理由もわからない俺は驚く。

「保健体育のテストなんて無意味よ……面倒だから、さぼったわ」
力ない微笑みを続ける刹那はふざけた冗談のように言う。

俺は絶句してしまった。いくら刹那が無駄や余計が嫌いだとしても、自分の沽券に関わる事まで簡単に切り捨てるのだろうか？

「う・そ……冗談よ、受けていないのは本当だけどね」

否、刹那に言わせれば、それこそ無駄である。理由は他にある。

「倒れちゃった十八を放って置けなかったのもあるわ……でも、私はきつと気付いたのね。逃げてばかりじゃいけないって……。そう

思ったら教室に戻ってテストを受ける気分になんて、なれなかったわ……」

何処か吹っ切れたような表情の刹那、遠くを見るような瞳で虚空を見つめ、力ない声で呟く。

「ずっと、ずっと、逃げて来たわ……嫌なものから目を逸らして、自分の殻を必死で作って、維持して……気が付いたら、私は一人になっていたのよ……」

そのまま語り出す刹那。

虚空を見つめる濡れた瞳、掠れている綺麗な声、拭うことすらしない涙の跡……しかし迷いのないその姿は、とても綺麗で、とても危うくて、悲壮美すら感じ取れた。

「どんなに別のものを意識しても、無駄だった……無くなったものも、残ってくれたものも、目を逸らすことなんて出来る筈ない。一番無意味だったのは私の五年間よ……」

俺は何も言えない。刹那の陰りを支えるように、見つめ返すだけしか出来なかった。

「全く……お節介な弟のせいで全部ぶち壊しよね……」

自嘲するようなため息混じりの含み笑いで首を傾げる。俺に同意を求めるように。

「刹那……」

全くだ……お節介な親友は、たった一ヶ月で俺達をここまで変えてしまった。継ぎはぎだらけだけど、間違いだらけだったけど、俺達は時間を取り戻している。

「私、今日で諦める……いいえ、そうじゃなかったわね、認める事にしたの……ハルの事も、私の事も……」

言いながら真っ直ぐな視線を俺に向ける。

「あなたの事も」

射抜くように据えられた黒い瞳に俺が映る。
見つめ返す俺の瞳に刹那が映る。

互いを映した瞳の中が、互いに埋め尽くされていく。

刹那の瞳に映るのは俺だけ。
俺の瞳に映るのは刹那だけ。

そして。

刹那と俺の距離がゼロになる。立ち竦む俺の胸に両手をあてがい、俺の視線から逃げるように顔を埋める。

俺の胸は刹那でいっぱいになった。

「……十八……ごめんね……」

絞り出すような声が俺に染み込んでいく。優しすぎる刹那の感情が染み込んでいく。

俺は言葉に乗せられた真実を瞬時に理解してしまった。

「ごめん……！ 十八！ ごめんなさい……っ！！」

添えられたただだった両手が俺のワイシャツを掴む。昂ぶった刹那の感情が俺を突き抜けていく。遥に向けた優しい感情よりも大きな激情が俺を突き抜けていく。

刹那はあまりにも変わってしまった。でも、あまりにも変わっていないかった。

きつと、刹那はずっとこの言葉を伝えたかったのだろう。

五年間、刹那は苦しんでいたのだろう。自分の中に溜め込んで、溜め込んで、溜め込んで、誰にも言えなくて、苦しくて、怖くて、寂しかったのだろう。

そうだった、俺は知っていたじゃないか。俺達四人の中で刹那が一番臆病だった事を。

刹那が謝りたい理由も、謝れなかった理由も、俺は知っていたじゃないか。

俺達が隔たっていた理由はそれだけなのだから。

今、俺の運命は決まった。

五年前のあの日、俺は身近なものを全て失った。

遙も、母さんも、父さんも、居場所も。

俺だけ残ってしまった。

どんな小さな事でも嬉しくて、触れるもの全てが優しくくて、目に映るもの全てが眩しくて、訪れる全てが待ち遠しくて、楽しかった。

全て失った。

俺は一度死んで、絶望した。

もう。

失う訳にはいかない。

「瞬がさ、言ったんだ」

俺は刹那の激情を遮るように言った。

「……えっ?」

冷静すぎる俺の声に刹那の激情が一気に静まる。ワイシャツを掴む力がスルリと緩む。

「俺と刹那でさ、付き合えって言うんだよ」

俺は沸き上がる衝動を全力で否定する。頭の中で造り上げた運命の台本を読み上げる。

「……十八？」

見当違いの俺の言葉に刹那は困ったような顔を上げる。僅かな距離が開く。

俺は一步下がると、距離を広げる。刹那との距離が更に開く。

たった一步の距離、また踏み出せば触れ合える距離。しかし、俺が開いた一步は絶望的なほど広く、埋められない深い溝になった。

「いやあ、まさかあって思ったよ。俺はさ、『友達』に戻れただけで十分なのにさあ」

台本は続く。俺はなんて酷い男なんだろう……自分の感情を隠す為とはいえ、ふざけた言い回しをしている。

「ちよつと……十八？」

これ以上ないほど困惑する刹那の表情が悲しそうに歪む。

……俺達に隠し事なんか必要ない。でも、それだけじゃ駄目なんだ。

それだけじゃ刹那を守れない。

例え俺が許しても、俺は刹那から五年前のことを聞いてはいけない。俺は『知らない事になっていないといけない』んだ。

俺じゃ駄目なんだ。

「俺は……遥がいなくても……俺達三人の関係が続くだけでいいのにさあ」

今まで口にするのさえ躊躇っていた遥の名前まで出す。刹那の優しさを利用した防衛線を張る。

胸に空いた風穴が俺の代わりに慟哭する。

「刹那は俺と……男と付き合つとか考えられる？」

決定的な言葉を口にした。俺は刹那の優しさを利用し、刹那のトラウマさえ利用した。

「あ……いや、その……」

俺の勢いに完全に吞まれてしまった刹那は言葉を濁して狼狽えている。

……要は言い方一つだったのかもしれない。

刹那は言わなかったのかもしれない、もっと上手いやり方があったのかもしれない。

衝動に任せて抱き締めても良かったのかもしれない。

わからない……何が正しい事なのか、わからない。

正しい事はただ一つ、足りないという事だけ。

やわらかな木漏れ日の中にいるような、暖かい陽だまりの中にいるような、そんな心地よかった俺達の関係は取り戻す事は出来ない。

俺も、刹那も、瞬も……一番大切な時間があの時だったなら、戻れることは出来る。俺達は……。

でも、進むことは出来ない。足りないから……。

維持するなら、それを埋めるものが必要だ。

それならば、俺がまた道化を演じればいい。

「やっぱり刹那も有り得ないって思うだろ？ 瞬もさあ、高校生になっただから、彼女の一人でも作っちゃえって言っけどさあ、俺だよ？ 参ったよねえ」

それは拒絶よりも残酷だった。俺にも、刹那にも。

風穴がしくしくと哭いている。

「……………」

おどける俺を前にしても刹那の悲しそうな表情は晴れない。そりゃあそつだ……俺達の時間は戻っているのだから……俺の棒読みな演技に刹那が気付かない筈がない。

「……と、とにかくさあ！ 刹那の授業免除については考えなくちゃいけないけどさあ……とりあえず俺はみんなに謝らないとだよね！ みんなが何処にいるか刹那は知ってる？」

俺は笑う、しくしくと嘆く胸を押さえ付けながら、崩れ落ちそうな膝を支えながら。

「……………時計棟、みんなは、そこにいるわ……………」

刹那も笑う、俺の馬鹿げた行動に気付いたから、本当に優しいままだから。

「よ、よし！ じゃあ、時計棟に行こう」

俺と刹那は思い出になる筈だった場所を後にする、逃げ出すように……………。

笑いながら、心で哭きながら。

寄り添いながら、距離を保ちながら。

お互いの距離感はない。五年前のような気安い関係……………手を伸ばせば届く距離。

しかし、そこには決定的に開いた隙間がある。

触れてはいけない。越えてはいけない。

そんな関係。

これからは、付かず離れず、不即不離の関係を続けよう。

それが今の俺達の精一杯なのだから……。

遙……ごめんな。

俺、誓ったけど、約束したけど……。

刹那の事、好きなんだと思う。

叶わなくても、時間が無くても。

一緒にいたいよ……。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D

人は傷付け合って生きていく。

俺は君と巡り逢い、言葉を交し合う。
君と俺は触れ合い、視線を交し合う。

俺達は傷付け合う。

俺達は見つめ合う。

俺が見たものが悲しいなら、君が見たものもきつと悲しいだろう。
だから。

俺が見たものが優しいなら、君が見たものも優しくあってほしい。
笑い合うことも、支え合うことも。

生きることだから。

テスト休みが明けた月曜日の朝。

朝とはいえ、まだ明け方前の辺りは暗く、立ち込める朝霧なのか夜霧なのかわからないもので町は霞んでいる。

俺はその町を走っていた。

肩に掛けたバッグには新聞の束、もちろん新聞配達のバイト中である。

久住ヶ丘は海岸線に位置している為か、早朝と夕方にはいつも霧や霏もやが掛かる。今も俺の吐く白い息は体を弾ませる度に霧に吸い込まれている。

新聞配達のアルバイトを始めて一年半以上、12月の冷たい空気も霧り掛かった暗い風景も割り切ることが出来るようになってきた。

俺は思わず足を止めた。

「……………」

割り切ること…………物思いに耽るつもりなどなかったが、どうしても他のものを連想してしまった。

不甲斐ない自分の事、生徒会のみんなの事…………刹那の事。

クズ校の定期テストは準備期間も長ければテスト休みも長い。三日間のテスト課程を終えれば次の週まで休みである。

つまり、あの期末テスト最終日から5日が経ってしまった。

あの後…………自分のしでかした”こと”に怯みつつも時計棟を訪れ

た俺は瞬を始めとした生徒会のみんなに『療養しろ』と、声を大にして断言された。

そして昨日までの4日間、夜のバイトはもちろんの事、今やつて朝のバイトまで強請休暇だった。学校も無いという事で、24時間体制で瞬が主夫兼看守となつて俺を自宅に軟禁状態に……。

まあ、お陰でこうして体の不備は収まってくれたと言える。

気が付けば配達する新聞の束も残り少ない。復帰したてとはいえ、テスト期間中の俺に比べれば配達時間は半分にも満たないだろう。

自嘲気味に苦笑しながら、次の配達先へと条件反射に近い動きで顔を上げると……。

膠着。

次の配達先は『海老原』、その表札だった。

海老原さんの姿は無い。5日前、俺がぶつ飛んでた時までは毎日ここに立って待ってくれていた。……流石に今日はいないみたいだ。

ちよっぴり残念なような、ホツとしたような、何とも複雑な気分だった。

カコンという音を立てながら新聞を投函する。海老原さんの家の新聞受けはポストと兼用の壁埋め込み型でステンレス製のタイプ。一番よく有るタイプの新聞受けだが、自然に投函するのは意外と難しい。物に選つてはカコンがガゴン！になつてしまう事もある。加

えて、古くなつてしまつて立て付けが悪い物だと、新聞が綺麗に入らない。

美しく入らないのだっ！

おつと、若干熱くなつてしまつたか。つまるところ、俺のこだわりであるベストな形にならないという事だ。

海老原さん家のポストはいい。カコン音はもちろんだが、入り口の滑らか具合も申し分ない。だから新聞がほらっ、ベストスタイルにっ！ 半分より僅かに少ない部分のはみ出していて、角度も申し分ない。これなら向こう側の出口が少し浮いている状態の筈だ。家の人を取りに来た時にわかるし、取り出しやすい筈だ。

「……………」

……俺は人ん家の真ん前でなにをやつてるんだ。自分のこだわりなんかどうでもいいじゃないか。

とにかく、配達もあと少し。明るくなる前に終わらせないと。……と、思いながら走り出したが、俺は振り返つてしまう。

海老原さん家の二階、道路側の部屋。少し明かりが漏れている気もするが、部屋の電気は点いていない。海老原さんの部屋はあそこだろうか？ まだ寝ているだろうか？

「……………」

いや、当然寝てるだろ！ 海老原さんの寝顔とか想像するな！俺はストーカーか！

「いかにいかに……すう、はあ……すう、はあ……よしっ！」

自重を込めた深呼吸で気を取り直して踵を返す。

俺は再び朝霧の中に駆けて行つた。

自宅に戻つた俺は支度を済ませると、いつも通りに道場へと入る。

療養という事でバイトは休んでいたが、朝の鍛練を怠つた事は無い。これだけは怠る訳にはいかない。

礼節として一礼だけ済ますと準備運動、柔軟体操、この屋敷に住み始めてから一日も欠かした事の無い習慣を開始する。

続いては演武、春まではじいちゃんと一緒だったが今は一人、観者のいない単調な稽古に専念する。これも習慣。

一通りのノルマをこなした頃、窓から光が差し込んでいる。いつの間にか日の出を迎えていたらしい。

俺は道場の中央に立つ。習慣は続く。

道場は冷たい空気で冷蔵庫のように冷えきっている。動かして体を止める事で、否応なしに体は引き締まっていく。

素足で踏む畳の冷気が突き刺さる 無視。

締め付けられるように体が強張る 無視。

吸い込む空気は体の内側を締め付ける 無視。

息を、吸う、吐く、吸う、吐く、繰り返す、繰り返す。

これも毎日の習慣の一つ。

吸い込む息は濃く、吐く息は薄く。吸い込む息を体の不十分な所に補充する感覚、吐く息で体の不備を確認する感覚。

空手の息吹に似ているのかもしれない。しかし、力を込める部分は違う。空手の息吹は腹筋に力を込める、”これ”は脳に力を込める。

力を込めるといっても脳にそんな事は出来ない。脳に全意識を集中させる感覚。自分を一定に保つ感覚。

イメージは水。波紋を鎮めるように、心を静めていく。逆らわないように、流れるように、浮かぶように、沈むように、たゆたうように……。

「……………」

…………… 今日から学校。今日までの4日間、瞬とは毎日一緒にいたが、他のみんなとは会っていない。

でも、海老原さんと進藤さんは何度かメールをくれた。『大丈夫？』とか『だいたい先輩は……………』から始まる文字数が足りなくなる位のお説教などだった。

橘からは何故か空メールが来た。『なに？』って返信したら『知るか！』って返って来た。

刹那は…………… 電話もメールも、無かった。俺からも連絡していない。

「……………」

俺は刹那の居場所を奪ってしまったのだろうか？
俺が学校に依存する中で最も恐れていたこと……よりもよって
それが刹那なんて……。

「十八」

声が掛かった。

ハッとして視線をやると、道場の入り口に寄り掛かるように瞬が
立っていた。

「おはよう、瞬。ずいぶん早いな」

「ああ、おはよう。何となく目が覚めちまってさ……」

テスト休み中、ずっと泊っていた瞬、当然のように今日も泊って
いた。

しばらく泊りに来ていなかった分を取り戻すように俺の側を離れ
る事は無かった。

「……十八、刹那に会うのは……つらいか？」

何処かばつが悪そうな表情の瞬。テストの最終日に俺が倒れて以
来、ずっとこの調子だ。刹那との事を話した訳じゃない。でもきつ
と瞬はわかっている、俺と刹那がどうなったのか……。自分のせいだ
と自分を責めているだろう。……瞬はそんなヤツだ。

「つらいなんて事は無いって。ただ……申し分ない、だけ、だよ」

馬鹿を言う。割り切ることがどんなに難しいか、どんなにつらい

ことなのか、知っているくせに。

「刹那だってわかってた筈だって、十八を生徒会に入れた時点で。あいつもあの時のままじゃいけないって、わかってたんだよ」

「……………」

きっとそうだろう。優しいままだった刹那は怠惰なだけの俺を間近に突き付けられて、放って置けなかったのだろう。

自分の殻を犠牲にしてまで……。

「もう、無理はしないよ。みんなにも迷惑かけないようにするからさ」

終始ばつが悪そうに俺を窺う親友を見ていられなかった。俺は自然と言っていた。

テストの時の行動に後悔はしていない。俺がした行動自体は間違っていた訳じゃない。ただ俺じゃ駄目だった、俺には無理だった………それだけ。

「だから迷惑とか言うな。俺が泊りに来なかった理由は言っただろ？」

瞬は悲しそうに言う。この5日間、何度も聞かされ、何度も見せられた言葉と表情だ。

「いめん……………」

瞬が泊りに来なかった理由は実に単純だった。

明るくなった刹那。瞬も、おじさんも、おばさんも、その刹那との時間が増えたただけだった。家族の時間が増えたただけだった。

瞬は俺の行動に意味があったと言いたいのだろう。

「ふう………ったく。どうだ？ 久々に組手でもするか？」

呆れたような、ホツとしたような表情の瞬は苦笑しながら言う。

全く………瞬には敵わない。

「ああ、久し振りにやってみるか」

もうすぐ学校。秘伝の呼吸法なんかより、親友の優しさの方がよっぽど俺の心を落ち着けた。

8時前、二度寝した瞬をどうにか起こして登校した学校。

半寝したままの瞬を引き摺りながら俺は今まで通りに時計棟に向かっていた。

刹那。どうあっても顔を合わせなくてはいけないのはわかっている。嫌という事は欠片も無い、むしろ会いたいと思う。しかし、ど

んな顔をしていいのかわからない。どんな事を話せばいいのかわからない。

気安い関係に戻ったと思っていたが、疎遠だった時と何ら変わらないじゃないか……。

タツタツタツ

「おっはよーっ!!」

ぴったーん

「どうえい!!」

いざ時計棟昇降口をくぐるうとした時にやたらと元気いっぱいなヤツに背中をひっぱたかれた。

こんな明朗活発でステイニーなヤツはいたか?と、一瞬だけ思ったが、行動はともかく今のパーフェクトボイスを発する事が出来るヤツは一人しかいない。

「……せ、刹那?」

勢いよくひっぱたかれたお陰で、ケホケホとむせたままで訊く。

「朝から暗いわよおっ! せっかく療養したんだから、もっとシャキツとなさい! シャキツと!」

百パーセント無邪気で屈託ゼロな笑顔の刹那が言う。……いや、ダレ?とか思ってしまう。反則的にかわいいけどさ。

「あー！ さては休んでる間、瞬に攻められっ放しだったんでしょー？」

何が？

「もうっ、ただでさえろくでもない噂が立ってるんだから、ほどほどにしなさいよ」

いや、だから何が？

「あっ、そうよ！ やっぱりあなたは彼女を作っちゃえはいいのよ」

だから何が……？

「って、ハアツ！？」

流石にツッコむ俺。ハイテンションすぎる刹那にも驚きだが、言った事があまりに意味不明だった。

「ふふ〜ん、十八あん。あなた、自分の素晴らしすぎる立ち位置を忘れちゃったのかしらん？」

お前はダレなんだ！

「私が学内から選りすぐったか〜わいい女の子達が身近に、い・る・で・しょ？」

人差し指でチツチツチってやってから、自分の口許でい〜って感じにする刹那……で、いいんだよね？

「……私の読みだと、曜子とルナはあなたにかなり気を許しているわ……」

人差し指を当てたまま俺に近付くと、ヒソヒソとおかしな事を囁く刹那。

「あ……あのう……」

もはや俺は刹那が心配になっていた。

「私も力になってあげるから、瞬から乗り換えちゃいなさい？」

「……いや、だから」

「会長である私が全面的にバックアップしてあげるわ。大船に乗ったつもりでいなさい」

どっかで聞いたような台詞を言うと、ねって感じで小首を傾げる刹那。さっさっっと時計棟の中に入って行ってしまった。

「……………おい」

ポツネンと取り残された俺はどうしていいかわからずに立ち尽くしてしまった。

隣の瞬は何故かKOしていた。そういえば最初のぴったーんと一緒にドバキッって音も聞こえた気がする……。

いつまでも昇降口に突っ立っていてもしょうがないので、俺達は刹那を追いかけるように時計棟に入った。

「いてえ……刹那のヤツ、なんだってんだ……」

俺の背中も痛い、瞬はキャラが台無しになりそうな位にフラフラしながらぼやいていた。

「それにしてもお前と刹那は一体全体どんな状況なんだ？」

いや、それは俺が聞きたい。

「刹那はまるつきり昔の刹那っぽい、っていうかそれ以上に刹那だし、十八は十八で……いや、十八は十八か。でも、二人ともなんか変じゃねえか？ あー……いや、変っていつても変じゃねえんだけどよ……」

上手く言えないらしい瞬、流石の瞬もかなり混乱しているみたいだ。

瞬は保健室での俺達の事を聞いて来ない。でも、さっきの俺達はこういう事なのかは知りたいらしい。当然である。

「……俺達は」

「あーあー、やっぱりいい。言わなくていい、言わなくていい」

俺がどう言ったらいいのか唸っていると、困ったようにそう言っ

た。

「今回の事は色々難しい事が多すぎたんだ。現状維持するつもりは無いが、今は何も言わなくていい。いちいち報告することでもないし、俺に言えばお前はまた突っ走っちゃうからな」

「……………」

……まるで俺が言い辛いのをわかっているような瞬。

俺達に板挟みになってる瞬は俺達を気遣ってばかり……俺達の事を知っているから、瞬だから聞けないのだろう。刹那の男性恐怖症、俺の能力障害。なまじそれを知っているせいで俺達を気遣ってしまう。

言わなければいいという訳ではないが、瞬にはいつも救われる。

「……………瞬」

「まあ、ともかく、さっき刹那が言った事は本当だと思うぞ?」

わざとらしく話を切り替えた瞬。……………さっき?

「なんだっけ?」

「ほら、海老ちゃんとルナの事だよ」

「あっ……………」

のびてると思ってたら……………聞こえてたのか。

「特に海老ちゃん。あの子って、いーっつもお前のこと見てんだろ？」

かすかにニヤリと表情を和らげながら言う。

「いや、あれは海老原さんが優しいからだろ？ 俺がいつも危なっかしいから見ててくれてるんだよ」

確かに海老原さんとはよく目が合う。というか、よくガン見される。でもそれはやっぱり海老原さんが優しいからだと思う。

「違っつて十八、それが正に普通じゃないんだって。いいか、俺は海老ちゃんと生徒会で一緒になってかなり経つんだ。でも海老ちゃんと目が合った事なんてただの一度だって無いんだぞ？」

「……えっ？」

「普通に話す時だっつて俯いているか、目を逸らされちまうんだ。でもお前は違う。それっつてどっついう事だか、わかるか？」

言いながらニンマーっつ俺の顔を覗き込む瞬。

「い、いや……」

どっついう事っつて……それはやっぱり危なっかしい俺を気遣っつてくれる、とか？ そっつじゃなかったら？ いやいやいや、無い無い無い！

「噂をすれば何とやらみたいだぞ、十八」

「はっ？」

喋りながら向かっていた会長室のちよつと手前、生徒会事務室の前に海老原さんがいた。

例の如く両手に数冊の本を抱えた海老原さんは事務室の扉の前でくねくねと身をよじっている。

一発でわかる。両手が本で塞がってて扉を開けないみたいだ。何とも海老原さんっぽいかもと思うってしまった。

「おはよう、海老原さん。はい、どうぞ？」

俺は慌てて事務室の扉を開くと挨拶をする。

「……おは、よ……」

じい〜

「う、うん……」

やっぱり見つめられた。って、うわっ！ 刹那と瞬に変な事言われたから変に意識しちゃうじゃんか。

「……あり……がと……」

モジモジ

じい〜

まだ見てるしっ。恥ずかしそうにしてるけどガン見だしっ。

瞬は瞬で微妙な距離を保った状態で、やたらと嬉しそうに見守ってるし。

「あー、と、とりあえずそれ持っただがや」

熱すぎる視線を逸らすのも心苦しいし、瞬の視線もなんか恥ずかしい。ササッと本を受け取りながら後ろ向きに事務室に入っておく。

「だあああ！ 今入ってくんじゃねえっ！！」

事務室に足を踏み入れた瞬間、慌てたような橋の音が聞こえてきた。

「えっ……どわいだああっ！！」

同時に俺の背中に何やら凄まじい衝撃が掛かった。右手に抱えた数冊の本のお陰で上手くバランスが取れなかった俺は見事に蹴っつまずく。

「……うわあ……」

そこにはもちろんぼおっとしてる海老原さあんっ！ このままだと、俺 海老原さん、の順番で床にすっ転んでしまう。

ヤバい、と一瞬で直感し、抱えていた本ごと海老原さんを抱きかかえる。

「……あう……」

背中を襲った衝撃の勢いと自分が前に出た勢いを利用して海老原さんと本を抱っこしたままジャンプ。

「うおりゃあっ！」

さらに回転！

ドガゴツ！

「がっ！」

背中に激痛。受け止めている海老原さんの体重と感触、どうやら床に直接体を打ち付けられたのは俺だけみたいだ。何とか受け身は取ったが、息が出来ないほどの衝撃だった。

「十八！ 海老ちゃん！」

「せせせ先輩っ！ 悪い！ 大丈夫か！」

頭上と足元から瞬と櫓の音が聞こえる。海老原さんは……大丈夫かな？

「……………！」

怖かったのか、体が強張っているようだが怪我は無さそうだ………いや、ちょっと待て、今の俺と海老原さんの状況ってマズくないか？

床に寝っ転がった俺の両腕にすっぽり収まってる海老原さん。間

に数冊の本があるとはいえ、超々密着やで！

「~~~~~!」

海老原はんもどえらい真っ赤つかやで！ こりゃあかんで！

「こっ！ ここここここれは不可抗力やでえほっでえほっ！」

床に背中を打ち付けられたのに加え、仰向けで一人抱きかかえている、更にあまりに慌てたせいで思いつきりむせた。

しばらくして。

「俺の背中を襲った衝撃は目安箱の資料だったのか……」

「そうです。先輩の復帰を信じていた私達は先輩の登校に合わせて早朝から登校し、目安箱に関する資料、並びに投函されたこれ迄の意見等、それらをまとめていました」

「でも、いざまとめてみたら物凄い量になっちまってよ。積み上げた資料がドザザーって崩れてよお。そこに先輩がマヌケなニヤけっ面で入って来っから……」

「えらいすいませんっした……」

一年生二人の説明を聞いて被害者的位置にいるっぽい俺は誠意を込めて謝罪しました。非常に申し訳ない気持ちであります。

「それにしても……」

平に平に徹する俺を何やら感心したみたいな表情で見る橘。

「随分と綺麗な受け身だったってのも気になるけど、さっきの先輩の動きには驚いたな」

「確かに。チンチクリンな先輩にしては的確な判断だった」

進藤さんも橘と同じような表情で俺をけなして、いや褒めてくる。

「い、いやあく偶然だよ、偶然」

胸がチクツとしつつも照れくさいので、そういう事にしておく。

「違うぞ、二人とも。十八がとっさにあれだけの動きを見せたのは海老ちゃんがいたからに決まってるじゃないか」

瞬？

「十八は女の子を守る時には普段は眠っている潜在能力を百パーセント引き出して持てる力を最大限発揮できるんだ」

それ何キャラ？

「そ、そうか。ただのヘタレじゃねえとは思っていたけど……」

「ヘタレ×変態、という事だな？ 『でえほつでえほつ』もそのデフォという訳だな？ 副会長」

をいっつ！？ 俺を変な設定に持ってかんでおくれよ！

「……………十八……………」

アホな空間になりつつある事務室でただ一人おとなしくしていた海老原さんが俺の制服をくいくいする。

「……………ありがとう……………」

消え入りそうな声で囁く。

……………やはり怖かったのだろう。俺の制服を掴む手は僅かに震えている。そりゃそうだ。崩れた資料も俺のとっさの行動も、普通じゃない。

「怖い思いさせちゃってごめんね？ でも、無事で良かったよ」

伏し目がちに俯く海老原さんに微笑む。感謝の言葉をそんな顔で言っちゃあいけない。

「……………うん……………」

俺の微笑みに海老原さんも微笑みを返してくれた。俺も更なる微笑みを返しておく。

「……………ピンクだな」

「……………ああ」

「……桃色ですね」

傍観する三人の呟きを聞いて微笑みが引きつる。……海老原さんを気遣うあまり三人の存在を忘れていた……。

「まあともかく、さっきの動きを見る限り、先輩は復帰って事ではないな?」

ウオツホンつみたいな感じで場を切り替える橘。

「あ、ああ。うん、心配かけてごめん……」

そうだ。テスト休みの間、メールなどで報告しているとはいえ、ちゃんとと言わないといけなかった。

「別に心配なんかしてねえよ……仕事が増えるのが面倒くせえだけだっけ」

言った事とは逆に安堵を含んだ笑顔で言う橘。

「もう簡潔な説明とは言わん。行動で示してくれれば構わない」

わざとらしい呆れ顔を見せるが、休み中の長文メールでも深く追及してこなかった進藤さん。感謝である。

「……ところでルナちゃんは?」

いつも三人一緒にいる筈なのにルナちゃんがない。それに目安箱の件はルナちゃんが筆頭となってやって来ていた筈だ。

「ルナの登校時間は決まっているからね。大丈夫、心配しなくても遅刻しないで来るし、先輩が来るとわかれば一限目の休み時間あたりには2 Fにすっ飛んで行くよ」

二カッとして言う橋だが、何処か陰りを含む表情だった。

毬谷家……二人がここにいてルナちゃんがないのはそういう事なんだろう。俺ばかりが世話になっていて何も出来ないのは悔しいが、二人の雰囲気から訊くことは躊躇われる。

「そっか。わかったよ。二人とも、ありがとう」

話を戻すように言う。ありがとう、をより強調して。実際感謝の度合も大きかった。

「海老原さんも、ありがとう」

未だ俺の制服を掴んだままの海老原さんにも言う。

「……うん……」

当然のように俺を見つめたままの海老原さんは微笑んでくれた。

吸い込まれそうなほど真っ直ぐな瞳は俺に残った不安や罪悪感を丁寧に拭ってくれた。

「やっぱりやるんだよな？」

時計棟から教室に向かう途中、隣に並ぶ瞬が言った。

「ああ。テストが終わった時はうやむやになっちゃったけど、ちゃんと返事して引き受けるよ」

目安箱の件。テスト終了まで返事をする筈だったが、俺の自分勝手な行動のせいでうやむやになってしまった。しかし、テスト期間中にルナちゃん達も調べてくれたその”仕事”を俺はどうしてもやりたかった。

「……………」

俺の返答を聞いた瞬は歩きながら俺に鋭い視線を寄越す。

俺らしくない決意めいた口上に瞬は少し怒った様子だった。普段の瞬なら俺がこんな事を言ったら逆に喜ぶ所だっただろう。

「……………すぐに元に戻すからさ。もう少し頑張らせてくれよ……………」

俺の強がりなんか瞬にはお見通しだろう……………。でも、俺が刹那の居場所を奪った以上、刹那の側にいる事を選んだ以上、地盤は固めなくてはならない。

「……………絶対に無理はするな。それだけは”約束”しろ」

俺は立ち止まる。

瞬も立ち止まる。

一二年校舎と三年校舎を繋ぐ渡り廊下。始業時間直前である今の時間は教室へと急ぐたくさんの生徒達が行き交っている。

立ち止まっているのは俺達だけだった。

「…………瞬」

『約束』、瞬はわざと強調して言った。

俺をあの時に引き戻すキーワードの一つ。俺が瞬に打ち明けたトノウマの一つ。瞬が知る俺のタブーの一つ。

しかしここ最近、生徒会というぬるま湯に浸かった俺はその重さを忘れていた。いや、忘れた訳ではない。俺の中の順序が曖昧になっていた。

それが瞬の口から発せられた事で露呈した。

「……………」

黙り込む俺に瞬は鋭い視線を変わずに寄越す。

「……………わかった……………約束する」

最近の俺ならこうして口にしなければ、躊躇うことすらしなかつ

たかもしれない。だが約束という言葉の口にするだけで全てにおいての重さが増す。

「……そうか。なら俺はもう何も言わないよ……頑張れ……」

鋭い視線を柔らかく細め、瞬は嬉しそうに微笑む。それだけで俺は重みを受け止める力を得たような気がした。

「瞬……ありがとう」

本当に、いつも。

「はは……じゃあ、教室行くぞ」

言いながらまた教室に向けて歩き出す瞬。俺も続こうと足を進めようとするが、俺は無意識に後ろを振り返ってしまった。

俺の全てだった世界を確認するように。

「えっ？」

失い、誤魔化し、夢見た世界。それを見る事は二度と叶わないと認めた世界。

実在して、いる？

「」

俺を呼ぶ声？

教室へと続く渡り廊下、辺りを行き交う多くの生徒達、振り返ってぼかんとしている瞬、正面には……………。

「せんぱい？」

「ルナちゃんやないけえっ！」

渡り廊下の向こうから駆けて来たのはルナちゃんだった。驚いている俺を不思議そうに見やってくる。

「おはよございませすです」

「お、おはよお〜」

瞬との会話からの流れとはいえ、思くそ間違えてしまった俺。ちよつと気まずい。

「元気、ですか？　せんぱい」

少しぎこちない笑顔で言うと遠慮がちに近付いてくる。

「あ、ああ。元気、かな？　……………って、あわわわわ？」

ルナちゃんの様子にギクシャクしながら言うと……………俺に絡み付いてきた！　いつものように俺の右腕をギュッとしてきたってばよっ！

ぞわ……………ぞわ……………

周りの生徒達の視線が凄い事になっているう！

「せんぱいは刹那先輩の……彼氏さんなんですか？」

「だあつ!？」

周りのざわめきも気になるが、何を言い出すんだ！ ルナちゃん
は！

「ななななななつ!？ ななななんだつてそんなつ!？」

色々とテンパってしまう俺。

「だって……あんなに無理してたし……あの生徒会長さんと仲良し
さんだし……再会した幼馴染みとか、凄い”しちゅえーしょん”だ
し……」

ウルウルしないでえっ！ 周りの生徒達の視線がヤバくなるから
あつ！

「い！ いや！ ……刹那はさ、彼女さん……ではないよ？」

慌てて弁解したが、自分で言っただけで自分で傷付いてしまった。

「……本当？」

むんぎゅっ

「ハウアツ!！」

俺は条件反射みたいに奇声を上げながらカクカクと首が折れそう
な位に頷いた。だって、遠慮がちに掴んでいた俺の右腕をむんぎゅ

ってしながら見上げられたんだもん！

ざわっ！ ざわっ！

「そうなんだ……エへへ……」

ホツとしたようにいつもの百パーセントな笑顔になるルナちゃん。同時にむんぎゅっがパワーUPした。

いや……なんか、わかりやすすぎる？ 刹那も瞬も言っていたが

……マジすか？

ざわー！！ ざわー！！

「授業、始まつちゃうですね……またです！」

周りのざわめきなど微塵も気にしていないっぽいルナちゃんは名残惜しそつに離れる。

「バイバイですっ！」

そのままほんわか笑顔でルナちゃんは駆けて行ってしまった。

「ははは……」

しこたま残った余韻に引き締まらないアホ面で手を振る俺……の周りのざわめき、っていつか殺気が凄いつ！！

「い、いやぁ……ルナもそうだろうとは思っていたけど……ありゃあ間違いないなあ」

「ほかあと傍観していた瞬も流石に引きつった笑顔で言う。

「いやいや………って、いや、その前に逃げていいかな？」

瞬の冷やかしに否定するに否定できないよ、とかいう前に俺にビリビリと注がれる殺気が大変な事になりそうだった。

「その方が良さそうだな」

俺達は教室に向けて猛ダッシュした。

海老原さん。

ルナちゃん。

自惚れるつもりなど微塵も無いが、二人とも俺に好意を持ってくれているのは明らかだと思っ。

彼女達とはまだ知り合って一月ちょっと………嬉しくは思うが、戸惑ってしまう。

彼女達が知っているのは表面上の俺だけだから………本当の俺という物をほとんど知らないだろう。

知っているのは瞬と刹那だけ。いや、瞬も、刹那も、俺の全てを

知っている訳ではない。

全てを打ち明けるのは簡単だ。しかし、二人は俺を気遣うだろう。もう隠すつもりは無いが、俺はどうすればいいのかわからない。

もう俺達の関係を、時間を失ってはいけない。俺にわかるのはそれだけ。

刹那……君はどう思っているんだ……？

その日。久し振りに行われた通常通りの授業ではテストが次々と返却された。

地理、化学、現国、今日返って来たこれらのテストは平均点を大きく上回る結果を見せてくれた。今までの俺からすれば、快挙とも言える結果だった。

保健体育……再テストを宣告されたそれ以外は……。

「……田君？ 塩田君？」

「えっ……あつ、ハイ！」

呼ばれていた事に気が付いて慌てて返事をする。

「塩田君、どうぞ」

教壇に立つ徳川先生が用紙を持って俺を呼んでいる。

「あつ！ すいません」

テストの返却なのだ気付いてすぐに駆け寄って先生の側に行く。すると先生はテスト用紙を俺に……渡さずに見つめてきた。申し訳なさそうな表情で……。

「塩田君……がんばりましたね……」

表情はそのままに言う。

「……テスト前とはいえ、あまり目を掛ける事が出来ませんでした……申し訳ありませんでした……」

目安箱の件で俺を追い詰めた。先生はそう思っているのかもしれない。

有り得ない。

「違いますよ。先生のせいな筈ないです」

言いながら俺は先生が差し出す前のテスト用紙をヒョイツと受け取る。下手くそなのはわかっているが、明るい表情と声を意識してやった。

「……塩田君」

相変わらずの表情で俺を見つめている先生にもう一度笑顔を向けてから自分の席に戻る。

先生のせいなんて有り得ない。たとえ俺をつき動かした要因の一つであったとしても、全て俺のせいなのは間違いない。俺は先生に少しでもそんな表情をさせてしまった自分が許せなかった。

テストを見ると、96点。俺が高校で取ったテストの最高点だった。

……俺は直前まで頑張る事が出来ていたみたいだ。

五限目の数学を終え、六限目の英語も再テストを宣告された。

自分の不甲斐なさを受け止めつつも、やるべき事に立ち向かうのだと自分を無理やり奮い立たせた。

「失礼します」

放課後が始まってすぐ、俺は二学年の職員室に来ていた。

「Mr・塩田。どうした？」

入室した俺に気付いて対応してくれたのは、ついさっきまで俺達

のクラスの授業を終えたばかりの英語のレイチエル先生だった。

「徳川先生に用があるんですけど、いらっしやいますか？」

「Miss・徳川は五時間目の後に早退してイル。急用なの力？」

「い、いえ、大丈夫です。明日でも平気なんで」

「そうか。明日は再テストを行うゾ。忘れるナ」

「はい。失礼しました」

レイチエル先生に挨拶をして職員室を出る。……徳川先生は早退してしまっただのか。五限目が終わった時点で言えば良かった、と思っただが、仕方ない。

「……十八」

外で待っていた刹那が声を掛けてくる。隣には瞬もいる。

「先生は早退しちゃったみたいなんだ。明日また出直すから行こう」

俺を気遣っている様子を拭えない二人と一緒に学校を後にする。

向かう場所は学校外。今日も生徒会活動はあるが、海老原さんと一年生達に任せて俺達は行かなくてはいけない場所に向かった。

夕暮れに染まる少し前の時間。

俺達が訪れたのは郊外の外れにあるお寺。しん……と静まり返るその空間を前に俺達は立ち止まっていた。

「刹那は初めて、だよな？」

「……うん……ごめん」

今朝の元気な姿を少しも感じさせない刹那は俯く。

「謝ること無いよ。刹那は今、ここにいないじゃないか」

なるべく明るく言った俺の声も静けさに飲み込まれていく……刹那の表情は晴れてはくれなかった。少し後ろにいる瞬も雰囲気に逆らわないように静かにしている。

俺達は学校を出てからずっとこの調子だった。

今日は12月13日。

今日で『あの日』から丁度五年。つまり今日はみんなの命日だった。

刹那とはテスト最終日の時に、瞬とはテスト休みの時に、一緒にここに来ようという事を……いや、特に予定を立てた訳ではない。俺達の意識が強まった事を一人一人が意識したのだと思う。だから俺達はしてもいない約束通りにここを訪れていた。

そうだろう。

俺達の時間を取り戻すには、俺達三人が、この日、この場所に来なくてはならないのだから。

じいちゃんの知り合いでもある住職さんに挨拶を済ませた俺達はみんなが眠っている墓前へと進む。

刹那は初めて、瞬も俺が知る限り数えるくらいしか来ていないと思う。だから数え切れなくらい足を運んだ事のある俺が二人を引き連れて墓地を進む。

見慣れてしまった光景。夕映えの空の下の光景は寂しく、儚い雰囲気を演出している。吹き付ける冷たい風も、不自然な位の無音も、嫌になる位に見合っている。

皮肉にも俺達の気持ちと今日という日にぴったりだった……。

あれ、と思った。

眩しい西日を受けてシルエットのように佇む人影。俺達の向かう

墓前には先客がいた。

儂い雰囲気には溶け込むような物憂げに佇む女性には見覚えがあった。

「先生……？」

夕映えの光に染まる女性は徳川先生だった。

俺を取り巻くものは変わり行く。
俺が取り巻くものが変わり行く。

大切なものが移ろい行く。

何処へ。

失ったもの。取り戻したもの。新しいもの。生まれたもの。

今の俺を取り巻くものは変わった。変わって行く。

誰のもとへ。

「おおい塩田あ？ 聞いてつかあ？」

「えっ？」

……永島さん？

「ライムが切れそうだから持って来てくれつつってんだろあ？ ど
おしたあ？」

「あつ……あつ、ハイ！ すいません！」

グラスを拭きながらぼおっつとしてしまっていた俺。その俺を覗き込んでいる永島さん、怒っているというよりも怪訝そうな呆れ顔だった。

「久し振りの仕事で忘れちゃったのかあオメエ。せつかく復帰したんだから頼むぜえ」

「い、いやあ……すぐに取って来るっスよ」

俺がいない時の苦労話がねちねちと始まりそうだったので、俺は慌てながら倉庫に急ぐ。

テスト休み明けの今日は三週間振りのleafの出勤日でもある。確かに長期休暇明けの仕事で多少は戸惑ったのかもしれない。しかし、俺がボケていたのは久し振りの仕事だからだけではなかった。

ついさっきみんなで行った『家族』のところ。

それと先生の事が原因だった。

……

……

「塩田君……佐山さん達も一緒でしたか……」

西日を背負った先生は俺達を、いや、俺を見つめながら言った。

「どうして先生がここに……？」

あまりに意外だった為か、俺は考えるよりも先に訊いていた。

そう、意外だった。今日ここに訪れるという事、それは塩田家に所縁があるという事。先生が俺の事を知ってるのはわかるけど、どいう事なのか。あまりにも意外だった。

「塩田君は……不思議な方ですね……」

「えっ……と？」

言葉とは沿わない悲しそうな表情の先生は質問に答えてくれなかった。当然、俺は戸惑った。

「……一方的ですが、私はあなたを五年前から知っているんですよ」

「えっ!？」

心臓が跳ね上がった。

ここに来るという事で、自分の中に準備していた記憶が一気にこんがらかった。

「ちょっと先生。それはどいう事ですか？」

刹那が俺に並びながら先生に詰め寄る。

「……………」

刹那に、瞬に、視線を彷徨させた先生は俺を再び見つめる。いつかの贖罪のような表情で。

「……………僅かの期間だけでしたが、膨大に誇張された報道は凄惨でした……………それに私はその時には既に教師でした……………ですからあの嘆かわしい事件は印象が強かつたんです……………」

俺達から視線を逸らしたまま言った先生の言葉は俺の胸を浅く抉り取った。

当時、あの事件の直後、この片田舎に位置する久住市は全国的に注目されたらしい。テレビ、新聞、週刊誌、あらゆるメディアでこつた返していたという。

今でこそ語る人はいないが、この町であの事件を知らない人の方が稀だ。俺達はもちろん、関わりの無かった人々にも忘れたくても忘れられない傷跡なのかもしれない。

「先生！」

刹那は叫ぶ。

「ごめんなさい……………佐山さん。でも、だからこそ私は……………塩田君を放って置けないんです」

「だからって今言わないでください」

「刹那、もういいよ、ありがとう」

まるで自分の事のように先生を引き止めてくれていた刹那を制する。十分だった。

「先生、ありがとうございます。でも大丈夫、刹那や瞬がいるし、五年も前の事です。あんまり気にしないでください」

俺は吐き出すように言った。きっと笑えるくらいに棒読みだっただろう。

「十八……」

不安そうに俺を呼ぶ刹那。……そうだろう、俺は嘘を吐いたのだから。刹那や瞬にわからない筈がない。

「そうそう、あの生徒会窓口のアレ、俺、引き受けるんで」

俺は言葉を続ける。放課後に言うつもりではあったが、今言うべきではなかったのかもしれない。しかし、俺は言った。先生に考える隙を与えないように。

「塩田君」

「いやははっ、俺じゃあ荷が重いかもだけど、瞬に甘えながら頑張ってみますっ」

先生が何かを言う前に被せる。瞬には悪いが、形だけでも付き合

ってもらおう。

「わ、私も手伝います」

捲し立てる俺に刹那も乗ってくる。って、刹那がこれに関わっちゃってどうだろう？　なんだけど、仕方ない。

その刹那のお陰だろうか、先生は言葉を呑んでいる。考えるように俺を見つめ、

「……………わかり、ました……………。明日、詳しくお話ししよう」

了承してくれた。

その後、先生は『たいへん邪魔をしてしまいました』と謝罪を繰り返しながら行ってしまった。

優しくて丁寧でいつも相手の事を考えて話をしてくれていた徳川先生。今の先生はらしくない、というか、無理をしていたように思えた。

「……………先生」

刹那も俺と同じような心境なのだろう。

いつかの贖罪のようだった先生。小さくなっていく先生の背中を見送りながら、どうしてもその姿を思い出してしまった。

……
……

刹那と瞬と別れて数時間、そのまま出勤したLeafでも俺の心は浮き沈みを繰り返していた。

そんなこんなでディナータイムを乗り切ると、三週間前と同じように伊集院さんが来店してきた。

「高校のテストなんてほどほどでいいのよ。勉強は社会人になってからか、専門的な分野に携わってからで十分なんだから」

なんとなく出たテストの話題に食いついてきたほろ酔い伊集院さん。それにしても、現役高校生のやる気を根こそぎ持っていくような事を言う社会人さんである。

「シオ君は赤点ばっかの補習王！って感じだと思ったのにな」

「し、失礼な！ 久し振りに会えたのにひどいっス！」

「うそうそ、あはは、かわいいなあ。嬉しいこと言ってくれるしね」

伊集院さんの独特のテンションに付き合ったお陰か、少し沈んでいた俺の気持ち緩んでくれていた。

「でもやっぱりさ、えーと……刹那ちゃんだっけ？ いつだかシオ君を訪ねてきた子でしょ？ その子の為に頑張ったのかな」

ニヤニヤとしながら言う伊集院さん。完全に俺を酒の肴にする気満々みたいだ。

「永島君から情報はただ漏れよ。めっちゃくちゃかわいいらしいじやない」

デヘヘ、みたいな表情でいつもの知的な雰囲気が出ない。

「はあ……そうですね、全部刹那の為です」

これ以上エスカレートすると厄介だし、否定するのも嘘を吐くのも御免なので断言しておく。

「……………」

と、俺の断言が面白くなかったのか、伊集院さんはデヘヘ笑顔を絶妙に引きつらせる。……いや、真面目に答えましたよ？

「随分とご執心なご様子で、何より何よりじゃないのさ」

一気に不機嫌っぽくなってしまった伊集院さん。フンツとしてそっぽを向きながらマティーニを一気に呷あおった。って、それアルコール30度近くあるからっ！

「まあ、アタシには関係ないけどさ」

「い、伊集院さん？」

「お代わりよ」

ぶつぶつ言いつつそっぽを向いたままグツとグラスを押し付けてくる。

「いつものヤツでモスコミュール」

「ちよっ！ いつものって、アレはヤバいっすよ。伊集院さん、明日も仕事なんじゃないんすか？」

いつものヤツ、アレとは”スピリタス”というポーランド産の世界最強ウオツカの事である。そのスピリタス、アルコール度数が実に96度という凄まじい物で、俺なんて匂いを嗅いだだけで卒倒しそうになる。当然のように火がつくし、もはやウオツカというより精製アルコールなんじゃないか、とか思う。そんなもんで作るカクテルなんて危ないに決まってる。

「うるっさいなあー！ シオ君には関係ないじゃん！」

完全にやっつけられたか状態の伊集院さん。なんでやねん、とかツッコむ前にこうなってしまうては、もう俺の手には負えない。

「店長っ、店長っ！」

とりあえずチクっておこう。

……
……

先生を見送った俺達は、そのままの状態でしばらく立ち尽くしていた。自分で言ったことに後悔する俺、不安そうな刹那、学校を出てから一言も発しない瞬。誰も口を開かない。

しかし、太陽が稜線に掛かった頃。

『十八、先生には気をつけた方がいいかもしれないな』

『えっ？』

酷く冷たい一言を発したのは瞬だった。ずっと沈黙していた瞬の意外な言葉に俺も刹那も驚いた。

『先生には気をつける。刹那もだ』

冷徹に、苛立ちを露にして言った瞬。

『ちよつと、瞬』

『今の先生、俺と刹那がいなかったら十八に何かを話そうとしていた。俺と刹那に聞かれたくない話をしようとしていた』

俺と刹那を斜に見据える瞬は刹那の制止に応えるように言った。言い方は冷徹そのもの、嫌悪すらしているように見えた。

『そんな、そうだとしても、何か事情があるに決まってるわ』

先生を擁護しているが、完全に否定をしない刹那。つまり、先生が俺に何かを話そうとしていたのは刹那も感じていたのだろう。

……俺も刹那と同意見だった。

『事情つてなんだ？ この場所で十八に話す事なんて十八の家族の事に決まってる。それを俺達に聞かれないってなんだ？』

『瞬っ！』

俺は叫ぶ。

瞬らしくないむき出しの感情、それは俺の為、俺の家族の為。俺と同じように先生を信じようとする刹那。根本的な部分はそんなにも優しいのに、膨れ上がるのは嫌な感情ばかり。俺はこの場所がそんな感情に包まれていくのがたまらなく嫌だった。

『俺がそういうの大嫌いなもの知ってるだろ、瞬。……頼むからやめてくれよ……！』

俺の叫びに絶句した二人は続く言葉に苦悶の表情を揃える。特に瞬からは激しい後悔の念を感じる。

『……すま、ない、十八……刹那も……』

唇を噛む瞬。縋るような視線を向ける刹那。

『……とにかく、先生のことはいいからさ。日が落ちる前に、なっ？』

半ば強引な俺の一言で、俺達は本来の目的に戻った。

……

……

「じゃ、お先です」

店長になだめられながらも俺に散々絡んできた伊集院さんから開放された頃。少し残業となりながらも上がりの時間になっていた。

「お疲れ様、十八君。久し振りなのに残業させちゃって悪いねえ」

連休明けという事で申し訳ないのは俺の筈なのだが、店長は笑顔で俺を労ってくれた。

「そんな事ないですよ。ガンガン働くんで、よろしくって感じです」

店長は本当にいい人だ。俺の事情もあらかたは知っているし、いつも俺を気遣ってくれる。ナイスミドルな雰囲気には憧れてしまっている。

「……十八君、悠達のところには行ったのかい？」

笑顔を軽く引き締めると、優しい声で尋ねてくる店長。

悠、父さんのこと。命日である今日、その父さんの眠る場所に行ったのか、という事だろう。

「もちろん行きましたよ。友達と一緒に」

俺は不自然な位に明るく言う。

「……そうか。俺も昼に行ってきたけど、すっかり管理しているみたいだね。しかし……うん。……十八君、ちょっといいかい？」

困ったように唸ったり納得したように頷いたりすると、更に表情を引き締めた店長は言った。

「……はい？」

俺はたじろぎながらも続きを促す。

「何があつたかはわからないが、一人で抱え込むのは良くないな。その友達たちも、俺も、永島君も、伊集院君だってそう、みんな君が心配なんだよ？」

「店長……」

俺の強がりも、考えている事も、店長には全部お見通しらしい。

「十八君に関わっている人全員はきつと君を慕っているよ。みんな君の側にいたいんだと思う。悠の息子なんだ、俺が保証する。だから、もっと周りに甘えなさい」

言い終わるとニッコリと微笑む店長。

「……はい、ありがとうございます」

大きな自信を持って言うてくれた店長。その言葉を受け止めよう。心からそう思えた。

leafを出て歩く帰り道。

いつものようにゆっくり歩きながら、俺は思う。

あれから五年。

失ったもの。取り戻したもの。新しいもの。生まれたもの。

今の俺を取り巻くものは変わった。俺を取り巻く人達は変わってしまった。もちろん、変わっていなかった人もいる。刹那や瞬、おじさんやおばさん、佐山の家の人達は何も変わっていない。

しかし、俺と刹那が確認したように、足りないものがある。

だから、俺を取り巻くものが変わった、そう認めなくてはならない。

店長……わかってるんです。五年前の『俺達』がそうであったように、みんな信じよう……それは揺るがないんです。いや、迷った時もある。でも、あいつのように……人を信じることを忘れたくないんです。

根拠なんか無かったっていい。伝わらなくなっただっていい。例え裏切られたっていい。どんな時でも、信じたいんです。

誰にでも、どんな時でも、そうだった遥のように。

足を止め、星空を見上げる。

刹那、瞬、俺、遥。いつでも一緒だった俺達四人の幼馴染み。

今日、五年振りに四人が集まった。

……その時、既に太陽は隠れてしまっていた。刹那の表情も、瞬の表情も、自分の表情さえも、わからなかった。

刹那は何を思っただろう……。

瞬は何を思っただろう……。

俺の想いは届いただろうか……。

遥……俺達の声は届いただろうか……。

「……………」

……おとぎ話みたいに星空に遥の姿が浮かぶことなんかない。寂しさは募るばかり。

満天の星が瞬く寒空の下、独りぼっちで歩く帰り道　ゆっくり
歩く癖は治らない。歩幅を併せて歩く癖は治らない　。

凍える寒さの中で彷徨う俺の右手　落ち着かない右手はポケット
トに仕舞う事が出来ない。俺の右手はぬくもりを求めて彷徨う　。

……わかってる……変えられないものだってある。

五年前。

あの時までいつも一緒にいた『友達』は刹那だった。あの時以降は瞬がいつも一緒にいてくれた。でも、一番多くの時間を分け合ったのは遥だった。どんな時でも一緒にいたいと思ったのは遥だけだった。

その思いは今でも変わらない。刹那も、瞬も、一緒にいたいと思う。でも、叶うなら……遥の側にいたい……。それは俺が俺である限り、変わることは無い。

待ってよおっ！

幻聴に振り返る。

無意識に差し延べた右手。

重なる掌。重なる笑顔。重なる鼓動。全て俺達は一緒だった。加速する妄想はわかっていても止まらない。

エへへ……ありがとう、お兄ちゃんっ

遥。

塩田遥。

……俺と遥は血の繋がった実の兄妹。瞬や刹那と同じ。同じ日に
生まれた双子の兄妹。

俺が大好きだった人はたった一人の妹だったんだ。

少し早めに登校した学校。

先週行われた期末テストの余韻は既に無く、学校は普段の姿を取り戻していた。

生徒会の活動がある俺は教室ではなく時計棟に……でもなく図書館棟に向かう。

どうして朝から図書館棟に向かうのかというと……いや、俺が聞きたいくらいである。

俺の歩く少し先には、

「……………」

ぼおっとした海老原さんが歩いていたりする。どうしてかって、うん、わかりません。

わからないというより思考が状況について来ないというか何とていうか……………」

そっだ。

あれは今朝の事だった。

復帰二日目の新聞配達を終えた俺は日課の鍛練を済ませてシャワーを浴びていた。

久々のバイトの疲れと少しばかりの心労を洗い流してくれる熱いシャワーが気持ち良かった。しかし、俺の悪い癖なのだろう。考えるな考えるなと自分に言い聞かせながらも、もやもやと昨日の事ばかり考えてはため息を吐くを繰り返していた。

そりゃあそうだ……。五度目のあの日、再確認した事実。瞬のこゝと、刹那のこと。遙、母さん、父さん、じいちゃん。夢だっけってしっかり見てしまった。

考えるなという方が無理があるじゃないか……。

その時。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴ったのである。

瞬か？ 条件反射でそう思うが、すぐにおかしいと思い直す。今の時刻は7時すぎくらい、この時間に瞬が俺ん家に来た事はない。あいつは完璧超人だが、朝だけはめちゃくちゃ弱い。だから、この時間に起きている瞬はおかしいし、用があるならメールがあっただろう。

まあしかし、俺ん家をわざわざ訪れる人物は瞬しかない。そう思って急いで風呂場から出て行った。

「おはよーっ、こんなに早くからどうした……の……?」

ガラガラッと玄関の引き戸を開けながら言う俺だが、途中でとてつもない過ちに気付く。

説明しよう。

まず俺の格好から。上からTシャツ、羽織っただけのワイシャツ。下半身はトランクス一丁、裸足にツツカケ。待たせたら悪いと思っただから、体をサツと拭いて用意してた制服を最低限(?)だけ身に着けた状態である。半端じゃなく寒いセクシースタイルだ。

続いて正面にいる人物の解説である。学校指定のダークグレーのコートにチエックのマフラー。両手で大事そうに抱きかかえているのは重そうな学校指定カバン。黒髪のショートカット、長い前髪がとっても印象的。卑猥な状態の俺を見てか、それとも寒いからか、ホッペを真っ赤に染めているぞっ。

じい〜

そそ、この熱い視線が一番の特徴だよねっ。

「　　って、いやあああっ!!　海老原さああんっ!!」

そうですねっ、海老原さんです!　あまりにも予想外っていうか、自分の状況の馬鹿さ加減に驚いたっていうか何ていうか、何故か胸元を隠すように両手をクロスさせて咆哮してしまう内股な俺。

しばらくして。

「……刹那が……十八と……学校行けって……」

とりあえず居間に通してお茶を出すと、海老原さんは聞かなくても事情を話してくれた。一応言っておくが、今の俺はちゃんと制服を全部身に着けている。

「……昨日の夜……電話で……言われたの……」

「そ、そっか〜」

お膳の前にちんまりと正座している海老原さんはもじもじしながら俯いている。対する俺も先ほどの醜態の申し訳なさから正座で力チコチしてたりする。さながらお見合いで『後は若い者同士で……おほほっ』の直後みたいな感じである。いやいや、俺はアホかよもっつ。

「……ご近所だし……通り道なの……」

「そ、そうだよ〜」

何やら無理やりっぽい理由付けをしてくれる海老原さんは終始恥ずかしそうに俯くばかりである。朝一番から俺の破廉恥な姿を見れば当然だろう……はい、すいませんっした。って、そんな海老原さんを見てたら俺も恥ずかしくなってきたっつば。

「……インターホン……ドキドキしたの……」

「うっ、うん……起きてたから気にしないで良かったんだよ？」

いつものおとなしいままであるが、なんだかよく喋る海老原さん。

「……男の子の家……初めてなの……」

「あつ、そそそなんだ……じゃじゃじゃあ緊張しちゃうよね」

「……男の子と……一緒に通学も……初めてなの……」

「そ、そ、そつかあ」

「……初めて……なの……」

「わっ、わかつたから……」

女の子からそんなに『初めて』を連発されるとアレな想像して……
……はい、本当にすいませんっした。

それにしても刹那……昨日の事で俺を気遣ってからののか、海老原さんを派遣してくるとは……。

『私も力になってあげるから、瞬から乗り換えちゃいなさい？』

刹那の言っていた事を思い出す。冗談だと思っていたが、刹那は本気なのかもしれない。

海老原さんの反応とか、茶化されてるのかとか思えば、気恥ずかしいとは思っ。

しかし、俺には刹那との間に感じる言いようのない距離感……それに対しての寂しさの方がずっと大きかった。

という訳で一緒に通学、登校となったのだが、校門まで二人ともずーっと無言。一緒に通学なのに1メートルくらいの間隔を常にキープ。遊園地の時は手までつないだつてのに、今日の俺達は思春期まっしぐらの初々しい中学生カップルみたいになっていた。

たぶん海老原さんは男の免疫がほとんど無いんだろう。当然それは俺にも言える訳で、情けないが女の子一人エスコート出来なかった。

で、校門をくぐっていつものように時計棟に向かおうとすると、海老原さんは呟いた。

「……違う……先に職員室……鍵もらうの……」

「あ、そっか。いつも海老原さんが鍵を開けてるんだっただね」

カクン、と頷くと俺をチラッと見てサッと視線を逸らす海老原さん。そのままスタスタと職員室方面に歩き出してしまふ。いやいや待って待って、って感じで慌ててついて行った。

そして、ようやく最初に戻る訳である。

俺の数歩先を歩く海老原さん、手にはキーリングがチャラチャラ。何処の鍵かはわからないが時計棟以外の鍵もたくさん付いている。

なんでも海老原さんは幾つかの時計棟以外の鍵も毎朝開けて回っているらしい。それで一番最初に開けるのが図書館棟という事でそこに向かっている理由だ。

……せえせえ。なんだか海老原さんと図書館棟に向かっている理由を解説しただけでどえらい疲れた気がする。

さておいて、図書館棟に到着した。

図書館棟。蔵書数200万冊を誇る我が校の名物の一つ。

執行部に入る迄はほとんど近付いた事がなかったので、真上を見上げるほどのデカイ建物にビビってしまう。時計棟を初めて訪れた時に近い引き具合だ。

海老原さんはさあ早速とばかりに手慣れた手付きで鍵を開けている。

「どうして図書館棟を最初に開けるのかな？」

別にあまり気になつた訳ではないが、無言空間が辛かったので訊いてみた。すると海老原さんはピタツと動きを止めて首を傾げて固まってしまった。

「……………朝から……………借りたい人……………いるかもしれない、から……………?」

たっぷり何十秒か経ってから、ボソツと呟く海老原さん。いや、

今のって疑問形じゃなかったか？

「そうかあ、優しいねえ、海老原さん」

疑問形はともかく、海老原さんらしいな、と自然な感想を伝えてみる。

「……………」

クルッ

じいゝ

「えっ？」

海老原さんは振り返ると見つめてくる。何故だか泣きそうなのは気のせいだろうか？ 褒めたつもりだったんだけど、俺って何かマズい事を言ってしまったのか？

「……………優しくない……………本当は……………私が……………早く借りたい……………だけ……………なの……………」

ウルウルと今にも泣きそうな海老原さんは言う。どうやらさっき言った事は建前で、本当は自分の為だから褒められたのがつらかったらしい。

いや、尚更優しいだろ。

「気にしすぎだよ？ いるかもしれないって思ったなら少しも間違っていないよ。だいたい図書委員がいるのに鍵を開けてる時点で偉い

し、優しいじゃん」

誰に迷惑を掛けた訳じゃないのに気にしすぎである。言った事を気にするなら、思い直しただけで一個も間違っていない。

じい〜

「……………」

じい〜

「……………」

じい〜

「い、いや……………」

見すぎっ！

その後、図書館棟の鍵を開けた俺達は中に入ってみた。

「…………十八は…………先に時計棟…………行つて…………？…………鍵…………渡すから……………」

やはり手慣れた手つきでセキュリティを解除した海老原さんは言う。

「なんで？ 海老原さんは行かないの？」

目的地は一緒なのに？

「……まだ図書委員……来てない……無人には……出来ないの……」

ふむふむ、確かにその通りである。

「なるほど。図書委員はいつ頃来るの？」

「……いつもなら……もう来てるの……一応、時間……合わせてるから……」

「そっか……じゃあ待ってるしかないんだね。だったら俺も一緒に待つよ？」

当然である。

「……いいの……本を借りるつもり……だったし……すぐ来るかも……だし……」

そっちは言うがちよっぴり不安そうな海老原さん。その表情に俺の『海老原さんを非常に守ってあげたい！』が発動した。

「……海老原さんがどうしてもって言うなら行くけど……うーん……残ったら迷惑、かな？」

わざと表情を覗き込むように、『迷惑』のトコを強調しながら言った。……少し嫌なやり方だが、海老原さんを独りぼっちにするよ

りは遙かにました。

ふるふる

もちろん海老原さんはすぐに首を振る。ちょっと必死そうだった。

「よしつ。じゃあ俺が海老原さん専用の荷物持ちになっちゃおっかな！」

無理やりなやり方への謝罪と仕切り直しという事で、無駄に明るい笑顔と声でハイテンションする俺。

「……そ、そんなの……悪いの……！」

と、俺のハイテンションに必死そうな表情が強調されてしまった。

「いいからいいから。実は俺って、図書館棟の事あんまり知らないからさ、借りる本を探しながらちょっと案内してくれないかなあ〜って感じなんだよね」

もはやオリヤオリヤなノリの俺。

「……それなら……いいかも、なの……」

困った様子は拭えないが、それならばオツケーみたいだ。

「そかそか、ありがとつ、海老原さん」

「……あつ……こちらこそ……なの……」

海老原さんはもじもじっとして真っ赤になってしまった。

心の中でホツとしながらも、俺は思った。

突然の海老原さんと二人で過ごす朝。

なんとなくいつもと違う海老原さん。いつも通りにも見える海老原さん。まだ知り合って一ヶ月ちよつとの海老原さん。

そして俺だ。大して異性に免疫が無い筈の俺。テストの時の醜態の余韻が残る筈の俺。昨日の事の余韻が残る筈の俺。

刹那に感じる距離感すらも……。

思えば知り合ってすぐの時からそうだった。

海老原さん。

どうして俺はこんなにも安心できるのだろうか……？

前も本、後ろも本。右も左も本。見上げても本、目に見える物のほとんどが本、本、本。

三階建ての図書館棟。中央には三階まで吹き抜けた円筒状のホール。そこから円筒に沿って延びる巨大な螺旋階段。それらは西洋風に造られた建物と相俟って別世界の空間を演出している。

「く、首が痛いっ!」

螺旋階段を目で追いながら、どこまで本棚だらけなんだよ!とか言う前にグギッてなるし。

海老原さんの話ではその溢れんばかりの本はジャンルや年代ごとに区画分けされ、宗教、哲学、歴史、社会、自然、技術、産業、芸術、言語、文学、等、あらゆる書物が揃っているらしい。

その海老原さん。何やらほくほくな雰囲気ですべて解説してくれている。どうやら楽しいみたいだ。

「……一階には……自由閲覧区画……新聞、雑誌の新刊、縮刷版……など……バックナンバー、多数なの……」

「へえ」

うう……さつきは海老原さんを気遣ってああ言った訳だし、楽しそうに解説する彼女の手前、申し訳ないのだが……ぶっちゃけ

全く興味がねえつ。

「……どのジャンルも……新刊は……ここに並ぶの……」

ほくほく

なんて効果音が出そうなくらいにご機嫌な様子の海老原さん……の説明がほとんど頭に入ってない俺。ああ、土下座してしまいたい。

「……これ……蔵書検索……できるの……」

閲覧区画の脇にズラリと並ぶPC、それで館内の本を検索できるらしい。そりゃあ200万冊も本があればこの手の設備は必要不可欠だろう。

「ほうほう……じゃあさ、ちょっとやってみてよ、海老原さんっ」

特に興味があった訳ではなかったが、楽しそうな海老原さんが嬉しかった俺はわざわざ頼んでしまう。というより俺の興味がずれただけ。

対して海老原さんは俺の申し出を聞いた途端、ピタリと動きを止めてしまった。

なんだ？ 俺ってまた変な事言っちゃったのか？

「……パソコン……苦手……」

???

「あれっ、そうだったけ？ よく来てるみたいだし、執行部の活動で

も使ってるっぽかったからさ、いつも使ってるのかと思ったよ」

ふるふる

「……必要、ない……」

「えっ、と、そう……なんだ」

……うーむ、なんて会話の難しい子なんだろう。別に急いで返事が欲しい訳じゃないが、間が空くと俺が変な事でも言っちゃったよ
うな気分になってしまっ。

「どうして、かな？」

「……全部……覚えてる……」

「ん？」

覚えてる？

「もしかして、館内の本の配置を全部覚えてるって事かな？」

「……………」

カクン

「……って、すごーういっ！　こんなに広いのにーっ！」

おおーって感じで感心した俺のオリヤオリヤテンションが復活。
その俺に驚いたような海老原さんは困った表情を隠すように俯いて

しまった。

「……い、いつも……来てるから……覚えちゃった……だけ、なの……」

ちよつと必死そうに謙遜する海老原さん……なんかかわいいつ！
けど、あんまり褒めすぎるといつかのようになんか大変な事になってしまいきそうだ。

と、その時。

「海老原さんっ！ 海老原さん！ いるんですか!？」

入り口付近から大きな声が響いた。

「……折原……さん……」

確認するように呟いた海老原さんは小走りで入り口の方に駆けて行く。恐らく図書委員が登校して来たのだろう。

……それはいいんだが。

「……なんだ、いるんじゃないですか。いるならいるでわかる所にいてください！ そう伝えておいた筈ですよ！」

おいおい。そういう話になってるならなってるでいいとは思いますが……これって怒鳴ってる、よな？

海老原さんに追いついて見た図書委員は度の強そうな眼鏡を掛けた女子生徒だった。制服の青いリボンから同じ二年生だとわかる。

「なんですか、アナタは？」

その図書委員、海老原さんの後ろにいる俺を確認すると訝しげに尋ねてくる。俺の知名度の低さはどうでもいいが、不審者扱いはちと困る。

「……同じ……執行部の」

「図書館棟はまだ開館していません！ 関係者以外の入館は罰せられますよ！ 館内から速やかに退館下さい！」

館が多すぎる！ だいたい遅れて来たのはそっちな訳だし、こっちの言い分聞いてから怒ればいいじゃねーか。

「あーあー、すいませんっスよー。俺が海老原っさんにー、我が儘言っちゃったもんでー、悪いのは俺なんっスよー。いっやあー、すいっやっせーん」

わざとムカつく言い方をする。この人には悪いが矛先が俺に向くように失礼をさせて頂いた。

「ちよつとちよつと！？ 海老原さん！？ この冴えないのはアナタの彼氏か何かですか！？」

ん？

「……ちが」

「即刻別れなさい！！ このようなまともに日本語も扱えない非国民など、論・外！！ ですよ！ 海老原さん！」

「ちよ」

「いや、わかりました！ アナタは海老原さんのストーカーです
ね！？ あんな事やこんな事で海老原さんの弱みを握った、変・
態・男！！ なのですね！？」

「な！」

「早く出て行ってください！ 大きな声を出しますよ！」

「いやいや、十分デカいって！ 反響しまくってるって！ という
か一人で盛り上がりすぎだって！」

「……折原、さん……落ち着いて」

「海老原さんは下がってください！ 私こう見えても運動神経がい
いんだから！」

「いい加減に」

「きゃあああああああつ！！！！」

「だあつ！ もつつ！ 聞いてよっ！」

「という訳で、生徒会図書委員、副委員長の折原^{おじはらしおじ}琴です」

「という訳って、何がどういう訳なんだ？」

「いろんな物を端折りまくってからそんな事を言われても困るぞ。」

「いちいち細かい事を気にしますね、この男は。それでよく会長補佐

が勤まります」

だから少しはこっちの話も聞いてくれ。

まあ、海老原さんのお陰でどうにか治まってくれたその折原さん。俺のオリヤオリヤテンションなんか遠く及ばない大きな声と特有すぎるマイペースの持ち主だった。

「……私達……もう、行くから……」

一方的な自己紹介を聞いた所で呟く海老原さん。俺達から微妙な距離を保ったままでモジモジしながらだった。

「今日は借りて行かないのですか？ 端末を立ち上げてしまえばすぐに借りられますが、後にしますか？」

ふるふる

「……先に、鍵……開けないと……だから……」

ちらっ ちらっ

言いながら俺をチラチラ見てくる海老原さん。……なるほど、俺に気を遣っているのだろう。

「俺が」

「ソイツに行かせればいいんじゃない？」

おい。

本人の意志を尊重しようとは思わんのか。まあ若干納得いかないが、俺も意見には賛成なんだけど。

「そうだな、いいよ。正直言つとちょっと息苦しかったんだよね。本だらけだからかな、はっはっは」

うわ、やっぱり俺ってこういうの下手くそ！ バレバレっばい。

「ほら、やっぱり目的は海老原さんじゃないですか……文学を学ぶ事を知らない輩は出て行くがいいのです」

フオ、フオローしたのに……っ！

じい

海老原さんもそんな悲しそうな瞳を向けんで！

半ば強引に、いや、かなり納得いかない状況のまま時計棟にやって来た。

海老原さんはいない。折原さんの提案通りに俺だけで鍵を開けて来ていた。

時間は8時少し前、いつもなら丁度刹那が登校して来るくらいの時間だった。

しかし、時計棟昇降口には誰もいない。

「……………」

海老原さんに預かったキーリングから時計棟の鍵を探しながら考
える。

この奇妙な朝。刹那の計いで海老原さんと二人で過ごした朝。

海老原さん、彼女は本当にいい子だ。俺を心から気遣ってくれて
いるのがわかる。

馬鹿げた醜態を晒す俺も、仮初の時間を貪る俺も、風穴を押さえ
付ける俺も……いつも気遣ってくれている。

刹那に何を言われたのかはわからないが、今朝もそうだろう。

一生懸命、たくさん喋ってくれていた。

きっと始めから俺の空元気なんかお見通しだったんだろう。俺の
今までの醜態も全部見ていたのだろう。

彼女が誰にでも優しいのもあると思う。けど、それだけじゃない。

彼女は俺に優しいんだ。

……どうして？

「あれっ？」

考えながら鍵を一個一個見ているが、どの鍵も同じシリンダータイプ。幾つか付いてるプレートにも『時計棟』と印された物なんか一つも無い。リングを一周してしまった。

って、これって一個一個試すしかないか？

「まあいいけどさ……」

落胆しながらもチャラチャラと鍵を試す作業を開始してしまう俺。独り言を言ってしまうのも、細かい事を気にしないのも、一人暮らしの悲しい習性である。

「……違う……それじゃない……」

「えっ？」

鍵を抜き差ししている俺の小脇から、にゅっと伸びてきた手が鍵の一つを指差した。

「……こっちの鍵……」

「わっ！ 海老原さん、いつの間に！」

いつの間にか俺の真横に、というかほとんど密着した状態の海老原さんがいた。当然のように俺の体は膠着する。

「……ごめん……わかり辛くて……言えば、良かった……」

言いながら正しい鍵で扉を開錠する海老原さん。

「あ、いや……別に大丈夫だったよ。それにしても早かったよね？
本は借りて来なかったんだ？」

自分のカバン以外は何も持っていない海老原さん。元々パンパン
だったカバンに借りた本は入らないだろう。

「……十八の、方が……大事……」

「そうなん………ダアツ！！」

ちよちよちよちよ！！ ちよつと待て！ これってかなり凄い事
言っていないか！？ でも海老原さんの表情はいつも通りの無表情だ
ぞ？ そついうもんなのか？

「……鍵………困ってるって………思ったから………」

全く表情を変えずに補足する海老原さん。

「……なるほど」

俺の早とちりが炸裂しただけでした。 すいません。 なんだか猛烈
にすいません。

扉を開放した海老原さんは時計棟の中に入って行く。

「他の所の鍵は？ 開けに行かなくていいの？」

「……教室、行く前で………いい………」

そういう事なら一度落ち着いた方がいいだろう。いつまでもカバンを持ったままでは疲れてしまう。

「そっか。じゃ、とりあえず事務室行こっか？」

カクン

そして、ようやくいつものように時計棟に入る事が出来た。

なんだかドツと疲れてしまった気がする……「気苦労というか、気苦労されて気苦労というか。あっちもこっちも気を回したみたいな感じというか……」。

上靴に履き替えている海老原さん。おたおたと危なっかしい彼女の姿をどうしても目で追ってしまふ。

「……あ……」

重そうなカバンを抱えながら靴を履き替えていたからか、体制を崩してしまいそうになる海老原さん。

しかし、そうなる事を何となく予測していた俺がその背中を難なく受け止める。

「大丈夫？」

「……………うん……………」

全く、この子は今まで大丈夫だったんだろうか？ 怪我とかしちやっってたんじゃないか？ 危なっかしくて目を離せないじゃないか。

「……ごめんね……」

「いいよ……」

体制を立て直した海老原さんはせつせと履き替える作業を再開する。俺はまたバランスを崩さないようにカバンを支えてあげた。

俺はそのままの体制で息を吐くと視線を外へ向ける。ジツと見ているのも悪いと思っただし、開放された扉の向こうから流れて来る冷たい風に誘われたのもある。

その視界の中心。

そこには虚ろな瞳で俺達を見つめる刹那がいた。

目が合ったのは一瞬だったと思う。でも俺にはその一瞬がとても長い時間に思えた。

肌を撫でる風が。

通り過ぎる視線が。

……痛かった。

「曜子、おはよー」

視線で俺を追い越しながら駆け寄って来る刹那。先ほどの表情が嘘のように眩しい笑顔だった。

「……おはよ……」

しっかり上靴を履き終えた海老原さんが応える。

「ついでに十八も、おはよ。曜子、ちょっとちょっと」

「あ、ああ、おはようって、あれっ」

俺の側にいた海老原さんの手を引くと少し離れた所に誘導する刹那。そのまま海老原さんにヒソヒソと耳打ちを始める。

俺は軽く呆気にとられたように惚けてしまった。自分の思考が考えようとする物を自分自身が否定するみたいに思考が働かない。

俺を冷やかすように、楽しそうに笑う刹那。

何処か恥ずかしそうに笑う海老原さん。

惚けた俺の頭でも、とても微笑ましい光景に思える。

俺が望んだせつちゃんが無邪気な笑顔に懐かしい嬉しさを覚える。

でも、俺の胸は苦しいだけだった。

時計棟を早々に後にした俺は教室に来ていた。

「おはよ〜、塩田君」

「おはよう、阿部さん」

既に登校していた阿部さんが挨拶してくれた。
俺も挨拶を返しつつ自分の席である隣の席に座る。

「体はもう大丈夫みたいだねえ。良かったよお」

「あ、うん。もう普通だからさ。ありがとう……」

阿部さんはあの時の醜態を一番間近で見ている。テストそっちの
けの大騒ぎで心配してくれていたらしい。

「本トに散々だったよねえ……でも駄目だよお、もう変な物食べた
りしちゃあ〜」

「うん、心配掛けちゃ……ん？ 変な物？ 食べた？」

なんだか微妙に話が噛み合っていないか？

「いくらお腹が空いてたからって刹那の作った物食べちゃ駄目だよ
お〜」

「せ……は？ なに言ってるの？」

刹那の作った物？ なんだソレ。

「あれえ。刹那から電話あってさあ、『ちよつと塩田十八に実験台になつてもらつたんだけど……やっぱり駄目だったわ』なんて言つてたよお」

「阿部さん？ あの、実験台って？」

全く持つて話が見えん。

「ええっ？ もしかして塩田君知らなかったあ？ あちゃあくだねえ」

「いや、だからさ……」

コロコロと表情を変えながら盛り上がってる阿部さんにかなりの勢いでついでに行けない俺。

「はふう、もおしようがないよねえ……。いやあ刹那ってさあ、料理だけは駄目駄目なんだよお。で、塩田君でちよつと練習したらしいんだよねえ」

「……………」

刹那が？

そんな事を？

「……塩田君？」

「……それで俺が倒れたって？」

「あ、うん。そうそう、塩田君知ってるかと思ったよ。刹那も反省してるらしくてさあ、クラスのみんなに説明しといてって言われたよ。怒っちゃ駄目だよ。」

口を滑らせた事を誤魔化すように無理やり笑う阿部さん。

「……怒る訳、ないよ」

刹那が料理を苦手としているというのは初耳だった。

全てにおいて完璧とされていた刹那のそんな噂は聞いた事が無い。

それは仲のいい友達しか知らない事。

維持していた殻の一つ。それを惜し気も無く、俺の為に。

きつとそうだろう。

「ん〜まあそれはそういう事なだけどさあ……聞いたあ？ 山崎君のことお」

「……山崎？ 誰だっけ？ 最近見かけない若手芸人かなんかだっけ？」

唸りだした俺を見た阿部さんは話をわざとらしく切り替えてくれ

た。それを察した俺もおどけながら乗らせてもらう。

「ええ〜？ ははは〜、違うよお！ 塩田君の目の前の席の山崎君だよお？ 山崎渉君、ちよつと変態チックなお馬鹿行動が残念な山崎君だよお〜？」

渉、哀れなり。

「いやいや、もちろん冗談だけどさ。渉がどうかしたの？」

とりあえず渉の基本スペックは変態だと再確認も出来たので、話を戻す事にした。

「山崎君って昨日来なかったでしょ〜」

「うん。どうせまたサボりなんじゃないの？ テスト終わった〜って感じでさ」

「いやいや、違うんだあ。山崎君、入院しちゃったかも、らしいんだよお」

「えっ！」

なに？

「なんかねえ〜、けつこう酷い怪我しちゃったらしいんだよお〜」

渉、渉が入院。怪我、酷い怪我、大怪我。

事実の整理を試みようとするが頭の中には嫌な事ばかりが駆け巡

る。忘れられない俺の記憶が強制連鎖する。

「でも、あくまで噂で、実は大した……って塩田君？」

「えっ？ ああ、うん……」

声にハツとして取り繕うが体中の血液が急速に冷めていくのがわかる。阿部さんは続けて何かを言っているが、その声も頭には入らない。

渉、どうしたんだ？

事故？

何かに巻き込まれたのか？

「オッハヨオーツ！！」

「だぁー！ うっせー渉！ いい加減下りろよな！」

「……………」

割り込んできた能天気な声に反応する前に阿部さんを見てみる。

「……………ははは〜」

何とも迷惑そうな表情の阿部さんと目が合った。

いつもの事ながら登場するタイミングだけは正に天下一品。いや、
敢えて言おう、間が悪いと。

「十八！ この馬鹿を何とかしてくれ！」

「お前ら何やってんだよ？」

意味不明なテンションで教室に入って来たのは瞬と先ほど話題にしていた渉だった。

心底迷惑そうな表情の瞬は何故だかいつも通り無邪気に笑う渉をおんぶしている。

「コイツ……ッ！ 怪我してるからって昇降口から俺の背中に飛び乗ってきやがってよ！ 離れねーんだよ！」

「何言ってるんだよっ親友っ！ 親友なら親友のピンチに体を張るのは当然じゃんっ！」

そしてまたぎゃあぎゃああと馬鹿騒ぎを再開しやがる。よく見ると二人の言う通り、渉の体にはあちこちに包帯が巻かれている。しかし、話題に出ていた入院という程にはとても見えない。

「ははは……」

俺は思わず笑ってしまった。

「と、十八！ ウケてないでひっ剥がしてくれ！」

「あ、ああ。渉、もう教室に着いたんだから下りてあげなよ」

「おっ、シオ……！ 発覚した虚弱体質はもう大丈夫なのっ!？」

興味が俺に移ったらしい涉。瞬の背中からあっさり離れてスタツと着地した。

傍若無人とはちょっと違う、無邪気な小学生といった感じだろうか。あまりに涉らしくて無性に照れくさい。

「あー、ああ。もう大丈夫だよ。っていうか涉だつて人の事言えないじゃないか」

「あつ、これっ？ この怪我なら大した事ないよっ！ どうしてこんな怪我してるかってっ？ よく訊いてくれたっ！」

そこまで訊いた覚えは無い。

「テスト休み中のある夜。一人で寮にいたんだっ。深夜といつてもいい位の時間だったよっ。するとねっ、突然っ女子寮の方から悲鳴が聞こえたんだっ」

「「「……………」」」」

嘘くせえ。

「もちろん俺はすっ飛んで行ったさっ。そしてこのカモシカのような足で辿り着いた女子寮。そこには黒タイツ集団にさらわれそうな可愛い子ちゃんがつ！」

「おはよう十八、阿部ちゃん」

「瞬君、おはよお」

「おはよ。散々だったな、瞬」

「さあっ！ この山崎渉の後ろに（以下略）」

「十八の事もあったからと思って、少しでも心配した俺が馬鹿だったよ」

「面目ないよ、瞬」

「そこら辺にあったホウキを手にした俺は（以下略）」

「いや、蒸し返すつもりはなかったんだ。すまない。まあ今週さえ乗り切つちまえば後は冬休みだからな。のんびり行こうぜ」

「そっか。もう冬休みになっちゃうんだよね」

「はづう、冬休みだよお」

「こっとなったら変身（以下略）」

「えっと……だから……」

「あ、ああ……」

「宇宙剣士WATARU（以下略）」

「……………」

「テーテツテーテツテーテツテー（WATARUのテーマだと思われる）」

「い、いい加減にしろっ！ 色々とめんどくせえっ！..!」「」

結局ツツコんでしまう俺と瞬。朝一から涉ワールドに吞まれてしまった。

いつもの事だが涉は俺の心情なんか完全無視だ。わざとやってるとしか思えないテンションで俺を引っ張り上げてしまう。

……心から笑っちゃまうじゃないか。

「……良かったね、塩田君」

昼休み。

「いよーしっ！ ご飯っご飯っ！ ほらほらっ！ テストも終わっ
たからねっ、三人で久々に学食行っちゃうっしょっ!?!?」

チャイムが鳴った瞬間、先生の了解も得ていないのに騒ぎ出す涉。まあ慣れた物なのか、特に気にするでもない先生やクラスメイト達は流石だ。

とりあえず三人で学食に向かう事にした。

「今日のお前のテンションは何なんだよ?」

「いやあーっ！ ちゃんとアピールしとかないと忘れられちゃうからねっ！」

誰に？

「俺はお前がこんなに疲れるヤツだったのかと問いたいぞ」

「同感だよ、瞬」

ぶくーっとなった渉に苦笑する瞬を見て俺も笑ってしまっ。

やっぱりこの三人でいる時はいい。テストの時の余波を残しているからなのか、そう思えて仕方がない。

「おい、十八」

「うん、なに？」

「あれ……」

立ち止まった瞬が意外そうな表情で前方を促す。

瞬の示す先、階段前の廊下にはぼくっとした海老原さんがいた。かわいい柄のハンカチに包まれた四角い包みを二つ持った彼女は誰かを待っているようにも見えた。

「キターーーーーッ!!!!」

ガッツポーズを取りながら叫ぶ渉。

「間違いなくお前じゃないから安心しろ」

渉の叫び声のお陰か、こっちに気が付いた海老原さんは遠慮がちに駆け寄って来た。

「海老原さん、刹那とご飯？ 俺達は学食だから……っつて、えっ？」

真っ直ぐ俺の前に来た海老原さんは四角い包みの内の一つを俺の前にグイッとした。

「……………」

グイグイッ

「えっ……俺？」

カクンカクン

俺に『お願いします』みたいになってる海老原さんは何度も頷く。

いや、流石の俺でもわかる。

海老原さんが持っている四角い包みが世の中の健全な男子高校生なら誰もが憧れるであろう、あの『手作り弁当』である事を。

「じゃ、じゃあ……………」

いつまでもそんな体制にさせておく訳にはいかない。とりあえず受け取っておく。

「えーと…………これってお弁当でしょ？ いいの？」

カクン

「あ、あ、ありがとう」

で、何となく無言で見つめ合ってしまった俺達。

「……………」

じい〜

「……………」

えーと…………俺はどうしたらいいんだろう？

「はぁ…………渉、行くぞ」

「えっ？ ちょっと瞬っ？」

呆れたようなため息を漏らすと渉の背中を押す瞬。

「十八は海老ちゃん二人で食べるらしい。俺達は邪魔だからさっさと学食行くぞ」

「なにいつ！…！」

渉と八モった。

「十八まで何言ってるんだよ…………早く二人で屋上でも何でも行って来い。昼休み終わっちまうぞ？」

継続中の呆れ顔の瞬はため息混じりにぼやく。

じい〜

「あ……いや、あー」

そりゃあ俺だってそうは思ったけどさ、まさか二人っきり？
これも刹那の画策？

「シオツ！ いつの間にかっ！」

「黙れ。Aランチ奢ってやるから来い」

「マジでっ？ って、いやっ！ くっうっ！ くっうっ！」

葛藤しているらしい変な顔で連行されて行く渉を無視しながら海
老原さんを見やる。

じい〜

ガン見である。

「……屋上、行くっか？」

カクンカクン

一年二年校舎の屋上。

四階建ての一年二年校舎の最上部に位置していて、校内では時計棟にある時計塔の次に高い場所である。敷地総面積640平方メートル。緑地があるところかちょっとした庭園がある。

そんな癒し要素満点の屋上は昼休みになれば、たくさんの生徒達で賑わう。弁当組や購買組は寒かろうが暑かろうが屋上に群がるのが定番らしい。

「さむっ!」

開放された屋上に出た途端、縮こまってしまふ俺。晴れてはいるが今は12月中旬、当然といえば当然である。

「海老原さん、寒いよ!?!」

カクンカクン

なんで楽しそうやん?

とにかく、突っ立っていても仕方ないので、適当に良さげな所に落ち着く事にした。

屋上はどこもかしこも男女一組の二人組。それは俺達も変わらないうさなのだが、非常に落ち着かないので、たまたま空いていた端っこのベンチをゲット。

微妙な距離を置いて座ると早速頂く事になった。

「うおっ！」

かなり遠慮してしまいがらお弁当箱を開けた俺は驚く。

今回は重箱ではなく普通のサイズのお弁当箱。しかし、前回のものが凝縮されたみたいに凄い内容だった。ちっちゃいハンバーグとか、フライとか、ポテサラとか、なんかもうとにかく美味そうだ。

「……今度は……洋風……」

ぱこつと自分の分のお弁当箱を開けながら言う海老原さん。

じい〜

そして凝視開始。

「い、いよーし。いただきます」

きつと俺が箸を付けないとずっと凝視継続に違いない。若干息巻いて箸を割る俺。

「じゃあ今回も入ってる玉子焼きから行くよ？」

視線が熱すぎていちいち報告してしまう。

しっかり咀嚼、よく味わって、ゴックンする。

美味しい……というか、俺好みの美味しさというか……ホッとする

みたいな不思議な感覚というか。

じい〜

凝視は継続中。いかんいかん。こういう場合に感想を伝えるのは一つの礼儀だった。

「とっても美味しいよ。前にも思ったけど、この甘い玉子焼きは大好きだよ」

「……………」

あれっ？ 止まっちゃったぞ？

「海老原さん？」

「……………」

あつ！ 顔だけ凄く紅くなってる。

そんなこんななの昼食だった。

「失礼しました。」

最終下校時刻間際。俺と瞬は職員室を後にする。

近くに誰かの気配はない。無機質な蛍光灯の光に照らされた校内は不気味に静まり返っている。恐らく残っているのは一部の教師とごく僅かの生徒だけだろう。

窓の外を見ればもう真っ暗だった。

「ごめん、瞬。ずいぶん遅くなっちゃったよ。」

俺の用事なのに付き合ってくれた瞬。まさかここまで遅くなるとは思っていなかったので申し訳なく思った。

「俺が言い出した事だし、今日は執行部の仕事も少なかったからな別に気にしなくていい。まあその分執行部の活動も終わってるだろう。帰るか？」

「そうだね。バイトもあるから早く帰らないと。」

「じゃあ、さっさと時計棟に行こう。」

瞬と二人、カバンが置いてある時計棟に寄ってから帰る事になっ

た。

全ての授業を終えた放課後。俺は特別棟の補習室で行われた再テストを受けていた。

それから瞬と二人で二学年職員室の徳川先生の所へ。生徒会窓口の件に関する話し合いをしていた。

どちらにもすぐに終わる筈もなく、生徒会の仕事を手伝いに行く事は出来なかった。

ちなみに徳川先生だが、昨日の雰囲気を全く感じさせない程にいつも通りだった。

先生と瞬と俺、三人で話し合った生徒会窓口について。幾つか案件は出されたが、拍子抜けしてしまう位にとん拍子で終わってくれた。

まあ、それでもこうしてかなりの時間を費やしてしまったのは確かである。

外の風景は既に夜といってもおかしくなかった。暗闇に浮き彫られたような廊下は静まり返っている。

そうだろう。期末テストを終えたばかりの学校にわざわざ残る生徒なんかいない。

不意に思う。

部活動に励む一部の生徒。俺達の為に残業してくれている先生達。何かの委員会活動で残っている生徒もいるかもしれない。

その中に俺がいるのだ。再テストはともかくとして、生徒会の仕事の為に放課後の時間を費やして学校に残っている。

確かに俺は生徒会加入前から委員会などで遅くなる事はあった。しかし、それはあくまでその他大勢の内の一入だった。

今は違う。補佐とはいえ、役職を与えられている。精鋭とも言える執行部に籍を置いている。窓口なんていう大それた仕事を任されている。

そして、俺はそれらは俺がやるべきことであると自覚している。俺がやらなくてはいけないことであると自覚している。

少し前までの……全てを自嘲するだけだった俺からすれば考えられないだろう。

そうしていつものように潜考する俺だが、実はそれよりも他の事に意識が向いている。

海老原さんだ。

前々から彼女には不思議に思うことがたくさんあったが、今日一日でその不思議は大きく膨れ上がった。

刹那の考え、海老原さんの考え、どちらも俺にはわからない。いや、一番わからないのは俺がどうしたいのか……それがわからない。

俺はさっきから、その事を瞬に相談しようかどうか迷っていた。

ふざけた考えだと思う。人の感情を、それも好意の感情を押し量ろうとしている時点でも最低なのに、俺は瞬にそれを預けようとしている。

突然すぎた、それもある。でも、俺にはどうすればいいか、わからないんだ……。

瞬は静かだった。

俺の少し前を歩く瞬は何も喋らない。俺の挙動不審な様子には気付いていると思うんだけど……。

「十八……刹那の事か？ それとも海老ちゃんの事か？」

俺の考えている事に答えるように言う瞬。歩く足も止めず、前を向いたままだった。

流石に、鋭い。

「あ……うん。どっちもというか、海老原さんの事だと、思う……」

条件反射のように答えた自分に少し苛ついた。話を振ってくれた瞬に安堵する自分も、はつきりする事もできない自分も、最低だと思った。

「この間からの事とか、昨日の事もあるだろうし、今日は色々ありすぎたんだろうな。それに、十八らしいとも思うが……」

言いながら足を止めた瞬はゆっくりと振り返った。

「悪いけど俺は何も言わない方がいいと思う」

瞬の表情は穏やかではあるが、真剣そのものだった。

「俺が十八にどうこうしろとか、俺の推測をお前に語るのは海老ちやんに対しての冒瀆だと思う。敢えて言うなら、十八が決めなくちゃ駄目だ……それだけしか言えないぞ？」

真剣な表情のまま、少し困ったように肩を竦める瞬。

「……ごめん……瞬……」

正に瞬の言う通りだった。

海老原さんは俺を気遣い、明らかな好意を寄せてくれている。そして、俺はその海老原さんに癒され、何度も安心させてもらった。だとしたら、応えなくてはいけないのは俺自身だ。

「謝ることじゃない。十八が戸惑っているのはよくわかる。それに俺はお前に刹那をけしかけたりした訳だし、本当なら言えた義理じゃないんだ。だから、それだけしか言えない俺が謝るべきなのかもしれないよ」

表情を苦笑気味に緩めながら再び肩を竦める瞬。

「ついでに言っちゃおうけど、俺は海老ちゃんよりも、刹那の方がわからないんだが……十八、どう思う？」

やはり瞬は鋭い。いや、刹那に関しては瞬の方が接する機会が多いんだ。当然だろう。

「海老原さんは刹那に言われて、朝迎えに来てくれたり、お弁当を作ってくれたりしてくれたいなんだ。俺も刹那の考えの真意はわからないよ」

そう、刹那が俺たち幼馴染みの関係の回復を喜んでくれているなら、どうして海老原さんと俺の仲を取り持とうとするのか。どうしてそんなにも急いでいるのか。

俺達の場合、普通に友達同士の仲を取り持つのは少し違う気がする。

昨日、遥のところに行って来たばかりなんだ。……その事を踏まえて考えたなら、突然すぎる刹那の行動を疑問に思わない方がおかしい。

「確認するが、十八は刹那と付き合う気はないんだな？」

「えっ？ あっ……いや、うん。そうだよ」

瞬の突然の、それもかなり突っ込んだ質問にたじろぎながら返答する。

否定する訳にはいかないが、すんなり肯定する事でもない。返答は曖昧だった気がする。

「わかった。だったら十八、海老ちゃんと付き合ってみたらどうだい？」

「??？」

瞬は何を言っているんだ？ 曖昧な返答は伝わってくれたのはいが、さっきは何も言わないと言っていたのに……いや、それ以前に、些か投げやりなんじゃないか？

「瞬。俺は真面目な話をしてるんだぞ？」

少し苛立った声を返す。刹那の時とはわけが違う。

「十八。俺だつて大真面目だ。確かに俺も刹那が何を考えているかなんてわからない。でも、これだけはわかる。刹那の行動はお前の為だ。違つか？」

「瞬……」

確かに……。そう言われてしまうと、刹那の行動の理由は俺以外に考えつかない。刹那の行動の全てに理由が生まれる。

瞬が鋭いんじゃないやなかったのかもしれない。俺があまりにも鈍すぎただけだったのか……。少し引つ掛かるが、十分に納得はできる。

「……付き合う付き合い合わないはともかく、瞬の言う通りだよ。それに突然だったからって、別に俺まで結論を急ぐ必要もないんだよね。もう少し様子を見るよ」

だいたい考えを急ぎすぎていたのは俺だった。刹那とちゃんと話した訳じゃないのに、一人で考えても戸惑うだけだった。

「そういう事だ。今夜にでも刹那に電話してみろ」

言いながら、やっといつもの笑顔を見せてくれる瞬。

「ああ、そうするよ」

もちろん俺も笑顔を返しておく。

そうして瞬と話しながら幾つかの校舎を渡り歩くこと数分。時計棟校舎に辿り着いた。

今日は仕事が少ない。既に活動終了している時計棟には誰もいない……そう思いながら時計棟を見上げる。

「ん、誰かいるのかな？」

明かりが漏れていた。二階の事務室の明かりだった。

「いや、俺達がカバンを取りに来るから点けておいてくれたんだろ？」

瞬はそう言うが、俺は何となく釈然としない。ある『予感』がする。

コンコン

「……………」

念の為にロックをするが、返事は無い。やっぱり瞬の言う通りなのだろうか。

扉を開く。

「……………」

じい〜

はい、海老原さんがいましたね。

扉の前には扉を開こうとした体制の海老原さんが立っています。そしてガン見です。体制は固まってるけど、俺の顔を固定した視線も固まってます。後ろでは瞬も固まってます。

「や、やあ」

驚きはしたが、彼女がいるかもしれないという予感がしていた俺は引きつりながらも笑う。

「……お疲れ様……」

少し考えるような素振りの後、名残惜しそうに視線を外す海老原さん。事務室内へと俺達を促すように奥へ進んで行く。

「他のみんなは？ 今日は大した仕事は無かった筈だけど……」

暖房が効いていて暖かい事務室。外の空気で冷えきっていた体を丸めながら入室した俺は思うままを尋ねた。

「……………」

無言。さっきとは打って変わって俺を見ないようにしている気がする海老原さん。彼女の机の上には書類などではなく、読みかけの文庫本。

実をいうと俺は予感以前にもしかしたらと思っていた……。やはり連絡をするべきだったと自省した。

「……待つてくれたんだよね？」

ビクツとする海老原さん。どうやら凶星だったらしい。

考えてみれば海老原さんが待つているのは想像できる範囲内だったのかもしれない。今日の彼女の行動、裏で刹那が糸を引いていたとしたら、

「……私もいるんだけど？」

そう、刹那もいるんだから十分に……？

ワンテンポ遅れてビクツとする俺。

思考中断。声の方に視線をやると……会長席に刹那がいた！

「せせせ！ 刹那ああんっ！ なしていつ！？」

これには全く予想外だった。色々と真面目だった俺の思考は一気に壊滅状態に陥る。穴があつたら自分を蹴り入れてやりたい気分だった。

「刹那まで、いったいどうしたんだ？ 俺達を待つていたのか？」

海老原さんがいる事には驚いていたようだが、刹那にはあまり驚かなかつた瞬間が訊く。

「私はあなた達なんて待つてないわ。私は十八を待つている曜子を待つていたのよ」

かなり不機嫌そうな刹那。自分を無視されたのが気に入らなかつ

たのだろうか、怪訝を通り越して目が据わってらっしゃる。

「ははは……だってよ？ 十八」

ひたすら苦笑する瞬は俺に丸投げしてきた。

「ま、まさか待ってるとは……いや、こんなに長引くとは思わなくて……途中で抜けてくるような内容でもなかったし……いや、とにかくごめん！」

どうしても言い訳みたいになっちゃってしまふ。

「私に謝ってどうするのよ。謝るのは曜子でしょう？」

全くその通りだ。

「ごめんっ！ 海老原さん！」

慌てて振り返ると海老原さんに深く謝罪する。どんな形であれ、待たせていた事実が変わりはない。

「……あ、あ……頭を上げて……！ ……私が……勝手に、待ってたの…… 十八は、悪くないの……」

おたおたする海老原さん。九十度以上上げた俺の頭を元に戻そうとぐいぐいしてきた。

「……それに……来てくれたし……待ってるの……楽しかったの……」

そう言いながら一生懸命ぐいぐいする海老原さんの顔は真っ赤かだった。

いい加減遅くなりすぎてしまったので、俺達四人はすぐに時計棟を後にした。

「ねえ。駅に行くって、どついつ事なの？」

「うるっさいわねえ。いいから黙ってついて来なさいよね」

いつにも増して不機嫌な気がする刹那は俺の質問に答える気は全くないらしい。

ついでさっきの事である。

『駅前に直行よ』

これは『さあ帰ろう』っていつタイミングでの刹那の発言である。

『えっ？ みんなで？ っていつかどうして？』

『わざわざあんた達を待ってたんだから、そうに決まってるでしょ。……少しは空気読めば？』

何にも前フリなかったから訊いただけなのに酷い言われようなの

は俺である。

『とにかくみんなで駅前に行くの。あんたは帰ってもいいけど、どうする?』

『おいおい、これで俺だけ帰ったら俺は可哀相すぎるぞ?』

理不尽気味な不機嫌を放出する刹那の続いての犠牲者は最近キヤラが低迷気味な瞬間である。

『はいはい。じゃあ曜子、行こっか?』

『……うん……』

扱いがぞんざいだった俺達に対して違いを見せる刹那。ぞんざいじゃないのはもちろんぼあくくと成り行きを見守っていた海老原さんである。

俺と瞬が困った顔を合わせて首を傾げたのは言うまでもなく、訳なんかわかる筈ないのも当然である。

そんな訳でしばらくして、久住ヶ丘駅前に到着。

刹那に言われるがままやって来たのはLeafもある高級住宅地側、南口のロータリーだった。

「刹那。ここに何かあるの?」

行っただけのお楽しみと勿体付けていた刹那。到着してもやっぱり

りわからないので訊いてみた。

「何かって、あるじゃない。わりと大きいのが」

???

「えっ？」

ロータリーを示すようにする刹那。

南口のロータリーは俺達の利用する北口とは違って無駄にただっ広い。タクシー乗り場、電光掲示板付きのバス停、おしゃれなレンガ造りの歩道、等々……。

「何処を見てるのよ。アレよアレ」

呆れ顔の刹那が再度示した先。

「クリスマスツリー？」

刹那の示すロータリー脇の小さな緑地帯。そこには最近設置されたクリスマスツリーがあった。

何処からどうやって持ってきたのかはわからないが、3メートルくらいある立派なモミの木だ。青いネオンを中心に飾り付けられたそのモミの木は誰がどう見てもクリスマスツリーである。

「そうよ。あなた達、アレを見てどう思う？ いえ、私が何を考え
ているかわかるかしら？」

ツリーをバックにくると俺達と向き直った刹那はふふんと含む

ようにして笑う。何故かキラキラな特殊効果が発生したのは俺の気のせいかな？ 何と言うか、とても絵になった。

「どうって……綺麗、とかじゃないの？ なあ？」

刹那が……とか言いそうになる前に瞬に振っておく。

「まあ間違っちゃいないけど、たぶん刹那の言いたいトコはそこじゃないぞ……」

何故か呆れたようなため息混じりの瞬は刹那が何を言いたいのかわかってるらしい。

「……樫の木……学名はアビエス……ラテン語で、”永遠の命”を意味する……モミ属は、世界中に……約40種が分布……千年以上生きている、ものも多い……高さは、60メートル……幹の太さは、1メートル50センチ、程度まで……成長する……」

海老原さん？

何故かモジモジしだした海老原さんは真つ赤な顔で豆知識を唱えだしたぞ。

「鈍感というか、十八はこういったイベントに縁がないのね。可哀相に……。瞬はわかっているみたいだし、曜子もテンパっちゃくらくらいに私の考えを察してくれたみたいだけど……」

「はあ？ どういう事だか全くわかんないよ。アレがクリスマスツリーで綺麗だったのは間違いないじゃん」

哀れむように見られたので思わず反抗してしまった。瞬は苦笑いで傍観してるし、海老原さんは相変わらず真っ赤な顔でぶつぶつ言ってるだし。

「この私がそんな感想を聞く為にわざわざ駅前まで来るわけないでしょう。……本つつとに鈍いんだから……」

「えっ？ えっ？」

「いい？ 来週あための24日。つまりクリスマスイヴね。その日に十八と曜子でデートするのよ」

「なっ！ ーとおっ!？」

俺と海老原さんでデート？ デートっていったら男と女が休日なんか一緒に遊んだりするやつの事か？

「……デート……主に、日付のこと……今回の場合……もう一つの意味……男女が……日時を、決めて……会う……そちらに、該当する、と……推測される……」

真っ赤っかのままでの解説をありがとう！

「何よ、その反応は。24日は既に冬休みだし、予定なんか無い筈よね？ まさか嫌だなんて言わないでしょうね？」

ギロリと睨まれる。

「い、いや！ そんな事はないけど……デートって……いきなり言われても……し、瞬！ なんか言ってくれよ!！」

がっかりしたみたいに傍観している瞬に振るが、がっかりしたままお手上げされた。

「……クリスマス……イエス、キリストの……誕生を祝う祭り……また、多くの民族に、見られた……冬至の祭り……融合した、もの……いわれる……聖誕祭……降誕祭……イヴは、その前夜祭のこと……ぶつぶつ……」

豆知識はもういいから海老原さんも何か言って！

「曜子は乗り気みたいね。あなたも別に嫌ではないんでしょう？」

勝ち誇ったように海老原さんを見た刹那は俺を冷めた目で睨む。はっきりしなさいよ、とでも言いたそうである。

「そ……そりゃあ……」

嫌だなんて口が裂けても言えないけど。だいたい唐突すぎるし、こういうのは誰かに言われて決めるものじゃないと思っただが……。

いや、それよりも、問題は……。

「刹那……」

だいたい過剰に不機嫌すぎるんだよ……刹那は……。

「な、なによ……」

不機嫌そうな雰囲気は変わらない。しかし、俺を見ていた冷めた

視線が僅かに外れる。

瞬の言っていた事はわかる……これは刹那が俺の為にしてくれる事……わかってる……わかってるんだよ……瞬。

いつたい刹那は……いや、俺達は……何がやりたいんだろっな？

「わかった。海老原さんさえ良ければ……」

易々と踏み込むわけにはいかない。だが、今回は仕方ない。海老原さんの笑顔と刹那の気遣いを守るう。

「……そう……じゃあ決定ね。曜子、いいわね？」

カクンカクンカクンカクン

ちよ！

「え、海老原さん！ 激しく頷きすぎだよ！ 首を痛くしちゃっよ
！」

またしても真面目だった俺の思考が遮断されてしまった。ツッコまずにはいらねん。

「ぶ、ふふふっ。いいコンビじゃない！」

バシッ！

「だっ！！」

言いながら背中をひっぱたかれた！

「さて。ちょっと遅くなりすぎてしまったわね……。十八、そろそろ行かなくてはいけないんじゃない？」

「えっ？ 何が？」

ふうと一段落したように言った刹那の言葉の意味が全くわからない俺。

「leafのアルバイト。これ位の時間からじゃなかったかしら？」

「あっ！」

刹那の指摘にハツとした俺はババツと駅の大時計に視線を移す。

6時35分

「だああっ！ ヤバい！」

定時は7時だが、下っ端の俺は6時半位から下拵えなどの準備をしなくてはいけない。店長はともかく、永島さんには絶対に怒られる。

「ごめん！ 俺もう行かないと！」

見事に慌てふためきまくる俺はleafの方向とみんなに体ごと視線を行ったり来たりさせる。急いで行かないといけないけど、色々と中途半端のままで行く訳にもいかないし、でも行かないといけないし……。だああっ意味がわからなくなってきた！

「いいから早く行きなさい！ あと24日には休みをもらっておくのよ！」

「えっ？ わ、わかった！ じゃあ瞬、二人を頼んだよ」

「ああ、任せておけ」

「海老原さんも、また！」

カクンカクン

クリスマスツリーの青い明滅に照らされた三人に送り出された俺はleafに向けて走り出した。

俺は軽く見ていたのかもしれない。

瞬の後押しも。

刹那の気遣いも。

海老原さんの優しさも。

俺自身も。

もう後戻りはできない。

俺は既に海老原さんの伸ばした手を取ってしまったんだ。

朝の通学路。欠伸を我慢しながら歩いていく。

隣には今日も海老原さんがいる。彼女は昨日と同じように俺を家まで迎えに来てくれた。

あまり眠れなかったのもある。しかし、『海老原さんが隣にいる』という例の安心感からなのか、気が抜けてしまってる俺は無性に眠いのだ。

昨日。leafに出勤した俺は予想通り永島さんにしこたま怒られた。

店長は、『遅刻じゃないから、何も気にしないで大丈夫だよ』と、か言ってくれたが、猛烈に申し訳なかった。

そんな非常に頼みづらい雰囲気の中、クリスマスイヴの休みを申請したところ、やっぱり永島さんにしこたま怒られた。

店長は、『高校生の十八君がイヴに何も予定が無いなんてかえって心配だったんだ。良かったよ』とか言っただけで承してくれただけだが、やっぱり猛烈に申し訳なかった。

永島さん曰く、クリスマスイヴはleafが一年で最も忙しい日らしい。しかも、今年は俺がいるからと予約を増やしてしまったらしい。

猛烈に申し訳なかった。

「ふぁ……」

無言で歩く通学路。ついに無意識の欠伸が出てしまった。……やば、こんな海老原さんに失礼じゃないか。

じい〜

恐る恐る見てみたらやっぱりガン見だよ。非難するような視線ならまだしも、心配してくれてるような視線だよ。めっさ申し訳ないよ。

「い、いやぁ、実は昨日あんまり眠れなくてさぁ」

言い訳してみる。

「……………」

じい〜

な、なんか言っつてよ……。いや、それよりもなんとなく嬉しそうなのはどうして？

「……………私も……………なの……………」

ん？ そう言った海老原さんは何故か顔を紅くしながら俯いてしまったぞ。

「……クリスマス……ときどき……わくわく……なの……」

かろうじて聞き取れるくらいの囁き声で言う海老原さん。
なるほど。昨日の一件から、遠足までの日にちを指折り数えてま
す、みたいな状態なわけだ。

「そ、そっか」。俺も楽しみかもですよお」

とは言つものの、嬉しい反面申し訳ない。

海老原さんとすごす事になったクリスマスイヴ。当日を想像する
と、俺だって楽しみな部分はある。しかし、俺の頭の中は刹那たち
への懸念やleafへの恐縮の方がよほど大きい。

昨日のバイトが終わってからだってそうだ。

昨日の午後11時頃。

leafから自宅に帰って来た俺は、まだ暖まっていない居間で
かしこまっていた。

目の前の畳の上には開かれた状態の携帯電話。ディスプレイには
着信履歴から呼び出した電話番号が表示されている。

佐山刹那

「……………」

よくよく考えてみると俺は瞬を除く執行部のみんなに電話を掛けた事が無い。そういえばメールだって受信したものを即返信したぐらいで、自分から送った事が無い。

まあ俺から連絡をする機会が無かっただけなんだが、いざこうして連絡しようとなると構えてしまう。やっぱり明日会った時にしようかなあ、なんてヘタレが発動しそうである。

いやいや、だからといって迷っていても仕方ない。遅くなれば遅くなるほど刹那に迷惑だ。

「ダアッ！」

掛け声と共に通話ボタンを押す。

時刻は11時少し前、バイトから帰ってすぐに電話すれば大丈夫かと思っていたが、寝てしまっただろうか。

『はい？』

あっさり出てくれた。

「……よ、よお」

どうしても気後れしてしまう。

『切るわ』

「だあああつ！ 待って待って！ いや……遅くに悪いけど、ちょっと話があるんだよう」

今のは俺が悪い。刹那に対してアレはマズい。どうマズいって、よくわかんないけどマズいったらマズい。

ともかく、話とはもちろん海老原さんの事。彼女の事を考えなくてはいけないのは俺であるというのはわかる。しかし、今回の諸々の発端だと思われる刹那と話をしたかった。

『意味のある話が前提条件。それに私は忙しいから、手短かに、簡潔に話すなら構わないわ』

なんかムツとしてるなあ。

「わかった。多分わかってると思うけど、海老原さんの事だよ」

『曜子が、なに？』

う……なんか怖い。

『い、いやあ、刹那はさ。海老原さんに……あの……どつよっ』

いやいや、意味不明すぎるだろ。どうやら慣れない電話と刹那の威圧感でヘタレ感が持続しているみたいだ。

『すごい意味わかんないわ』

当然だ。

「い、いや、なんか言ったは言ったっしょ？」

『何も言っていないわ』

いや、めっちゃくちゃ白々しいから。

「上手く言えなくて悪いけど真面目に答えてくれよ。今日の海老原さんが普通じゃなかったのは刹那の画策なんだろう?」

『何よ……曜日じゃ不服なわけ? それともルナの方が良かったのかしら?』

明らかに声の不機嫌レベルが上がった。というか軽く開き直りやがった。

「刹那、怒るぞ。そういう事を言ってる訳じゃないのはわかるだろう?」

俺が真剣である事を伝える為、若干強い口調で言う。開き直られた事は軽く流しておく。

『それとも私の方が良かった?』

「げほっげほっ!」

思いつ切りむせた! 内容はもちろん、いきなり甘えたようなかわいい声で言いやがった!

『冗談よ、ふふふっ』

クラツときた。とても楽しそうに笑う刹那の声に目眩を覚えた。

「せ、刹那っ」

『わかってるわ。でも十八、あなただつてまんざらでもないの
でしょう。』

楽しそうな声はそのまま、テンパる俺をなだめるように話を戻す
刹那。なんとというか、手玉に取られている感が否めない。

「そりゃあ……」

どうにか平静を装おうとすることができない。まんまと口ごもってし
まう。

確かに、相手はあの海老原さんな訳だから、嫌という意識は微塵
も無い。

しかし、問題は俺にあるのだ。

海老原さんを楽しませる為に遊ぶのはまあいいとする。彼女と一
緒にいると不思議と安心できるから、俺としても嬉しくは思う。

でも、俺には海老原さんの唯一にはなれない。それは海老原さん
に限る訳ではない。俺以外の全ての人に該当する。

俺には時間が無いからだ。

俺は誰かの心に根付いてはいけない。矛盾しているのはわかって
いる。しかし、越えてはいけない一線を忘れる訳にはいかない。い
くら刹那との関係が戻ったとしても、これだけは言う訳にはいかな
い。……刹那は知らない。だから、自分以外の存在で俺を満たそう
としてくれるのか……。

『……曜子は、いい子よ……』

「えっ……？」

口ごもったまま考え込んでしまった俺に穏やかな刹那の聲が届く。

『かわいくて、一生懸命で、よく気が付いて、何よりも優しい……。私が無茶な生徒会をまとめる事ができるのは曜子のお陰だわ……。本当に、本当に、いい子……』

「刹那……」

刹那の穏やかな声は続く。ムツとしていた声ではない、楽しそうな声でもない。まるでうわ言のように、刹那の本音を窺えるような、慈愛を纏う優しい声だった。

『あなたと瞬がそうであるように、私と曜子は……一番の友達なの』

一番の友達。

そうか……そういう事だったのか。

あの日。俺と刹那が時間を取り戻すことができたテスト最終日。

俺たちは決定的に足りないものを認めた。そして、それを補うもの、維持する為のもの、支えるもの。俺たちはそれを求めた。

俺にとっては、俺自身。刹那も、瞬も、俺に面影を重ねるなら、俺を気遣うなら、俺は己の傷跡を笑い飛ばす道化となる。遥のように、いつも笑い返せばいい。あの時の俺のように、いつも笑い返せばいい。

刹那がいたとしても、俺が笑っていれば悲しい過去とは重ならない。瞬と二人で重ねた時間を、刹那とも重ねるつもりだった。

刹那は違った。刹那にとって、補うもの、維持する為のもの、支えるものは、海老原さん……かつての遥……いつでも一緒にいる友達だったんだ。

遥と刹那、手と手を取って笑い合う二人。俺も、瞬も、何度その笑顔に笑い返したかわからない。

いつでもそうだったから。それは特別でもなんでもない、有り触れた日常のひとつかけらだったから。

似ているかもしれない。違うのかもしれない。いないなら身代わりを立てる……悲しい考え方なのかもしれない。でも、そこにはきつと有り触れた日常のひとつかけらがあるだろう。

刹那は、そんな日常を望んだんだ。

「刹那……俺は……」

その日常、俺には容易く想像することができた。俺、瞬、刹那……海老原さん、四人が並んで笑い合う光景は思い浮かべるだけでも眩しい。

しかし、俺の胸に穿った風穴は埋まらないだろう。

刹那のトラウマが癒されることは無いだろう。
瞬はきつと俺と刹那を気遣うままだろう。

『十八が考えている事はわかるわ。きつと私の思っている事をわかってくれていると思う。……でもね、それだけじゃないの……』

俺の思考の先に行く刹那。俺は穏やかに続く刹那のその声に吞まれていた。同時に瞬が言っていた海老原さんの視線の話を思い出していた。

『……曜子はE組で浮いた存在、らしいの……。私、そんなの絶対に嫌だわ……』

どうして？とは訊かなかった。

海老原さん、彼女がただおとなしいだけの女の子ではないというのは周知の事実であると思う。ぼそぼそと必要以上にしゃべらない、俺以外の人と目を合わせる事が無い。

E組の教室にいる海老原さん、いつも自分の席でひとり俯いているのではないだろうか……？ 自分の思考が勝手に推測したその姿に胸がチリチリと燻る。

『詳しくは電話で言いたくないわね。明日、話しましょう』

……確かに、もう夜も遅い。込み入った話とはいえ、深夜に電話で交わす内容ではないのかもしれない。ひとまずここまでにして、明日直接話した方がいいだろう。

「わかった。遅くに悪かったな？」

『うん……』

「じゃあ、おやすみ」

『……………』

あれ？

『刹那？』

『……………もう、切っちゃったの？』

???

「は？」

『眠いの？』

なんだ？

「いや……………別にまだ大丈夫だけど……………」

なんだなんだ？ 刹那の聲がなんとなく弾んできたぞ？

『そ？ 今は何してるの？』

「い、いや、刹那と電話してるけど……………」

『そっじゃないわよ。もう家には帰ってるの？』

「ああ、そういう事か。今は、居間で正座してるよ」

最初にかしこまった状態のままである。

『いまいま？ 正座？ ふふっ、変なの。私はね、もう布団の中にいるんだよ？』

「へ……へえ……」

なんだか色々ツツコミたいが、刹那の楽しそうな声を聞いていると躊躇われる俺がいる。

『復習してただけど、電話の途中でどうでもよくなっちゃった』

「そ、そうなんだ……」

どもりまくる俺はけっこうパニック状態である。

『再テスト、どうだった？』

「あ、英語がかなりいい手応えだったんだ。刹那のお陰だよ」

大した予習もしないで臨んだ再テストだったが、英語の方は納得のいく答えを全ての解答欄に記す事ができた。

『当然よ、私が教えたんだから』

「え、ああ……うん、その通りだよ、うん……」

テストの話に始まり、刹那の話は学校の話やどうでもいいような

話が続いた。そんな楽しそうな刹那の声に自然と俺も引き込まれていった。最初に意味のあるなしや手短云々とか言っていたよなあ、とか思ったが、それは野暮というものだろう。

他愛のない会話は携帯が異常に熱くなるまで続いた。

そういう訳で夜更かししてしまった俺と海老原さんは学校に到着した。

昨日と同じように図書館棟経由で時計棟に行くと、すぐに刹那が登校して来た。

「眠いわぁ」

早々にぐったりしてた。

「……刹那も……わくわく……？」

会長室の机に突っ伏す刹那を見て首を傾げる海老原さん。刹那もクリスマスが楽しみで寝不足だと思ってるらしい。

「ごめん、曜子、意味わかんないわ。それに仕草が凄いかわいいわ。まあ……とにかく、私は始業のチャイムまで寝るわ。寝顔とか見られるの嫌だから、十八はさっさと教室に行つて。でも、教室行く前に紅茶は淹れてって……」

そう言って再度突っ伏した刹那にせつせと常備しているらしいブルーランケットを掛ける海老原さん。

いや……なんともまあ、苦笑である。

この様子では昨日の話の続きは放課後になりそうだった。

刹那が寝ちゃったので、早い時間に教室に到着。

「おうおうおうっ！ シオちゃんようっ！」

教室に入った瞬間、やたらとすさんだヤツに絡まれた。

「お、おはよう……」

もちろん我らが涉である。始業時間まではまだまだなので、クラスメイトもまだまばらな教室。瞬も阿部さんも来ていない。そんな教室にいつも遅刻ギリギリの涉がいるのは珍しすぎる。

「寮の窓から見えちゃいましたよっ！ 朝からアツアツでしたねっ
！」

なんだこのめんどくさは……。どうやら一緒に登校する俺と海老原さんを目撃したみたいだが、キャラがイタすぎるぞ？

「近所だから一緒に登校しただけだよ」

嘘は言っていない。

「あーあーそうですかそうですかっ！ 楽しそうで何よりですわあっ！」

嗚呼……多分この文句を言いたいが為に早く来たんだろうなあ。

「今日も一緒にお弁当ですかあっ！ べっつに羨ましくもなんともないですわあっ！ 俺には瞬ちゃんがいるもんっ！ 学食のおばちやんの手作りだもんっ！」

もうほっとこう……。

ツッコむのは諦めて授業準備に取り掛かる俺だった。

しばらく渉のスルーを頑張っていると、瞬と阿部さんが登校して来た。

「なるほど、朝からそんな光景を見ちまったから渉が………っつか触んなよ！ ああっマジでうぜえっ！」

冷静な解説をしようとした瞬にクネクネと甘えだす渉。必死に引き剥がす瞬の表情は冗談ぬきで迷惑そうだった。

「塩田君ってえ、海老原さんと付き合ってるのあ？」

二人をナチュラルに放置した阿部さんはいきなり突っ込んだ事を訊いてきた。

「いやいや、別にそういう訳じゃないよ！」

必死に否定する俺。なんとなく阿部さんに誤解されるのはマズい気がする。

「ふうん……お家に迎えに来てくれてえ、手作りのお弁当と一緒に食べてえ……ふうん……」

うわぁ、そう言われると『お前らもう付き合ってるじゃん』って感じかも。

「ところでさっ！ 今年のクリスマススイヴはどうしよっかつ！ 去年みたいに三人で集まるっしよっ!?!」

瞬にじやれたままの渉が思い出したように叫ぶ。

渉の言う通り、去年は俺と瞬と渉の三人でクリスマスパーティーなる物をやった。

いや、キモいのはわかってる。わざわざそんな日に野郎三人で集まってパーティーなんてドン引きだけど、それはそれでかなり盛り上がった。

まだleafのバイトが無かった俺。あまりに暇すぎた渉。二桁に及ぶ(三桁との噂もある)女の子たちとの予定を全てキャンセルして付き合ってくれた瞬。

男三人でカップルでだらけの御美ヶ浜を闊歩したり、男三人で5時間耐久カラオケしたり、男三人でケーキ食ったり、男三人で夕日に向かって叫んだり、確かに楽しかった……。

「ごめん、今年は無理」

俺である。

「十八がないなら俺も無理」

瞬である。

「よーしっ今年も御美ヶ浜まで繰り出してイチャつくカップルどもに片っ端から俺たちの熱い友情を………って、ええええええー！っ！！！」

渉である。

「ちよつとちよつとっ！ 話が違っじゃんかよっ！」

どう話が違っのかは知らんが、かなり不憫な状態の渉。俺と瞬に視線を行ったり来たりさせて意味不明な身振り手振りが激しい。

「ごめん、予定があるからさ、他の日とかなら……25日とか」

「イヴにやるからこそ意味があるに決まってるっしょーよっ！ シオツ！」

「流石に全員は無理だけど、今年はなるべくたくさん相手してやるうかなあ、とか思う訳よ」

「いったい何人の女の子を同時攻略するつもりなんだよっ！ 瞬っ！」

もうすぐHRが始まる教室に渉の魂ソウルが木霊する。既に自分の席に

着いているクラスメイトたち、もちろん誰ひとりとしてそれに構う様子が無い。流石だ。

「あ、あ、阿部ちゃんっ！もし良かったらっ！」

「はは、マジ勘弁して山崎君」

うわぁ、いつも笑顔の阿部さんまで真顔だよ。

「ち……ちつくしよおおっ！グレてやるううううっ！！」

ぶんぶん首を振る渉は叫びながら教室を飛び出して行った。

「わ、渉！」

「十八！」

追い掛けようとした俺の手を掴む瞬。

「ひとりにしといてやれよ……」

いやいや、そんなシリアスに言う所じゃないよ、瞬。

渉の予想通りなのが納得いかないが、昼休みになると、昨日と同じようにお弁当持参の海老原さんが俺を待っていた。

なんとなく今日は別の所で食べる事になった。目指す場所は屋上と並んでお弁当スポットとして名高い中庭である。

その行くすがら、一年二年校舎の購買付近に異様な人だかりを発生させた。

「なんだろうね？ あれ」

わいわいぎゃあぎゃああと騒がしい人だかりは何かを囲んでいるように見えた。購買とは少しずれた位置なので、昼食を求めている行列ではなさそうだ。

「……期末テスト……結果の、掲示板……」

疑問符を浮かべる俺を見た海老原さんは教えてくれた。

「そっか……今日からテスト結果が掲示されてるんだっただね……」

そうだった。購買脇にあるのは連絡掲示板。そこに期末テストの上位100位までの名前が掲示されているんだ。

「上位の人たちは有名人ばかりだもんなあ……はは、みんな興味津津なんだね……」

そう……トップ30。やはり俺なんかには、おこがましいにもほどがあった。普段から頑張っている人たちと肩を並べようとするなら、あまりに時間が足りなすぎたんだ……。

自嘲気味にそう思うと同時に俺は感慨無量に陥る。己の不甲斐な

さが大きく押し掛かる。堆積する無念の残滓が増殖する。否応なしに湧き上がる自責の念が思考を浸蝕して行く。

俺の努力が届いたかどうかはわからない。……しかし、もっと違った形でこの瞬間に立ち会いたかった。

「……見に、行く……？」

俺の様々な感情を読み取ったのか、違うのか、海老原さんは俺の興味を促した。

「……うん」

正直見たくはない。でも、俺は見なくてはいけない。そう思えた。

海老原さんを庇いながら人垣を進むと、どうにか見える位置に辿り着いた。

二学期末考査結果、二学年。そう書かれた連絡掲示板を見た俺は驚く。

一、海老原曜子【878点】

凄い。一位は海老原さんだ。学年トップクラスの成績だという事は知っていたが、素直に驚いてしまった。

しかし、俺は知っている。俺たちが入学してから、ずっとそこにあった名前を。

その名前を探した。

五十、佐山刹那【800点】

ズキリ、と胸が痛んだ。

先ほどから俺を包んでいた感情が逆巻き、激化した。

「会長、最後のテストサボっちゃったらしいよ」

「入学以来、全部満点だったんだろ？ もったいねえよなあ」

「飽きたんじゃないの？ どうせ満点だし、めんどくせって」

人垣の何処かから発する声に敏感に耳を澄ます俺がとても情けなく思えた。

彼らを憤るのは間違っている。彼らは理由を知らない。理由を知れば、彼らの話の渦中にいるのは俺だ。刹那が維持してきた殻を壊したのは俺なんだ……。

「一位の海老原さん？ いつも二位から五位くらいにいたよね？」

「会長は次元が違うとしてもさ、凄いよね。ついに一位ゲットしたって感じかな？」

「あんたたち知らないの？ 一回目なんだからいい点とれるのは当

然なんじゃない？」

「どづいづこと？」

「だって海老原さんダブリだもん」

え？

あらゆる感情が一気に収束した。

ダブリ？ 留年？

俺は条件反射に近い動きで傍らの海老原さんに視線を移す。

海老原さんは一切の感情を感じさせない無表情で掲示板を見つめていた。いつの間にか俺のブレザーを掴んでいた。

俺はその無表情に見ていられないほどの寂寥感を感じた。

俺は弾かれたように人垣を飛び出した。もちろん、海老原さんの手を引いて。

人。

誰しも傷付きたくはない。

人と人。

他人でも、友達でも、恋人でも、家族でも。上辺だけで付き合い合えば、傷付かない、傷付けない。

でも、人は上辺を取り払おうと努力する。

何故だ？

『そんなの簡単だよ、お兄ちゃん』

遥……。

『それはね』

』

人垣を飛び出した俺たちは中庭に辿り着くと、すぐに人目の付きにくい場所を探して落ち着いた。というより、勢い任せのままの俺

がそうしてしまった。

俺は怖かった。

海老原さんが何処か遠くに行ってしまうような気がして……もう今までの海老原さんには会えないような気がして……不甲斐ない自分自身を忘れてしまふほど怖かった。

海老原さんはひたすら俯くだけで、見るからに元気が無かった。やはり勢い任せの俺の号令で強引に昼食を始めても、彼女は自分のお弁当には一切手を付けないで俯いてばかりだった。

「お、美味しい〜」

ひたすら無言で俯く海老原さんに頑張っておちやらける俺。もちろん美味しいのは本当だ。

「……………」

無視ではない。よく注意していないとわからない位で頷いてくれた。でも、いつもみたいに俺の方を向いてはくれなかった。

「ほらあ、海老原さんも食べないと昼休み終わっちゃうよ〜？ 要らないんなら貰っちゃうよ〜？」

別にそこまで時間が無い訳ではないが、話が切れるのが嫌で思い付いたこと全部を口にする。

「……………」

ずっと俺の膝の上のお弁当が増える。じゃなくて、海老原さんは本当にお弁当をくれた。

「いやいやいや……冗談のつもりだったんだけど……」

今日のお弁当も昨日と同じようにめっちゃ美味しい。だから、少食の俺でも無理すれば食べきれるとは思う……けど、海老原さんは大丈夫なのだろうか。雰囲気から食べたくないらしいのは伺えるが、恐縮は流石に大きい。

「……いいの？ 本当に貰っちゃうよ？ 午後の授業中にお腹が鳴っちゃうかもだよ？」

「……………」

カクン

今度はちゃんとわかるように頷く海老原さん。俺も彼女がそうしやすいようには言ったのだが、彼女も彼女で俺にはつきりとした意思表示を示したのかもしれない。

「いやっほうっ！ なんか悪いなあっ！ でも、食べたくなったら言っただけ？ ゆっくり食べるからさあ。一緒に食べた方が美味しいしさ。少しでも食べた方がいいとも思っただけさあ。」

渉の真似をして頑張ってみるが、海老原さんは辛うじてわかる位に頷くだけだった。

「はは……は……」

なんかバカみたいだ、俺……。
でも、俺は無表情で俯く海老原さんに何を言っているのかわからない。バカでも関係ない話でもなんでもいい、何か喋ってなくちゃいけない気がした。

さっきの事……俺がこうして知ってしまった以上、それは海老原さんが自分で話すまで訊いてはいけない事。俺はそう思っていたからだ。

刹那が話そうとしていたのもこの事なのだろう……。

「……あの……」

二つのお弁当をゆっくりゆっくり頂いていると、海老原さんは突然言った。もう昼休み終了の予鈴時刻に迫る位の時間だった。

「な、なにっ?」

やっと口を開いてくれた海老原さんに驚きつつも勢いよく聞き返す俺。

「……………」

と、覆い被さらん位の勢いで聞き返したはいいが、海老原さんは何も言わずに、また俯いてしまった。って、これじゃ俺が海老原さんを問い詰めてるみたいじゃないか。

「……………留年……………」

俺が何か言わなくちゃと言葉を探していると、海老原さんは俯い

たまたまで言った。寂しそうで平坦な口調、でも、海老原さんの声としては大きな声だった。

「う、うん……」

俺はその海老原さんの雰囲気呑まれてしまった。

「……ごめんなさい……」

「えっ？」

再び平坦な口調で呟かれた言葉は謝罪。既に俺の思考はついて行けない。

「なんで海老原さんが謝るの？ 謝る事なんて無いと思うよ？」

事情なんて知らない。でも、少なくとも俺に謝る事など無いのは間違いない。

「……黙ってた、から……」

「いやいや、待って待って、そんなの俺が訊かなかっただけだよ？ 海老原さんが悪い訳ないよ？ だいたいさっき聞いたのだから、偶然なんだし、俺は少しも知らなかったんだよ？」

俺は捲し立てる。確かに俺はその事に興味を持ってしまっているかもしれない。しかし、それが海老原さんの領域内である事はわかる。実際ついさっきまで全く知らなかったんだから、興味本意に訊こうだなんて絶対に思わない。

「……その内……言う、つもりだった……でも、できれば……自分で、言いたかった……」

俺の少し大きめの声に対しても海老原さんの声量は変わらない。坦々としていた。

「べ、別に、無理に言わなくても……」

「……私……引き籠もり……だった、から……」

「……！」

絶句した。独り言で呟いたような言葉は俺の予想の斜め上を大きく上回るものだった。

引き籠もり？ 不登校？ 海老原さんが？

「……実は、年上……」

俯いている海老原さんは驚く俺の様子を見ていないからなのか、話すのを止めてくれない。坦々とした口調が続く。

「……一回目、じゃないけど……似たような、もの……ズルみたいな、もの……」

「……」

俺はもう何も言わなかった。この状況と彼女の雰囲気呑まれたのもあるが、俺は彼女の気持ち少しだけ分かり掛けてきた気がする。

「……この学校に来た、のも……今年の春、から……前の学校に、行かなくなつて……ずっと、引き籠もり……だったから……」

「……」

「……私……根暗で、ウザいから……」

俺は気付く。

彼女は言えなかつたんじゃない、言いづらかつただけ……いや、本当は言いたかつたんじゃないだろうか。

前の学校。引き籠もり。留年。何かの事情。

そんな事よりもさつき海老原さんが俺のブレザーを掴んでいた意味を考える。昨日の刹那との電話の意味を考える。……考える。

「……もう、十八にも……迷惑、かけちゃう……」

「それは違う」

俺は即答した。視線をくれる訳ではないが、彼女の意識が俺に向けられる。

「それは違うよ、海老原さん。さつきも言ったよね、俺は知らなかつたつて。そう、知らない。俺は海老原さんの事をまだよく知らないんだ。知り合つて一月ちよつとだから当然だと思つ。でもね、俺はその短い期間で何度も海老原さんに感謝したんだ。何度も、何度もだよ？ その感謝がそう簡単に迷惑に変わる事なんて絶対に無い

よ

「そうなんだ……俺は何度も海老原さんに助けてもらった。心の中で何度ありがとうを言ったかわからない位だ。」

「どんな事情があつたのかわからないけど、俺からは訊かない。でも、海老原さんが俺に言いたいなら言えればいい。外野の言つた事なんて気にしないで、海老原さんの言いたい時に言えればいい。今でも明日でも、ずっと先でもいい。俺は待つてるから、海老原さんの言いたい時に言えればいいんだ」

誰にだって隠し事はある。俺にも、海老原さんにも、刹那にも……。言いたくない、聞かれたくない。自分が傷付くから、誰かが傷付くから、言いたくない理由は必ず存在する。

それを誰かに聞いてほしいと思うなら、その時を決める事が出来るのは本人だけなんだ。

「だから……うん、大丈夫。大丈夫だよ、海老原さん」

俺はいつかのように、小さな子供の相手をするように言う。そういえば彼女は年上な訳なんだけど、いいのかな？

「……………」

ゆっくり顔を上げた海老原さんはいつもみたいに凝視を……って近っ！俺の方に乗り出し気味に凝視してきた！しかも何その恍惚そうな表情！？

じい〜

「……と、とにかくっ、お弁当はどつする？ ほとんど食べちゃっ
たけど……食べる？」

ふるふる

じい〜

「あ……うん。じゃあ俺が食べちゃおっかな？ もったいないし…
…」

カクン

じい〜

「………」

もぐもぐ

「………」

じい〜

もう凝視というより、俺の顔を隅々まで覗き込むみたいにガン見
してくる海老原さんだった。

放課後。時計棟、生徒会事務室。

今日の活動内容は二学期のまとめとなる事務作業と文化部の有志一同で開催されるクリスマスパーティーについての予算決議である。

しかし、そんな忙しそうな活動内容でも、生徒会執行部の超人たち（俺を除く）に掛ければ造作も無い仕事らしい。

「さあ、ティータイムの時間だわ」

あっという間に一段落してしまったので、そういう事になった。

「なーにがクリスマスパーティーだよ。どいつもこいつも浮かれやがって、バカくせえ……。なあ、円あ」

「私は知らん。はっきり言って興味が無い」

「楽しいイベントなんだからウキウキしちゃうのはしょうがないよ、トモちゃ〜ん」

俺製の紅茶を囲んでのティータイム中。漫才……もとい、雑談に花を咲かせる一年生たち。

「……………」

じい〜

その反対側の机からは、作業の時から継続中の熱い視線が俺に口ツクオンしたままである。

もちろん視線の主は海老原さんだ。

「……おい、十八……」

ひそひそと話し掛けられた。隣の机に座る瞬である。反応すると、瞬は俺の机にノートを広げて、トントンとそれを促した。

” どういう事なんだ？ いつも通りな気もするが、なんとなくお前に対する海老ちゃん凝視が三割増し位な気がするぞ？”

ノートには瞬のメッセージらしき文章が書かれていた。

まあ……そりゃそうだろうなあ。俺からしても海老原さんの視線のパワーアップは身を以て感じてしまう位だ。俺と海老原さんの間に座ってる瞬からしたら気にならない訳ないよ。

元気になってくれたのは嬉しいけど、恥ずかしいような、くすぐったいような……。

” よつぽどいい事があつたみたい”

瞬のメッセージの下に返事を書くが、瞬は首を傾げるだけだった。確かにいい事が俺にどう繋がるのか説明してない訳だから当然だろう。かと言って説明するのは海老原さんに申し訳ないし……。

そして、そのいい事は、たぶん昼休みの俺との事に違いな訳なんけど、やっぱりちょっとくすぐったいよなあ……。

「十八……十八っ……」

また呼ばれた。今度は刹那みたいだ。

「ちょっといらっしやいよ」

「はい……?」

いつの間にか紅茶を飲み終えたらしい刹那が事務室入り口で俺をオイデオイデしていた。慌てて近くに行くと、ふん掴まれて部屋から引っ張り出されてしまった。

「せ、刹那、なに?」

廊下に出て、向かい合うように立たされた俺は取りあえず訊いてみる。強引に引っ張り出されたけど、刹那は別に怒っている訳ではないっぽい。

「何じゃないわ。昨日の話の続きに決まってるじゃない」

呆れたように俺を訝しむ刹那。

「ああ、うん、そうだったね」

昨日の電話の続き、か……それで海老原さんのいる事務室から引っ張り出されたらしい。まさかこんな時に話すとは思わなかったの
で、俺は軽く面食らってしまった。

「取りあえず私の知っている曜子の事を教えておくわ」

「あ……いや、それなんだけどさ……俺、聞かない事にしたんだ」

これは昼休みの時に決めてあった事だ。昨日の刹那の優しさを蔑ないがしろにするように申し訳ないが、仕方ない。

「はい？ ちょっとどうしてよ？」

「実は昼休みの時にさ、聞いたんだ、海老原さんのこと。全部って訳じゃないんだけどね。だから、その、刹那からは聞かない方がいいと思うんだ」

はつきり言ってしまうえば、俺だってまだよくわかってない。もしかしたら、刹那に訊いた方がいいのかもしれない。でも、海老原さんにああして言ってしまった以上、訊く訳にはいかないんだ。

だから、俺は精一杯の真剣な態度を心掛ける。せめて刹那の優しさには俺が応えなくてはならない。

「何よ……私の知らない内に色々あったみたいじゃない……曜子も何か様子がおかしかったし……」

俺の真面目な態度から察してくれたのか、少し不満そうなのや、何処か悲しそうな表情を残しながらも引いてくれた。

「曜子は本当にあなたの事を信頼しているのね……私じゃ敵わないわ……」

そう言つと刹那は悲しそうな表情を濃くする。まるで自嘲しているようだった。

「刹那……」

刹那が俺と海老原さんの事を急いでいた理由。それはきつと、海老原さんが昼休みの時みたいになってしまつのを避けたかったからじゃないだろうか……。

刹那は昨日、海老原さんのクラスでの事を言った時、『浮いた存在』らしい』と、言っていた。

本当なら、刹那は海老原さんのクラスに行つて確かめたいのかもしれない。でも刹那には出来ない。男が怖いからだ。

……俺が執行部に入って間もない頃、俺の教室に来てくれた刹那にはどれだけの勇気が必要だったのだろうか……。今更ながら嬉しくもあり、同時に自分に腹立たしくもある。

「まあいいわ。上手くやってるみたいだし、私はもうあまり口出ししない事にするわ……。ほら、早く戻つて仕事を片付けてしまいましょう?」

刹那の雰囲気戸惑う俺に対して切り替えたように表情を和ませる刹那。

「……その前に、おかわり淹れて来るよ。飲むだろ?」

俺も刹那に倣う。今回は刹那の気遣いを守ると決めたから。

「わかってるじゃない。よろしく頼むわ」

「うん」

嬉しかったのか、微笑んでくれた刹那はそのまま事務室に戻って行った。

「……………」

廊下に取り残された俺はしばらくそのままだった。刹那がいなくなった事で冷えきった廊下の冷気を思い出したように感じ取る。

そして、あの日の刹那の表情を追懐し、感慨に浸る。

「……それと刹那、ごめんな……」

既に誰もいない廊下、刹那の入った入り口に向けて呟く。

五十、佐山刹那

網膜に焼き付いたものを払拭したいかのように、俺は自己満足を吐き出した。もう謝ってどうにかなることじゃないのはわかっていながらだ。

直接謝ったら刹那はきつと怒っただろう。だから、言えない。でも、口にしなければ治まらない。だから、自己満足。

そして、もう一つ。刹那が俺に打ち明けたい事。それを聞けない事に対して……。

「本当に、ごめんな……」

もう一度呟いた俺は給湯室に向かった。

言えないこと。隠し事。秘密。

俺たちには、そんなものが余りにも溢れている。

俺の矛盾、それを抑制しているのも、開放しようとしているのも、俺の秘密。

そして、その抑制と開放の狭間にあるのは刹那の秘密。

上辺だけの馴れ合い。

違う。遙は言っていた。

『違うよ、お兄ちゃん。それはね、きつと好きになりたいからなんだよ。』

誰だってそうだよ。好きか、嫌いか、どっちかだけ。あつ、もちろんボクは嫌いななんかいらなによっ？

えーと、それでねっ、失敗しても、後悔しても、また好きになりたいの。だって、そうでしょ？

誰かとかじゃないの。そうなる基準はそっちじゃない。ただ、そうなる自分が好きだけなんだから 』

小学生の癖にバカな事を考えてばかりだった俺は、答えが出ない考えを廻らすのが好きだった。

でも、遥はあっさりと答えを言ってしまう。まるで始めから知っていたかのように。

いつもは難しい事なんかわかんないって駄々をこねてばかりでも、こんな時だけは俺を簡単に納得させてしまう……。

そうなんだ……俺の矛盾だって、遥に言わせれば当たり前のこと。答えなんてとっくに出ているんだ。

大切な人たちに俺と同じ苦しみを与える訳にはいかない。でも、身近な人の悲しい顔なんて見たくない。

『幸せになるのは自分以外の人。誰かの笑顔っていいだろ？ そう思わないか、十八』

忘れ掛けていた俺の信念。

……心から、そう思うよ。父さん……。

生徒会の活動を終えた俺たちは、いつもより早い時間に時計棟を後にした。まだ放課後も中頃だったが、既に冬の寒空は色を失い、吹き荒ぶ北風が太陽のぬくもりを連れ去ってしまった。

もうすぐ冬至。一年でも太陽の出ている時間が最も短い時期であり、乾燥した空気による冷え込みもひととき厳しくなり始める時期でもあるだろう。

今日はleafの定休日だった。昼間の事もあって海老原さんが気になった俺は彼女と一緒に帰る事になった。勉強会の時と同じように彼女の家の前まで送り届けるといふ訳である。

そして、かなりいきなりだが、俺は現在パニック状態にある。

「おじやましま〜す……」

ここは海老原さん家の玄関だ。そして正に今、俺はそこに上がり込んだところなのである。

「……私の部屋……二階、だから……」

「う、うん……」

革靴を行儀よく並べていた俺を促す海老原さん。思いがけないこの状況に俺の緊張はかなり高い。自意識過剰かもしれないが、海老原さんもそんな感じかもしれない。

「あ、挨拶しなくちゃ、かな？」

刹那以外の女の子の家にお呼ばれするのはかなり久しぶりの俺は妙な質問をする。おいおい、女の子の親御さんに挨拶とかどんだけ……いやいや、そうじゃないそうじゃない、おじやまするんだから挨拶するのは当然なのだ。

「……そんなの、いい……早く……」

心の中で自分とツッコミ合っていると、そんな俺を急かすように手を引つ張ってくる海老原さん。どうやら俺が挨拶するとか言い出したのが恥ずかしかつたみたいだ。

そういう訳で、なすがままの俺は二階に引つ張り上げられてしまった。

はい、ここでちょっと状況を整理させてください。端折った部分を思い出してみます。

つい先ほどの事です。彼女を自宅前に送り届けた俺は今までと同じように挨拶をしたんです。

『……寄ってく……？』

『はい？』

で、返された言葉がちょっと難解だったから聞き返したんですよ。

『……お茶、出すから……』

そしたら彼女はそう返ってきて……そうですね、俺は「こ」でやっと理解できたんです。

『いやいやいやっ！ そんなお構いなくっ！』

まあ、当然（？）（こうなりますわなあ。 ははは。

『……お礼……』

『いやそのっ！ 家の人に迷惑だしっ！』

『……いるけど……私の部屋、なら……平気……』

『恐縮すうっ！』

そうそう、そんな感じで約二十分の間答を繰り返した挙句、結局お邪魔する事になってしまったんだ。……いやはや、予想通りすぎる展開でしたね。申し訳ないです。

「なんかゴメン……」

「……？ ……部屋で……待ってて……」

なすがまま状態で更に意味不明な俺にそう言い残した海老原さんは階下へと下りて行ってしまった。

「……………」

少し廊下でうろろしてから海老原さんの部屋の扉を開く。

「おじゃまします……」

一応、もう一度挨拶しておく。緊張しつつ、手探りで明かりを点けて、蛍光灯の明りに照らされた部屋の中を、見た俺は息を呑んだ。
本。

見渡す限りの本で埋め尽くされていた。八畳くらいの洋室だと思
うが、正確にはよくわからない、何故なら壁が無いからだ。本来は
壁紙がある部分は全て背表紙で埋め尽くされている。四方の壁はこ
の入り口と窓を除いて全てが本棚、クローゼットも半分は本棚で開
かなくなっている。机もベッドもあるが、びっしり詰まった本棚際
に設置されている。読み終えた物なのか、それとも棚に入り切らな
いのか、本棚の壁の隅には積み上げられた本。あまり統一性の無い
様々なジャンルの本は如何にも文字が多そうな本ばかりだった。当
然のように漫画なんかは一冊も無い。

俺は図書館棟に行った時以上の驚きで愕然としてしまった。

異様な空間にたじろぎながらも、俺は最も見慣れた物である窓際
へと足を進める。そして、部屋の中の圧迫感を少しでも緩和しようとカーテンを開いた。

水中から水面に浮上したような感覚を覚える。出窓から覗く小さ
な風景が窒息しそうな程の圧迫感から俺を一気に解放してくれた。

そして、もう一度、部屋の中を見回す。本で埋め尽くされたよう
な部屋。テレビも、ラジカセすら無い。海老原さんらしいような気

もする。勉強が出来て、読書が好きで、おとなしい海老原さんのイメージにはぴったりかもしれない。ひとりの時間をたくさんの本を讀んで過ごす海老原さんはこの部屋にきつと溶け込むだろう。

でも、俺にはここが牢獄のように思えた。

少し俺の部屋に似ているのかもしれない。似ているとはいえ、おおよそ何も無い俺の部屋に対して、過剰すぎるほどの物で溢れているこの部屋。双壁を成しているようにも思えるが、根本的な部分はさして変わらない。手っ取り早く言ってしまうえば、俺にとっても、彼女にとっても、それぞれは居場所ではないという事になる。

……いや待て、俺は何を考えているんだ。ここは海老原さんの部屋で間違いないんだ。全てが憶測に過ぎないんだし、余りにも彼女に失礼じゃないか。

「……ん？」

じい〜

「でいやー!」

不意に視線に気が付いた俺は本気で驚く。飛び上がらん位の勢いで……実際飛び上がった。

「いやははっ海老原さんひゅーっ!」

「……?」

馬鹿げた考えを振り払おうと頑張る俺、その滑り気味のテンションにコテンと首を傾げる海老原さんだった。

しばらくサムいテンションを引っ張った俺が冷静になると、海老原さんが淹れて来てくれたお茶をいただく事になった。

「……コーヒー……インスタント、だけど……」

「コーヒーならなんでもオツケーだから……じゃなくて！ お構いなく……でもなくて！ いただきます」

「……くつろいで、ね……？」

冷静になった事で再確認した状況にテンパる俺を見て嬉しそうに微笑んでくれる海老原さん。状況にというと、女の子の部屋で二人きりであるのもちろんのこと、更にはこの、まるで本屋のど真ん中でお茶しているような状況、その事である。

「……十八……コーヒー……好き、なの……知ってるの……」

「えっ？ ああ、そうなんだあ。いつつ俺だけコーヒー飲んでるもんねえ。うん、コーヒーは好き、大好き。苦くても甘くてもコーヒーならなんでも大好きなんだよ」

「……う、うん……」

振ってくれた話題に『俺ジャンルキタコレ』と食い付いた俺だっ

だが、海老原さんは顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。ヤバい、俺の嬉しくてニヤけた顔が変わったのかもしれない。

「ま、まあ、それはそれとしてもさ、凄い量の本だね、いったい何冊くらいあるの？」

無言空間になる前に手近な話題を振る。実際この部屋に来てこの話題を振らない方が変だと思う。

「……入り口、右側から……五十音順に、並べてあるの……ちょっと、順番に追ってみるの……」

「へっ？」

少しだけ考えるような素振りの後、海老原さんは妙な事を言い出した。

「……あ行の、作家さん……ぶつぶつ……」

目を閉じてぶつぶつと作家さん達の名前を詠唱開始、同時に指折りカウントを開始した！

「ちよっ！俺が悪かったから正確な数量の計算を止めてえ！」

海老原さんの無鉄砲すぎる行動を慌てて阻止する俺。一冊一冊思いついてカウントとかしたら絶対に今日中に終わらないよ。ていうかなんだか申し訳ないよ。

「いやまあ、だいたい一万冊は余裕で超えてるだろうねえ……。でもさ、やっぱり海老原さんは本が好きなんだね？こんなにたくさ

んの本を持つてる人って、中々いないんじゃないかなあ」

これは俺の素直な感想である。

「……そう……？」

おっ、海老原さんもまんざらでもないみたいだぞ。

「そうだよ。初めて会った時も駅前の本屋だったじゃん。……なんか凄いの読んでたけどさ……」

「……昼妻シリーズ……！」

「えっ……海老原さん？」

食い付いて来た!？

「……昼下がりの団地妻、シリーズ……うだつの上がらない……サラリーマン、ヨシオを……夫に持つ、アケミが……語り部と、なる……ヒューマンドラマ……全12巻……現在も、月刊”わかおくさま”で連載中……最新巻、『友情編』は……すごく、感動するの……」

「……………」

いや……ねえ？ どうしよう。

なんというか、ヒューマンドラマだったのかよとか、12巻も出てんのかよとか、月刊若奥様?とか、っていうか感動するんかいとか、色々とツッコミたいが、一番ツッコミたいのは海老原さんのホクホクテンションだよっ。

「……でも……まだ、買えない……年齢的には、買えるけど……学生、だから……立ち読みで、我慢……なの……」

「やっぱり官能小説かい！ それに立ち読みでもあかん！」

ああっ！ 思わずツツコんでしまった！

「……濡れ場は……圧巻、なの……」

「きゃあああっ！ 恥ずかしいようっ！！」

海老原さんは何気にイケナイ子だった。

コーヒを3杯ほどご馳走になった俺は、いい加減おいとまする事になった。

海老原さんは玄関前まで送り出してくれるらしく、一緒について来てくれた。海老原さんの部屋も落ち着かなかったけど、他はもっと落ち着かない。正直助かった。

静かに階段を下りて、色々と構えながら靴を履いて、

「おじやました〜」

リビング方面に向けてしっかりと挨拶。

「……………」

じいじ

返事は無かった。俺はちゃんと聞こえるように言っただけだ。だが、リビング方面からの応答は無い。代わりに海老原さんが見つけてくれていた。

「……………」

じいじ

「……………」じゃあ、海老原さん、おじやましました。それと、ごちそうさま

……………だから俺は何を考えているんだ。明らかにお節介が過ぎるだろう。それに俺の馬鹿な思考をこの子に持ち出すのは止めるんだ。

俺は僅かに膨れようとした思考を遮断しながら靴を履き終えた。

「……………」十八……………今日は、ありがとう……………」

踵を返そうとした時に海老原さんは言った。それを聞いた俺は体の芯から脱力するようにホッとしてしまう。

俺は思う。やっぱり海老原さんは安心する。俺の一番好きな言葉を言ってくれたという事もあるが、彼女の気遣いは俺の緊張や不安を拭い去ってくれる優しさを伴っている。これほどの安心感は一瞬に

も、刹那にも感じた事がない。

「……うん。こちらこそ」

そう返した俺は、海老原さんの家を後にした。

俺は刹那の部屋を除いて女の子の家、いや、友達の家にお呼ばれするのはかなり久し振りだった。中学の時くらいが最後だっただろう。

小学生の時は刹那や瞬の家だけではなく、藤村や河本の家、女の子の桂の家だつてよく遊びに行った。もちろん今日のようにひとりではなく、刹那や遥、瞬と一緒にだったが、よく遊びに行っていたと思う。

でも、今日とは違った。

中学の時、物好きなクラスメイトの女子が自宅に招待してくれた事もあった。嫌々ながらも強引に連れて行かれて夕食をいただいたのだが、その時は瞬も刹那もいなくて、俺ひとりだった。そのせいか、よく覚えている。

やはり、今日とは違った。

何より、俺が最も知る『もの』と余りにも一致しない。

違和感は拭えない。

俺は立ち止まる。そして、振り返る。

海老原さんの家からは数十メートルしか歩いていない。彼女の家はまだすぐそこに見える。

海老原さんの家。

新聞配達の見上げた部屋はやはり海老原さんの部屋だった。今も明かりが漏れている。

俺がぶっ飛んでいた時に海老原さんがいたポーチライトの明かり。

リビングの明かり。

……おかしい。はっきり言って普通じゃない。俺にはそう思えて仕方がない。

断言なんか出来ない。俺のマイナス思考が導く馬鹿げた妄想にも思える。むしろそうあってほしいとさえ思う。しかし、俺の思考は嫌な方向にばかり進み、俺の信念が巨大化してゆく。

この時、俺の頭の中には、刹那も、遙も、いなかった。

その理由も、この時の俺には知る由も無かった。

二学期、終業式。

多目的ホールで行われる終業式。俺たち生徒会執行部は、先生たちや一部の委員会と一緒に終業式の裏方を担当していた。

俺の担当は進行係。とは言うが、司会進行を勤めるのは瞬で、俺はそのアシスタントだ。その為、舞台袖付近に立つ瞬の後ろ、暗幕裏の音響施設付近が俺の持ち場だった。

『以上で二学期の終業式を閉会いたします。三年生最後列、一年生最前列から退場して下さい』

まあ、司会の瞬の今の言葉通り、その終業式も終わっちゃったんだけどね。

「よし、これで俺たちの仕事は後片付けだけだな」

マイクから離れた瞬が俺に振り向きながら言う。

「お疲れ様、瞬。片付けといっても機材のスイッチをオフにして配線をまとめるだけだからね。ほとんど終わっちゃったよ」

今回はわりとまとまな仕事を任された俺だが、別に大した事ではない。進行に合わせてホールにある三つのマイクの管理をするだけだった。実際に進行係として喋っていたのは瞬だけだし、メインの音響はルナちゃん達の管轄だし、刹那のように会長の挨拶がある訳

でもない。

「はは……十八もかなり執行部が板に付いてきたんじゃないか？」

大した事はなくても嬉しそうに感心してくれる。というか、瞬は本当に嬉しいんだろう。

「まだまだだよ。俺が出来るようになってきたのは、雑用と力仕事だけだよ」

「そう謙遜するなよ。俺やみんなに言わせれば、それらの仕事をあつという間に覚えちゃまったのが驚きなんだがな。現に俺の出番がどんどん減ってきてるじゃないか」

やはり嬉しそうに言う瞬。実は俺には瞬の嬉しい理由がわかっていた。俺に過保護なのも理由の一つだとは思うが、それだけではない。

「そんな事はない、俺は普通だ。お前がフェミニストすぎるからそう感じるだけだろ」

今の俺がやった仕事にしても、多少なりの力仕事がある。俺が入部する前の執行部は女の子ばかりだったから、ほとんど瞬がやっていたのでと思う。

「くははっ、お前にだけは言われたくないな、それ」

瞬はそんな役割を俺が率先してやっているのが嬉しい。つまり、そういう事をやらなくていいのが嬉しいのではなく、俺とそれを共有できるのが嬉しいのだろう。瞬はそういうヤツである。

もちろん、嬉しいのは俺だって同じだ。

後片付けの影響でクラスメイト達より少し遅れた俺と瞬が教室に戻ると、すでにHRが始まっていた。

「じゃあ、佐山。こんなもんでいいか？」

「いいと思いますよ。二年生の冬季講習は自由参加だし、補習も涉以外のみんなは無事に終わってますからね」

そのHRを終えて何故か瞬に確認を取った担任についてはともかくとして、瞬の答えたように涉以外のクラスメイトは冬休みを満喫するだけだった。

「よし、じゃあ山崎以外は解散。進学希望のヤツは大変だろうけど、頑張ってくれー。よいお年をー」

かなり適当にまとめた担任に俺を含めたクラスメイト達は苦笑混じりの呆れた挨拶を揃える。それで二学期最後となる二年F組のHRが終了した。

「じゃあ、俺らは時計棟に行くか」

「あ、ああ……」

名前が出ていながら完全スルーしてはいるが、俺の目の前の席にはどんよりとした雰囲気を出す渉が突っ伏している。

「十八も律義なヤツだなあ、自業自得なんだからほっとけばいいのに……」

「それはあんまりだよ、瞬」

「ははは、ちょっとかわいそうだけど、仕方ないよねえ。山崎君は期末で赤点取って、補習でも赤点取っちゃったからねえ。寮生だから逃げられないだろうしねえ」

どうしようもないよ、渉。

「あたしもあぶなかったんだあ。今日までの補習でどうにか巻き返したけどねえ」

阿部さんも、その頑張りをテスト本番で発揮しようよ。

「ま、まあ……渉？ 俺たちは行くけどさ、補習、頑張ってるね？」

不憫すぎるので、一声掛けておく。

「……シオ」

突っ伏したまま、幽鬼のような声を発する渉。

「……なに？」

「……補習が終わったらさ……一緒に遊んでくれる？」

らしくないローテンションの渉はかわいい事を言いやがる。ぶっちゃけ小動物のような状態の渉は連れて帰りたい位に俺のハートをくすぐった。

「あ……当たり前だろ！俺が渉の頼みを断れる訳ないだろ！離れていても俺たちはいつでも一緒さ！渉さえ良ければ俺はいつでも大歓迎さ！」

俺は考えるよりも早く捲し立てる。ていうか、嬉しかったのは確かだけど、考えて答えたら多分こんなクサイ言い方しない。

「シ……シオツ！」

「渉っ！」

元気に顔を上げた渉と俺はがっちり抱擁しあう。

むう、ちょっと待てよ。俺って、どうしてこんな事してるんだっけ？

「お、おい、十八！俺と毎日遊ぶんじゃないのかよ！」

瞬？ そんなのいつ決まったっけ？ ていうか、なんで悔しそうにプルプルしてるの？

「……いや、違うよ瞬、ちょっと遊んでただけだよ」

冷静になった俺は、そう言いながら渉と瞬から距離を取る。なん

となくだが、嫌な予感がしたからである。

「ひどいよっ！ 俺とは遊びだったのかよっ！」

おゝい、渉君やゝい。本気っぽく言わんでおくれよ。

「当たり前だ！ 俺と十八の絆は神話の時代から決まっているんだ
！」

しゅーん！ 中二っぽいこと言っでないで帰って来ーい！

一触即発状態の二人におろおろしていると、ひそひそとざわめきが聞こえたきた。見てみると俺たちの周りにはクラス的女子たちのギャラリーが溢れている。いや、よく見ると教室の入り口の廊下にも、他クラスだと思われる大勢の女子ギャラリーが群がっていた。

ひそひそ

「修羅場よ、ついに修羅場がやって来たわ」

ひそひそ

「塩田君を巡って……むしろ二人にサンドされて……は、鼻血出て
まうやないかっ！」

ひそひそ

「やっぱりこうなったよね……。どう考えても佐山×塩田か山崎×
塩田よね。佐山×山崎は無いよね……」

ひそひそ

「違うでしょ！ 絶対に塩田×佐山でしょ！ もしくは塩田×佐山
+山崎でしょ！ ハアハア……」

いや、順番とか関係あんのかな？ なんて言うか、女の子たち怖いよ？

「塩田君たち三人のカップリングって、実は学校内で一番人気なんだあ〜」

阿部さんがニコニコと恐ろしい解説をしてくれた。

更に続いた解説だと、文芸部からは俺たちをモデルにしたアブない小説まで出ているという。秋の文化祭では漫研と合同で同人即売会が行われたほどに大好評連載中なベストセラーとの事だ。

めっさ勘弁してほしい。

生徒会長室。

「……ていう事があったんだよね」

早速、ついさっき教室で起こったBL騒動が話題になった。

会長室には徳川先生を含めた執行部のみんなが集合している。し

かし、瞬だけはいない。いつまで経っても渉との悶着を止めないので、教室に放置してきてやった。

「いいんじゃないの？ 両手に花だわ」

「……その小説……持つてるの……」

「せんぱいモテモテです。すごいです」

「なんだ？ 意味わかんねーぞ？ 先輩たちって男同士だろ？」

「実に下らん、だが興味深い」

「あらあら、とつても仲良しそうで羨ましいですね」

みんながそれぞれ回答をくれるけど、どれも疲れてしまいそうなものだった。どれが誰の回答であるかは想像にお任せする。

こんなしょうもない会話をしているが、今日は二学期最後の生徒会活動日である。なんだけど、二学期のまとめの作業は終わってるし、三学期の準備もほとんど必要ないらしい。その為、今日の俺たちに仕事の必要はなく、みんなでお茶会しながら雑談しているのだった。

「噂自体は下らないけど、少し意外ね。瞬は当然として、あの剣道部の変なヤツも有名なのはわかるわ。でも、十八が校内でそこまで話題になっているとは思わなかったわ」

俺の話に適当に相槌を打つただけだった刹那はそこだけが意外だったらしい。

「確かに先輩ってあんまりパツとしねえよなあ。ぶっちゃけいろんな所が地味で困るくらいだ」

刹那の疑問に激しく同意する橋はあんまりな事を真顔で言いやがった。

カッチーン

「いやははっ、何をおっしゃいますやら橋はん。そついう橋はんの活躍っぷりの程はなんとも……説明会やホールを使う行事の度に見学していたとは、いや、驚きですわい」

今日だって橋はおママでも俺には仕事があつたもんね。雑用にも程がある仕事だったけどあつたもんね。

「そりゃあ、あたしなんかが出しゃばつたら、みんなの足引っ張るのが目に見えて……おい、今のつてあたしの事バカにしてねえか？」

コイツおもしろいわあ。

「何言つてんだよ。お前が説明会以外の所で活躍してるって事を強調したかっただけに決まってるだろ？俺は日頃から橋の凄さには感心してるんだ」

「えっ？ ああ……なんだよ先輩……へへっ」

すんなり俺の言葉を受け入れる橋が不憫で仕方ない。ううむ、俺ってこんなに嫌なヤツだったかな……でも、コイツ相手だとやたらと口が回るし、なんか対向しちゃうんだよなあ。

「まあ、話を戻そう。つまり、塩田先輩はこれ以上ない程にパツとしない、しかし、そんな塩田先輩が校内でも有名人に該当する副会長、そして、剣道部の愚物と仲良くしている。そのギャップが一部の生徒たちの話題をさらうのではないだろうか？」

はい、俺には全く勝ち目の無い饒舌な台詞はもちろん進藤さんです。すね。

「そうね、周りの生徒たちからすれば、『どうしてあんなヘタレがあの人と一緒にいるの？』ってなるでしょうね。必然的に関係を疑ってしまうのも無理ないわ」

せ、せつちゃん？ 真顔すぎだよ？

「加えて塩田先輩のヘタレ属性、それが副会長のドライな雰囲気、攻め立てられる。中学生のような愚物の甘えに攻め立てられる。必死にツッコミを入れる塩田先輩、『ちよつと瞬……顔が本気だよ？ 冗談だよ？ ……しゅ、しゅーんっ！』そのくせ、ちゃっかり体は反応している……ふむ、無理もない」

進藤さん？

「十八……ちよつと幻滅したわ……」

「ちよちよちよ！ 刹那！？」

会長机に座る刹那、傍らに立つ俺からわざわざ席を立ってまで離れてく。頼むから本気で嫌そうな顔しないでくれ。

「あの愚物はこうだ。『シオってさっ、けっこう筋肉あるよねっ？ちよつと触っていいかなっ？……わぁ、すごいなあっ』という愚物のナチュラルな甘えに塩田先輩は、俺ってヤツは俺ってヤツは状態で反応し、なんだかんだ受け入れる」

「いやいやいや！ 進藤さん、いい加減にしてよー！」

「最低……」

「……真性……？」

「刹那？ 海老原さんまで……」

完全に俺から離れてしまった刹那と海老原さん。ていうか、みんなが俺から絶妙な距離を取っている。

「皆さん、人を愛するという行為に形はありませんよ。たとえ難しいものであったとしても私は応援します。塩田君頑張ってくださいっ！」

いや、先生、普通に頑張りません。

「おい！ よく考えてみたら、やっぱりあたしの事バカにしてたじやねーか！」

「ああつ！ お前は反応遅いっ！」

橘だけは未だに意味がわかんないらしいけど、なんだか俺まで意味わかんなくなってきたよ！

「十八！ 遅くなっちゃった！ 涉と話は付けてきた！ 今日は泊まりに行くから、朝まで俺と友情を確かめよう！」

「瞬！ お前も最悪のタイミングで帰ってくんじゃねえ！」

「せんぱい、どんまいです〜」

「だあああつ！ なんなんだこの流れはあ！ 俺はノーマルだああつ！」

「冗談抜きで本気にしてる人ばっかだから、俺はもう必死だった。」

一通り俺の話題が尽きると、生徒会活動とは名ばかりのお茶会は御開きとなった。同時に事実上、二学期の生徒会活動が終了となった。

「えー……コホン。取りあえず執行部内における二学期の活動は今日で終わりです。でも、冬休みの間にも時計棟を使いたいなら来て構わないわ。私も暇を見て来るようにするし、みんななら鍵を貸し出してくれる筈よ」

俺のせいでぐだぐだになってしまった空気を引きずったまま、刹那が締め挨拶をする。

場所は時計棟の昇降口。二学期最後という事で、みんなで鍵を閉めて解散する事になった。

「じゃあ、二学期の始業式の1月7日、それまでひとまず解散だな、みんなお疲れ様」

続く瞬の言葉にみんなも同じ言葉を返す。これで生徒会執行部の方も二学期最後の活動を終えた。

「塩田君」

同時に声を掛けられる。徳川先生だ。

「お疲れ様です、塩田君。中途加入にも拘らず、素晴らしい働きをして頂いたと思います。ありがとうございます」

「どわったたつ、こちらこそです！なんか足引つ張ってるか、お茶淹れてるか、どっちかだった気がするんで恐縮っす」

深々と頭を下げてくれた先生に焦った俺は、そう言いながら大慌てで先生に倅う。

「ふふ、そんなに謙遜しないで下さい。私は本当に塩田君を感心しているのですよ？だから目安箱のお仕事もお任せしようと思いましたが」

俺の様子を見た先生はほわりと微笑んでくれた。同時に本題に入ったようだ。

「結局、三学期から動く事になってしまいました。すいません……」

俺に任せてもらった生徒会窓口の仕事。テストのごたごたや俺の醜態のお陰で本格的な始動は三学期になってしまっていた。

「謝る必要なんてありません。私が無理を言ってしまったのがいけないんです」

「いや……ははっ。まあ、三学期から頑張りますよ」

この人はよつぽど俺を悪者にしたくないらしい……俺はそれを感じ取り、おちゃらけて話をまとめてしまう事にした。

「……はい、私も出来る限りの協力は惜しみません。……それで、これを……」

「……?」

先生から何か紙切れっぽい物を手渡された。俺の手を握り込むようにして渡されたのでドキッとしてしまった。

「何かあれば連絡を下さい。自宅も駅前寮なので、宜しければいつでも訪ねて下さい……では、失礼します……」

みんなに会釈しながらタタタツと行ってしまった先生を見送ると、先生から渡された紙切れを見してみる。

先生の自宅の電話番号と住所が書かれていた。

「うわっ、まさか先生の連絡先か?」

それを覗き込んだ瞬間が驚きの声を上げた。俺は事態を飲み込む事が出来ず、呆然と直立不動中。

「お前、それってめちゃうちゃレアだぞ？ 先生って未だに携帯持ってないらしくてさ、先生の連絡先ってある意味聞き出す事が困難なんだよ。しかも、自宅の住所付きなんてお前、遊びに来てくれって言われたようなもんだぞ？」

瞬はひとりで盛り上がっているが、俺の思考はついて行けない。未だ頭の中は状況整理に大忙しだ。

ちなみに駅前寮とは、この学校に三つある学生寮の一つである。渉の住む坂下寮が普通の寮とするなら、駅前寮はセレブ寮といった所だろうか。

「おい。鼻の下が伸び切ってるトコ悪いけど、あたし達はもう行くからよ」

橘の呆れたような声にハツとした。

「もう坂の下に迎えの車が来てるんだ、行かねえとマズいからよ、行っていいか？」

そう言って俺を訝かしむ橘の脇には、橘と同じような表情の進藤さんと苦笑して俺を見つめるルナちゃんがいた。

「見境なしでご苦労だ、先輩。ともかく、世話になった」

「うん……こちらこそ……」

「……………」

相変わらずの毒舌の進藤さんはいいとして、何やらルナちゃんの様子がおかしい。俯いていて何も喋ろうとしない。ついさっきまで

は楽しそうに笑っていたと思う。

「ルナちゃん？ どうしたの？」

たぶん身に覚えは無いと思うが、余りに俺のせいな気がしてならない俺は恐る恐るだが尋ねてみる。

「えー！」

ルナちゃんに抱き付かれた。無言のままのルナちゃんは俯いた顔を隠すように俺の制服に顔を埋めてしまった。

「ちよちよちようい！！ どうしたのい！？」

「……………」

テンパリまくってもルナちゃんは何も言ってくれないっ！ 何故か橋と進藤さんも見守ってるだけだしっ！

「…………二週間、バイバイです……………」

ぼそりと呟いたルナちゃんは俺を抱き締める力を強めた。

「う、うん……………」

俺はルナちゃんの寂しそうな言葉にどうにか相槌を打つだけで一杯だった。

「…………じゃあ、お疲れ様でしたですーっ！！！」

ゆつくり俺から離れたルナちゃんは一転して元気な声を響かせながら校門に駆けて行った。呆気に取られた俺は彼女の表情を窺い知る事が出来なかった。

「そんな顔すんなよ……じゃあな、先輩。会長たちも」

「ルナの事は余り深く考えないで下さい……では、失礼します」

橘と進藤さんもルナちゃんを追い掛けるように駆けて行った。

俺は三人の残した余韻に感じた哀愁からか、追い掛けたくなる衝動に駆られた。しかし同じ理由からなのか、自分自身がそれを否定した。決して追い掛けてはいけないと思った。

「フラグが立ちまくりだな、十八」

「茶化すなよ、瞬」

「ああ、わざとだ、すまん」

毬谷家、全てがそれに起因する。

俺はこの時、彼女たちの事を何も知らないのだと思い知った。何も知らないのに胸糞悪くなった。俺だけではない。瞬も、刹那も、海老原さんも、同じ気持ちだったのかもしれない。

彼女たちを見送る俺たちは、彼女たちが見えなくなるまで目を離す事も、声を掛けることも出来なかったのだから。

バイトを終えた俺が自宅に戻ると、本当に瞬が泊まりに来た。

流石に朝まで友情を確かめるといのは冗談だったらしい。理由はそれではなく、目前に迫った俺と海老原さんのデートの事、つまり、イヴの日の作戦会議をしようと思ったかららしい。

「海老ちゃんの方は刹那に任せてある。お互い疎いだろうから、俺たち姉弟がバックアップに入ったという訳だ」

居間のコタツで緑茶を啜る瞬は至って真面目にそんな事を言った。

「いや、でもさ、バックアップしても何をやるんだよ？」

まさか当日について来るとか言い出さないだろうな？

「心配しなくても、ついて行こうだなんて思ってない。だが、十八、お前は何処に行こうとかは決めてるのか？」

「あ……」

そういえば全く決めてない。

「そうだろうと思ったから、俺と刹那でデートコースをまとめておいた。店の予約なんかも押さえてある」

そう言ってコタツの上にデートコースとプランの書かれた紙を広げる瞬。

「……………」

当然、俺は何も言えません。コイツはお節介ちゅうか、やっぱり過保護だな、うん。本当にありがとうございます。

「ぶつちやけちまうとな、俺は未だに十八は刹那と付き合った方がいいと思ってる」

「ああ…………えっ！」

デートコースの書かれた紙を斜め読みしていると、瞬は囁くように言った。

「…………冗談だ、すまない」

ははつと軽い感じで微笑む瞬はまた緑茶を啜った。すっかり温くなってしまったお茶を大事そうに飲んでいる。

「瞬……………」

俺には言葉よりも瞬のわざとらしい仕草にとても申し訳ない気持ちになった。

「はは…………悪い悪い、とにかく決行は明々後日だ。よく読んで、お前なりに実行しようが無視しようが構わない。でも、楽しい思い出をたくさん作るんだ。別に失敗してもいいから、海老ちゃんなら、きつとそんなの気にしないから、な？ いいな？」

そう言って微笑む瞬は再び温いお茶を口に含む。俺は釣られて軽いへつら笑いを返していた。

年季の入ったストーブとコタツの暖かさ、瞬のわざとらしい仕草は俺の心を暖めてくれていた。

この家も瞬がいるだけでこんなにも居心地のいい場所なのかと心の中で苦笑した。

そして、瞬の言葉の中にあつた思い出。その言葉ばかりが頭の中で繰り返されていた。

クリスマス。聖なる日。

大切な人と過ごす日。

それは世界中の人たちが身近な人と時間を共有する日。もちろん違う国もあるが、そういつた定義が確かに存在する日。

俺はその日がそんな日だと思っている。

そのクリスマス、イベント好きの日本人なら誰でも知っているだろう。特にイヴは恋人と過ごす日としての意味合いが強い傾向があるらしい。

そんな日本人なら、どんな人にも何かしらの楽しい思い出があるのではないだろうか？

去年でも、ずっと前でも、ずっと小さな時でもいい、あいつにも彼にも、彼女にも、あの人にも、名前も知らないあの人にも、きつと何か楽しかった思い出があるんじゃないだろうか？

……俺は、どうだっただろうか？

去年、高校一年の時は瞬と渉と三人で集まってバカをやった。わざわざ街に繰り出して、男三人のクリスマスを思いつ切り楽しんだ。

一昨年、中学三年の時はじいちゃんと二人で普通にメシ食ってた。その後は適当に受験勉強して、普通に寝たと思う。

その前、中学二年の時もじいちゃんと一緒にだった。寒稽古なんてのをやっていたっけ。この頃は夢中になって道場に入り浸っていたんだ。

更に前、中学一年の時も家に居たと思う。瞬が来てくれて、じいちゃんと三人でクリスマス特番を眺めていた。この頃の瞬は自宅よりも俺ん家に居る方が多かったんじゃないだろうか。

あの年、小学校六年の時はわからない。場所は病院。俺は意識不明の重体。当然、覚えている筈がない。

そして、小学校五年生……その時は……。

六年前、12月24日。快晴。

僕はまどろみの中にいた。時刻はまだ早く、午前中の早い時間。学校は既に終業式を終え、冬休み真っ直中だ。

普段の僕なら目を覚ましている時間だったけど、今は折角の冬休み、普段は出来ない朝寝坊が心地よかった。

「ねえねえ」

その僕に声が届く。まどろむ僕の頭に甘えるよつなふにやふにや声が届く。

「朝だよ〜？ 起きないの〜？ いい天気だよ〜？」

声は続く。同時に僕の体が揺すられる。けっこ遠慮がない感じでユツサユツサされる。

「もぉ〜ねえってばっ」

実は最初の声の時点で起きていた僕だけど、敢えて寝たふりを続けてみる。このままいくとどうなるか興味が湧いたからだ。ちなみに声のふにゃふにゃ感はパワーアップしてたりする。

「うう、時間がもつたいないから、しょうがない……しょうがないんだよ……？ 本当に世話が焼けるよ〜」

うん？ ユツサユツサは治まったけど、今度は布団を剥されたみたいだ。寒いのはしょうがないとして、どういう意味だろう？ それにいつも世話を焼いているのは僕のような……。

「まずはズボンから」

「うわあっ！ 待ってよ遙！」

そこで僕は制止する声を張り上げながら目を開く。

「うわあっ？ びっくりしたよ!？」

僕と同じ声を上げた遙は僕のパジャマのズボンに手を掛けたところだった。あぶなかった。

「びつくりしたのは僕だよ！ 朝からなんて事をしようとしてるんだ遙は！」

「だって、お兄ちゃん起きないんだもん。それに目が覚めた時に着替えが済んでたりしたらお得かかって思うよ？」

そんなん普通に怖いわ。

狼狽える僕に対して無邪気な笑顔を振り撒く女の子は遙、僕の双子の妹だ。

「いや、もう、なんでもいいよ……起きなかつた僕も悪いんだし……。おはよう、遙」

朝からツッコむ気力も無いので、仕切り直してしまおう。

「うん、スルーだね。おはよう、お兄ちゃん」

楽しそうな笑顔を更に綻ばせて応えてくれる遙。毎日の事なのに僕はついつい嬉しくなってしまった。

遙と二人、階下のリビングに下りると、朝食のいい匂いが僕たちを迎えてくれた。

「おはよう十八、遙」

「おはよ〜お母さん」

「おはよう……母さん、起きてても大丈夫なの？」

遙は嬉しそうに挨拶を返したただけだったけど、僕はそう付け加えた。

「昨日だって具合が悪いつて早く休んだばかりじゃないか」

「お母さん……大丈夫……？」

僕の付け加えた言葉を聞いた遙は不安そうな表情で母さんに駆け寄る。早くに寝てしまった遙は昨日の事を知らなかったから、軽く驚いたんだろう。

そう、僕たちの母さんは病弱で体が弱かった。僕たち兄妹がまだ小さい時から入退院を繰り返してばかりで、よく貧血で倒れたりしていた。

「ごめんね十八……母さんすっかりしちゃったから……」

僕の指摘に母さんはばつが悪そうに苦笑してしまっていた。

僕だって責めるつもりで言った訳じゃないし、言いたかった訳でもない。でも、言わないと母さんは僕たちの為に無理をしてしまうのは明らかだからだ。

「仕方ないんだよ、十八。後でお前たちにも言うつもりだったが、今日は母さんを病院に連れて行くんだ。そうなれば恐らく母さんは再入院する事になるだろう。だから、母さんはお前たちの朝食をしばらく作れなくなるのが寂しかったんだろっ」

新聞を広げてコーヒを飲んでいた父さんが僕を窘めるように言う。

「お前たちは冬休みだし、父さんも今日は会社を休んだんだぞ？
今回も長い入院じゃないと思うが、少しでも母さんと一緒に居ようじゃないか」

続く父さんの言葉を聞いて僕はすぐに我に返る。もともと怒っていた訳じゃないけど、自分で言った事に激しく後悔した。

「ごめん……母さん」

「ごめんなさい……お母さん」

何故か一緒に謝ってくれる遙。

「……ふふ、謝るのは私なのに……ありがとう二人とも」

申し訳なさそうな表情は拭えないけど、母さんは嬉しそうに僕たちの頭を撫でてくれた。正直こそばゆいけど、心から安心してしまふ。

「でも、残念だなあ……明日はせつかくのクリスマスなのに、お母さんは病院に行っちゃうんだよね……？」

なっ！ ちょっとは空気を読んでくれ妹よ！

「遙……」

案の定、母さんは申し訳なさそうな表情をひときわ濃くしてしま

っていた。

「ごめんね……病院に行く前にケーキは作って行くから……」

母さんはそう言いながら遙を抱き締めた。

……息子の僕が言うのも何だけど、母さんは父さんが嫉妬するほどに僕たちを溺愛してくれている。だから、こんな事も恥ずかしげも無くやってのけるんだ。

遙も悪気があって言った訳じゃなかったと思うけど、真っ直ぐな母さんの優しさに包まれておとなしくなっている。当然だ、遙は母さんが大好きなんだから……。

「十八、羨ましいのか？」

僕の様子を見ていた父さんの言葉にドキツとしてしまう僕。

「な、なんの事？」

凶星じゃないぞ……たぶん。

「母さん、十八もやってほしいみたいだぞ？」

「父さん！」

「ニクニクと嬉しそうな父さんにあっさり暴露されてしまった。

「あらあら……十八、いらっしやい？」

遙の背中に右手を残したまま、左手を広げて僕を呼んでくれた。申し訳なさそうな表情の余韻はもう無い、とても嬉しそうな笑顔だ。遙も母さんに寄り添いながら嬉しそうに僕を待っていてくれる。

「……………」

僕は父さんの表情を見ないようにして母さんの傍に行く。もう衝動的だとはつきり言っておく。

だって凶星だったから、恥ずかしいけど、羨ましかったから。

母さんの傍らに立つと、母さんは遙と一緒に僕を抱き締めてくれた。

同時に僕の恥ずかしさなんてすぐに何処かに行ってしまう。朝一から何をやっているんだとか、小五にもなって何をやっているんだとかは思わない。

だって、これは僕たち家族の普通だから。

病弱だけど、僕たちを心から愛してくれる母さんも。

お節介だけど、僕たちの望むものをわかってくれる父さんも。

甘えん坊だけど、その人にとっての一番を知っている遙も。

理屈っぽいけど、その全てが大好きな僕自身も。

僕たち家族の日常はこれが当たり前なんだから……………。

……

……

ムムムムム

「……………」

……………朝が来てしまったらしい……。

久し振りに瞬のいない時に悪夢を見なかった。しかし、内容に余りにも残酷だった……。余りにリアルすぎた……。

今日は12月24日。クリスマスイヴ。海老原さんとデートなんだ。

気だるい自分の頭を覚醒させようと心の中で今日の予定を反芻する。

しかし、俺の思考は六年前の妄想に埋もれたまま、むしろ妄想は加速する。

今日という日に限って俺はこんな夢を見てしまうのか……。

自分に嫌になりながらも、俺はバイトに向かう為に布団から這い出していた。

寒い。

配達で駆け回る町は冷えきっていた。

昨日まで少しだけ昂揚していた自分の心も冷えきっていた。

真冬の空気が拍車を掛けるように俺の心を凍て付かせていた。

見上げれば黒。

夜明け前の夜空は俺を嘲笑うように黒い雲に覆われていた。

現実の空は俺の心を閉塞へと誘い込み、思い描くものを逆行に導いていた。

月も、星も、見えなかった……。

新聞配達の仕事を終えた俺は、日課の鍛練を済ませると屋敷内の清掃に勤しんでいた。

もちろん年末の大掃除は予定しているが、普段通りの掃除も怠る訳にはいかない。それに年内に離れや蔵の掃除をやるうとするなら、今から細かい所をやっておかないと年を越せなさそうだ。

塩田家の屋敷はとにかく広い。平屋建てではあるが、母屋と離れ

を合わせると部屋数は16部屋ある。更には道場と蔵が二つずつ。とてもじゃないが、ひとりではやるには無理があると思う。

げんなりしながらも時計を見ると十時すぎ、そろそろ出掛ける時間が迫っていた。

待ち合わせの時間は正午で、場所は御美ヶ浜駅前。

一時間もあれば着く場所なので、今から出れば十分すぎるほどに間に合うだろう。

瞬にもらったデートプランには、待ち合わせ時間からわざわざ選択方式で予定が立ててある。詳しくは見えていないが、いくら俺でも大丈夫そうだ。

親友に感謝しながら数少ないよそ行きの洋服に着替え、身だしなみを整える。

すると、そこで玄関のチャイムが鳴った。

「……？」

かなり不思議に思った。俺ん家を訪ねて来る人物は瞬、最近では海老原さん、まあ彼女は一緒に学校に行くようになってから、それも早朝に限る訳なんだけど……。

その二人が今日、それもこのタイミングで俺ん家を訪ねて来る筈はない。宅配便の業者さんがご近所と間違えているのかも、そんな楽観的な思考を働かせながら玄関に向かう。

「はい」

そう言いながら俺は玄関の引き戸を開ける。

そこには俺の後見人、今井さんの姿があった。

己の体裁を顧みるばかりに行き着いた末路なのか。
嫌な事を認めたのに目を逸らし続けた結果なのか。

どちらにしても、実に滑稽だろう。まだ幕も上がっていないのだから。

受け入れたくないものに直面し、迷う暇も無く甘受しただけだ。
明日が無いから、今が苦しいから、昨日が眩しいからと、その挙げ
句に巻き込んだのだ。

彼女を。

重苦しい空気が部屋を支配していた。

俺は居間のコタツより少し下がった位置で正座で座っている。場の
空気、目の前の人の存在、それらは俺の緊張を頂点まで追い詰め
ようとしていた。

「たいへん、結構な、事です。しかし、屋敷内の清掃も、宜しいで
すが、垣根の手入れが、少々、雑に、感じました」

居間の窓際には俺と同じく正座で座る和服姿の今井さん。俺に対して語り掛けているが、今井さんの視線は縁側を挟んだ外に向けられている。

その今井さんのお説教が始まってから、かれこれ小一時間は経っているだろう。

「申し訳ありません。屋敷内の方にはばかり気を取られていたと思います……」

へつらう事などしない、有りのままだけを伝える。余計な事を言ったとしても今井さんにはお見通しだろう。それにそんな暇は無い、とにかく時間が無い。

顔を上げる事は許されていないので時計を見れないが、時間がかかりマズい事になっている。

恐らく既に11時は過ぎている。海老原さんとの待ち合わせ時間には今すぐ出ても間に合うかどうかという位だろう。

今井さんの目的はいつもと同じ、屋敷の様子を見に来たという。幸か不幸か、たまたま掃除をしていたまではいい。しかし、それならばと屋敷内を事細かくチェックされた。別に手を抜いてやっていた訳じゃないので、いくらでもチェックしてくれて構わないが、余りにもタイミングが悪すぎる。

「あ、あの……」

考えていても仕方がないと意を決した俺は声を上げる。実際、俺はかなり焦っていた。

「…………はい」

「実は…………その、これから友達と会う予定があって…………ありました
…………できれば、その、またの機会に…………して頂けたらなと…………」

今井さんの抑揚のない相槌に対して俺は完全にテンパっていた。
要件だけを述べるつもりが、過剰にへりくだる始末、はっきりしない
自分に自分で苛ついた。

「…………人の話の、腰を折った、だけではなく、ずいぶんと、下らな
い要件、ですね」

少しだけ穏やかだった今井さんの口調がいつものように冷たくな
っていくのがわかる。苛立ったのは今井さんも同じようだった。

「通りで、掃除をする、格好には、見えないと、思いました。目を、
瞑ろうとも、思っていました…………が、少し、気分を害しました、十
八さん」

マズい、やはりお見通しだった。

「世間では、クリスマス、ですか…………？ あちらこちらで、騒がし
い、様子ですが、まさか、十八さんも…………同じ、ですか？」

俺の意見はただの切っ掛けにしかならず、漠然とした質問を投げ
掛けられる。実は今井さんのこのような問い掛けはよくある事だっ
た。

「……………」

俺は考える。この質問の答えによっては今井さんの機嫌を更に害してしまう事になるだろう。

クリスマス、同じ、そう言われて真っ先に思い浮かんだのは生徒会のみんなだった。そして、涉やクラスメイト達の顔も浮かぶ。

今井さんの感覚で言う世間と俺。かけ離れているなら、俺はどう答えなくてはならないのか？

『楽しいイベントなんだからウキウキしちゃうのはしょうがないよく、トモちゃ〜ん』

「ぶほっ！」

「……？ どうしました？」

「い、いえ……少しむせてしまって……」

思わず嘔出してしまった。顔を伏せていなかったら今井さんに失礼だった。

何故だか思い出してしまったルナちゃん言葉だったが、確かにその通りだ。

この数日間を思い出してみる。海老原さん、刹那、瞬、涉、ルナちゃん達、クラスメイト達……俺のように暗く考え込んでいるヤツなんかひとりもない。

そうだった、基準はそこじゃない。海老原さんの言い方を借りるなら、ときどきわくわくでいいんじゃないだろうか……。

「ありがとうルナちゃん。」

「答えは一つ。」

「俺も同じ、だと思います……」

今井さんの質問の意味、それが如何なるものであるかと、俺はこう答えなくてはならない。嘘なんか御免だ。

沈黙。

しばし、沈黙があった。

俺の返答に対して今井さんはなかなか口を開かない。しかし、部屋の中の空気が重くなって行くのを肌で感じ取る。

「だから、あなたは、何も、わかっていないと、言うのです。同じ筈が、あるなど、皆無に等しい、でしょう」

それは明らかかな嘲笑だった。

今井さんの表情を窺う事は出来ないが、声の感じも、肌を感じる雰囲気も、俺を嘲笑うものに他ならない。

「あなたが、いるだけで、毎日に、苦痛を、感じている、人がいる、ことを、お忘れですか？」

「……………」

ある程度は俺が予想していた通りの答えだったが、流石にキツい。正に今井さんの言う通りだからだ。

以前、今井さんが俺の後見人を引き受けてくれた時、今井さんは言った。

『迷惑だと、はつきり、言いましょう。やむを得ず、引き受けましたが、苦痛を、強要されたのと、同義です』

生前、じいちゃんも言っていたが、今井さんは人との交流を極端に嫌っていたらしい。じいちゃんの遺言のお陰で仕方なく引き受けてくれた俺の後見人、今井さんからすれば迷惑以外の何物でもなかったのだろう。

その証拠に今井さんは俺との同居はおろか俺との交流すら拒んだのだ。俺はそれを痛いほど理解している。

「……もちろん、忘れていた筈がありません。今の俺があるのは今井さんのお陰で、同時に迷惑を掛け続けているのも分かっています」

本当の事だ。理解しているからこそわかる。今井さんは俺の恩人であり、俺は今井さん足枷である、その事実は揺るがない。

「でも……今日だけは、お願いします。目を瞑って下さい」

俺はそう言うと同時に土下座に近いくらいに頭を下げる。外を向いている今井さんには伝わらないとしても、俺は自分なりの誠意を精一杯込める。

「……………」

俺の言葉になのか、それとも行動に対してなのか、今井さんの雰囲気は更に鋭くなった気がする。

そうだろう。俺も土下座なんか生まれて初めてやったが、やられた方からすれば堪ったもんじゃない。

自分でも実感する。俺はこの人の足枷なのだ……。その意味を考えると顔を上げる事なんて出来ない。申し訳ない気持ちで言葉を待つしか出来なかった。

「……その友達は、女性、なのでしょう、ね。まあ、当然、でしょうか……」

「……？」

「その人は、大切な人、ですか？」

僅かな間を置いてすぐにそう続ける今井さん。最初の方は彼女の独り言だったのかもしれない。

「……はい」

ほとんど即答だった。今井さんの問い掛けを理解したのと同様だったと思う。逡巡すらしなない自分に少し驚く。

「後悔……しますよ？」

ここで俺は反射的に顔を上げる。

後悔。

今井さんのその言葉に俺の意識は強く反応していた。無意識に上げる事が許されていない顔を上げていた。

「お行きなさい」

「……えっ？」

「私は、もう、帰ります。戸締まりと、火の元の、注意を、怠ることとは、許しません」

今井さんはそう言いながら立ち上がると振り返り、慌てて視線を落とした俺の前をすり抜けて行った。

意識だけで見送る俺は少し呆然としてしまった。

今井さんを見送った俺はすぐに海老原さんに連絡を取った。

時刻は12時少し前、海老原さんは既に御美ヶ浜で待っていてくれるとの事だった。

謝罪のオンパレードを繰り返した俺は今井さんの言いつけを守ると、大急ぎで家を飛び出した。自宅から駅までは走れば10分かからないで着く。俺は自分の限界のギリギリで走った。

今にも雨が降り出しそうな曇り空。今年で一番であろう冷えきった空気。それに呼応するように冷えきった自分の心。俺を取り巻く

人たち。俺はその全てを振り払うように必死で走っていた。

普段よりも多く見掛ける家族連れやカップルの人たちの脇を駆け抜けて行く。商店街の方から流れて来る陽気なクリスマス音楽すらかわすように駆け抜けて行く。

俺は縫うように駅の構内に飛び込んだ。

息も切れ切れ、すぐに次の電車の到着を告げる電光掲示板を睨む。電車を待っていた人たちの怪訝そうな視線も気にならなかった。

次の電車の到着まで5分。

この路線は田舎だけあって電車は30分に一本。時刻表を見ずに駅に駆け込んで、5分前なら御の字の筈だ。

しかし、俺にはとてつもなくもどかしく感じた。

先ほど、海老原さんに連絡した時、彼女は言った。

『……気に、しないで……？……待ってるの……楽しいの……十八……絶対、来るから……なの……』

弾んだ声だった。

自分の境遇も、今井さんも関係ない。俺はその時、俺を待っていてくれる人の存在の大きさを知った。

早く海老原さんに遭いたかった。

その強い衝動に駆られながらも思う。

俺は最低だ……。

自分を偽って、誰かに流されて、嫌なものからは逃げてばかりいる。そして、受け入れられないものに縊ろうとしている。

どう考えても最低じゃないか……。

ヒヤリとした物を感じた。

上気して熱を持った頬に感じる冷たい感触にハッとする。

雪。

驚いて見開いた俺の視界には真っ白な粉雪が揺らめいていた。火照った俺の体を撫でるような粉雪が舞い降りていた。

俺はそこでようやく自分の奇抜な状態に気付く。周りの人たちの視線を感じた俺は無意識に呼吸を整える作業を開始していた。

髪はぼさぼさ、冷えきった空気に弾む白い吐息、冷たい空気、遠くから聞こえる陽気なクリスマスソング。

それらに今さら気付く。

自分が相当参っていたのだと理解する。……少し笑えた。

顔を上げれば、正面には南口にあるクリスマスツリーが見える。いつの間にか設置されていた割りと大きなクリスマスツリー。

あの前で刹那が今日のデートの事を言い出した時は本当に驚いた。それに今日、俺がこんな心境にいるとは思ってもよらなかった。

ツリーの明滅は粉雪に合わせるように揺らめいている。

綺麗だな……と、見入りそうになった俺の視界は到着した電車に遮られた。

御美ヶ浜市、おつつくしがはまし通称”ゴミ浜”。俺たちの住む久住市よりも首都圏寄りに位置する街で、この近辺では一番大きな街である。

この前行った遊園地を始め、若者向けの店舗や施設も多く、久住市に住む中高生は遊びに来るとすれば御美ヶ浜に来るのが常識だったりする。

慣れない電車を降りた俺はその駅前広場へ続く階段を駆け上がる。

駅ビルの二階部分と繋がった少し高くなっている公共空間、御美ヶ浜で何処かに行くなら必ず中心となる場所で、今日の俺たちの待ち合わせ場所だった。

時刻は午後1時少し前、ちょうどお昼時だからなのか、それともクリスマスだからなのか、多くの人たちで溢れている。

優しく舞い降りる粉雪。気にならないのか傘を差さない人たち、煩わしそうに傘を構える人たち、楽しそうに一つの傘に身を寄せ合う人たち。

そのどれにも該当しない人を見つけた。

小走りで駆け寄る。既に俺は大きな安心感に包まれている。

「……お待たせ、海老原さん……」

白い吐息を弾ませながら彼女を呼んだ。

彼女は俺を見つめる。

俯いていた顔を上げた彼女は真っ直ぐな瞳で見つめてくれた。無表情、でも、その無表情には安堵してくれたような綻びが伺える。

「……………待つてない……………私も……………今、来たところ……………」

凄い嘘だよ……………海老原さん……………。

傘を差していない彼女には少し雪が積もってしまった。長く外気に晒されていた頬は紅く染まっている。

俺の中の申し訳ない気持ちが強くなる。同時に冷えきっていた筈の心が溶けて行く。不思議な感覚だった。

「ごめんね……………？」

俺は謝りながら彼女に積もった雪を払ってあげた。そうしながら彼女を見つめる俺の視線には罪悪感が籠る。でも、俺はそれを隠さなかった。

その俺の視線を受けた彼女の視線が安堵を感じさせるものから俺を気遣うものに変わる。俺を心配してくれている。俺を見つめてくれている。

俺の望んだ通りの事をしてくれている。

何故だろう。自分が嫌にならない。待ち惚けを食らわせて、心配掛けて、不安にさせたのに……。彼女の視線を受けていると自分が散々悩んでいた事がちっぽけに思えてしまう。何より心から安心してしまう。

「…………十八…………？」

今日の海老原さん。とても大人びた服装をしている。遊園地の時は何処か幼い印象だったが、今日は少し違う。コートもセーターもスカートも、マフラーもカバンも、全てダーク系の中間色で統一されている。長い前髪だけがいつも通りで、それが不思議な魅力を出していた。

「…………似合わない…………？」

俺の視線に気付いた彼女は少し不安そうに呟く。俺に注がれている視線は外れない。不思議と俺の罪悪感が薄れて行く。

「いや、そんな事ないよ。とても良く似合ってる」

というかめちやくちや綺麗だ。元々かわいいとは思っていたが、今日の海老原さんはいつにも増してスーパー美少女だ。

「…………うん…………良かった…………」

紅い顔を更に真っ赤にして微笑む海老原さん。やはり視線は外れない。

「……行こっか？」

「……うん……」

いつまでも雪の中でお見合いしてる場合じゃない。二人して顔真っ赤だし、傘も無い。何より早く海老原さんを暖かい所に連れて行きたかった。

予定が大幅に遅れてしまったが、取りあえず昼食を摂る事になった。

瞬からもらったデートプランにはオシャレなカフェやらレストランやらが書かれている。しかし、俺の土地鑑が無さすぎたので、駅前のファーストフード店になってしまった。

「シャセーツ！ テンナーデオメシャーリツスカーツ！」

いや、ちょっと待て。

「ゴチユーモードゾーツ！」

「な、何やってんですか？ 永島さん」

「ああ〜？」

やたらとガラの悪い店員はどっからどう見ても永島さんだった。

「あんだよ、塩田じゃねーか」

「見ればわかりますけど、もしかしてバイトですか？」

どう鼻^{はな}真^ま目^めに見ても似合っていないカジユアルな制服を身に着けている永島さん。いかつい顔だけがハメコミ合成のように浮きまくってるぞ。

「おお、いやよお、俺も大学が休みに入ったからよお、その間だけここでもバイトしてんだわあ。ヒヤハハ！」

あまり人のこと言えないが、バイトしすぎだよ。あと、なんで笑ったのか分かんないよ。

「っーかテメエ、まあた女連れ……あつ！ しかも刹那ちゃんじゃねえじゃねーか！」

「……っ!?!」

くわつとした永島さんに驚いた海老原さんはビクツとしながら俺の後ろに隠れてしまった。ついでに俺たちの後ろに並んでた人たちも逃げに行った。

「しかも、やっぱりかわいい……って、あれ？」

「「……………」」

更には永島さん以外の店員さんも逃げて行った。

「……………テメエ」

「いやいや、たぶん俺のせいじゃないですよ？」

その後、どうにか永島さんをなだめると、軽い昼食となった。なんと意外的な展開のお陰で暗いテンションから一気に復活する事が出来た気がする。

しかし、

「……………」

「……………」

会話が無い。テンションが明るくなった分、会話の無い空間をはつきりと意識してしまう。それによく考えてみたら、女の子とご飯食べるのにこんなジャンクなトコ入ってどうすんだよとか思った。

じい〜

海老原さんガン見だよ。食べるのそっちのけでガン見だよ。プレッシャーが凄いよ。それにかわいいよ。

「え、海老原さんはさ、何処か行きたい所とかある？」

「どういつのを訊くのはいいかもしれないが、明らかに甲斐性が無さすぎるタイミングだよ。」

「……十八と……一緒なら……何処でも、いい……」

「えっ!?!」

なんか凄まじいこと言わなかったか？

「……遊園地の時は、別だけど……御美ヶ浜……来るの、初めて……だから……」

「あ、そういう事が、それじゃわかんないよね……」

また早とちりしそうになった。俺ってけっこう自意識過剰だったのかもしれない。

それにしても、いつもの俺のテンションに戻る事は出来たが、状況が状況だけに緊張が凄い。何か行動しなくちゃと思えば思っほど頭の中が真っ白になる。

俺はササツとさり気ない動きでデートプランを確認する。もはやコレに頼る他に無い。

”瞬と刹那のデートのススメ(昼食後編)”

1・駅ビルのショッピングモールを巡る。

昼食時の会話や雰囲気にもよるが、一番無難だと思われる。買い物しながら、お互いの趣味や趣向の会話に持って行けるぞ。ちなみに買い物はウィンドウショッピングで充分だ。

十八じゃ間が持たないんじゃないかしら？

2・映画を観る。

コレも昼食時から如何にして持つて行くかによる。空いた時間を上手く消費出来るが、あまりおすすめしない。お互いに観たいものが上映していれば有りだが、そうでなければ前後の会話が終わるぞ。

十八が寝ちやいそうだわ。

3・ゲーセンとかカラオケ、及びそれ以外。

十八には無いわ。

すまんが俺も同意見だ。

「……………」

1しか無いよ……………瞬。刹那もいちいちツッコミを書かなくていいよ……………」

という訳で駅ビルにあるショッピングモールにやって来た。

流石はこの近辺で一番大きな駅の駅ビルだけあって凄い規模である。某有名ブランドショップの代理店からマニアックな専門店まで何でもありそうだ。行き交う人も多くて、俺たちと同世代の若者を中心にこれでもかって位の人が溢れている。クリスマスイヴというのも大きな要因の一つだろう。

「実は俺もあんまり来た事ないんだよねえ。洋服とかにこだわりがある訳じゃないし、ブランド物とかよくわかんないしさ」

何度か瞬と来たが、俺はオプシオン状態だった。だから、何処に何の店があるのかよくわからん。ボロが出るのは明らかなので正直に言ってしまった。

「……私も……人、多くて……怖いし……」

「あ、やっぱりそうだよな？ 嫌だったら、もっと静かな所に行く？」

自分で言っておいてなんだが、下心がありそうな言い方だ。

ふるふる

「……十八が、行きたいなら……」

「い、いや、俺は何処に行つていいかわかんないし……。でも、海老原さんが嫌なら俺も嫌だし、その……」

プランの2や3を実行するのも難しそうだしね。

「……十八と、一緒なら……嫌じゃないの……」

「あ……うん。俺も、かな……」

また勘違いしそうになりつつ、そう言うが、俺は色々と真っ直ぐすぎる海老原さんから視線を逸らしてしまう。

だって、さっきから海老原さんの凝視が止まないんだもん。たぶん待ち合わせ場所で見つめ始めてから一度も逸れていないぞ？

一緒に歩いている時も、ご飯の時向かい合って座ってる時もだ。それに今日の海老原さんはなんとなく凄い目力なんだよ。

じい〜

今日はこの擬音が常にあると思ってほしい。

ともかくとして、俺たちはショッピングモールを散策する事になった。

洋服、小物、アクセサリ、CDなど、目に付いたものなら何でも見て回った。瞬の作ってくれたデートプランの助けもあって、めばしいお店を選抜したコースでショッピングモールを回る事が出来たと思う。

瞬のアドバイス通り、特に買うでもなく見るだけだった。あれは海老原さんに似合いそうだとか、これって何だっけとか、話のタネになりそうな物ばかり探して見て回った。

俺の上着の袖を掴んでついて来てくれる海老原さん、俺への凝視はもちろん、テンションの上がってきた俺の話に熱心に聞いてくれていた。

退屈させてしまってるかと、不安だったが俺的にはかなり楽しかった。

海老原さんは楽しんでくれてるのだろうか？

そう思っているよ、

「ああー！　もしかして海老原さんじゃないですか！！」

　バカでかい声が上がった。

「海老原さんもお買い物ですか！？　外で会うなんて珍しいじゃないですか！？」

　軽く驚きながら反応すると、海老原さんに負けない位の美少女がいた。

「ちょっと海老原さん！？　どうしたんですか！？　ひよつとして間違ってます！？　……ちょっと邪魔なんでどいて下さい！」

　おい。

　今ので思い出したぞ。このでかい声と独特すぎるテンションは間違いなく図書委員の折原さんだ。メガネを掛けていないから分からなかったが、この独特すぎるマイペースは間違えようがない。

「……折原さん……こんにちは……」

　でかい声にびっくりしたらしい海老原さんは俺の後ろに隠れながら挨拶する。かなりおっかなびっくりしてる。

「はい！　こんにちは！　……って、ストーカー！　まだ海老原さんに付き纏っていたのですか！」

「反応遅いしこの状況見て」

「　海老原さん！　何かされませんでしたか！？　大丈夫ですか！？」

「ああっ！　せめて全部言わせてくれ！」

「折原、塩田君が困っている。いい加減静かにするんだ」

「??？」

「えらく冷静な介入があった。」

「……………」

その声に反応して一気に静かになった折原さんの隣には細身で真面目そうな男性がいた。どうやら折原さんのお連れさんのおようだった。

「どうもこんにちは、塩田君。まともに顔を合わせるのは初めてですわね？」

「えっ？　あ…………はい、こんにちは…………」

「どうやら俺の知り合いみたいだが、俺の知り合いで瞬以外にこんなにカッコいいヤツいたっけか？」

「ほら、折原も塩田君にちゃんと挨拶をするんだ」

「どうにも状況について行けないが、男性はかなりの常識人らしい。明らかに暴走気味だった折原さんも流石に…………、」

「嫌！」

おとなしくなってるじゃない！　なんかグサツてきたよ？　何故か、さつきより不機嫌っぽくなってる気がするよ？　ツーンってなってるよ？

「はあ……塩田君、申し訳ない。………栞、挨拶をするんだ」

「うん。塩田君、こんにちは！」

「えっ？　あ、はあ……こんにちは」

なんだそりゃ。

「そういえばちゃんとした自己紹介をした事ありませんでしたね。僕は本城司ほんじょうじ、生徒会図書委員の委員長をやらせてもらっています」

「あ、どどうもっ、会長補佐の塩田十八ですっ」

そうか、通りで見た事があると思っていたんだ。

「そんなにかしこまらなくても大丈夫ですよ。僕も栞も二年生なので同級生ですからね。一応知り合いみたいですが、紹介します。彼女は折原栞、僕と同じ図書委員で副委員長を勤めてもらっています」

爽やかな笑顔の本城君は傍らに立っている折原さんを丁寧に紹介してくれた。

「いい人だ……。凄いいい人だよ。折原さんも悪い人ではないと思うが、

「塩田君っ！　よろしくお願いしますね！」

ちょっとマイペースすぎて……あれえ？

「はは……気にしないで下さい……」

何故か疲れたような本城君。

「海老原さん海老原さん……私紹介されちゃった……彼女だって……？」

「僕はそんな意味の紹介をした覚えは無い。君は親同士が仲のいいだけの幼馴染みで、今日だって僕は君が弟にあげるクリスマスプレゼントを選ぶ手伝いをしているだけだ」

凄い説明口調だ！

「照れてるよ……司が照れてるよ海老原さん……？」

「く……っ！」

なんか大変そうだ！

「……ともかく、邪魔をしまして申し訳なかつたです。では、失礼しました」

「は、はあ……」

「じゃあ、海老原さん！ また学校でね！」

「……うん……」

何やらゲッソリしてしまった本城君と、やたらと嬉しそうな笑顔の折原さんを疑問符だらけで見送った。

「……………」

「……………」

なんだっ たんだ？

そして、

” 瞬と刹那のデートのススメ〈中級編〉 ”

1・海浜公園に行く。

御美ヶ浜の名物である海浜公園、クリスマスネオンで彩られている筈だから、行ってみるのもありかもしれん。しかし、久住ヶ丘の海浜公園と比べ物にならない位に広大だから、迷わないように気を付ける。

遭難しちゃわないかしら？

2・繁華街に繰り出す。

目的も無くうろつくのはどうかと思うが、クリスマス一色に活気

づいている筈だ。面白そうな所を探してみてもいいかもしれない。

十八が迷子になる気がするわ。

3・綺麗な夜景を見る。

海浜公園の展望台、タワーホテル、御美ヶ浜には夜景を眺める定番スポットが幾つか点在している。だが、クリスマスともなればそれらは凄い人で溢れ返っているだろう。そこで俺の見付けた隠れスポットを紹介しておく（下記地図参照）。行くかどうかは十八次第だ。

解説が長いわ。

3以外に選びようがないじゃん。三択だけど、ほぼ一択じゃん。それにせっちゃんのツッコミがちょっと面白いよ。

例の如く瞬頼みの俺は夜景を見に行く事にした。長居したつもりはなかったのだが、時間もちょうど良くなっていた。

瞬の薦めてくれた夜景スポットは意外にもショッピングモールのすぐ近くだった。そんなに駅の近くに穴場なんてあるのかな、などと不安に思いながら地図をなぞって行く。

海老原さんは相変わらず俺の上着の袖を掴んでついて来てくれている。俺への凝視も相変わらずだ。

「海老原さん、疲れてない？」

俺は今更その事に気が付く。

俺自身が楽しかったのもあるが、彼女もそんな素振りを見せなかった。しかし、調子に乗って連れ回したのは確かだった。

「……全然、平気……」

振り返った俺を当然のように見つめていた海老原さんは嬉しそうに言う。

「……十八……ゆっくり、歩いてくれるから……ありがとう、なの……」

「……」

違っただよ、海老原さん……それはただの俺の癖なんだ。

彼女が微笑みながら付け加えてくれた言葉に俺の胸は締め付けられた。本当に嬉しそうだから余計に申し訳なかった。

「……じゃあ、あと少しだから行こうか？」

「……うん……」

全く俺から視線を外そうとしない海老原さん。本当に嬉しそうに楽しそうに笑ってくれる海老原さん。今日という日を俺なんかと一緒に居て喜んでくれる海老原さん……。

視線を受けた俺は視線を外して歩き出した。

段々と人通りが少なくなってきた気がした。自分たちが歩いて来た方向から聞こえてくる喧騒やクリスマス音楽がやたらと遠くに聞こえる。

本当に合ってるのかと何度も不安に思いながら何度も地図を確認してしまう。それでも、瞬の書いてくれた地図通りに進むと、少し寂れた場所に出た。

長い通路だった。

薄暗い照明と通路の両脇に連なる窓から差し込むネオンに浮き彫られた長い通路。駅ビルから隣にあるオフィスビルに繋がる連絡通路だった。

空調も届かないのか、冷え冷えとした空気。無機質な壁と床。等間隔に据えられた大きな窓。頼り無く照らす蛍光灯。寂しげに光る非常灯。窓から差し込む光だけがやけに眩しく感じた。

まばらに見える人影は誰もが男女の二人組で、誰もが同じ方向を向いている。彼等に釣られ、視線を移す。

吸い込まれそうになった。

光の海に星が舞い降りていた。星空をひっくり返したような光は本当に星が降り積もったのかと思えるほど雄大な光だった。喻えるなら光の奔流だろうか。そこに飛び込んだような錯覚すら覚える。

光の海はただの街のネオン、舞い降りているのは雪、たかが地方都市のクリスマスネオンの筈だ。そう頭では分かっているも目を逸らす事が出来ない。科学的な光は余りにも現実離れしていて、余りにも幻想的だった。

俺は思い出したように海老原さんに視線を移す。

目が合う。

海老原さんは外なんて見ていなかった。俺も、周りにいる人たちも、誰もが目を奪われて止まない光をただひとりだけ見ていなかった。

俺だけを見つめていた。

彼女はいつも俯いている。誰とも目を合わせない。俺以外と目を合わせる事が無い。

初めて会った時も、球技大会の時も、遊園地の時も、勉強会の時も、一緒にご飯を食べていた時も、彼女は俺だけを見つめていた。

今も。

何故、俺なんだ？

「……………どうして？」

俺は自然とそう尋ねていた。

自らを歪めればいいと思っていた。理不尽だと思つたら、受け入れればいいと思つていた。怖くても、辛くても、受け入れればいいと思つていた。

だから、今日という日は冷えきっている。怖い夢を見ても独りぼっち。辛いことがあつても誰にも話せない。嫌いな嘘を吐き続けなくてはならない。

だって、誰にも歪んでほしくないから。

心も、体も、降り積もつたものが溶けることなんてあつてはならない。

だからこれ以上、踏み込んではない。

……そう思つていたんだ。

海老原さんはゆっくり首を傾げる。突然の問い掛けに驚いたのか、それとも戸惑つたのか、俺を見つめる瞳は軽く見開かれていた。

「どうして俺なのかな？」

俺は再度、はつきりと訊く。

この時、俺は明らかに自分の興味を優先していた。これから海老原さんを傷付けてしまうのではないか、そう懸念していても止まらなかつた。

彼女の真つ直ぐすぎる視線に混乱していたのか、彼女の秘密を暴こうだなんて明らかに俺らしくない。でも、俺はどうしても知りたかつた。それほどまで不思議だつたのだ。

「海老原さんって俺とだけしか目を合わせないよね？ どうして俺だけなの？」

一人歩きした俺の思考は更に質問を重ねる。

「……………」

俺の更なる質問に対して海老原さんは微かに眉をひそめる。悪戯がばれてしまった子供みたいに、現実を突き付けられた時の俺みだいに。

見つめる、それはある種、彼女の他人に対するコミュニケーションの手段なのだろう。彼女でなくともそれは誰にでも当てはまると思う。

しかし、彼女は過剰すぎる。こればかりは自意識過剰でも何でもない、彼女が見つめるのは大した特徴も無い俺だけ、出合つて一月半しか経っていない俺だけなんだ。

「…………十八…………優しいから…………」

「それだけ？」

最低だ……これじゃまるで尋問じゃないか。しかし俺は止まら
ない。彼女の視線が逸れないように、俺もこの疑問が解消するまで止
まりそうにない。

「……十八を、信じているから……」

「俺を……？」

「……うん……」

信じてる？　ますます分からない。たった一ヶ月半という短い期
間でどうして俺なんかをそこまで信頼できるんだ？

「……十八は……私を……どう思う……？」

「えっ？」

咄嗟の問い掛けに思考が急停止する。胸の鼓動だけはしっかりと反
応していた。

「……私……変でしょ……？」

???

「え、いや、変って……どこが？」

海老原さんはいきなり何を言い出すんだ？　こんな時にまで勘違
いしそうになった自分に苛つきながらも、頭の中は疑問符でいつぱ
いになった。

「……違つたの……私は変なの……十八は、私の『声』……おかしいと思わないの……？」

「……………」

声。

そう言われてしまえば流石の俺だつてすぐに察しは付く。

「おかしくなんか無いよ。そりゃあ最初の頃は気になったけど、変ではないし、今だつてそう言われなくちゃ忘れてた位だよ」

本当だ。確かに海老原さんの声は普通と少し違つと思う。嗚声いせというヤツなのだろうが、女の子にしては低すぎるしゃがれ声である。しかし、おかしいと思つた事など一度も無い。

「……………」

言いながら海老原さんは安堵したように表情を穏やかにした。

「……………」それ、なの……………」十八は……………」そう言ってくれる……………」私の声を……………」聞き取ってくれる……………」

俺は彼女の言葉を理解しようと頭を廻らす。しかし、余りに予想外な話の展開に全くついて行けない。

「……………」私、喉の手術を、したの……………」声帯麻痺の、手術……………」

言いながら彼女は首に巻いていたマフラーを緩める。露になった

首筋、そこには、あまり目立つ訳ではないが手術痕らしきものがあった。俺は一ヶ月半もの間、全く気付かなかった。

半ば驚愕した俺は何も言う事が出来ない。ただ自分の浅はかさを心の中で嘆くことしか出来なかった。

「……局部麻酔だけ、して……意識がある、状態です……手術……
……自分の、声の調子を……合わせながら、する……手術……
……自分の首を、切り開かれるのを……堪え続ける……手術……」

海老原さんの視線は俺の瞳に固定されたまま動かない。その海老原さんの瞳にはその時の状況を訴えるような恐怖に彩られている。

「……簡単な、手術……の、筈だった……」

もついい。

俺の心がそう叫ぼうとするが、俺の口は開かない。今の彼女を制する事が俺なんかに出来る筈がない。

「……手術は、失敗……通常なら、有り得ないこと……でも、私は……失敗だった……」

海老原さんは淡々と、無感情に語る。その様子は酷く痛々しい。既に彼女の話のあらましを捉えた俺は激しい後悔と彼女への申し訳ない気持ちに押し潰されそうだった。彼女が俺に伝えたかった事は余りにも予想外で、衝撃的だった。

「……誰も、私の声を……聞き取れない……前の学校の、人たちも……今の学校の、人たちも……刹那は、ちよつと違った……けど、

未だに……会話が、成立しない……」

確かに海老原さんの声は聞き取りづらい。絞り出すような掠れ声で、一言一言しゃべる度に呼吸を繰り返して、声量も凄く小さいと思う。

「……でも、十八は……違った……嬉しかった……私の声を、聞き取ってくれるのは……十八だけ……信じている……きつと誰よりも……だから、私は……『視る』の……」

そこで海老原さんは大きく息を吐いて、小刻みに呼吸を繰り返した。

俺の瞳を捉えた視線は一度も逸れなかった。

「……嫌……だった……？」

俺はゆっくりと首を振る。

「……うん……やっぱり、十八は……私を、安心させて……くれるの……」

海老原さんは言葉の通り、安堵したように、嬉しそうに、恥ずかしそうに微笑む。

「……」

なんだよそれ。

俺と同じじゃないか……。

気が付けば俺は俯いていた。彼女から視線を逸らしていた。いや、彼女の視線に耐えられなかったのかもしれない。

能力障害が及ばなかった俺の聴力。昔から耳はいい方だったが、こんなものが残っても大して役に立たない……そう思っていたのに……。

俺は彼女の役に立てていた。俺にとってこんなに嬉しい事なんて無い。

しかし。

『どんな事情があつたのかわからないけど、俺からは訊かない。でも、海老原さんが俺に言いたいなら言えればいい。外野の言った事なんて気にしないで、海老原さんの言いたい時に言えればいい。今でも明日でも、ずっと先でもいい。俺は待ってるから、海老原さんの言いたい時に言えればいいんだ』

俺は……裏切ってしまった……。

「……十八……気にしないで……今が、私の言いたい時……だから……」

ああ。

どうして君は。

そんな事を本人から言われてしまったら、俺は許されてしまうんじゃないか……。

俺は顔を上げる。

半分しか映らない俺の視界の中心にいる海老原さん、当然のように俺を見つめていた。明らかに俺を気遣う表情で見つめていた。

左側に雄大に広がっている筈の夜景も、なんだかどうでもよくなっってしまった。

視界の中心に映る海老原さんと彼女以外のカップルの人たちの事を冷静に眺めていた。

あ、二組向こうのカップルの人たちキスしてる。

「……………じつと……………してて……………」

いつの間にか海老原さんと俺の距離が縮まっていた。俺の一瞬の隙を付いて接近するなんて凄いや海老原さん。

じい〜

俺に視線を固定したまま背伸びをすると、彼女の右手が俺の頭を撫でた。いや、俺の髪を優しく梳すいてくれた。

「……………髪、ねこっ毛……………細いし……………左側だけ、跳ねてるの……………」

俺の髪の左側、跳ねている部分を何度も手櫛で梳いてくれる海老原さん。しかし、俺の髪はぴよぴよこと元に戻ってしまう。

「くせっ毛なんだ……………それ……………」

俺の髪の毛は何故か左側だけ跳ねてしまう。どんなに頑張っても元に戻ってしまふ頑固ものだ。

海老原さんは少し残念そうな表情をすると、今度は俺の前髪を梳き始めた。

「……十八の前髪、長いの……人のこと、言えない……けど……」

言いながら海老原さんはクスリと笑う。

俺はなすがままだった。考える事が出来ない位に安心しきっていた。さつき訊いてしまった事すら忘れていた。やっぱり年上なんだなあ、とか馬鹿な事だけを考えていた。

「……………」

海老原さんは俺の前髪を開いた状態でピタリと動きを止める。そして、空いている方の左手を俺の右頬にあてがった。

じい〜

海老原さんはそのままの状態で俺の瞳を見つめる。彼女の前髪越しの瞳に俺が映る位に俺たちは接近していた。あ、あ、さっきの私たち、またキスしてるよ。ちょっとは恥ずかしいとか思わんのかね、全く……。

「……………へテロクロミア……………」

……………?

!?

「!!」

俺は左目を慌てて隠す。頬にあてがわれていた海老原さんの手も振り払っていた。

「……と、十八……？」

びっくりしたような表情の海老原さんは先ほどよりも大きく目を見開く。周りにいるカップル達も何事かと注視を寄越した。

「あ……ごめん海老原さん」

俺は左手で左目を抑えながら慌てて謝罪する。薄暗くて表情はわからないが、迷惑そうに注視する周りのカップル達にも会釈を繰り返す。

「……ごめんなさい……そんなに、驚くなんて……」

「いや……別に……」

そうは言うが俺は左目を隠したまま大きく動揺していた。

あれほど大きかった安心感は跡形も無く消え去り、大きな危機感に襲われていた。激しい動悸を整える呼吸が追いつかないと思う位に動揺していた。

自分の興味を優先していた俺、今度は自分の体裁を優先して狼狽

えていた。

Heterochromia Iridis (ヘテロクロミア・イリデイス)

医学用語では虹彩異色症。左右の目の虹彩の色が異なる、または一方の瞳の虹彩の一部が変色する症状。バイアイやオッドアイも症状を表す言葉として使われる事がある。

特に動物に見られる事の方が多く、人間の場合は極めて稀である。先天的な特徴として現れる他、病気や外傷による後天的な要因によって現れる場合もある。

俺はもちろん外傷による後天的なものだった。

雪。

短い冬だけのものだから綺麗なのだろうか、儂いものだから綺麗なのだろうか、風景に溶け込む自然現象だから綺麗なのだろうか。

雪は人々を魅了する。

その人のたつた一度に刻み込まれる。

この雪もそんなものだったのだろうか……。

昼すぎに降り出していた雪は止んでいた。

「……………落ち着いた……………？」

「うん……………」

雪化粧で真っ白になった街を見下ろしていた俺を気遣ってくれる
海老原さん。

「ごめんね、海老原さん。……………もう、誰もいなくなっちゃったね」

「……………うん……………」

雪が止んでからしばらく、星の雨が止んでからしばらく。
時刻は午後21時少し前。元々少なかったカップル達は次々とこ
の場を後にし、いつの間にか誰もいなくなってしまうていた。薄暗
い蛍光灯の下には俺と海老原さんの二人だけが取り残されていた。

嫌に静かだった。もしかしたら、ショッピングモールの幾つかの
お店は営業時間を終えてしまったのかもしれない。ここに来て随分
と長い時間が経ってしまったているのだから当然だろう。そんなつも
りなんてなかったけど既に後の祭り、俺のせいでたくさん時間を
無駄にした。俺は今日、彼女を振り回してばかりなんだ。

「俺さ……小学校六年生の時に、大怪我したんだ……」

俺は窓の外に語り掛けるように口を開く。間違いなく無意識だった。

「この時、俺はどうかしていたのだと思う。」

「……うん……」

海老原さんはしっかりとした相槌を返してくれた。

「一カ月ぐらい意識不明でさ、普通なら絶対に助からない位の大怪我だったんだ」

「……うん……」

外を向いている俺は海老原さんがどんな表情をしているのかは分からない。でも、海老原さんは俺の横顔をしっかりと見つめ、俺の為に表情を歪ませてくれているだろう。

「一カ月経って意識を取り戻した時、お医者さんもびっくりしていたよ。有り得ない、奇跡だったね。俺は目を覚ましちゃってさ、『こっち』に戻って来ちゃってさ……」

「……」

俺は何を言っているんだろう……。あれほど頑に守り通してきたものをこんなにもあっさり晒してしまうなんて……。

「……ごめん。こんな話つままないかな？ せっかくのクリスマス

なのに暗くなっちゃうよね？」

「……聞きたい……」

自分の馬鹿さ加減に気が付いた俺が話を打ち切ろうとしたが、海老原さんははっきりとした声で俺の話を促した。

「……聞きたい……十八の、こと……もっと、知りたい……」

「……」

わからない……わからないよ……遙、刹那……。

「……… 全治不可能。それが俺の診断結果だったんだ。体の重要な機関のほとんどが駄目になっちゃってさ、お医者さんもうどうして心臓が動いているのか分からないって言ってたよ」

「……」

海老原さんの相槌は無い。しかし、彼女が短く息を飲んだのは分かった。

「でも、俺は退院した。半年掛かったけど、退院したんだ」

俺は若干昂揚してきた心に任せるまま振り返る。

目が合う。

当然だろう。もう彼女が俺を見つめる事に驚きはしない。でも、彼女の今にも泣きそうな表情には驚いた。俺の躊躇させるには充分

なものだった。

「……その時の副産物がこの瞳、コレなんだ。はは……」

しかし、俺は自分の感情を誤魔化す為に己を晒す。そして、笑っていた。自分を嘲笑っていた。

「……………」

海老原さんの視線は俺の左目に固定されている。その瞳にはいつかの刹那を思わせるような、とても大きな憐憫の情で彩られている。

「……見えてない……？」

「……………」

もう俺は左目を隠さなかった。

「……視点は、合ってるけど……瞳孔が……全く、動いてない……」

気付いて当然なのかもしれない。彼女は誰よりも、きつと俺よりもこの瞳を見つめていたのだから。

視点を誤魔化す事は出来ても機能を誤魔化す事は出来なかったか。訓練したただけだな……誰にも悟られないように。今も、毎朝……。

「……うん。俺の左目は……失明してるよ」

「……………十八……………」

俺は余りにもあつさりと自分を晒していた。

今だから思う。俺は彼女に、いや、誰かに知ってほしかったのかもしれない。

「気持ち悪いよね、コレ。黒と茶色だから、そんなに目立つ訳じゃないけどさ、明らかにキモいよね、はは……」

俺の瞳は右が生まれた時からの黒、左は五年前のあの時からの影響で黒みを帯びた赤黄色に変色している。近い色だから、それほど目立つ訳ではないが、よく観察すれば誰にでも分かる位のものだ。俺は失明を隠すというのもあり、俺自身が嫌悪している変色を隠す為に左目を前髪で隠していた。

「……………」

彼女は何も言わない。ただ俺の瞳を見つめている。

ヘテロクロミア、一般的にはオッドアイの方が有名かもしれないが、オッドアイには、変だ、おかしい、不思議だ、奇妙だ、などの意味があり、差別的な表現を踏まえていると言う人もいたらしい。しかし、その言葉が漫画やアニメなどで一般化してからはごく一般的な呼称として使用して触りは無いとされてきているのだと思う。

恐らく海老原さんは俺を気遣って前者を使ってくれたのだろう。

「ごめん、本当にごめんね……」

台無しだ……俺のせいで……。

「……………」

やはり彼女は何も言わない。大きな憐憫を眼差しに乘せて見つめるだけだった。

「…………ごめん、俺さ、この目が大嫌いなんだ……。嫌な事を思い出しちゃう物でさ、鏡を見るのも嫌なんだ……………」

そう、俺はこの目が嫌で嫌で堪らない。色が違うのが嫌な訳ではない。隻眼が嫌な訳ではない。

俺はこうなってしまった俺自身の異常すぎる『課程』に嫌悪している。

「…………十八…………！」

俺の思考を遮るように彼女は俺を呼んだ。

表情はわからない。俺はいつの間にか彼女から視線を逸らしていた。

「…………十八は、私の声…………気持ち悪いと…………思うの…………？」

「思う訳ないよ。さっき言われるまでだって気にした事なんてなかったんだ」

条件反射でそう言いながら彼女の言いたい事に気付く。

「…………うん…………ありがとう…………私も、そう思うの……………」

それは彼女の心からの言葉だというのもすぐにわかった。

……そうか。彼女だったから。彼女ならこう言ってくれるって知ってたから、俺は言ったんだ。

だって、俺もとっくに彼女を信じていたんだから。出合ってから期間なんて関係なかったんだから。

誰にでも、どんな時でも、遥がそうだったんだから。

「……ありがとう、海老原さん」

「……うん……」

誰かを信じる。それは俺があいつの一番大好きなところだったんだ。

とても大切なものを思い出し出すことが出来た気がする。

本当に、ありがとう。

聞き覚えのある音楽が流れて来る。

蛍の光。すぐにショッピングモールの営業時間終了を知らせるものだとわかった。

その馴染み深い音楽は俺たちの雰囲気や普段通りに戻してくれた。

「……出ないと閉じ込められちゃうかもしれない。出ようか？」

「……待って、その前に……ちょっと、タイミング……わからないから……今、渡すの……」

「……ん？」

少し明るくなった彼女の声に釣られて視線をやると、彼女は自分のカバンをゴソゴソしていた。

「……はい……」

????

取り出した何かを俺の前に差し出す海老原さん。

「えっ？ なにこれ？」

彼女が差し出したのはチェック柄の包装紙にリボンで装飾されたかわいらしい包みである。

「……プレゼント……クリスマスの……」

……？

……！？

「ああっ！！」

とても重大な事を思い出した俺は大声を上げる。びっくりする海老原さん。

「……十八……？」

「クリスマスプレゼント買うの忘れてたよう！ さっきの買い物の中に選んでもらう予定だったんだよ！」

事前に欲しい物を調べて買っておくのがベストだと思うが、俺なんかそんな余裕がある筈ないので直接選んでもらう予定だったのだ。

「……いい……要らないから、大丈夫……それより、これ……受けて、くれる……？」

クスクスと笑う海老原さんは少し恥ずかしそうにもう一度差し出してきた。

「そ、そんなこと言われても……まあ、もちろん受け取るけど……」

おずおずと受け取る俺。

「……マフラー、なの……十八、いつも……コートも、マフラーも……してなかった、から……いいか……」

確かに俺はコートもマフラーも着ない主義である。いや、別に着てもいいんだけど、早朝のバイトのお陰で寒さに耐性があるから平気なだけなのだ。

「……最初は、私用に……作ってた、物だったけど……色も、黒だったし……男の子用に、作り直したの……」

もじもじしてる海老原さんはさっきより恥ずかしそうに言う。でも、やっぱり俺を見つめるのは止めてない。

「もしかして手編みってこと？」

「……………」

カクン

「ななな、なんて素晴らしい物を……」

「……嫌、だったら……捨てて……？」

そんな事できる筈ありません。

「いや、大切にするけど……でも、俺も何かあげたいよ。このままじゃ納得いかないし、その……海老原さんは何か欲しい物は無いの？」

「……………」

ふるふる

「……………別に……………」

「いやいやいや！ なんでもいいからさ、ねっ？ ねっ？」

「うわぁ、どんどん俺がどっしりよつも無いヤツに思えてきたぞ。実際そうなんだけど。」

「……じゃあ……」

「うんー！」

ドンと来い！ 実はどんな事態にも対応できるように財布の中には二十万円入ってるんだ！ いや、ツッコミは無しの方向で！

「……名前で、呼んでほしい……」

「えっ？」

「ナマエデヨンデ？」

「それって何処に売ってるんだっけ？」

「……」

ふるふる

「……うん、違う……私を、下の名前で……呼んでほしいの……折原さんと、本城君……見たら……羨ましくて……」

「下の名前？ 海老原さんの下の名前……」。

「……曜日？」

あ、呼び捨てしちゃった。

「……………!!」

物凄い真っ赤っかになる海老原さん。あ、曜子……いや、呼び捨ては駄目だな、年上だし。

「じゃあ、曜子さん」

当然こう呼ぶべきだろう。

「……………う、うん……………十八……………はうう……………!!」

真っ赤な顔の曜子さんはお返しとばかりに俺を呼ぶ。って、うわ、なんか目を回してないか？

すっかり遅くなってしまったので、帰る事になった。

降雪の影響もさほど無く、通常通り動いてくれていた電車に乗って難なく久住ヶ丘駅に到着。曜子さんと二人、ホームから出たところで俺の携帯が鳴った。

着信 佐山刹那

刹那？

「ごめん、曜子さん。刹那からだ、ちょっと出るね?」

やはり顔を真っ赤にしてしまった曜さんが頷いたのを確認してから通話ボタンを押す。

「もしもし?」

『……………』

???

なんだ? 何も答えないぞ。

「刹那?」

『……………』

「ん……………えっ? どうって、何が?」

いくらなんでも脈絡が無さすぎて答えようがないぞ。

『まだ曜子と一緒に居るの?』

「あ、ああ……………隣に居るけど……………」

何故か俺は少しびびっていた。

『……………あなた、まさか……………! 今は何処に居るのか答えなさい!』

「やたらと威圧感のある声の刹那は意味不明でちょっとおっかなかった。」

『本当にどうしたの？ 今は駅前に居るけどさ』

『外つてこと？』

「うん」

『……………』

「うわぁ……………全く持って意味がわからないよ？」

『あなたの事だから、デートプラン通りに行動したわよね？』

グサツ

「う……………」

『もしかして最後のところ、まだ見てないの？』

最後のところ？

「見てないけど？」

『……………そう。これからどうするつもりだったの？』

あれ？ 途端に声が穏やかになった気がするぞ。

「いや、いい加減遅くなってきちゃったし、もう帰ろうかって。あ、

駅前って言っても久住ヶ丘の駅前なんだ」

『……………』

また黙っちゃった。いや、凄い小声でぶつぶつ言ってるかも。

『……………そうね。考えてみればあなたにそんな根性があるとは思えなかったわ』

よくわからんが、グサツときた。

『いい？ デートプランは即処分すること。それから曜子を即無事に家まで送り届けること。いいわね？』

????

「よくわからないけど、わかったよ。刹那……………怒ってるの？」

言う通りにするのは構わないが、なんか怒らせたのかもしれないから訊く。だとしたら謝らないといけないし。

『怒ってな あ！ やだ、ちょっと返してよ』

「刹那！？ おい！ どうした!？」

『……………もしもし、十八か？』

なんだなんだ？ 今度は一緒に居たらしい瞬間に代わったぞ。

「いったいなんなの？ 刹那の様子がおかしかったけどさ」

『ははっ。いやき、何処から仕入れてきた情報かは知らんが、刹那がな、クリスマスイヴの午後九時から翌日の午前三時までの六時間、つまり性の　グハアッ!!』

「瞬!? どうした!?!」

『ツーツーツー……』

切れてる。グハアと一緒にけっこうヤバめの鈍い音がしたけど……瞬、大丈夫かな。

「なんだったんだらうね?」

「……?」

隣で見守っていた曜子さんも首を傾げていた。

俺はデートプランを取り出してみる。読むなどは言われてないから、読んでから即処分しよう。

瞬と刹那のデートのススメ〜上級編〜

1・タワーホテルのレストランで豪華なディナー。クリスマスメインイベントといっても過言ではないかもしれない。それを一年前から予約しても取れない位のプレミアが付いているタワーホテルの展望レストランでやってしまう(塩田で予約済み)。

クリスマス用のコース料理で一人頭しめて25000円よ。帰って来なさい。

2・今日はここまでにして家に送る。

意外な事に海老ちゃんも門限が無いらしい。だが、クリスマスとはいえ、高校生同士の初デート、今日のところはここまでにして無事に家まで送り届けるのもいいだろう。あくまで今日のところはと、いうのを忘れるな。

当たり前じゃない。帰って来なさい。

3・大人になる。

せつかくバイトを休んだ十八、更に上記の理由から考えると、十八と海老ちゃんには、まだ時間があるという事になる。そこで選択肢の1を実行してから部屋にエスコートなんてどうだろう（部屋は塩田で予約済み）。1 3 2のコンボなんてどうだろう。海老ちゃんがその気なら行ける。頑張れ。

帰って来なさい。

「……………」

もはやツッコむ気力も無い。

曜子さんの方を見ると白い息を弾ませている彼女と目が合う。相変わらずの真っ直ぐな視線で俺を見つめながら待っていてくれた。

「帰ろうか？」

「……うん……」

彼女が少し残念そうにしたのは俺の気のせいだろう。

073 第二章曜子16 芳縁（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

今回でようやく『クリスマス編』が終わりました。

実を言いますとこのクリスマス編、当初に私が書いていたものの二倍くらいの長さになってしまっています。

理由は曜子のエピソードの一つを削除したからです。やむを得ない理由から、そのエピソードの一節をこちらに混ぜ込みました。お陰でくだくだになってしまったと思っています。申し訳ありませんでした。

次回からは更新が早くなる予定です。至らないばかりの拙作ですが、読んで下さっている読者様がいる限り頑張ります。これからもお願いいたします。

年末。年の瀬。冬休み。大晦日。年越しソバ。

まあ、ソバは置いといて、今日は大晦日で、大掃除である。

毎年恒例の年中行事ではあるが、なんともやるせない。冬休みが始まってから毎日やってるのに終わらないし、もう大晦日だし。いや、やる気はあるんだけどね、掃除だつて嫌いじゃないし。

しかし、考えてみる。敷地面積二百八十坪。母屋と離れ、合わせて16部屋。でかい道場と蔵が二つずつ。

そして俺はひとり。

どう考えても胃が痛くなる。

なんて思っていたんだけど、それも昨日までのこと。今の俺はひとりじゃない。

「そうだろ？」

「.....」

縁側の床を雑巾掛けしていた親友その一は苦笑いしていた。窓を磨いていた親友その二はふてつてる。

「ほらあつ！早く終わらして楽しい鍋パーティーしようよ〜！」

居間にいる俺は座敷箒をさっさかと動かしながら二人に今日の
大イベントを宣言する。

「思えばそれに釣られてのこのこ来ちゃったのが間違いだっただ
よねっ！」

親友その二、渉は手を休めずにぶーたれた。

「はは、俺は最初から手伝うつもりだったけど、流石に広いなあ…
…終わるかねえ？」

俺と渉の様子を見ていた親友その一、瞬がバケツに雑巾を絞りな
がら苦笑する。実に見事な苦笑である。

「大丈夫だよ！ なんてったって心強い仲間が二人もいるんだ！
それに残ってるのはこの母屋だけだし、まだお昼すぎじゃないか
！」

「その母屋がとてつもなく広大じゃんかよっ！ 午前中からやって
るのにほとんど進んでないよっ！」

うっさいヤツめ。でも、手を休めないのは評価してやる。

「まあまあ、労働の後のご飯は格別だよ？ 山ほど買って来た
から、好きなだけ食べてもいいんだよう？」

「当たり前だよっ！ 肉ばっか食ってやるからなっ！」

いいもん、俺の好物ネギとエノキだし。

そんな訳で大晦日。我が家には瞬と渉が遊びに来てくれていたのであつた。

さて、鍋である。

今日はシンプルな寄せ鍋で、気持ち濃いめの出汁に何でも入れてやれ的な漢鍋だ。

魚、鶏肉だんご、白菜、ネギ、人参、春菊、しらたき、エノキタケ、椎茸、豆腐、等々、ぶつちやけごつた煮である。

「っっっただきまーすっ！！」「」

居間のコタツと鍋を囲んだ三人は声を合わせて号令する。

どうにか大掃除を完遂した俺たちは、お腹を極限まで減らした状態で夕食となつた。もとい、時刻は既に9時、どう考えても晩ご飯だつた。

本当なら風呂に入ってもらつてからご飯にしたかつたんだけど、余りに遅くなつてしまったので先に食べようという事になつた。

「うっ！ まっ！ いっ！ 美味いぞおおおおおっ！！ 必要以上に美味いよちくしょーっ！ シオオオオウツ！」

お前なにキャラだよ。リアクション凄すぎだよ。……嬉しいけど

た。

「ははは、いっぱいあるんだからゆっくり食べよ涉。しかし、たまにはこういうのもいいかもな。十八」

「ああ。いや、本当に助かったよ、多分ひとりじゃ年内に終わらなかったと思うし。ありがとうな？」

「気にするなって、元々俺が言い出した事だろ？」

「そりゃあまあ、そうなんだけどさ……実際手伝ってもらった訳だし……」

「いっての、こうして美味いもん食わしてもらってんだからな」

にゃははと笑う瞬。

そうなのだ。この鍋パーティーも、掃除を手伝ってくれる事になったのも、涉を連れて来たのも、全てが瞬のお陰だった。せめてものお礼という事で、鍋の材料は奮発したつもりだ。

「ところで涉、お前は実家とかに帰ったりしないのか？」

ひょいひょいと取り皿に具材をよそう瞬が思い出したように言う。

「ああ、いいのいいのっ、遠いしっ、めんどくさいしっ……」

菜箸を取っていた瞬に答えながら取り皿を構える涉。律義にもちやんとよそってあげる瞬。

「いやあつ、それよりもさつ！俺はシオン家にびっくりだよつ！初めて来たけど、すごいでつかいんだもんつ！」

もりもり食べるのを再開した渉が話題を変えた。しっかり飲み込んでから喋ったのは偉い。

「単に大きいだけだよ。それにそのせいで掃除とかが大変なんだしさ」

火傷確実まで熱くなっている豆腐をふうふうしながら謙遜する俺。実際この家は俺が遺産として受け継いでいるが、実感も無いし、法律なんちゃらのせいで完全に俺に所有権がある訳じゃないらしい。

「すごいってばつ！道場が二つもあるなんて最高じゃんかつ！」

「まあ、それはその通りなんだけどね。剣道場の方はあんまり使っていないから、渉が使いたい時は使ってもいいよ？」

掃除は手伝ってもらおうけど。

「マジでっ！？ すごええつ！ イヤッホウツ！」

「ははは、渉は本当に剣道少年だよな？ 寒い、練習めんどくさい、とか言い出してもおかしくないのに」

やっぱりひよいひよいやってる瞬がもつともな事を言う。均等にいろんな具材を選ぶのは瞬らしい。

「だってもつと強くなりたいじゃんっ！？ シオツ！ 具材が無くなっちゃったよっ！」

「ああ……つて？ えっ？ うそおっ！？」

無邪気な涉に相槌を打ちながら鍋を覗くと鍋の中はすっかりかんで、用意していた具材もきれいさっぱり無くなっていた。

「十人前はあつた筈なのに……俺なんて豆腐しか食べてないのに……」

「俺たちの胃袋を甘くみるなよ十八、俺なんてまだ腹三分目だぜ」

おいおい、俺は冷静な顔してひよいひよいよそうお前を十回以上は目撃してるぞ？ 間違いなく五人前は食つといて三分なのか？

「なにーっ！ 俺なんてまだ腹二分目だよっ！」

頼むからお前も対向するな。

「追加を用意して来るから待つててよ……」

買って来た材料どころか家の中にある食料を食い尽くされるかもしれない。

二回戦である。

「今度は二十人前は作つて来たぞ。食べるもんなら食ってみろ」

「えーっ！ 足りるかなーっ！？」

うつさい黙れ。

「さっきはああ言ったが俺はあんまり食わんから涉が食いまくっていいぞ？ もちろん残すつもりなんてないが」

涉と同じくらいの大食漢のくせに妙に落ち着いた事を言う瞬。おかしいなと見てみると瞬の手には、

「ちよっ！ お前それっでビ　！」

と、ツッコもうとした俺の口を塞ぐ瞬。早めに断っておくが塞がれたのは瞬の唇とかいう激しい展開はない。俺の口を塞いだのは並々と液体の注がれたグラスだった。

「コレって……ちよ！　ゴクゴク！」

うわ、シュワシュワしたのが流れ込んでくる！　それに凄い苦い！

「にやはは！　堅いこと言う口はソレで消毒だ」

言いながらグビビッと俺の口にグラスを傾ける瞬、必然的に俺の喉が鳴る。反対側の手では自分でもグビグビやってやがる。

「労働の後は美味しいなあ？　十八もそう思うだろう？　にやはは！」

なんてこった。瞬の後ろには既にダースで空き缶が積み重ねられている。なんて思ってたなら鍋も空っぽになってやがる。

「シオツ！　早く具材を投入しないと悪くなっちゃっうよっ！」

「そんなに早く悪くなら　グビグビ！　うわぁ！　止めてよ瞬！」
「じゃははー！」

やっぱりこいつらは色々と規格外だ！

あっさりと材料が尽きてしまったので御開きとなった。確か俺は
かなり余裕を持って買って来たのに、涉はスナック菓子でも食べる
感覚で食っし、瞬も柿ピーで一杯やってるみたいな感覚で食っし…
…。二回戦の鍋も数十分で無くなってしまった。やつらの胃袋は絶
対におかしい。

「シオツ！　シオツ！」

夕食後、一番風呂を提供してやった筈の涉が戻って来た。腰に夕
オルだけ巻いた状態で。

「どうしたの？　温かった？」

夕食の片付けをしていた俺が訊く。

「たいへんだよっ！　シオン家は風呂もめちゃくちやでつかいよっ
！」

「なんだよそんな事が……」

確かに俺ん家の風呂はでかい。ぶっちゃけちょっとした銭湯くらいあると思う。

「一緒に入ろうよっ！ 見せっこしようよっ！」

な、何を言い出すんだ……この無邪気っ子は……。

「止めておけ涉……お前の男としてのプライドがズタズタになるぞ……？」

一緒に後片付けをしていた瞬間がそう言いながら台所から出て来た。なんだか恐ろしい物でも思い出したような表情である。

「ど、どういう事なの瞬っ……？」

どうして涉はそこでシリアスになるんだよ。

「俺も最後に見たのは小学校の時なんだが、その時点で既に空母サイズだった……。恐らく今は波動砲が撃てるくらい……。いや、もしかしたらトランスフォーマーシヨンして主砲が撃てるくらいには……」

「ちよちよちよ！！ 凄いたえを出さないでよ！ そんなにでかくないよー！」

本気っぽく言う瞬に慌ててツッコむ。

「そ、そんな……」

パサリ

振り返ると渉がこの世の終わりでも見てしまったみたいで俺を見ていた。それに腰に巻いていたタオルが落ちて渉のアイツがコソニチワしていた。

「フツ、なんだそのブラックバスでも釣りに行くような船は？ しかも手漕ぎジヤネ？」

ひどっ！ それはあんまりだよ瞬！

「う……うわあああっ！！ 男の価値はそんなもんじゃ計れねえんだよおおっ！」

そんなのを言った時点で負け的な台詞を叫びながらマップで駆けて行く渉。

「わ、渉！ そっちは玄関だよ！」

追い掛けようとする俺はガシツと瞬に腕を掴まれる。

「俺は漁船くらいだ」

お前、絶対に酔っ払ってんだろ！

結局、風呂を順番に入った頃には年が明けてしまいそんな時間になっただけだ。

俺は慌てて年越しソバを作って居間に駆け込む。

「シオツ！ 早く早くっ！ もうカウントダウンが始まっちゃっよっ！」

「ソバが！ ソバが！」

「いいから早くしろ十八！」

「ソバが！ ソバが！」

二人に急かされつつ俺がソバをコタツに置くと、俺たち三人はテレビの前に集まる。

「よし、準備はいいな！」

「オツケーツ！」

俺たちの準備が整ったところでタイミングよくカウントダウンが始まる。

10、9、8……3、2……。

「構え！」

瞬の声と同時に俺たちは一斉に前を向く。

それと同時にテレビに映る時刻の数字が全てゼロになった。

で、俺たちはそのテレビに向かって何故か組体操の三人ピラミッドをやっていたりする。

「決まったぜ！」

そのままの体制で叫ぶ俺。

「バッチリだよっ！」

合いの手を入れてくれる上段の渉。

「びっ！」

口で言った瞬間の笛と共に崩れる三人ピラミッド。

えっ？ いや、別に意味は無いよ？ 年越しと同時に三人で何かやるうってなあって、じゃあピラミッドやるうってなっただけ。

「じゃあ、年越し”た”ソバを食べよう。挨拶は食べ終わってからだよ」

了解とやり終えた感たっぷりな表情でコタツに着く瞬と渉。ちなみに二人ともソバは大盛りである。

年が明けた。

二人のお陰でとても賑やかに年を越す事が出来た。

去年、いや、もう一昨年になるのか。一昨年はじいちゃんと二人で今と同じようにソバを食べていた。でも、じいちゃんは今いない。本当なら今年は俺はひとりで年を越す事になっていただろう。

「シオツ！ あけましておめでとうっ！ 今年もよろしくねっ！」

渉……もう食い終わったのかよ。

「うん、あけましておめでとう。」「ちらこ今年もよろしくね」

……今年もよろしく……か。

「十八」

とても聞き慣れたその声は俺を気遣っている気がした。

「今年が一番に言えなかったか……少し悔しいな……。十八、あけましておめでとう。今年も俺をお前の親友でいさせてくれ……。よろしくな？」

「瞬……」

照れくさそうに言う瞬の笑顔と言葉に俺の目頭が熱くなる。

「あけましておめでとう……そんなの、俺だって……」

やばい、本当に泣けてきた。

「ああつ！ ずるいずるいつ！ そういっつのは三人でやろうよつ！
仲間外れにすんなよなつ！」

ぷくーってなつた涉が俺にじやれてくる。

「はは、わかつたわかつた、お前も一緒だ。俺たちは今年も三人で
バカやって楽しい親友だ。十八もいいな？」

「……………うん」

瞬……………涉……………俺の友達……………。

今年も……………よろしく……………。

ピピッピピッ

「あれ、メール、十八のじゃないか？」

三人の和やかな雰囲気割って入ったのは俺の携帯のメール着信
音だった。

「誰からののっ？」

涉に急かされながらメールを開くとそれは新年の挨拶的な文面だ
った。

「曜子さんからだ……………」

メールをくれたのは海老原さん、じゃなかった、曜子さんだった。

「曜子さん？ ああ、海老ちゃんのことか。なんだ十八、いつの間に名前で呼ぶようになったんだ？」

意外そうな顔で少し驚いていた瞬だったが、すぐにニヤリとした顔で訊いてきた。

「い、いや、イヴの時に……」

やばい。こつこつって恥ずかしい。

「おお、十八もやるじゃんか？」

ニヤニヤと俺を小突く瞬。

「や、やめるよ……そういうんじゃないよ……たぶん」

ピュッピュッピュッ

そこでまたメールの到着を知らせる着信音が俺の携帯から上がる。

「今度は誰だ？」

ニヤニヤはそのままに訊いてくる瞬。

「刹那から……あけましておめでとつってただけけど……」

「ほお、刹那がね」

めちやくちや嬉しそうな瞬。

ピピッピピッ

更にメール着信音が上がる俺の携帯。

今度は進藤さんからだった。文面には橘からの言葉もあった。

「やるな〜十八〜」

もはやニヤニヤのしすぎで変な顔になってる瞬。

「し、瞬こそどうなんだよ！ お前の携帯はどうしたんだよ？」

余りに俺ばかりをいじってくるので反撃してみる。

「ああ、俺のは多分えらい事になってるだろうからサイレントにしてあるんだわ。見るか？」

瞬に渡された瞬の携帯を見ると、既に『新着メール 220件』となっていた。あ、今221件になった。

「どっから出回ったのかは知らんが、毎年増え続けるんだ。去年は元旦だけで受信フォルダを二周くらいしたな」

確か瞬の機種の受信フォルダは500件で満タんだから、単純に考えて1000件は受信した事になる。んなアホな。

「お前に訊いた俺がバカだったよ……」

そこまでするとぶつちやけ嫌だと思つ。

居間の隅つこに視線をやると、俺の親友の渉が体操座りでぶつぶつ言っていた。

見なかつた事にしよう。

『一年の計は元旦にあり』なんてことわざがあるが、俺はこのことわざがあまり好きではない。

何事も計画的に、何事も最初が肝心だというのは分かる。行き当たりばったりでは良くないというのも分かる。

しかし、それでは何か大切なものを見過ごしてしまうのではないだろうか？ その瞬間にしか見付けられないものを見落としてしまうのではないだろうか？

ネガティブな俺らしいような、らしくないような微妙なところではあるが、俺はそう思った事があった。

元旦、夜明け前。

新聞配達のバイトから自宅に帰る途中、海岸線に沿って延びる生活道路を歩く途中。俺の家からも程近い見慣れた場所、海と街を見渡せる小高い場所。

俺はそこで立ち止まる。

ちらほらと並ぶ街灯はあまり届かないが、星と月の光のお陰で夜

目の利かない俺にもどうにか風景を見渡す事が出来る。

乾燥する季節とはいえ、乾いた空気を肌を感じる。珍しい事だ。久住ヶ丘はこの季節でも朝方には湿気を運ぶ潮風に晒される。だが、今朝に限ってはそれも無いという事だろう。

そろそろだ、不意にそんな確信とも取れる予感を感じた。俺はそれに任せて水平線の方角に視線を巡らせる。

同じタイミングで暗闇に光の点が穿たれる。僅かな間も置かず点は線に、そして、次に俺が瞬きをした瞬間には線が帯となって広がっていた。それはとても眩しい。周りの星たちを包み込んだような光の帯はゆっくりと輪になって行く。

一月一日、初日の出。

いつか見過ごしてしまったような朝日に俺はひとり見とれてしま
う。

いつかと同じように胸の奥が痛くなってしまふ。

いつものように背中側の街に住む人たちの事を思ってしまう。

綺麗だ。

心からそう思う俺はただ、切なかつた。

バイトを終えて帰宅した俺は習慣である鍛練を終えると、台所に立っていた。学校のある普段よりはかなり遅い時間である。

瞬と渉はまだ寝ていると思う。昨夜は年が明けてからも遅い時間まで馬鹿騒ぎしていたんだから仕方ないだろう。

いや、もちろん俺も眠い。馬鹿騒ぎには俺も参加していたからほとんど寝ないでバイトだったし、元旦の新聞はいつもの倍くらいに分厚いから疲れたし。

「俺も寝よ……」

まあ、起きていても特にやる事がない。作っていたお雑煮も出来上がったので、俺は軽く寝直す事にした。

「おふぁよーっ……」

と、そう思っただけで台所から出ると起きて来たらしい渉がいた。

「あ、おはよう。まだ寝てても良かったのに。瞬は？」

寝直せないのは残念だが、自分ん家に渉がいる嬉しさから照れくさい俺。

「まだ寝てるよ……俺も正直眠いけど、なんかいい匂いしてさぁ……起きちゃったよ……」

まあ、瞬の事だからそうだと思うっていたけどさ。それにしても、ふらふらしながらコタツに着いた渉。そんなに眠そうなのに「ご飯を食べる気は満々なのかよ。」

「お雑煮食べる？」

「おモチは五個だよ……」

言いながらコタツに突っ伏す渉。ていつか起きがけに五個も食べるのかよ。

「わかったよ、ちょっと待っててね」

うーん、なんだか平和だ。

そう思いながら俺が台所に立った時、コタツに置いておいた俺の携帯が鳴った。メールのようだった。

「シオ……メールだよ……」

わざわざ教えてくれる渉。

「今、火を点けちゃったから手が放せないんだ。誰から？」

言った瞬間、しまったと思った。

「ウヒヨオオオツ!!」

マズい、遅かった。考えてみれば、俺にメールをくれるのは瞬か渉、もしくは執行部の女の子たちだけだった。それを渉に見られてしまうのは余りに危険じゃないか。

「わ、渉！ 誰からだっただよ!?」

慌ててコンロの火を消した俺は居間に突撃しながら訊く。

「刹那ちゅわぁーんっ！ 俺は新年早々、なんてツイているんだあ

あつ！」

眠気も吹き飛んだのか、ガッツポーズを取りながら叫ぶ渉。

「だああ！ お前宛てに来たメールじゃねーだろうがぁ！ 返せ！」

渉から俺の携帯をひったくる。

f r o m 佐山刹那

s u b おはよう

今から初詣に行くわ。曜子と一緒に三十分で行くから、瞬にも準備をさせておきなさい。

だああ！ コイツはヤバい！

「渉！？ 本文は見たの！？」

「あつたり前だみょーんっ！」

俺だつてお前の反応見てわかってたよチクショー！

「初詣っ！ 初詣っ！ 刹那ちゃんと初詣っ！ 曜子ちゃんも一緒っ！ ……まさか俺を置いて行こうだなんて思ってないよねっ？ シオツ？」

「うるさい！ 踊るな！」

くねくねと踊り出した渉はムカつくが、たいへんマズい事になっ

た。いや、俺は刹那と初詣に行くのはもちろんのこと、渉と初詣に行くのも全然オツケーなんだが、いかんせん刹那にしたらどうか。

「刹那ちゃんとお参りかあっ……初夢で刹那ちゃんが出て来たから、もしかしたらって思ってたけど……ウツヒヨツ！」

だああ！ コイツを連れて行ったら絶対に刹那が怒るじゃないかあ！

「よしっ。俺は瞬を起こして来るよっ！ あっ！ お雑煮は食べながら行こうねっ！」

「いやいやいや！ 待て待て待て！ ああ！ もういない！」

追い掛けようとする俺だが、渉は既に俺の部屋に向けてカツ飛んでいた。

初詣にやって来た。

俺ん家から歩いて二十分。久住ヶ丘の山側に位置する神社、せいかい清海神社に到着した。

「……で、どうしてソイツがいるわけ？」

境内に上がる石階段の下に集結した初詣メンバー。その中で唯一

不機嫌を放出する刹那は俺に物申した。

もちろん刹那の言うソイツとは涉の事である。

「い、いや……」

まさかメールを見られてしまいました、とは言えない。

「まあまあ刹那、涉にはおとなしくするように言い聞かせたから、そうむくれるなよ」

苦笑しながら刹那を窘めたのは瞬である。

「うるさいわね瞬。私はむくれてなんかいないわ。身の危険を感じているだけよ」

ストレートに酷い事を言う刹那。

「わかった。じゃあ、警告が五回を越えたら退場させよう」

ストレートに酷いルールを提案する瞬。

「ふうっ、刹那ちゃんはツンデレだなあっ?」

刹那と瞬の様子をニヤニヤと見ていた涉は素晴らしい勘違いしていた。

「はい警告」

「えっ? 今ので警告なの?」

あつさり瞬による警告をもらった涉は不憫で仕方ないが、その様子を見る刹那は不機嫌丸出しである。明らかに警戒しながら涉から絶妙な距離を取っている。そして、度々俺に向けて鋭い目配せを送って来る。

「はあ……曜子さんもごめんね？」

俺の隣に立つ曜子さんにも謝っている俺も何気に酷いヤツである。

「……………」

ふるふる

「……私は、別に……嫌じゃない……」

「イヤッハウツ！ それってまさかもしかしてひょっとしてっ!!」

「えっ?」

瞬に抗議していた涉がギョルンと振り返る。意外な返答に俺が呆気にとられるのよりも早かった、なんて耳ざといヤツだ。

「……と、十八の……友達なら……仲良く、しても……いい……」

涉の視線から逃げるように俯いた曜子さんは顔を真っ赤にしながら言う。

「やったあああっ！ 曜子ちゃんとのフラグが立ったあああっ！
仲良くしてもいいって言ったあああっ！」

叫ぶ渉。ビクツとする曜子さん。

「……十八の、友達ならって……事なの……そっちの、方が……重要なの……！」

俯いたままで言う曜子さんが、既に渉には聞こえていない。

「……名前で、呼ばれるのも……嫌なの……！」

「いやあっ！ 曜子ちゃんって優しいなあっ！」

イラツとした。

「」「警告！」「」

俺、瞬、刹那、三人の声が綺麗にシンクロした。

「えっ？」

ピタリと動きを止める渉。

「これで警告は四個だな、リーチだぞ」

真顔の瞬が言う。対して渉は苦笑いしたり、口を尖んがらせたり、泣きそうになったりすると、シユンとしておとなしくなった。

「取りあえずこれで渉も少しは静かになるだろう。境内に上がってお参りを済ませちまうか？」

「そうだね、曜子さんも大丈夫？」

瞬の意見に乗る俺だが、俯きつ放しの曜子さんの意見の方がよっぽど大事だ。

「……うん……」

じい〜

恐る恐るといった感じで顔を上げた曜子さんは俺の凝視を開始した。良かった、なんとなく大丈夫そうだ。

「刹那もいいな？」

俺と曜子さんの様子をニヤニヤして見ていた瞬は刹那に訊く。

「べつつに〜、いいんじゃないの？」

なんだか嫌味っぽく答える刹那は瞬ではなく俺を見る。凄く訝しげな表情である。

「えっ？」

「こっち見ないでよ！ キモいわね！」

なんでやん？

みんなで境内に上がると、流石は元日という事でたくさんの人で溢れ返っていた。

この清海神社は久住市でも一番大きな神社ではあるが、お参りを待つ行列も町内総出なんじゃないかと思うくらいだった。

「正直げんなりしたが、俺たちはその行列に並ぶ事にした。俺たちは横一列になっていて、左から刹那、俺、曜子さん、瞬、渉の順である。元々並んでいた人たちに続く訳だから広がって並ぶ事になっただけけど、この順番で並んだのは瞬の仕業だった。」

「……………」

左隣を見ればムスツとした刹那。

「……………」

じい〜

右側を見れば俺をガン見している曜子さん。

その向こう側にはニコニコと微笑む瞬と俺を恨めしそうに見やる渉。

いや、俺だって刹那が心配だったからどうにかするつもりだったけどさ。

男性恐怖症の刹那。そして、老若男女問わず様々な人たちで溢れているお参り待ちの大行列。刹那は普通に並べないんじゃないのか？とか思っていたけど、はっきり言ってそんなもんは杞憂だった。

目の前にはきゃあきゃああと黄色い声を上げながら俺の右隣の更に隣の瞬に視線を送るクズ校の一年生女子の大群。後ろを見ても同じような二年生女子の大群。俺たちの周りには俺と瞬と渉以外に男が全く居ない。

そう、こんな偶然はない。全ては瞬が仕組んだ事だ。ピピッと携帯を操作するだけで、何十人も女の子を召喚しやがったんだ。

「あの、生徒会長さん？」

きゃあきゃああしていた一年生女子のひとりが刹那に声を掛けてきた。

「はい、何かしら？」

ムスツとした顔を一瞬で笑顔に変えた刹那は凜とした声で優しく反応した。

「その人とは付き合ってるんですか？」

「バフツ！」

俺の方を示しながら訊く一年生女子の質問に噴き出す俺。それに合わせるように周りの女の子たちの視線が一気に俺と刹那に集中した。

「あなたは一年B組の国見さんね。ふふふ、面白い事を訊くのね？でも、考えてちょうだい、私がこの塩田十八と付き合つと思う？人生の九割くらい損しちゃいそうだわ。それにほら……弟に悪いじゃない？」

グサグサッ

「「「きゃああ〜」「」」

色々としヨックだった俺を無視して騒ぎ出す一年生女子及び二年生女子。みんながみんな顔を赤らめて俺と瞬を生温く見やる。ちなみに刹那は、後はよろしく、みたいにそっぽを向いて平然としている。

「十八、寒くないか？ 俺の上着でよかつたら着てくれ」

「「「きゃああ〜」「」」

瞬！ お前はわざとやってるだろうが！

「…………たたく」

まあ、別にいいんだけどさ……。と、半ば呆れる俺だが、心の中では嬉しくて仕方なかった。

みんなで来れた初詣。去年も四日くらいに瞬と二人で来たが、今のような賑やかものではなかった。それでも俺には充分すぎる喜びだったのに、今年はみんなで初詣に来ている。俺からすれば、嬉しくない方がおかしい。

それにこうして並んでしていると遊園地の時を思い出してしまう。楽しかった思い出が重なってくれる。

俺は携帯を取り出す。そして、メール作成画面を呼び出した。

進藤さんにメールを送ってしまった。

「なにニヤニヤしてるのよ？」

そこで左から声が掛かる。不機嫌な表情に戻ってしまった刹那である。

「いや……こうしてみんなで初詣に来れたのが嬉しくてさ……刹那と来たのだって久し振りだろう？」

嬉しさに任せて言う俺は言ってから激しく後悔した。

それは空白の五年間を責めるようなものだった。辛い記憶を呼び覚ますものだった。

「……………」

「ごめん……刹那」

ばつが悪そうに俺から視線を逸らした刹那は思い出している。言ってしまった自分の心も逆行しているのがわかる。

一月一日、元旦、この神社、午前中、行列。

六年前までは佐山家と塩田家の全員が揃う時だった。

「遥、寒くないか？」

「大丈夫だよ、お兄ちゃんとお母さんの手が暖かいもん」

「私も暖かいわ、遙」

「ほら十八、手が空いているなら、せつちゃんの手も握ってあげたらどうだ？」

「ちょ、やめてよトヤ君」

「はは、なに恥ずかしかってんだよ刹那。じゃあみんなで手をつなごうか？ ね？ 母さん」

「そうね、私も瞬と手をつなぎたいわ」

「これはいいな。みんなが家族になったみたいだ」

それはいつのことだったのだろうか。いや、毎年のことだった気がする……よく思い出せないな……。

でも、今の俺に刹那の手を取る事は出来ない。それだけははっきりとわかった。

ピピピピピピ

メールだ。

from 進藤円

sub おはようございます

皆さんで初詣とは楽しそうですね。少し羨ましいです。

巴は相変わらずですし、ルナも元気です。皆さんにもよろしくお伝え下さい。

「……………」

順番が来たようだ。

俺たち五人はそのままの状態で横一列に並んだ。

各々が財布から、ポケットから、お賽銭を取り出すと賽銭箱に投げ入れる。

涉が、瞬が、曜子さんが、俺が、刹那が、目を瞑って手を合わせる。

「もっと強くなれますようにっ!!」

涉だけが声に出していた。

瞬のお願いは何だったんだろう？

曜子さんは？

刹那は？

…………いや、みんなのお願いを知りたいとか失礼だったな。今は自分のお願いに集中しないと。

俺以外の全ての人が幸せでありますように。

それが俺の願いだった。

去年も同じお願いをした覚えがある。ここ数年、毎年同じ事を願っていると思う。

ふと、六年前の俺が何を願っていたのか気になった。

しかし、すぐにどうでもよくなった。

1月7日、始業式。今日から三学期だ。

俺は朝早くから学校に来ていた。

始業式の準備を手伝う生徒会役員としてである。生徒会役員としてとはいうが、簡単な準備作業だけだから執行部全員ではない、俺と刹那の二人だけだった。

なんて事はない準備作業、早々にそれを片付けてしまった俺たちは会長室でまったりしていた。

「図書館棟の特別公開？」

二人でお茶を飲んでいる時に刹那が振った話題をおうむ返しする俺。

「そうよ、知つての通り、この学校の図書館施設は国内屈指の蔵書数を誇っているわ。それで今度、試験的に一般公開をする事になったの」

会長机に座る刹那はそう言うと、俺の淹れた紅茶を大事そうにふうふうした。

「それで執行部も何か仕事が回って来るのかな？」

机の前に突っ立ったままの俺は、刹那の仕草に嬉しくなりながら話題を先読みしてみる。

「そういう訳ね。公開といっても完全な一般開放という訳ではないわ。近隣の高校に限定されるみたいなの」

「ここら辺だと隣の清海女子学園とその向こうの春日崎かすがき高校か、御美ヶ浜高校とかは遠いし」

隣駅にある女子高と隣町のカス校は割りに近い。既にお馴染みとなった美味ヶ浜にも幾つか学校があるが、前者と比べると近場とは言い難いだろう。

「図書委員の方で仕事はほとんど終わっているらしいから、大した仕事ではないそうよ。執行部からは三人選出することになったわ」

俺の淹れた紅茶のカップの水面を愛しそうに見つめながら話し掛ける刹那。嬉しいような、寂しいような。

「あなたは確定として、橋にも頼もうと思ってるの。後は……一応、図書委員の担当は曜子なんだけど、少し迷っているのよね……」

複雑そうな刹那はやはり紅茶に語り掛ける。

「担当？」

話の内容も気になったが、まずはそれが気になった。

「この学校の生徒会が四つの部署にわかれているのはわかるわね？」

そう問い掛ける刹那はようやく俺の方を向いてくれた。

「俺たち執行部と風紀委員会、それに図書委員会と暗部だよね」

「そうね、それぞれ仕事が違うから絡みは少ないけど今回みたいに連携を取る時に筆頭になる担当者を決めてあるの。図書委員は曜子、風紀委員と暗部は瞬、ついでに言つと先生方は私ね」

なるほど、それぞれの仕組みを把握している担当がいた方が効率がいいということだろう。

「で、迷っているって？」

なんとなくわかる気がするが、話を戻す。俺だけ確定というのは既に諦めてある。

「……………」

刹那は俺からカップの水面に視線を戻すとゆっくりカップを机に置く。息を吐くとまた俺を見据える。

「転校、清海女子学園」

俺を真つ直ぐに見据えた刹那は真顔でそれだけを言った。

曜子さん、転校、清海女子学園。

すぐに曜子さんの言っていた”前の学校”が清海女子学園であることがわかった。

「……………やっぱり知ってるみたいね。曜子を推薦したくない理由はそれよ」

「……………」

曜子さんのいない所でこうして話すだけでも嫌になってしまいうだった。探り合いをしているみたいで刹那にも申し訳ない。

誰かを気遣えば誰かを気遣えない。まるでみんなが深みにはまっ
て行くようにやるせなかった。

「それで十八は橘と一緒に図書委員に話を訊いてきてほしいの。事
前にわかっていればどうにかなることもあるわ……………」

刹那も俺と似たような心境なのかもしれない。複雑そうな表情で
ばつが悪そうに見える。

「わかったよ」

「悪いわね……………」

刹那は自嘲するようなため息を吐いてしまっていた。

会長室から教室に向かう途中、俺はぶつぶつと考え事をしながら
歩いていた。

実は図書委員には俺も用事があった。いい機会だから風紀委員に
も顔を出しておこう。悪いが橘にも付き合ってもらおう、なんか心
強いし。

それにしても、相方が橘とはな。別にあいつや自分を卑下している訳ではないが、いいんだろうか？ 図書委員と一緒に仕事と違って、体力勝負の橘や一般人の俺には合わない気もするんだけど……。

「おっ？」

一年二年校舎に続く渡り廊下に差し掛かった時、その渡り廊下にいた一年生集団に気付く。

ルナちゃん達だった。

「おお、先輩じゃねーか。あけおめってか」

古いよ、橘。

「お、おはよう……橘……」

俺に気付いてくれた橘が声を掛けてくれたが、俺の意識は上の空だった。

一年生集団の中心にいるルナちゃん。同じ一年生らしき男子と談笑している。いや、ただ談笑している訳ではない。

ルナちゃんはその一年生男子の腕をギュツとしてんだよチクシヨ
ー！！

「ブヒッ、ルナさんに会えなくて寂しかったブヒッ」

うーん……その若干小太りな一年生男子の顔のゆるみ方といったら、もうただの変態にしか見えないぞ。周りを囲む他の一年生男子

の顔もゆるみまくっていて変態にしか見えない。もしかして俺って、いつもあんな顔してたってことかな？

「いやあ、ルナは男でも女でも、どんなヤツでもベタベタだかなあ……一応あいつは同じクラスのヤツなんだけど、流石にあたしもかなり引いてる訳なんだよ……止めると怒るしよあ……」

橘がなんか言っているが、俺は立っているのがやっとな位に狼狽えていた。

「ブヒッ、年末の祭りではルナさんにクリソツなレイヤーに萌え萌えだったけど、やっぱりルナたんが一番だブヒブヒッ」

あわわ、鼻息が荒すぎるぞ一年生っ！ ルナちゃんもそんなに嬉しそうに顔しちやってさあっ！ パパはそんな風に育てた……いや、もちろん育てた覚えは激しくないけど、心情的にはそれに近いものがあるっっーかなんっーか。

あっ、ルナちゃんの近くにいた進藤さんが俺に気が付いたみたいだ。

進藤さんがルナちゃんに俺のことを教えている。

「せんぱいつー！ー！」

すぐに俺を呼びながら勢いよく振り返るルナちゃん。うわ、振り返った瞬間、キラリッて星が散った気がするぞ？

そして、ルナちゃんはかなり勢いよく俺の方にダッシュしてきた。一年生男子は放置だった。

って!?!?

「グツハアツ!!」

思いつきりフライングボディプレスだった。
物凄く軽いが、いかんせん勢いが凄かったのでルナちゃんを抱えたまま後ろに倒れてしまう。

マズい !

咄嗟に自分のカバンを投げ捨てた俺は、ルナちゃんの頭を抱え込みながら衝撃に備える。

「おっと」

と、思っていたが、俺の傍らにいた橋が俺の背中をルナちゃんごと支えてくれた……って、いや、浮いてる？ 浮いてるよ!?

「大丈夫かよ？ ルナもあぶねーって」

いやいやいや！ ちょっと待て！ 平然な顔して俺とルナちゃんを気遣う橋だが、状況が半端じゃないぞ！

橋の両手は俺の背中と太股にある、そしてルナちゃんを抱えた俺は紛うことなく浮いている。浮いているんだよ！ つまり橋は俺をルナちゃんごとお姫様だっこしているんだよ！

「ほれ」

静かに俺たちを下ろしてくれる橋、ルナちゃんは俺の首ったまにしがみついたままである。

「……………」

思わずルナちゃんをぶら下げたままで橋を凝視してしまう。

「な、なんだよ……………」

「俺って一応60キロ以上あるんだけど……………」

俺の体重はだいたい60キロ前後、ルナちゃんだっていくら軽いといっても35キロくらいはあるだろう。ということは100キロ近くを余裕でだっこしていたことになる。

「あんだよ軽いな、もっと食った方がいいぜ先輩。それにちゃんとルナを受け止めないと駄目だぜ」

平然と言つてのける橋。なんか惚れそう……………別の意味で。

「せんぱい！ あけましておはようございます！」

俺の首つたまからすとんと着地したルナちゃんは、めっちゃ笑顔で挨拶してくれた。なんだか混ざってたけど。

「お、おはよう……………あと、あけましておめでとう、ルナちゃん……………」

こ、こっ恥ずかしい！ 久し振りなのもあるが、さっきからの騒ぎで周りには野次馬てんこ盛りの盛り沢山なんだよ！

「はい！ よろしくお願いいたしますですすす〜！」

めっちゃくちゃ楽しそうな笑顔で俺の両手を取ると、ブンブン上下

にシエイクするルナちゃん。

「いや……ははは……」

きっと俺の顔はさっきの一年生男子と同じような変態ヅラをしているに違いない。

衆人監視の直中でひたすら間抜けヅラを披露する俺はかなり知名度の高い変態だと認知されたであろう。

教室に着くとすぐにHRが始まった。瞬はいたが、渉は欠席、恐らくサボリである。

「あー、今年もよろしく頼むなあ。冬休み惚けとかで始業式で寝ないようになあ……ふあ……」

一番冬休み惚けしてそうですね先生！

まあ、冬休み惚けしている担任と渉は置いといて……。いいね、いいね学校。なんだか久し振りに会えたクラスメイト達の顔を見ると嬉しくなっちゃうよっ。みんなは眠そうだけど俺は嬉しくなっちゃうよっ。

冬休みの間なんかさ、朝のバイトして、鍛練して、掃除して、鍛練して、掃除して、鍛練して、掃除して、鍛練して、夜のバイトしてばかり

だったもんなあ。

道場の床もそうだけど、屋敷の床が磨り減ったんじゃないかと思うよ、うん。

何度か学校にも来たけど、あまりみんなには会えなかったんだよな。刹那と曜子さんはちよくちよく来てたらしいけど、タイミングが悪かったのか会う事はなかったし。

でも、瞬と渉にはけっこう会ってたんだよね。瞬は相変わらず泊まりに来てくれてたし、渉は剣道場を使いに来てくれたし。

「どうしたのお塩田君？ さつきからなんだか嬉しそうだねえ」

ハイテンションで回想していたら、隣の阿部さんにツッコまれてしまった。

「いやあ、学校が始まったのが嬉しくってさ」

ハイテンション回想でゆるんだ顔のまままで返答する俺。

「ええ、休み明けの学校ってダルいじゃん。あたしなんて寝坊して遅刻するところだったよお？」

うええ、って感じになってしまふ阿部さん。ちなみにHRは継続中だが、担任は既に委員長に丸投げしていた。

「うーん、眠くなる気持ちはわかるけど、やっぱり久し振りにクラスのみんなに会えるのは嬉しいよ」

とは言うが、みんなからしたら休みが終わっちゃったことの方が大きいのもわかるんだよな。

「あははあ、塩田君って面白いよねえ」

「あはは……」

ウケ狙いで言ったつもりはないんだけど……。。

今日はHRと始業式だけで昼前には放課後を迎える。

俺と瞬は昼食を摂ると、いつものように時計棟にやって来た。

会長室に執行部のみんなが集まると、やはりいつものように刹那が今日の仕事の段取りを指示した。

「あ、あたしですか？」

しかし、いつもとちょっと違うツツコミが入る。無論、橘である。

「何度も言わせないで。橘は十八と二人で図書委員との合同作業の打ち合わせに行くのよ」

会長モードの刹那は狼狽える橘に構うことなく捲し立てる。

「あ、いや……別に文句がある訳じゃないんですけど……。こういう時はやっぱり曜子先輩とか副会長が行くもんなのかなって思ってたんですよ。あたしはともかく塩田先輩とかギャグっぽかったんで、つい……」

あせあせと取り繕う橘にカチーンと来るがここは堪えておく。

「巴、私が代わろうか？ 確かに巴と塩田先輩では戦力的に心許無いだろっ」

進藤さんである。

「さすが円、やっぱりそう思うだろ？」

いや、橋……進藤さんは割りと直球で俺たちのことをバカにしたぞ？

「駄目よ、瞬はもちろん、ルナにも進藤にもやってもらう仕事があるんだから。はっきり言うと、橋と十八で行ってもらうのはあなた達に出来る仕事がそれだけしかないからよ」

ガーン

俺と橋は二人して顔を見合わせたまま石化してしまう。

「……あの……」

曜子さんだ。俺たちの様子をおとなしく見守っていた曜子さんが遠慮がちに呟いた。

「曜子も進藤たちと同じ理由よ。年度末に向けての行事集計、来年度からの要望修正、私と曜子でやっても三学期中に終わるかわからないわ。今日からでも始めておきたいの。いいわね？」

「……う、うん……」

早口で捲し立てた刹那にたじろぐ曜子さんは頷いたまま俯いてしまった。

「橋も何か言いたいことがあるなら言いなさい。それとも曜子の代わりに私の手伝いを試してみるかしら？」

ギリリとした視線を橘だけではなく、みんなに向けて這わせる刹那。

「いや！ ありません！ なあ！ 先輩！」

「え？ ああ、俺は別に……」

事前に聞いていた俺からしたら強引だった気もするが、橘も納得したらしい。

刹那も自ら悪役を買って出たんだろうけど、ハマりすぎて俺まで傷付いたっていうかなんつか……俺と橘に任せる仕事がないってというのは本当なんだろうし……忙しくなるのも本当みたいだし……とほほ。

橘と二人で図書館棟に向かう。

そういえば、俺が執行部に入部してから瞬と刹那を除いて二人だけで仕事するのは橘が初めてになるかもしれない。

「あたしあの図書館棟るのがあんまり好きじゃねえんだよな」

俺の歩く少し前を歩く橘は前を向いたままでぼやいた。

「俺も少し同感かな、本が嫌いって訳じゃないんだけど、あんまり縁はないかも」

素直にそのぼやきに乗ってみる。すると橋は歩く速度を緩めて俺に並んで同意を示すように肩を竦めた。

「だよな、どんな厚みの本でも、うげえ〜この中の文字を全部読むのかよ面倒くせえ、とかなっちまうんだよな、構えちまうっていうかさ」

「悔しいが同感だ」

この通り何かと気が合ってしまうんだよこいつとは、だから一緒に初仕事といっても気兼ねはほとんどないかもしれない。

程なくして、図書館棟に到着する。

相変わらずというか、かなり威圧感のある建物だ。デカイし、他の校舎と違って若干造りも違うから慣れないぶん気後れしてしまう。

「ふふん」

そうして微妙にたじろいだ俺を見ていた橋、何故か軽く鼻を鳴らすとズカズカと開け放たれた入り口に突撃する。

って、おいおい。

「たーのもーっ!」

「いやいやいや! ちょっと待てい!」

それじゃ道場破りだ! 俺に対向してだかなんか知らんが突飛す

ぎる！

「塩田君に橘さんですね？」

独立独歩に突撃しようとした橘をなだめようとすると声が掛かる。入り口を入ってすぐにある受付カウンターに座っていた女子生徒恐らく図書委員だろう。俺たちに反して冷静すぎるその声はやけに通った。

「あ……と、はい、執行部から来ました塩田と橘です」

「お待ちしております。こちらへどうぞ」

呆気にとられつつも俺が対応すると、図書委員は受付カウンターの脇にある部屋の扉を開く。

「どうぞ」

動かない俺たちを再び促す図書委員。

「……………」

何やら気圧され気味にその扉をくぐる俺と橘。

「失礼します……………」

通された部屋は時計棟でいう会議室のような部屋だった。中には図書委員と思われる生徒が男女半々で十数人ほどいた。全員が静かに席に着き、誰も入室した俺と橘を一瞥さえしない。

「御足労感謝いたします、塩田君、橘さん」

いや、ただひとり、中央に座っていた図書委員長の本城君だけが俺たちに反応を示した。

その本城君の声が合図だったのか、図書委員のひとりが入り口付近に空いていた席を二人分引く。

「どうぞ」

俺たちを座るように促した。

「……………」

俺と橘は二人で絶句してしまふ。

なんか雰囲気が変わるね？

知らねえよ、あたしが聞きてえって。

俺たちはアイコンタクトで会話しながら席に着いた。

「では、始めたいと思います。今日集まって頂いたのは今月中に催される本館の一般開放、それについての打ち合わせの為です。塩田君と橘さん以外の方は理解しているとは思いますが、確認の意味も踏まえてもう一度説明させていただきます」

一呼吸だけ置くと些か抑揚なく話し始める本城君。

「まずは……………」

目的、要望、日程、準備について、それぞれの割り振りなど、淡々とした印象を受ける本城君の話はまるで演説だった。

俺と橘はもちろん、周りの図書委員たちも誰ひとり口を挟まない。合同会議の時の刹那を思い出したが、刹那とはまた違った印象を受ける。一言で言ってしまうえば冷たい、刹那にも似たようなものを感じたが、本城君はそれ以上だった。一切の感情を感じなかった。

本城君は最初以降、俺たちに視線すら合わせない。読み上げている資料をただただなぞるだけだった。

本当にイヴの時に会ったのは本城君なのだろうか？ 真面目そうな雰囲気は変わらないが、ここまで冷たい印象は受けなかったと思う。

そういえば、折原さんがいない。執行部との合同作業というくらいだから副委員長である彼女が参加しないというのはなさそうなんだけど……逆にこういう時は参加しないものなのかな？

「……以上になります。手元の資料によく目を通しておいて下さい」
本城君の話は僅か数十分で終わってしまった。質問すら受け付けなかった。

周りの図書委員が次々と席を立ち始める。終わったからといって口を開く者は誰もいない。本城君もそうだが、図書委員の生徒全員が冷然としていて怖いくらいだった。

「なんか気にいらねえな……」

「頼むからおとなしくしていてくれよ……」

ぼそりと呟いた橘にそうは言うが、俺も似たような気分だった。

さて、なんだか構えてしまうような状況だが、俺のもう一つの目的を実行しなくてはならない。

「本城君、ちょっといいかな？」

未だ席に着いていた本城君を呼ぶ。

「はい、質問ですか？」

反応はしてくれたが、視線は手元の資料に向いたままだ。

「いや、合同作業についてじゃなくて、生徒会の目安箱についてなんだ」

そう、俺のもう一つの目的、それは目安箱の件だった。

実は二学期の終わりに徳川先生とそれについて話し合った時、俺は幾つかの条件を出された。

一つは月に一度、先生に経過を報告すること。

もう一つは風紀委員と図書委員に話しておくこと、出来れば協力すること。

最後にひとりで無茶をしないこと。

細く言えばまだあるが、その三つが先生の出した条件だった。

「……合同会議の時にそんな話が拳がっていましたね。どうやら引き受けたようですが……僕に何か？」

資料から顔を上げてくれた本城君だが、関心が薄いような表情で俺を見やる。

俺は少し怯んだが、先生から出された二つ目の条件をそのまま話した。

「なるほど、理解はしました。しかし、協力は出来ませんね」

真顔でキツパリと言い切られてしまった。

「……………」

別に期待していた訳ではなかったが、ここまであっさり断られるとは思わなかった。図々しいがショックを受けてしまう。

「いや…………聞いてくれただけで充分だよ」

でも、これでいい。実を言うと、最初はひとりの方が動きやすいと思っていたからだ。話は通した。これで先生に面目は保てただろう。

「じゃあ、俺たちは時計棟に戻るよ」

「わかりました。今回は参加を保留しているようですが、海老原さんにもよろしくお伝え下さい」

言い終わるとまた資料に視線を落とす本城君。結局、最後まで彼は座ったままだった。

「失礼しました……………」

前は同級生なんだからかしまらなくてもいいとか言っていたくせに…………。

俺と橘は図書館棟を後にした。

「んああっ！ ムカつくうっ！」

叫びながらゴミ箱を蹴っ飛ばす橘。豪快な893キックで吹っ飛んだゴミ箱は中身をぶちまけながら転がっていく。

「こらこらこら、物に当たるんじゃない」

図書館棟にいる時からイライラしていた橘は案の定なことをやりやがった。

「だってあんのストコ野郎！ 絶対にあたし達のこと見下してただろ！ あたしはああいうマイペースな自己中野郎が大っ嫌いなんだよ！！」

うがーって叫びそうなほどに興奮状態の橘はまだ怒りが収まらないうらしく、げしげしと地面に蹴りを入れる。

「気持ちはわからないでもないけど、仕方がないだろ？ 別に面と向かって言われた訳じゃないんだから落ち着けて」

ナチュラルに散らかったゴミを集めてしまう俺は、なるべくやりわりと橘をなだめる。

「悔しくねえのかよ先輩は！ あっさり言いやがって！ あいつ絶対に考えて答えてなんかなかったぞ！」

「悔しくないって言えば嘘になるけど、あそこで怒ってもしょうがなかっただろ？ 落ち着けてば、な？」

俺は苦笑いでそう言いながらゴミ箱を元の位置に戻す。

「チツ…… ったく、そんなんだから先輩はへタレなんて言われちまうんだよ。先輩がそんなんじゃないじゃひとり怒ってるあたしがバカみてえじゃねえか」

ちつとも乗らない俺に疲れたのか、橘は呆れたようにおとなしくなる。

「そんなことないよ、橘がそうやって代わりに怒ってくれてるから俺がそんな気分にならないだけなんだぞ？ たぶんだけど……」

近くにあつた水道で手を洗いながら本音を補足しておく。実際、橘のお陰でシヨックが和らいだのは確かだった。

「はあ？ べ、別にあたしは先輩の為に怒ってる訳じゃ……」

「それでもいいんだ、やっぱり橘と一緒に良かったよ。ありがとな？」

ハンカチで手を拭き拭きしながら振り返る。ゴミ箱を片付けたり、手を洗っていた俺はここでようやく橘と顔を合わせた。

ん？

「……！」

「なんで紅くなってるの？」

何故か橘の顔は真っ赤っかだった。

「う、うるせー！ ぶっ飛ばすぞこの野郎！」

なんでやん。怒らせることしてないやん。

「いや、なんか知らんけど、取りあえずごめん……」

「謝んなよ！ 更に意味わかんねえし！」

う、うーん……早く時計棟にも戻らないといけないんだけどな。少し橘の様子がおかしいが、こいつの場合はいつものことってことにしておこう。

「まあいいや、急にで申し訳ないんだけどさ。橘、付き合っほし
いんだ」

「えっ……！」

「風紀委員会に」

そう思って頼んでみたけど、なんとなく言うタイミングを激しく間違えた気がする。

「~~~~~!!」

いや、そんなに睨まないでくれ。紅い顔も更に紅くなってるし。俺って、また変なこと言ったか？

「嫌なら別に……」

「べべべ別に嫌じゃない!! ああぁっもうっ! 先輩! ちよつと五分くらい待っててくれ!!」

「ちよ! 橘!」

物凄い勢いで橘は走って行ってしまった。

五分後。

「……で、結局やるんだな? 目安箱」

「えっ?」

「で! 結局やるんだなっ!? 目・安・箱!!」

「あ、ああ、もちろん」

言った通り、五分で戻って来た橘は、その五分が無かったかのようには訊いてきた。間が空いてしまったので一瞬戸惑ったが、俺も橘に倣う。そうしないと駄目な気がした。

「そうか……」

すごい普通に無かったことにしている橘。こいつは本当におもしろいやつだと思う。

「でも、またぶっ倒れたりしたらあたしは本気で怒るからな？」

橘はそう言うと、真剣な表情で俺を見据える。さっきの余韻は無くなっていた。

……もうぶざけてる場合じゃないみたいだ。

「……わかってる」

そうなんだ……俺は橘を始め、ルナちゃん達を一度裏切っている。もう間違える訳にはいかない。

「……ちゃんとわかってるならいいよ、野暮言って悪かった。……しかし、風紀委員会ねえ……徳川先生も無茶言ってくれるよな……」

「橘？」

さっきからコロコロと表情が変わる橘、怒ったり、真っ赤になっ
て怒ったり、テストの時の俺を思い出して静かに怒ったり……怒っ
てばかりだけど、今度の橘の表情は……やっぱり怒っていた。
いや、正確には違うのだろうか、何か嫌なことを思い出してしま
ったように、険しい感情を露にしていた。

「……まあ、円が来なくて正解だったな」

「進藤さん？ どういうことなんだよ？」

確かにさつき橘と代わろうつかとかいいうのがあったけど、どうしてここで進藤さんが出てくるんだ？

「いいぜ、付き合つてやる。だが行く前に一つ言っておく、風紀委員には気を付けるよ」

険しい表情を更に濃くした橘は鋭く言い放つ。

「特に風紀委員長の伊吹誠いぶきまこと、ヤツには特に気を付ける」

「おい、意味がわからないぞ？」

「いいから聞けつて。二年A組、伊吹誠。風紀委員会所属、青葉先輩の後任で風紀委員長。更には第一剣道部所属で部長、極め付けは武道会の会長でもある」

第一剣道部、渉の所だ。

武道会というのはこの学校にある三大勢力の一つ。生徒会、生徒会以外の委員会の集まる中央委員会、格闘系の部活が集まる武道会。武道会については興味がなかったからあまり知らなかったが、会長ともなれば刹那に近いレベルの権力を持っている筈だ。

つておいおい、なんだかいろいろと凄そうなヤツだな。

「まだあるぜ。伊吹はあたしや円の同僚、毬谷家の侍従でもあるのさ。代々毬谷家に仕えている伊吹家の長男で、柳沢流の師範代まで持っていやがる。この学校で最強だって噂まで立ってやがるぞ」

「ま、毬谷家……最強？」

話がどんどん異次元方向に加速していくんだが……。

「けどな、一番の特徴はヤツが最低最悪のクソ野郎ってことさ。さっきのガリ勉自己中野郎もム力つくけど、伊吹は比べ物にならないくらいのクズだ。あたしも大嫌いだけど、円もヤツは大大大っ嫌いな筈だよ」

言いながらギリギリと拳を握り締める橘。相当な嫌悪を持っていることがありありと伝わってきた。

「まあ、取りあえずこれ以上は言わねえけどな、とにかくヤツには気を付けるんだ、先輩」

「あ、ああ……」

ちゃんと話してもいない人をどうこう言うなんて出来ないが、ここまで言われてしまうと物凄い人物像が思い浮かぶんだが……。

「大丈夫だって。あたしが付いてるんだから、そんなに氣い張らなくても平気だぜ。ほら、行くよ！」

「えっ……おい！ 待てよ！」

スタスタと歩き出す橘を慌てて追い掛ける俺。

「なんか気合入って来たぜ」

ぶんぶん腕を振り回してのし歩いて行く橘。

俺は別の意味で不安になって来たぜ。

077 第二章 曜子20 攪拌（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

なんだこの学校は……っっていうのは、取りあえずスルーしておいて下さい。

ようやく舞台が整い始めたくらいだと思って頂けたら幸いです。

078 第二章 曜子21 面牆（前書き）

今回はライト要素が強いです。しかも、あまり曜子に関係ありません。他の章に繋がるお話です。

風紀委員会は三年校舎の一階にある。

既に放課後である三年校舎に生徒の姿はない。三年生は受験を控えているし、部活もとくに引退しているからだろう。

そんなほとんど誰もいない校舎でもあるにも拘らず、校舎全体が何とも近寄り難い雰囲気醸し出している。やはりは立ち入る機会のない最上級生校舎、当然なのかもしれない。

「付き合ってやってんだから後でジューズくらい奢ってくれよな、先輩」

それなのに、何この下級生、どうしてそんなに余裕綽々なの？
ていうか、楽しいピクニックにでも行くみたいにわくわくしてるよね？

「あんな、言っとくけど、喧嘩に行くんじゃないんだからな？」

さっきの橘の話から察するに、橘と伊吹君は顔見知りだけど、仲がいいとは言い難い関係なんだと思われる。まさかとは思うが、喧嘩を吹っ掛けるんじゃないかと思ったので、念の為、釘を差しておく。

「そんなことわかってるよ。でも、売られた喧嘩は買っぜ」

そう言っと、へへへって感じて嬉しそうに拳を突き出す橘。

さつきまでは、なんて心強いやつなんだ、とか思ってたけど、これじゃただの不安の種である。

「なんだったら俺だけで行ってくるぞ？ 付き合ってくれるのは嬉しいけど、目的は俺の話を聞いてもらうことなんだからさ」

「それは駄目だね。伊吹のところに先輩ひとりで行くなんて無謀もいいとこだよ」

思わず突き放すように言ってしまった俺の言葉に即答する橘、少しちらけ気味だった表情を真剣に引き締めていた。

「さつきのは冗談だよ。少なくとも先輩の邪魔はしないようにする」

「……………」

そう言われてしまえば信用しない訳にはいかないじゃないか。

”生徒会、風紀委員会室”

三年校舎一階の最深部まで到着すると、物々しい雰囲気が強くなる。

ここに来るまでも、特別指導室や更生指導室といった出来れば係わり合いになりたくない、というより存在すら疑わしい部屋を通過して来た。

ちよつと胃が痛い。

橘の視線を背中に受ける俺は平静を装いながらノックの体制を取

る。

「……………」

コンコン

いろいろ葛藤してから控え目にノック。

「……………」

返事なし。

コンコンコンコン

再挑戦。控え目なところは変えず、回数を増やしてみたが、よく考えたらこれは失礼にあたる。

「……………」

返事なし。

いないのだろうか？ 一応、今日も活動しているのは確認したんだけど……………」

そう思いながら扉に手を掛けてみると、鍵は掛かっていなかった。

「入りますよ……………」

恐る恐る扉をスライドして、入室する俺。橘は黙ってついて来る。

「……………」

しーんとしてます。取りあえずしーんとしてます。

風紀委員会室の中には風紀委員会のメンバーの男子生徒が四人。誰もいないと思ってたけど、すっかりいました。返事くらいしてほしかったです。

ちなみに間違いなくメンバーであろうとわかるのは、全員が左腕に赤い腕章を着けているからです。

普通の教室を改装しただけみたいな部屋の中には大きなテーブルが一つ、スチール製の書棚が二つ、事務机が一つ、地味だと思っていた時計棟の事務室と比べても地味である。

この校舎の一番外れにある部屋ではあるが、何故だかやたらと暗い。失礼だが、陰湿な部屋だった。

三人は立っている、しかし、ひとりだけ事務机に座っている男子生徒がいる。一度だけしか会っていないが俺も覚えている。彼が風紀委員長の伊吹君だ。

「……………」

な、何か言っしてほしいなあ…………。

机に頬杖をついて気だるそうに座る伊吹君は俺を鋭い視線で睨むだけである。

取りあえず第一印象、とてもガラが悪い。他の三人もそうだけど、伊吹君は特にガラが悪い。すこぶる悪い。

身長はたぶん俺より少し高いくらい、後ろに流したツンツン黒髪、鋭い目、風紀委員なのにネクタイなし、ていうかシルバーアクセサリーだらけ。男の俺から見てもカッコいいヤツなんだと思う。…………一応言っておくが、俺にそっちの気はない。

「橘か……何の用だ？」

頬杖をついて気だるそうに座ったままの伊吹君は俺の存在を通り越し、少し後ろに立つ橘に尋ねた。

「用があるのはあたしじゃないよ。ほら、先輩」

黙ってる俺を急かす橘。

「……………」

その様子を見て少し苛立ったような伊吹君は鋭い視線を俺に移す。そして何も言ってくれません。

「え、えーと……執行部から来た塩田十八です、はじめまして」

取りあえず挨拶してみる。

「……………」

無視、ではないみたいだが、やはり何も言ってくれない伊吹君。気だるそうな態度はそのままに、視線だけを更に鋭くした。

「おい、返事くらいしてやれよ」

一応、おとなしくしているつもりだったらしい橘だが、俺と伊吹君の様子を見てイライラがぶり返したらしい。

「橘、いいから……………」

「知ってるよ、会長補佐のシオクンだろ？ 第一剣道部の山崎からも何度か名前を聞いたことがある」

橋にハラハラしていると、伊吹君はようやく俺に向けて喋ってくれた。一瞬、なんだ無愛想なだけなのか、と思って彼の方に視線を移すが、俺は凍り付く。

「雑魚には興味ねえけどな」

気だるそうな態度は変わらない、しかし、視線も表情も言葉も、明らかに俺を嘲笑っていた。

それを受けて後ろに立つ橋のイライラが更に強くなったのがわかるが、俺は彼女を遮るように口を開いた。

「知っているなら、本題に入るよ。先月の合同会議で言った目安箱ってあっただろ？ 徳川先生とも話し合って、やっぱり俺が引き受けることになったんだ。先生の言い付けで風紀委員にも話を通しておく必要があつてさ、こうして来さしてもらったんだよ」

お互いのメリットを考え、要件だけを手短かに捲し立てた。本当なら協力を要請しなくてはいけないのだが、割愛させて頂く。

「……………目安箱、ねえ……………」

薄い嘲笑を貼り付けたままの伊吹君は疲れたように呟く。

「じゃあ訊くが、塩田、お前がその仕事をやる目的はなんだ？」

?????

唐突な質問だった。伊吹君の視線も俺を値踏みするようなものに変わっていた。

当然、俺は戸惑う。だが、俺だって全く考えていなかった訳ではない。

「……もともとあったものをすぐに無くす必要がないと思ったからだよ。それに俺たち生徒会だけで全てを決めるのだけが正しいと思わないから……更に欲を言えば、生徒会がみんなの助けになればいいとも思ってる」

徳川先生の言っていたこと、刹那の言っていたこと、二つを秤に掛けるとどうなるのか？ 全校のみんなが求めるものは何なのか？ どうなってしまうかなんて俺にもわからない。でも、俺が何をやればいいのかはわかる。

「そういうのを訊いた訳じゃねえんだが……まあいい、今の話からだと、お前は人心掌握の手段として仕事を引き受けた訳だな？」

人心掌握　？

「なっ！ そんなことの為に引き受けたんじゃない！」

伊吹君の冷めたような言葉を慌てて否定する。俺が描いたことと先生が描いたことをまとめて侮辱されたみたいで許せなかった。

「……落ち着けよ、別にお前の言ったこと無視して言った訳じゃねえよ。要はお前自身の為なのか、何か別のことの為なのか、どっちだってことだ。どうなんだ？」

全く動じない伊吹君は冷めた言葉で答える。値踏みように俺を舐め回す視線は俺を見透かしているようだった。

「そ、それは……少なくとも、自分の為ではないと、思う……」

完全に彼の雰囲気呑まれて動揺を隠すことが出来ない俺は考えながら答えてしまう。でも、言ったことは俺の本心だった。

「そうか……じゃあ、お前が誰かに媚びる為の手段っていう訳か。

……誰だ？ 幼馴染みの生徒会長様か？ 優しい優しい徳川先生か？」

俺の答えは期待通りだったのか、伊吹君はニヤリと勝ち誇ったように口端をつり上げる。そして、俺を嘲るのを再開した。

「おい、先輩への侮辱はあたしに対しての侮辱だと思ってもらうよ」

半ば呆然としてしまった俺に代わり、黙っていた橘が怒りを押し殺したような声を上げる。

「なんだよ橘、ずいぶん肩入れするじゃねえか……まさか、こいつに惚れてるのか？」

伊吹君はそれすらも予想通りであったかのように貼り付けた嘲笑を消そうとはしない。

「……いい加減にしろよ、伊吹。このあたしをこれ以上怒らせたら後悔するよ？」

伊吹君の挑発に合わせて橘を包む空気が変わる。意外にも静かな

殺気を孕んだ空気が俺の肩口を掠めていく。

「……怒るなよ橘、悪かったよ。……だが、だいたいわかった、塩田は何もわかっていないみたいだな」

「えっ？」

俺にも感じる事が出来るほどの橘の殺気を軽くいなした伊吹君は俺をニヤリと見据える。

橘に気を取られていた俺は言葉の意味を解することが出来ない。

「お前、この学校の生徒会は何の為にあると思う？」

「生徒会が？ 何の為に？」

咄嗟に聞き返すが、俺には未だに要点を捉えることが出来ない。

伊吹君は何を言い出すんだ？ そんなのは決まり切っていることじゃないのか？

「生徒みんなの為じゃないのか？ いわば組合に近いものだろ？」

何を当たり前のことを、とでも言うように聞き返す俺。間違ったことを言っているつもりは微塵もなかった。

しかし、

「くっ……くはははは！ やっぱりなあ！ 堪んねえな！ 実に模範的で優秀な答えだ！ 間違っちゃいねえよ！ 生徒会、だもんなあ！ ははは！」

俺の回答を聞いた伊吹君はこれ以上ないくらいに笑い始めた。俺を嘲ているというか、俺の回答が本当に面白かったという感じだった。

呆気にとられた俺は何かを聞き返すことも、言い返すことも出来ない。後ろにいる橘も同じなのだろうか、何かを言う様子はない。

「その様子だとオレの読みは大当たりみたいだな。ついこの間、執行部に入ったといっても、説明すら受けてないのか。……沖田、塩田に説明してやれ」

ひとしきり笑った伊吹君は、もはや全てを確信したように自信に満ちた表情で息を吐く。そして、傍らに立つ風紀委員のひとり促した。

「はい、伊吹さん。どうも、塩田さん、橘さん。風紀委員会一年の沖田です」

伊吹君に促された風紀委員のひとり前が出る。丁寧に挨拶をしてくれたその風紀委員は小柄で女の子に見えてしまいそんな美少年だった。……一応言っておくが、俺にそっちの気はない。

「まず塩田さん、あなたはこの学校がおかしいと思ったことはありませんか？ お金の掛かった私立なのに公立並の授業料、異常な権力を持った生徒会、自由すぎる校風、あまり係わってこない教師たち、はつきり言ってしまうと学校を動かしているのは教師じゃないとは思いませんか？」

確かに、この学校は先生たちとの係わりが極端に少ない気がする。そして、生徒会が普通じゃない権力を持っているというのも頷ける。今思えば俺が生徒会に入ってから、それは当たり前と受け入れるに

は許容しがたい事実だった。

だって執行部は授業以外の全てを運営していたのだから。

「毬谷家を知っていますか？」

頷くことすら出来ない俺を氣遣うような沖田君はそう訊くと返答を求めるように話を切った。

どうやらこの問い掛けには回答がほしいみたいだ。

「……ああ、知ってる……」

当然、知っている。毬谷家、ルナちゃんの家であり、御三家なんて呼ばれているこの町を代表する資産家の一つだ。

「この学校はその毬谷家で作った学校です」

ここは重要です。テストに出ますよ。

そんな感じの教師みたいに俺の目に訴え掛ける沖田君。

「はつきり言いましよう。この学校は毬谷家の人間の養成施設、及び優秀な人材を選抜する施設です」

「い、いや、ちょっと待ってくれ。もちろんいろいろとツッコみたいけど、今は生徒会の話をしてるんじゃないのか？」

養成？ 選抜？

学校の母体が御三家のどれかだというのはなんとなくわかっていたが、話が余りにも掘り広げられすぎなんじゃないだろうか？ だ

いたい俺たちは生徒会の話をしていた筈だ。

「脱線しちゃあいないよ、先輩……。生徒会には、正確には武道会もそうだけど、その両方には、その養成する生徒、選抜された生徒だけしかないんだよ」

俺の背中側に立っていた橘が俺を諭すように、静かに言った。

振り返った俺は、何の冗談だ、と橘を見やるが、橘は嘘ではないと伝えるような真剣な表情で、いや、何処か残念そうな表情で俺を見つめ返した。

「要するに、生徒会として何らかの成果をあげれば毬谷家に携わる就職先が補償されるんだよ。執行部が運営及び統治、図書委員会が施設管理、風紀委員会が治安維持、暗部が毬谷家とのパイプ役、それ以外が教師。武道会だけは少し違うが、似たようなもんだ。それがこの学校の裏の仕組みだ」

戸惑う俺を睨む伊吹君は苛立ちも露にしながらまとめ上げる。それを聞いた俺は狼狽えながら橘から視線を伊吹君に戻した。

「はつきり言うぜ、塩田。目安箱？ 生徒みんなの為？ 笑わせんじゃねえよ。そんなのはよその学校か、中央委員会ですべてくれ。お前が人心掌握の為にくらい言うなら、それもあたりだとは思ったが、そうじゃないとしたら聞き捨てならねえ。余計な仕事を増やすつもりなら黙ってる訳にはいかねえんだよ」

鋭い視線を更に強め、怒りを乗せた視線で俺を射抜く伊吹君は吐き捨てるように言った。

「……………」

俺は打ちのめされた気分だった。

余りにも理解しがたい現実を並べられて混乱もしていたが、およそ理解は出来たと思う。

生徒会執行部、風紀委員会、図書委員会、暗部。それらはこの学校の主軸であり、学生として逸脱した役割を担っているということ。刹那も、瞬も、曜子さんも、ルナちゃん達も……。

「腐った魚の目だなあ、塩田くん？ まあ、知らなかったんだから仕方ねえとも思っからよ……お前、生徒会、辞めれば？」

「……………」

何も言えない俺の様子に更なる苛立ちをぶつける伊吹君。要するに邪魔だと言いたいらしい。

「チツ……徳川の先生にも困ったものだがよ、執行部もしつかりしてくれねえと困るぜ。佐山姉弟の能力は認めてもいいが、問題点が目立って仕方ねえなあ」

何も言わない俺に更に苛ついたのか、伊吹君はもはや挑発とは言い難い、糾弾を開始した。

「使えねえ新人会長補佐、時計棟に引き籠もってる生徒会長、友達ごっこに夢中でやる気のねえ副会長、根暗なアナログ書記……会計なんて特に酷いだらう、偽物に人形、おちこぼれと目も当てられない間抜けだ」

……………なんだと？

心から楽しそうな様子で言葉を並べる伊吹君が言っではならないことを口走っている。

刹那、瞬、曜子さん……よくわからないが、ルナちゃんと進藤さん、ここにいる橘までもを汚す言葉を並べている。

「い、伊吹さん、少し言い過ぎです。謝って下さい！」

「黙れよ沖田。……へえ……なんだよ塩田、ちったあマシな目付きも出来るじゃねえか？」

伊吹君の言動をハラハラと見ていた沖田君が間に入ってくるが、伊吹君は煩わしそうに押し返す。そして、沖田君越しに見えた俺を嬉しそうに視界に捉えた。

俺の視線を捉えたのだ。

「もう一つ教えてやる。この学校、武道会が申請した生徒同士の公式な喧嘩」は認めてるんだぜ？」

伊吹君がまた何か意味不明なことを言っている。それは俺の苛立ちに拍車を掛けた。

ほぼ無意識に俺の集中力が肥大する。抑制しようとする俺の心が悲鳴を上げているのがわかる。右目に映る視界が不愉快なほどに鮮明になっていく。

俺の無知に関しては謝ってもいい、だが、他は訂正してもらおう。俺はそう思って伊吹君を見据えた。

しかし、その瞬間、疾風かせが巻き起こる。同時に視界に閃光が

走る。

重く低い轟音。金属同士を激しく打ち鳴らした轟音が部屋に響く。遅れてスチール製の事務机が倒れた音とイスが弾け飛んだ音が響く。

橘。

しばらく沈黙を守っていた橘の一撃が伊吹君の胸板を捉えていた。

「あたしを怒らせない方がいいと忠告した筈だよ」

大きく踏み込み、振り抜いた右手をそのままに、橘は低く言った。

「……面白えことやってくれんじゃねえか、橘」

胸を打ち抜かれた筈の伊吹君は橘よりも低い声を返した。

橘の目にも止まらぬほどの一撃は確かに伊吹君の胸板を捉えたかのようにも見えたが、伊吹君は全くの無傷だ。伊吹君の右手には四角く穿たれた跡がある分厚いファイル、それを逆手に構えている。

伊吹君はあの一瞬で机の上にあったファイルで完璧にガードしていた。

だが、伊吹君は座っていた場所より窓際まで、およそ2メートルは弾き飛ばされている。耳を劈くほどの轟音を発した橘の一撃が如何に強烈であったことを激しく物語っていた。

「伊吹、あんたが面白くないことをペラペラ吐かすからだよ。言っとくけどね、あたしは塩田先輩のやってることが間違ってるなんて少しも思っちゃいないよ」

言いながら橘は振り抜いた右手を収め、踏み込んでいた両足を鳴らして斜に並べる。そして、左手を腰に当てると同時に右手に握ら

れていた”得物”を開く。ジャキンと先ほどよりも軽く、硬質の音を鳴らして開かれた得物で口許を隠した橘、再び口を開いた。

「あんたの言う公式の喧嘩、やってみるか？」

橘の得物は扇子。懐か、袖口か、何処かに忍ばせていたのだろう。扇子といっても、ただの扇子ではない。先ほどの金属音、黒光りした短冊部分、全て金属製の”鉄扇”だ。普通、鉄扇といえば骨組の部分だけに金属を用いるが、橘の鉄扇は骨組も短冊も全て金属製だろう。いったい何キロあるのかわからないが、それをあのスピードで打ち抜くなんて尋常ではない。

球技大会の時、俺の背中に橘が突き付けたものの正体が今更ながら判明してしまった。

「沖田……オレの又三郎を持って来い……」

ばさりとファイルを自由落下させた伊吹君は傍らに立つ沖田君に低い声で何かを促した。弾き飛ばされて踏ん張っていた中腰の体制をゆらりと起こし、完全に据わった視線を橘から離そうとはしない。

「伊吹さん！ 流石にマズいですよ！ 時間外です！」

「黙れよ……お前からぶつた斬るぞ……ああ？」

そうしている時も橘を睨むのを止めようとはしない。対する橘も先ほどの体制のまま伊吹君を睨み返している。

いや……どう考えても、これは冷静になった方がいいだろう。

「た、橘？」

「ドコからどう対処したらいいのかわからないが、一番近くでジヨ
ジヨ立ちしてる橋を呼ぶ。」

「先輩は下がってな。隙があれば部屋から出て行った方がいい」

「いやいやいや、お前は何を始めようとしているんだ！」

「ここは学校！ 学校なの！ 早くその物騒なものを仕舞いなさい
！」

「……？ は、はあ？ まだそんなこと言ってるのかよ、先輩は」

一瞬だけ固まると、びつくりしながら戸惑う器用な橋。

「ウチの橋がとんでもないことやっちゃったけど、大丈夫……って、
怪我は無さそうだね」

若干固まってるっぽい伊吹君たちにも声を掛ける。でも、なんだ
コイツ、みたいな視線で更に固まってしまった。

「……あ……い、いやあ、こっちも言い過ぎたりしてましたから、
しょうがない……うん、しょうがなかったんじゃないでしょうか？
謝るのはこっちなんでお互い様っていうか、はは……」

少ししてから、沖田君だけが復活して引きつった笑顔を返してく
れた。しかし、その沖田君ですら引き気味なのは明らかである。

「取りあえず、俺の無知に関しては謝るよ。確かに普通じゃない生
徒会だっというのはわかってたんだ。流されようと思っていた俺の

落ち度だよ。申し訳ない……。今日のところは引き上げるけど、また次の機会にでも必ず出直して来る……」

固まり続ける五人（橘を含む）に向けて言う俺だが、そこまで話したところで、扉を開く音に遮られた。

「ちょっと伊吹！ さっきの大きな音はなんなのよ！ 二階の私の教室にまで聞こえてきたわよ！」

青葉先輩だった。

「あら、橘と塩田じゃない、久し振りね」

対峙している橘と風紀委員、間に立つ俺を見てあっけらかんな青葉先輩。俺もそうだが、青葉先輩もかなりの勢いで場違いだ。

「い、いや、別に……えーと……はは……」

全てを話す訳にもいかず、濁したことを言おうとする俺だが、言うに言えない。だが、困り果てる前に何かを察したような青葉先輩はガツクリとため息を吐いた。

「……伊吹、またあなたね？」

青葉先輩は右手で頭を押さえる仕草と共に伊吹君に向けて言う。

「ああ？ オレはやるべきことをやっているに過ぎない。引退したお前が出しゃばる要素はない筈だ」

固まっていた伊吹君だが、ハツとしたように復活して当然のように

言い返した。

「お黙り！ 一年の沖田たちに仕事を押し付けて大した活動なんてしていないじゃない！ 私が引退したくても引退できないのは委員長のおかげがだらしないからでしょう！ それに先輩には敬語を使うように何度も言ったでしょう！」

「あ……ああつ？ お前ごときが説教できる状況じゃないんだよ。だいたい風紀委員につまんねえルール持ち込んだのはお前だろう」

「伊吹さん！ まだ執行部の方がいるんです！ みつともないですよー！」

「ぎゃあぎゃああとあーでもないこーでもない」と悶着を始める風紀委員一行。……まるでコントだ。

「……先輩？」

「取りあえず、ほつとこつ」

困ったような橋の呼び掛けに係わらない方が無難である有無を伝えた。

「沖田、土方、斉藤！ 行くぞ！」

「は、はい……」

しばらく悶着していた風紀委員一行、どうやら決着のつかないまま、御開きとなったようだ。

「待ちなさい！」

出て行くこうとする伊吹君たちを地団駄を踏むくらいの勢いで追いつがろうとする青葉先輩。

「橘、お前のやったことは覚えておく……塩田、お前との話も終わった訳じゃないと認識しておけ」

風紀委員会室を出て行く寸前、思い出したように鋭い視線を橘と俺に向ける伊吹君。

「上等だよ」

「事情を知らなかったことに関しては謝るよ。でも、みんなに言ったことはいつか訂正してもらおうよ？ 絶対にまた来るからさ」

何があっても、これだけは言わせてもらう。俺だって抑えられないものを我慢していたんだ。

「……チツ、期待を裏切っただけじゃなくても、胸糞悪いヤツだったみたいだな……」

「伊吹さん！」

「わかってるよ……行くぜ」

それを最後に、伊吹君と風紀委員たちは行ってしまった。

「……はあ、本当にしょうがないんだから……」

てつきり追い掛けて行くものだと思っていたが、青葉先輩はぼやきながらも風紀委員会室に残っていた。

「悪かったわね……私から謝っておくわ」

入り口の扉に向かって疲れた息を吐くような青葉先輩は本当に申し訳なさそうに言った。

「別に先輩が謝ることはないと思いますよ」

実際そうだろう。先ほどの悶着からもわかるが、青葉先輩は本来なら引退している三年生なのだ。それを恐らくは自発的に籍を残し、手伝っているんだと思う。

「そうじゃないわ。実は徳川先生から塩田が来る筈だって、聞いたのよね……まさか三学期の初日から来るとは思わなかったわ……たまたま教室に残っていたから良かったけど、迂闊だった……」

言い終わるとまた、はあくため息を吐く青葉先輩。察するにいつもこんな感じなのかもしれない。

「とにかく、目安箱に関しては塩田の好きなようにしなさい。風紀の方は私に話を通したということと構わないわ。でも、あの子たちの協力は期待しないで。私でもちよっかいを出さないようにするだけで精一杯だわ」

充分だ。さっきまでの状況から考えれば、これ以上ないくらいの

待遇である。

「その代わり、私で良かったら協力できるわ。卒業までは暇だし、進路も決まったようなものだからね」

言いながら振り返った青葉先輩は疲れ切った表情で無理をするような笑顔を作ってくれた。

「……なんか青葉先輩、別人みたいに優しくねえか？」

俺と共に静観していた橘がいらんことをツッコんだ。

「いつも時計棟に冷やかしに来る時はよ、もっとこう、タカビーな感じで、みつともないイメージが　グムム？」

いらんことすぎる追い討ちを掛ける橘の口をぐわしと手で塞ぐ。

「……………」

絶妙に引きつっている青葉先輩の笑顔。

「はは……は……」

俺は橘の口を塞いだまま、笑い返してみた。

「あらあら！　そういえば忘れてたわ！　私だってやるべきことがたくさんあったじゃない！　伊吹たちから目を離す訳にはいかないし、裏庭の草むしりもしないと！　お世話になった校舎のお清掃も今の内からやっておきたい気分だわ！」

青葉先輩は何故か俺をギロリと睨むと、ガラガラピシャンと出て行ってしまった。

「……………」

風紀委員会室に取り残されてしまった俺と橘。

「一応、青葉先輩のこと見直したよ、って続く筈だったんだよ？」

「お前ちよつと黙つとけ……………」

結局、目安箱の仕事は俺ひとりでやるしかないらしい。

俺が執行部に入って二ヶ月。

流されるままでいた俺は浅はかだったのだろう。執行部のみんなに甘えていたのだと痛感した。

本城君、伊吹君。彼らにも背負っているものがあるのだろうか……。この学校の生徒の中心人物として活躍する二人。これから彼らとは顔を合わせる機会が増える気がする。

自分自身の為か、何か別のことの為か……………か。

はつきり言って自分の無知さ加減に心底呆れ返ったが、それでも

俺が見据えるものは揺るがない。

俺にだって見据える未来はある。そう、今の俺には未来があるのだ。

刹那、瞬、曜子さん、おぼろげだがルナちゃん達も放っておく訳にはいかなかった。

ちっぽけな俺でも出来ることがきつとある筈だと、今は信じているんだ。

078 第二章 曜子21 面牆（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

かなりの勢いで恋愛小説から脱線していますが、ご容赦下さい。

一応、ライバルその一の伊吹君が登場しましたが、本格的に彼と絡むのはまだ先です。

次回からは『図書委員会編』が始まります。よろしくお願いします。

三学期二日目。当然のことだが、始業式の翌日からでも授業は通常通りに行われる。

一時間目はいきなり体育。今日は男子も女子も体育館で、男子はバスケットボール、女子はバレーボールである。

「整列！ ハッハッハ！」

普通の体育館の二倍くらいはありそうな第一体育館にマッチョ先生の大きな声が木霊する。

合わせて仕切りネットの向こう側からクスクスという女の子たちの笑い声が聞こえてくる。

更に合わせて男子みんなの疲れたため息も聞こえてくる。

「ハッハッハ！ 今日は時間の許す限り、燃え尽きるまで試合ですよーっ！」

相変わらずマッチョ先生はむさくるしい、冷蔵庫並に冷えきっている体育館なのに今日も短パンにタンクトップ姿だ。そして、相変わらず授業方針は試合形式だ。

「まずは筋肉痛になるくらいに準備体操しますよー！ ハッハッハ！」

ふう……。

ジャージ姿の俺は自然と瞬と渉の傍に行く。二人一組になってや

る体操もあるので、授業開始からペアを作るのはいつものことだった。

「っほい」

俺たち三人は顔を合わせると同時にグーパーをする。これは体育の時間など、ペア分けをする時に俺たちの中で決まっている暗黙のルールなのだ。

俺と渉がグー、瞬だけがパーだった。

「なん……だと……？」

渾身の必殺技をあつさり防がれてしまった人みたいな感じで放心状態の瞬、自分の出したパーを見てわななく。

「シオツ！ 体操体操っ！」

「あ、ああ……」

早々に瞬を見捨てた渉が俺の手をぐいぐいと引っ張ってくる。真つ暗な特殊効果に包まれた瞬は自分のパーを見つめた状態でひとり取り残された。

見渡してみればペアが出来ていないのは瞬とマツチヨ先生だけだった。

「さ！ や！ ま！ カモン！ ハッ！ ハッ！ ハアッ！」

エクスクラメーションが発生する度にぎゅむっぎゅむっマツチ

ヨなポーズを取りまくるマツチヨ先生、これでもかっくらいに瞬を大歓迎していた。

「うわああああ！ 十八ああああ！！」

すまない瞬、俺には過激すぎて直視できないんだ……さうで、体操操つと。

股わりする渉の背中をぐいぐいする俺。

マツチヨ先生の授業は試合形式ばかりではあるが、準備体操と整備体操はしっかりしている。そのお陰か、マツチヨ先生の体育で大きな怪我人は出たことがない。

そんな訳でマツチヨ先生の準備体操はちょっと過剰気味、やりすぎなくらいの体操の後は柔軟体操なのである。

「シオさ、風紀委員会に乗り込んだって本当なのっ？」

グキッ

「いででででっ！」

「あ、ご、ごめん」

渉がいきなり言ったことに驚いた俺は、思わず力を込めすぎてしまふ。いらん怪我人を出すところだった。

「痛いなあっ！ いやさ、オツキーに聞いたんだよねっ。『山崎さんの友達の塩田さんが風紀委員会室に来ました』ってさっ」

オツキー？ ああ、たぶん沖田君のことだな。
しかし渉、来たと乗り込んだは全く違うと思うぞ？

「乗り込んではいないけど、風紀委員会室には行ったよ。そういえば、伊吹君も第一剣道部だよな？ 沖田君もそうなの？」

「そうだねっ、イブちゃんは部長、オツキーも一年生で一番強い子だよっ」

「イ、イブちゃん……？ 昨日の伊吹君とのギャップから、その二ツクネームに俺はいろいろと引きつってしまった。」

「ん〜っ？ はっは〜ん、シオってば部長に何かされちゃったっしよ〜っ？」

やはりこいつは余計なことに関しては鋭い。

「部長は正に唯我独尊だからね〜っ。でも、強いし、カッコいいし、いいやつっしょっ？」

「……………」

渉の言葉が俺の胸にグサリと突き刺さる。偏見が嫌いなくせに、一度しか会っていない伊吹君をそうした目で見ていたのだということを感じた。

「まあ、気持ちはわかるよ〜っ、俺も最初はムカついたもんねっ。でも、全部がムカつく訳じゃないから割り切ってあげてねっ」

無邪気に笑う渉。

こいつのこつこつところは本当に尊敬している。

「でさつ、ムカつくって言えば、未だにムカつくんだけどさつ、部長はあの”二年生イケメン四天王”のひとりなんだよっ！モテるんだよっ！」

出た。この学校に何故か定着している何々四天王。

「ちなみに訊くけどさ、その何々四天王って何なの？」

「シオってば知らないの？ 去年の文化祭で各ジャンル毎に決まったじゃんっ？」

知らんわ。去年の文化祭で俺は生徒会じゃない委員会活動で忙しかつたんだ。

「二年生の男子だったら、瞬と部長、あとは……確かだけど、図書委員の本城……だけ？ もうひとりはお組の河本ってやつだったと思うよっ」

全員知ってるよ。っていうか、去年の文化祭でそんなことをやってたのかよ。

「たぶん俺は僅差で五位だったと思うんだよねっ！で、ちなみに二年生女子の四天王は、もちろん刹那ちゃんがぶっちぎりだ、あとはやっぱり図書委員の折原ちゃんと……」

「わかったわかった。もうわかったから」

こいつはなんだってこんなに情報通なんだ。しかも、女の子側に偏っているし。

「なんだよーっ、最後まで言わしてくれてもいいじゃんっ……っ、あっ！ 曜子ちゃん見つけっ！」

唯我独尊はお前だ。

体操しながら、話しながらも半分こした体育館の向こう側を凝視していた涉、俺たちと同じように準備体操をしている曜子さんを発見しやがった。

「曜子ちゃんは俺が独自に決めた二年生”裏”美少女四天王のひとつりなんだっ。あとはB組の由ちゃんとか、J組の棗ちゃんとか……」

涉が何か言ってるが、俺は曜子さんを見て固まってしまっていた。

俺たち男子のようにペアで準備体操をする女の子たち。しかし、曜子さんのペアは生徒ではなかった。

瞬と同じように体育の女性教師とペアを組んでいる。……いや、瞬の”それ”とは明らかに違う。

「……………」

くそ……自分のネガティブな思考が嫌になる。こうして考えてしまうことだって偏見じゃないか。

でも、こうして曜子さんを見ると、刹那の言っていたことを

どうしても思い出してしまっ。

『……曜子はE組で浮いた存在、らしいの……。私、そんなの絶対に嫌だわ……』

準備体操を終え、試合形式の授業が始まる。

E組チーム対F組チーム、どちらのクラスも4チーム。いくら体育館が広くてもコートは二面なので、前半後半で総入れ替えとなった。

既に試合は始まっているが、俺のチームは後半から、前半が終わるまで端っこで自由時間なのである。ちなみに同じチームには当然のように瞬と渉がいる。

「バスケなんて久し振りだな」

バインバインとバスケットボールをドリブルしながら言う瞬。マツチヨ先生から開放されてやつれてるくせに、嬉しそうな爽やか笑顔だ。

「ちえいつ！ ちえいつ！」

その瞬から、すばしっこい動きでボールを奪おうとする渉。

しかし、瞬はドリブルを左右に切り替えしたり、一歩だけ下がったりなど、渉を全く見ないでかわしまくる。それについていく渉も

凄いが、やはり瞬は凄い。これで運動部に在籍していないのだから本当に惜しいことなんだと思う。

基本的に瞬はどんなスポーツでも得意だし、好きらしい。この様子だと、バスケットの中でも特に好きなスポーツなんだろう。

しかしだ、瞬には悪いが、俺の意識はそちらに向かない。

「シオツ！ ダブルチームだよっ！」

「……………」

涉を無視した俺は瞬たちから視線を移す。

どうしても気になってしまっ仕切りネットの向こう側、女子たちがバレーボールの授業中である。

俺たち男子と同じように試合形式の授業らしく、一面だけ造られたコートでは試合をしている。コートの外には、やはり俺たちと同じように自由時間のようで、座って談笑しているグループや輪を作ってボールで遊んでいるグループがいる。

一見、誰が見ても、黄色い声を響かせる楽しそうな授業風景に見えるだろう。

しかし、俺には何処か寂しいものに見えてしまう。

曜子さん、隅に座っている彼女はひとりぼっちで膝を抱えていた。

友達は？ 刹那のようなクラスメイトはいないのだろうか？

いや…………俺以外の誰とも目を合わせない彼女に本当に仲のいい友

達がいるだろうか？

「……………」

俺は幾つかある女子グループを見渡す。

……いた、阿部さんだ。

輪を作って遊んでいるグループの中に目的の人物を発見した俺は体全体を使って激しい身振り手振りを開始する。

ナ・カ・マ・ニ・イ・レ・テ・ア・ゲ・テ！

たぶんやつてる俺にもわからないブロックサイン。阿部さんはちようどこつちを向いているので気付いてくれさえすれば何とか伝えるかもしれない。

ア・ベ・サ・ン！ キ・ツ・イ・テ！

あっ！ 気付いてくれた！

俺の必死の念波が通じたのか、阿部さんは俺の方を向いてくれた。

よし、あとは内容を伝えるだけだ！

ヨ・ウ・コ・サ・ン・モ・イツ・シヨ・ニ！

せえせえ言いながら手足を振り回して出来る限り内容を形にする俺。

対して阿部さんはしばらく首を傾げて……ポンと手を叩いて頷い

てくれた！

伝わった！？

ブンブンブン！

思いつきり手を振ってきた！ 笑顔で目一杯に手を振ってきたよ！
！ ぜんぜん伝わってないよ！

くそう、橘には視線だけで伝わるのにい！ もう一度だ！

ニ・ン・ズ・ウ・フ・エ・タ・ホ・ウ・ガ・タ・ノ・シ・イ・ヨ！

ヒイヒイ言いながら体全体での激しいブロックサインを再開する俺。上履きがキュツキュウくらい激しく動きまくる。

ブンブンブンブン！！

向こうも激しくなった！ 阿部さんめちやくちや楽しそうだよ！

そんな不毛な行動を繰り返している内に後半開始となった。

「「「ぜえぜえ……」」」

ブロックサインで疲れ切った俺、マンツーマンでボールを取り合っていた瞬と渉。三人とも試合開始前から息も絶え絶えだった。

ちなみに俺たちのチームの残りのメンバーはクラス一体重の軽いメガネ君（仮）やクラス一体重の重いポツチャリ君（仮）など、クラスの運動神経のワーストランキングの下位を俺と争う猛者どもで

ある。

「勝負はまだ終わってないよ瞬っ……ぜえぜえ……今度は試合で、
どれだけ活躍できるか……ぜえぜえ……勝負だっ!」

「臨むところだ……はあはあ……お前には負けん!」

フルマラソンを走り切った後なんじゃないかと思うくらいに疲労
困ばいなくせに、まだ何かを始めようとしている瞬と渉。

「まあ、女子の視線は俺のものだろうがな」

「言っとくけど、活躍した方が勝ちだぞっ? 俺はPGポイントガードだから、
アシストに徹するんだからさっ!」

わかってるってとニヤける瞬はPFパワーフォワードである。
その様子を見ていた俺はピーンときた。

もし、この二人が活躍しまくったとしたら、体育館の中にいる全
員の意識が集中するんじゃないだろうか?

そうなれば……いや、そうなるのは間違いない筈だ。

「瞬! 渉! それやってくれ!」

気が付けば俺はその考えに飛び付いていた。

「な、なに? どうしたんだ十八?」

「それって活躍しようってやつっ? なんだってシオがっ?」

ええい、いちいち説明できることじゃないわい！

「とにかく俺は二人が活躍するところを見たいんだ！ 凄いところを見せてくれよ！」

半ば暴走状態の俺は自分でも意味不明だ。だけど、もうすぐ後半が始まってしまふ。なりふり構ってる暇なんてないんだ。

「シ、シオがついに俺を認めてくれたっ！ 頑張るよっ！ 絶対に頑張るよっ！」

なんか知らんが、感動してる涉。

「みなぎってきた!!」

ちょっと怖い瞬。

よくわからないが、二人はあっさりとやる気になってくれた。

後半開始。

マッチョ先生がジャンプボールのボールをトスする。

「おりゃあ!!」

F組ジャンパーの瞬は最高到達点を折り返したばかりのボールを

易々と捉える。まるでバレーボールのスパイクの要領で振り抜く。瞬よりも長身のE組ジャンパーの頭の上からボールを床に叩き付けた。

「行くよシオツ！ 見ててっ！」

そこにいたのは渉。床を穿つ勢いで跳ねたボールを片手で受け止めた渉が直接ドリブルに移行する。開始直後、未だ相手チームは俺たちのペースについて来れていない。一回、二回、三回、倒れ込みそうなくらいに低い渉のドリブルはたったそれだけで棒立ち同様のディフェンスを振り切る。はつきり言っただけで早いなんてレベルじゃない、ドリブルの音が全て繋がっているんじゃないかと思うくらいのスピードでゴール下に到達した渉。

ノーマークからのレイアップシュート。

ゴール。

自分の身長を理解し、最大限の能力を發揮した渉のシュート。見とれてしまうほどに鮮やかだった。

「「「……………」」」

体育館にいる全ての人間の思考が未だについて来れていない。マツチヨ先生ですら、しばらく笛を吹けなかった。

「シオツ！ 今のシュートはシオの為に打ったんだよっ！」

無邪気な笑顔の渉はF組コートに戻りながらバカでかい声を發した。それは体育館全体に響き渡った。

「おのれ！ アシストに徹するとか言ってたくせに！」

なんか悔しがってる瞬。合わせて盛り上がる仕切りネットの向こう側。

「ははは……」

俺はひとりで引きつっていた。

そして。

「ちえいっ……」

相手コート、体がブレたんじゃないかと思うくらいのスピードでパスカットをする渉。

「シオツ！ 俺のっ！ 友情パスっ！」

キラキラした瞳で俺にフワッとパスをくれる渉。

「お、お、俺かぁ！」

そりゃあコートに立っている以上は頑張るつもりだったけど、その頭の中で愚痴りながら渉の盛り上がりまくった勢いにたじろぐ俺。しかし、受け取ったボールの感触と接近しようとするE組ディフェンスにやるべきことを察知する。

一步、二歩、ドリブルしながら後退した俺はスリーポイントラインの外へ、素早くボールを掲げ、シュート体制に入る。

目前に迫るE組ディフェンス、左手は添えるだけでいい筈だ、自分にそう言い聞かせながらボールを放つ。

バイーン

ゴールに嫌われました！

やっぱり駄目だった俺のシュートは無情にもリングの先端に弾かれて飛んでいく。みょーんって感じで。

「ナイスパスだぜ十八あああ　　！！！」

フリースローサークルの遙か上空、弾け飛んだボールの行き着いた先、そこには腕を大きく振り抜こうとする瞬、不可視の翼を生やしたかの如く、ゴール目掛けて翔んでいる瞬。

振り抜く右腕には俺のミスショットで弾け飛んだボールがしっかりと握られている。それが意味する理由は一つ。

Dank シュート。

壊してしまったのではないか、誰もがそう思ったであろう大音響を響かせてボールは直接叩き込まれた。

明らかにスリーポイントラインより外から飛んだ瞬、振り抜いた腕でリングに掴まったまま一度大きく揺れると華麗に着地する。

「十八がボールに込めたメッセージ、確かに受け取ったぜ！！！」

ビシッと俺に親指を立てる瞬。

言つとくけど、パスした覚えもなければ、これっぽっちのメッセー
ージも込めちゃあいない。

でも、引きつる俺を無視して怒号のような大歓声が響く。もちろ
ん、仕切りネットの向こう側からだ。

「くわああっ！俺はシオにパスしたのに、どうして瞬がシュート
しちゃうんだよっ！」

いや、その前に、どうしてお前はそこで対向するんだ？

「 Dank が何だよっ！目立つただけだったら俺だってっ！」

そう言つと渉は俺の方に向かって走り出した。

「な！なんだなんだ!？」

タタンとリズムカルに両足を鳴らした渉は硬い床もお構いなしに
豪快なロンダート、続いてズダダンとバク転、もう一回ズダダンと
バク転、スピードと勢いを大きく加算させた渉は俺の目の前でズダ
ン！という大きな音と共に背面ジャンプ。

ムーンサルト。

『おお〜』という歓声が上がる中、渉は体操選手顔負けの月面宙
返り、しかも伸身で俺の頭の上を越えて行く。

ズドンと着地する渉。少しもよろけない。

「どつだつー！」

あちこちから上がる拍手を受けながら、何故か俺だけに向けて言う渉。

「い、いや……どつだと言われても……もうバスケじゃなくなってるし……確かに凄いいけどさ……」

それ以前に、もはや何がやりたいんだかわからん。

「十八あ！俺を見てくれー！」

あつちでは瞬もズダダンやってるし。しかも、捻りの一回多い新月面宙返りだし。

結局、その後も瞬と渉は意味不明の争いを繰り返し、体育館は二人の独壇場と化していた。

ちなみに、バスケとは関係なしになった二人を欠いたF組チームは惨敗しました。

みんなの中に、少しでも嫌なものがあるとするなら、そうじゃないもので覆い尽くしてしまえばいい。

自分でも幼稚な考えだったと思う。

それで根本が変わる訳ではない。自分では出来ないからと、瞬と
渉に頼りきってしまった。

それが正しいと確証がある訳でもない。

……でも、彼女に向けられていたかもしれないものは逸らせたか
もしれない。

今はそれでいいと思った。

ただ一つ、気になることがあった。

授業中、曜子さんが一度も俺を『見なかった』ことだった。

079 第二章 曜子22 陋見(後書き)

読んで頂いてありがとうございます。

今回から『図書委員会編』が始まります。

これは二章の最後のくだりとなります。よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0367d/>

生徒会長補佐日誌

2010年10月9日13時55分発行